KING
キング

七月號









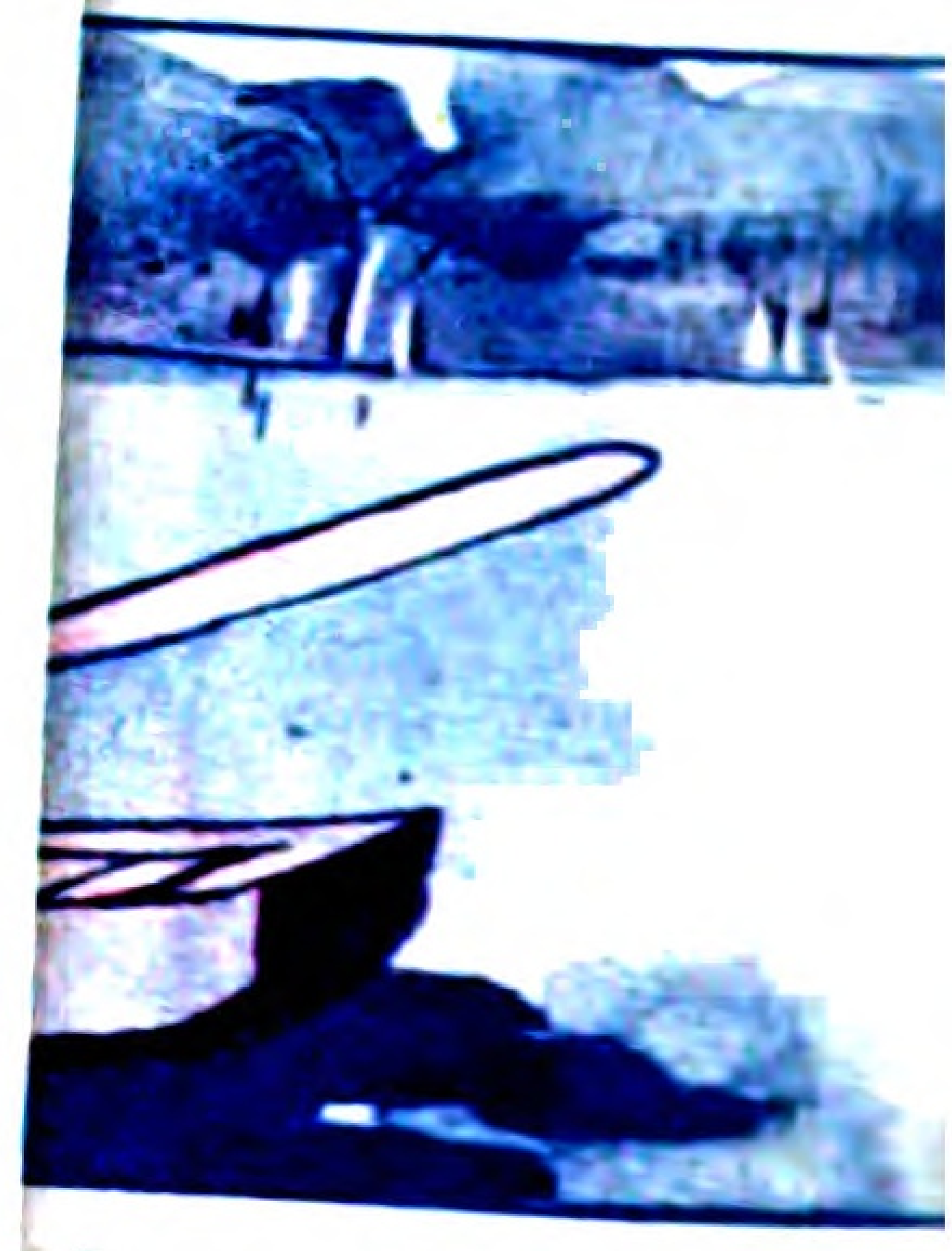





幸福の本質は何か

小川未明

だん〳〵年をとるに従つて、生きてゐることの意義を考へるやうになる。眞の幸福の本質は何か？　そして、田舍を、都會を、いろ〳〵な生活形態を批判的に見ようとする。それは、二度とはくり返されない、自分の一生をほんたうに生活したいといふ意志に他ならないのだ。







ペートル大帝

世界史上の革新者　その七——（裏面参照）

小林萬吾筆

ヤム三世の訪問に接したので、暫く作業を中止し、國王と談話を交へつゝある光景を描寫したものである。帽子を戴き、杖を手にして右方に立てるはウイリヤム三世で、之と相對し、左方に職工服を着用し、材木の後に立てるはペートル大帝である。

其後大帝は各地の政治・軍制・文物・人情等百般の視察を終了して本國に歸着し、萬難を排して各方面の改革刷新を斷行し、前記の三目的を達成し、遂にロシヤ中興の英主となつた。史學の泰斗ランケが『ペートル大帝は古今の最大精力家の一人である』と批評してゐるのは、實に溢美の言ではない。

小學校卒業生は必ず本會へ入會せよ!!

◁通信教育界のオーソリチー▷

内容完備せる世界第一のコレスポンデンス・スクール

本會の全景

基礎強固

社會的信用絶大



▽無代進呈・・・・

検定試験総覧つき

獨學成功案内

會長 前文部大臣 正三位 尾崎行雄

女學部學監 前愛國婦人會々長 従三位 下田歌子

▽創立廿七週年 第五十三回新學期開講△

藍綬褒章を拜受せる

本會の三大講義録

國民中學講義録

◎獨學で中學卒業の學力が得られる

◎一ケ年卒業 ◎月三回發行 ◎會費一ケ月壹圓廿錢

高等女學講義録

◎獨學で高女卒業の學力が得られる

◎一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月八拾錢

國民補習講義録

◎獨學で立派に補習教育が受けられる

◎一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月五拾錢

▽此際の入會者へ大特典提供△

今が入會するのに一番好い時だ

◎大至急入會を斷行せよ

◎通學者絶好の自習參考書

本會の十大特長

▼基礎が固い▼會費が廉い

▼信用が厚い▼卒業が早い

▼學制が正い▼指導が良い

▼内容が新い▼教授が巧い

▼講師が偉い▼成功が確い

◎獨學成功案内 ◎各科入會案内 つき

講義録見本 規則

―申込次第進呈す―

いつ入會しても講義録は第一號から毎月順序よく發送する。

藍綬褒章拜受 創立廿七週年

東京 駿河臺

大日本國民中學會

電話神田 二一一一番 二一一二番 二一一三番 振替東京四二〇〇番



光のなかに母は言ふ

――向日葵と向月葵のある畫によせて

大木篤夫

光のなかに母は言ふ、
「いとし子よ、なが華燭も近ければ
黄金なす向日葵をえらびて挿すはふさはし、
ながこころ耀やかに、日に向へれば。
さあれ、蒼白きその向月葵もわがためにとれ、
われは寂しく月夜の平安に殘る者なれば。
花嫁の向日葵とその母の向月葵
その日まで一つの瓶にたのしまん。
いとし子よ、笑め、初夏はすでにあり、
青空の霽れたるも　薫りよき微風も
かなたなる緑の牧も　鄙歌も
流れも閑も樹の花も、なべて光のなかにあり、
世はなべて、なが祝福にみちたらずや、
ああ、向日葵、向月葵
今しばし一つの瓶にたのしまん。」
笑ましげに、光のなかに、
さあれ、また悲しげに母は言ふ。

――G・D・レスリー畫（英）

珍らしい警察學校



獨逸は流石に科學の國だ。此處に掲げたのは世界第一と呼ばれる最新のベルリン警察學校である。立派な警察官吏を養成するためその科目の如きも自動車工學、交通政策、通信技術、航空監視、其他武器、寫眞等の專門的事項迄課してゐる。(1)は化學實驗室に於ける實驗の有樣。(2)校庭に設けた交通整理の信號燈。(3)圖解に依つて航空監督を教授してゐる處。(4)オートバイの組立の説明。(5)發動機構成の講議。(6)圖書室に於て專門書研究の有樣である。その設備の完備せる事實に驚くべきものがある。

研究社
英語通信講座

新學期
會員募集

本講座卒業の文字は履歴書の誇り！
祝福の星は常に君の行手に輝かむ！

■キング一册に現れる英語は無數、それを直接に英語で書けたり讀めたりする愉快さを是非本講座で學び給へ！

■毎日二時間十五ケ月で完全に中學卒業同等の實力獲得而も所謂速成ではない、整然たる組織で完全に修業させる

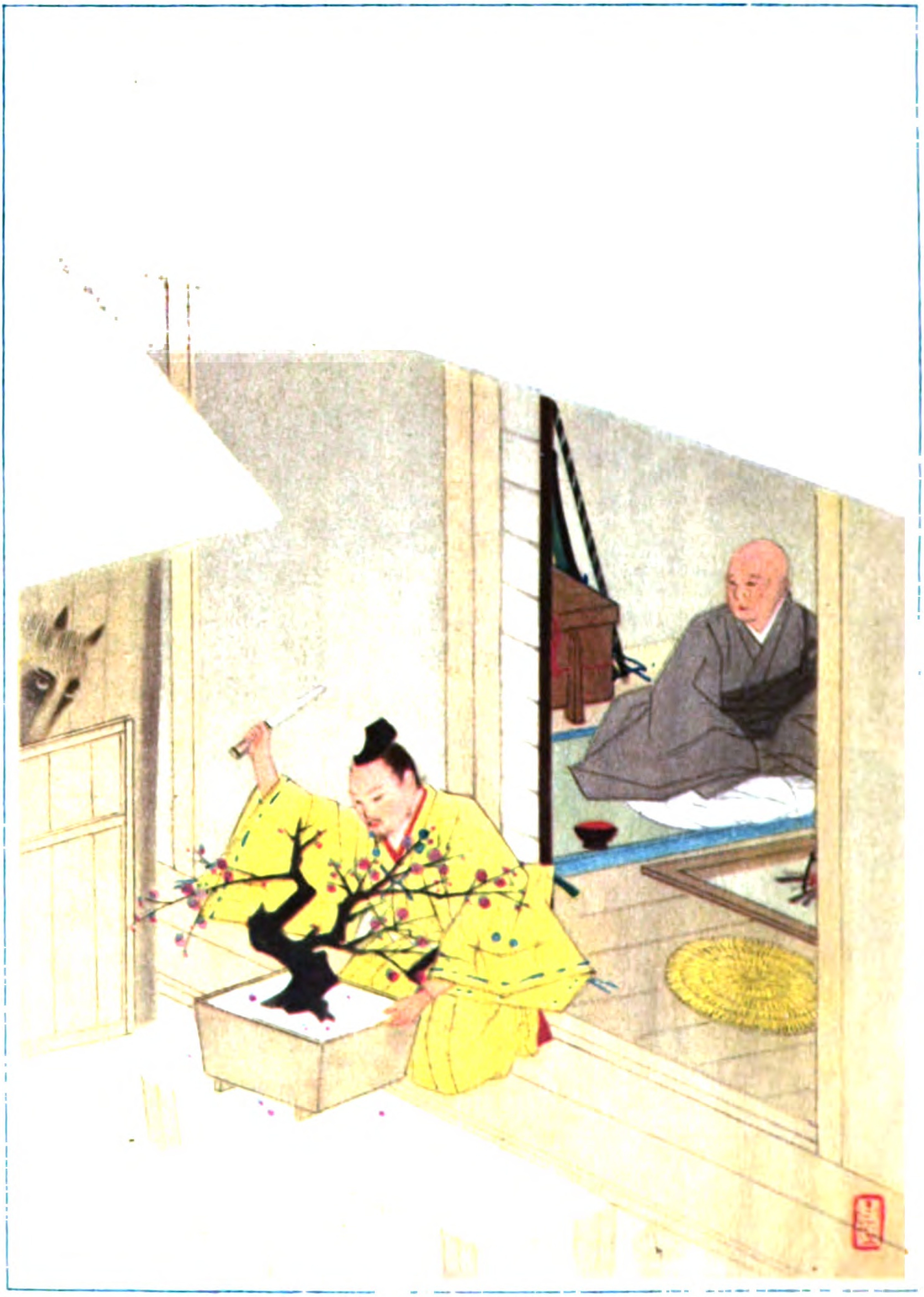
■講師はラヂオ英語講座の岡倉先生を初め特に獨學に理解深き諸大家、會員拾萬ABCから續々檢定突破！

■躊躇無用！即刻葉書で內容見本を申込給へ。獨學案內附美册子贈呈。近來模倣續出、時計のマークに注意あれ

毎日
毎時
英語は
同伴す

東京麹町富士見町六丁目
研究社通信學部
振替口座東京三〇八五番

鉢の木



聖心畫譜 その七　（裏面參照）　小林古徑筆

「鉢の木」の圖に題す

文學博士　五十嵐　力

かやうに落ちぶれては候へども、今にてもあれ鎌倉に御大事出で來るならば、千切れたりとも此具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參じ着到につき、偖合戰始まらば、敵大勢ありとても、一番に破つて入り、…………（謠曲『鉢の木』）

最明寺入道時頼が民情視察の行脚中、ある大雪の日に、上野國佐野の庄なる佐野源左衛門常世が家に宿りを求めた。貧しき家にはそれらしい食物もなく、夫婦は自らの餓を凌ぐ粟の飯をすゝめた。つゞいて夜更の寒さを慰むべき焚火の料もないのに苦しんだが、思ひ出して、秘藏した梅、櫻、松の鉢の木三本を切りくべもてなして寒さを忘れさせた。圖は常世が愛着の鉢の木に涙の一刀を下さうとしてゐる彼方に、君國に盡くさうとする武士魂の三つ道具（具足、長刀、馬）が、雌伏の大存在を見せて居る所である。

僻地の侘住居は、私闘に怯にして公戰に勇なる武人の本領を示したであらう。鉢の木の愛撫は、武を錬り貧に苦しむ間にも自然美に好く民族固有の風流心を象徴したのであらう。具足と長刀と馬とは、云ふ迄もなく、造次顛沛も忘れ得ぬ武士魂の愛護儼存の象徴である。而して歴史的心理的に意義深き是等の諸要素が絡み合ひ助け合つた結果、此の逸話が、曲其の他の文學に結晶して國民永久の尊重敬愛を鍾めて居るのであらう。



ウテナ
赤津博士
有効證明
色白く特に美しくなる
色の黒い方、赤黒い方、蒼黒い方、首筋の黒い方、垢ぬけせぬ方、ニキビ吹出物のでき易い方、あぶら顔荒性の方、日ヤケを止め肌を美しく護りたい方、すべて色の白くない方、色白く地肌から美しく、魅力輝く幸福を迎へたい方は、どうぞ急いで『ウテナ』を愛用してください。
あなたの色白い地肌、美しい素顔、魅力溢れるお化粧、その嬉しさも、その幸福も『ウテナ』の愛用から生れ、『ウテナ』の愛用から加へられるでせう。
各地薬店化粧品店にあり、定價一圓、二圓、三圓
姉妹品
ウテナクリーム
雪印（脂肪無し美白用定價六十錢）
月印（脂肪中性淡化粧用價七十錢）
花印（脂肪性濃化粧用夜間用一圓）
三種發賣
東京 ウテナ本舗 久保商店

講談倶樂部

人氣沸騰の大呼物!!



痛快淋漓 武道座談會

血湧き肉躍る大座談會

▽古今名劍客物語▽大試合名勝負物語‥▽人を斬つた體驗▽熱火の修錬苦心談‥▽勇士烈婦物語‥等悉く面白い大讀物

出席者

内田良平　範士高野佐三郎
陸軍中佐　伊藤精司
この外柔道大家、劍道有段者、
劍俠小說家、專門家多數

滿天下熱狂裡に愈〻新揭載

◎上州磔茂左衞門　義民石　前田曙山

義民中の義民！二百ケ村を救ふ月夜野村の名主茂左衞門！見よ壯烈悲烈何人をも義憤に泣かしむ。前田曙山先生の天下獨歩の快筆！稀有の大快篇！

▼女優をモデルの小說　事實
▼人心觀破術祕傳　矢野錦浪
▼相緣奇緣　池谷信三郎
▼當代大人傑（人物畫傳）

小說讀むなら「講談倶樂部」

砂漠の落日



越えても越えても砂丘はつきない。今日も亦暮色があたりに迫つて來た。あゝオーシスはいづこぞ？　來し方を眺むれば、そこには唯一條の足跡が地の果から續いてゐる。沈默のうちに夕餉の煙は縷々としてのぼる。駱駝よ！　健氣な駱駝よ！　お前も休むがよい。

涼しい衣裳



下は同じくユ社の花形イスリン・クレヤー嬢がすつかりレースで出來た最新の流行服を着た處です。頸にも袖にもスカートにも美しい黄絹の襞飾りがついてゐて、輕快そのものゝ様な感じがします。



見るからに涼しさうな衣裳ではありませんか。これは今米國の映畫界で流行のものです。上はユ社のドロシー・ギルバー嬢が黄金の珠飾りのついた胸着、金絲の縁飾りをしたスカート、そしてその上にレースのマントを着た處です。腕輪と首輪は琥珀づくり。

私のなほった はい病の

無料でお教へ致します

最良藥と養生法を

私は數年前から猛烈な肺病にかゝり專門の病院や有名な先生方にも見ていたゞき生の執着とでも云ひませうか人がいいと云はれるドラックの藥カハウソのキモや蛇の黒焼、近頃はやる八ツ目うなぎに至るまでいろいろの藥をあびる程のみましたが皆少しもキヽメなく日増にやせ衰へ家人には嫌はれ今は只死を待つばかりの心細い身の上となりました所が昨年の春フトした事から不思議によくキク藥を見つけまして服んだ其日からキヽメがあらはれ五六日目には食慾も進みひどい寝汗も止まり咳切れまでも樂になり約二ヶ月の後には全く元の身體になる事が出來ました。餘りよくキク藥なので四五人の同病者へも教へて上げました所何れもそのキヽメの偉大なるに驚いてをります同病でお困りの方はあれこれと迷はず私方へ一度御出で下さい、私の治つたお禮の意味で不思議な藥や養生法等の實驗談を人助けの爲に喜んでお教へ致します、遠方の人は手紙で御返事を差上ます。

東京下谷上根岸九六

加藤港

昭和の文壇に彗星の如く

鶴見祐輔先生著

小說 母

愈々出づ

眞に大感激の物語！婦人も男子も日本人全體に讀んで頂きたし！

鶴見祐輔先生曰く——地上の最も美しきものゝ一つは母としての女性の愛である。地上の最も莊厳なるものゝ一つは母としての女性の受難である。冬の夜雪に伏し、夏の日日に曝されて厭はざるは母の愛である、飢ゑて子の口に食を與へ、死に臨んで子の爲に恐れざるは母の力である。

定價貳圓（送料十四錢）四六判美裝

東京本鄉 大日本雄辯會講談社

見よ！

椿咲く南國の溫泉鄉熱海を背景に、新歸朝者たる一青年と、貧しき商家の少女との清純な戀に筆は起される。

洋行歸りともあらう彼は、貧しく教育のない彼女の何處を熱愛したか。而して、その戀は如何に伸び、その前には如何なる苦難が二人を待つてゐたか。

『戀に送る一日の純情のためには、五十年の苦しみも悔ることはない。生きて甲斐ある人生の詩である』

と考へる情熱的な彼の火の如き戀には、讀みゆくうちに自づから胸の高鳴るを覺ゆる。

更にまた……——

愛し愛されて一緒になりながら何時しか他の女に心を移して行く家

御申込次第圖書目錄進呈

現はれた驚異の大名篇!!

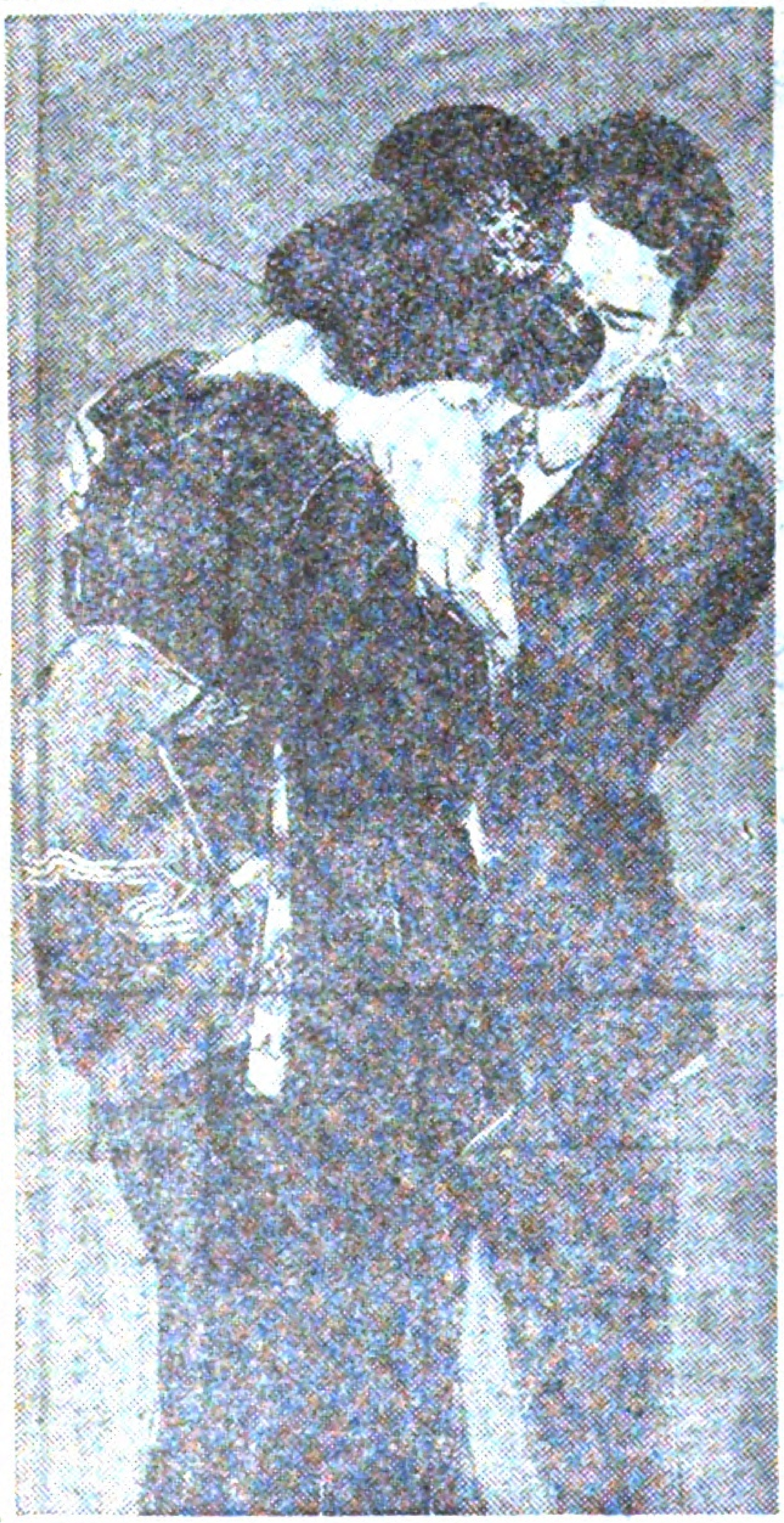
人類の歴史を尋ぬれば、功業の男子にして賢母の訓化に浴せざりしは殆どない。

私は日本の女性を禮讃する。殊に母としての日本の女性を禮讃する。母こそ世界に誇る日本の寶なのだ！

『私にも一人の母があつた。私の十六歳の折に母は、まだ春秋に富む身空で死んでいつた。その薄命なりし母の生涯が、私の生命の根源となつて、胸の底に湧いて來る。一切の宗教も、藝術も、科學も、哲學も、この單純な母の受難の生涯の感化には及ばなかつた』と。

母！おゝ母！無限の慈愛、痛ましき犧牲、涙ぐましき忍耐、貴ぶべき聰明、その一切を擧げて、子に捧げて來た母！

鶴見先生が、その薄倖なりし母君の弔合戰として、一字一涙、渾身の熱情をこめて熱筆された、この『母』は如何に描き出されたか！　併せて戀愛、貞操、夫婦、家庭、社會、現代のあらゆる重大問題こゝにあり！　何人も一讀せられよ！



も家も子も顧みず、日夜營々日に勤る夫、その醜い夫に對し不平も不安も殺してひたすら貞節を守り、吾が子の教養に心血を注ぐ若き母——固い決心、しかし彼女も亦女です。何か物足らぬ心の隙、而も彼女の悲壯な生活は、夫を失ひ三人の幼兒を抱いて街頭に立つに至つてから始まる。

若く美しき母、朝子！彼女は如何に生き、如何に伸びてゆくか……？

菊池寛・佐藤紅綠先生激賞！

佐藤紅綠先生曰く……

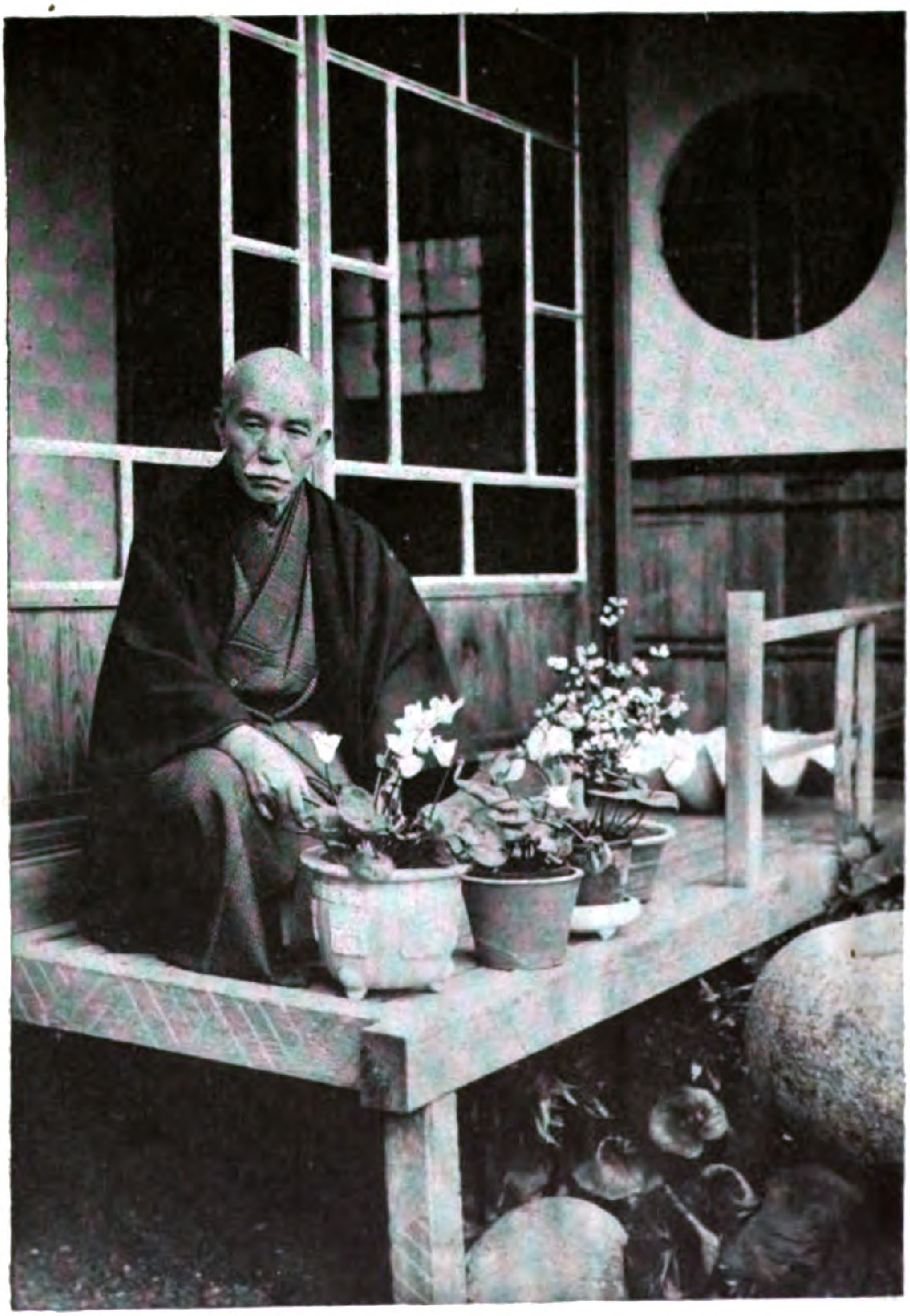
鶴見さんの『母』は實に素晴しいですね。あれだけのものを書ける作家は、所謂文學者中にも稀だ。何しろ知識が高く、體驗が豐かで、住んでゐる世界が大きいから、一行でも一句でも十分の力がある。『母』は現在の文壇に旋風的人氣を捲起した大なる威力である。云々

御申込次第圖書目錄進呈

麗か

鉢の花に日の麗かさながめやるしづか心の君をこそおもへ
同じ姓の長者とこそは推すべけれいまだも君を見ぬわれなれど

金子薫園



寫眞は葉山の別荘にて自適せられる樞密顧問官子爵金子堅太郎閣下

涼味

眠り足りた眼にうれしきは大輪の朝顔である。曉の海に聞ゆる網曳唄には男性的な夏の魅惑があり、夕の湖畔に漂ふ藻刈船には萬斛の俳味が踊る。

更に又輕き衣を







動く

あるひは青簾の陰に佇み、あるひは汀をそゞろ歩く女性の姿には清楚な夏がある。

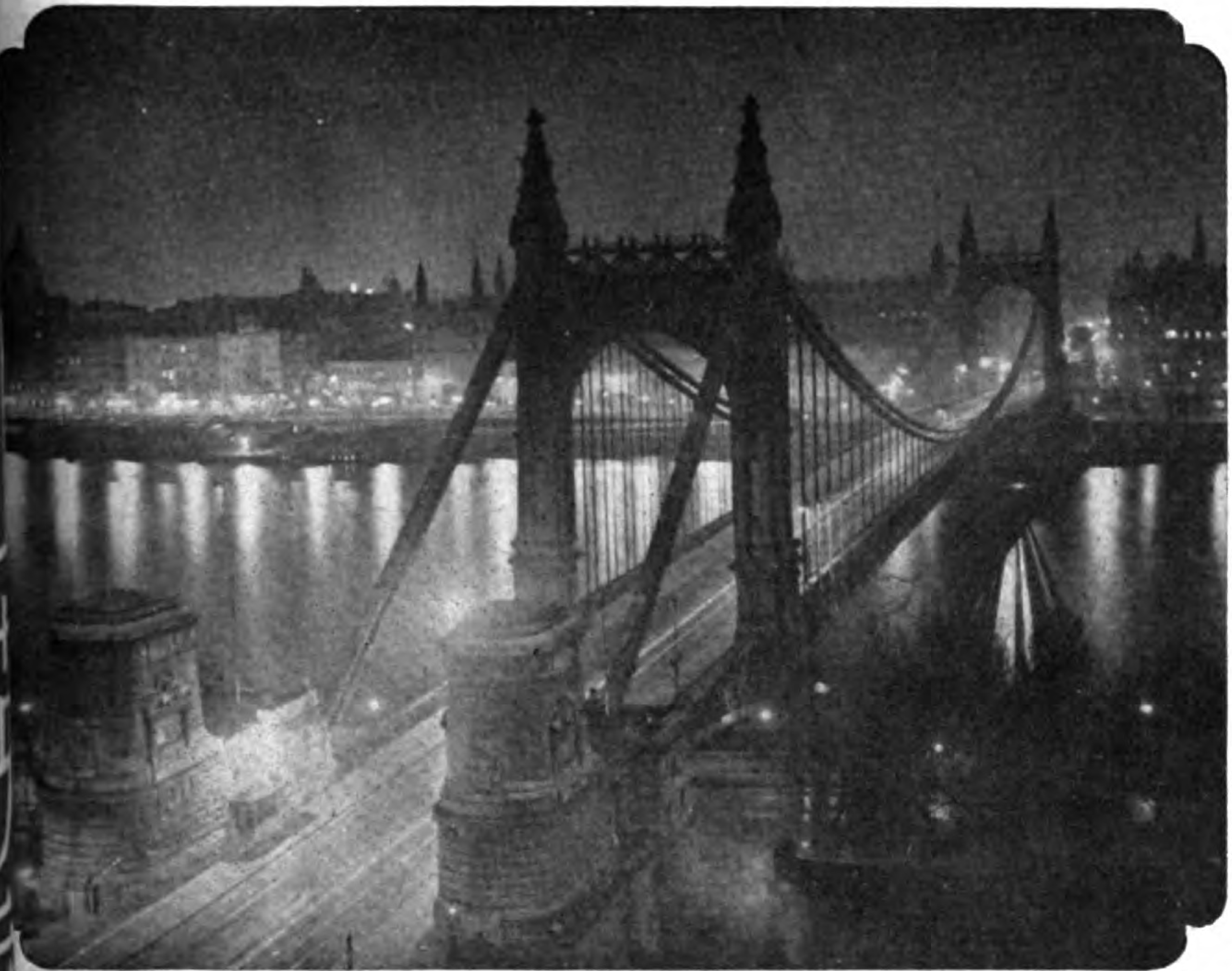
右頁下は京都の閨秀畫家梶原緋佐子女史。左頁上は同じく東京の柿内青葉女史。

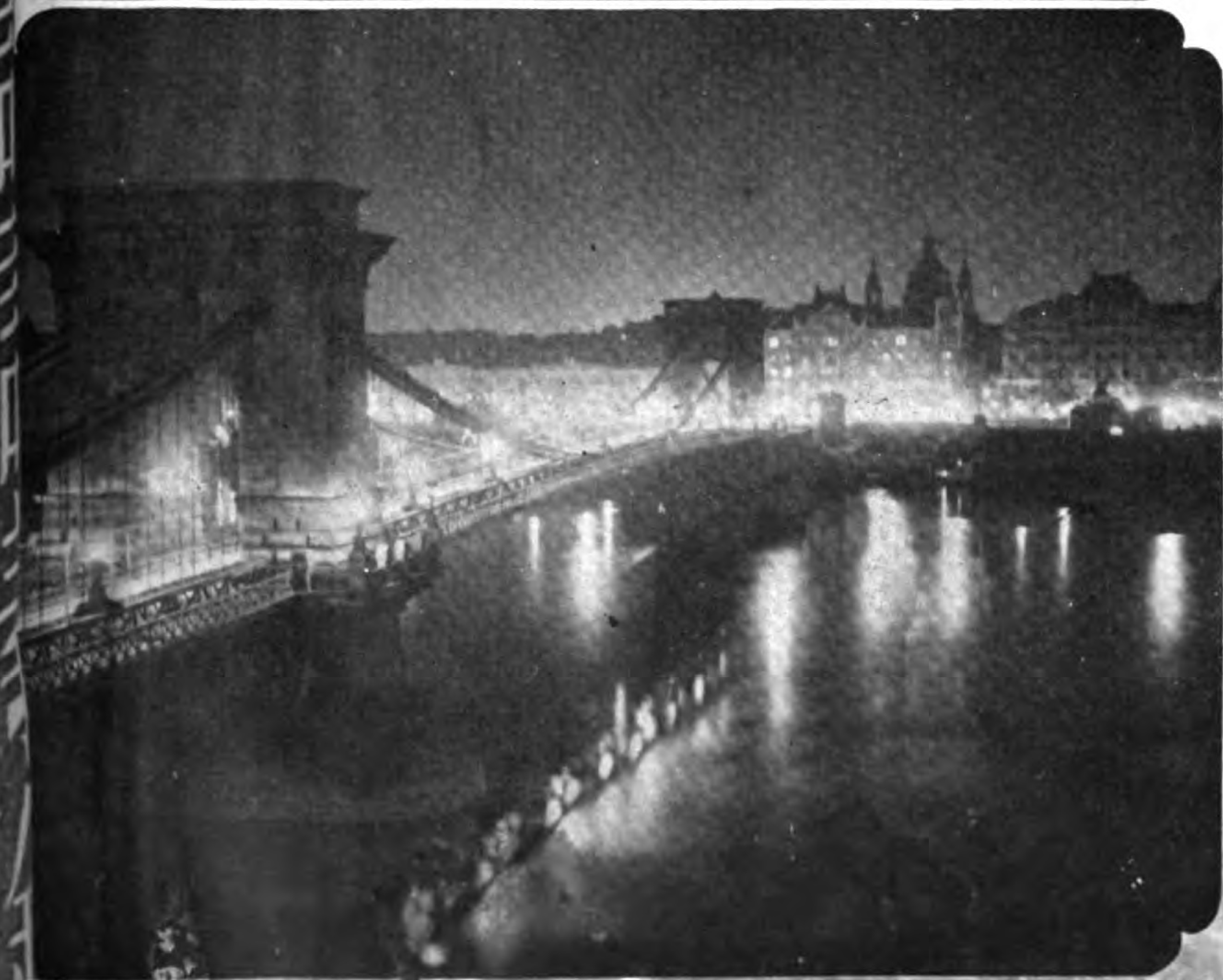






光の都





宵闇迫り來て、群星空に瞬けば、百萬の燈火は燦としてドナウの流れに煌めく。對岸はブダペストか。夢幻の如く兩市を結びつくる橋數條。此處ハンガリーの首都ブダペストは歐洲にその名を謳はれる光の都である。おゝ限りなき夏の夜の美觀！



面白い！有益！！名著紹介

思想あり、随筆あり、紀行あり、人物傳あり、婦人觀あり、何れも大評判！

素晴しい賣

北米遊說記

鶴見祐輔氏著　第七十五版

偉人傳あり、世界花形人物評あり、文學、政治、宗教…居乍らにして世界を知り日本を知る大快著！（四六判函入・定價貳圓五十錢・送料十四錢）

思想・山水・人物

鶴見祐輔氏著—四十版

古今東西の人情風俗思想を尋ね、世界大人物の印象を記す。天馬空を行く如き文章は眞に天下一品！（四六判函入・定價貳圓五十錢・送料十二錢）

南洋遊記

鶴見祐輔氏著—十七版

南洋各地を巡遊！著者獨特の靈筆に托して縱横に異境の實情を究む。見よ！美しき南國の景物！（菊判函入・定價六圓・送料十八錢）

陸海軍腕くらべ

陸軍少佐　成田篤氏著
大毎軍事記者

御申込次第圖書目錄進呈

七難隱して色白くなる

青年男子がニキビ吹出を治し婦人は勿論七難隱す色白となる

五大博士學者協力研究の新方法美顔美身法の眞の秘訣眞の急所

青年男女のニキビ吹出物は單に皮膚の上面ばかりの故障病氣ではないソバカスなども昔の人は嫁あざと言つて上面ばかりの故障と考へてゐたが、矢張體内からである其他顔の色がドス黒いとか赫黒いとか、顔面皮膚が特に汚いとか甚だしい油顔だとか、その様なことは皆人間の體内に發生する惡血毒素の副作用から體外皮膚面へニキビ、ソバカス吹出物となつて現はれ或は色黒、赤ら顔、油顔等となつて現はれるものであると言ふ學理上の大發見が最近進歩せる醫藥學上では益々確實に説明せられて居ります。そこでこの學理に依り其根本たる體内の惡血毒素の副作用中毒作用を内面から防止し治療しなければ、眞の效果は得られぬと言ふので歐米各國では種々なる内服藥を研究發明して根本的に治療の實を擧げ、美顔美身の目的を達しつゝあります。然し外國藥は米食本位の日本人に適せず、中には隨分人體に危險もあり其儘應用しても效が無いと言ふ遺憾がありました。然るに吾國醫藥學界で有名なる藥學博士島田耕一先生を初め越澤禹滿先生數津林傑先生等五大博士學者の協力研究の結果遂に吾々東洋人種の體質にシックリ適合する效力の確實絶大なる美顔美身藥ハルナーを發明せられたのであります。流石は



五大專門學者の協力苦心の賜で、**ハルナー**は人體に絶對無害何等の副作用を呈さず、惡血毒素を清淨ならしめてニキビソバカス吹出物其他顔面の汚斑、色黒、赫ら顔、油顔等を原因的に治療し、自然と色白く美顔美身と成られます。加ふるに**ハルナー**を服用すれば毛髪を强壯に脱落症即ち『ぬけ毛』を防ぎ更に彼の肥胖病即ち『ふとり過ぎ』を程よくし、美容に導くと云ふ藥效作用をも現はす唯一の美顔美身内服藥であります。故に今や**ハルナー**は東洋全土到る處の藥局藥店にて大好評で販賣されて居ります。藥價は五十錢一圓二圓三圓五圓等種々あり輕いニキビや色黒なら二圓分か三圓分を御試驗下されば結構です。呉れ〴〵も申上ます千百の化粧水や塗藥を只だ表面から擦り付けて却つて皮膚を傷める無駄を直ちに捨て、眞實有效なる唯一の**ハルナー**を求められよ。『白色美身法』と題する五大專門學者が、ニキビ除去法色白く美顔となる法其他大切な事柄を教へてある書册ハガキで申込次第一人一部限り贈呈す。


ハルナー

東京市京橋區築地橋際
合資會社 **濟生堂製藥所**
電話京橋(56)一〇三七番 振替口座東京一七三〇一番

◎**ハルナー**は全國到る處の有名藥局藥店にあります

キンググラフ

赤熱の太陽・紺青の海・
走る走る船は走る、涼風一陣……。

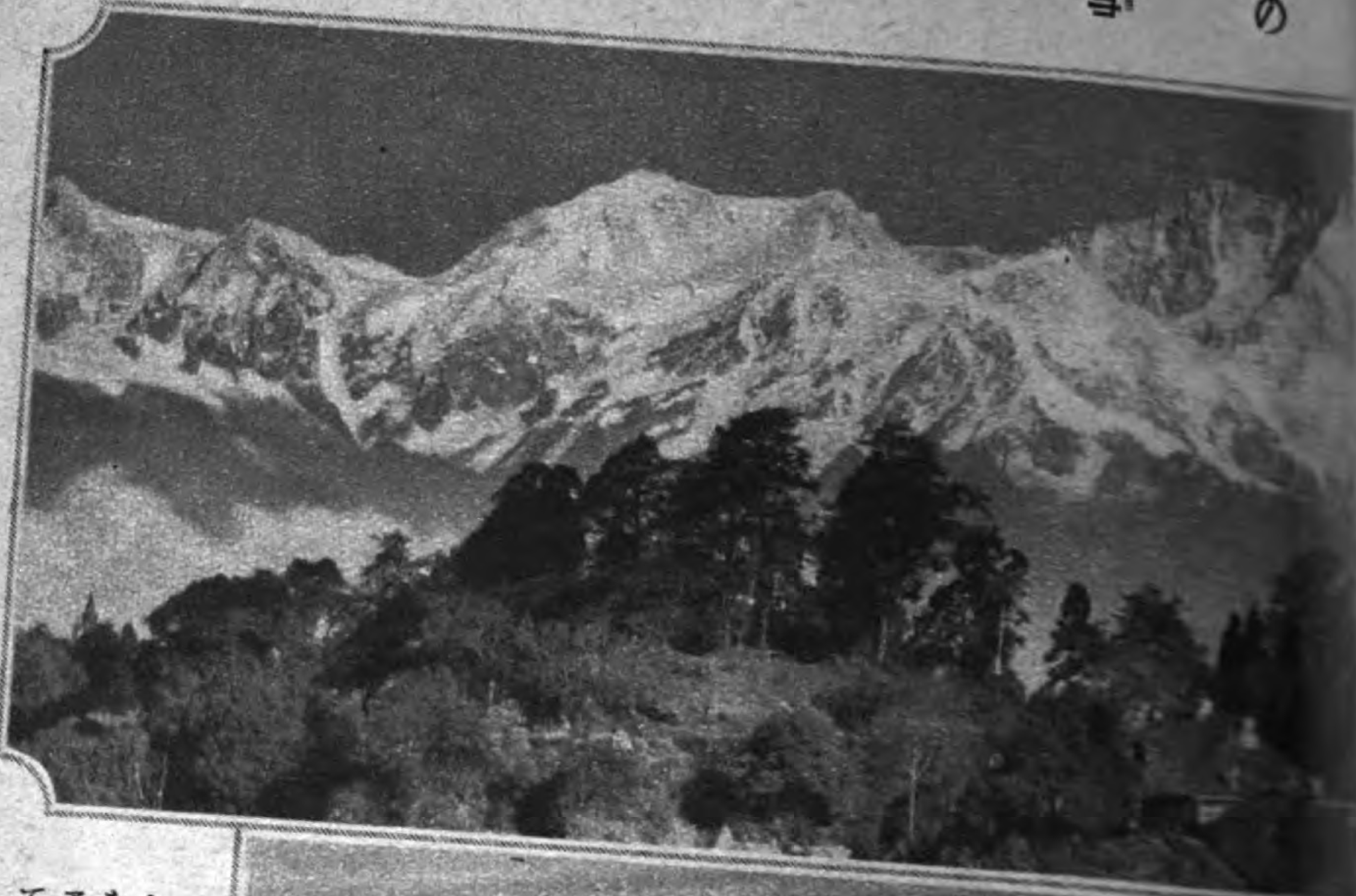




ヒマラヤ連峰。蜿々として長蛇の如く印度、西藏の國境を走つてゐるヒマラヤ連峰は、千古の雪を頂いてその峻嶺を誇つてゐる。寫眞は海拔七千呎の高地に在る原始的の一小都會ダーヂリンよりの眺望である。此の街は外國として珍らしくも日本杉が繁茂し、印度人、シツキム人、ネポール人、グルカ人等が雜居してゐるのも一つの奇觀である。正面に見ゆる高峰は有名なるキンチンジヤガで海拔二八、一四六呎。



雪の





レーニア山。漠々たる白雲は脚下より湧いて忽ち山谷を埋め、層又層、雲海の果は何處か際涯を知らない。此處は名に負ふ米國のレーニア山。ワシントン州の最高峰として知られ、レーニア國立公園に遊ぶ者の思慕渇仰する山である。今しも勇敢なる一隊のキャムパーは白雪を蹴つて登つてゐる。高度一萬四千呎。身天外に遊ぶ如く、心おのづから爽快を覺ゆるであらう。

峻嶮

(1)危險々々、見るからに物凄い氷河の大龜裂だ。ヒヨッと落つこつたら最後、迚も娑婆には浮上れそうもない。これは米國の一登山家が鴨狩りをするため危險を冒し獲物を探してゐる處である。

(2)二千呎の天空に突出した一つの奇岩。平常は鷲の棲家となつてゐる南阿弗利加テーブル山の断崖である。二人の冒險家が見事此處を征服して意氣揚々、ハテ日本はどの邊だらう？







(3)恐ろしくデッカイ岩だ。一歩過つたらそれこそ百年目、身體は粉微塵になつて了ふ。これは熟練した山の案内者が地理を調べてゐる處。冗談や酔狂では出来る藝當でない。



(4) どうです旗竿の様に長いこの喇叭は？ これは瑞西の高山で山番が使用する信號喇叭。音は驚くなかれ數哩遠方にも聞える。



(5) これも手に汗を握る様な大冒険。米國アリゾナの大谷で二人の寫眞技師が斷崖の鷲の巣を撮影してゐる處。



南極を

世界の視聴は南極に集まる！ と云つてもよい程昨年来二人の飛行家によつて南極探險の白熱的競爭が行はれた。一方は嘗つて大西洋横斷に成功した米國のバード中佐、一方は北極探險に成功した英國のウイルキンス大尉。どちら



①





②

(1)はウイルキンス大尉の一行がデセプション島の附近で多數の鯨を捕獲し引上ぐる處。
(2)はウイルキンス大尉。

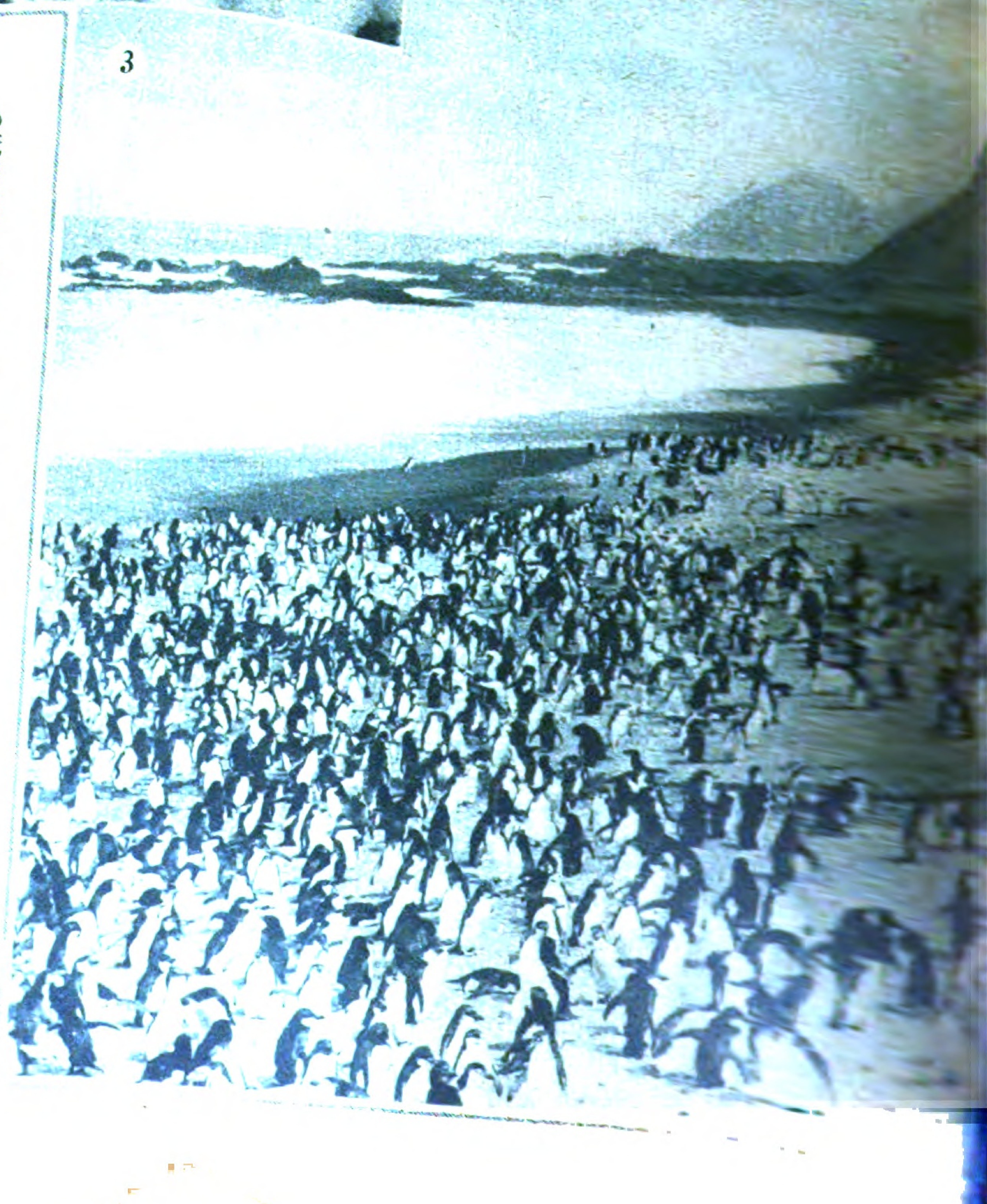
目がけて

も負けじ劣らじの鬩の若バードを米國の金持が後援すれば、ウイルキンスは英國の皇室地理學協會等が激勵する。二人の競爭といふよりは寧ろ國際間の競爭であつた。それ丈け興味も深いわけである。南極の謎！　南極の寶庫？　扨二人の探險家は何を贏ち得たであらう？　その詳細な報告こそ見ものである。

4



3



(3)南極地方の無人島に棲む無數のペンギン島。岸邊にはいつの頃からか難破船の破片がうちあげられてゐる。(4)はバード中佐。

女船頭





やれモガだのモボだのと世間ではシャボン玉見たいな事に騒いでゐるかと思へば世には又かうした面白い情景がある。上は支那廣東の女船頭。子供をオンブしたまゝ婦選も男女同權も何處へやらギッコイ〳〵。下は東京の女船頭。これも子供を背中によそ目も羨ましい程夫婦睦じい共稼ぎ、歌ふ唄はいつしかのどかな追分となつてギッコイ〳〵。



「現代」七月號の評判記事

修養＝向上＝見よ充實せる此の内容！

■議論縱横 世界各國學生座談會（雜誌界未曾有の大計畫！流行の座談會が國際的進出！見よ！談論火を吐く大場面）……本社特派記者

■知識階級の就職問題（この事實を如何にすべきか？深刻なる就職問題の解剖！何人も見よ！）

■現代名士 スポーツ奮鬪記（内田信也、末弘嚴太郎、宮田光雄、山本久三郎、三島彌彦、大村一藏等往年スポーツ界に活躍せし諸名士が、肉彈火花を散らせし壯烈無比の物語！）

■東叡山内の舌戰（風雲血眼き維新を回想し、不世出の三偉人泥舟鐵舟海舟を語る頭山翁の得難き大讀物！）……頭山滿

■大英帝國の新宰相……代議士 永井柳太郎

■驚異すべき醫術界……醫學博士 渡邊房吉

■棋聖天野宗歩……岡田東魚

■先覺大記者物語……久木水府樓

■私の十七八の頃……現代女流名士

■主義の力熱誠の力（現代一流諸名士は何を語る！）

■醫學界の變り種……龍谷耿之助

■チップ物語（旅行珍談）……大和家秋男

■精神破綻と其豫防法……醫博 杉田直樹

■運動界ゴシップ……　■財界消息……

■文壇閑話……　■政界秘話……

近代日本文化の先驅者



鶴見祐輔氏　中村吉藏氏　佐藤鐵太郎氏

■予が信仰に入りし動機……海軍中將 佐藤鐵太郎

■英雄ガリバルヂ（ムツソリニ傳の著者澤田氏が、熱情を傾けし英雄物語！）澤田謙

見よ！見よ！讀書界に新生面を開拓せる大雄篇！

■金儲綺談 黄金街を行く……谷孫六

名著「岡辰押切帳」を以て突如！出版界に乗出し、一躍寵兒の名を恣にした谷孫六氏！語るは何？ゆくとして可ならざるなき谷氏の筆は熟し、堂々黄金街を闊す!! 痛快極まる大讀物見よ！氏が体驗より生み出した利殖金儲けの大秘訣！

■小說 忍兵秘帖（素晴しい大構想の下に作者が心魂を打込んだ大作本號より愈々新掲載！）今東光

■戲曲 大津事件（護法の士兒島惟謙の大面目！見よ！手に汗握る大場面！文壇注目の傑作）中村吉藏

■小說 耀ふ黎明（作者が理想の一女性を拉し來り人生極致の明るさを描かんとする大名篇！）長田幹彥

■小說 トノ・バンゲー（鶴見先生の麗筆さえて場面はいよ〳〵本舞台に入る！面白い愈々面白い！）鶴見祐輔

◉此の外 讀めば血となり肉となる 活記事澤山

定價五十錢（送料二錢）・

東京本鄉 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇

ぢ疾の理想的自宅療法

再發、惡化のシーズンに際して心ある人々の精讀を望む

東京肛門病院長　谷　泉　述



世界人類の六十パーセントは痔疾患者であるといふ、余の見聞する處に於ても特に印度支那方面の如きは殆ど全部の人々が大なり小なり痔疾に呻吟してゐる有様である。痔疾！この恐怖すべき肛門病こそ第二の亡國病として今更ながら戰慄に値する。しかして本症は、初期の非常な苦痛のない爲、患者は迂闊にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、赤痢、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診療するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、貧賤ある階級の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メチチーネ谷岩太氏の最新學說を斟酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾ヒットを江湖に送つたのである。

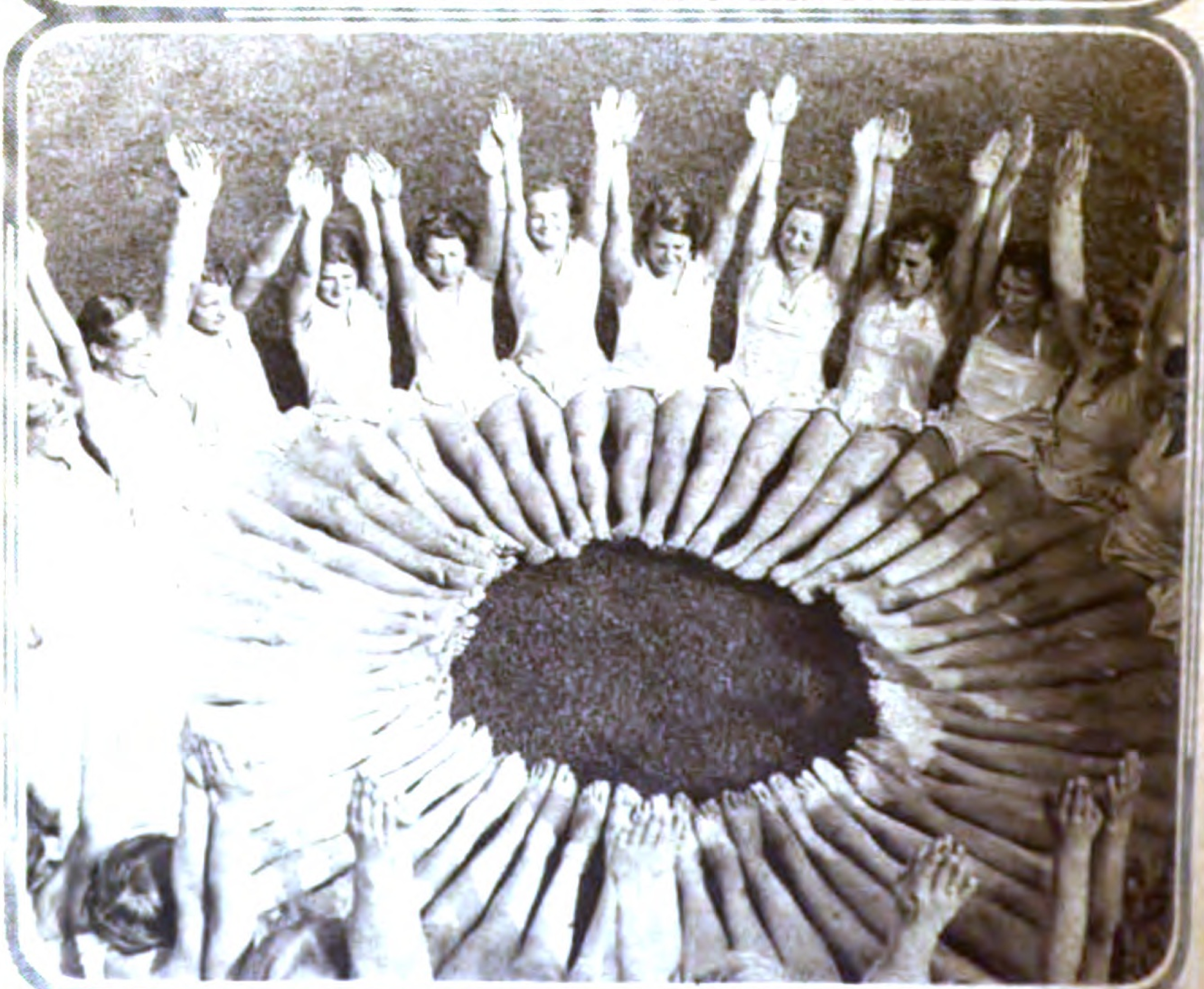
ヒットは合作各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくてヒットは手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奬するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔疾に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

（ヒットは三種あり。挿入、塗布、內服、挿入は內痔核、痔出血、內痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脫肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、內服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖、自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである。

ヒット藥價、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、內服、一圓、二圓、五圓、尙治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八（振替口座東京七二二二）大阪市西區新町通一ノ二（振替口座大阪一〇六）丁子堂藥房（誌名記入御申込み次第說明書進呈）





(上)ヤツこれ大きなお手玉だ。ポン〳〵、ポン〳〵面白さう。(下)咲いた咲いた、雛菊が咲いた。花瓣がみんな笑つてる。これは獨逸ハノーバー模範學校の女學生の體操で、素晴しい健康美は此處から生れる。かうして獨逸人は科學に教育に體育に總ゆる方面にいつも若々しい活動をしてゐる。實際獨逸人は永久に青年だ。



(1)刀劍の鑑定にかけては日本でその右に出づる者がないと迄云はれてゐる本阿彌光遜氏。愛刀の手入に餘念のないところ。



(4)ヤッと掛聲して投げれば網は空一ぱいに擴がる。撈獲物は何か？寫眞は投網の名人奥平昌恭伯。(5)今樣那須與市として聞えてゐる弓師阿波研造氏の颯爽たる勇姿。



(2)と(3)は砲兵工廠の至寶と云はれる射擊の名人。擊つて當らなければ鐵砲の方が落第といふ始末。(上)は機關銃の小林好德君。(下)は須崎鷹之助君。



(6)身長僅に四尺九寸、體重十一貫といふチツポケな身體で堂々と世界撞球選手權大會に乘出したのは誰あらう吾が松山金鈴君だ。縱横にキューを振つて最後の決勝戰迄漕ぎつけ相手のカクラン君の心膽を寒からしめ邦人のために萬丈の氣を吐いた稀代の名手。



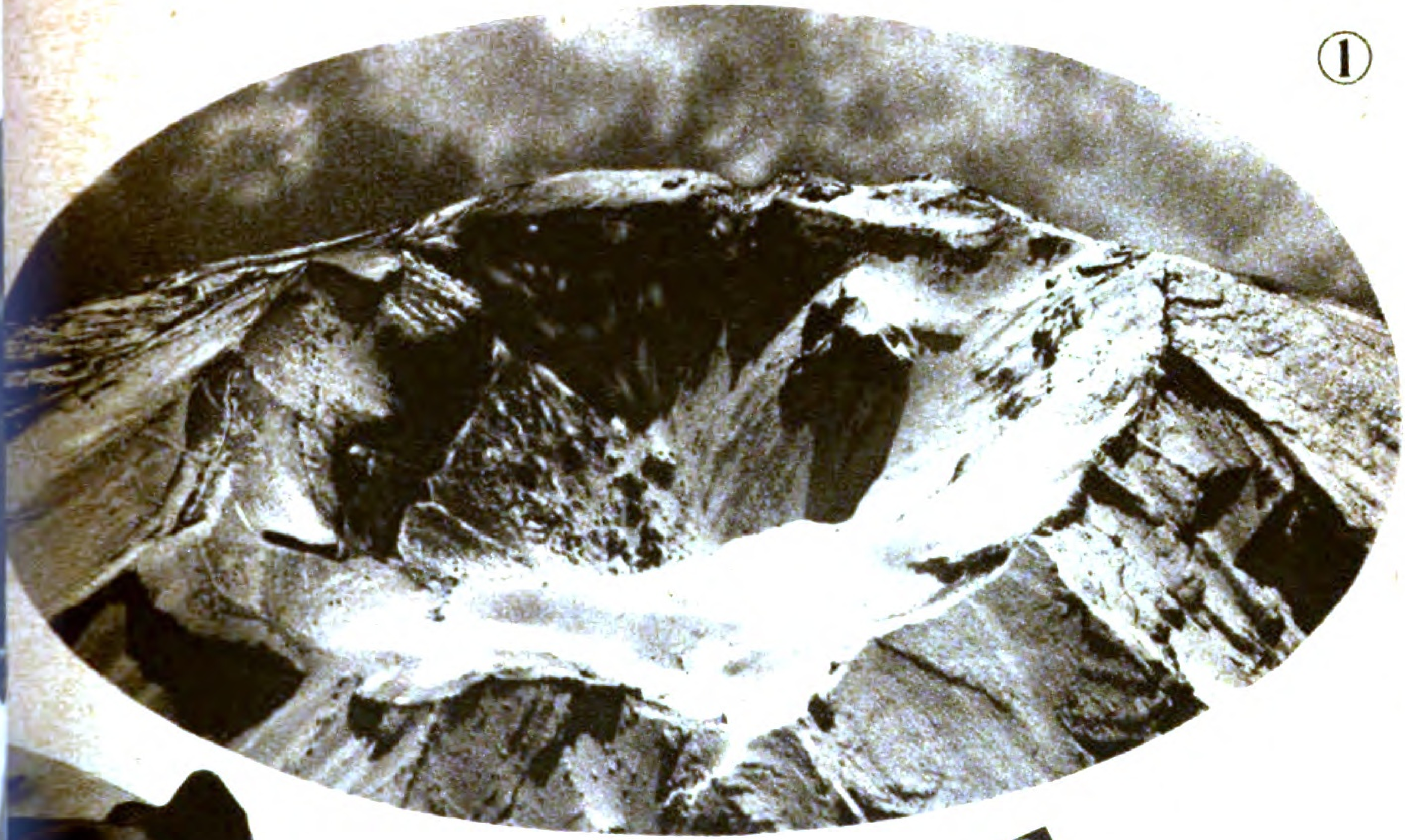




(7)これこそ神業、一錢一厘も間違つた事のない算盤の達人貯金局の三木をみきさん。



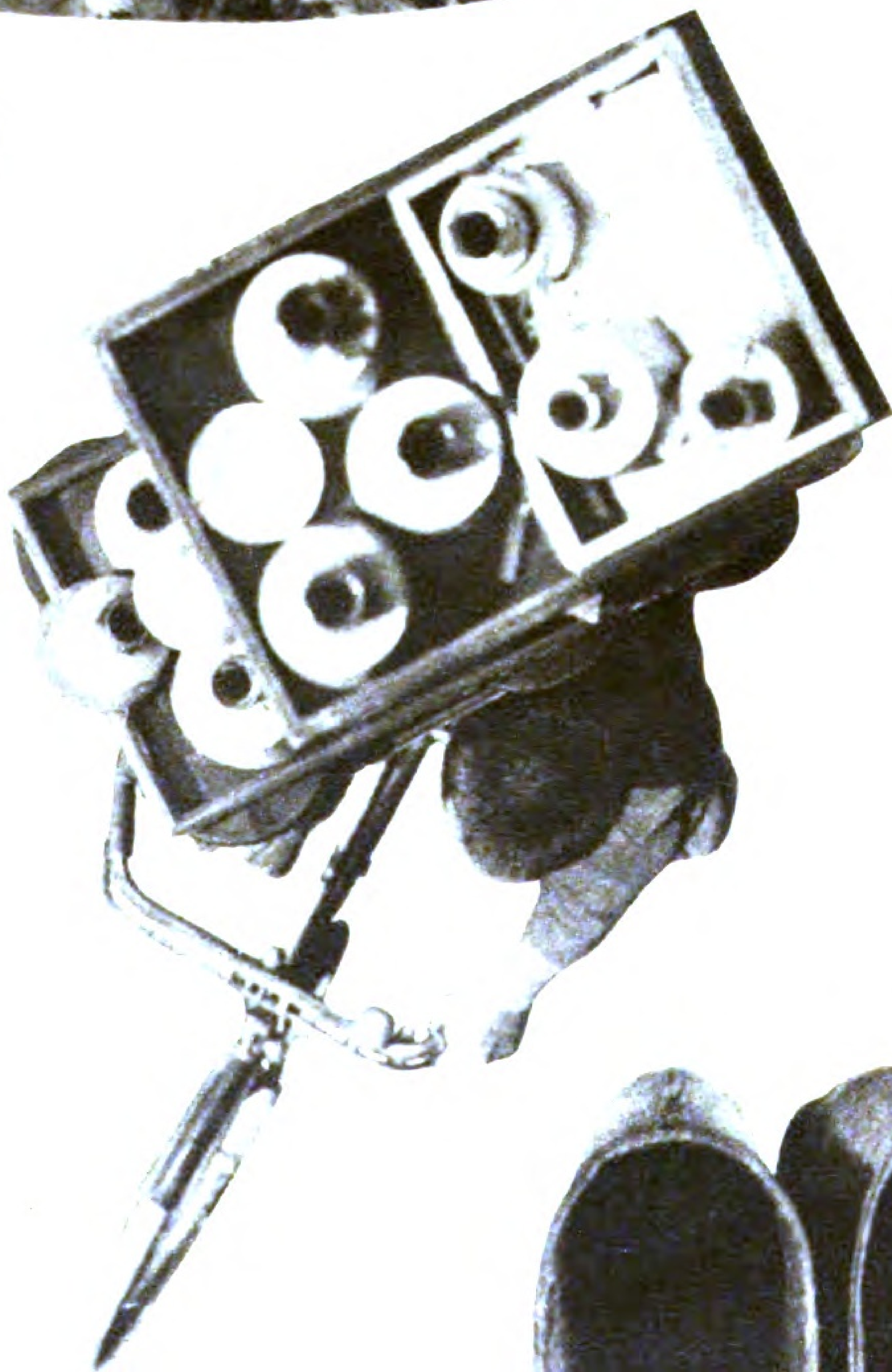
①



④



②



③



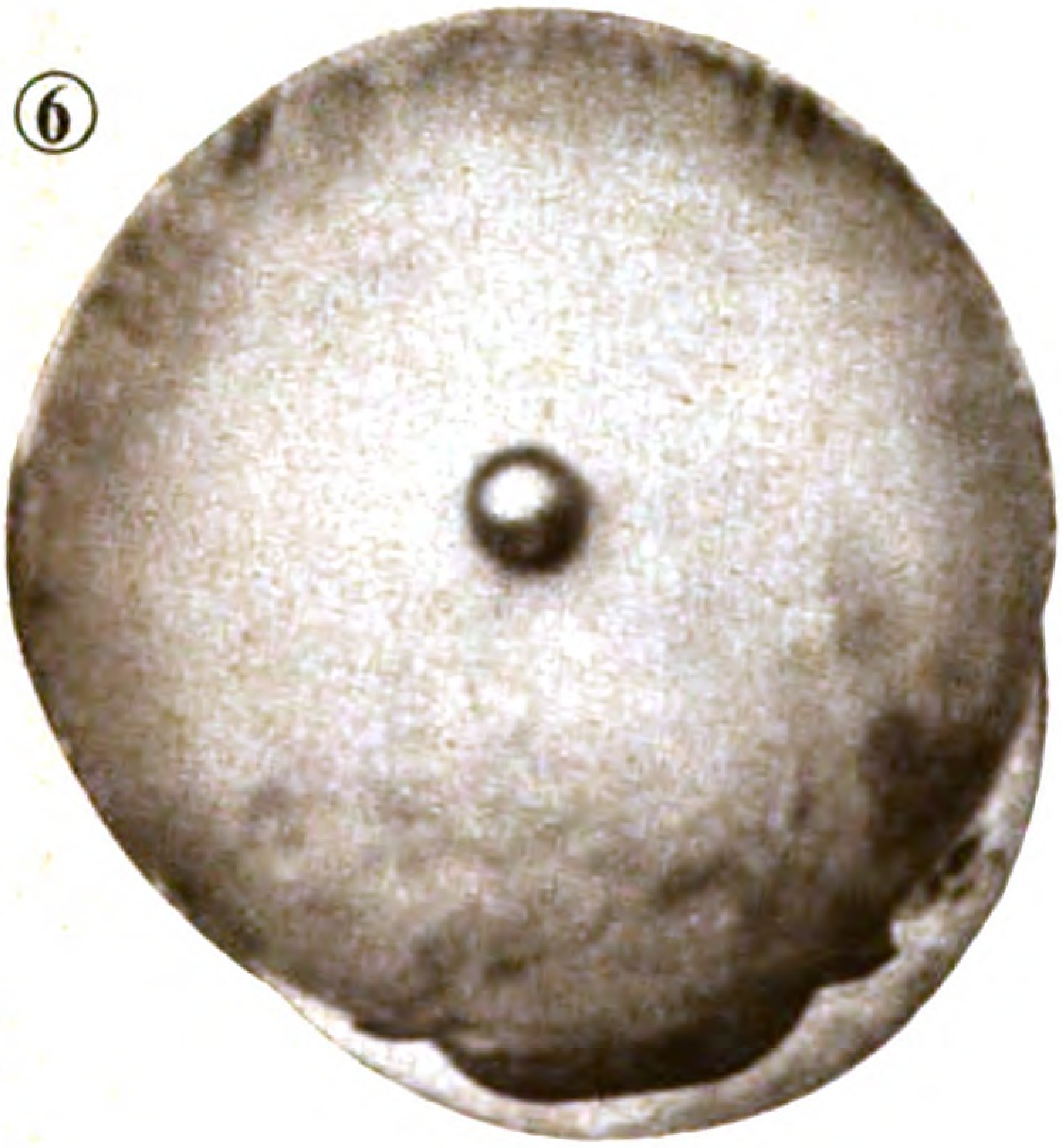
□懸賞募集

サア茲に掲げました七つの寫眞は何でせう。何れも奇拔な形ではありませんか。うまく云ひ宛てゝ御覽なさい。

一、用紙は官製ハガキ。(1)何々。(2)何々と名前丈け書いて下さい。

一、[illegible]

⑥



⑤



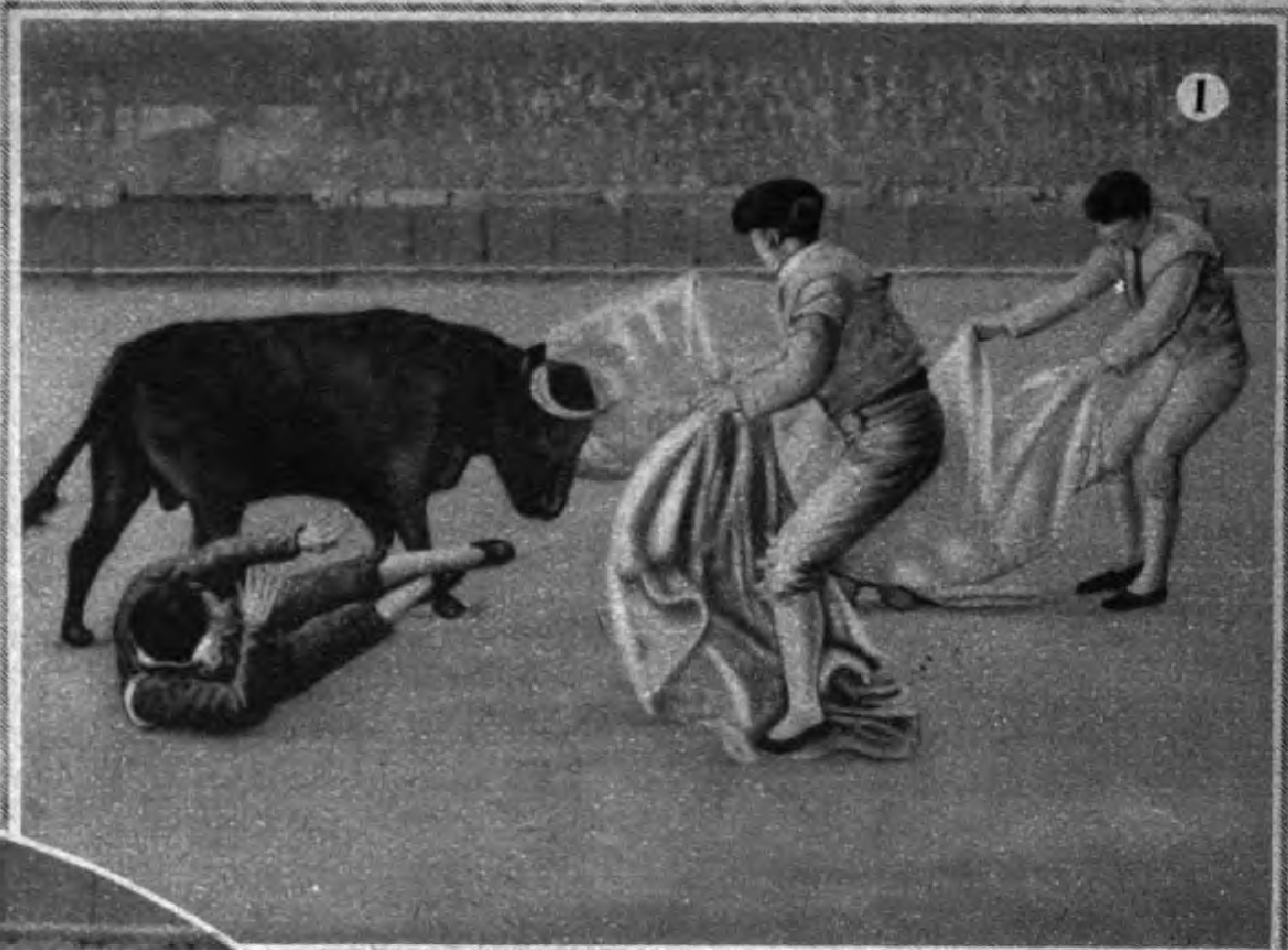


⑦



一、締切　六月二十五日

一、賞品　入賞者五百名にキング特製メダル贈呈。正解者多き時は抽籤により、少きときは正解數多きものより順次入賞者と致します。



闘牛は文明の世に遺された殺伐な競技である。生命と榮譽を賭けてゐる闘牛士の苦心は並大抵でない。(1)は突倒された一人の闘牛士を救はんとして他の者が牛に戰ひを挑みかけ盛んに自分の方へ牽制してゐる光景。



(3)猛然と飛びかゝつて來た牛を目がけてパッと肩衣を投げつけ、巧みに身をかはして敵



(2)不意に右脚に一撃を喰つてパッタリと倒れた闘牛士が、電光石火の如くつゞけて襲ひ

の攻撃を避けた處。これは最も際どい巧妙な藝當で、見物をヤンヤと云はせる場面である。



(4)數本の槍を背中に受け、怒り狂つた猛牛が突如！闘牛士を宙に突上げた瞬間の奇妙な場面。

(5)これも猛牛が唯一擊、アハヤといふ間に闘牛士の腹を角に貫き、地に叩きつけんとする一刹那。





來る猛牛を片手で靜かに扱いて居る處。實に間髪を入れない緊張した場面。

海山千里、遠い異郷に健闘してゐられるキングの愛讀者諸君の通信を二三御紹介しませう。(1)米國オッタワ市の親睦會に下田善策君が五十二時間かゝつて作り上げた見事なお菓子。(2)南米サンパウロ市に活躍さるゝ龜井千男君。中央はマモンといふ迚もおいしい果物だそうです。(3)布哇の日本人學生協會では先程英語劇の忠臣藏を演じ大喝采を博しました。寫眞はお輕に扮した女學生の藏野さん。(4)米國加州に於ける日本人の大農法です。牽引機關車でドン〳〵耕地を耕して行きます。









切らずに治る

鼻の病の新療法發見

安全で簡單な理想的自宅療法
蓄膿症や喘息でも見事に治る

▼恐るべき鼻の病氣

鼻汁が澤山出る人、鼻のつまる人、香氣や臭氣のわからぬ人、頭が重く仕事に倦怠を覺える人は蓄膿症患者である。さういふ人は重くならぬ中に早く根治せぬと、だん〳〵病症が進んで、記憶力や判斷力が減退し、何を考へても考へられず、陰鬱な氣分になつて、若い苦勞もない人達が神經衰弱や、憂鬱になつて、甚だしいのは白痴になる事があります。又喘息と鼻の病氣とは密接な關係があつて、喘息患者は先づ第一に鼻の病を治すことを忘れてはなりませぬ。且つ鼻が惡いと口が自然に開くので、風をひき易く又肺病や氣管支カタルにも罹り安い。恐るべきは鼻の病氣である。

▼慘らしい蓄膿症手術

鼻の治療は今日では切開手術の外ない事となつてゐて、醫者に行くと直ぐ手術を勸めらるゝ。處が鼻の手術は總べての手術中で最も慘らしいもので先づ顏に傷の殘らぬ脣のやうな場所を選んで切開し、鑿や金槌でカン〳〵と上顎の骨を打ち破り、中に溜つてゐる膿を掃除するので見てゐても慘酷でハラ〳〵させられるのであるが、何分に小さい込み入つた場所であるので、名醫の手術でも中々うまく行かず、二度三度と手術のやり直しをやることが屢起るのである。鼻の手術と聞いて何人も躊躇するのは之がためであるが、湊式吸攄療法では其の必要がないばかりでなく、電車汽車中・勿論何處ででも一本の煙草を吸ふと同じ位の手數と時間とで出來・何んな難症でも見る〳〵快癒し、既に何回も手術をして思はしくなかつた人で、全快した例は枚擧に遑ありません。

▼科學的新療法發見

湊式吸攄療法はあり觸れた賣藥と異り湊病院長ドクトル湊謙治氏父子が三十五年の長年月間苦心に苦心を重ね漸く完成せる科學的根本療法で、前大審院長男爵横田國臣、農學博士理學博士松村松年、法學博士仁井田益太郎氏等は熱心なる之が推稱者であるばかりでなく、科學雜誌界の權威「科學畫報」婦人雜誌界の權威「主婦の友」の二大雜誌は筆を揃へて其卓效を推稱せる一事にても知ることが出來ます。兩雜誌の推稱記事及湊式吸攄療法の「詳細說明書」は東京市麹町區下二番町十番地明光社へ、本誌で見た旨記入申込めば即時進呈します。

湊式吸攄器一揃及湊式吸攄液（六十日分）金四圓五十錢、送料内地廿五錢、滿鮮其他五十錢、普通賣藥と異り藥店にて販賣せず東京市麹町區下二番町十明光社（振替東京六〇七九六番）又は大日本雄辯會講談社代理部へ申込めば御送附します。

フケとぬけ毛が不思議にとまる

＝萬國專賣特許品　優秀スマドレ・ヘヤートニック＝

抜毛は淋しいものです

フケが多くて頭がカユイ程氣持の惡いものはない、のみならずフケは非常に毛根を冒しますから毛髮は自然營養や發育を妨げられて、段段赤細くなり。艶を失ひ、遂には脫落して了ふ。男女を問はず頭髮の拔けたり、白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケと脫毛は一週間で

本社が特に推薦するスマドレ・ヘヤートニックは、在來の怪しげな毛生液や徒らに安價なアルコールによつて刺戟を與へる、フケ取り香水の類とは全然異り、どんなにフケの多い人でも、又脫毛にお困りの方でも、一日數滴一週間位御使用になれば完全に之を全治せしむる事が出來る

志村醫學博士 は『化粧品にして斯くの如く醫學的效果の顯著なるもの珍らしく、一般家庭に推奬して充分價値あるものと信ず。』と推薦し、又美容大家

女子整容大學長　山本久榮女史 が『スマドレ・ヘヤートニック』は當校でも隨分使用し又充分研究しましたが舶來品でもこれ程日本人に適した效果のあるものはないと思ひます』と推奬せられて居られるに見ても知られる。

此スマドレ・ヘヤートニックを使用すると頭髮の素質を根本的に改善し毛髮の艶が非常に良くなり、而も絹絲の樣に軟かになるからポマードを少しも用ひず、何時も頭髮は一絲亂れぬ端麗な形を保ち高貴な香料を含ませてあるから、馥郁とした香りが何時迄も漂ひ、それが如何にも氣高い趣味と、深い教養を象徴するために、近代人は爭うて愛用して居ます。

定價ヘヤートニック（婦人用　男子用指定大瓶約百回分　二圓五十錢、送料內地十八錢鮮土四十五錢、東京市本鄕區駒込坂下町大日本雄辯會代理部（振替東京六六二九番）へ

ドクトル・オブ・ファーマシー
小川龜重先生創製



ニキビ專門藥「マーシー」

内用	七日分七十五錢	十五日分一圓五十錢	四十五日分四圓
外用	中形一圓	大形二圓	特大三圓
送料	內地十二錢	領土四十五錢	

ニキビは體内の脂肪が濃過ぎて、それが皮脂腺と云ふ管に詰る爲起るものです。マーシーは内服により、此の脂肪の濃度を薄めて普通の狀態とし、同時に外用藥に依つて、炎症を除き、すべての黴菌を殺す樣にしたものですから、根本的に治療されることになります。どんな頑固な性質のニキビにも又どんな體質の人にもマーシーは效果がないと云ふことはありません、不思議に效く流石にマーシーはニキビの專門藥だけあると大した評判です。

東京本鄕大日本雄辯會代理部にて取次（振替東京六六二九）

マッチ一本で手輕に接く

糊狀ハンダ

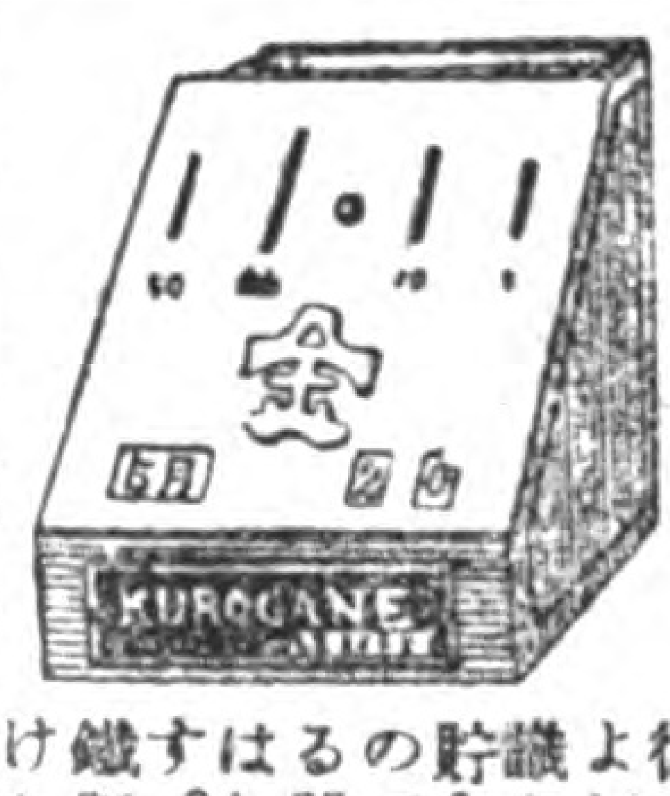
（一名道具いらず糊ハンダ）



ラヂオ等の組立に頗る便利　どんな金屬でも小さなものはマッチ又はローソクの火で（ハ勿論大きなものは鏝）他に何にも要せず即座に手輕に接着出來る便利なハンダです。取扱ひの簡單なものと出來上りの美麗で完全なのが本品の特長です。家庭用として最も便利です。

試用小罐　四十錢　德用罐　一圓（送料四錢）

金のなる器　くろがね貯金函



怠けやすい貯金も、此の貯金器を用ひれば必ずキチン〳〵と規則正しい貯蓄の習慣がつく様になります。從つてこれによれば知らず識らず澤山の貯金が出來るので「金のなる器」とも云はれて居ります。丈夫な鋼鐵製故叩きつけた位では中々コハレません。毎日五錢がけ、毎日十錢がけ壹圓五拾錢送料内地貳拾錢臺樺滿鮮五拾錢

大日本雄辯會代理部
東京市本鄕區駒込坂下町
振替口座東京六六二九

最近重版の名著紹介

蟲の世界を探ねて

農學博士 横山桐郎先生著

面白い〱蟲の世界の探檢記、戀あり、生活難あり、爭鬪あり、經濟あり、藝術あり、蟲の千態万様の生活には吾等にとり尊い教訓、深刻なる諷刺がある。こんなに面白くて有益な本は少い。（四六判函入美本、定價貳圓貳拾錢 送料十二錢）

驚異と神秘の生物界

農學、理學博士 松村松年先生著

世界の學界で評判になつてゐる名著である。見よ！生物界の丹念なる研究、生物界にも戀愛がある、軍備がある、其他多くの珍しい吾等の知らない神秘な現象がある。その中最も面白い事實を現代生物學界の權威たる著者が絶大の力を注ぎ二百有餘の鮮明なる挿繪を入れて赤裸々に平易にして流暢に、叙述したのが本書である。（四六判函入美本定價貳圓三十錢送料十二錢）

日本政黨史

元貴族院書記官長 林田龜太郎先生著

議會の開設、政黨の消長、政界の大事件、議政壇上の大波瀾、全國各地に於ける利害の衝突等々その間に出沒擡頭せる大人物、先覺者、官僚、黨人、志士、壯士の面々の痛快な活躍を描く、眞に憲政史上得難き大名著である。（四六判布裝函入上製貳圓八拾錢下製貳圓五拾錢送料十四錢）

雄辯法講話

加藤咄堂先生著

著者が四十年の尊い体驗と古今東西の大雄辯家の名演說例を以て辯論の成功上達法を說く眞に得難き良著、各地の學生、青年團を始め各方面で大好評です。立身の扉を開き、國家の風雲を叱咤せんとする者は見よ！（四六判布裝函入美本定價貳圓送料十二錢）

進化と思想

農學理學博士 松村松年先生著

著者は世界的生物學者、幾多の實例を引いて人類問題、社會問題、民族問題を極く平易に誰にも解りよく解かれた大名著。（菊判クロース函入美本定價三圓送料十四錢）

煩悶と自由

理學博士 丘淺次郎先生著

生物學の泰斗にして識見高邁なる博士の、人類と社會に關する獨創的の研究の發表である。社會問題、思想問題を論ぜんとする者の必讀すべき世界的大名著『人類は滅亡に向つて走りつゝあり』と云ふ一大警告に至つては何人も慄然たるべし。（上製四圓五拾錢送料十六錢並製貳圓八十錢送料十二錢）

二人行脚

理學博士 日下部四郎太先生著

大馬鹿三太郎、骨折五九郎の二人の博士が、日本全國を遍歷する珍旅行、各地の人情風俗、傳說奇談を探り、科學の照魔鏡に依つてその由來眞相を明にす。而も博士獨特の快筆、面白い事、物語を讀むが如し。（四六判函入美本定價三圓五十錢送料十四錢）

異國行脚

理學博士 日下部四郎太先生著

大正の彌次喜多二人の博士が全世界一萬五千餘哩を股にかけ、痛快滑稽、頗る面白い有益な膝栗毛、或は世界の名所古跡を訪ね、或は人情風俗を探る、居ながらにして世界を知り、且つ最新知識を得る便に稀代の快著である。（四六判函入美本定價貳圓八拾錢送料十四錢）

右八大名著の發行所 ―

東京本郷 大日本雄辯會講談社

△振替東京三九三〇▽全國有名書店にあり



英雄閑日月物語

歌ひつ舞ひつ

八波則吉

文治五年四月廿八日、今日を最後と武藏坊辨慶、大手の櫓へ駈登るや、高く上つた太陽に、皆紅の扇を翳[illegible]颯やとばかり。「いかに敵の面々、音に聞け、目にも見よ。抑ゝ軍は斯うするものぞ、末代までの手本にせよ」と大音聲に呼ばはつて、薙刀の柄を扇で敲き、調子を取つて歌ふらく——

へ鳴るは瀧の水、瀧の水。とう〳〵たりや、とうたりや。花を流すは吉野川、筏を流すは大井川。紅葉を流す立田川、辨慶が高名を流す衣川。衣川の水は今日、唐紅に流るらん。唐紅にや流るらん——

歌ひつ舞ひつ興に入れば、鎧の袖、太刀の鞘、初夏の日に照映えて、敵も味方も見る目眩き美觀であつた。

——磯田長秋畫——

朝頼の風流

松居松翁

源頼朝は十三の時、伊豆の蛭が小島へ流竄の身となつて、長く窮迫な歳月をおくつたに拘らず、又あゝいふ冷酷な心の所有主であつたにかゝはらず、存外風雅な嗜みがあつた。これはかの藤原邦通のやうな京都の風流才子を側に置いて、秘書官



のやうにつかつて居たためであらう。頼朝も奥州征伐の時、白河の關へさしかかつたので、偶ま能因法師の『都をば霞と共にたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關』の歌を思ひ出し、懐舊の情に堪へかね、恰度馬前に伺候して居た梶原源太景季に向ひ、

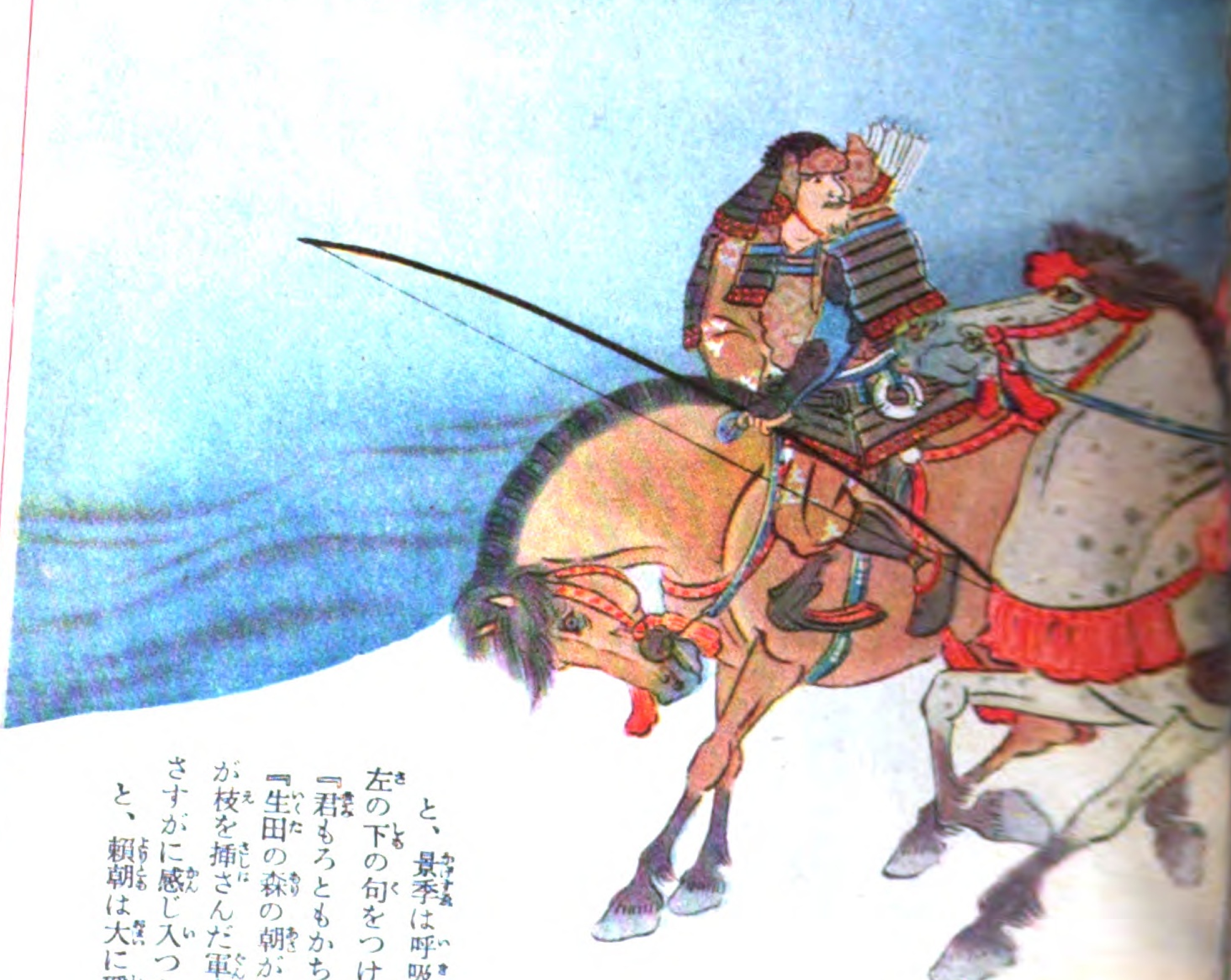
『景季、能因法師の風懐はいかに』

と云つた。すると景季は手綱をひかへて、かう詠んだ。

『秋風に草木の露をはらはせて
　君が越ゆれば關守もなし』

頼朝は景季の詩想をふかく喜んで、尚奥地ふかく兵をすゝめた。そして今の仙臺に近い名取川にさしかゝると、今度は自らかう上の句を詠んだ。

『われひとり今日の軍に名取川』



と、景季は呼吸もつかせず、左の下の句をつけた。

『君もろともかちわたりせん』

『生田の森の朝がけに、箙に梅が枝を挿さんだ軍中の風流男、さすがに感じ入つた』

と、頼朝は大に稱讚した。

―小堀鞆音畫―



敵前一曲の琵琶

筑波四郎

待ち設けたるバルチック艦隊來る。すぐ眼の前には、蜿蜒として、長蛇の如き二縦陣。



『すは』今にもあれ、砲火をまじへようといふ瞬間である。我巡洋艦隊所属の軍艦松島の奥宮艦長は、艦内を巡視したが、全員みな落ちつき拂つて、平生と少しも變りがない。折しも、上甲板から聞ゆる琵琶の一曲、聞耳たてると、川中島の曲である。

『ははア、軍醫だな』

松島には、薩摩琵琶の上手な軍醫、山口一治軍醫中佐が乘組んで居たが、今、大敵を前にして、此世の思ひ出に一曲彈奏して居るのであつた。

此日、天晴れたれども、浪高し。だが、日頃の美聲は、一きは冴えて、艦内の隅々へひびきわたる。一急一緩、撥音の亂調子となつたのは、謙信、單騎馬をすゝめて、信玄の陣に乘りこんだる一節と覺ゆる。

戰機は刻々と熟してくる。彈奏は、焦らず、迫らず、悠暢として、いよ〳〵妙境に入つてくる。

日本海の波もしばらくは、音をひそめたが、ブリッヂに立つてゐた艦長の眼からは、何かはしらずハラ〳〵と涙が流れた。

—石川寅治畫—

大山崩るとも

岡田東魚

『本多樣、大變でござりまするぞ！』泉州堺、妙國寺の德川の陣へ、息せき切つて馳せこんだのは茶屋四郎次郎。

『大形な！　何事でござる』

『まだ御承知ではござりませぬか、昨夜の本能寺の大變――惟任日向守殿が右大臣家を弑し奉つたといふでは御座らぬか』

『何と？』流石の本多平八郎も顏色を變へた。

折しも家康は妙國寺の住職と心靜かに碁を圍んでゐた。平八郎次の間に呼び出して、

『相手は惟任日向守、愚圖愚圖しては居られませぬ。即刻、國許へお引揚が肝要かと……』

『ウム』家康は肯いたきりで



ある。そして元の座に戻ると、また石を摑つた。

『さあ！　こんどは躬の跡のたて番か』

『いゝ加減に諦めなされ』

『いや碁の意地、一目も損は出來ぬぞ！』

五月雨の霽れ間を新綠の蔭に小鳥がチ、と鳴く。碁石がそれを區切るやうにパチンパチンと響く。

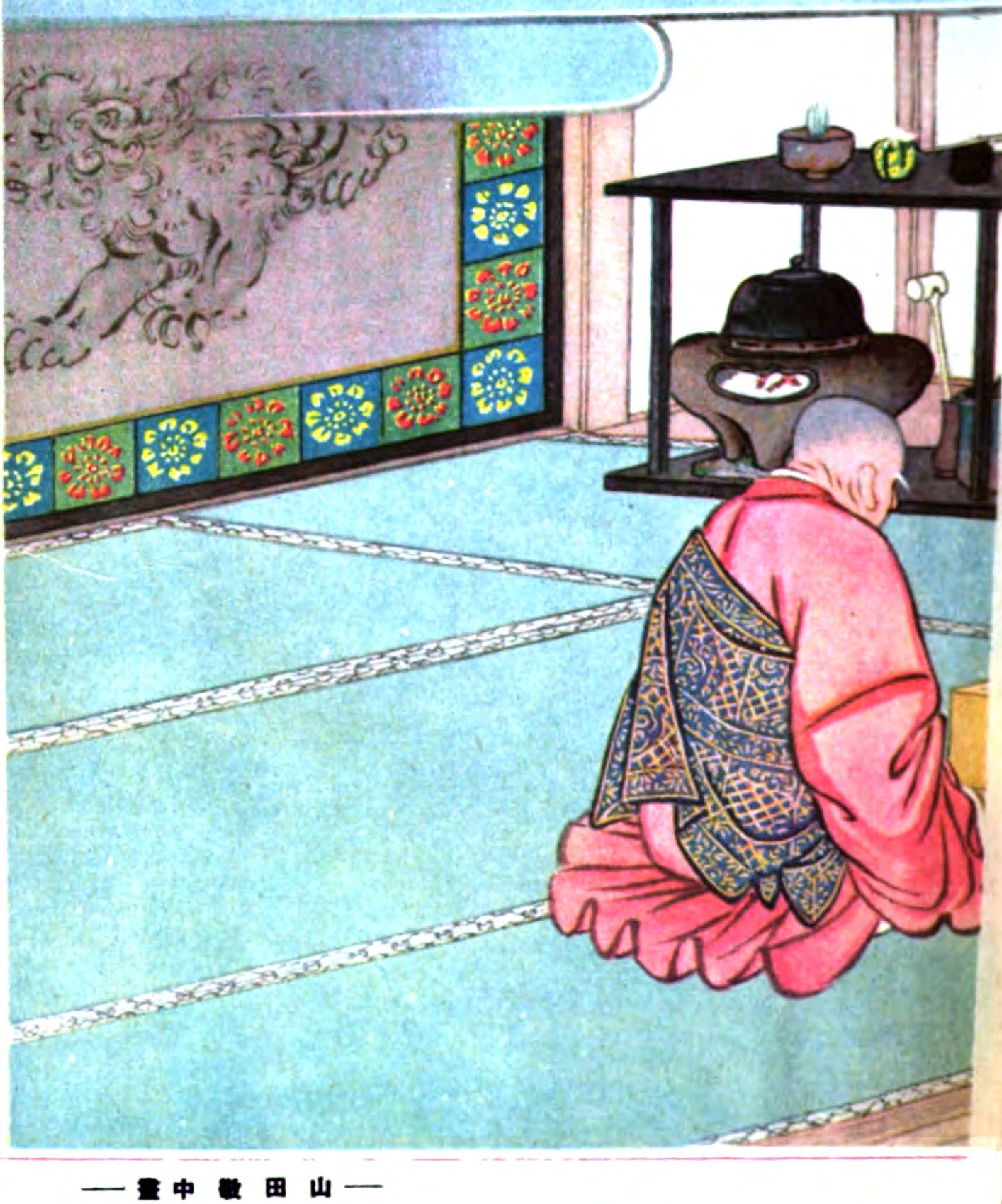
局を終へてからも、家康は住職の勸むるまゝに悠々茶を一服。

『時に！　この茶碗は至極のものぢや喃』

『お目の高いこと、秘藏の「勝山」でございます』

『何！　勝山――か、よい辻占ぢや』

さつと起つと、歸國の陣觸れ！　この伊賀越の行は家康生涯の大難に算へられてゐる。



――山田敬中畫――

曹操槊を横へて詩を賦す

加藤武雄



『師』の字を書いた大船は、大江の



中央に浮べられた。船中には、麾下の諸將皆呼び集へられ、こゝに盛んな酒宴が催された。時はこれ建安十三年十一月十五日、三五の月は、皎々として東山のほとりに輝き出で、渺々たる大江は近く銀の波を疊み、遠く微茫たる夜色に煙つてゐる。處はこれ、東柴桑の境を望み、西夏口を控へて、山川のたゝずまひ宛として一幅の繪の如き天下の絶勝、人はこれ百戰百勝、既に江北を定め、將に江南を併せんとして、意氣世を蓋ふ、魏の大將軍曹操。曹操は諸將と共に大白を擧げて明月に對したが、酒たけなはなるや、槊を横へて舷に立ち出で、燦たる金甲を月影にきらめかしながら悠揚として歌ひ出でたのがあの有名な

『月明星稀、烏鵲飛南。』

の歌だつた。

曹操は奸雄ながら、この槊を横へて詩を賦したる吟懷のやさしさは、今もなほ我等の心を惹く。その詩の冒頭、『對レ酒當レ歌、人生幾何、譬若二朝露一』とあるは、かの信長が、『人間わづか五十年――』の小唄にもくらぶ可く、ひたすらに事功にのみは執せぬ英雄の心境を想はしむるに足りる。横槊詩人！　陣營なほ詩を忘れぬ胸中の閑日月、この閑日月あつて、曹操もまた、『固一世雄也』といふ東坡の讃辭に値したのでは無いか？

――池上秀畝畫――

大阪城内夜更の小鼓

澤田謙

大阪の運命は日一日と蹙つた。それと共に、木村重成はだん〲食が細つて行つた。

『何か御氣分でも……』と、若い侍の憂ひ顔なのに、重成はニッコ



と笑んで、
『むかし後三年の戰ひに、爪割四郎といふものは、敵に首の骨を射切られた處、疵口から食べたものがはみ出て、死恥を曝したといふ。死骸だけは、清淨にしたいものぢや』
端午の節句の夜である。大阪城内には、小鼓の音がポン、ポーンと爽かに響いた。
曲は江口の曲舞、謠ふは、鼓つは瀟洒たる木村重成！
重成は久しき風邪の氣に髮も梳らずゐたのを、その宵は湯にも入り、髮も洗ひ、名香を燻きこめて、快い風情であつた。
小鼓の音は、更闌くるまで、その一絲紊れぬ爽亮の響を涼しい夜風に傳へた。
明くれば元和元年五月六日、重成は、井伊が赤備への勢と、手痛い戰を戰つて、見事な最期を遂げた。生年僅かに二十三歳。



——山川秀峰畫——


兩股の月桂樹

赤松月船

ビスマルクが、皇帝ウキルヘルム一世と計り、非常な確信を以て議會に提出した軍備擴張案は、意外にも否決の運命に陷らんとした。その爲に皇帝は悲觀して王位を去らうとまで決心せられた。

飛報はビスマルクの避暑地へ達した。折柄、彼はホテルで親しくなつた新婚旅行中の貴族とつれ立つて散歩に出かける處であつた。が、電報を見了ると、その儘ポケットに收め、快げに談笑しながら林の中を逍遙した。

そこに若い月桂樹の枝の二股になつたのを見出す





と、彼は早速折りとつて新夫婦に贈つた。

『どうかこのやうに仲よく生涯をくらして下さい』

その後で、言葉しづかに電報のことを話した。

すると新夫人は月桂樹の二股を割いてその一つをビスマルクにさゝげ、

『これはわたしの心です。これを持つて、どうぞプロシヤのためにお働き下さいまし』

『ありがたう』

彼は感激の面持で、それを内かくしに入れた。

『では、これで失禮します』

踵をかへすと、脱兎の如くホテルへ歸つた。

その翌日、彼の雄姿は議會壇上に現はれた。そして彼の火の如き鐵の如き大獅子吼は、この多難なる軍備擴張案を、完全に否決の運命より救ひ得た。

―大久保作次郎畫―

搖るゝ灯影

安倍季雄

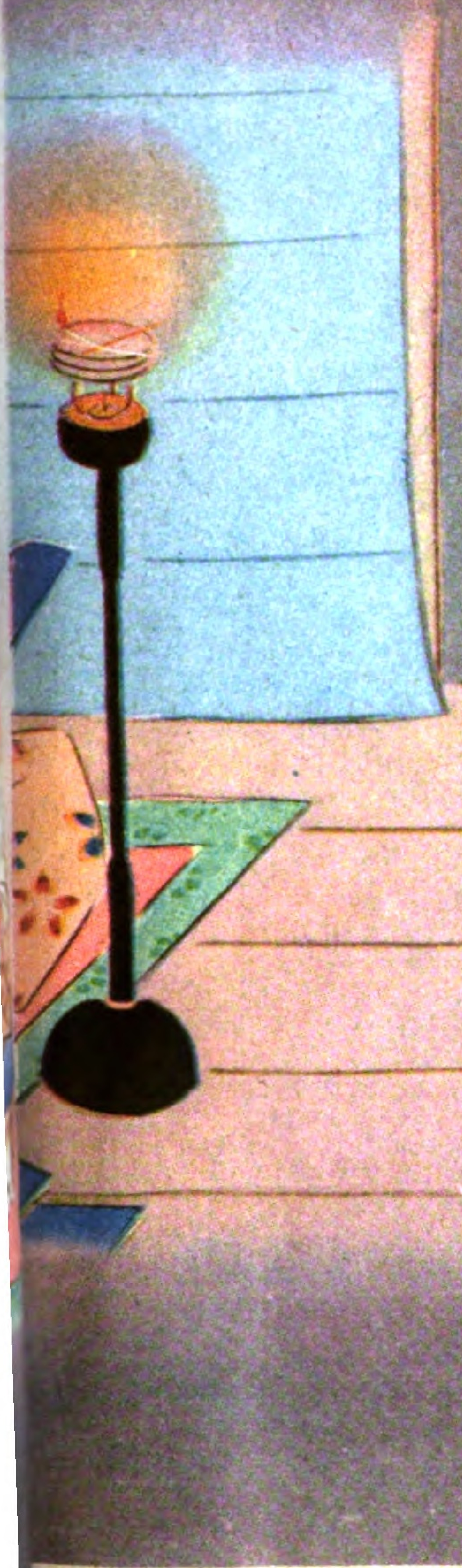
慶長四年春三月、都城に反旗を飜へした伊集院忠實を討伐に向つた島津義弘は、一夜二三の近侍を從へて、自ら戰線を巡視した。とある陣營の前へ來ると、幽かな灯影が生温い夜風にゆらめいてゐる。

『武藏の爺、何をしてをるか、見て參れ』

侍大將新納武藏守忠元、當年とつて七十四歲。老體なればとて馬には乘らず駕に乘り自ら陣頭に立つて采配を振れば、三軍の將士、慘として奮ひ起つ、鬼も恐るゝ猛將である。

『武藏殿、君命でござる。この夜更に何をお讀みでござるな』近侍は恐る〳〵言うた。

武藏はやをら頭をあげ、眼鏡をはづして



『何と、殿には深更御巡視でござるか。それは〳〵……なに、今しも寢まうと存ずると、ふと一聲ほとゝぎすが鳴き申した。陣中殊にも床しう思ふにつけ、たしか古今集の中に秀歌がござつたから、それを探してをるところ、——貴殿、御存じはあるまいな』

『どう致しまして』若侍は赤面して引き下つた。さて斯くと復命すると、義弘、覺えず手を打つて、『英雄閑日月あり、羨ましい事のう』



—— 伊東 [illegible] ——

地獄の春風

安藝三郎

明治二年五月、五稜郭で敗れた榎本武揚は、捕へられて軍務局糺問所の獄舎に投込まれた。人力を盡して天命を知る。悲嘆もない、後悔もない。武揚の心中、光風霽月。

『一つ俺がやつて見よう。デンシ〱〱シャン……夢や結ぶらん。妻は四邊を……』

同房の囚人を相手に、義太夫の『柳』をよい氣持で唸つてゐる。相手も好の道か、清元、歌澤、何でもござれの好い聲だ。地獄の中の春の風。

『待てよ、あの聲でとかげ食ふかよ杜鵑。お前、その喉をして、なぜ心まで美しうなれぬか。盗み騙りはさもしいぞ』

『……眞人間になります』

たつた一語に慄然とした。

『きつとか、よしよし。では兄弟。デン〱〱……これも岩代の結び松……』



——中澤弘光畫——

獨占的新職業案内

僅か二ヶ月間自宅獨習の上
無試驗開業！
好收入ある電療士を養成

求職者及び失業者は來れ！
男女何人にても責任指導す



世を擧げて不景氣をかこつ時、僅か二ヶ月間の自宅獨習で完全に習得することが出來て、卒業の上は全國何處にても極少の資金で自由に無試驗で開業なし得られ、醫師や齒科醫に劣らぬ好收入を得られる有利な新職業は當所の養成する新式電氣療法專門萬病治療の電療得學士並に美顏術師であります。この技術は極めて容易で學力程度を問はず男女何人にも習得することが出來ます。當所の卒業者は今や全國を通じて夥しき數に達してをりますが、何れも紳士的な生活の安定を得てをります。一日も早く安樂な生活を營まんとする人はハガキで申込次第內容見本付規則書を無代送附

東京市牛込區通寺町二三

東京電氣療法研究所

電話牛込四二〇四番
振替東京四三三二〇番

この小說を讀んで始めて

見よ！文壇大家の代表的快著



素晴しい人氣の名著！

この十四大著は、責任を以てお奬め出來る重版又重版の評判著！讀んで失望せぬ面白い小說ばかりです！

■妙法院勘八　十七版

天下敵なき快男兒勘八が六尺の反身に思ふ存分の快腕を振ひ八百八町の民心を泰山の安きに置く痛快無類の大名著。

村上浪六先生著　四六判函入定價二圓二十錢送料十二錢

■劍難女難　十四版

美男柔弱の新九郎が降りかゝる女難劍難に身を鍛へ膽を練り、遂に仇敵を討つ迄眞に息もつかせぬ面白さ！

吉川英治先生著　四六判函入定價二圓五十錢送料十二錢

■藤娘　九版

聰明と財產と美貌を併せ持つ若き未亡人の哀れ切なる戀、美青年の惱！令孃の嘆き！淫魔の出沒！

小杉天外先生著　四六判函入定價二圓廿錢送料十二錢

■第一步　九版

父を誘惑する淫蕩な女を殺す少年を中心に、青年教師可憐な處女、自墮落な女優を配し赤裸々な社會描寫！

佐藤紅綠先生著　四六判函入　定價二圓廿錢送料十錢

■お洒落狂女　廿一版

奢侈禁止の大江戶に綺羅を飾り媚態を盡す狂女！八百八町に渦卷く戀と義俠！波瀾又波瀾！痛快淋漓！

本田美禪先生著　前篇一圓八十錢送料十錢　中後篇二圓五十錢送料十二錢

■女人群像　十八版

職業婦人に纏はる世相の裏面を暴露し誘惑と迫害とに虐げられつゝある女性の爲に一大光明を點した大傑作

中村武羅夫先生著　前篇後篇各二圓五十錢送料十四錢

御申込次第圖書目錄進呈

小説の面白さを知る■■■■■■■



中村武羅夫氏　渡邊霞亭氏　筑波四郎氏　長田幹彦氏　佐々木邦氏

この外、百數十種の名著あり、御申越次第圖書目錄贈呈す。

闇の森心中　十一版

徳川實錄の殿中しきつた六百代將を中心に、[illegible]温良な妹の深刻な戀愛生活、[illegible]大膽な描寫！

戸山長三先生著　四六判函入定價二圓　送料十錢

千鳥ヶ淵　十六版

社會のどん底に落ちて行く純情の處女の悲痛極まる運命！實に家庭小說界第一人者の名著！萬人慟哭の名篇

渡邊霞亭先生著　四六判函入　定價二圓　送料十錢

探偵十種　十六版

ピストル强盗清水定吉を始め明治大正の最も有名なる探偵事實物語。トテモ面白い、事實は小說以上。

筑波四郎先生著　四六判函入　定價貳圓　送料十錢

波のうへ　十五版

飛行將校の墜落自殺にからまり一名妓の哀話悲話！水郷土浦に咲いた哀れを極めた花一輪！

長田幹彦先生著　與判函入定價二圓三十錢送料十二錢

靜御前　十九版

史上最も興味深い源平時代を背景に、女性美の典型靜と武人の權化義經との優艶な戀の悲曲！古今の大名著

福田琴月先生著　與判函入定價二圓五十錢送料十二錢

女王　十七版

孔雀の如き妖艶な令孃と男性的氣魄に富む快青年、貴公子、純情の處女を交へ淸き戀、悲しき戀、熱烈の戀

中村武羅夫先生著　前後篇各貳圓五十錢　送料十四錢

親鳥小鳥　十六版

茶目で悧巧ないたづら少年を中心に、明るい家庭生活を描く、年頃の姉、子煩惱の親見るが如し。

佐々木邦先生著　四六判函入定價二圓　送料十錢

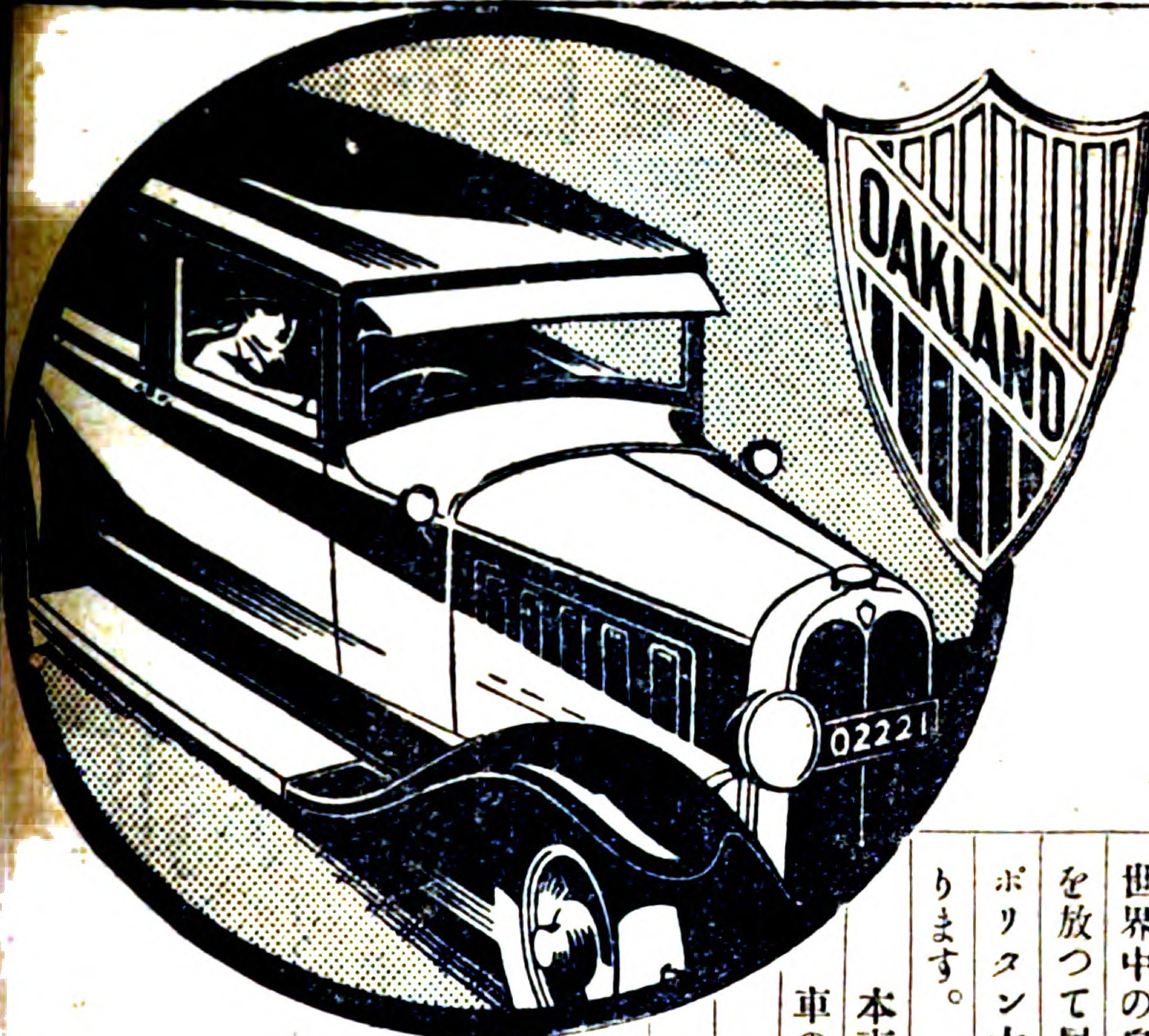
世間相人間相　十五版

現代諧謔文學の第一人者佐々木先生が家庭に路傍に社會に人情の機微を片端から槍玉に上げて痛快を極む、

佐々木邦先生著　四六判函入定價二圓卅錢送料十二錢

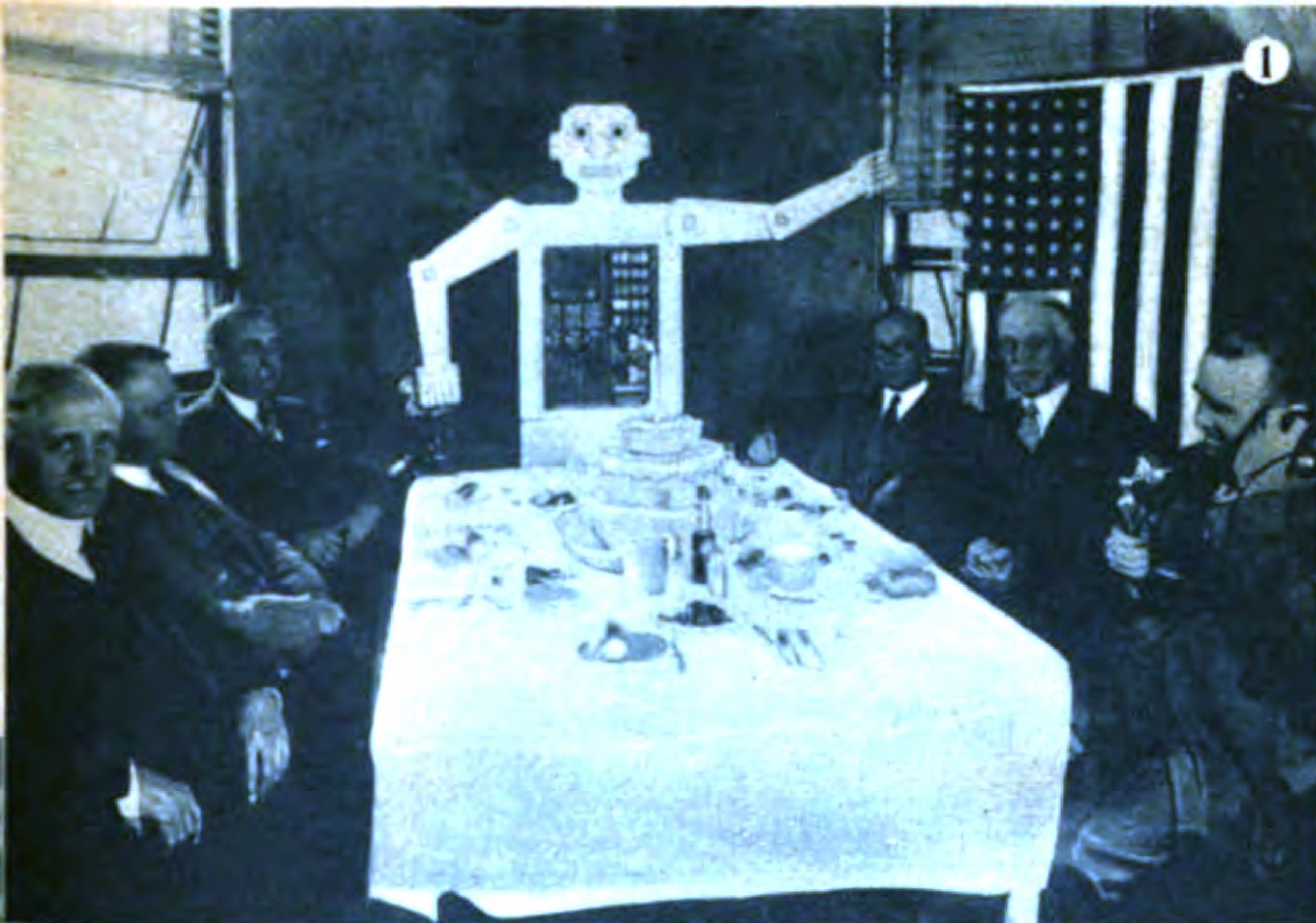
右十四大著發行所◇東京本郷　大日本雄辯會講談社　—（振替東京三九三〇）—

御申込次第圖書目錄進呈


OAKLAND
02221

最新科學大畫報

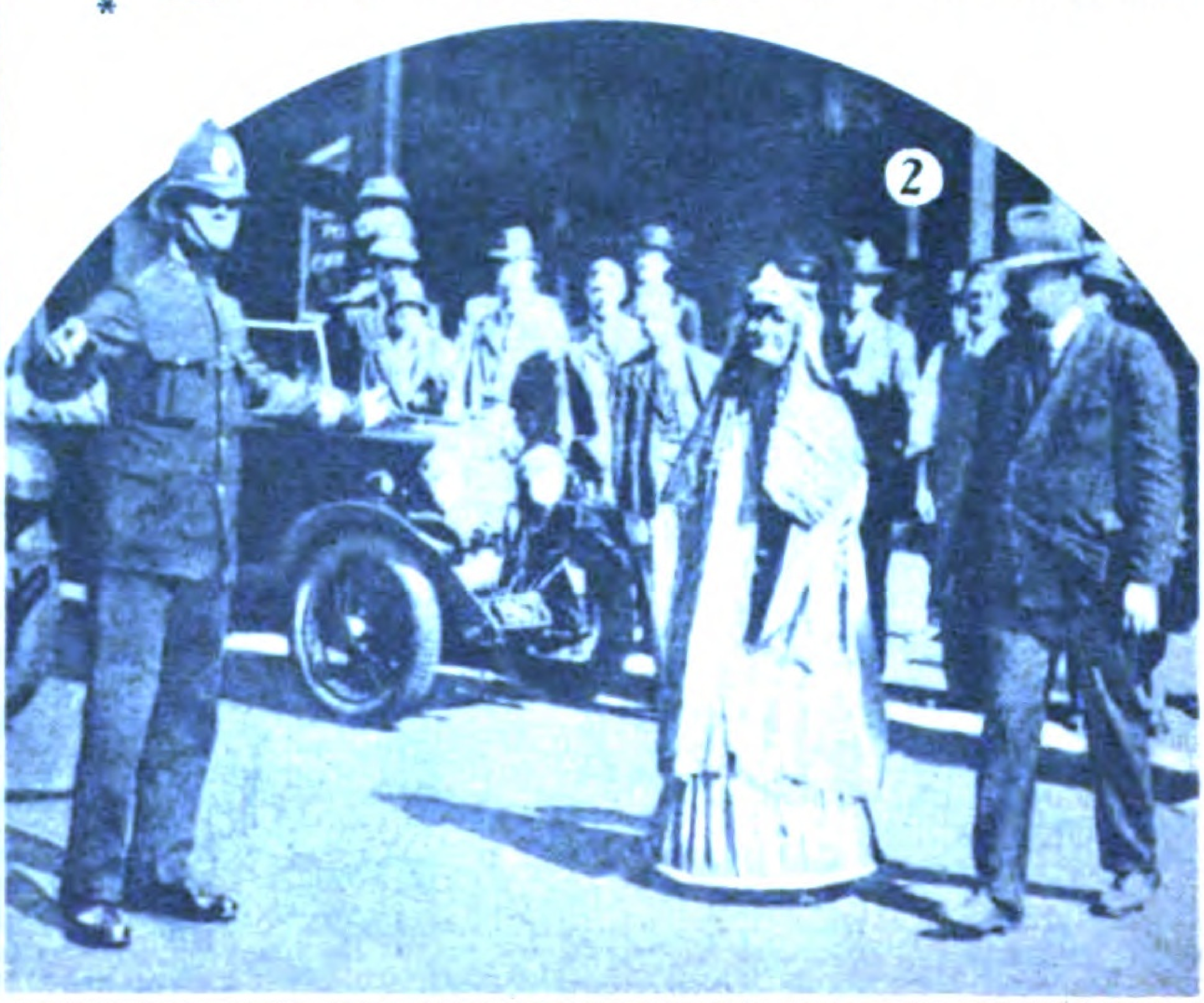




これは米國ウエスチングハウス電氣會社の＊
＊で電きづくめの人形である。



此のところは世界の人氣を一人で背負つて立つてるやうなテレボックス君（人造人間）です。堂々と道も歩けば本物の人間と一緒にカルタも遊ぶ。『おかけなさい』と云へばハイと云つて椅子にかけるし、電話で呼べば返事もする。イヤそればかりでない。日曜日には教會に行つて天國地獄のありがたい說教も聽きて交通整理もするし、おのぞみとあれば銳利な剃刀でお客さんの鬚まで剃つて進ぜる。イヤハヤ何から何ま＊



技師が發明したもので、豫め三本の小笛を吹くと、その高、中、低の音波がテレボックス君の體内の機械に作用し、ザッと百通りの命令を聽き分けて働く。こんな重寶なテレボックス君に横行されては本物の人間様でもウッカリ怠けてゐるとドシドシ失業する事請合だ。御用心々々。

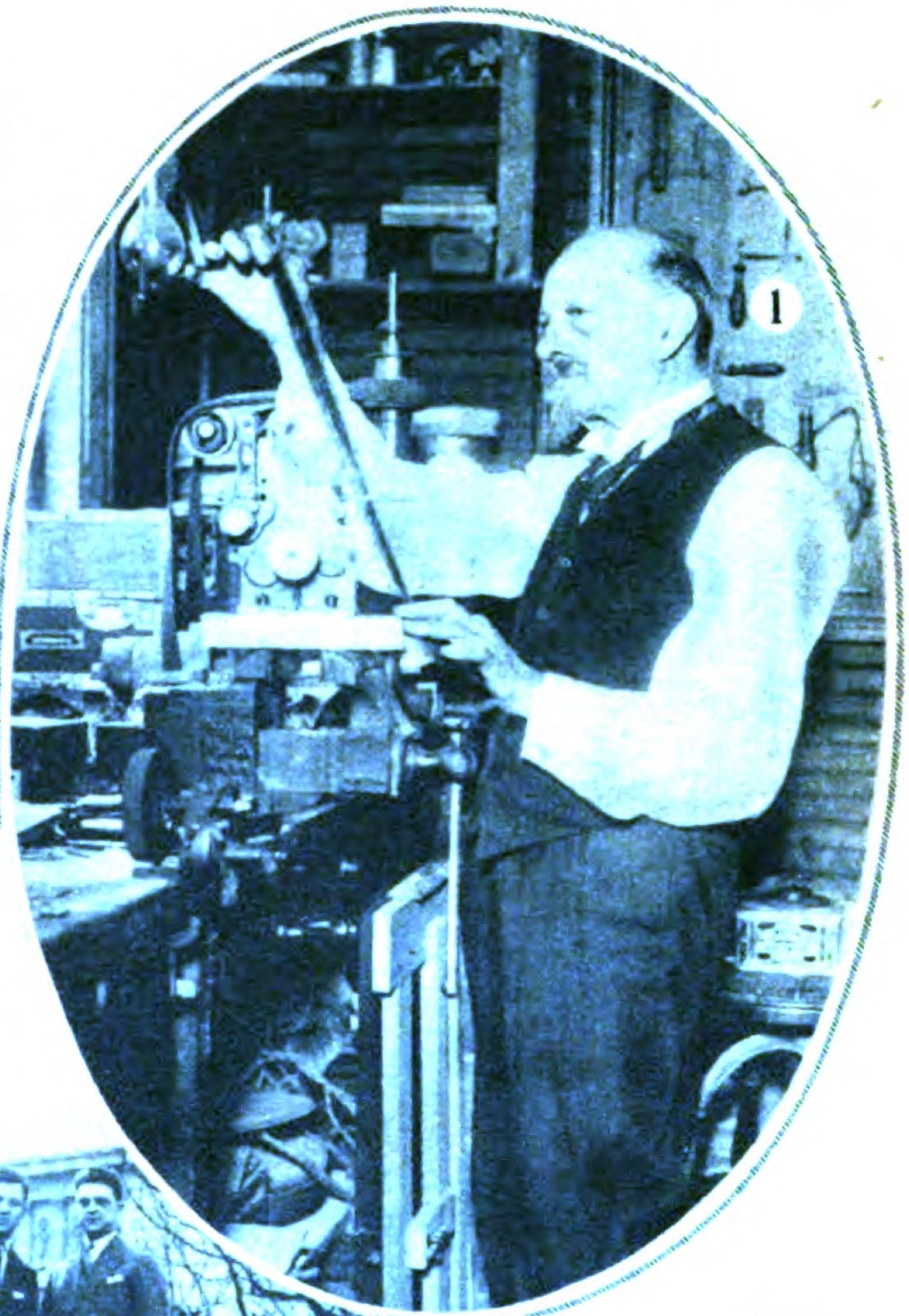
寫眞(1)は人造人間が得意のテーブルスピーチをやつてる處。(2)人並に道を歩いてる處。(3)理髪師になりすました(中央の婆さん)場面。(4)貴婦人とカルタ遊びに夢中の處。



③



④



(2)物を云ふ映畫、即ち發聲映畫は既に日本にも輸入されて、我が映畫界に一革命を齎らそうとしてゐるが、目下本場の米國では正に發聲映畫時代を現出して大なるセンセイシヨンを喚び起してゐる。
此の寫眞は、フオックス社の發聲映畫撮影隊が其の新しい機械を活用中のところです。最新の機械を傍らにした技師や監督達の誇らしげな、そして又嬉しげな微笑を御覽下さい。



(1)科學の進歩は遂にフイルムと音響を聯合せしめて發聲映畫にまで成功した。寫眞中の人物は其の不思議な機械を發明した佛人エドワード・ロースト氏で、氏は一八八四年米國に移住して、エヂソン研究所に務め、其所に於て竟に發明を完成したのである。

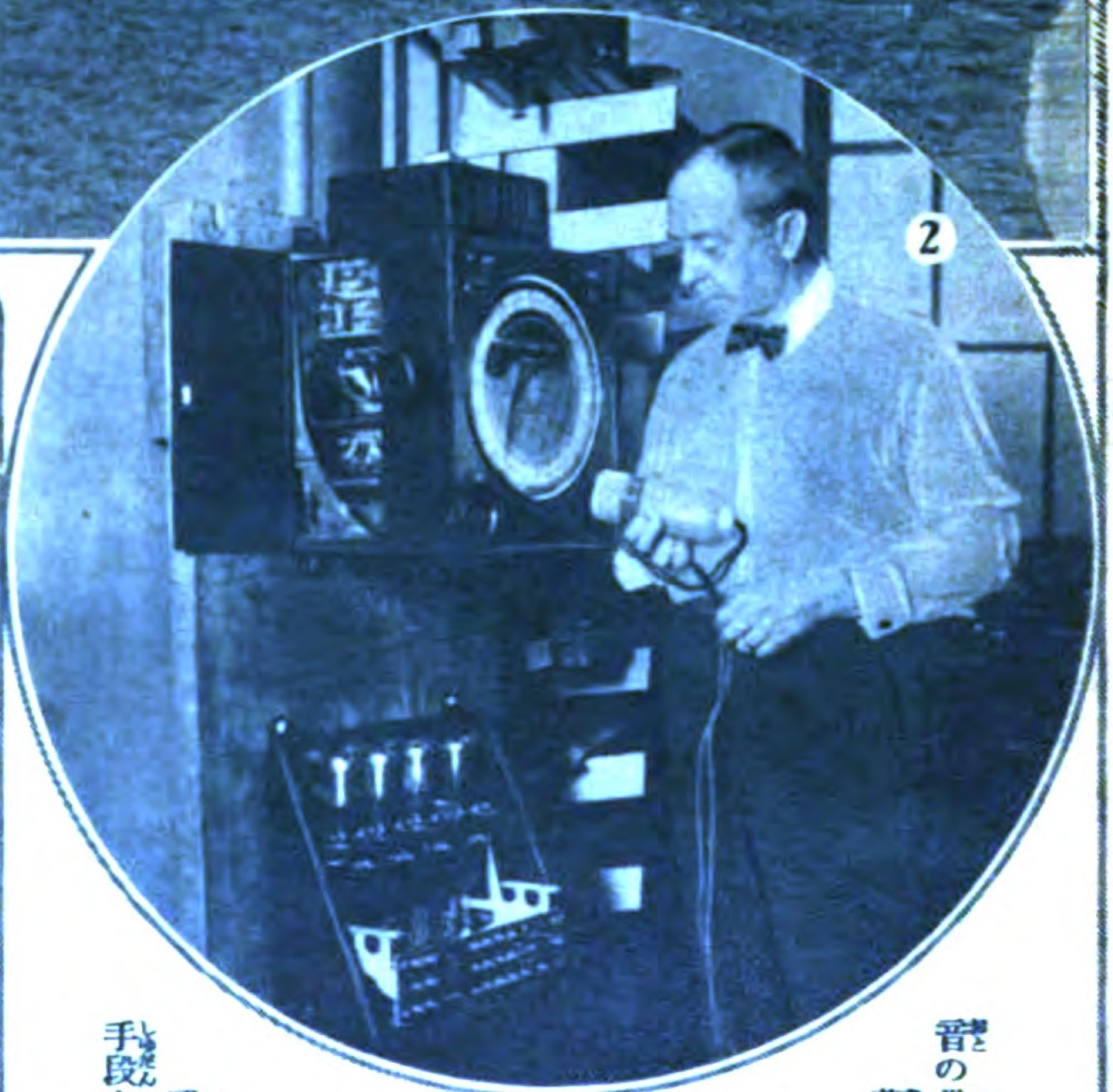


(3)ラヂオが左程珍らしくなくなつた今日、我々の興味を惹くものはテレビジョンであります。テレビジョンとは電氣仕掛で遠方を觀ると云ふ事で、即ち遠方の動作をそのまゝ、眼前に寫し出す仕掛けです。假へばラヂオ劇を聞く場合、又電話で談話を取り交す場合は直ちにラヂオ劇の模樣や又電話の相手方の動作を見る事が出來る譯です。此の寫眞は、テレビジョンドラマを正に放送中のところです。

(4)之は、米國天然色會社のオグラヂー氏の發明に成る彩色映畫の機械であります。發明の要點は普通のシヤツターの代りに、着色した一枚のゼラチン圓盤を使用することで、勿論、今までの天然色寫眞とは全然違つて居ります。然して此の機械は實用的な點に於て、近く現在の活動寫眞を天然色化せしめるであらうと云はれてゐます。



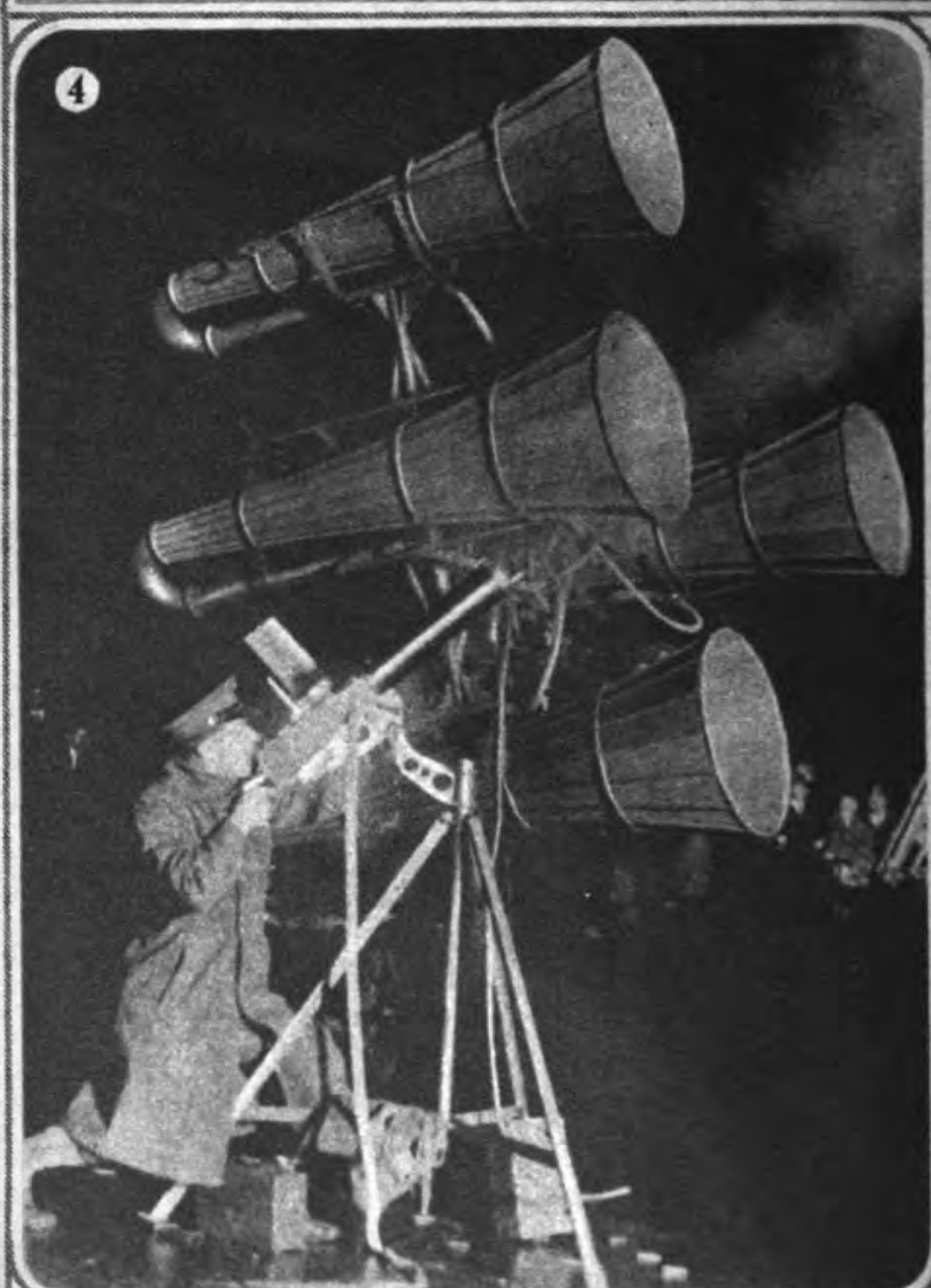






音の世界の樣々の發明。(1)野外に於て五萬人の聽衆に隅から隅迄演說を聽かせる素晴らしい大擴聲器。左方壇上の人の聲が中央の喇叭で擴大される。(2)米國ドルシー博士發明の便利な海底測定機。砲丸のやうなものを海中に投げ込み、それが底に達して音響を發すればスグサマ電氣仕掛けで機械に深さが現はれるといふ設備。(3)と(4)はいづれも軍事用聽音器で、これによつて敵の飛行機の襲來を感知し直ちに應戰の手段を講ずる事が出來る。







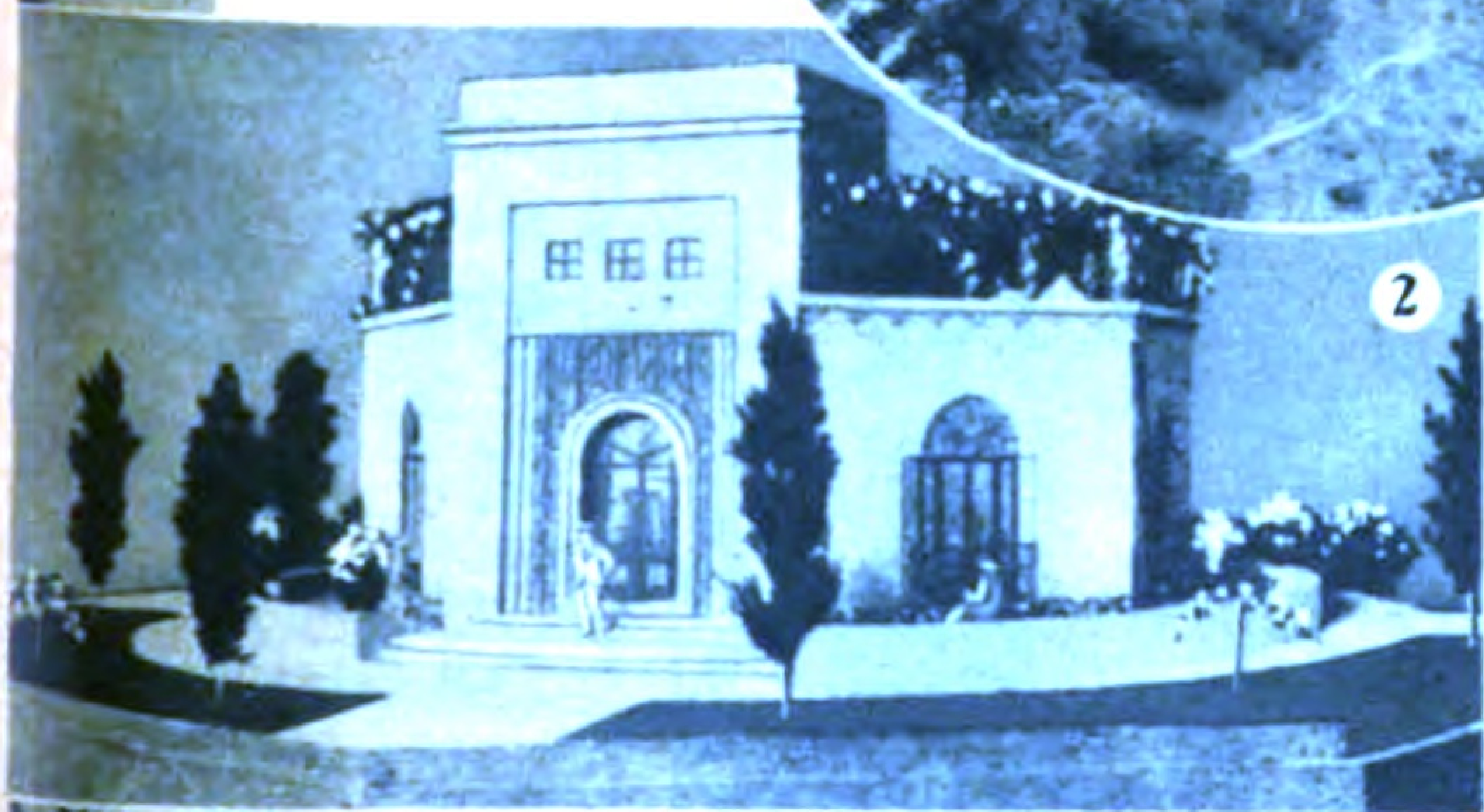


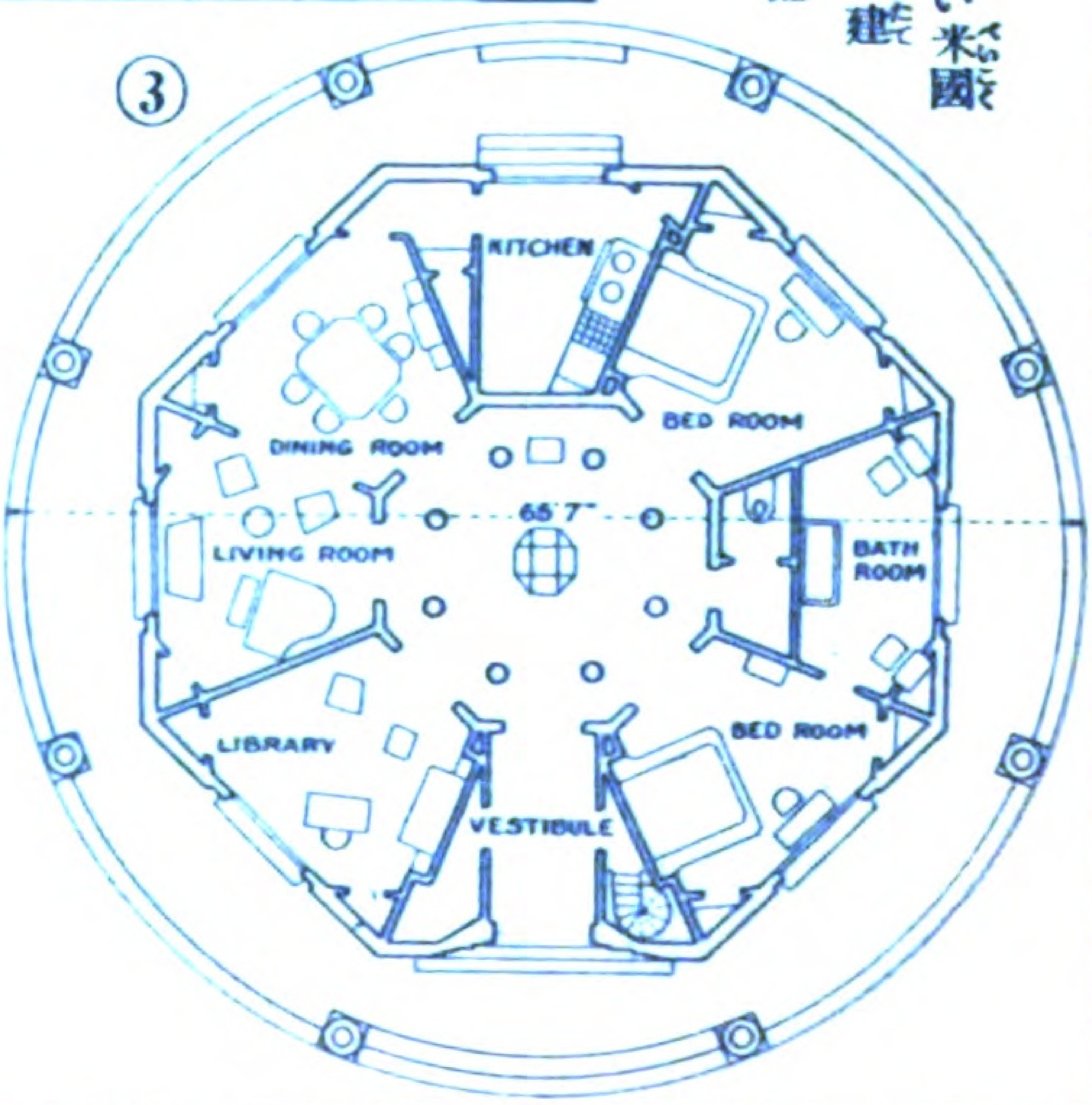


(4)最近大建築の發達と共に能率增進の驚くべき裝置が工夫された。それは書類でも、品物でも、或ひは金錢でも設けられた管に入れると思ふ處にスグ送る事の出來るアトラス空氣輸送裝置だ。恰度電話の交換の樣な工合にやるもので時間と人手が非常に省ける。



(1)白堊山色に映じて見るからに美しい米國ウイルソン山の天文臺。此の圓い建物は高さ百五十呎。此處の設備は世界一の稱がある。





日向葵の樣にグル〳〵太陽の方向に從つて廻るといふお誂へ向の理想的住宅が發明された。構造は八角形で中は浴室とも八室。一寸釦を押せば鐵筋コンクリートの建物が自由自在に廻るとはまるで探偵物の樣だ。(2)は外觀。(3)は平面圖。

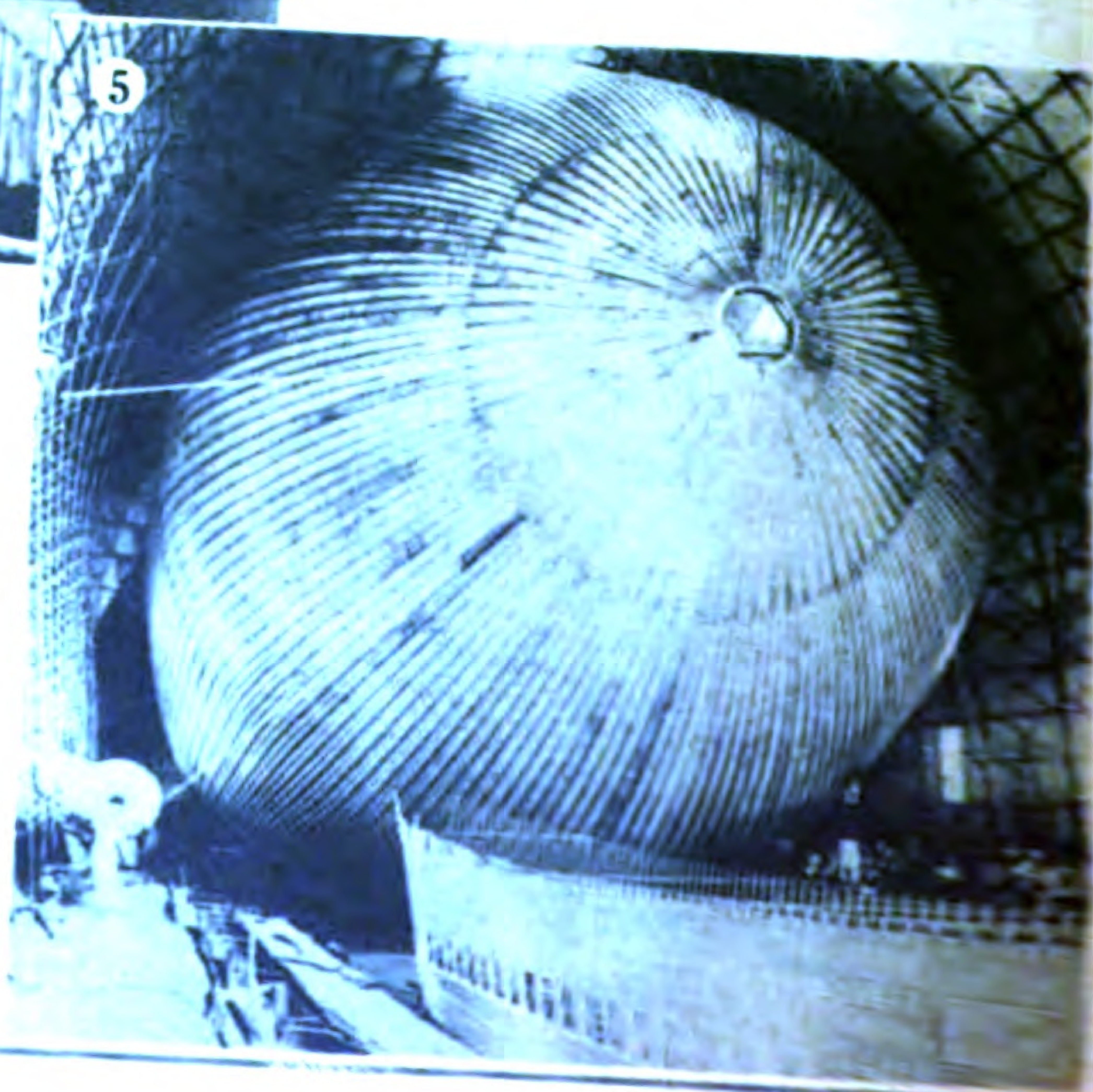


4



6

(6)全世界の石油と石炭が使ひ盡されたらどうなる？ 此の質問に答へて出來上つたのが寫眞に示す樣な風車式發電機だ。これは來るべき電氣の時代に火力や水力を尻目にかけ、風力でドン〳〵電氣を起すといふ新工夫。獨逸ドレスデン市に設置されたもので、車の直徑五十呎、風の力で三百アンペア＊の電氣を起し、ドレスデンの街々を毎晩明るくしてゐる。



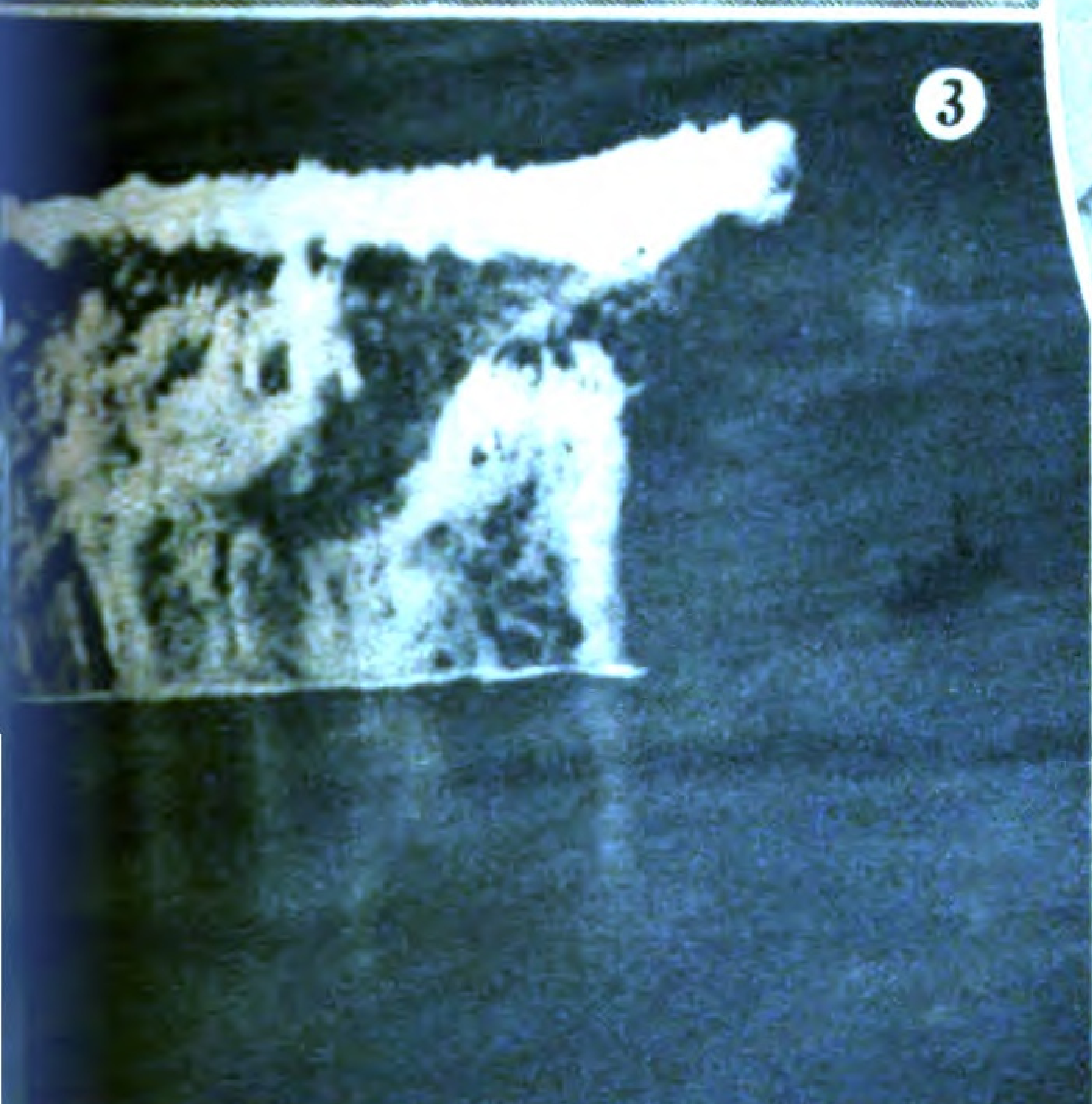
5

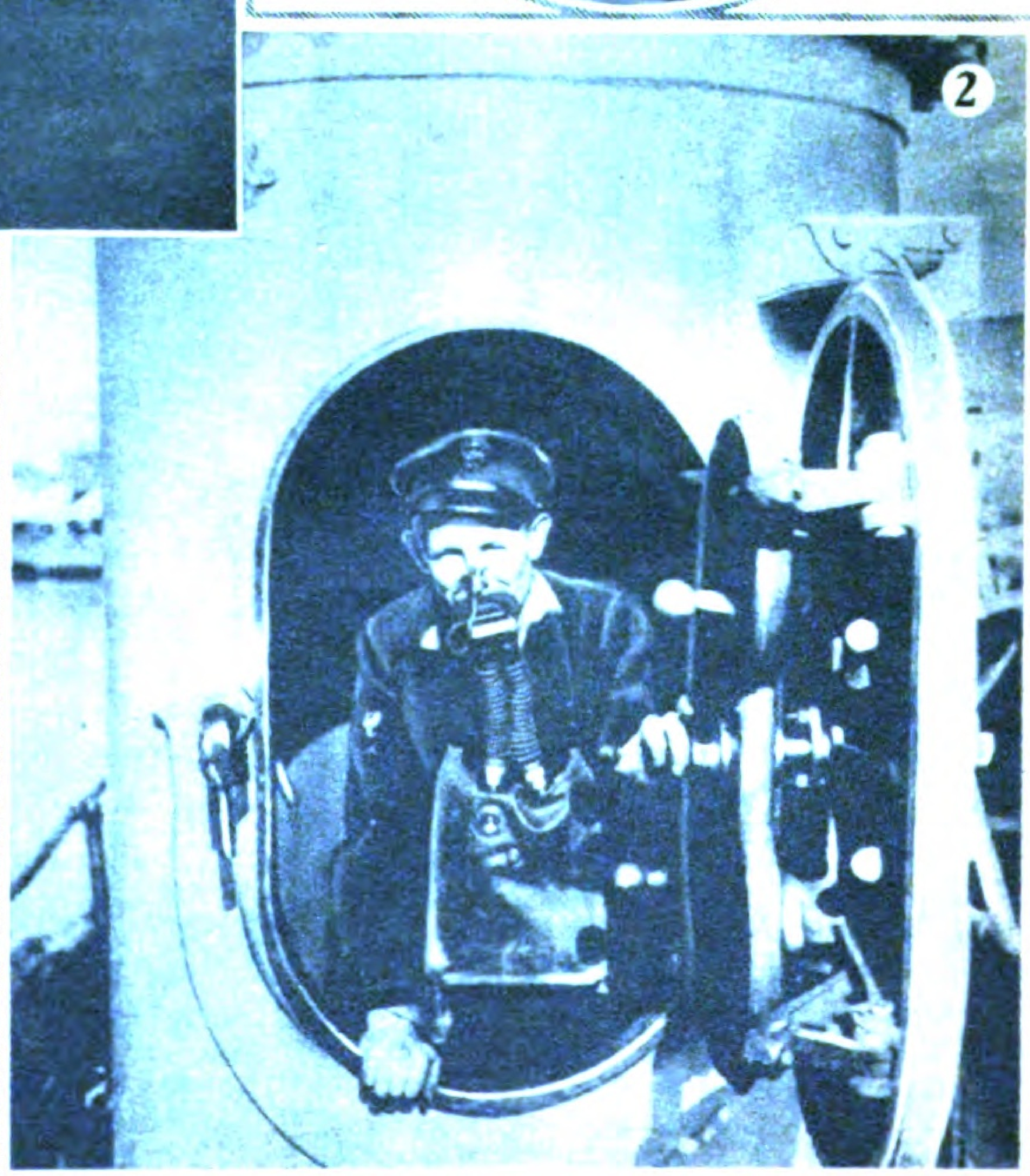
(5)世界に一つしかない米國の硬式飛行船。全部金屬で出來てゐて航空界に新紀元を劃すると云はれるもの。これは船首の部分に眞空が生じ、船體が引きつけられるやうな工合で進むのださうだ。





(1)突如として響く遭難信號SOS！　スハ難破船だと救助に向ふ際、いつも困るのはその位置である。處が先程キューバのアンドレス大尉は新式の遭難救助無電放送機を發明した。これは遭難位置の緯度と經度を機械に合せて捻ればSOSの信號と一緒に放送されるといふので非常の好評。





(2)これはお化け？　ではありません。米國モムゼン少佐の發明した斬新珍妙な救命器。潜航艇などが沈沒した際直ちにこれをつけて巧みに水面に浮び上るといふ寸法。先程百十呎の海底で實驗し、非常の好成績を博した。

(3)渺茫たる海原に雲でもなければ氷山でもない。此の不思議な正體は最近戰爭に應用されてゐる煙のカーテンだ。飛行機を飛ばして空中に此のカーテンを張り、味方の船をスッカリ隱して了ひ、その隙に





(4)卷煙草を五本立てたやうな此の船は、發動機も帆もなくて走るといふ不思議なローター船。少しの風にも五本の圓筒がグル〱廻り、内部の機關が動いて進むといふ仕組。目下獨逸で着々研究が進められてゐる。これが實現の曉には船舶界に大センセイションを起すにちがひない。

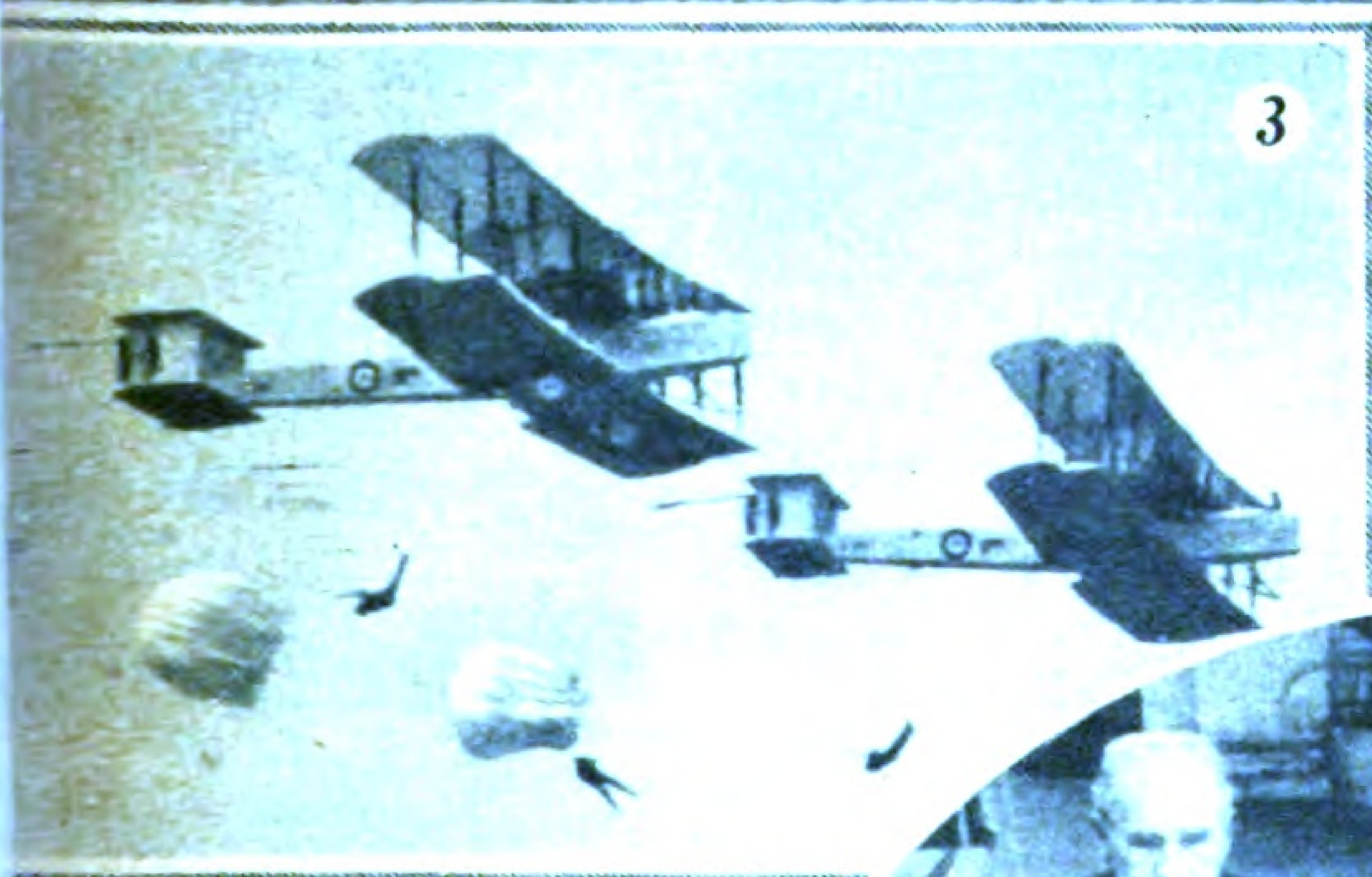


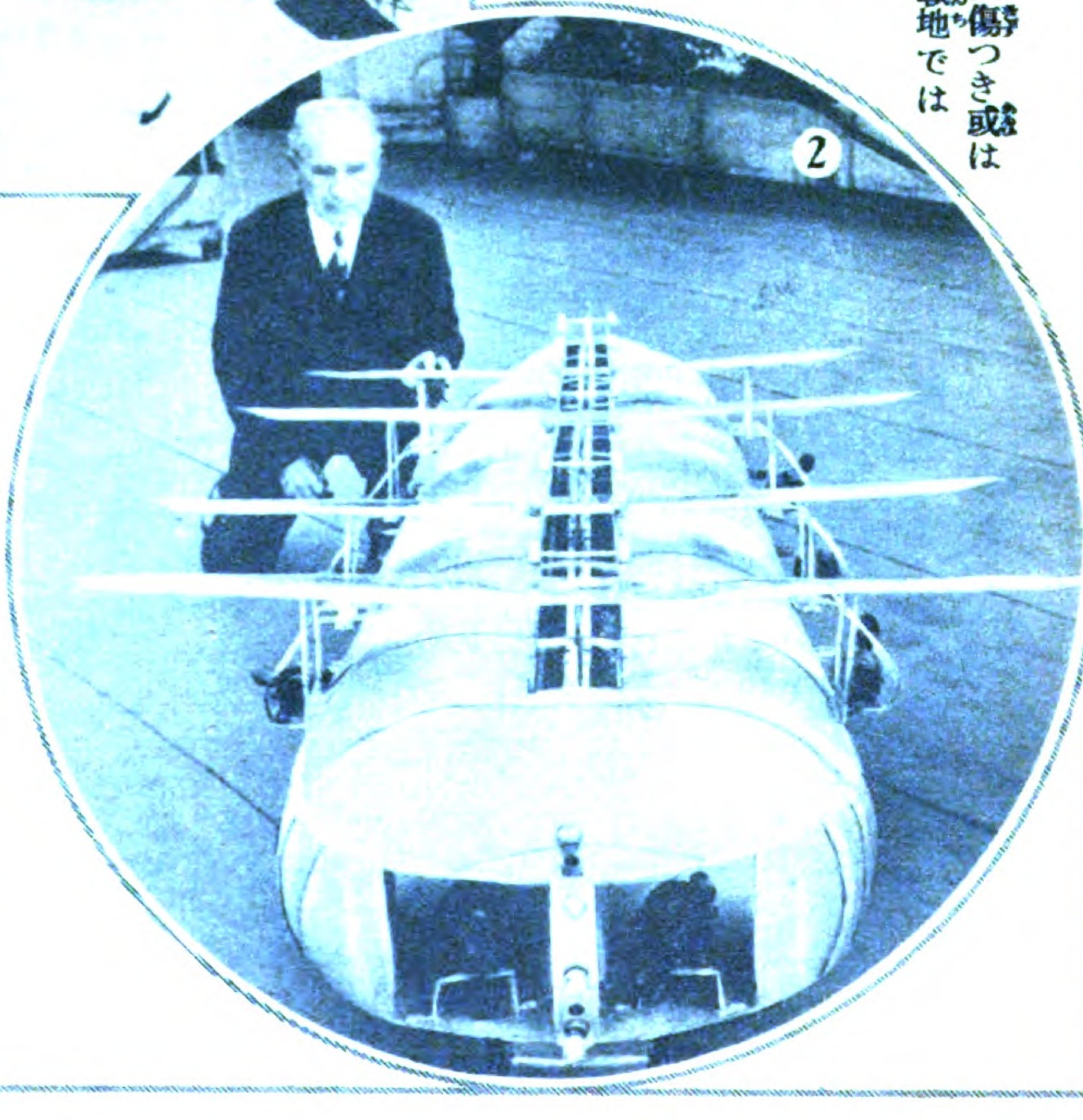
充分の作戰をなさしむるといふ至極大切な役目を演ずるものだ。

(5)これも沈沒した潜航艇乘組員の救助機だ。船が沈沒したら此の模型にある樣な左方の罐を水底におろし、舷側に豫め用意してある窓に接續させて乘組員をこれに移し水面に引揚げるのである。米國海軍省も大いにこの發明を有望視してゐる。



(1)敵彈と惡疫に、或は傷つき或は病む勇士達の爲に、戰地ではどんな療養施設が設けられてあるだらうか？　我が敏活なる移動病院では寫眞の如き、レントゲン施術の設備さへ整つてゐるのである。



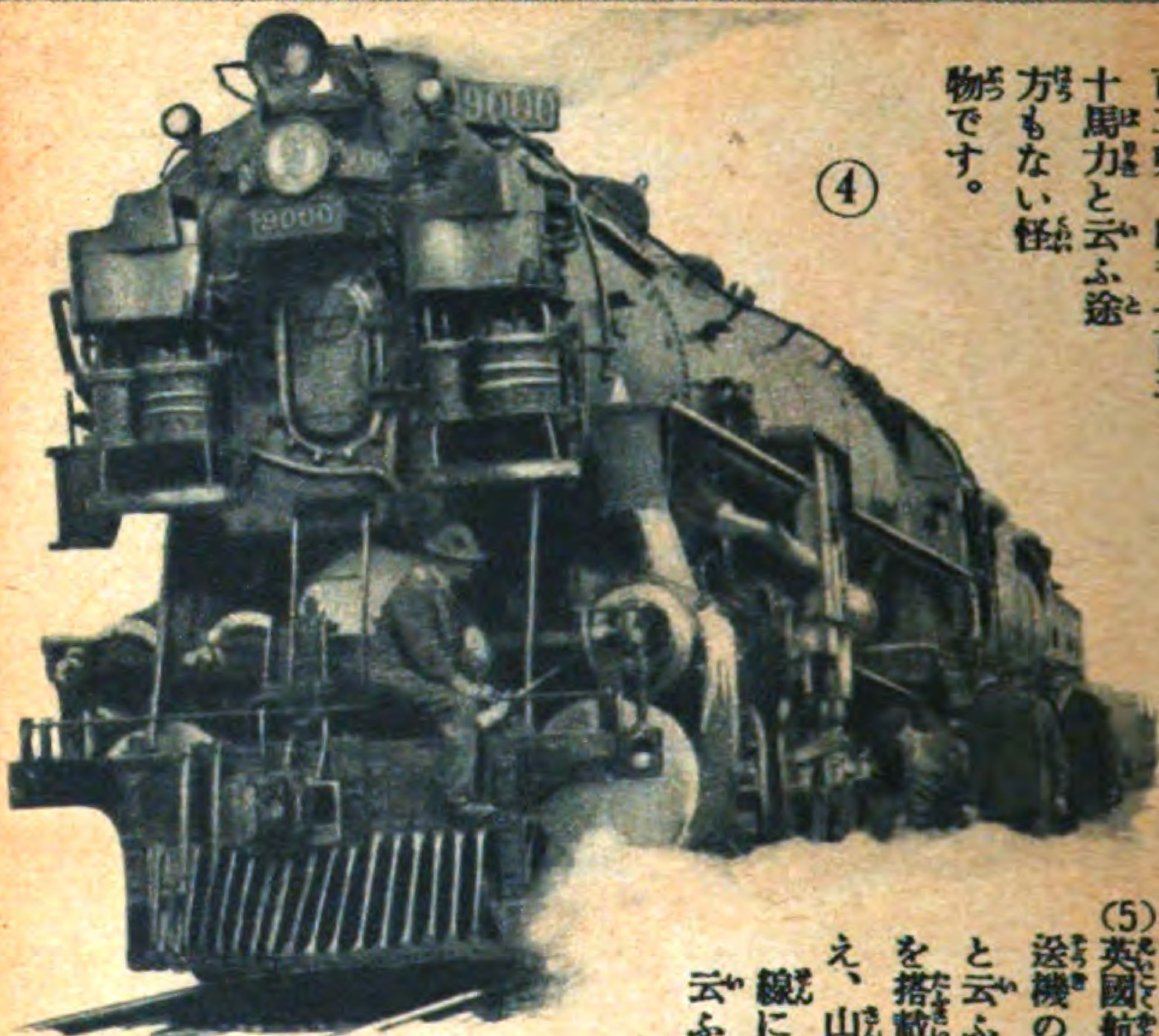


(2)空を征服せんとする人類の熱意は、種々なる航空機の發明を見つゝあります。寫眞は米國クロード氏の創案に成る最も進歩したる世界最大の航空機の模型です。本機は飛行機と飛行船の長所を巧みに結合したところが長所で、時速百二十五哩、旅客五百人を收容して、一萬哩を翔ぶと云ふ素晴らしいものであります。

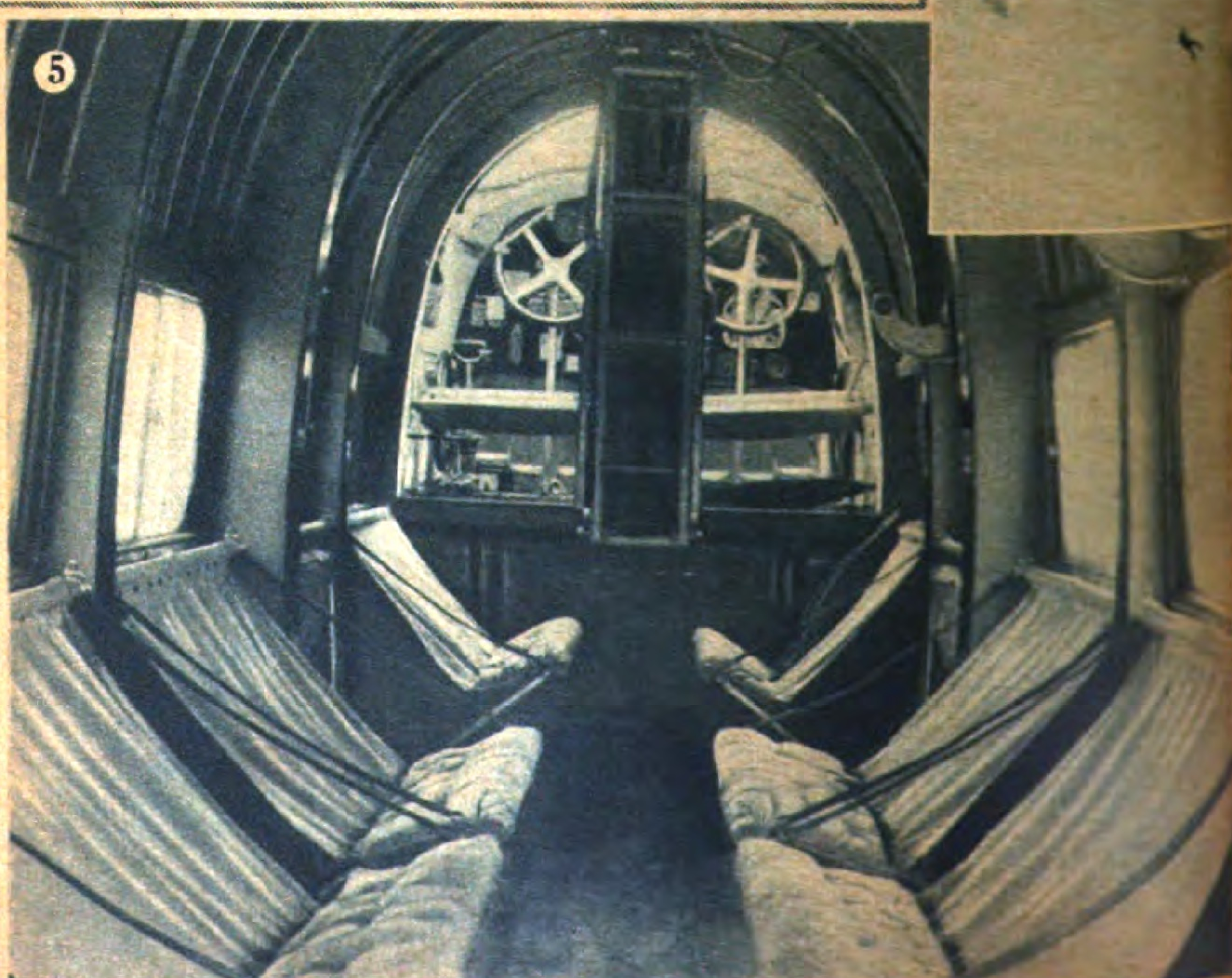
(3)飛行中の英國飛行機が故障に際し、墜落か爆破かと云ふ危險の時に落下傘は救命器として利用されます。之は英國航空部員が縦横自在なる落下傘活用中の壯觀。

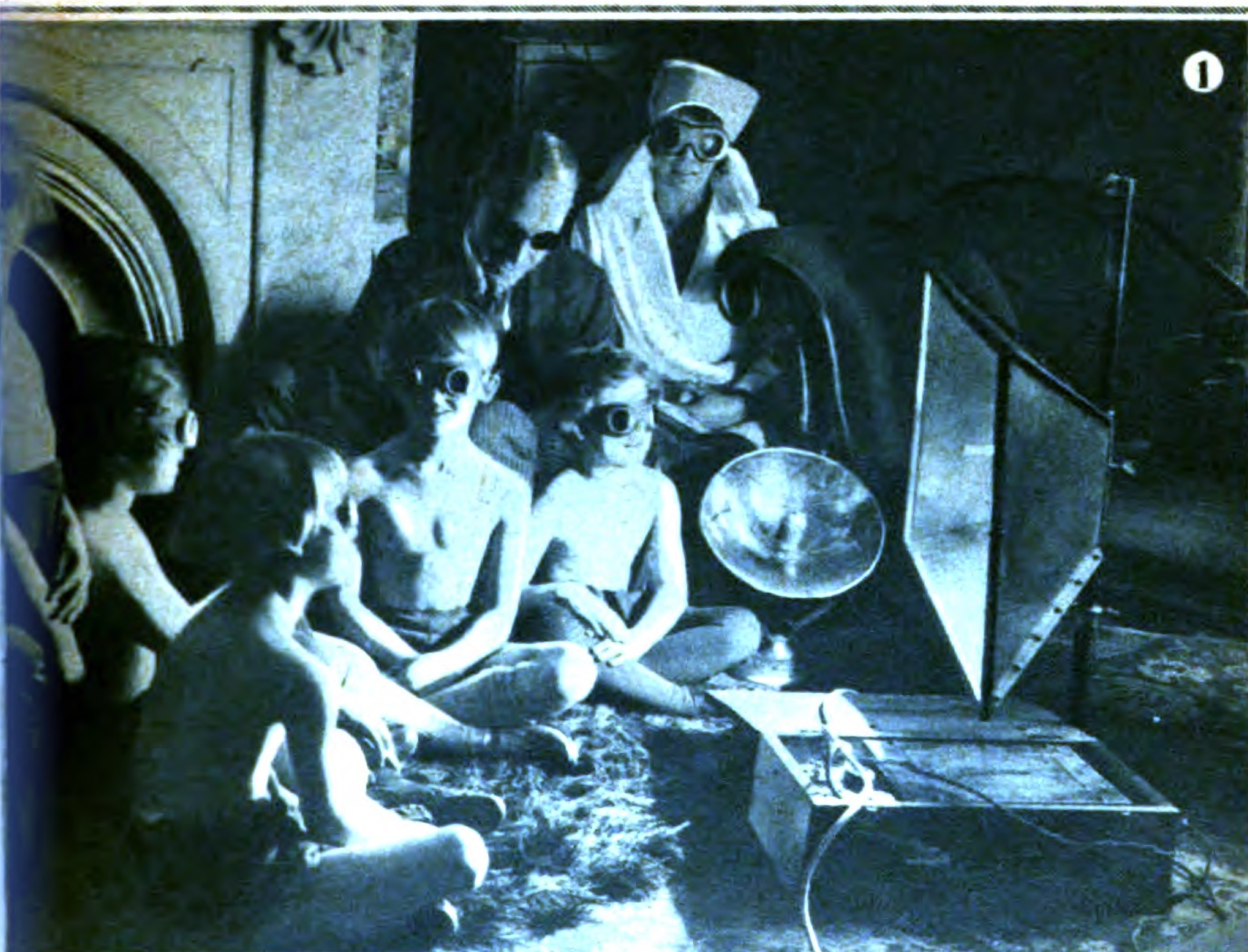


(4)米國の曠原を走る世界最大の機關車、總量八十萬七千ポンド、全長百二呎、四千七百五十馬力と云ふ途方もない怪物です。

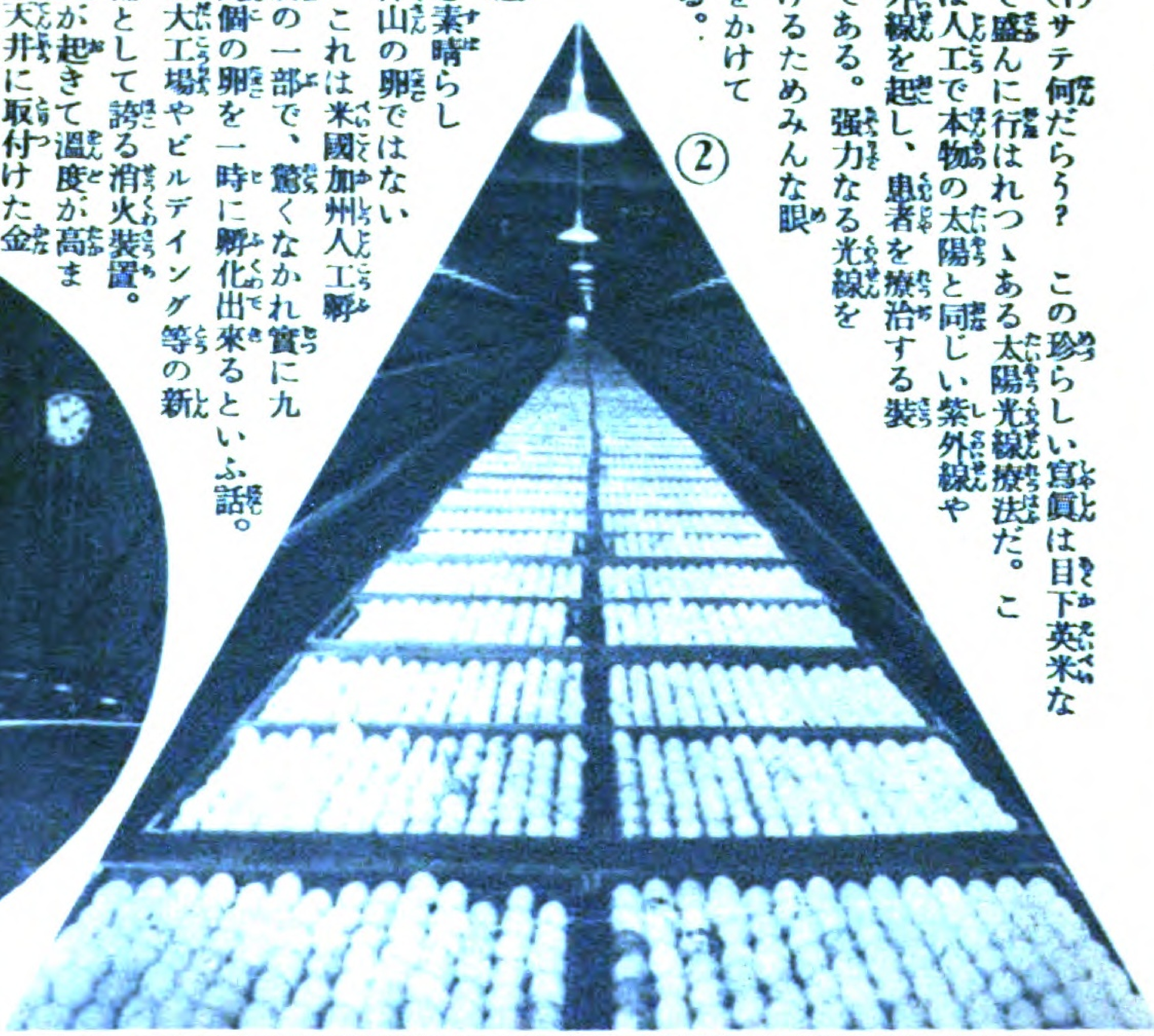


(5)英國航空隊の軍隊輸送機の内部。素破！と云ふ時には、軍隊を搭載して海を越え、山脈を越えて前線に急行しようと云ふのであります。





(1)サテ何だらう？　この珍らしい寫眞は目下英米などで盛んに行はれつゝある太陽光線療法だ。これは人工で本物の太陽と同じい紫外線や赤外線を起し、患者を療治する装置である。強力なる光線を避けるためみんな眼鏡をかけてゐる。



(2)何と素晴らしい澤山の卵ではないか。これは米國加州人工孵卵所の一部で、驚くなかれ實に九十萬個の卵を一時に孵化出來るといふ話。



(3)大工場やビルデイング等の新設備として誇る消火装置。火災が起きて溫度が高まると天井に取付けた金具が自然溶解し、一度にドット中から水が出て消すといふ仕掛けである。

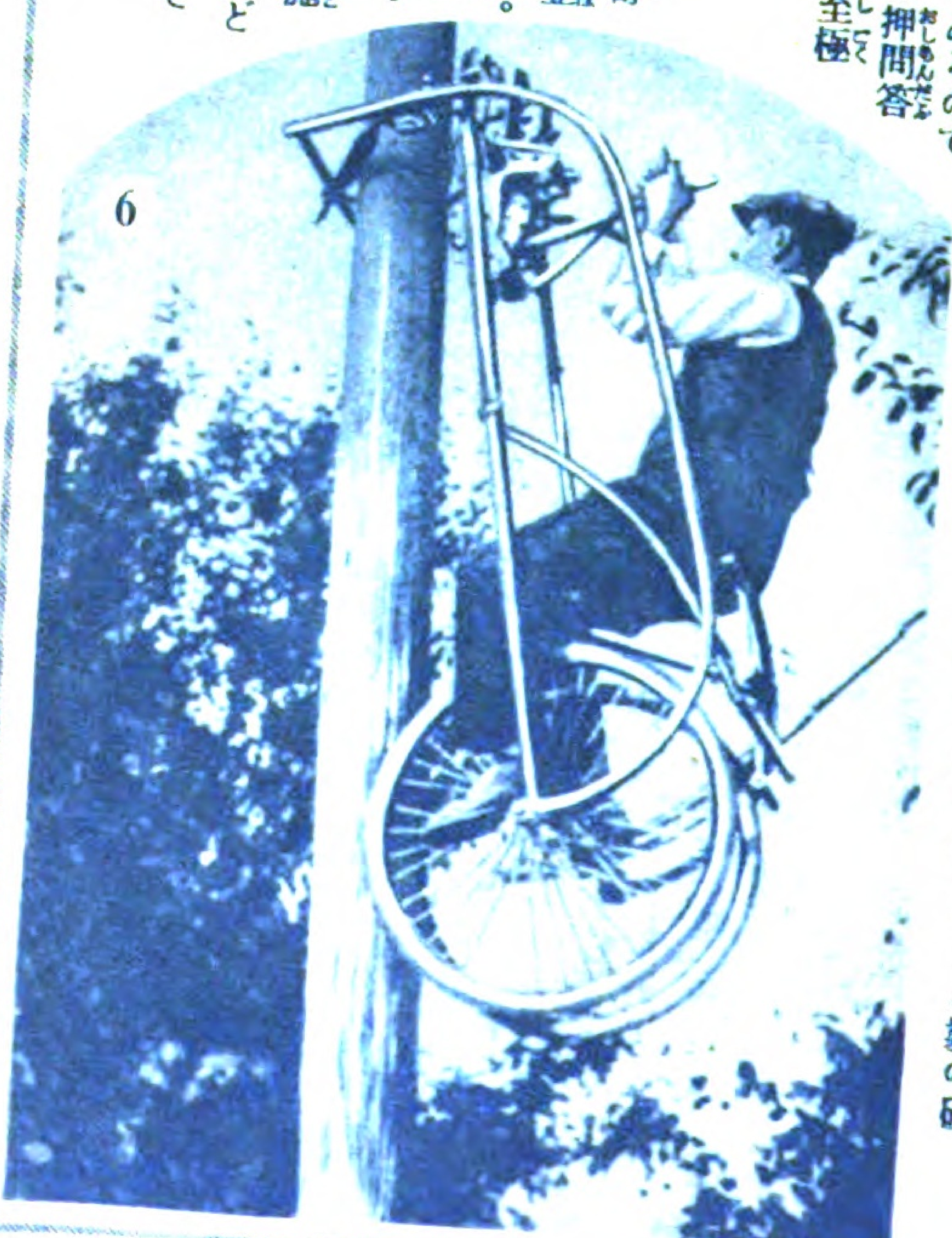




(4)スパリ〳〵、煙草を吸つてゐるといつた丈けでは何の變哲もないが、これは肩のつけ根から手のない人だ。巧みな義手の發達はありがたいもので本當の手と少しも變りがない程よく動く。

(5)倫敦で評判の電話時計。電話機のところに通話時間三分を知らせるガラス製の砂時計がついてゐるので交換手との押問答もいらず至極便利。

(6)ヤア奇拔!木登り自轉車だ。これは普通の自轉車に一寸した加工を施した丈けで立派にどんな木にでも登つてゆくとは奇妙。









(上)壯觀！　又壯觀！　これは英國陸軍、榴霰彈が爆裂の一刹那。これは液體空氣を利用して實戰の際放光の目的で撃つものである。(下)將來の戰爭は益々科學的になつて行く。敵の毒瓦斯を中和するため盛んに漂白粉を撒いてゐる消毒隊の活動振り。



七月 —朝顔—

金島桂華畫
佐佐木茂索題

風の日に帽子を吹き飛ばされた肥つた男が、よちよち帽子を追つかけてゐる圖は滑稽だが、なに、運動してゐるのだと見れば見られる、とはチエスタアトンの言葉だ。

ものは見やうであり、ものは云ひやうである。白居易が『松樹千年終是朽』と云ふも見様なら『槿花一日自爲榮』と云ふも云ひ様である。芭蕉に『朝顔や是もまた我が友ならず』と道學染みた句があるが、悟れば『蕣や晝は鎖おろす門の垣』である。『藝道は究め難く人生は短し』も眞の歎聲なら、朝に道を聞いて夕に死するも亦可である。天受萬差あり彭殤齊しからざるも、盡すべきに盡せば、それで安んじていいのであらう。



明治天皇御尊像

明治天皇の御尊像

伯爵　田中光顯

一

明治天皇が寳算六十一歳をもつて御登遐遊ばされた明治四十五年七月三十日の夜であつた。御葬儀について御協議申上る爲、山縣有朋、井上馨、大山巖、徳大寺實則、松方正義、西園寺公望、土方久元、渡邊千秋等諸元老と私と、都合九人の者

英傑民謠

霜田史光

西郷と月照

一杯飲んでは
君のため
二杯飲んでは
國のため
野山千里の
日の本に
身の置き所
ないおい等
なア西郷どん
月照どん

[illegible]

その際、合議が總つた後、私から申し出たことがある。
『是非この際、諸君の御同意を得たいことがある、それは外でもない、先帝に於かせられては、平生御寫眞が御嫌ひであつた爲、近來絶えて御撮影を遊ばされて居らない、併し今後、先帝の御盛徳を御追慕申上げる爲に御銅像を謹製するとか、乃至は御肖像を謹寫するとか云ふものが出てくるであらうが、その時據るべきものがなくては、まことに、難澁をする、ついては皇太后陛下に御願申上げて、御船入の前に御尊顔を御寫眞に撮つて置きたいと思ふが……』
から發議したが、並み居る諸公は、好いとも惡いとも、何とも云はなかつた。で、此の話は其儘、立消えになつて了つた。
すると、壹月程經つて、岡崎雪聲がたづねて來た。
『自分は明治天皇の御銅像を謹製いたしたいと思つてゐるが、何か據るべき材料はなからうか』
相談をうけたが、素より何もない。私も當惑して、とも角主馬頭藤波言忠子に打開けて見ることにした。子は私に同意であつた。
『實は、自分も、先帝崩御の際、御寫眞を撮りたいと思うて、皇太后陛下に御願しました、處が差し支はないが、一應香川に話すやうにといふ仰せでありました、香川大夫に此旨を傳へると、非常な反對で、怪しからぬことである、先帝が御嫌であつたのに、崩御の後に御寫眞を撮るなどとは以ての外であると刎ねつけられました、其の次第は、皇太后さまにも申上げましたが、實に殘念であるといふ仰せであります、それで自分はせめて玉體の御寸法だけでもとつておきたいと、かう思つ

月の冴え
生きねば
ならぬ
世の中に
死なねば
ならぬ
情なさ
なア西
郷どん
月照どん

飲めども醉める
酒ながら
殘りばかりに
ある命
やがておい等の
薩摩潟



て、皇太后樣の御許を頂いて、御船入の前に、御丈、御胴のまはり、御肩の幅、その他の御寸法はとつてあります』

事情を話してくれた。

『それは、結構であつた、然らばその御寸法がきを拜借したい』

藤波子からこれを受取つて、岡崎の婿渡邊長男氏に御等身大の御塑像を謹製せしめたが、一向御姿に似て居らない。よつて、藤波子を始め、東園、日野西兩侍從や、米田主獵頭などの意見に徴して、御改作申上げた上、柳原、姉小路、園、高倉などの女官にも見せて、修正を加へた。

『もうこれなら申分はない、先帝の御姿其儘である』

そこ迄行つたので、改めて原型を皇太后陛下の御覽に備へた。

『まことによく出來た、たゞ左の御眼の傍に小さい御黑子があつたが、それを添へるやうにするがよい、且出來ることなら、少し御嚴つく見えるので、もう少し御柔か味をつけたら何うであらうか』

かういふ御言葉を賜つた。そこで仰せの如くに御修正申しあげて、やうやく鑄型に入れることになつた。

そして完成の上は、皇太后陛下に御獻上申す私の考へだつたが、陛下は、御鑄像の御出來する前に、崩御遊ばされた。實に私としては、これほど遺憾なことはなかつた。

二

そこで出來上つた御肖像の御寫眞を撮つて、山縣元帥に見せると、元帥も殊の外

せめて明るく
照らさうよ
なア西郷どん
月照どん

大石良雄

山科の
浮さんは
昨日も今日も
「一力」通
ひ——
女子の色香
酒の味
敵討なぞ
野暮なこと
あ、うーいうい……





常陽明治記念館寶物館

の愉快だつた。
『御尊像を拜すると、宛ら御前に出たやうな氣持になる、これは今上陛下に獻上なされた方がよい』さういふ意見であつた。よつて私は、當時の宮相波多野敬直子に會つて、此旨を傳へた。
『只、此の御尊像は、宮中の御奥ふかく秘め置かれるばかりでは、自分の意を達しない、明治天皇は、御在世中、申すも恐多い事であるが、絶えず民安かれと思召されて居られたので、御尊像も衆庶が謹んで拜することの出來る場所に御奉安願ひたい』
から申添へた。宮相は、快く承諾されたので、大正四年十月三日、奉獻申上げ

盃の
酒までが
ひよいと見えたよ
血の色に――
歌へや踊れや
大石が
腰拔け武士と
見えるまで
あ、うーいうい……

桂小五郎

昨日は粹な
頬かむり
今日はお乞丐で
橋の下、
橋の上ゆく

た處、御聽許の恩命に接した。喜の餘、ものした偶詠二首。

神さりし大御姿をかしこくもをろがむいまは夢かうつゝか

千萬の後の世までもたゝふべし大御姿も大御勳も

ところが、其後、當局の都合で、御尊像は吹上御苑の奥ふかい處に奉安されたので、一般のものが拜觀することが出來なくなつた。私としても、殘念なことであつたが、計らずも、此度、水戶を去る遠からざる大洗に常陽明治記念館を建設して、御尊像を奉安することになつた。これは、曩に奉献した原型にもとづいて、新たに謹模し奉つたものである事は申す迄もない。

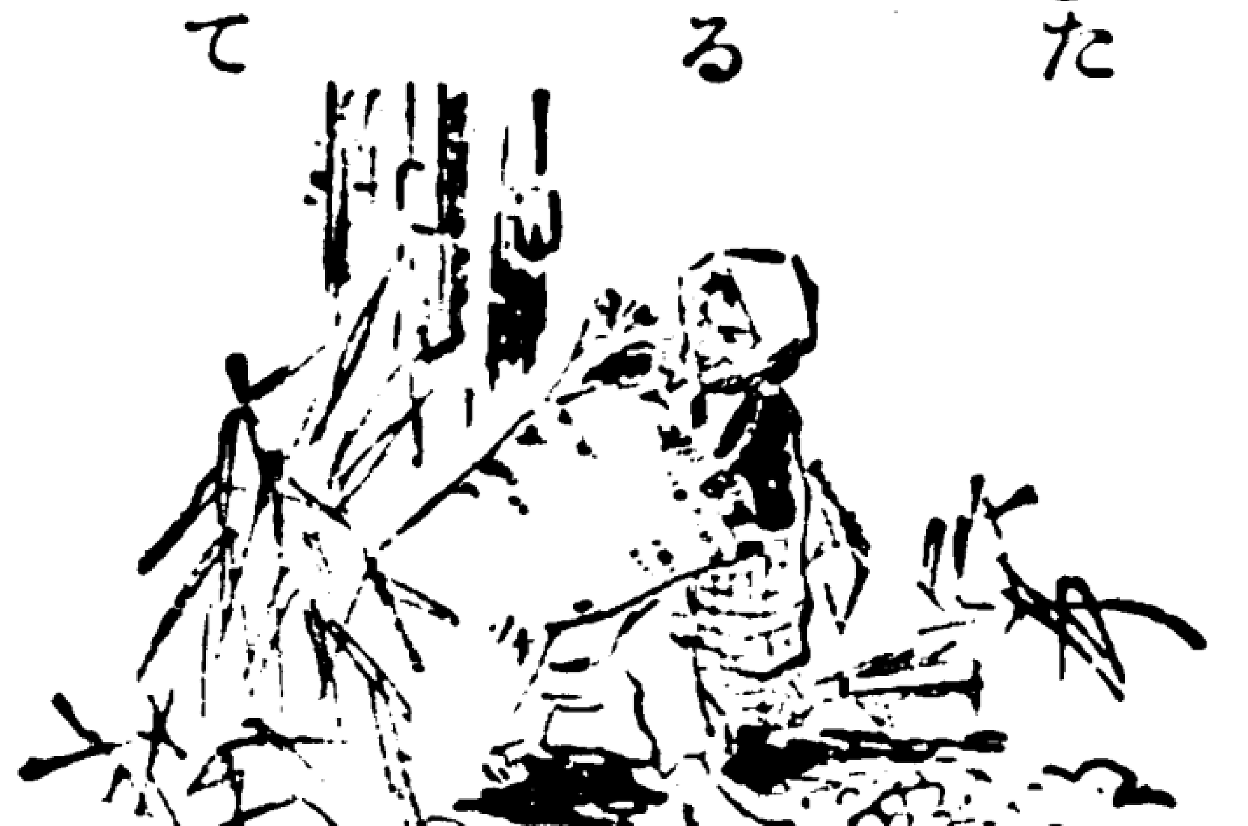
然るに、なぜ常陸に奉安したのかと云ふ質問をうけるが、それは理由がある。元來、水戶は、勤王の發祥地であつて、大日本史を修纂した義公に對し、明治二年特に從二位を贈らせ給ひ、更に又明治八年には、陛下は小梅の水戶邸に成らせられて、御宸筆の御製を賜はつた。

花ぐはし櫻もあれど此宿の代々の心をわれはとひけり

まことに恐多い極みで、臣下の私邸に親臨あらせられたのは、水戶家をもつて嚆矢とせられて居る。更に明治三十三年大演習の爲笠間に御駐輦の際は、正一位を追贈せられた。當時、私は宮內大臣として命を奉じ、これに副署したことは、一代の光榮であると感激措く能はざる處である。

かういふ關係があるので、蓋し御尊像を水戶に奉安することは、最も意義のあることである。且又、常陽明治記念館の敷地たる、一點の汚塵を見ざる淸淨の地域、松籟颯々、遙かに太平洋の濤聲を聞くのみである。私は、去る四月十四日、開館式にのぞんだのであるが、君ケ代の合唱と共に御尊像に向ひ奉つて幕を引きつ

とゞろ足
わしを追ふやら
捜すやら、
孤に隠した
名刀を
涙で撫でる
闇の世に
面桶抱いて
加茂川の
せゝらぐ音を
聽きながら——
思ひ出したよ
幾松が
意地と情の
三味の音を



て蒸された御事、金色燦たる御姿は忽ち會衆の目のあたりに現はれたやうだ。

私も、思はず、御在世當時の御姿を拜し奉つたやうに感じて、全身の引しまるのを覺えた。會衆は、眼に一ぱい涙をたゝへて、殆ど仰ぎ見るものがなかつた。大元帥の正裝を召されたる大帝は、御右手に御帽子をさげさせられ、御左手に御劍の欛を御把り遊ばされて、今、衆庶の前に御出現になつたのである。

『私の願ひ、やつとこれで屆いた』

かう考へると、感喜の情が、今更乍ら胸に溢れてくる。

千萬の民と共にもたのしむにます樂はあらじとぞ思ふ

明治天皇は、さう仰せられて居る。民と共にあらんといふ思召は、光顯在職當時から拜聽して居るので、ぜひ、御尊像も一般の人々に自由に拜し奉ることの出來るやうな場所をえらんでゐた。その日頃の念願が適つたので私の最後の御奉公が出來た次第である。

恐多い事ではあるが、聖天子の英靈も、此の小臣の微衷を御聽許下さることであらうかと、秘かに拜察して居る。

尚、私は、此の機會に明治天皇、昭憲皇太后兩陛下をはじめ奉り、各宮樣方から拜受した恩賜品の一切をあげて、此館に寄進したのである。此くの如き賜品は、徒に個人の私有に歸すべきものではなく、天下の至寶として、御保存申上げねばならぬ。かくすることは、御聖德と御恩澤とを後の世に御傳へ申すのに、最も望ましき方法である。

幸ひに、私の存意を諒とせられた諸君は、機あらば一度大洗の地を訪はれんことを望む。

高山彦九郎

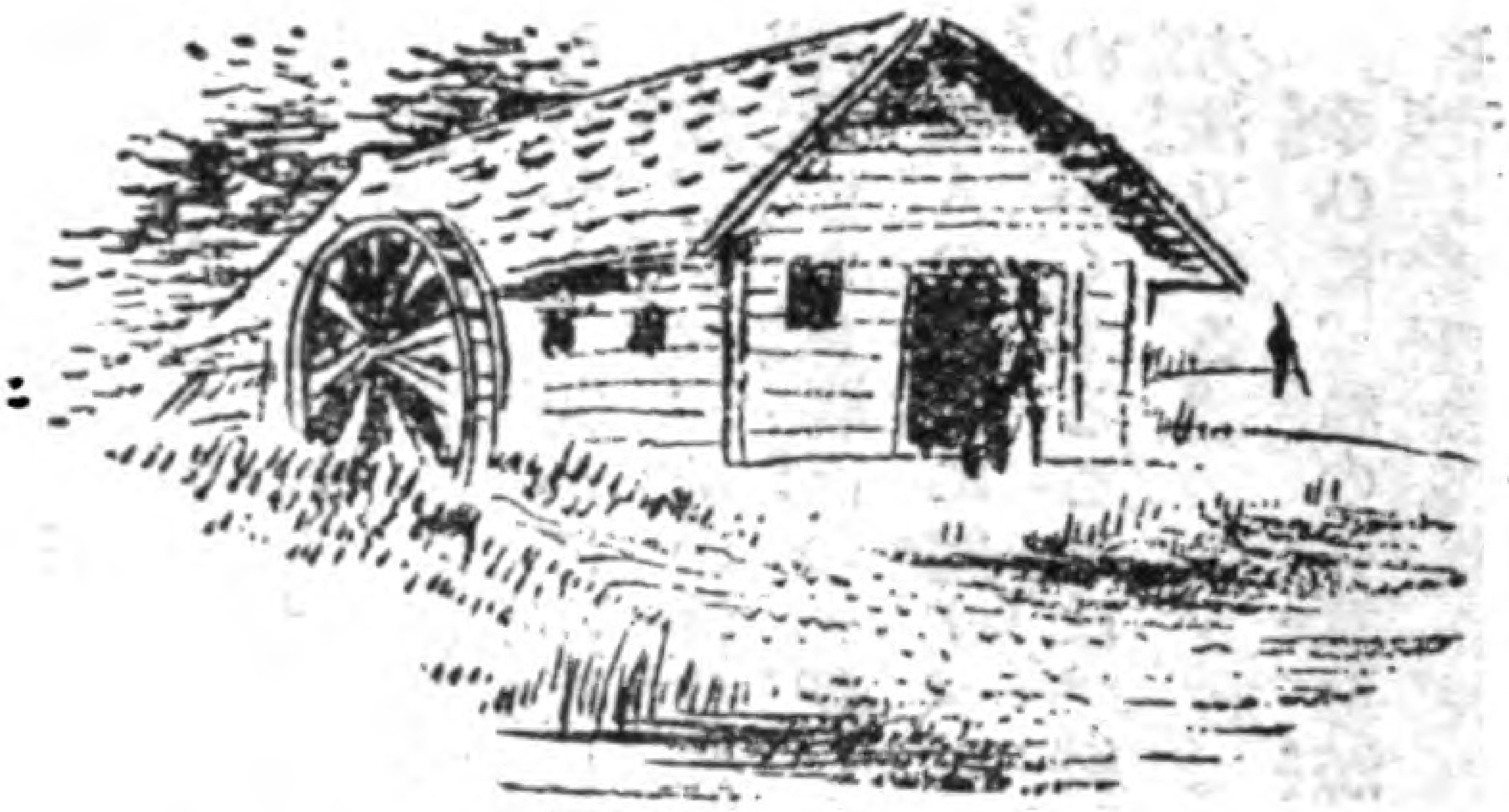
向ふ通るは
彦九ぢやないか
あれさ額に
泥つけて──
その泥どこから
つけて來た
京は三條の橋の上
皇居を拜んで
貰うて來た



世はまだ暗い
京わらべ
指し笑ふ人中を
鬼の彦九が兩頬に
涙ぽた〳〵拔けてゆく

自助自成の人

衆議院議員　松田源治

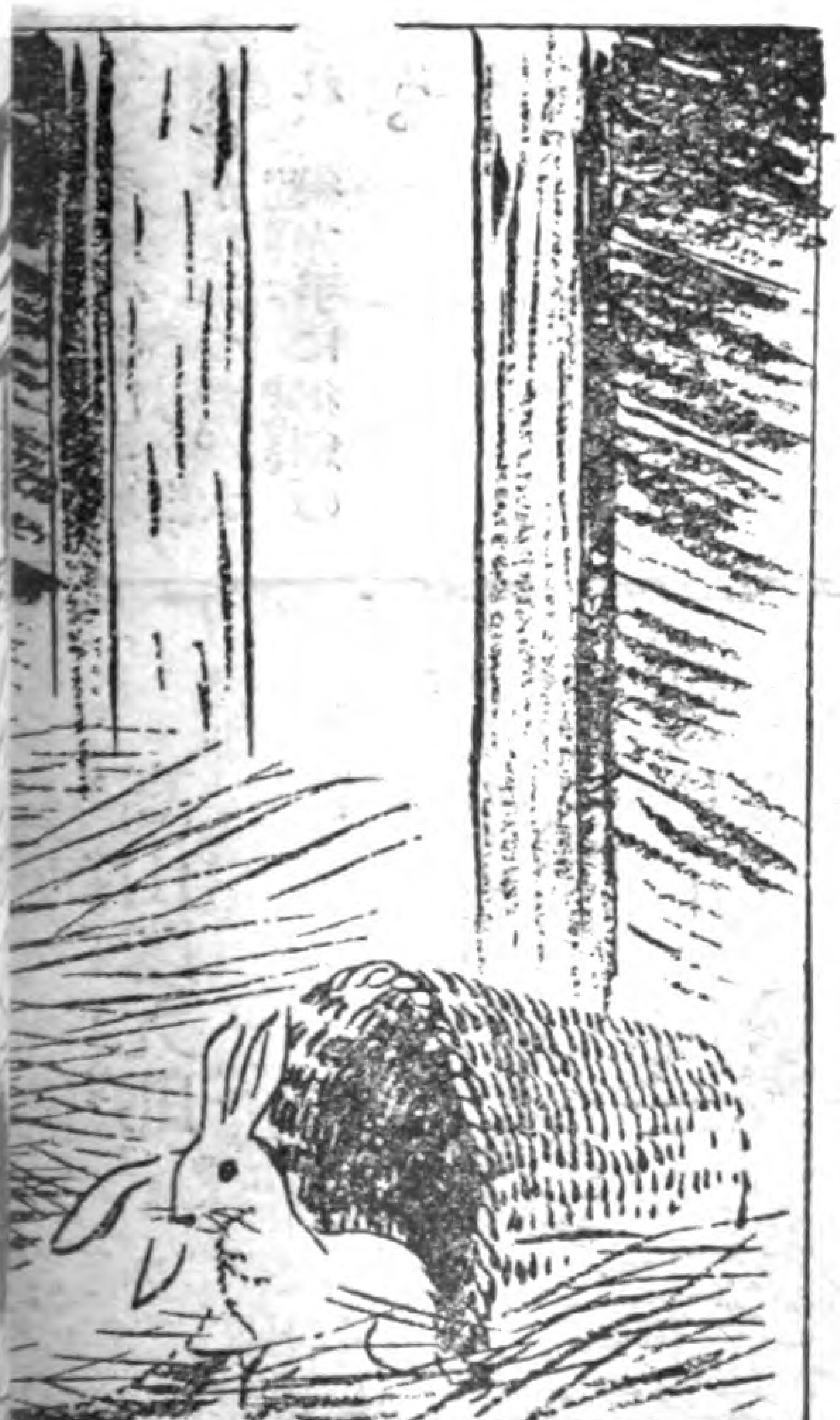


一

今日の靑少年は、學校中毒にかゝつて居る。中學校へ入りたい、專門學校へ進みたい、大學に學びたい、しかし自分の家は貧しいので、學資が續かぬ、殘念だが落伍者とならねばならぬ、さういふ風に考へて、自己の境遇を悲觀して居るものが多い。

一體、學校教育は、それほど有難いものであるか。横井小楠が、曾て、松平春嶽の爲に起草した『學校問答』の中に、かういふ事をいつて居る。

『和漢古今を問はず、明君が世に出ると、屹度先づ學校を起します、然るにその實際の成績を見まするのに、學校から拔群の人物を輩出した例を聞かない、又學校の力によつて、教化行はれ風俗敦くなつたといふやうなことは尙更御座りませぬ、早い話、これを支那について見るならば、聖人君子といはれた人々は、大學生の中からは出て居りませぬ、唐の大宗は大學を興して、八千の學生を集めたが、此の中からは、一人の英傑も出て居りませぬ、徒らに文運隆盛といふやうな虛名を博したさに過ぎませぬ、退いて今これを我國の實際について見ますと、各藩ともみな學校を設けて、なか〳〵旺んなことであるが、一向人材を出して居りませぬ』



言、奇矯の如くして、實は玩味すると甚だ暗示に富んで居る。のみならず、今の世相にもピタリと當てはまる。成る程、維新の創業に關係した南洲、甲東、松菊、此ういふやうな人材も、藩の學校が生み出したのではない。彼には、少年時代、或は藩校の門をくゞつたであらうが、藩校の教育宜しきを得たるが故に、あれだけの大器と成つたわけではない。悉く、自己修練の力である。されば諸君が、今立派な人物にならうとするならば、何も學校教育の有無によつて、それが決定するわけではない。學問とはそんなものではない。も一度小楠の言葉をかりる。



――アブラハムリンカーンの像――



『古人の所謂學なるものは、我方寸の修行である、良心を擴充して、日用事務の上にて功を用うれば、すべて學に非ざるはなし』これである。良心をみがき、人格をきたへ、これを實際生活の上に實現することである。從つて、中學を出たからといつて、大學を卒へたからといつて、眞の學問は、それで終る筈はない。堯も舜も、その一生涯が其の學問であつた。孔子も釋迦も、基督も、同じくその一生涯が尊い修行であつた。

即ち刻苦精勵、自己の完成を志すものにとつては、學校教育の如きは、問題ではない。又事實、いかに最高學府を卒へた知識人であつても、眞人として缺くる處があるならば、これ一個の知識人たるに止まり、一世の儀表として仰ぐわけには行かぬ。人間がえらい、えらくないの標準は、知識のみではない、主なるものは徳であるのだ。

二

かるが故に眞の人物は、自助自成の結果作らるべきであつて、他助他成によつて生るゝものではない。

リンカーンは、吾輩の崇拜する偉人であるが、彼の如きは、一年足らずの小學教育をうけたのみであつて、他は獨力獨學全く學校教育をうけた事はない。傳ふる處によると、彼が勞働の傍、丸木小屋の中にあつて讀破したものは、第一にラムセーのワシントン傳、第二にヘンリーグレーの傳、第三にイソツプ物語、第四にバンヤンの天路歴程であつた。

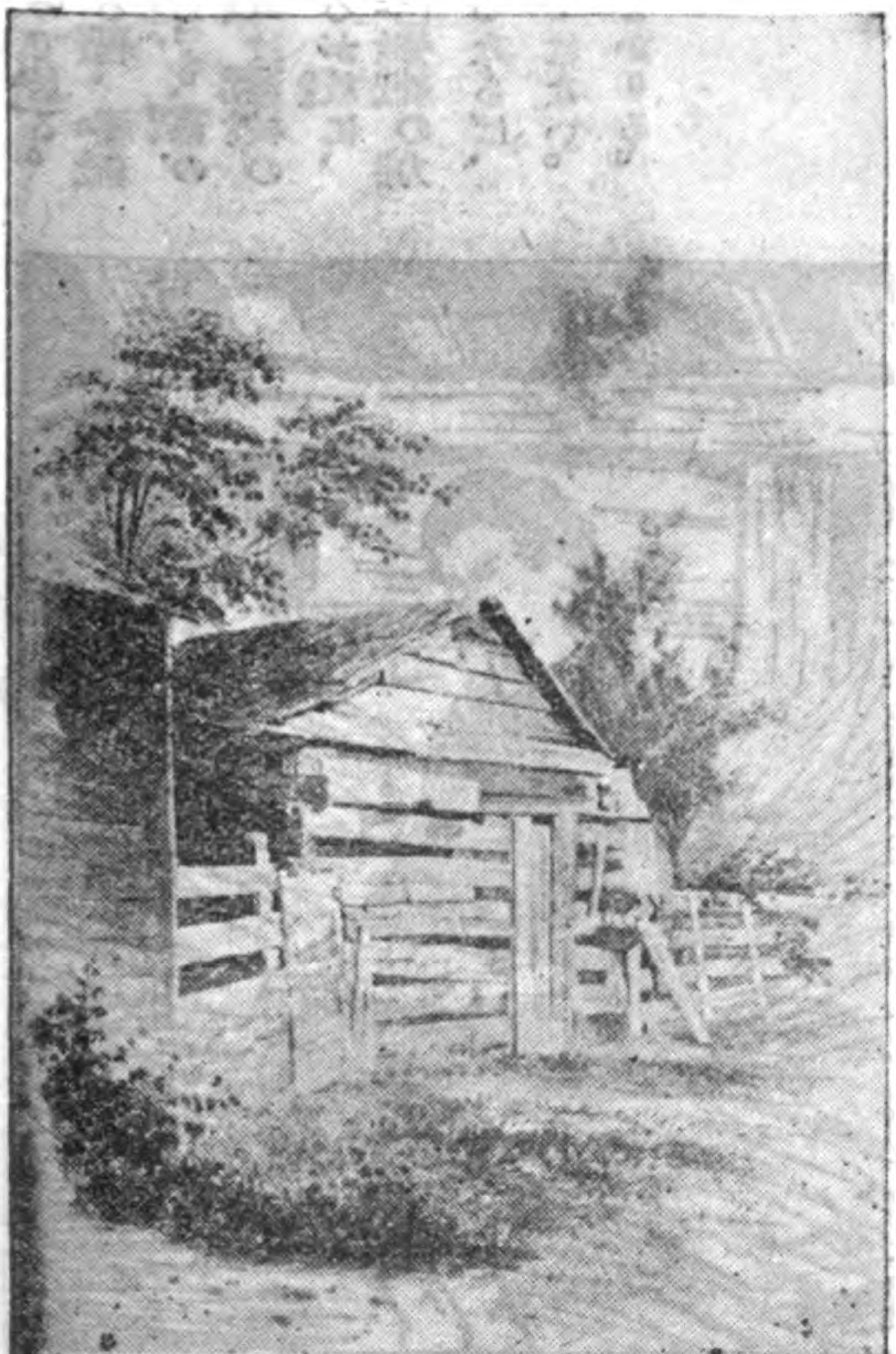
これらの書物によつて、彼は、いかなるものを學び得たか。

『自分は公人として、世に立たん』

かく決心した。無學なる一勞働者が、節くれだつた大拳をあげて、此う叫んだ時、彼の周圍は嘲笑した。立派な教育をうけたものが公人として立たんとするなら、こは當然のことだが、當時のリンカーンの如きにとつては、痴人夢を說くの類であつたかもしれない。しかも、彼は自ら刻苦した。

公人として立つ以上辯論の練習が必要とあつて、勞働の傍八哩もある處を徒歩で、討論倶樂部に出かけた。

『君は文法の研究をする必要がある、どうも君の言語の遣方は誤つて居る』



―リンカーンの生れた家―

グラハムに注意をうけて、早速、文法書をさがしたが、六哩隔つた隣村に僅か一部しかない。

彼は其處へかけつけて、これを借りうけ、且筆寫し且讀破して自力をもつて文法に通ずるやうになつた。

かくして、この貧少年は、第十六代米國大統領となつて、丸木小屋より白堊館へ出世したのであるが、彼の學問は、小楠のいふ方寸の修行である、良心の啓發である、人格の陶冶である。これを生活に實現するに當つては、敬天愛人の政治となつて、つひに奴隷の鐵鎖を斷ち切つた。リンカーンが、堂々たる校舍の中から生れずして、森林の中に建てられた丸木小屋から生れ出でたといふ、今も尚世界の貧少年に對し、異常な刺戟と感激と發奮とを與へて居る。

吾輩の如きも、其始めは九州の田舍町に於ける電信技手に過



ンカーンの傳を讀むに及んで、蹶然として志を立てた。富家の子弟何者ぞ、學校教育何物ぞ、自ら鍛へ、自ら勵み、自ら勉むることによつて、自己完成しようと考へた。吾輩の今日あるは、彼に負ふところ尠しとせぬ。

勿論、修行は一生のものと心得て居る吾輩は、現在を以て滿足して居るものではない。過去に於て刻苦したるが如く、現在に於ても刻苦しつゝあり、又將來に於ても刻苦する決心である。

かくして、男子一生のことは、棺を蓋うて定まるのである。

三

年わかき諸君にすゝむ。諸君は、逆境に屈してはならぬ、不幸に恐れてはならぬ、貧苦に悲しんではならぬ。いかなる人物と雖、自ら切磋琢磨することによつて、立派な人格をきづきあげることが出來る。

不德不義の者が、一時世に榮えて居るからといつて、これに

眩惑されて、諸君が習俗に媚びるやうなことは、吾輩の斷じて與せざるところ。眞人の眞價は、生前に於て認められずとも、必ずや身後に於て、赫々たる名聲を爲す。そこに着目せねばならない。『道德を棲守するものは一時の寂莫たり、權勢に依阿するものは、萬古に凄凉たり』と、かくいふ語があるが、兎角、現在の功名を趁ふに急なるの餘、往々邪惡に墮するものが多い。しかしながら、死後の審判は、極めて公平である。

リンカーンの如きも、奴隷解放の爲、南北戰爭を惹起した結果、身邊をねらふものが多かつた。

『閣下の一身は危險です、ぜひ護衞をつける樣に御願します』

周圍から注意を與へたが、彼は聽かなかつた。

『自分は自分の責務を完全に果した、審判はこれ死後に求むるが故に、今殺されても毫も差支ない』

かう言うて、平然としてゐた爲、つひに兇徒の一彈をうけて倒るゝに至つたが、正しき心をもつて正しき道を踏むものにとつては、死はあへていとふところでない。

生命は短し、然れども、大人格の光輝は、萬世を貫いて、赫奕として居る。二十三十で死ぬのも一生なら、八十九十で倒るゝも一生、而して今日吾々の心の乾板にハツキリと映像となつて殘つてゐる人物の中には、二十三十の者も居る。却つて八十九十れずして過去の世界に葬られて居るが、例へ若くして死んでも、眞人として生甲斐のある生を終つたものは、永久に生きてゐる。死して後生きるの心こそ吾等人間のみが有する尊嚴である。

吾輩はくりかへして云ふ。

正規の學歴を經て、小學校より中學へ、中學より高等學校へ、高等學校より大學へ、かくして學士となり、又博士となる。貧困の家に生れた青年にとつては、それが不可能であるが故に、身を立てることも出來ぬと思うたら、非常な間違である。

手を拱いてゐても、誰も吾々の人格を完成してくれるものはない、自ら志を起して、自ら鍛錬するより外に途はない。最後の目標が身後の審判にある以上、これに到達するの道は、一にして盡きず、乘物の便によつて、樂々と鐵路を走りつゝ終着驛に出發する輩もある、さり乍ら、健脚健歩山を越え川を渡り、こゝに難路をとらねばならぬとするならば、リンカーンの如く、躊躇せずして、雄々しく勇しく、突進せよ。

史上に英名を馳せて、永久不滅の生命を維持して居る東西古今の先覺者の多數は、みな此の難行路を經過して居る。先人の爲し得る處、吾何ぞ爲し得ざらんや、卓然として振起するならば、道は、必ずそこに開かれる。古人曰く『志あれば道あり』と。これ先人の立身策にして、又吾輩の立身策、而して後進た

佳話

床しい內田伯夫妻

塚崎直義

時は昨年四月半のこと。私は仕事に疲れた軀を二三日の箱根入湯ですつかり元氣を取り直して、東京に歸らうと、强羅邊から下山の電車に乘つたのでした。もう櫻もなく山は一面に嫩葉の香が立ちこめ、しかも夫れが午後の陽に照り冴えて何とも云ひ得ない陶醉を覺えてゐました。すると、間もなく扉を排した立派な老紳士夫妻がある。何氣なく其方を見ると、それは內田康哉伯夫妻でした。なんでも政子夫人が中耳炎を患つた後の靜養に暫く富士屋旅館に滯在



內田康哉伯及び政子夫人

され、今日歸京されると云ふ所なのでしたが伯が夫人をいたはることの懇切丁寧さと云つたら側の見る目も羨ましい位でありました。心なき乘客の誰かゞ、眞赤な醉顏を風に吹かれて醒さうと硝子窓を開けたところ、伯はその風が夫人の耳のために惡いと覺つたらしく、棚の上の自身の帽子を取つて自ら夫人の耳の邊に當て風を除けてやつてゐられる、その物腰恰好のいかにも優しく同情に滿ち溢れた眼差には乘客中誰一人として氣を取られぬものはありませんでした。暫く進行して行くと電車は逆行を始めました、……と云ふのは、箱根の電車は羊腸たるところを上下するので一丁場毎に車體の向きが前後に變る、つまり進行方向が變ると今迄後にゐた人が此度は前になる譯なのです、ところが此電車の向が變る度に、夫人は徐に其席を起ちて伯の後ろに腰をおろし、常に伯が進行方向に對して夫人よりも一座席だけ前方に腰かけてゐるのでした。私はこの時ハタ……と膝を打ちて感嘆の聲を擧げざるを得ませんでした。云ふまでもなく是れは妻は夫に從ふと云ふ我國古來からの婦人道德からの表現だつたのです。如何なる場合でも夫より先には立たぬと云ふ伯爵夫人の敬虔なたしなみと、伯の夫人に對する思ひやりの厚いことを對照すると、そこに眞に『この夫にしてこの妻あり』と云ふ感嘆の言葉を發せぬ譯には參りませんでした。



香と茶

笹川臨風

春雨は香の趣味であり、時雨は茶の趣味である。伽羅沈香の香はゆかしくも靜に立ち迷ふ。松風の音は端然と心耳を澄ませる。香の趣味には王朝の匂ひがあり、茶の趣味には東山時代の響きがする。美人、香を聞くは、恰も土佐繪の色彩で、雅客、茶を味ふは、方に是れ水墨畫の趣。



朝顔

上司小劍

去年の夏は、私の家でも、隣家でも、朝顔を作つた。『今日はわたしの方が勝よ』と言つて、隣りの奥さんが、大きく咲いた一輪を鉢のまゝ白いしなやかな手に載せて見せに來る。『いや奥さん、わたしの方が立派でせう、こんなですわ』と言つて、こつちからも負けずに、咲き誇つた大輪を差し出す。かくして、每朝の朝顔合戰に、暑さを忘れてゐたが、今年はおとなりが引ッ越してしまつて、朝顔合戰の相手がない。私の方で作つた朝顔もひどく瘦せてゐる。



初夏

長田秀雄

薄絹のやうに霞んでゐた春の空氣は、鮮やかな日の光に裂かれて、輝いてきた。梅の實が熟し、かきつばたの花が咲く。若葉の色が柔かく反射し、蜂が空中にうなつてゐる――初夏がきたのだ。

單衣をきた人たちの顔には、新らしい感傷が現はれ、若い女たちの笑聲がうるんできた。

もしそれ、夜となれば、蒸れ腐れた花の香が、女の呼吸のやうにしめやかに匂つてくる――全く初夏だ。

西郊だより

大倉桃郎



東京の下町から來た花嫁さんが、近くの森に梟が啼くとて、脅えて逃げたとかの噂のあつたのは、ほんの三四年の前であつたが、商店通りに貸家札が稀になつた此頃は、草原を消して病院が聳え、貸地も殘り少なに、めき／＼文化住宅がふえてゆく。緣の下に筍の生える家はあつても、道ゆく婦人にはでな色彩が多い。郊外の發展は今更ながらめざましい。だがまだ／＼埋立殘しの濕地が私の近所にはある。櫟若葉が月を載せて、蛙鳴く夜の靄の中には、葭の芽が伸びるであらう。

湖畔の朝

江口渙



夏の朝早き猪苗代湖が、如何に清々しい微笑を湛へて、私の前にひろがる事か。

澄み渡つた水の上では、早くも燕の群が腹を返して低く飛び、夜來の雨の色を染めた裏の丘では、夏鶯が微かに戀の歌を唄ふと、岸に並んだ樹々の梢は、爽かな高原の風を浴びて、惜氣もなく肩から朝の滴をこぼした。

そして私は限りなく幸福であつた。

朝夕

河井醉茗



朝は清淨なる水にて顔を洗ふべし、夕は心をしづめて遠く市街のどよめきを聞くべし、朝は淡如として新聞を見るべし、夕は聲を出して詩をうたふべし、朝は健康に起つて歩むべし、夕は安靜に坐つて語るべし、朝の心には靈智あるべし、夕の身には觸感あるべし。



春遠からず

加藤武雄
挿繪　伊東深水

おもかげびと

その不幸な一家族の行方はどうしてもわからなかつた。世を避け人を憚る生活に、近所づきあひも疎かつたと見えて、隣人達も、その一家族の上にどんな變化が起り、何處へ移して行つたかをまるきり知らなかつた。

探して見ようにも何の目あても無かつた。

たつた一つの手がかりとして、禮吉は市の内外の精神病院を大小となく片端からしらべて見たが、矢張駄目だつた。入院してゐるとしても、あるひは名前を隱してゐるのかも知れない。とすれば、探し出す事は不可能なわけだつた。

岡本氏も、禮吉と共に一生懸命で探し歩いた。それから五六十日の間、殆ど寢食を忘れて、岡本氏は、その不幸な昔の愛人と、一人の娘とを探し歩いた。

『いや、未だ解らないのだ。』
と、岡本氏は、脂汗のにじんだ額から、もつれかゝる灰色の髪をかきあげながら深い嘆息をした。そして、
『――さうか？　あの女は氣がちがつてしまつたのか？』
さう繰返して、いたましげな眼眸に幻を追ふやうにして、
『それに私は、あの女に會ふのが何だか怖ろしい氣がする。』
『しかし、あの娘さんは、乾度、先生に會ひ度がつていらツしやいます。』
『娘――！　私が最後に見た時は、まだ七つか八つであつたが――。』
と、岡本氏は空を探るやうな眼眸をした。
『先生。僕が乾度探し出します。あの人が先生のお孃樣だつたとは、實に不思議な廻り合せです。僕は、乾度探し出しますよ。先生の爲めに！　いゝえ、それだけぢやありません、僕自身の爲めに！』
禮吉は力を籠めて云つた。そして、その白皙な顏を少し赤らめた。
『君自身の爲めに？』
岡本氏は反問した。
『えゝ。』
と、禮吉はやゝ羞を帶びて微笑して
[illegible]にとつて重大な意義をもつてゐることを[illegible]ずにはゐられないのです。――あの人は僕にとつて決して他人ぢや無いのです。いや、他人であらせちやあならないと思ふのです。』
『ほう！』
と、岡本氏は禮吉の顏を見つめた。
『先生、あのお孃さんを僕がみつけ出します。どうぞ、あのお孃さんを僕に下さい。』
禮吉は熱心に云つた。
『新しい夢が、又、はじまつたのだね？』
岡本氏は愛撫を籠めた微笑で禮吉を眺めた。
『さうです！』
禮吉は躊躇無く答へた。
『君の愛はあの娘を幸福にするだらう？　私はあの娘の爲めによろこぶよ。そして、わしは君の夢の美しい成就を衷心から希るのだ。君のためにといふよりも、寧ろ私のあはれな娘の爲めに。』
わしのあはれな娘――といふ時岡本氏の言葉は慄へた。そして、彼の眼は涙で輝いた。
『先生。僕は乾度あの人を見つけ出しますよ。』
と、禮吉は熱情的に、

『そして屹度あの人を幸福にしてあげます。』

『君にはそれが出來るだらう。荻原君！』

岡本氏は、椅子から起ちあがり、禮吉の肩に兩手を掛け、その涙ぐんだ眼でじつと禮吉の眼の中に見入るやうにして云つた。

『頼む！　私はもう駄目だ。私にはもうそれをするだけの氣力がない。私は君に頼む！　どうぞ、あの不幸な者逹を見つけ出して、明るい日の目を見せてやつて呉れ給へ。』

『承知しました。先生！』

禮吉も感激的に云つた。

『私もこの東京に踏みとゞまつて、君と一緒にあの者たちを探すのが本當なのだ。だが、私にはそれをするだけの氣力が無い。それに、わしは、あの女を――狂人になつてゐるといふあの女を見るのが怖しい氣がする。卑怯なやうだが、私は――。』

と、口籠つた岡本氏の言葉を搔き浚ふやうにして禮吉は云つた。

『先生、どうぞ心配しないで下さい。何も彼も僕が引受けます。いゝえ、僕に引受けさせて下さい。』

『ありがたう！　荻原君。私は、心から――心から君に感謝する。』

『いゝえ。先生！』

わなゝく視線を搦み合はせたまゝ、二人は互ひに涙含んだのであつた。

岡本氏が北國の方の郷里に引きあげて行つたのは、その年の暮近く、上野驛頭には、冷たい雨が蕭々と降りそゝぐ夜であつた。禮吉と、長く召使つてゐた女中と、見送り人も二人より無かつた。

『郷里の方は屋根まで雪がつもつてゐるのだ。雪に埋もれに行くやうなものだ。』

と、岡本氏は汽車の窓越に、淋しく微笑しながら云つた。

『だが、五月になれば雪も解ける。桃も櫻も一度に咲く春が來るのだ。その時分になつたら、是非一度やつて來給へ。』

『えゝ。是非出掛けてまゐります。その時分までには、先生をおよろこばせするやうな報せを持つてうかゞひ度いと思ひます。』

『さあ？――そんな事になるといゝがね。』

『勿論、それはむつかしいかも知れませんがね。しかし、僕はたとへ一年かゝらうが三年かゝらうが、決して希望は捨てません。』

『頼む！』

岡本氏は、しつかりと禮吉の手を握りしめた。――そして、



動き出した汽車に運ばれて、十幾時間かゝるといふ遠い北國の小さな町へと去つてしまつた。

岡本氏の申出通り、禮吉は、岡本氏の遺して行つた家に住む事になつた。岡本氏は、家財調度もそのまゝ、その靜謐な家

内の雰圍氣までをさながらに、禮吉に遺して置いたのであつた。そして、その書齋の壁上に掲げられた肖像畫――それも、舊の儘であつた。

岡本氏が、悲しい憶ひ出に胸を充たしながら、返らぬ過去の形身として朝夕に眺めてゐたその肖像畫が、今や禮吉の新しい夢の對象となつた。岡本氏がさうしたであらうやうに、禮吉も朝な夕なにそれを眺めた。

色彩の古びた、輪廓のぼやけた肖像畫は、あの霧深い夜の行きずりに見たおぼろげな印象を、そつくり畫布に移したもの丶やうに見えた。その不確かさが、じつと眺めてゐるうちに、次第に彼の心を苛立たせて來る。激しい思慕のおもひがその苛立たしさと共に昂まつて、彼を椅子から立ちあがらせる。椅子から立ちあがつて彼は家を出る。家を出て街頭へ！――彼は、あてもなく彼女を探しに出かけるのだつた。

さうだ。彼は毎日のやうに、街をさまよひ歩いた。それが如何に果敢無い努力であつたか？　この人間の海に寄せては返へす幾百人の中のたつた一人を、しかも、行きずりの一瞥に見ただけの一人を、何の手がかりも無しに探し出さうとは？

だが、禮吉は決して失望もせず、撓みもしなかつた。彼は驚く可き忍耐を以て、求めつゞけ、探しつゞけた。

――さうして、求めつゞけ、探しつゞけながら、彼は不思議な心の狀態にあつた。彼の心の中では、その未知の娘と、死んだ嫩子とが何時の間にかごつちやになつてゐるのであつた。嫩子に對する情熱が、そつくりそのまゝ、その未知の娘に向つて燃えてゐるのを彼は感じた。

さう云へば、その肖像畫が、何となく嫩子に肖てゐる。いや、だん／＼嫩子に肖て來るやうに思はれた。

冬が去り春が來た。春が去り、若葉のすが／＼しい五月になつた。北國の雪も融け、桃も櫻も一時に咲くといふ五月になつたが、しかし、岡本氏にもたらし行く可き何ものをも未だ得られなかつた。

だが、禮吉は、決して、悲觀したり、悲觀の爲めに、努力を捨てたりする事は無かつた。

（先生――。）

と、彼は岡本氏に宛てゝ書いた。

（五月になつたら、おたづねするといふお約束の五月になりました。しかし、未だよろこばしいお報せをもつてまゐるわけには行きません。運命の神は、なか／＼たやすくは笑顔を見せては下さらないのです。春は、もう一つの冬、いや、もう二つ三つの冬の彼方にあるのかも知れません。しかし、僕は、必ず來る可き春を信じてゐます。冬來りなば春遠からじ。よし、遠しとも、來る可き筈の春の、必ず來る可きを僕は信じてゐ

ます。」

これは決して氣休めでも負惜しみでも無かつた。禮吉には、それを信じてゐた。自分の愛に賭けて信じてゐた。

そして、事實、彼のあてもない捜索に、いくらかの手がかりが見つかりさうに思はれて來た。

ある日、それは雨あがりの、西の空に夕榮の輝いてゐる夕方であつたが、彼は銀座の方からの歸りをタキシに乘つてゐた。タキシが、四谷見附の電車の交叉點のところで、電車をやり過す爲めに一寸停まつた時、彼の眼は、ふと電車を降りる幾人かの中にまじつた洋裝の少女の姿をみとめた。藍色の夏服の眞新しいのを着て、クリイム色の靴下をすんなりと細く穿いた十ばかりの少女は、紛れもなくあの花賣の妹娘だつた。あッと思ふ間に、タキシが走り出したので、それを停めて降りるのに一寸手間取り、とうとうその姿を見失つてしまつたが、しかし、それだけでも彼はやがて來る可き機會の、一つの前觸のやうな氣がした。その時、少女の姿を見失つてしまつたのは、地團太を踏むほど殘念だつたが、兎に角、彼女達が、東京に住んでゐるといふ事だけは、それでたしかめ得たわけだつた。若しかしたら、東京に居無いのでは無いかと思つたりした事もあつたのだが――。

それに、その少女の服裝なども、普通の家庭の子供らしくさつぱりとしてゐたのを思ふと、もう前のやうに貧しくくらしてゐないのだらうと思はれて、何か心が明るくなるやうな氣がした。

それから一週間ばかり經つてからであつた。禮吉は、夜更の銀座を歩いて居た。五月ももう末の、いやに蒸暑い夜で、すゞろ歩きの群の中には氣早な夏帽の影などもちらついてゐた。

前にはうなだれがちに歩いたのが、絶間も左右に眼を配りながら歩く――いつの間にかついた禮吉の癖だつた。その禮吉の眼は、五六歩前のところで、飾窓の光に照らし出された美しい女の横顔に、ひたと吸ひ寄せられた。彼の心臟は破れるやうに動悸を打つた。

と、次の刹那、女は、すらりとした後姿を見せてあるき出した。セルの着流しの一人の男が伴れ立つてゐる事に、その時禮吉は氣がついた。

だが、同伴者の事などに構つてはゐられなかつた。彼は急ぎ足で追ひすがつた。そして女の顔をしかと見定めた時、禮吉の口もとには苦笑が浮んだ。こんな事はこれまでにも度々繰返されたのだが、矢張間違つてゐた。瞬間の視覺に欺かれたのに過ぎ無かつた。

淋しさと苛立たしさとが一緒になつた、何かやりどころが無い氣持で、禮吉はそこに明るく扉を開いた珈琲店へはひると、

隅の方の卓に腰をおろした。

姉さんは勤めに出てゐる——と、あの妹の少女は云つてゐた。勤め先は云はなかつたが、もしかしたら珈琲店にでも出てゐるのでは無いかといふ推量から、彼は、よく珈琲店へはいつて見た。この銀座に數多い珈琲店といふ珈琲店にも、殆ど片端から立寄つて見た。偶然、眼に觸れたまゝはいつた此の珈琲店も、一度か二度前に來た事のある家だつた。



華やかな照明の中に藤のつくり花などを枝垂らした廣間は、酒の香と、煙草の烟と、さゞめきと、樂の音とが渦を巻いてゐた。——禮吉は、その賑かな雰圍氣になじまぬものを心に感じ

ながら、カクテルの盃を前にぼんやりとしてゐた。

むかうの隅に陣取つてゐた五六人の一團が、卓を離れて、どやどやと出口の方へ歩き出したが、その中から、甲高い女の聲が、突然、禮吉の方へ呼びかけた。

『荻原さん！ あら！ 荻原さんぢや無いの？』

呼びかけられて、驚いて顔をあげた禮吉の眼の前に、走り寄つて來たはでな洋裝の女が、美しく醉の出た顔で笑つた。

『まあ、お一人？ どうなすつたの？ だまあて、すまし込んで。』

『や、あなたでしたか？』

禮吉は、肩の根を寄せて云つた。それは、あの映畫女優の藤原藤代だつた。

『あなたでしたかツて、まあ、何て御挨拶。知らあん顔をしていらッしやるから、つい、知らずに歸つてしまふところでしたわ。』

藤代は怨じるやうに云ふと、同伴者達の方を振返つて、

『どうぞ。お先へ——私、此の人に一寸用がありますの。』

同じ俳優仲間らしい男女いりまじりの五六人の同伴者達は、口々に何か揶揄の言葉を投げつけたが、

『まあ、藤代さんたら——いやぢやありませんか。』

と、金切聲で一人が叫ぶと、どつと笑ひ聲をあげながら皆出て行つた。

藤代は、すこし化粧崩れがした顔に、ふさふさと垂れた髪を掻きあげながら、ぴつたりと、膝を押附けるやうにして坐つて

『いゝところでお目にかゝりましたわ。幾度お訪ねしてもお留守お留守で、私もう業を煮やして居たんですのよ。』

人目も憚からない調子だつた。

『生憎、いつも留守ばかりで——失禮しました。』

禮吉は硬くなつてぶつきら棒に云つた。飛んだ奴につかまつてしまつたと思ひながら。

『本當にお留守でしたの？』

藤代は、圓い大きな眼を疑ひツぽくみはつた。

『本當ですよ。』

『本當？ 居留守ぢや無いんですの？』

『そんな事は無いですよ。』

『何だかわかりはしないわ。——でも、今夜はとうとうつかまへちまつたわ！ ほ、ほ、ほ！』

眞赤な唇から、それが自慢の美しい齒並を見せて藤代は笑つた。

『いや——。』

禮吉は、周圍の視線を感じ、困惑の爲めにやゝ赤くなりながら口籠つた。藤原藤代と云へば、禮吉にとつては、戀の押賣を

する忌はしい蓮葉女に過ぎないのだが、近頃賣出しの主役女優として、何處へ行つても讃美者達の熱い眼眸に追つかけられてゐる女だつた。

『まあ、そんな迷惑さうな顔なすつて――い〻え、御迷惑でも今夜はつきあつていたゞかなくちや。』

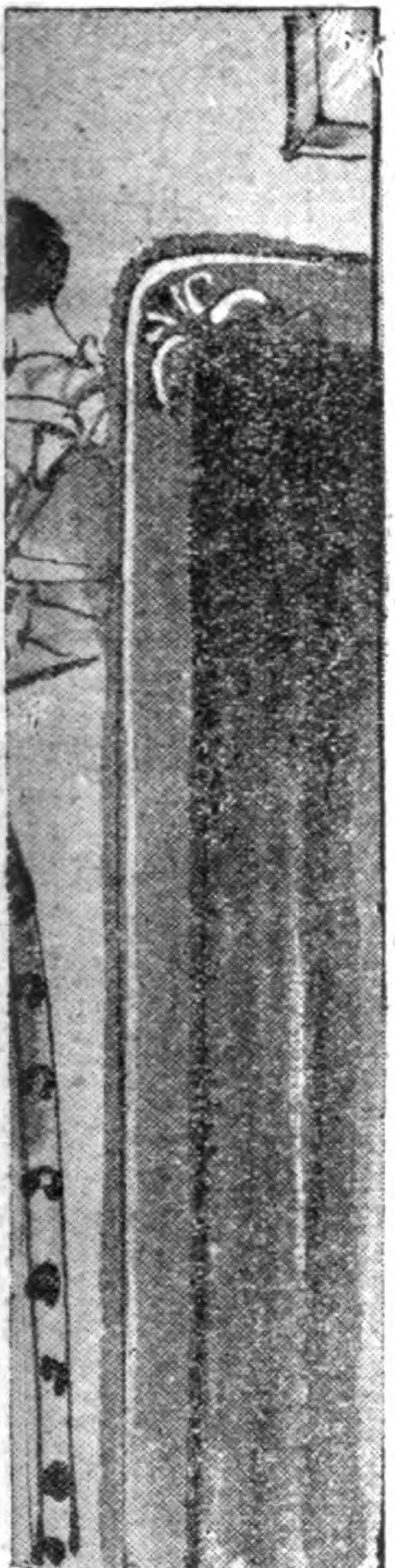
藤代はさう云ひながら、禮吉の前のグラスをとりあげて半分ほどぐつと飲み乾したが、

『こんなの駄目、甘ツたるくて――ジンのはいつたのがい〻わ。あの――。』と、女給仕に命じるのであつた。

『シルバア・ストリート二つ！』

飛びつく女

藤代は醉ひが加はると共に、益々、なまめかしく、むしろ、みだりがましくなつて來た。彼女は、周圍の人目をも憚らず、しきりに怨じ立てた。



『本當に、あなたのやうな方も無いわ。手紙をあげても返事も下さらず、おたづねすればいつもお留守ばかり――。』

幾度となくそれを繰返して、

『亡くなつた方の事なんかいくら思つたつて駄目ぢやあ無いの？ い〻かげんに男らしくあきらめるものよ。ねえ、その方ばかりが女ぢや無いわ。そして、この世の中には、面白い事が澤山あるんだわ！ さあ、あなたももつと召上れよ、醉はなきや駄目だわ。醉へば何も彼も忘れてしまへるわ。何も彼も忘れちまへば、又新しい樂しみが出て來るわ。』

藤代は、近々と顔をさしよせ、熱い息を吐きかけながら云つた。その一ぱいに媚をた〻へた眼で、私を見て頂戴！ 私だつて美しくないこと？ 私がどうしてそんないやな女なの？ と云ひ添へるやうにして。

禮吉はもうたまらなくなつた。彼は、女給仕を呼んで、勘定を命じた。

『あら、もうおかへりになるの？ 未だ早いぢや無いの？』

『い〻え、僕はもう歸らなきや――。』

『ぢや、私も歸るわ。ねえ、少し歩きませうよ。散歩お可厭？』

『僕はさうしちやゐられないのです。』



禮吉は勘定をすますと、さつさと扉の外へ出た。

藤代も續いて外へ出た。

『散歩おいやなら、いゝとこへ行きませう。私御案内しますわ。』

藤代はあくまでも執ねくまつはりつきながら云つた。

『いや、僕は少し用事があるんですから――。』

禮吉は、卒氣無く振捨てると、通りかゝつたタキシを呼び止めて、逃げるやうに飛び乘つた。

『あら、待つて――待つて頂戴ツたら！』

藤代は、さう叫びながら、走り出さうとする自動車へ、追ひ縋るやうにして飛びのつてしまつた。

『ほ、ほ！　駄目よ。そんなに逃げようとなすつても、私、今夜は逃がしやしませんから。』

小猫のやうな柔かな身體を、禮吉の

眼に投げつけるやうにして、酔つた女優は、椿の花のやうに唇を開いて笑つた。
『僕は――家に歸らなきやならないんですが。』
禮吉は腹立たしげに云つた。
『私、あなたのお宅に寄せて頂くわ。』
『ですが――。』
『ほ、ほ！ そして、今夜はお宅へ泊めて頂くつもりよ。』
『そんな事――。』
『ほ、ほ！ 困る？』
『困りますね。』
禮吉は、露骨に云つた。
『どうして？ どうして、そんなに、お困りになるの？』
『どうしてツて事は無いでせう？ そんな事は僕困るのです。』
『ほ、ほ！ まあ、そんな怖い顔をして――、うそよ。まさか泊めて下さいとまでは申上げ無いわ。でも、一寸、寄せて頂くだけなら構はないでせう？ ね、そのくらゐ宜かあ無い？ 何度も何度もおうかゞひしていつもお留守だつたんですもの。』
藤代は、急に打萎れた調子になつて哀願的に云つた。
禮吉はひどく此の女を好かなかつた。此女の愛は、禮吉にとつて迷惑以外の何ものでも無かつた。が、そんな風に云はれて見ると、禮吉はその柔軟な性質から、それも可厭だとは云ひ兼ねた。
『ね、一寸でいゝのよ。長くお邪魔はしませんから。』
『僕のところなんかへ來ても、別に面白い事も無ささうですがねえ。』
『まあ、たよりない事仰有るのね。だから――だから私、悲觀しちやふのよ。』
藤代は、さう云つてわざとらしく溜息をついて見せた。
禮吉は、無遠慮にもたれかゝる藤代の身體をもてあましながら、不機嫌に押默つてゐた。
三四十分の馳走の後タキシは、代々木の禮吉の家の前で停められた。
迎へ出た老婢は、
『お客様でございますか？』
と、つゞいてはいつて來た藤代の方へ眼を睜つた。
『あゝ、應接の方へお通ししてお呉れ。』
禮吉がさう云つて書齋へはいらうとすると
『あら、そちらのお書齋の方がいゝわ。』
藤代は無遠慮に、一緒に書齋へはいつて來た。
『いゝお部屋ね。』
などと云ひながら、窓際の長椅子に腰をおろした。
禮吉は、相變らず浮かない顔をしてゐた。藤代も、次第に酔

ひが醒めて來たらしく流石に稍ゝ手持無沙汰らしく紅茶の匙を動かしたりしてゐたが、壁上の肖像畫にふと眼をとめると、

『あの繪、どういふ繪なんですの？』と、訊いた。

『別に――何でも無いんです。』

禮吉は云つた。

『さう？　――亡くなつた方の記念の肖像畫ぢや無いんですの？』

『違ひます。』

『然う？　然う云や、大分もう古い繪だわねえ。』

『古い繪ですよ。』

禮吉も、その繪に眼をやりながら云つた。

『だけど、不思議だわねえ。』

異常な熱心さで、藤代はその繪を見つめながら、

『――私、その繪にそつくりな人を見ましたわ。』

『え？』

禮吉は、思はず椅子から起ちあがらうとした。

『えゝ、本當にそつくりよ。』

藤代は禮吉の激しい驚きと、壁上の肖像畫とを見くらべながら繰返した。

『その人は何處に――何處にゐるのです？』

禮吉は、急き込んで聽いた。

『まあ！――ほ、ほ！』

と藤代は笑つて、

『その方を探していらッしやるとでも仰有るの？』

『さうです。さうです。――僕はその人を探して居るのです。』

『一體、どういふわけなんですの？』

『少しわけがあるのです？』

『だから、そのわけといふのはどういふわけなんですの？――此の繪はどういふ繪なんですの？』

『理由なんかどうでもいゝのです。この繪に似た女をあなたが知つてゐるといふのは、それは本當ですか？　本當なら敎へて下さい。何處にその人が居るか、敎へて下さい。』

禮吉は起ちあがり、藤代の方へかゞみかゝるやうにして、詰氣を荒く問うた。

『どうでもよか無いわ。理由を仰有らないぢや、私敎へて上げられないわ。』

『理由なんか無いんです。たゞ、ある事情の爲めに、僕はその人を探して居るのです。』

『だからさ、仰有いよ！　その或る事情といふのはどういふ事なの？』

『そんな事はどうでもいゝです！　その人が何處にゐるか、それを一言云つて呉れゝばいゝのです。』

禮吉は苛立たしく繰返した。
『あなたは、どうでも宜くても、私はどうでもよかあ無いのよ。その事情といふのを――理由をきかして下さらなきや、私、敎へてあげる事は出來ませんわ。』
藤代は、思はせ振りに微笑しながら云つた。
『敎へて下さい！　どうして敎へて下さらないのです？』
『ね、本當にこの繪、どういふ繪なんですの？――でも、不思議だわねえ。』



と、藤代は、もう一度その繪の方へ眼をやつて、
『だけど、他人の空肖といふ事もあるわね。敎へてあげても若しか違つてゐたら悪いわ。』
『その人の名は何ていふんです？』
『さあ、何て云ふんでしたか知ら？　何しろたつた一度、會つただけなんで、お名前はつい聞かなかつたわ。』
『兎に角、敎へて下さい。何處にその人はゐるんです？』
禮吉は哀願するやうに云つた。

『まあ、隨分御熱心ねえ。』
藤代は、はぐらかすやうに笑つて、
『敎へてあげてもいゝわ。――だけど、萩原さん、あなたもずゐ分勝手な方ねえ。』
『何故です？』
『だつて、出て行けがしになさりな

から、物をお頼みになる時だけは、そんなにしをらしい御樣子をなすつて——。』

『いや、僕が惡かつたらあやまります。だから、どうぞ敎へて下さい。』

『でも、違つてゐるかも知れないのよ。空似かも知れないわ。』

『ぢや、あなたは出鱈目を云つたんですか？』

禮吉はむつとして云つた。

『出鱈目ぢやあ無いわ。——似てゐるわ。本當によく似てゐるわ。』



『ぢや、敎へて下さい。』

『だけど、本當に、あなたとこの繪との間に——この繪に肖た人との間にどんな關係があるんですの？——その人が、あなたの新しい愛人だとでもいふんですの？』

『いゝえ、そんな事は無いのです。』

圖星をさゝれた狼狽を、さり氣なく押隱しながら禮吉は云つた。

『もし、然うだとしたらお氣の毒ね。』

『何故です？』

『あら、矢張然うなの？』

藤代はくるりと眼を圓くした。

『そんな事は無いのです。たゞ、僕は少しその人に用事がある

のです。』

『だつて、その人は他の奥さんよ。』

『他の奥さん？』

禮吉は鸚鵡返しに云つた。ぐわんと一つ頭からなぐりつけられたやうな氣がした。ぢや、あの人は結婚してしまつたのか？

『奥さんだかお婆さんだか知らないけど、兎に角、その方ならもう娘ぢやあ無いわ。』

『娘ぢや無い？』

禮吉は獨語めく調子で繰返した。視線を一點に置き忘れたまま。――彼のあたまの中には黑い旋風のやうなものが渦卷いた。顏からすうッと血が退いて行つた。

その禮吉の表情の變化をぢいッと見定めるやうにしながら、

『失望なすつたのね？――まあ、あなたはぢや、矢張――。』

『兎に角、僕はその人に會はなきやならない。お願ひです。どうぞ、その人が何處に居るか敎へて下さい。』

禮吉は呻くやうな息苦しさで云つた。

『人の所有になつてゐる女にお會ひになつたつて仕方が無いぢやあ無いの？』

『用事があるのです。是非會はなきやならない用事があるのです。』

『何の用事だか存じませんけど――ほ、ほ！』

と、藤代はやゝ嘲るやうに微笑して、

『ぢや、敎へて上げますわ。――でも、今はいけないわ。明日――明日の晚、私のところへいらッしやいな。そしたら敎へてさしあげますわ。』

『どうして今敎へて呉れないのです？』

『それほど熱心に聞き度がつていらッしやるなら、明晚、私のところへいらッしやるぐらゐ何でもないでせう？』

『それはおうかゞひしてもいゝですが――。』

『いらッしやりさへすれば敎へてあげますわ。』

『何故、今敎へて呉れないのです？　あなたは實に意地悪だ。』

『私が意地悪？　まあ、意地悪ッてのはあなたの事よ。私、あなたほど冷酷な意地の悪い人見た事が無いわ。』

藤代は、怨みの籠つた眼で禮吉の顏を見上げた。

（つゞく）

狂女と其の美しい姉妹達は一體何處に居るのであらうか？　其の行方を知ると云ふ藤原藤代の言葉は果して眞實か、それとも單に誘惑の手段であらうか？　明晚の藤代との會合に御禮吉は節操を守り得るや否や？　更に、哀れな狂女の一家を果して幸福に導き得るかどうか？　いよ〳〵興味高潮！　以下御熟讀を乞ふ!!



戯曲 討てば討たるゝ（三幕十二場）

松居松翁
挿繪 尾竹國觀

時 天正年間

處
序幕―會津若松の所々
第二幕―京都の所々、會津の所々
第三幕―會津若松

人
宮越十太郎
同じく八千代（同上の母）
同じく勘十郎（同上の從兄）
西山采女（同上の大伯父）
岩國善太郎
同じく善五郎（善太夫の弟）
檜山八內（同上の家人）
黑田信五郎（十太郎の友人）
同じく龜松（十太郎の弟）
同じく右膳（同上の伯父）
甲賀彥之丞（同上）
大澤角之進（同上の從兄）
同じく善太夫（善太郎の父）
同じく節入（同上の伯父）
秋野（十太郎の伯母）
三吉野の花のえん（六條の遊女）

蓮華寺の住持日遂上人
大平主水（蒲生家の横目）
駒谷源右衛門（同上）
岩國家の乳母　同家の抱守
岩國家の小者　年始廻りの侍一、二、
其他神樂姫。神樂の連中。見物の群集。岩國、宮越兩家の家人。岩國家の一族。花車。禿。茶屋の女。さまざまの町客など。

第一幕

（一）會津若松屋敷町

（蒲生氏郷が鶴ケ城を、彼方にのぞめる屋敷町の一部、堀の中には若葉しげりて、合歡の花紅なれど、門前には門松をかざり立てたり。門より出づる禮者も、そこへ入らんとする侍も、帷子に上下つけたから、供の下郎の首には年玉箱を吊らせたり。
處は會津若松。時は天正のある年、六月朔日。遠く神樂囃子の音きこゆ）

侍一　これは出入司の渡邊どのでござつたか。先以て新年の御慶めでたく御挨拶申します。

侍二　それはわれらとても御同慶の次第、舊冬中は何かと御世話に相成り申した。

侍一　と、お互ひにしかつめらしく申すものの、六月朔日に帷子を着て、舊冬中も氣がのり申さぬの。

侍二　しかし今年の様に、時候が不順で雨風が多く、その上此間の様に、大霰がふりしきつて作物を害しては、何とか祝ひ直さずには置けもしまい。

侍一　そこで鹿島の事觸れにつけこまれて、六月朔日を初春と祝ひ直して、暖う、晴れの假正月、われらのやうな半隱居の身分でも、浮世につれて一年二度の門禮者になるかと思ふと、身内がひとりでにくすぐつたうなりますのう。

侍二　愚痴の世をはかつて、いつはりの神託と頭から承知はしながら、人間三合になると云はれては、さすがに心も空になる浮世、まあ〳〵いつも春らしいが徳用でござらう。

侍一　いかにもごもつともの仰せ、さらば萬事は春永に……

侍二　いづれその中御意申さう。

（兩人挨拶して、おの〳〵供を引つれ、門の内外に去る。近く神樂の音。向ふより老若男女の群集かけ入る）

群集の一　やあ、神樂姫がやつて來るぞ。

群集の二　一年二度の春ぢやによつて、來春の番をとり越して、今度は東山から見えたげな。

群集の三　道理で神樂姫が綺麗ぢやと思うた。何分にも朝晩溫泉で磨き込んで居るからのう。

群集の四　東山は囃子もいつちうまい。どこぞその邊でやつて

見せて呉れゝばよいな。

群集の五　そこの山崎樣では、御門前で舞はせられる吉例ぢや。さあ、あそこで見物せう。

（一同山崎が門前に集まる。向ふより引つゞき神樂の連中つれ立ちて出で來り、その中の一人門内に入る。他のものは囃子の仕度にかゝる。門内よりは三方に白米と、錢を白紙につゝめるおひねりとを、家來一人もち出で、そのあとより、この家の女中、家來、小供たちなど入來る。見物の群集は次第に多くなる。よき程に番士宮越十太郎が弟龜松（十一）袖につぎのあたりし帷子着て出で來り、群集にまじりて見物する。神樂の連中は舞ひにかゝる）

ウタへめでたく〳〵の若松さまは、よんの菜ゆる。葉もよ、はゝんは、葉も茂る。よんの枝も榮ゆる。葉もよ、はゝんは、葉も茂る。よんの、春に會津の盤梯山は、よんの、まつたく〳〵黄金の山よ、はゝんは、さい〳〵さい〳〵篠の葉に、はに、はゝんは、篠の葉に、黄金の露が、よんの、よんの、たれさがる。よんの、よんの、はゝんは、よんのえゝ。

（舞ひ終りかける頃、三千石取の家老岩國善太夫の一子善太郎（九つ）に、お乳の人、小坊主、抱守、草履取などつき出で來る）

善太郎　（乳母に）何でかう人が立つて居るのぢや。

乳母　神樂姫が舞うて居るげにござります。

善太郎　ではわしも見たい。

乳母　かしこまりました。（抱守の侍に）それ、若殿が見たいと仰せられますぞ。

抱守　（群集に向ひ）これ、若殿が御見物あらうと仰有る。その邊を明けてくれ。

（群集は知らぬ顔して、倘動かず。小者は龜松を見つけてその肩に手をかけ）

小者　お大身の若殿が見物せうと仰有る。そこを退け。

龜松　いやぢや。おれも見たい。

小者　身分を知らぬ大それた事を云ふ小わつぱぢや。退かすば如斯してやる。

（小者は龜松をつき飛ばす。抱守は善太郎をそこに立たせる。龜松は身を起して脇差に手をかける）

龜松　推参な奴め、武士に對する禮儀を知らぬか。

小者　（笑つて）なに武士ぢやと、ハ、、、ハ、われらがつひぞ見も知らぬ小わつぱ、足輕の小倅か。

抱守　飯盛山あたりの山番の小倅でゝもあらう。

乳母　何にせよ、袖につぎのあたつた帷子着ても歴々のお侍か、ほゝゝゝほ。

龜松　えゝ、ひとを撞倒して、無禮の詫言もせぬのみか、人を嘲弄するとは、いよ〳〵侍の作法をわきまへぬ奴等ぢや。さあ、此上は勝負せえ。

（龜松は脇差に手をかけ身構ひする）

抱守　えゝ、小わつぱと思うて容赦をすれば、數の知れぬ不屆者ぢや。以後の見せしめに、かうしてやらう。

（抱守と小者とは、散々に龜松を打擲する。善太郎は之を制して）

善太郎　そのやうに手荒うするな、可哀さうぢや。乳母、いのう。

乳母　若殿がいのうと云はるゝ。さあ、まゐりませう。

（抱守其他は善太郎を伴うて上手へ去る。神樂の連中、及び見物の群集は、龜松のさわぎ起るとそのまゝ、右往左往に亂れ去る。中には岩國の家人等の暴狀に一種の不快を感ぜしものもあれど、御家老の威勢をはゞかりて知らず顔に立ち去る。日稍くらくなりて、近き當麻寺の鐘聲綠蔭を渡りて響く）



龜松　（身體のいたみをこらへて身を起し）やい、卑怯者、待て、待て、待たぬか。

（脇差を拔いて善太郎等のあとを追はんとする。上手より龜松の兄十太郎（十九）羽織袴姿にて出で、龜松を見て驚き、刀もつ手を抑へて）

十太郎　これ、龜松、いつものおとなしいに似ぬ惡あがき、幼少なりとてそなたも武士の弟でないか。脇差ぬいてどこへ行く。

龜松　兄さま、わたしは口惜い。

十太郎　くやしいとは、誰ぞに何とかせられたか。

龜松　岩國善太夫が一子善太郎、神樂姫の舞ひ見ようとて、下人どもがわしをつき退け無禮の振舞ひあ

つた故、「推參な奴め」と叱つてやつたら。わしを散々に打擲して…

十太郎　うむ、それでよめた。今そこで行逢うた岩國の下人ども、わしに顔をかくして通り過ぎたも不思議と思うたに、よくもわが弟を理不盡な目に逢はせたな。平常から、家老の役目を鼻にかけて、匹夫匹婦の下人どもまでが、大面をする岩國一家の奴ら、恰度よい機會ぢや。おれが今人間の平等といふ事を見せてやる。龜松、そなたはうちへ歸つて母さまに此由を申せ。さらばぢや。

（十太郎は刀の下緒を取つて襷にし、鯉口くつろげて上手へ走り去らんとす。龜松すがりついて）

龜松　兄さま、わしも一緒に行く。

十太郎　そなたは却つて足手まといぢや。そなたの鬱憤は此兄が晴してやる。

（龜松を振離して走り去らんとす。龜松尚まつはりついて）

龜松　この喧嘩はわしがもとぢや。何でも一緒に行く。

十太郎　その喧嘩を兄が引うけたのぢや。



（十太郎は龜松をつき飛して上手へ走り去らんとし、そこより出で来れる母の八千代（四十）につき當る）

八千代　おゝ、そなたは十太郎ぢやな。たゞならぬその樣子、何としたのぢや。

十太郎　岩國善太夫が下人共に、龜松は理不盡な折檻に逢うたと申します。それゆゑその仇を打たうため……

八千代　さうか、弟の意地を立てさゝうといふ、そなたの健氣な心ざし、先づ以て母はうれしい。しかしさういふ喧嘩は双方に理分のあるもの、（龜松に）龜松、そなたに何か落度があつたのではないか。

龜松　こゝで姫神樂を見て居たら、あの岩國の家人どもが、若殿が見物したいと仰有る、そこ退けとわしをつきのけたのぢや。

十太郎　それが口惜しく、龜松が咎め立てしたら、この樣に打打擲に逢うたさうにござります。それ故わしは弟

の爲めに……

八千代　龜松のいふ事が定なら、武士の面目うち棄てゝはおかれぬ。母から頼んで一働きして貰ひたい事ではあるが、併し岩國善太夫どのも蒲生家の家老の筆頭、武士の禮儀は承知の筈ぢや。御子息家敷へ歸られてかうかうと申されたら、何とか御挨拶があらうも知れぬ。それまでは事をあら立てぬが侍の常法ぢや。

十太郎　併し常から傲慢無禮な岩國一家、そのやうな行渡つた挨拶などあらうとも思はれませぬ。

八千代　さう思ふも推量、わたしの樣に思ふも推量、所詮は今宵半夜を待つて見て、それからどちらとも思案をつけよう。二人とも、そのやうな見苦しい姿をよして、さあ早ううちへ歸らう。

（龜松の衣紋を直しやる。十太郎も無言にて襷をはづす。日愈よくらし――暗轉）

（二）　宮越の家の一部

（百五十石の番士宮越十太郎の家、父十左衛門三年前世を去つて、一子十太郎わづかに十五歲を以て跡目をつぐ。母八千代は夫なき後の家を守つて、十太郎と弟の龜松をおほし育つ。

庭にのぞめる座敷、下手に玄關、門。母は行燈のそばにて、十太郎の肌着の襟に、金を縫ひ込み居



り、十太郎は刀を研ぎ居り、龜松は手習ひをなし居る。前場より數時間の後、風の音、鐘の聲）

十太郎（鐘の聲を算へて）おゝ、もう九つぢやな。母上どうでござります。善太夫めより何の屆けもまゐらぬではござりませぬか。

八千代　成程、さう云はれては面目ない。わしは御家老どのを買ひ被つて居たらしい。

十太郎　身分を嵩に着て、常から人を人とも思はぬ、あの岩國善太夫、親もない輕輩のわれら兄弟など、蟲けら同樣にさへ思ひ居りますまい。此上は一寸の蟲にも五分の魂、その力を見せてやりたうござります。

八千代　かうなつてはそなたを和めよう語も無い。龜松、門を閉めておじや。

龜松　はい。

（机を一隅に寄せ、門をしめに行く。母は縫ひ終りし肌着をたゝみ、神棚より神酒を下げ、土器をのせたる三方と共に、座敷の中央に置く。十太郎も刀を鞘にをさめ、澁紙、打粉のたぐひを片づける。庭には微かなる蟲の聲）

八千代　張り裂くる程の心の怒りを、じつとおさへて今まで待つたに、何の音沙汰もないは、身分の相違は兎に角に、如何にしても踏みつけたるしかた、もはや容赦がならぬ。十太郎はあくるを待つて善太夫を打つて捨て、少々ながら一歩五十、この肌着の襟にぬひこみあれば、これを路費に、當國を拔け出し、京にござる伯母御の許に身をかくすがよい。

十太郎　有難いそのお語、未練の涙を見せられても、母上なれば是非ない事でござりますが、それを今の潔よい勵ましの御語、十太郎萬人力を得た心地、立派に仕とめて御覽に入れませう。

八千代　その健氣な語を聞いて、母も嬉しく思ひます。龜松もさぞ嬉しく思うて居よう。

龜松　嬉しいとも有難いとも、この心地を口にしていふ語は知りませぬ。それにしても事の起りはこの龜松、どうでもわれら一つに連れて行つて下さりませ。

十太郎　いや〳〵、武運つたなくば、わしとても打たれまいものでない。その折には重々の仇を討つはそなた一人ぢや。今より一所懸命に武藝を勵み、成人の後に相手を討つてくれよ。今のところは、兄の分まで一人の母上に孝行をつくすが肝要ぢや。

龜松　母上には濟みませぬが、どうぞ一緒に連れて行つて下さりませ。

十太郎　これは兄が最後のいひつけぢや。まあ聞いて置くが



よい。

繩松　では、どうでも……

八千代　わしにも云ひたい事はあるが、十太郎の立派な心を思ふと、もう何もいへぬ。今はたゞ兄上の語を守るがよい。では十太郎、別れの盃を……

十太郎　忝うございます。どうか母上から。

八千代　繩松、酌をしてくりや。

（八千代盃をとり上る。繩松泪を抑へて瓶子をとり上げる。風の音――暗轉）

(三)　柳堤、地藏堂

（上手に小かなる地藏堂、それより下の方、數株の柳、若く垂れたり。下手に橋の一部を現はす。

前場の翌朝。

眞夏の日光きら／＼と橋下の水にかゞやく。水の音。

上手より宮越十太郎、旅姿にて出づ。橋の向ふを望み、うなづいて地藏堂の後にかくる。

岩國善太夫（四十餘）乘馬にて、多くの家來を召つれ、橋を渡つて出で來る。よきところにて馬をとゞめ、若侍桁山八内に向ひ）

善太夫　八内、そちは先刻申付けた通り、これより七日町の宮越方へ參つて挨拶を致してまゐれ。

八内　はつ。

善太夫　くれ／＼も後家御にわしの心を傳へてくれ。昨晩の中にも挨拶致すべきところ、承知の如く昨夜は遲くまで御前に伺候し、今朝はかく早天より大寧寺へ御代參致さねばならぬ。明朝は是非ともわれら自身にまゐつて家人どもの不行屆を御詫申す。それまでは御心も濟むまいが御不承を願ふと申し傳へてくれ。分つたか。

八内　畏りました。

（八内は向ふへ去る。十太郎、鉢卷、襷がけにて、地藏堂の蔭より身を現はす）

善太夫（それを見て馬をとゞめ）おゝ宮越十左衛門が倅十太郎か。きのふは小者どもが、そちの舍弟に何やら不仕付の振舞があつたさうな。善太夫、心より氣の毒に思うて居る。今日御代參の役目果したら、屹度屆けに罷り越す、どうか母御にも……

十太郎（哄笑して）今になつて其斷りはもう遲い。おのれ生命は貰うたぞ。

（十太郎刀を拔くより早く、善太夫を馬上より斬つて落す。供の者立騷ぐ間に、十太郎は飛鳥の如く身を隱す――水鳥の騷ぐ聲、水の音――暗轉）

(四)　宮越が邸の門外

（第二場を側面より見たる門外、破れたる築地の彼方には

[illegible]前堤より一町の後。向ふより岩國善太夫が、弟善五郎、伯父節入を前めとして、一門十餘人、抜刀、槍などを手にし、或者は腹巻をつけ、或者は着込みなどして走り出づ。直ちに門内にこみ入らんとする時、門内より十太郎の母八千代、其身を藤縄目の鎧にかため、くれなゐの大袴し、鞘を外したる長刀を小脇にかゝへて駆け出づ）

八千代　若年ながら、これは蒲生家の家臣宮越十太郎が母ぢや。獲物をあらはに、斯く大勢にて理不盡の推参は狼藉ぢや。おひかへなされゑ。

善五郎　理不盡とはこなたの倅十太郎ぢや。蒲生家の國老岩國善太夫を柳堤にて打果し、卑怯にも姿をかくした。

節入　その狼藉者を召捕らう爲め、これまで推し寄せまなつた。母御の胸中御推量致さぬにはあらねど、われらに取つては不倶戴天の仇ぢや。何卒われらに御引渡し下されゑ。

善五郎　たゞしたつて御拒みあらば、是非に及ばぬ。踏ん込んで、捻首に致し申すぞ。

八千代　倅は御家老どのを首尾よう打果しましたか。若年の身にて本意を果したと承はつては、少しも心殘りはござりませぬ。當家へ立歸り居りますれば、この母が引からめて御渡し申すべきではござりまするが、彼奴とて人をあやめてぬけぬけと、母の許へ引かへす程の腰抜ではござりますまい。生[illegible]

善五郎　人をあやめた重罪人を、[illegible]生の家人にも似合はぬ卑怯な[illegible]おや。たつて[illegible]ば、一同にて家捜し致し、お身の面皮を[illegible]ぎ申すぞ。

八千代　（笑つて）小祿ながら蒲生家累代の家臣宮越十太郎が後家ちや。姑息の愛に血迷うて、二枚の舌を弄ぶやうな女では無い。たゞし君命にあらさる限りは、如何なる兵刄をもつて脅さるゝとも、家さがしなんど思ひも寄りませぬ。強つて御亂入ありたくば、此かよわい女の死骸を踏み越えてお入りあれ。虫の息一つ殘る中は小犬一匹たりとも門内へはなりませぬ。

善五郎　身の程知らぬ大胆な暴言、女なりとて容赦はならぬ。門内に踏み入つて十太郎を搦め取れ。

一同　心得申した。

（八千代は長刀を十文字にふり廻して一同を遮ぎる。一同は八方より八千代に迫る。節入は一同を静める）

節入　女性とはいへ、感じ入つた後家御の健氣さ。只今の一言に淀みの無きは十太郎不在に相違あるまい。萬一、この女性まで打殺して、小倅が行衛知れずば、われら身に取り重々の不覺ぢや。節入、思ふ次第もある。與も角も引取らう。善五郎參れ。

善五郎　陣門に琴を弾じた孔明にのせられた司馬懿親子にはなりたうない。伯父上、ともかくも一應は家探しせう。

節入　はて、相手は女ぢや。此上疑うたらこつちが女になる。外をさがすあてがついた。さあ行かう。

（節入先に立ち、一同向ふへ去る。八千代じつと一同を目送す。龜松不安げに門内より駈け出づ）

龜松　母上、母上。

（八千代は龜松を抱きしめて泣く――暗轉）

（五）蓮華寺の祖師堂

（法華宗の寺院妙花山蓮華寺の祖師堂の内部。前場の夜。佛前の一燈かすかにあたりを照す。梟の聲かすかに聞ゆ。住持日達上人（六十餘）、一方の扉をひらき、十太郎を伴ひ入れ、佛前に座を占む）

日達　こゝへ參つたからは、諸佛と祖師の外には、見る人も聞く人もござらん、もうもう少しも御心配には及ばん。心もからだも十分に御寛ぎなされて大丈夫ぢや。



十太郎　わづかばかりの俗縁をたよつて、かく厚面皮しくもお頼り申したに、御親切なる御もてなし、御禮の申さうやうもござりませぬ。

日達　いや、それこそ餘計な心配ぢや。人を助くるこそ僧侶のつとめぢや。

十太郎　それも人にこそよれ、他人をあやめ、血腥き

手をしておとづれまゐつたわたくしを、斯様におもてなし下さる事、たゞ／＼御禮を申上げまする。

日達　義に依つては、人命をあやむるも是非ない事ぢや。所謂一殺多生の爲めには犯すまじきことも犯さねばならぬ。只今承はつた一件は、のがれがたない前生の約束ごと、お身ばかりの罪ではない。ぢやが、それは兎も角、弟の爲めに國老を一刀兩斷に始末に及ばれたとは、さてもお手柄、それ程の事しかねまじき若人と、かねてから頼母しう思つて居つた。此上は愚僧が御身の上をしつかりとお受合ひ申し、お命はたしかにお預り申した。

十太郎　御芳志のほどひたすら忝う存じまする。併しやがて追手の者が尋ねてまゐり、上人にも御迷惑かけるやうな仕儀と相成りましては……

日達　（笑つて）諸佛の前に立てた誓言は、俗の世の人よりも一層堅いが、われらのならはしぢや。たとへ領主自身の御詮議に逢はうとも今生後世、この老僧の息の根の通ふうちは、決して此山内以外へは出し申さぬ。心安く落ついてござらつしやい。

（入口の扉をたゝく音。日達は何やら十太郎に囁く。十太郎默禮して、中央の佛像の後に身をかくす。扉をたたく音ます／＼烈し。日達は法華經を讀誦し初む。扉をたゝく音一層強くなる。――暗轉）



第貳幕

（一）宮越の家の一部

（序幕第二場の宮越十太郎が家。前幕より約一ケ月餘りの後、盂蘭盆の初めの日。軒に燈籠を吊り、佛壇に精靈祭りの棚をかく。宮越家の一族同苗右膳（十太郎の伯父）同苗勘十郎（十太郎の從兄）甲賀彦之丞（同上）、西山釆女（十太郎の大伯父）大澤角之進（十太郎の從兄）並びに十太郎の母八千代、二男龜松居並び、上手には蒲生家の横目役大平主水、駒谷源右衛門よろしくすまふ。庭前の樹木には蜩の聲かしまし）

主水　では、これより使者の趣を申し達する。神妙に承はられえ。

一同（頭を垂れ）はあ。

主水　國老の一人岩國善太夫どのを御代參の路地に於いて殺害致したる宮越十太郎、早手搦め捕つてさし出すべき由、度々催促に及ぶといへども、今に於いて其事



なきに、近頃世間を騒かしむるに依て、家法を等閑にするの嫌ひあり。來月十五日まで[illegible]打つてさし出さぬにおいては、宮越の一家一類伯父、兄弟、從兄弟まで悉皆切腹申しつくるとの嚴命でござる。

八千代（驚いて）あの伜一人の爲めに、當家の一族を滅さるべしとの御諚でござりまするか。

源右衛門（愁然として）餘りに片手落ちの御詮議と、使者に立つたるわれ〳〵の間にも、聊か御氣の毒には存ずるが、主命なればもだしがたく、兎も角も御諚の通り申し渡した。此上は是非がござらん。雲を分け地をほり割つても、十太郎どのの行衛をさがし、期日までに奉行所へ名のつてお出しなされ。御一家御一門の運命にかゝはつては、十太郎どのの本意でもござるまい。

右膳（座をすゝめて）御芳志の段、忝なう御禮申す。いづれ列席の一同熟議の上、後刻御兩人まで御返事申す。殿へもよしなに。

主水　さらばこれにて引取り申す。

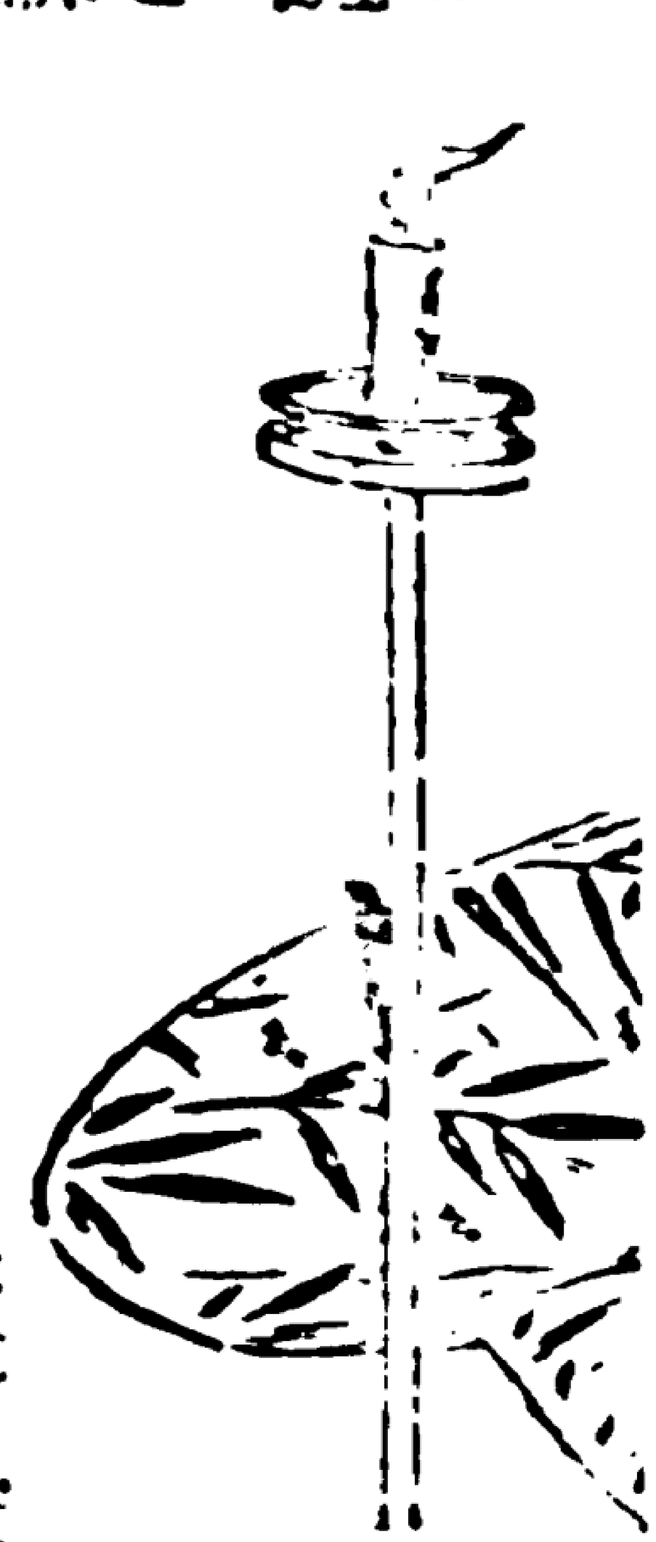
源右衛門　さらばぢや。

八千代　御役目御苦勞に存じまする。

（兩人は門外に去る。兩人をおくりし一族、それ〴〵席に着く）

右膳　只今の殿の御諚、おの〳〵方には何と聞かれた。

勘十郎　駒谷氏も云はれた如く、十太郎一人の爲めに、三族を罪せんとは、餘りといへば片手落のお捌きぢや。ことに七騎の嚴命がこはさに、十太郎をつき出したとあつては、宮越一族の名折れ、會津武士に似合はしからぬ卑怯ぢや。人は知らず勘十郎は、從弟の爲めなら腹かつさばくに未練はない。



彦之丞　よう云うた勘十郎、かくなればわれ〳〵兩刀をたばさむ親類の生命はおろか、一家眷族女童にいたるまで血も肉もさらけ出して、十太郎を庇ふまでぢや。

角之進　それにしても相手は岩國が一族、此上は死出の首途に人の山を築き、岩國が屋形を極樂の西門と定め、今宵にも彼奴が許へ攻め込まう。

釆女　勇まし〳〵。一門その心と定まらば、會津一國はおろか天下を敵としてもなにをか恐れん。八千代どの、お身等親子は見殺しにせぬ。安心されえ。

右膳　さらば一先おの〳〵の屋敷に還り、討死の用意を定め、今宵八つを合圖に、われらが方へ集まられよ。すべての手立はそれまで定め置くとせう。八千代どの、さらばぢや。

（右膳を初め、一同立ち上る。廻松は右膳の袖をひかへて）

廻松　叔父上を初め、兄さまたちしばらく御待ち下さりませ。

この度の事は、私の身からおこつた事、その爲めに皆さまに、そのやうな御迷惑をかけては濟みませぬ。兄十太郎のかはりに、わたしが腹をきりまする。あなた方はわたしの首を、横目衆のところへお持ちなされて、何事も無事にすみますやう、御取計りを願ひまする。

八千代（嬉し涙をおさへて）よういうた繼松、幼少なれども武士の意氣地を知つた其一言、みなさまの手前、母も面目をほどこしました。さりながら、十太郎があとに殘つてそれを聞いたら、さぞかしわれらを恨めしう思ふであらう。所詮十太郎を京のかくれ家より呼び下し、三人一緒に果てたう存じまする。日限は名月までとあれば、これより刻付の早飛脚を都にさし立て、屹度それ迄呼び迎へまする。その上にて十太郎の料簡次第、みなさまの御生命を御所望致さうも測られませぬが、こゝ一月ほどは此八千代に萬事をお委せ下さりませぬか。

右膳　うむ、肝心の十太郎が心根も知らずに、われ〳〵のみにて立騷ぐも思慮ないわざちや。卑怯で生命をのばはるでない事は、おの〳〵の心が承知ぢや。しばらく八千代どのに委さうでは無いか。

采女　義に仗つて身命を惜まぬわれらの心は、八千代どのも承知の筈、十太郎一人を見殺しにせぬ工夫さへつくなら、右でも左でも勝手次第。

八千代　嬉しいみな樣の御志、くはしういうてやつたら、十太郎もさぞ喜びませう、忝うござりました。

采女　さらば其由を、兎も角も横目衆まで屆けねばなるまい。右膳どの、これより直ぐに大平、駒谷兩人の屋敷へまゐると致さう。

右膳　左樣致さう。八千代どの、さらばぢや。

（一同立上る――暗轉）

（二）京都本願寺道場

（京都松原通り因幡藥師のほとりなる東本願寺の末の道場。風流なる庵室やうの一構ひ。

前場より十五日餘りの後の夕暮。

十太郎の伯母にて本願寺の僧侶の妻となり居る秋野は、涙ながらに妹八千代より送りこせし手紙を讀み居る。

十太郎は默然としてそれを聞き居る。夕の勤行の鐘の聲近く聞ゆ）

秋野　妹が健氣な筆の迹を見るにつけて、心の裡のなげきは思ひやらるゝ。十太郎、何としたものであらうな。

十太郎（微笑して）何とするものでござりませう。人を殺してもとより遁るべき身ではござりませぬ。その覺悟は初めより定めながら、母上のおなげきが悲しさに、都へ出奔、伯母上にもいかい御世話になりましたが、一門一族まで迷惑とあつては、愈よ生命棄つべき時節が到來致しました。早速國元へ立還り、一同の難儀をすくふ事にいたしまする。

秋野　これも是非ない首尾とは思ふが、折角海山二百里を越えて、この都へ來たものを、何とかのがれる工夫は無いものであらうか。

十太郎　一族の縁依と切迫つまつた上からは、もう何ののがれる道がござりませう。縦令あつたればとて、母上もそれはお好みになりますまい。わたしも好みませぬ。母上の決心さへついたら、わたしはいつでも笑つて死ねまする。伯母上こそ、そのお歎きを思ひとまつて下され。

秋野　かねてから情のこはい、そなたゝち親子ぢや。わたしのやうに女々しい心では推量もならぬ。それにしても何時出立するつもりぢや。

十太郎（指を折つて）名月までに會津へ入るには、ゆつくり日づもりしても、五日の隙はござりまする。こゝもとへ身を隠してこのかた、都ながら花なき里の心地して、夜見る東山、若葉の紅葉の高尾栂尾も、闇の錦のくらい心、都らしいもの何一つ見ては居りませぬ。されば花洛の帝都を見はじめの見治めに、ゆる〳〵見物して、それから出立致さうと存じまする。

秋野（少し呆れて）死出の旅路を急ぐ身に、都見物とはさても大膽な落つきやう。大路小路の花鳥が、そなたの目には映りはしまいに。

十太郎（笑つて）死ぬべき時が定まつたので、心もやつと落着きました。都話を一生の自慢にして居られた父上に、あの世で逢うたら、わたしも自慢を致しとうござりまする。そはゝゝはゝ。

秋野　その心の餘裕を見て、伯母もやつと落着きました。三十三間堂に武勇の昔を偲び、河原の狂言綺語に沈み行く心をなぐさめ、明日は北山、明後日は西山と、入日を名殘に五日を百日と樂むがよい。が、一人歩きは興が薄い。誰か都城の地理にくはしい人に、道しるべを頼みませう。はて、誰が一番よい事か。

十太郎　いや、それには河原町は蛸藥師の黒田信五郎どの、此度の旅に桑名の渡しからの道連、これまでも都見物の案内せうと、幾たびかいうて下された親切なお方、都でたんだ一人の友垣、あの人を頼みませう。

秋野　おゝ、よいところへ氣がついた。親切な上に氣散じな、輕口男、そなたの今の身には、成程いつちよさゝうな。毎日の費用は、伯母が最後の餞けにする。心置きなく見物をして下され。

十太郎　忝うござります。では、一寸蛸藥師までいつてまゐります。

秋野　はてせはしない男ぢや。夕餐をすましてからでもよいでは無いか。

十太郎　もう片影も出來て、夕風が涼しうなりました。ちよと行つて參じまする。

（十太郎立上る。勤行のひゞき——暗轉）

（三）六條大門口

（遊女町六條の廓の入口、大門、見返り柳など、たゞ一色に黑きが彼方に、不夜城の灯火。前場より五日目の夕。笛太鼓亂舞の音、そゝりの若者のうたふ隆達）

ウタ　いや〳〵は思ふゝあまりのうら、逢はせてたまはれ、逢はせてたまはれ、とにかくに。

（十太郎は下手より、友人黑田信五郎に手を引かれて出づ）

信五郎　十太郎どの、あれ聞かれたか。この頃はやる隆達節にも、「いや〳〵は思ひの餘りのうら」と有る。折角都大路を案內しても、この花街をぬきにしては、玉の杯底なきたとひぢや。まあ〳〵わしについて來たまへ。

十太郎　折角ながらこれだけは許して下され。五日の間親身も及ばぬほどにつくして下された御身の親切、今になつて無にしたうない。

信五郎　はて、今宵一夜こゝに泊つたら、一しほわしの親切が身にしみよう。是非に案內する。さあ、參られえ。

（兩人は爭ふ。門の內外より、花車、禿、茶屋の女、さまざまの嬪容など出つ入りつす。十太郎は此間に、信五郎の勸めに、强ひて大門の裡に引入れらる——暗轉）

（四）茶屋丸屋の一室

（正面に庭を見たる座敷、上手に屛風をめぐらしたる蔀、下手に酒肴などあり。蘭燈淡く、十太郎と三吉野の花のえんといふ太夫とを照す。前場より二晌ばかりの後。他の座敷にうたふ唱歌の聲きこゆ）

ウタ　逢ふときは秋の夜もはや明けやすや。ひとりぬる夜の、長の夏の夜。

花のえん　もう夜もふけた。床もあくびをして居よう。寢ようではござりませぬか。

十太郎　折角ながら、もう歸らねばならぬ。どうぞ友だちを起して下され。

花のえん（恨めしげに）又そのやうなつれない事ばかりいふお人ぢや。あなたはその樣に、お宿の首尾が怖ろしいのでござりますか。

十太郎　あい、わしは怖い。たんだ一度もあけた事の無い伯父御の家、まして物堅い伯母御が、此處へも入らずに心配してござらう。かうして居る中も、それが氣の毒でならぬ。

花のえん　えゝ憎らしいその伯母御どの。その伯母御どのは、おまへさまより年齡下で、妹背をちぎつて程もない美しい人でござりませうな。

十太郎（眞面目に打消して）何の〳〵。伯母御といふは正眞わが母上の姉御、松原通りは因幡藥師のとほりに、東本願寺の末の道場にござるお方、それを便つて出羽奥州から出てまゐ

つたについてに、口につくせぬお情もあつて、仇な所にはいろいろと苦労をかけた。此上に心配さするは、忍びぬ涙ぢや。さ、お暇を申す。

（立上る時又唱歌の調）

ウタヘ退かいはなさい、帯がとくる。今にかぎろか、あはうもの。

（花のえんは十太郎をさま〴〵にして引止めんとし、ついに十太郎を強ひてすわらせ、その膝にもたれて心から泣く）

花のえん　この様にしてもわたしの心がまだ分らぬか、情なし男。さりとては〱、更に申すも恥かしけれど、わたしが流れに身を立て初めてからはや六年、貴賤の限りとては無く、逢うたお方は何百人。その中には馴染を恋の種となし、互にまことの心を通はせて、思ひの種を宿したお方さへござりましたが、それでさへ、今宵初めて御見のおまへさまに比べては、富士の煙と長柄の水底ほどの思はく違ひ、是程までにいとほしらしい御方に、今宵になつて初めて逢うたも不思議の一つ、川竹の流れの女が、是程まで打込んだは、まことに大方ならぬ因果ぢや。此身の思ひの適ふまでは、十年の年期を百年に増してもかへしはしませぬ。

十太郎（花のえんの手を執つて）これはまたとかう語にのべがたき真心の忝なさ。まだ一度も恋の道やら踏みならはぬ此身ながら、只今の御語に生れて初めての嬉しさを覚えました。

さりながら再び仕官のある身なれば、この涙を人前には にうつけて、重ねての生涯を楽みませう。

（立上らうとする十太郎の手を又とらへて、花のえんは泣く）

花のえん　えゝ、まだ此身の詞が、ぬしさんの心には通らぬのか。そんなら心の底まで打割つた証拠の近道、これを見て下され。

（花のえんは十太郎の短刀をとつて小指を切らうとする。十太郎はこれを止めて）

十太郎　聞けば聞く程、嬉しくも忝けなきお身のまこと、恋といふものゝ味ひ、今初めて知つたやうな心地もされて、身中もほてるばかりに思はれるが、さて心にまかせぬは人の世かな。わしには人をあやめし罪あつて、都を見るも今晩かぎり、鶏鳴かば東へ下つて、八月十四日の夜には、腹かつさばいて果てる生命ぢや。生じ飲みもならはぬ恋といふうまい酒の杯に唇をふれて、此世に執着がのこつては、母の歎き、弟のかなしみ、一門一家の難儀となる。それ故心と裏表のつれない事も云はねばならぬのぢや。太夫どの、察して下され。

花のえん（決心をおもてにあらはして）よくも大事の秘密まで打明けて下されましたな。此上は此世で無理は申しますまい。武士道とやらの立つやう、御国で立派な死にやうを、敵の人々にも見せておやりなされませ。わたしも十四日の月見

るまでは、一心にあなたの無事を念じ、いよ〱其夜となつたら、身は萬里とへだたつても、女郎の舌に二枚のない證據、追腹とやら切つて、あの世のお伴を致します。たゞ一つ最後のお願ひ、心ばかりの二世のかため、此盃だけは受けて下さりませ。

（花のえんは涙を抑へて、盃を十太郎にさす。十太郎は其手をおさへて鳴咽する。また唱歌の聲）

ウタヘ誰かつくしの戀の道、いかなる人も踏み迷ふ。

（遠く尺八の音――暗轉）

（四）蓮華寺の墓場

序幕第五場の妙花山蓮華寺の墓場。一面の黒幕、所々の立木、中央に宮越家累代の墓、その後に數本の塔婆。

前場より十餘日の後、十四日の月皎々とあたりを照らす。

微かに題目太鼓、梟の聲、虫の音。

住持日達上人涙ながらに旅姿の十太郎を伴ひ出づ）

日達　では、如何でも母親や、弟御に對面なさらで、彼世へ急がるゝお心かな。

十太郎　愚じ對面致しては、上をいつはる事になりませう。このまゝ果てますが、自分にも心安く思はれまする。

日達　相變らず健氣なことぢや。此前は身にかへ、寺にかへ、屹度お匿まひ申さうと決心を極めたが、今度はもう強ひて止めは致さぬ。心のどかに御自害なさるがよい。

十太郎　上人にはいつとても御無理のみ申上げ、御詫びの致しやうもござりませぬ。この上にも後世の菩提を御願ひ申し上げまする。

日達　その儀は決してお案じあるな。其法一味解脱涅槃、南無妙法蓮華經々々。

十太郎　諸事限りなき御配慮、御禮の申さうやうもござりませぬ。尚此上は母への遺言、横目衆への屆け書、十太郎兎も角も相成りましたら、早速に御屆けが願ひたうござりまする。

日達　いや、それも承知致した。さらば十太郎どの、愚僧は本堂にて勤行にかゝりませう。心しづかに生害なされ。

十太郎　忝なうござりまする。上人には御機嫌よろしう。

日達　十太郎どの、さらばぢや。

（日達は下手に去る。十太郎は墓前に額づく。風の音、墓畔の櫻の病葉はら〱と散る。本堂にて木魚をたゝく音。

月光一しきり鮮かに十太郎を照らす。十太郎は肌くつろげて、脇差をぬく。梟の聲――暗轉）

（五）花のえんが室

（後に逆さ屏風を立てまはし、前に机をすゑ、その上に一炷の香と經卷とを置く。机の上には花のえん、白羽二重の小袖に身を淸め、白布にて兩膝をしばり居る。前場と

殆んど同じ時。

いづこよりか笛の聲、風の音。

しばらくして上手の壁に、前場の十太郎が生害の姿、幻影の如く現はる）

花のえん（それを見て悲痛の聲をふり絞る）あゝ、いとしのわが夫、もう御生害をなされましたか。そんならわたしもおん跡をお慕ひ申しまする。

（花のえんは懐劍をぬいて腹部を刺す。いづこともなく木鉦をつゞけ打つ聲聞ゆ――暗轉）

（六）蓮華寺の墓場

（第四の蓮華寺の墓場。前場より二晌の後。八千代と龜松とは、十太郎の死骸にとりつき、泣き居る。

木鉦のひゞき、梟の聲）

八千代　此母が思うたに增して健氣な最期。母にも逢はず、弟の顔も見ずに立派な生害を遂げた、そなたの心の裡は、此母でなうては分るまい。ふりかゝ



る一門一族の難儀を、そなたの身一つで防いでくれた志、母から改めて禮を云ひます。此上はそなた一人を先にはやらぬ。母と總松もあとを追ふ。總松、さあ、覺悟せえ。

總松　そんならこれから直ぐに物いふ兄上にお目にかゝれるのか。わたしは嬉しい。

八千代　かねて母が敎へて置いた通り、ひとりで切腹が出來ますか。

總松　兄上のやうな立派な死に方は出來ずとも、痛いと云はずに死にませう。（脇差を拔いて）母上、御介錯を願ひます。

八千代　承知しました。

（總松は肌をひろげる。八千代は刀を拔いて、總松の後に立つ）

總松　さらば母上。

八千代　南無妙法蓮華經。

（總松が刀をつき立てんとする一刹那、下手の方にて大平主水と駒谷源右衛門の聲す）

主水　宮越十太郎が舍弟の總松……

源右衛門　その最期、しばらく待たれよ。

八千代（驚いてふり上げし刀をおろして）やつ、その御聲は。

（主水と源右衛門と入り來る）

主水　十太郎どのが死後にのこせしわれ／＼横目への屆け書によつて、委細の樣子は相分つた。

源右衛門　兄上遺書の趣き、[illegible]

意地を立て通したる十太郎の心根こそ不便なれ。彼が罪はその死によつて購はれた。跡目は別條なく弟總松に相續させよとの御仁命でござる。

主水　當岩國家のあと目も、一子善太郎に申しつがせ、これより後は双方とも意趣をふくまず、水魚の交り致させよとの、有難き思召でござるぞ。

八千代　有難きわが君の御慈悲ではござりまするが、一旦他に誓うた詞、今更反古にしたうはござりませぬ。せめてこの身だけも生害を……

（自害せんとする。主水と源右衛門とは之をとゞめて）

主水　十太郎どのが國遠されたも、生害されたも、たゞ母御と兄弟の身を安かれと願はれた爲めではないか。此場合に自害さるゝは、十太郎どのを犬死させるやうなものぢや。

源右衛門　お身が生害なされたら、總松どのも無事では居まい。さうなつたら宮越家の先祖の祀りは誰がせらるゝ。

八千代　そ、それは……

主水　何事を置いてもわが君の厚い御心ぢや。

源右衛門　有難くお受けなさるが家臣の道ぢや。

八千代（暫らく瞑目の後、十太郎の死骸にとりついて）十太郎、そなたも聞く通りぢや。總松が一端の人間となるまでは、どうでも死なれぬ此身さうな。十太郎、それ迄母の生命を貸して置いて下され。その時になつたら、其時になつたら……

（[illegible]

讖地の龍の話——完）

第三幕

湯川觀音參詣道

（山間の岨道。一方は懸崖。一方は紅葉の林の晴れたる日、前幕より六年の後の秋。折々空をわたる雁の聲。

上手の崖を下りて龜松（十七）一僕を從へて出づ。向ふより善太郎（十五）大勢の供を引つれ出で、舞臺にて顔を見合はす）

善太郎　おゝ、お身は宮越十太郎の　弟龜松ぢやな。

龜松　さいふは岩國善太郎か。

善太郎　君の御捌き是非もなく、今日まで心にもえ立つ修羅の炎を抑へ居つたが、かく端なくも面を逢はせしは佛神の御引合せ、今こそ晴らす、年來宿祖の仇、覺悟せよ。

龜松　よくこそ申した。六年以前の六月一日、城門外にておのれが爲めに受けたる恥辱が事の縺れ、互ひに親兄を失ふからは、君命なればとて心の底の傷は癒えぬ。思はぬ處にて思はぬ對面、まことに天の命ずる遭會。善太郎。さあ來い。

善太郎　おのれこそ。

（兩人羽織をぬぎ、股立をとつて抜きつれる。下人たち立さわぐを、兩人はとゞめる）

善太郎　武士と武士との[illegible]

ちや。

龜松（下僕に）そこに控へて見物せよ。

（兩人斬り結び、つひに戰ひ疲れて相擊ちに斬り込まれ、同時に絕息する。其少し前より崖の上に八千代姿を現はし、此體をじつと見つめ居る。兩人倒るゝ時、急に崖を下りて、龜松の死骸にとりつき泣く。やがて急に決然として首をもたげる）

八千代　六年前の名月の前の夜、十太郎に誓つた語を果すべき時が恰度來た。十太郎、龜松、わたしも直ぐにあとを追ひます。三途の河で待つて居て下され。

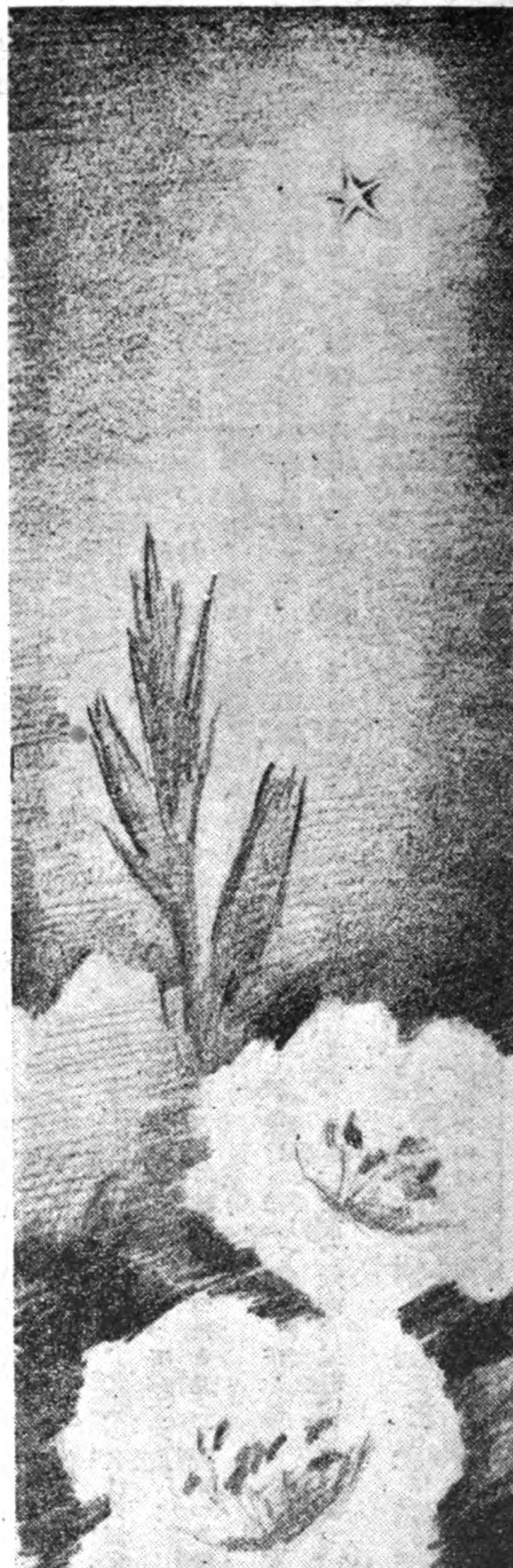
（八千代は微笑を含み、懐劍にて咽喉をつき、龜松の死骸の上に伏す。日漸く暗く、空には雁の聲——幕）

數字で現した十二人（イチダース）の子供

所は岡崎市十王町、商賣は魚屋。父親の名は杉浦常三郎といつて今年七十四。母親はらく女といつて六十四歲……此夫婦、よほど子に緣が厚かつたと見えて授かつた愛兒一ダース十二人。

その十二人の愛兒に對して附けた名、重市、九市、八市、七市、六市、五市、しず、みつ、仁市、一雄、はつ、れい。

男八人、女四人合計十二人。十に始まつて零に終る名を男女うまく配合して附けたのは大上出來……實にうまくいつたものである。



東京行進曲

菊池寛
挿繪　寺內萬治郎

愛の斷片

良樹は、折枝を後にして、席を蹴つて外へ出ると、タクシに乘つて、眞直ぐに家へ歸つて來た。傷ついた鳥獸は、巢に歸るやうに、彼も自分の家へ一散に歸つて來た。そして、書齋へ飛び込むと、洋服を着たまゝベッドの上に横倒しに寢た。彼の人

生が忽ち暗黒色になりつぶされたやうな氣がした。太陽が、日が月が、樹木が家の人が、凡て光を失つて、灰色にぬりつぶされてしまつた氣がした。今まで幸福だと感じてゐた自分の生活が、路傍の土に伏す乞食よりも、もつとみじめに思はれて來た。お腹が、ちぎれるやうに痛んだ。精神的苦痛も度を越すと、肉體的苦痛を伴ふものである。心がもがけば、肉體までが痛み出した。彼は、腸が斷つと云ふ支那人の形容詞が嘘でないと云ふことが初めて分つたやうな氣がした。

「妖婦！」

彼は、かう折枝を罵しつて見た。しかし、折枝が妖婦でない事は自分自身がよく知つてゐた。折枝を妖婦と片づけてしまつて、彼女をあきらめることは、彼の理性がゆるさなかつた。彼が最初信じたほど純眞な女でないにしても、男をだますやうな惡い女性でないことはたしかだつた。彼があまりに熱心に通ふので、いくらか好意を見せてゐたが、彼女にはとつくに、あの社會で云ふ旦那があつたのである。彼が結婚してくれと云つたのが、既に無理だつたのであると、良樹は考へた。いな彼女には旦那はないのだが、彼よりも佐久間の方が好きだつたのである。この最後の考が、彼には一番堪らない考へ方だつた。もしこの考へ方が當つてゐたとしたならば、彼に對する拒絕は佐久間に對する承諾をハツキリと意味してゐたのである。

たゞ[illegible]する事件はない。これは[illegible]。[illegible]れないことはない。しかし、自分の手から[illegible]。自分の手近の人の掌中には入ると云ふことは、單なる失戀ではなく、もつと積極的な苦痛だつた。それは戀愛地獄の中の無間地獄だつた。

今頃、折枝はどつかの四疊半で、佐久間にピツタリ寄り添つて、あの黒い瞳をうるませて、あの透き通るやうに白い頰を佐久間の顏にピツタリと寄せて……などと考へて來ると、

『あゝ、堪らない！』

良樹は、頭をかゝへて寢臺の枠にぶつつけたいやうな物狂ほしい衝動さへ起つて來た。

むろん、良樹はその夜一睡も出來なかつた。

父が、今度の結婚について、相手の方は大丈夫かと幾度も云つたことが、今更のやうに思ひあたつた。父は、新橋で放埒な生活をつゞけてゐる丈に、藝妓と云ふものを知つてゐるのだ。自分のやうな、甘いお坊つちやんではないのだ。折枝が、自分を愛してゞも居るやうに思つたのが、いけないのだ。たゞ彼女は藝妓として、お客に勤めてゐたゞけなのだらう。だが、佐久間には……

良樹は、いつまで考へてもはてしのないことを、考へつゞけた。考へれば考へるほど苦しくなつた。考へまいとしても考へ



ぬわけには行かなかつた。一層のこと意識を無くしてしまひたい、それにはねむるより外仕方がないと思つても、眼は夜の更けるまゝに冴えかへつて行つた。

苦しむ時間は、歡びの時間に比ぶれば十倍位も長いものだ。良樹は、生れて初てこんな怖しい苦しみに會つたのである。

到頭夜が明けてしまつた。しかし、夜が明けても、良樹の心にだけは、太陽はいつが來ても昇らないのである。

良樹は、睡れなかつたゝめに、身體が崩れるやうに重かつた。彼は、會社を休まうかと思つた。でも、佐久間のことが心配になつた。折枝が佐久間の手に歸したかどうかそれが、確めたかつた。それには、會社へ出て佐久間の容子を偵察する外ないのだつた。

彼は、さう考へると、父とは顔を合はさないやうに、早く食事を濟ませると、いつもの通り、家を出た。

電車の窓から見る芝、麻布一帶の街路は、昨日と同じやうに忙しい街路だつた。だが、人間が何のためにこんなに營々として働かねばならないのか、凡てが馬鹿々々しく呪はしいやうな氣持になつてしまつた。

會社へ出て見ると、佐久間はまだ來てゐなかつた。彼は、擔當の事務の帳簿を開いて見たが、自分の仕事そのものが、空漠な無意味な仕事のやうに思はれて仕方がなかつた。

佐久間は、良樹より三十分も遲れて來た。佐久間が出社した姿を、チラリと見たが、良樹は容易に顔を上げて、佐久間の顔を見ることが出來なかつた。もし、佐久間が晴々と笑つてゐたならば、彼の苦惱は忽ち倍加されるに定まつてゐたからである。だ



ぜ、何時までも、見ないですませる訳にも行かなかつた。良樹は、給仕を呼んだついでに、顔を上げて自分と一間とは離れてゐない佐久間を見た。彼は、そのとき、ホッと安堵の息をついた。佐久間は、今朝良樹が洗面所の鏡に映して見た自分の顔と同じ位、蒼白な顔をしてゐた。

彼もまだ決して、折枝を得てゐるのではないのだ。さう思ふと、良樹は佐久間に悪いと思ひながらも、うれしかつた。どうかどうか、佐久間に行かないでくれ！　折枝よ。良樹は、さう祈らずにはゐられなかつた。

良樹は、一日中誰とも口をきかなかつた。佐久間も、暗澹たる顔をしてゐた。良樹は、それを欣ぶとともに、佐久間の心も可愛相だと思つた。しかし、背に腹は代へられなかつた。自分が、失戀の苦しみを味ふならば、佐久間にも一しよに苦しんで貰ひたかつた。

四時が打つた。だが、退社時間になつても、良樹はどこへ馳けつけてゆくところもなかつた。心の内が、沙漠のやうに淋しかつた。こんなことなら、あんな慌たゞしい求婚なんかするのではなかつた。い

つまでも、お座敷で普通の客と藝妓として會つてゐればよかつた。

良樹は、直ぐ家へ歸る氣はしなかつた。足は、やつぱり銀座の方へ向いた。彼は、今一切れの愛のかけらでも欲しかつた。たつた一言の愛撫の言葉でも欲しかつた。でないと、良樹の心は渇き切つて死ぬかも知れなかつた。

彼は、ふとカフエ・イーグルのことを思ひ出した。瑠璃子の白い顏が、目の前に浮んで來た。彼女だつたら、きつと自分を微笑を以て、迎へてくれるに違ひなかつた。いつか、彼女の饑餓を救ふために金を出してやつてから、しばらく會つてゐなかつた。

良樹は、溺れる者が、藁でも、掴むやうな氣持で、カフエ・イーグルの扉を押した。

すると、彼の姿を素早く見つけた女給が、

『瑠璃子さん！ 瑠璃子さん！ いらしつたわよ。』

と頓狂な聲を出して帳場の方を向ひ叫んだ。

すると、顏中が笑ひでくづれさうになつてゐる瑠璃子が、小走りに奧からかけ出して來た。

『まあうれしい！』

さう叫びながら、彼女は躍るやうに、二三度飛び飛びをした。

『なぜ、こんなにいらつしやらなかつたの。わたしうれしいのよ。丁度わたしの番なのよ。こんなうれしいことはないわ。』

瑠璃子は、一人でしやべつてゐた。良樹は、心の底の重たさは、ちつとも變らなかつたが、それでも昨夜以來初て微笑が、たゞ上部だけではあつたが、顏の上に浮んで來た。

『カクテルを貰はう。』

『さう、お酒おのみになるの？』

『うむ、これから少し、飲む。』

『およろしいの。お飲みになつても。』

『うむ。いゝとも。』

『ぢや、一番かるいカクテルがいゝわ。シルヴア・ストリイト。銀の街と云ふのはどう。』

『いゝ。それを飲まう。』

瑠璃子はやがて、銀色に光る混合酒を盛つた玻璃盃を持つて來た。

『なぜ、いらつしやらなかつたの。あんまり、みつちやんばかりに會つちや、いやですわ。』

『みつちやんつて？』

『あなたの好きな道代さんのことよ。』

折枝のことを話されるのは、今の良樹には一番つらかつた。

『誰が、そんなに會つてゐるもんか。』

『さう。それなら、いゝわ。貴女、道代さんとは、ほんとうのお仲よしだつたのよ。でも、この頃少しいやになつたわ。』

『なぜ?』

『だつて、道代さんがあるから、貴君はわたしのところへ來て下さらないのでせう。』

『そんなことがあるもんか。』

『いゝえ。さうだわ、さうに定まつてゐるわ。』

『僕は、折枝とは會はないことにしたよ。』

良樹は、暗然として云つた。

『なぜ?』

『なぜでも。』

『さう。それぢや、道代さんにわるいわ。半分々々がいゝわ。ウソ! ほんとうは、わたしの方が少し多い位だと、いゝんだけれど。』

『とにかく、折枝とは會はないことにしたよ。』

『なぜなの?』

『おい! 瑠璃ちやん、ほんとうの事を云つてくれないか、あの女はウソをつく女かい?』

『いゝえ。あんな正直な人ないわ。』

『ぢや、あの女は男をだます女かい。』

『いゝえ。あんないゝ人が、男をだますやうだつたら、お天道さまだ嘘だわ。』

『ぢや、やつぱり、たゞ……』

(僕を嫌ひなだけなのだ) 良樹は心の中でさうつぶやいた。

『どうなすつたの、ほんとうに。』

『いや、よさう。』

『道代さんが、あなたに何か云つたの。』

『いや、何にも云はない! 道代のことは、何にも云はないでくれ。』

良樹は何にも云はなかつたけれども、察しのいゝ瑠璃子には凡てが分つてゐるやうだつた。

『さう。ぢや、道代さんのことは何にも云ひませんわ。ぢやその代りに、わたしの所へはきつと來て下さる。』

『うむ。きつと來る。』

『さう、うれしいわ。わたし、お店に來るのは、あなたにお目にかゝることだけが、たつた一つの樂しみなのよ。』

『……』

と、そこへもう一人の女給が、近よつて來た。

『ねえ、藤本さん、少し顔を見せて上げて下さいよ。でないと、瑠璃ちやん、ヒステリイを起してたいへんなのよ。』

良樹は、それには何とも返事が出來なかつた。もし、瑠璃子と折枝とが、代つてゐてくれたら、自分はどんなに幸福だらう

と思つた。

『わたし、お店へ來るのは、貴君にお目にかゝるのが、たつた一つの樂しみなのよ。だから、わたし貴君がいらつしやらないと、もうガツカリしてしまふのよ。』

と、瑠璃子は、ベソをかきさうな顏で云つた。

良樹は、自分自身失戀にもだえてゐるので、瑠璃子の愛を受け入れる餘地などは少しもなかつた。でも、自分を愛してくれる女性が、たしかに一人だけは存在することは、暗澹としかけてゐる彼の人生に、一つの星として輝かないわけではなかつた。

和解

良樹は、その二三日、佐久間の顏が氣になつて仕方がなかつた。だが、佐久間の顏は、毎日暗かつた。佐久間の顏が、暗いのは、良樹にとつて救ひだつた。

ある日、良樹が社を退けてから、歸らうとしかけてゐると、思ひがけなく佐久間が、彼の後から追ひかけて來た。

日比谷公園の前の電車通で、佐久間は良樹に追ひついた。

『おい！　藤木君！』

『何だい！』

『君、僕達はもう握手してもいゝぢやないか。』

『なぜ！』

良樹は、佐久間の顏を見ながら、目をみはつた。

『だつて、僕達はどちらかゞ、折枝を得れば、仲直りの握手をしようと云ふことになつてゐた。だが、兩方とも彼女を得られない場合も、握手してもいゝ筈ぢやないか。』

さう云ひながら、佐久間は苦笑した。良樹も、苦笑がやつぱり口もとに浮ぶのを制し切れなかつた。

『君も、駄目だつたのか。』

良樹は、久し振になつかしい友誼に對する氣持でさう云つた。

『うむ。』

佐久間は、うなづいた。

『握手しよう。』

良樹は手をさし出した。二人は、往來であつたが、強く〱手を握り合つた。

『久し振に、飯でも喰はうか。』

『よからう。』

二人は、銀座の方へ歩き出した。

『だが藤木君！　この勝負は、結局僕の力が負けだつたよ。折枝はかう云つたぜ。藤木さんにお斷りしましたから、貴君にもお斷りしなければなりませんだつて。どうも、君の方に力點が



あるらしいよ。』

『そんなことがあるもんか。』

と、藤本は云つたが、折枝に對する氣持は、よつぽどやはらいだ。

『でも、僕はあれはあきらめられないよ。君はどう。』

『僕だつて、同じことだよ。』

『ぢや握手をするのは、少し早かつたか。』

『はゝゝゝゝ。』

『はゝゝゝゝ。』

二人は笑つた。

『どうも旦那があるらしいんだ。』

佐久間は、一寸暗い顔をして云つた。

『僕もさう思ふ。』

『たしかに處女だと思つたがな。』

佐久間は、殘念さうに云つた。

『僕も。』

良樹も同じ位、口惜しさうに云つた。

『君は、なぜ彼女に旦那があると思ふのだ?』

『だつて、隨分大きいダイヤを最近になつてはめてゐるぢやないか。』

『うむ。君にもそんなことが氣がついてゐたのか。』

『僕だつて、その位なことは分るさ。はゝゝ。』

と良樹は笑つた。

『ある相當遊んだ人の話に、藝妓の入れてゐるダイヤの指輪なんて云ふものは、つまり生蕃人が家に飾つてある頭蓋骨と同じやうなものだと云ふのだ。ダイヤの指輪の數で、今迄に何人いい旦那を持つてゐたかゞ知れると云ふんだよ。』



『はゝゝゝ。』

良樹は笑つたが、しかし心は暗かつた。

『折枝も最近に、いゝ首を一つとつたわけなんだ。はゝゝ。』

『…………』

良樹は笑へなかつた。

『僕は、あきらめのために、その旦那が誰だか調べて貰つてゐるんだよ。そんなことは、釣り損じた魚の大きさを計つてゐるやうなもので、馬鹿々々しいと云へば、馬鹿々々しいんだが。』

だが、良樹もあきらめのために、それが知りたかつた。

『どうだ、僕の云つてゐた「春川」と云ふ家へ、御飯だけたべに行かないか、もちろんもう藝妓なんか、よぶ氣持はないんだ。御飯だけたべに行かないか。勘定をして來たいと思ふし……』

『うむ。交際はう。』

もう、そんなところへは、近づきたくなかつたが、久し振りに、仲よくする親



友の勸誘を斥けたくなかつたので、良樹は承諾した。

佐久間と良樹は歌舞伎座の前を右に折れた。良樹は白晝からうした町通りへ來るのが、何となく氣がとがめた。

『春川』と云ふ家は、この近所でも、目に立つほど美しい家だつた。本建築をしたばかりの木口が輝くばかりだつた。

二人は奧まつた粋な八疊間に通された。

『今日は、おめづらしくお連さまですね。』と、女中が佐久間に云つた。

『もう、あの方はすつかりあきらめてしまつたんだ。』

『ぢや、色にはなまじ連は邪魔ではなくなつたのですね。』

『まさに、その通り。』

『まあ、あきらめがあまり、早すぎはしませんか。』

『いや、もう澤山だ。』

『おほゝゝゝ。』

『今日は、御飯だけだよ。』と佐久間は云つた。

『かしこまりました。』

『何かおいしさうなものを三品か四品ね。』

『はい。』

女中は去らうとした。佐久間は、後からよびかけた。

『おい！　おせきさんはゐる？』

『えゝ、ゐますわ。』

『一寸よんでくれ。』

『はい。今、お帳場で、何か書物をしてゐましたから、すぐ參るでせう。』

良樹は、何となく落着かなかつた。

『當分こんなところへは來ないつもりだよ。』

佐久間は、辯解するやうに云つた。

『お互にね。』

『でも、僕はあの女は憎めないね。これも未練かも知れないけれど。』

『僕も。』と良樹は云つた。

『あはゝゝゝお互にほれた弱味と云ふ奴かも知れないけれど。』

『あはゝゝゝゝ。』

二人は、淋びしく笑ひあつた。二人とも、折枝のことで胸が一杯なのが、お互に感じられた。

おしぼりとお茶を持つて、三十位の年増の女中がはいつて來た。

『いらつしやいませ。』

さう云つて、良樹に挨拶してから、佐久間に云つた。

『どうなすつたかと思つてゐましたのよ。』

『どうもしない。すつかりガツカリしてゐるだけだよ。』

『ほんとに、あの方の[illegible]忘れませんねえ。ちやんと、奥さまになさらうと云ふのにね。』

と、女中は凡てを知つてゐるやうだつた。

『もう、その話はよしてくれ。それよりも、旦那の名前は分つた？　その方を、あきらめのために、きゝたいんだよ。』

と、佐久間が云つた。良樹も、あきらめの爲にそれが、きゝたかつた。

『えゝ見當がつきましたのよ。でも、此方さまの前でお話してもいゝんですか。』

『うむ、いゝとも此方も、その旦那には恨みがある方だから、はゝゝゝゝゝ。』

『おや、ぢやあなたも折枝ファンなのですか、おほゝゝゝゝ。どうも、よつぽど苦心したんですが、折枝さんの稼業の家の借金を拂つたのは、「ふーさん」らしいのですよ。』

良樹はゾツとした。

『「ふーさん」つて？』佐久間は、不思議がつて訊いた。

『御存じありませんか。藤本さんと云つて白金にいらつしやる有名な實業家ですよ。』

『えゝ！』佐久間は、駭いて良樹の顔を見た。良樹の顔は、凡ての血を失つて紙のやうに白かつた。

『おい！　そんなことは、うつかり云はないやうにしてくれ、そんなこと云ふな……』

佐久間も、良樹の顔に現はれた苦悩の痛ましさに打たれて、すつかりあわてゝしまつた。

さすがに、場なれてゐる女中だけに、すぐ良樹の様子に氣がついて、

『ほんとに、こんなことは、うつかり申せませんですの。いろいろこの里にもとんでもない噂と云ふものがございましてね。』

と、女中は言葉をにごした。

良樹は、顔を上げることが出來なかつた。彼の身體は、わなわなふるへてゐた。女中は、氣をきかして立つていつた。

『とにかくお銚子でも持つて參りませうね。』

良樹は、無念の涙が、ハラハラと流れ出して、どうにも抑へることが出來なかつた。

『佐久間君、面目ない！　僕を嗤つてくれたまへ！　僕を嗤つてくれたまへ！』彼は膳の上に泣き伏した。

『君、そんなに興奮しなくつてもいゝよ。噓の噂と云ふやつは、いくらでもあるものだよ。』

『いや、僕は父を信じられないんだ。僕の父なら、やりかねないんだ。父！　父！　僕は苦しい父！　父！　父！　あゝ僕は情ない！　口惜しい。僕は、僕父の子として生れた事を呪ひたい！』

良樹は、おいおい泣いた。（つゞく）

名士熱涙物語



忘れ得ぬ熱涙のあと

伯爵　後藤新平

我輩は、人も知る通り、元來が醫者であつて役人生活をした者といふに過ぎないのだが、しかし半生を通じて過ぎ越し方を眺めると、かなり波瀾のある生活をした、つまり數奇の運命に弄ばされたと言ふことが出來る。

それは生れつきが強情で、何事にも負け嫌ひと云ふ善くない虫が、腹の底に陣取つてゐるためではあるが、しかし之れが我輩を失敗させもしたが、また成功させもしたものだ。

さて、その中でも實にひどかつたのは、あの相馬事件に連坐したことだつた、幸にも早く黒白が判明したので、間もなく大手を振つて道を歩く身になつたのだが、それでも世間ぢや仲々承知しない、『彼奴は臭い飯を食つた奴だ！』と言つたやうな險しい眼つきを我輩に向けたものだ。

その後、明治二十八年になつて、日清戰爭も終らうといふ頃のこと、『臨時檢疫』といふ大規模の仕事が開始されることとなつた。これは日本が未だ嘗て試みたことのない大事業

偉人の少年時代

◎樹上のウヰリアム・カレー

恐るべき蠻地に深く入つて、キリストの教を説き、一生をその事業に捧げた印度宣教師ウヰリアム・カレーは、子供の時から剛氣不屈、物に驚く事を知らなかつた。

ある日、彼は、高い木の上に梟が留つて、眩しい日光の直射に眼を細くしてゐるのを發見するや、「や、梟がゐる掴まへてやらう」悪太郎

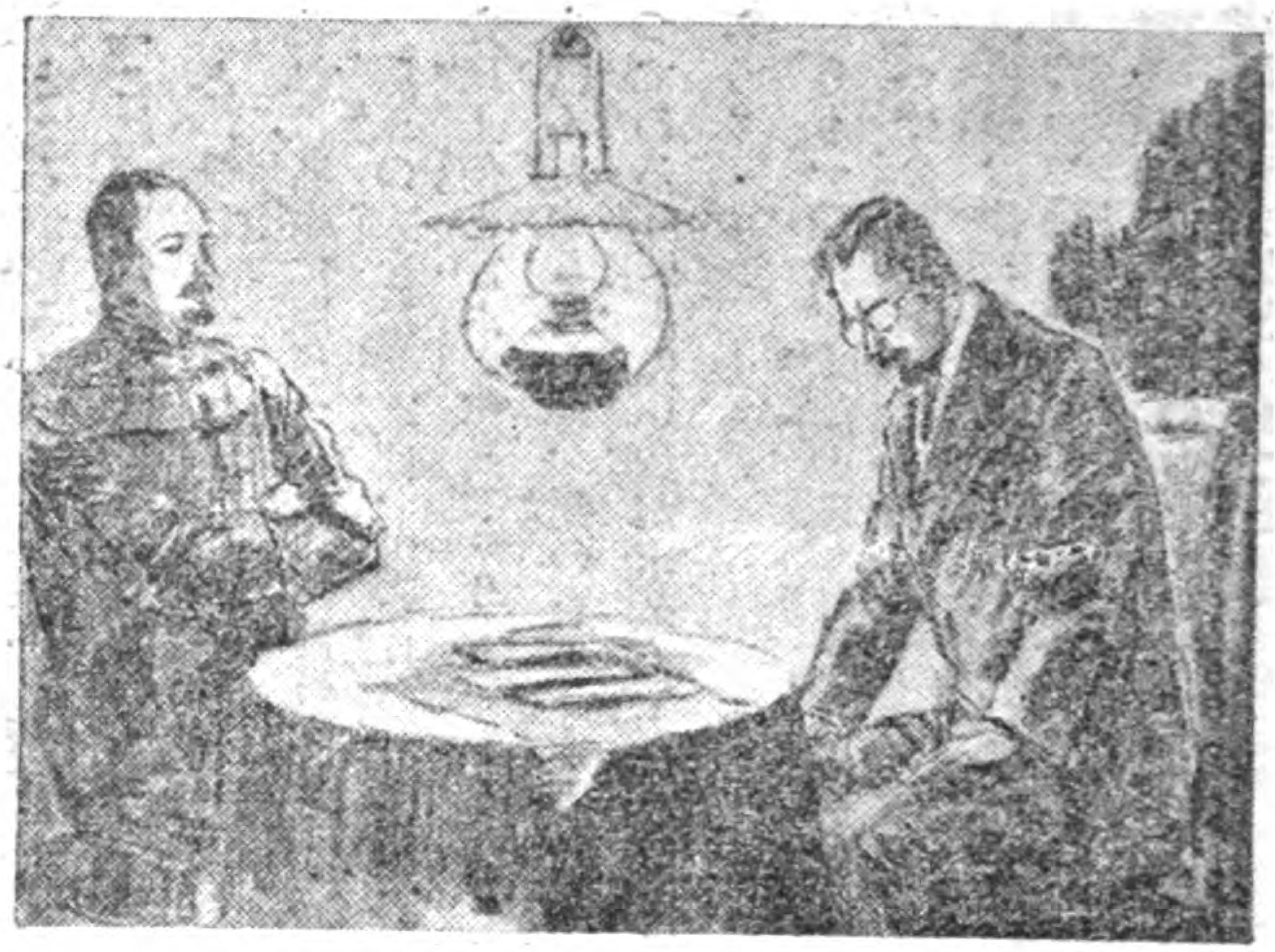


共の先頭に立つて、彼は猿のやうに樹登りを初めた。途端、彼は足踏み外して眞逆樣、ずでんどうと大地に墜落

で、しかも陰々滅々な仕事だつたのだ。

そこで政府が、それを誰にやらせるかといふ事になつたが、その人選も仲々六つかしい。ところが是れまで日蔭者みたいに思はれてゐた我輩が、畏れ多くも廣島の大本營下に、その仕事をするやうに選ばれたのは、實に意外とも意外だつた。

この榮譽ある任務、我輩にとつては實に甦つたほど幸福な地位を與へられたことに就ては、推擧者たる石黒軍醫總監の厚意も有難いが、『後藤なら宜しい』と乘り出した兒玉將軍の任侠には、全く男惚れがした、そこで我輩は身命を賭してやらうと覺悟した。



實を言ふと當時我輩のまはりには小姑みたいな、いはゆる鬼千匹といつたやうな連中がどんなに澤山居たかわからない、しかし一旦知遇に感じてやらうといふのだから、そんな者がいくら居たつて構はない、御殿女中が陰口をするやうなものだ、いくらでも言ふがいい、こつちは信任を受けた身だと、自分も自重して粉骨碎身やつたので、どうにか斯うにか、さしもの難事業も無事に仕上つて、諸方から『まあ、御苦勞だつた』と慰められるやうになつた。つまり實績そのものがすべての非難を一蹴し得たわけである。

いつたきり苦しさうに[illegible]、直ちに病院へ擔ぎ込まれて、[illegible]を冷たいベッドの上で呻吟してゐた。

『もうこれに懲りて、お惡戲をなさいますなよ』

退院の時、附添の看護婦が、彼の背中を撫でていつた。彼はむつつりとして返事をしなかつたが、病院の門を出るや直ちに駈けつけたのは、大木の下であつた。

『あ、居る〳〵、あの梟め、まだゐるぞ！』いふが早いか、また樹登り、遂に梟を生捕つてしまつた。その豪膽は遂に彼をして前人未踏の蠻地布教をなさしめたのである。

◎踵を返したガーフイールド

大工見習、炭酸加里製造所の職工、伐木人、農夫、船員と、凡ゆる艱苦と闘ひつゝ苦學力行、遂に米國最高位大統領の椅子に坐つたガーフイールドは、稀に見る奮闘家であるが、少年時代から剛毅不屈の意志を持つてゐた。

ところが或る日のこと、兒玉將軍は、

『これは、當座の御褒美だよ』

と言つて、一つの風呂敷包みを我輩に下された、何かと思つて開いて見ると、驚くべしそれは我輩に關係する數通の彈劾的意見を認めた手紙や書類だつた。

膽玉の大きな將軍は、數ケ月のあひだ一通も讀まずに仕舞ひ込んでおいた、一旦信任した以上何と言ふ者があらうと、そんなことに頓着されなかつたのだ、そして『もう用事も濟んだやうだから、封のまゝ渡すよ』と言つたやうな其の襟度には、平生强情我慢を誇つてゐる我輩も熱い奴がボタ〳〵と膝の上に落ちた、これが感激の涙でなくてなんであらう？

もう一つは、本誌の新年號に書いたやうに伊藤公がハルビンで遭難された時で、有體に言へば公の北滿行は、實は我輩の進言が因になつてゐる。「春秋」の論法から言つたならば『後藤、伊藤を殺す』といふことになつたわけ、大變な罪作りをしたものである。

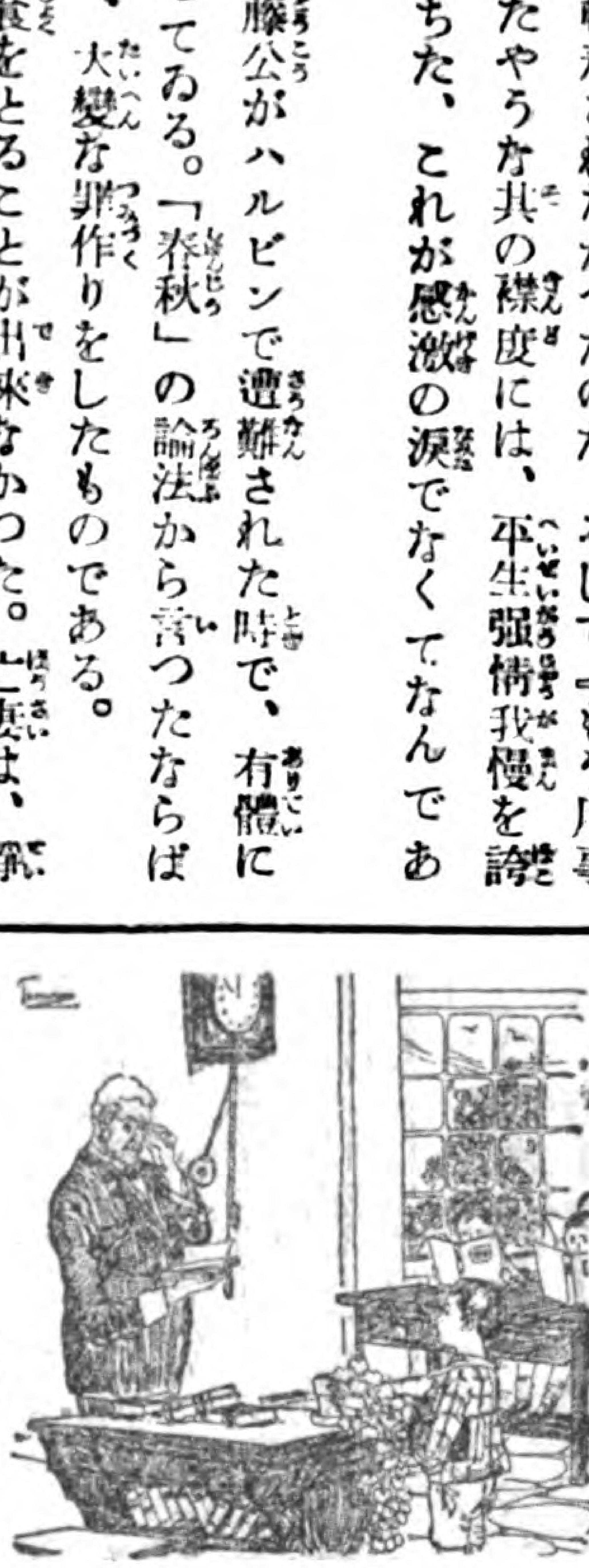
當時、兇變の電報を受取つた我輩は、一時寢食をとることが出來なかつた。亡妻は、靜に夜人定つて、孤燈のもとに悔恨の涙をしぼつてゐる我輩をどうして慰めていいか、言葉も何も無かつたといふことだ。

公の悲壯な最期は、天命のしからしむるところではあらうけれども、事茲に至つては、我輩が公を死地に導いたやうな心地して、如何にも殘念でたまらない。我輩は表面には唯悵然大息してゐたが、衷心には實に熱涙潸々たるものがあつた。

我輩の七十年間の生涯を通じて、此の二つほど痛切だつたものはない、前者は嬉し涙であり、後者は口惜し涙であるが、その熱に於ては即ち同一である。

『ヘンリーとゼームスは、今、傍見をしてゐたであらう。罰として退場を命じる。荷物を片附けて直ちに家へ歸れ！』

ある日、小學校で、先生からこんなお叱言を頂戴した。ヘンリー・ボイントンは泣く泣く家へ歸つたが、ゼームス



•ガーフイールドは跣足で自家の門まで來ると、くるりと踵を返して、再び教室へ戻つて來た。

『何故、戻つて來た！』教師は呶鳴つた。

『はい、家へ歸つて來ました。先生の仰有つた罰は果しました。先生は、家へ歸れと仰有いましたが、もう來るなと仰有いませんでした』毅然として答へた。



眞實の慈愛

實業家　山下龜三郎

『嫂さん、こりや一體如何したのでせう』

餘り不審に思つたので、私は嫂に訊ねてみた。

私の母は八十九で亡くなつたが、あとを整理してみると、まだ一度も手を通さぬ木綿着物が、揃へて三枚までも出て來た。

『縞柄の樣子では、昨日や今日作へたものではない、大分古い流行のやうに思はれるが、それにしては手を通した模樣もないし、それに近頃、作つておあげしたものなら、こんなゴチ〳〵した地質のものを、選ばない筈だから』

『それですか、それはね』

嫂は、私の不審をさもこそと肯いて、

『もう作つてから三十幾年になります。あなたが、最初お母さんに送られたお金で作られたもので、縫つたのは私ですよ』

聞いて私は吃驚した。不審は益々募るばかりである。

昔を想ひ出すと、餘り親達に大きな口は利けない、私が國を飛び出したのは十六の時、親達にも心配をかけ、自分もさんざん苦勞して、漸く横濱で少しは落付いた暮らしの出來るやうになつたのは、二十五の時である。

その時はじめて母のことを想ひ出し（お蔭さまでどうやら人がましく暮せるやうになり

「よし！」

[illegible]は遂に[illegible]したる、そして、（この子は、確かに偉いものになるぞ）と思つた。

西郷従徳侯の驢馬

西郷従徳侯が、まだ近衛騎兵の幼年學校に通つてゐた頃であつた。ある外國人が、父君従道侯を訪ねたその歸るさ、従侯に驢馬を一頭、次來る時に買つて來てあげると約束したが、その次に訪ねた時には、もう約束の事は忘れてゐた。

「驢馬は何うしたの？」と従徳侯。

「驢馬？　え？　何でしたつけね？」

外國人は惚けた。と見た従徳侯は、いきなり靴を脱いで、外國人に打つて掛つた。

「嘘付き！　それでも[illegible]、男か？」

小さくても既に武將の子には、不敵の氣魄が漲つてゐた。外國人もその見幕に恐れ、平謝りに謝つて、遂に次の[illegible]の時には驢馬を買つて來た。侯が塾に通ふ時乘用した驢馬がこれである。

ました、餘り少くてお小遣ひの足しにもなるまいけれど、菓子でも買つておあがり下さい」と五圓の金を送つてあげた。それなりけりで、私もすつかり忘れてゐたが、嫂の話の樣子では、その時の金らしい。

『そんなことも、ありましたかナ』

『えゝ、その時はね、お母さんが大層喜ばれてね「あの惡戲ものの龜が、母を思うてお金を送つて呉れるやうになつた、その最初のお金で、菓子や飴を買つて喰べてはすまない、私の着る衣類は宅で作つて呉れるが、病氣の時着る衣類まで世話になるのは心苦しい、龜から思ひがけない金を送つて來たから、この龜の心のこもつた金で、病氣の時の着替を作つて置きませう」と言つて作られたのですよ』



私は嫂の話を聞いてゐる內に、喉が熱くなつた。

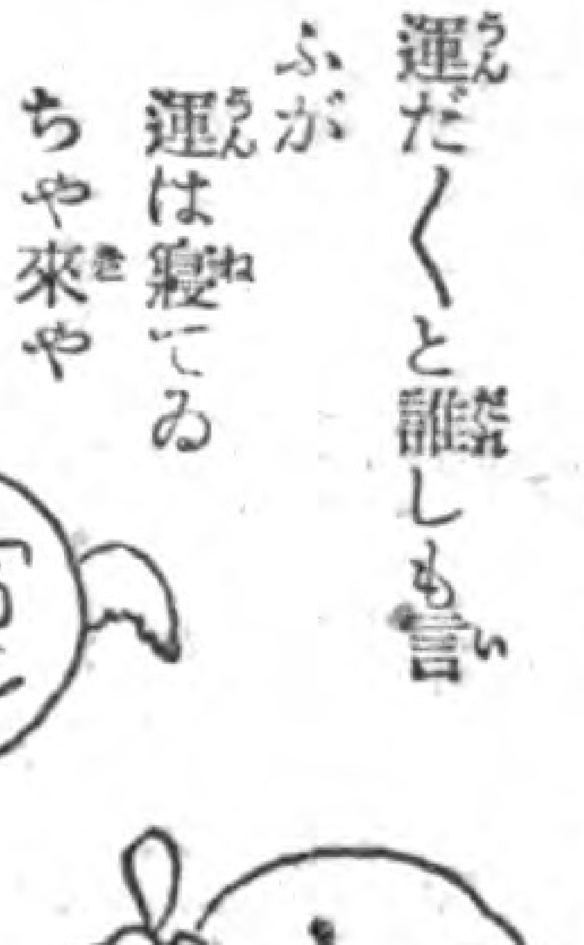
（そんなにまで、お母さんはこの龜三郎を思つてゐてくれたのか）

私は思はず、その着物を抱きしめてハラハラ涙を溢した。

一番心配をかけた自分の志をこめたものを、一番尊く使つてくれた母の心に、無限の慈愛を感じたのである。平

處世教訓　繪入都々逸

運だ／＼と誰しも言ふが　運は寢てゐちや來やしない





金が慾しけりや働かしやんせ　貧乏したけりや寢て暮せ



愚痴を言ふ間に働かしやんせ　愚痴ぢやお金がとれはせぬ



金の逃げ出す音かと聞けば　三味も太鼓も



母が、心の中では斯程迄も慈愛をこめてゐてくれたかと思ふと、かう語るだけでも目に涙が浮んでくる位である。今日を成す迄には、先輩友人から、隨分好意友情をも蒙つたし、感激したこともある。が、夫れにも増して心を動かしたのは此時であつた。



正道を歩む人

貴族院議員 小久保喜七

僕の半生は議員生活を以て一貫してゐるが、その政治的生命の故郷は、何と言つても選擧區たる茨城縣の猿島郡である。

その猿島郡の八俣村に初見新太郎といふ人が居た、その人は茨城縣隨一の多額納税者である上に、郡第一の都會である境町の坂東銀行頭取だつたので、鬼に金棒、虎に翼と言つたやうな素晴らしい勢力を持つてゐた。その人の叔父にあたる初見八郎氏も亦郷黨に聞えた人で、早くから彼の思想界の先覺者中江兆民先生に師事し、また國民黨に籍を置く衆議院議員として明治三十年から三十七年頃まで、大に政界に活躍したものである。

そんな關係から、この新太郎氏が國民黨を贔屓したのも尤もな事で、隨つて反對黨である僕に對しては好感を缺き、小久保は驕慢な奴であると言つて嫌つたのも是非ないことである。

時しも大正四年のことだ、大隈内閣はその總選擧に際し、反對黨の一員である僕の立候補に對して大干渉を加へ、三十七年以後久しく政界を遠のいてゐた初見八郎氏を立てて、僕の當選を妨げようとしたのである。しかし當時は大選擧區制だつたので、幸ひ彼我兩人

酒は酒屋に
牡丹餅や餅屋に
金のなる
木は腕にある



富んで病氣で寢
てゐるより
も
まめで貧乏
で稼ぎたい



つらい悲しい涙
を呑まにや
嬉しい涙
は湧きは
せぬ



樂がしたけりや
苦勞をしやれ
苦勞すりやこそ
樂もある



金よ〱と慾しがる癖にたまに入れば皆使ふ



とも當選することが出來た。けれども斯んな競爭は勢ひ僕と初見家との間を益々阻隔したことは申すまでもない事である。爾來、僕は選擧を重ねるたんびに、初見家との間に不安な感情をますく濃くしてゆくのであつた。

その後、制度が改正されて小選擧區制になつてからは、幸ひ僕の獨舞臺になつたが、初見家の人々ばかりは其の都度棄權して投票しなかつた。斯くて僕は彼等にとつて實に憎ましい敵國の觀をなしてゐたのである。

ところが大正十三年、清浦内閣の時だ。僕の屬する政友會は、憲政會や革新俱樂部と提携し、いはゆる護憲三派の旗幟を樹て、その非立憲に對して猛烈な反對運動を起したところ、遂に議會は解散されて、新たに總選擧が行はれることになつた。

その時である、急に床次竹二郎君が政友會を脫し、その過半數の黨員を率ゐて政友本黨を組織し、清浦内閣の與黨となつて働くといふ形勢を取つたのである。そして總選擧に對しては狙ひ打ちの方針をもつて政友會有力者の當選を妨害する事とし、東北では高橋總裁や東氏、中國では望月圭介、島田俊雄の二氏、北陸では山本条太郎、山本悌二郎の二氏、關東では横川千之助氏や武藤金吉氏といつた連中に對し、頗る苦肉の策を設けて大干涉を試みた。

此の時、僕も狙ひ打ちをされる一人になつて、あはれ落選の運命を背負はされさうになつて來た。といふのは、政府および政友本黨は、僕にとつての大敵たる初見新太郎氏の弟謙助君を極力勸說して候補者となし、これに依つて僕を蹴落さうといふのである。しかも時の警保局長藤沼庄平君は大學時代の同窓であるといふ情誼を以つてし、本黨の顧問山本達雄氏は選擧費を立替へると言ひ、前後左右から、この謙助君を說き伏せたといふことだ。



買喰ひ（名士の警句）

人情大臣の望月内相は、ときぐ人情的に、警句を吐く。まだ總務にならぬ頃のことであつた。友人の代議士に向ひ、

「僕は父から非常に嚴格な教育を受けたもので、子供の時に、チヨツトでも買喰をしようものなら、大目玉を頂戴したものだ。それで買喰の悪いことが頭の中に浸み込んだ。そのおかげで、今では、買喰ひばかりするやうになつた」と言つた。



内相は元來、地方の資産家であつたが、政界に身を投じてから、家も土地も皆、賣つて仕舞つたのである。

五十錢（[illegible]）

道重信教上人が、まだ宇部市の松月院に住職されてゐるときのことであつた。近所の人が、郷里の紙の幟を一本、

斯うなつては僕の立場は如何にもみじめなもの、よろしい悪戦苦闘は覺悟の上だ、斃れて而して後に止むのみと決心して、その選擧戰の陣頭に馬を進めなければならぬのであつた。何しろ初見家は土地の巨大なる有力者、その向背が僕の運命に大きな明暗をもたらすことは言ふまでもない事だ。

ところが、新太郎氏は道理の上を歩み、正義に與する高潔な人だつたから、此度の選擧に對しても正邪の觀察を誤まる人ではなかつた。そして護憲三派の動作と、僕の行動を靜かに眺め、僕が高橋總裁を扶けて日本憲政のために奮闘するのは男らしい仕打、面目の立派なもの、一點の非難するところがないと見たのである。

そこで同氏は奮起した、そして親戚知友に對し、『今日までの感情を一掃し、行き掛りを棄てて、正義の士小久保を助けよ』と宣言し、また號令した。



そして一方、謙助君は政治上に多分の興味を持つてゐる上に、先輩朋友の熱い勸めもあるので是非とも僕と戰つて見たいと頼んだのであるが新太郎氏は冷靜な立憲的情誼の上から、『小久保を再選させないのは國家に對し

切らせて貰つた。そしてお金を上げたいといふ。上人は、要らぬといはれるが、是非にといふと、



『それぢや、五十錢も置いて行け』といはれた。實は地方の相場にして、十四五錢くらゐの竹であつた。

信教上人は、お金には一切、無頓着で、隨分、高價のものにでも五十錢、安いものにも五十錢、何でもかでも五十錢であつた。

碁（偉人小話）

碁好きの伊藤公は笊碁であつた。三輪傳七といふ代議士が、或日、公と對局したとき、石を下しながら

『何事でも、公には頭が上らないのだから、せめて碁にでも勝たなけりや……』



言ひつつ打つてゐる。

公はまた、『碁に負けるくらゐ何ヤイ』

と言つて、パチ／＼打つてゐる。公は、いつも三輪には負けるのである。

て済まない事だ』と言つて、謙助君の立候補を抑へたのである。

政府黨は止むを得ず、他の候補者を立てて猛烈な運動を開始した。さうすると同氏は親しく督勵するばかりでなく、自ら進んで僕のために戸別訪問までやつて、全力を傾倒したのである。されば政府と政友本黨から猛烈な攻撃を受けたにも拘らず、僕が遂に大局を制し當選の榮譽を擔ふことの出來たのは、實に新太郎氏の力によるものが多かつたのである。思ふに政敵が窮地に陷つた時、好機乘ずべしとするのが、まづ人の常と言つてよい。然るに多年にわたる感情をさらりと投げ棄てて、大義名分のために正道を歩むが如きは、とても尋常人のなし得る所でない。僕は新太郎氏の義氣に對し、終生忘れ得ぬ感激を覺えたのである。

當選後、親しく訪問して感謝の意を表したいと思つてゐたが、そのうちに清浦内閣は選擧の失敗のために交迭する、僕は政友會の總務に就任する、身邊頗る多忙だつた爲めに、ついその機會を逸してゐるうちに、不幸新太郎氏は病氣のために他界した。

『あゝ濟まなかつた、殘念なことをした！』

僕は實に悲痛の感、斷腸の念に堪へなかつたのである。なぜ一度訪れなかつたか、何故感謝の意を親しく表しなかつたか、幾度悔いても、もはや返らぬ悔いである。そして、せめてもの思ひ遣りに、同氏の葬式に際し、左の弔詩を賦して柩前に供へたのである。

唯依道義作行藏　如此高風豈得忘　欲語心中人不見　蕭然泣供柩前香

（註）唯だ道に依て行藏をなす。此くの如き高風豈に忘るゝを得んや。心中語らんと欲するも人見えず。蕭然泣て供す柩前の香。

僕は今もなほ當時を追憶し、同氏の風格を偲び、常に感激の念を新たにしつゝある者である。恐らく之れは僕の全生涯にわたつても、必らずや特筆すべき感激であらうと思ふ。

看病（人と人）

桂公に信用されて内閣翰長から文部大臣になつた柴田家門氏は、公が下關で大病に罹つたときに、一週間のあひだ、全く不眠不休で看病し、遂に、公の病は回復するに至つた。

禪（奇人傳）

京都、建仁寺の、有名な默雷和尚のとき、門前にゐた楠庄といふ植屋は活佛のやうな人で、默雷とは無二の親友、いつも斷わりなしにズン〳〵和尚の部屋へ行く。それを侍僧たちが心惜く思つてゐたが、或時、只今御來客中だから、暫くお待ちなさいとやつた。實際、某侯爵が參禪に來てゐたのである。楠庄、楠はずツカ〳〵入つて行き、『坊さん何を言つてるんだ、淸水の觀音さまを見い。オイ楠庄、今、侯爵が來てゐる、おまへは平民だから待てと、仰しやるかい。默雷和尚は觀音さま以上だから、いつ入つたつて、迷惑するものかい』と、痛快にやつ付けたのである。



陸奥宗光伯

陸奥宗光伯の人物評

伊藤、黒田兩内閣の外相で、剃刀大臣と謳はれ、日本外交史に永く異彩を放つ、伯の人物月旦は、中々に面白い。



(1)**伊藤博文**……有名なる雄辯家で、立論正確、音聲は流暢、態度は端正、また談話を好み、來客に接し、數時間話し續けて倦まざるも、その短所は、談話に講釋の癖あり、人に聽かせるを好み、且つ過去の功名手柄話をすることである。



(2)**板垣退助**……流石に多年、民權家として天下に奔走したる丈けに、演説は雄大なりとはいひ難きも、聽くべきものがある。その談話は、屢、自分の功名話をすることが多い。



(3)**大隈重信**……一箇の快談家で、その談話中、冷熱弛張の妙處がある。談話は伊藤同様、教師的の口調があるが、他人の説に異論を唱へず、寧ろ賛成することが多い。けれども彼は、自負自信の心餘りに強く、如何なる談話にも、自己の力を他に認めしめむとするが故に、その話は往々、虚飾大言を免かれざる弊がある。例へば大隈伯昔日譚の如き、當時の事實を知つてゐる者から見れば、事實相違し、甚だしきは捏造したるかと疑はしむるものがある。



(4)**後藤象次郎**……世間に、大法螺吹きの評がある。談話を好み、客を好み、老いて益壯なる功名心は死に至るまで絶えず、言行、往々、常軌を逸することがあるが、自己の空想に驅られ、生涯一日も進取の念を停めたることなし。過去の手柄話をせぬところは、諸元老中、彼一人の特質なるやうに見ゆ。



(5)**井上馨**……實際家の評ある人物、談話も好きだが、自分の手柄話をせぬところは後藤と似てゐる。また想像を逞しくせざる點に於ては、後藤、大隈等と違ふ。一言にいへば、彼は現實問題についてのみ談話するのである。その頭腦に論理的觀念乏しきが故、談話中、動もすれば本題の主意を失ひ、枝葉の事柄に進入し、談話に熱が加はつて來ると、斷じて他人の異論を許さず。また談話中、他人の言說、また質問を聞違へ、非常に立腹することがある。



(6)**山縣有朋**……一見、寡言沈默の人のやうだが、さうではなく、談話を好むが、極めて謹愼、嚴密にして、その發言するや一言一句も、他日の累を招くことなからんことを努め、殊に苟くも自己の品格風采を傷くるやうな言語をのこすことを避くるに汲々たるが故に、その談話は、とかく乾燥勝ちにして、往々、その意を盡くす能はず、その半分は、聽者が推量せねばならぬことが多い。井上と對照すると、井上は冗言多く、動もすれば主旨が混亂するが、山縣は簡單に過ぎて、意味がよく分らぬ憾がある。

◎鳳は卵の中にして超群の勢あり、
龍の子は小さしと雖も能く雨を降らす

——平治物語より——

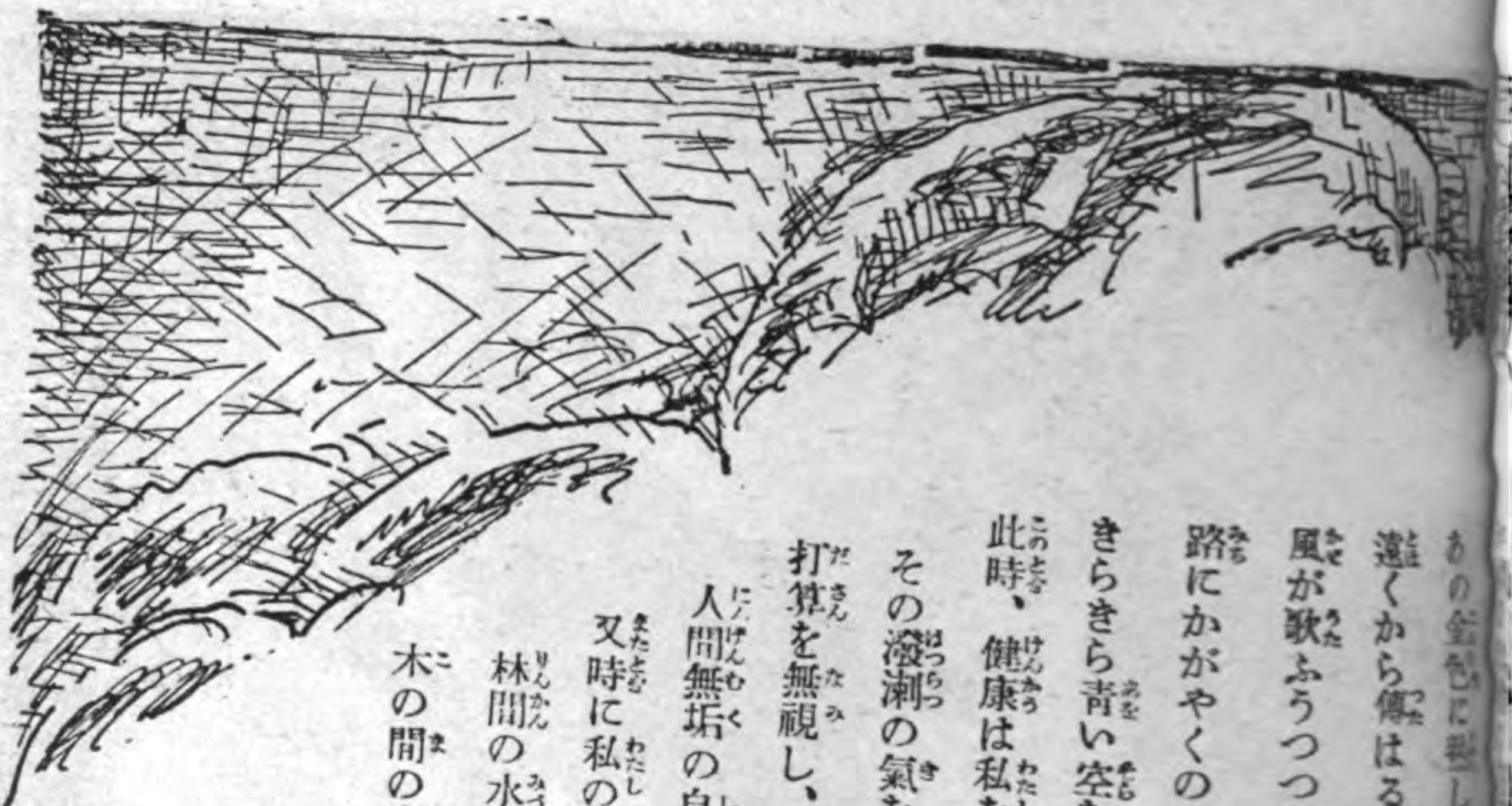


長詩

健康

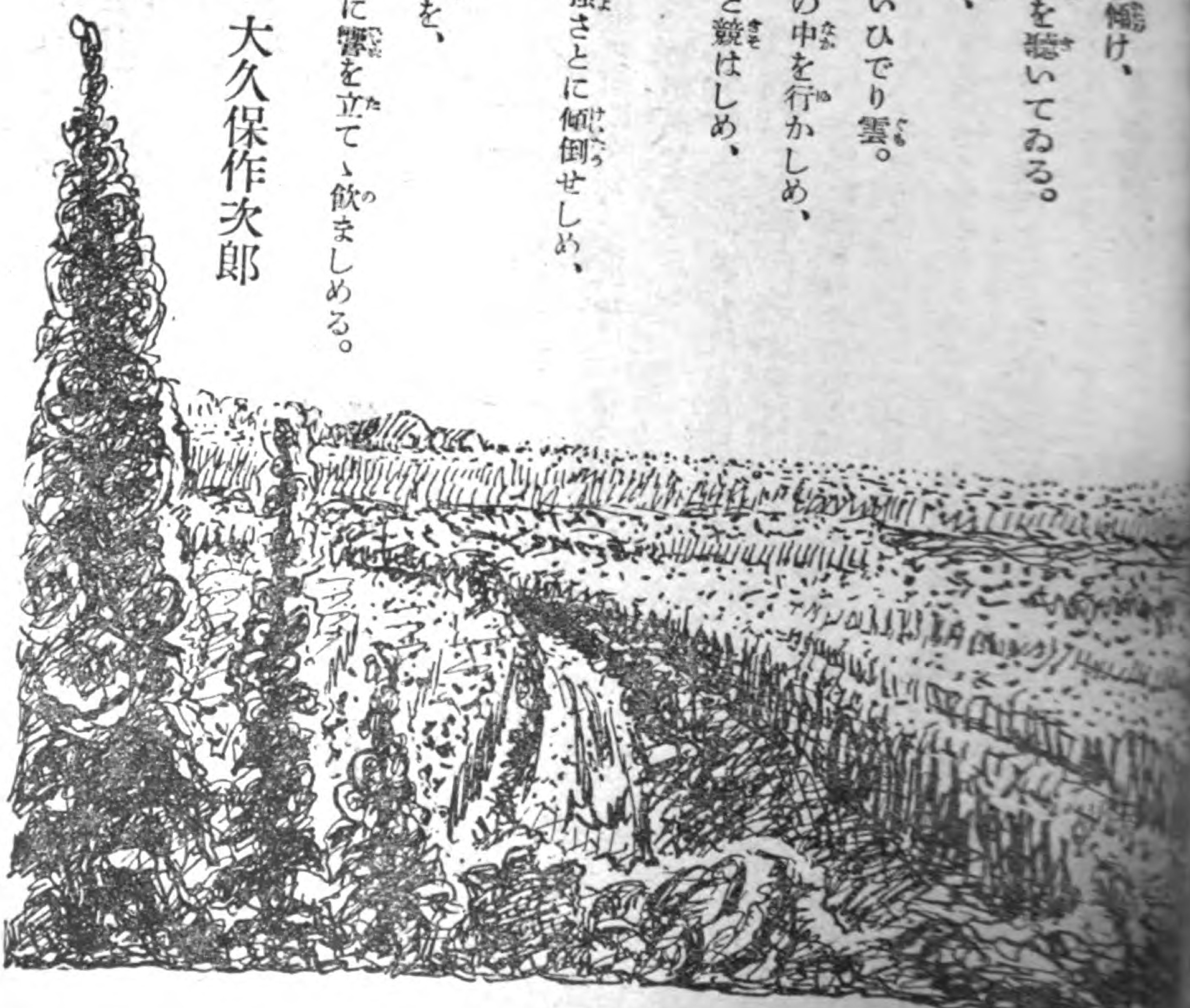
尾崎喜八

健康は、
私の生活の日々を
透明な、美々しい寶石の聯りにする。
それは私の心を
限りない優しさと男々しさとの歌で滿たし、
又私の意志の力を不敵なものたらしめる。
夏が路ばたや風景をその焔で燃やしてゐる。



あの金色に熟した麥は、
遠くから傳はる鎌の歌に耳を傾け、
風が歌ふうつつない眞晝の歌を聽いてゐる。
路にかがやくのは眞紅の立葵、
きらきら青い空を飾るのは白いひでり雲。
此時、健康は私を驅つて熱氣の中を行かしめ、
その潑剌の氣を自然の精力と競はしめ、
打算を無視し、純潔を愛し、
人間無垢の自然らしさと强さとに傾倒せしめ、
又時に私の渴した喉に、
林間の水の冷たい淸淨を、
木の間の空の碧玉と共に響を立てゝ飮ましめる。

カット　大久保作次郎





理想小說 死よりも強し

鶴見祐輔
挿繪 野崎貞雄

一

『先生どうしても、お出かけになるのですか？』

と、勇が訊いた。

『うん。今夜はどうしてもゆかなければならん』

と中江眞人は決然として言つた。

『しかし、まだお熱も取れないし、お疵の痛みもあるんでせう？』

『なーに、その方は大したことはないさ』

『いゝえ、さうぢやありますまい。今朝來たお醫者も、さう言つてゐましたよ。こゝで無理をなさると肺炎になる恐れがあるつて』

『なーに、そんなことはないさ』

『ないさと先生が仰有つても、醫者が言ふんですもの』

『こんな瑣事なことをどうかなさつて……』

『いゝや、瑣事ぢやないよ。國家の大事を前にして、僕のことなんか考へてゐられるもんか。猶一人間の體なんてものは、氣でどうでもなるんだよ。氣が弱ると體も弱るんだ。氣さへたしかに持つてゐれば、少々の病氣位克服してしまふさ』

『だつて、程度があります』

『これが丁度その程度だよ』

『いゝえ、程度を超してゐます。先生のお體は、お一人のお體と思つちや違ひますよ。かけ代への無い大事なお體ぢやありませんか。それをそんなに粗末になさるとは、一體何です。何の用だか知りませんが、こんなに深夜にその病體を押して出掛けるなんて、無茶です。斷然無茶だ。僕はどうしてもお止めする。先生いけません。この吉川が先生をこのお部屋から出しません』

と、一徹な吉川勇は恩師の健康を氣付かふあまり、顏色を變へて抗爭した。腕力にも訴へかねまじき氣配だ。

『駄目だよ！　君が何と言つたつて、僕は出てゆくんだ。そこをどき給へ！』

と、眞人は、これも昂奮して叱り付けた。

『いゝえ、どきません。出ることはなりません』

[illegible]中江眞人は、少し蒼ざめた顏で、きつと勇を睨みつけた[illegible]から、

『君は實に沒分曉漢だね！　退けと言つたら、退き給へ！　君は僕の自由意思を妨げるのかい？』

と聲を荒らげてどなつた。

『先生の方が沒分曉漢です！　そんなお體で外戸へ出かけようなんて、身を輕んずるにも程がある。實に無責任だ。こんな國家の重大事件を擔つて居りながら、一身を大事にしないなんて、先生は國を愛する心が足りないんだ。駄目だ！』

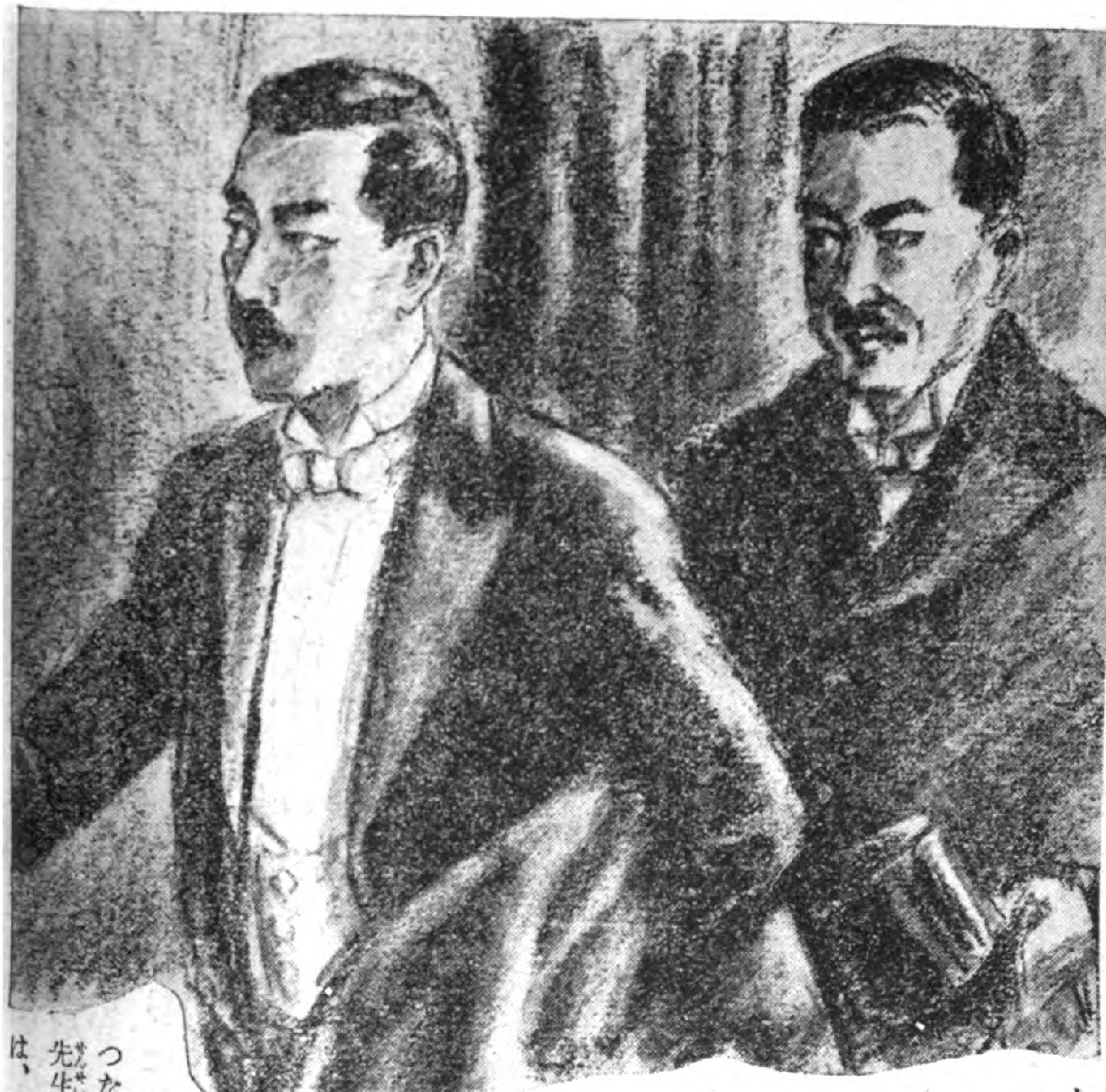
と、勇も大きい聲を出して、先生を叱りつけた。若し眞人が無理に扉を開けようとするなら、腕力で摑みかゝりさうな勢だ。如何に劍道の達人の中江眞人でも、左の肩の負傷で自由を失つてゐるところへ、年は二十以上も違ふ青年の勇だ。腕力では七分の不利益だ。

『退け！　邪魔をするな！　吉川！』

と、眞人は雷霆のやうに叱咤して、いきなり自由な右手で勇を摑んでどかさうとした。

その瞬間である。扉がスーッと外から開いて、小早川輝男が入つてきた。

『先生！　お支度はよろしう御座いますか？』



と、輝男が訊いた。

『…………』

と、眞人はまだ昂奮したまゝ默つて立つてゐた。

輝男はすぐその異常な光景を氣取つて、眞人と勇とを交る交る見廻した。

すると勇が、すぐ口を開いた。

『小早川さん。僕は先生をお出しすることは出來ません。今朝の醫者の忠告は、君も知つてゐるではないか。

一體、君がけしからん！　何んだつてこんなに夜遲く出ようとする先生の無茶を留めないんだ。

君は馬鹿だ！』

さう言つた勇は昂奮のため眼を濕させてゐた。

輝男は一切を了解した。さうして先生思ひの勇の心情に思はず貰ひ泣きしさうになつた。

しかし、この場合は勇がどんなに怒つても、先生を連れ出さなくてはならない。何故かといふ譯は、先生のお許しなしには、勇にも話すわけにはゆ



先生から、わけを聞かされて承諾したのだ。中江先生は命を賭してゐられるのだ。

『愈よ、英國の內閣の決心が付かうといふんだ。この首相との會見を延期したら、もう機會は二度と來ないかも知れない。これで發病して死んだら、僕も本望だ』

さう言つて、先生は輝男に一伍一什を物語られたのだ。

愈よ露西亞と獨逸との陰謀の裏をかいで、先生が英國政府と最後の取り定めをされる晚なのだ。さうして、態よ先方が、深夜を撰んできたのは、首相邸の夜會の後に新帝エドワード七世がお忍びでお見えになつて、非公式に中江眞人に拜謁を賜はるといふのだ。さういふ大切な瀨戶際に臨んで、彼は一身の危險など省みる餘地はなかつたのである。さうして、この話を吉川勇にも洩らすことは出來なかつたのだ。小早川輝男以外は、日本の公使にすら話してないのだ。

吉川に話すことは何でもない、吉川が他人に洩らす心配のある男でないことは、眞人は百も承知である。ところが、政治と外交のことは、實際に關係した人でなくては解らない苦心がある。眞人の恐れたのは、正直な一徹な勇の氣象である。正直な人は嘘が言へない、他人に図星を指されると顔に出る。鎌をかけられると、ついひつかゝる。大事な世界の大芝居が、善人の過失で何度頓挫してゐるか。政治は泥の中の仕事だ。色々な惡人の立ち混るなかだ、正直なだけでは通らないことがある。人心の表裏のまだ解りきらない勇や剛には、すつかり打ち開けられないところに、眞人の苦心があつた。剛がいま行方不明になつたのも、その一例だ。惡人の罠に、易々と罹つたのだ。幸にして剛には、すつかり話してなかつたからいゝが、話してあつたら、正直な人間知らずの剛の口から、どんな祕密が奪はれたかも知れない。

だから勇には説明されない。だから勇は、何も知らずにむきになつて止める。

『僕の馬鹿は、後で解る。吉川君、どうか今夜は、先生を出してあげて呉れ給へ。全く必要なんだ。全く必要なんだ』

さう言つて、輝男は哀願した。

眞人は依然として、昂奮の顔色で、扉の方を睨んでゐる。

と、勇は、やう〳〵と涙に餘[illegible]

な重要事件なのだと暁つた。それで涙がこぼれたのではない。彼はさういふ重大事を、自分には打ち開けられないのだ、といふことを知つて泣いたのだ。

『小早川君には打ち開けられるが、この吉川勇には、先生は國家の大事は打ち開けて下さらないのだ』

さう氣が付いて、彼は思はず落涙したのだ。かうして、身命もいらずとばかり打ち込んでゐる自分も、先生から見ればまだ足りないのだ。亞米利加から、鐵砲玉のやうに飛び込んで來た僕も、まだ先生には充分に信用されてゐないんだ。一徹な彼はたゞ一図にさう思つて泣いた。

『俺は餘つ程、駄目な人間なんだ』

彼は悄然として、扉の前から體を引いた。

時間に後れかけてゐた先生は、輝男に扶けられて、急いで部屋を出てゆかれた。その後姿が廊下に消えると、吉川勇はがばと長椅子の上に倒れて、腹一杯泣いた。

『吉川勇！　貴様はこの世の中で、取り處もないやくざ者だぞ！　戀人の綾子さんには捨てられ、恩師中江先生にも大事を打ち開けられない程の不信用な男だぞ！　駄目だ、駄目だ！』

二

そのとき後の扉が、すーつと開いて、一つの顔が室内を覗き込んだ。若い無髯の顔だ。すぐその顔が消えると、扉が一杯に開かつて、三人の男の姿が、どや／＼と室内に闖入した。長椅子の上の勇が、すつと身を起した時には、もうきらきらと光る一挺の短銃が彼の鼻の先にあつた。他の二人の男は、大急ぎで、次の間――眞人の寝室――に入つたが、やがて、

『おや！』

と叫んで、すぐ勇のところへ取つて返して、

『あの男は、どこへ往つた！』と訊いた。

勇は、ぢつと短銃の主を睨みながら、

『知らん！』

と、ぶつきら棒に突つ放した。

『家には居らんか？』

と、今一人が聞いた。

『居らん！』

と、勇がはつきり言つた。

『首相官邸の夜會か？』

と彼が訊いた。

『知らん！』と勇が、ど鳴つた。

『着物は何だつた。燕尾服かね？』

と一人がきく。

『背廣だ！』

と勇が思ひ切つて嘘をついた。

『何時頃出掛けた？』

とまた一人がきいた。

その時勇は考へた。餘計な世話だ、と喧嘩腰に口まで出たのを噛み殺して、

『さあ……』

と考へるやうな風をして、

『一時間近くもなるかな』

と言つた。

先生の後を追はせまいとの用心からだ。

『しまつた！』

と、親分らしい丈の高い髯だらけのが言つた。

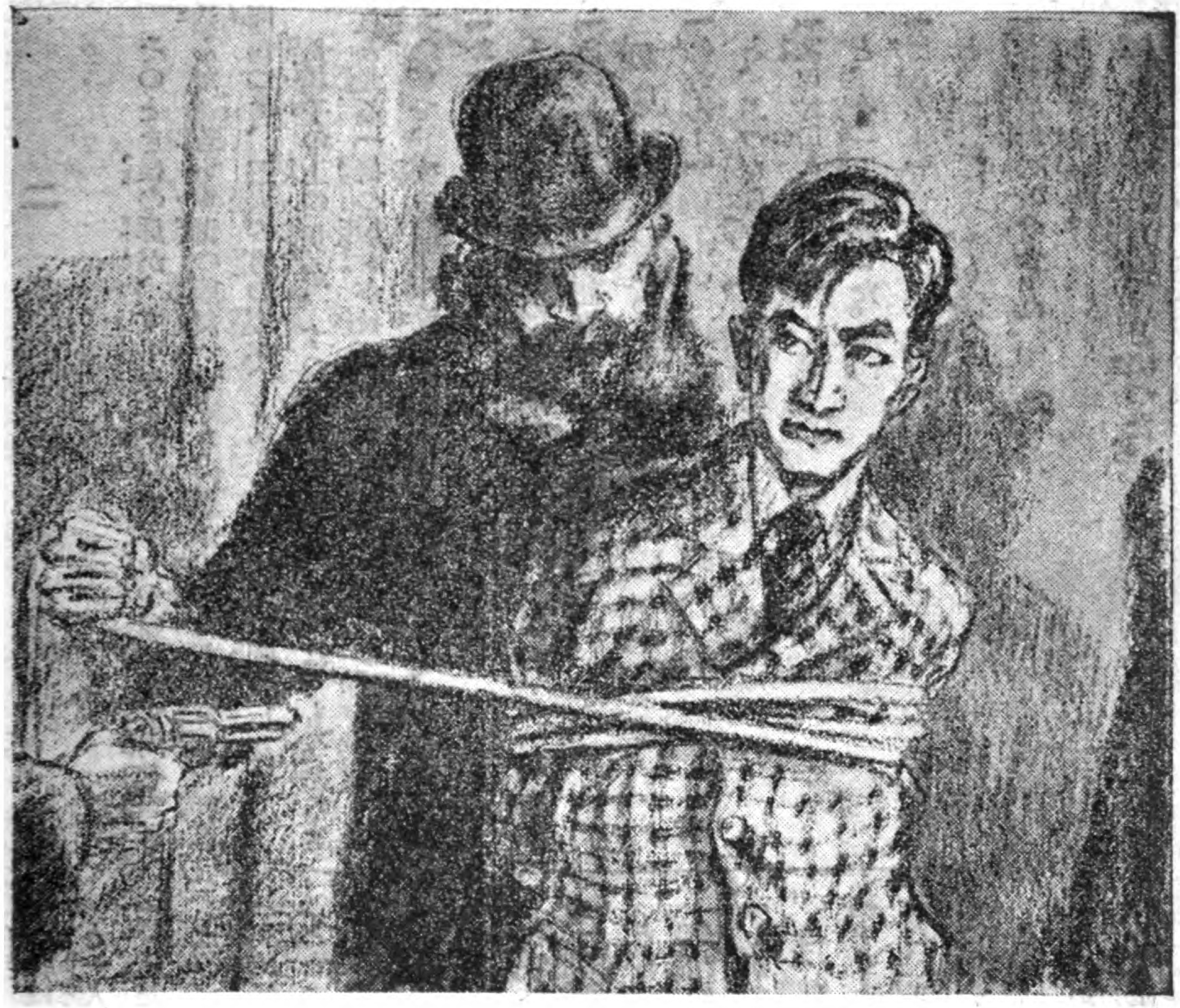
『すぐあつちへ廻らう』

と、立去りかけて、氣が付いて、

『これを縛つておけ』

と、一人に命ずると、手の餘つた一人の男が縄を出して勇を縛りにかゝつた。

『動くと命が無いぞ』



と、短銃の主が言つた。

さうして、勇を縛ると、三人は風のごとく、また音もなくこの部屋を出ていつてしまつた。

三

その晩の一時半ごろ、輝男をつれて歸つて來た眞人が、部屋に入つて初めて、手足を縛られて猿轡をはめられてゐる勇を發見した。

『またやつて來たな！』

さう言つて先生は、自分の子供を劬るやうに、大事にしながら勇の手足をほどいてやつた。

『どうだ。どこも怪我はないか？』

先生は優しく聞いた。

『有りがたう御座います。いゝえ、何にも』

と、勇の胸にはまだ色々のこだはりがある。

一伍一什を聞いてから先生は、

『ぢや、疲れたでせう。君はもうあつちへ往つてお休み』

と、輝男に言つて、輝男が出ていつて、二人だけになると眞人は、

『喜んでくれ、吉川、とう／＼仕事はすつかり出來上



つた』

と、低い聲で言つた。

『…………』

それでも勇は默つてゐた。

眞人は窮屈な燕尾服の上衣をぬいで、隣室の寢臺の上にはふり出すと、柔かい部屋着の上衣をひつかけて、出て來て、安樂椅子に身を埋めながら話し出した。

『とう〳〵、陰謀團の裏を掻いてやつたよ。奴等はこゝと日本公使館と英吉利の外務省とばかりを覘つてゐるうちに、僕は殖民大臣のチェームバーレーンと連絡を取つて、外務省を通さずにやつたので、奴等はすつかり見當違ひの方ばかり嗅ぎ廻つたのさ。アハハハハハ』

と、愉快さうに笑つた。

『今夜とう〳〵一切が出來上つた。これから先は、公使館と英吉利の外務省との交渉に移せばいゝんだ。もうこれで、政府と政府との正式の交渉に移れば、僕たちの用は濟んだのだ。委細はあとで君と小笠原にだけ、ゆつくり話しておかう。さあこれから日本への歸り支度だ。佛蘭西と伊太利あたりの風光を見物しながら、ぼつ〳〵歸國するとするかな』

先生は、ゆつたりした氣持でさう言つた。

勇は初めて口を開いて、

『ぢや、さつきの奴等は何しに此處へ來たんでせう?』

と訊いた。

『それは、僕を今夜の場所へやるまいといふ邪魔さ。邪魔は邪魔だが、君の邪魔とはまるでわけが違ふね。アハハハハハ』

と先生は笑つた。

『さうすると?』

『今夜はね、お忍びのエドワード七世陛下に非公式にお眼に掛つて、すつかり極東の形勢を申し上げたんだよ』

『…………』

勇は頭から水をかけられたやうに感じた。そんな大事な今夜

であつたのか。それなら身命を賭してお出掛も無理はなかつた。お止申し上げた自分の愚が空恐ろしい。若し自分がもう少し長く、お止めしてゐたら、あの凶徒の一團が此部屋に闖入して、先生の御計畫がすつかり齟齬に歸するところだつた。

彼は思はず、ぞつとした。

しかし、勇は心の底で淋しかつた。

それなら何故先生は、ちよつとでも、さうと御洩らし下さらなかつたのか。

その勇の心の中を、早く見て取つて中江眞人は、

『君に話さうか、話すまいか、と僕はこの間から思案した。しかし、これは絶對必要の人以外には、話さぬのが本當だと決心した。小早川だけは、兩方の使をしてゐるから話さぬわけにはいかん。しかし、英國側も兩三名かぎりだから、當方も僕と小早川だけの胸に疊んで打つた芝居だ。

功成ればこれを政府に歸し、敗るれば僕の双肩に擔ふつもりだから、僕は公使にすら話してないのだ。

政治にはかうした苦しいことが澤山ある。親にも妻にも親友にも話せない。それが政治家の苦衷といふものだ。君もこれから段々と年を取ると解つてくる。

許してくれ、態々亞米利加から、身命を賭して渡つてきてくれた君を、疎外したのではない。これが政治といふものなのだ。ね、解つたかい?』

と、手を取らんばかりにして、優しく言つてきかした。

『濟みません! 先生、濟みません!』

と、眼を眞赤にして勇は、がばと兩手をついてあやまつた。

彼は心の底の底まで愧ぢたのだ。かゝる事とも知らずかりそめにも先生を、お怨み申した自分の淺慮がおぞましい。

『何もそんなに謝ることはないよ。君の止めた心持はよく解つてゐるよ。僕は心から感謝してゐるんだ』

『いゝえ、先生、さうぢやないんです。僕は先生を怨んでゐたんです……』

と、勇は言つた。しかし、小早川を妬んでゐました、とはどうしても口に出せなかつた。

恐ろしいものは人間の心だ。怒るよりも、惡むよりも、嘲るよりも、蔑むよりも、もつと悲しいものは、妬むといふ心だ。

怒る心は、炎のやうに燃える。惡む心は刄のやうに斬る。嘲る心は、氷のやうに冷やす。しかし、妬む心は、毒のやうに腐らす。妬む心は、人の氣を狹くし、人の氣を陰鬱にし、人の氣を野卑にし、人の氣を、毒素のごとく麻痺さす。女は愛のために人を妬み、男は他人の榮達のゆゑに、人を妬む。

妬む人は、がきのごとく暗き穴の中に潜して、世を呪ひ人を惡む。

我が心内に嫉心ありと發見したるとき攫、男子に取つて愧かしい瞬間はない。それは男性といふ特權の抛棄だ。

勇は心の底の底まで耻ぢた。

『もうどんな奴が襲つてきても關はないんだ。さあ、今夜は日本を出てから、初めての愉快な安眠だ。吉川、僕はあしたは朝寢坊するよ。アハヽハヽヽ、おやすみ！』

さう言つて先生は、安樂椅子から立ち上つた。

『おやすみなさいまし』

勇は、穴に匐ひ入る虫のごとく小さくなつてさう言つた。さうして、悄然として、その部屋を出ていつた。

四

『オホホホホホ、何もそんな怖い眼をして私を睨まなくつたつていゝぢやないの？



可愛い人ね。さ、紐をほどいてあげますから、おとなしくしてよ？』

さう言つて、彼女は美しい純白の絹の午後服に、白いキッドの靴を穿いて、部屋の中央の木机の上に腰かけて、兩足をぶらぶら振つて、蠱惑的な笑ひをした。

剛は寢臺の上に縛りつけられたまゝ、無念の涙をぼろ〳〵と流しながら、きッと彼女を睨みつけた。

睨むより外にすることの出來ない彼なのだ。

『ね、これには色々譯があるのよ。聞かないうちから、そんなに無暗に怒つちやいやーよ、ね、ね』

と、女は媚びるやうに剛の顏をのぞいた。

『……………』剛は齒を喰ひしばつた。

『まだこの上に、俺をいびつて娛しまうといふのか』

彼はさう思つて、怒心頭に發した。

『ね、私はあなたの命を救ふ爲めに、こんなことをしたのよ。解る？ 解つて下さる？』さう言つて、つと机から下りて、剛の寢臺の傍によると、寢臺の端に輕く腰を下しながら、

『あのね、あなたとね…あなたの先生ね…を覘つてゐる惡い人があるのよー殺さうと思つてね』

剛の耳許に口をつけて、彼女は小聲にさう言つた。

剛は思はず、全身に水をあびせられたやうに感じた。彼は初めて、中江先生の身邊をねらふ兇漢の一團の存在を知つたのだ。その手先として、この美しき女性があり、その最も手ごろなをとりとして、自分が使はれてゐたのだといふことが、今初めてはつきりと彼の心に映じた。

『もう遲い！』

さういふ感じが、彼の腦裏にくら〳〵するやうに湧いた。

『それでね、あなたの大事な先生ね――ナカエといふんでせう？ あの方を殺して、今度の大事な計畫をこはしてしまはうといふ計略でね、私もそのうちに傭はれてね、巴里以來、あなた方につき纏つてゐたのよ。

それがね……』と言つて、嬌めかしい表情を作りながら、

『木乃伊取りが、木乃伊になつて……オホホホ……私、本當にあなたが好きになつちまつたの……』

と、一寸句を切つて、

『だから、あなたから種を取つて、ムシュー・ナカエの畫策の裏を掻く仲間のやうな顏をして働きながら、實は私は今まで、あなたを庇つてあげたのよ。

安心なさいね、あのね、あなたの代りに、亞米利加からヨシカワといふ若い人が倫敦へ來て、あなたの先生のお世話をしてゐるのよ。あなたは默つて、此處に捕虜になつていらつしやい。手荒なことをしないでね、決して手向ひをしないでね。そのうち、きつと私が、あなたを救ひ出してあげるわ』

さう言つたかと思ふと、吉川來の初耳に、愕然としてゐる剛を、片手でぽんと、押しやりながら、

『オホホホホ、この若い人は、まだ私に氣があるんだよ。オホ

ホホホ』と、高い聲で叫びながら笑つた。

と、それと同時に、入口の戸が、どつと開いて、三人の男が、どや／＼と入つてきた。

『ルキーズ！　お前はさつきから、こゝで何をしてゐたんだ。こんな東洋の小僧に未練があるんぢやあるまいね』

と、丈の高い髯だらけのが、呼びかけた。

『まあ、ヨハノウスキー！　冗談をお言ひぢやないよ。こんな青二才に氣などあつたら、お前と一緒のところをかうして、見せ付けやしないよ。オホホホホホ』と笑ひながら、つと小走りに走りよつて、その男の二の腕に自分の手を通した。

『うん、そしてこの青二才は今何か面白い話あかしでもやつたかい？』

『さあ、それは私よりは、お前さんの腕ぢやないか。何とでも糾明しておやりよ』

『さうだ。おい兄弟、それぢやこの小僧から一つ種取りにかゝるかな。それとも、まだ四の五の言ひやがるやうなら、面倒臭いから、いつそばらして、テームス河へ錘を付けて拋り込んでしまふかな』

と、連れて來た二人を顧みて言つた。

（つゞく）

逆境を刎ねかへす力

鶴見祐輔

七十三歳を一期として、一世の快男子後藤新平が、春の京都で死んだ。不思議な運命の緣に操つられて、私はこの人と親子の關係を結んで十八年の年月を暮した。さうして、行住坐臥この英雄兒を家庭内に見てゐた。

彼が四月十三日、卒然として、京都に長逝したとき、彼の傳記を記述して見たいと思ひ付いた。波瀾多き彼の一生は、圓山應擧の彩色畫のごとく陸離としてゐる。小說のごとき物語だ。天はこの一人の漢子に多くの天分を惠んだ。彼は刺繡の衣を着て、大路に明治大正昭和の三代を歩んでいつた。

しかし彼の一生のうちで、最も當世を益すと思はれる點は、彼が、逆境のどん底へ落ちて忽ちピンと刎ね返つてきた力だ。天下の逆運兒、世上の不遇漢が、この好漢後藤新平のピンと刎ねかへる底力を心讀したら、きつと心に思ひ當ることがあるだらう、と思ふから、私はこの不景氣のどん底にある日本にむかつて、一卷の物語後藤新平を送るのだ。



機智と彌次

衆議院議員　永井柳太郎

世界に於ける議場の構造は大體に於て二つに分けることが出來る。その一は佛國式であり、他は英國式である。

いはゆる佛國式なるものは、佛蘭西革命當時、人民會議を開くべき適當の場所がなかつたために、劇場を以つて之に當てたのが、その起源であると聞いてゐる。

その議席は半圓型で、舞臺が卽ち演壇に當るわけだが、現在我國の議場も、この型から出たものである。從つて議員が演壇に立つや、恰も俳優が觀客を見下ろして臺詞を云ふが如く、高い壇から低い議席を見下ろして改まつて演說するやうになつてゐる爲に、自然、彌次も飛び、罵聲も出て、とかく眞面目と靜肅を缺き易い。我國の議場が時々喧騷に陷り、動もすれば組打騷ぎなどの起るのも、これが一原因と見る事が出來る。

この狀態は獨り日本だけではない。各國ともに經驗を持つてゐる。素より議場の構造のみが原因ではない、國民性にも關係がある。議員の修養にも關係がある。併しラテン民族でも、ゲルマン民族でも、スラヴ民族でも、その議場に於ける武勇傳は大同小異だ。

之に反して英國式の議場は、教會堂の構造に倣つたもの——教會堂に於ける役

我が母

或外國雜誌で現代の偉人に其母について感想を簡單に記述した文を求めたところ、多くの答が集まつた。左に掲ぐるは其數例である。

○我が母は非常に能力のすぐれた婦人であつた、我等兄弟の智力と精力の絕倫なるは多分大部分は母方の賜物であらう。

サア・オリヴアー・ロツヂ氏（英國第一の大學者）

○我が母は父の無い我等兄弟を育てる爲に久しく惡戰苦鬪を續けたが一度だつて不平を洩したことはなかつた。成長するに及んで我等は初めて母の精神の如何に立派なるかを知つてつくぐと感銘した。

ロイド・ジヨーヂ氏（英國の前首相）

○私はわり合に早く母に死に別れたが、それにも拘はらず私は我一生を貫く大なる感化を母より受けた。若し私が私の危機に

員會議の會場を、そのまゝ大きくしたのが英國の議場である。それは政府黨と在野黨とが差向ひにならぶのだ。さうして兩方とも最高幹部が最前列――所謂、フロント・ベンチに在つて、その後方に以下の代議士が居並ぶ。自然、對等に相談するやうに出來てゐる。僅かに一つの卓を隔てゝ差向ひになるのであるから、劇場の舞臺から觀客に呼びかけるやうな心持にはならない。又聽く方でも相談を受けるといふ氣持になるから、比較的落ちついて意見を交換することが出來る。

私は、現に新築されつゝある我が議院にも是非この英國式を採用したいと思つたが、私達の意見が實現しなかつたのは遺憾である。



×　×　×

併し、彌次は一概に排斥すべきものでない。沈滯した議場に一脈の生氣を與へる。殊に日本の議場は構造の不完全なる爲か、空氣の流通がわるく、惰氣を生ずることが多い。

あまりに平凡な分りきつたことをクドクドと演說する時など、隨分多數の代議

若し母の薫陶と信念とを得なかつたならば私は發明家となることはなかつたらう。

トーマス・エヂソン氏（米國の大發明家）

○

私は母に負ふ所頗る多く母に對する感謝を述ぶるに當り、何から始めてよいか分らない、先づ母は私に父を敬ふべきことを敎へた、父は一家の主長である故に。次に母は單純なる祈禱を敎へ、働く時でも遊ぶ時でもいつでも正直であれと敎へた。實は遊ぶ時は多く持たなかつたが、母は私に働くことを敎へ、且つ勞働は人の最上の味方であることを敎へた。

サア・ハーリー・ロウダー氏（英國第一の演藝家）

○

私の子供の時に私は屢〻母に向ひ私のズボンに繕ひの多い事について不平を述べて、學校で友達が貧乏人だといつて笑ふと訴へた、其時母は『お前は何と思はれたいのか、私達は貧乏人ぢやないか』と戒められた。此通り事實を事實とする眞直な母の性質が、私の性格に及ぼした感化は言ひ盡されぬ程大である。母は自己を犧牲として愛する者の爲めに盡し、思慮深く、一生を通して活動を續けた。

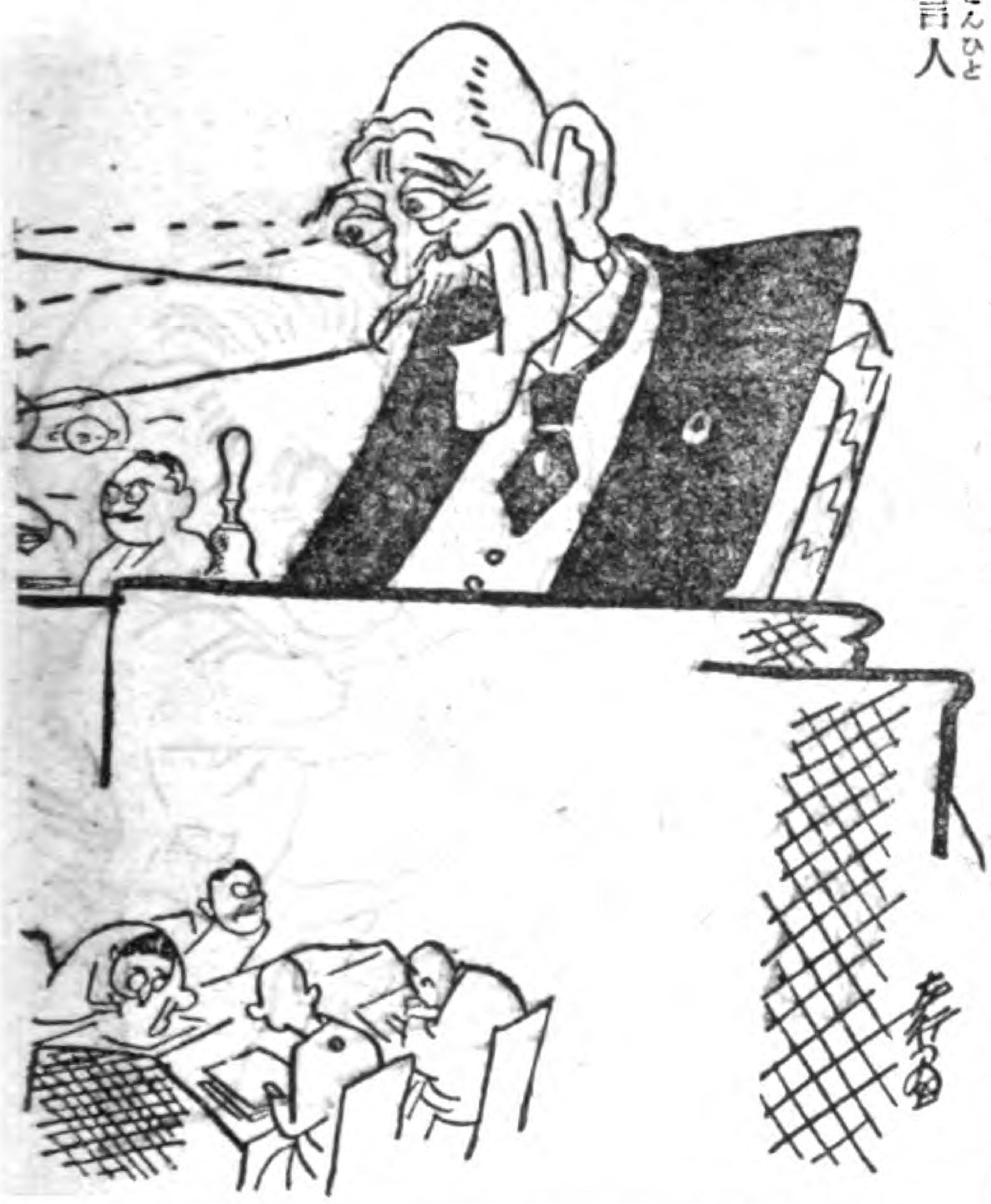
ブース大將（救世軍の首領）

士が眠つてゐるのをさへ屢ゝ見受ける。さうした場合、彌次の一喝、惰眠を打破して覺醒を與へ、聽くものにも、語るものにも一道の生氣を與へることがある。

一面、また多少の彌次に辟易して演說が出來ぬやうでは、代議士自身の修養として、不充分と謂はなければならない。苟も演壇に立つ以上は、彌次を乘り切つて、言はんと欲するところを貫徹する位の勇氣は、是非あつて欲しいと思ふ。

殊に、彌次の中には、一言人の肺腑を刺すものもないではない。一時間に亙る長廣舌が、一言の彌次に覆されるやうなこともある。私はこの意味に於て、惡劣なるものを除くの外、彌次必ずしも排斥するに及ばぬと思つてゐる。

野次は、戰鬪に於ける一種の伏兵だ。演說者は之を擊破する膽力と機智とがなければならぬ。



嘗て英國政界の長老ロイド・ジョーヂ氏が、愛蘭自治に關する賛成演說をなした際、聽衆中の一醉人が、

『地獄にも亦、自治を要す』

と大聲疾呼した。すると、ロイド・ジョーヂ氏は、早速聲した方に向き直つて、

『然り、私はその如く凡ての人が、自己の屬する鄉土のために起つて、自治を叫

茶話四題

バナナと國民性

バナナを盜む盜み方に、國民性が現はれてゐる。マレイ群島のバナナ園に入り込んでバナナ盜みをするに、日本人は、そつと樹に上つて、バナナの房を千切つてポケットに忍ばせてゐる。南洋人は樹に上つて、枝の根元からポキリと折取る。支那人は、樹の根元から、ザク〳〵切り倒して、バナナの房を盜んでゐる。

青砥藤綱と夢の告

鎌倉の執權、北條時賴が、鶴ヶ岡八幡宮に通夜をした時、夢に、衣冠正しき老翁が現はれて、正しき政治を行はんとならば、大に藤綱を用ふべしとの御告があつた。時賴は所領を增加しようとした。藤綱、その由來を聞いて、

『若し夢の告に、拙者の首を刎ねよとあらば、お斬りになりますか』と言つて、辭退した。

ぶことを希ふものである」と云つた。當意即妙、聽衆は思はず哄笑した。何となれば、ロイド・ジョーヂ氏の言によれば、その醉人は地獄の窓に起つて自治を叫んだことになるからだ。

今、英國政界に時めくオースチン・チャンバーレンの父、ジョセフ・チャンバーレンは、自由貿易に反對し、保護關税のために、バーキンガムに於て大雄辯を振つた。さうして自由貿易のために外國の廉價な商品が輸入せられ、英國自身の製造業が極度に壓迫されつゝあることを指摘して、舌端火を吐くの概があつた。

當時、勞働者は一般に保護關税に反對であつた。それは、食糧品に保護關税がかゝると彼等の生活費が高くなるからといふのであつた。今や壇上のチャンバーレンは、

『自由貿易死せずんば大英國死せん』

と絶叫した。間一髪、階上の一隅にあつた一勞働者はチャンバーレン目がけて

『汝死せずんば我等死せん』

と猛烈な彌次を飛ばした。チャンバーレンが二階を見上げて言ふことには、

『私は君が長生せんことを欲する』

聽衆は茫然とした。何故にチャンバーレンは、自己に死を要求する程の者に對



大石正巳の坐禪

大石正巳が、鎌倉の某禪師の許へ坐禪に出かけた。禪師いはく、

『小便をして來い』大政治家の大石も子供扱ひにされて、小便をして來る。禪師又曰く、

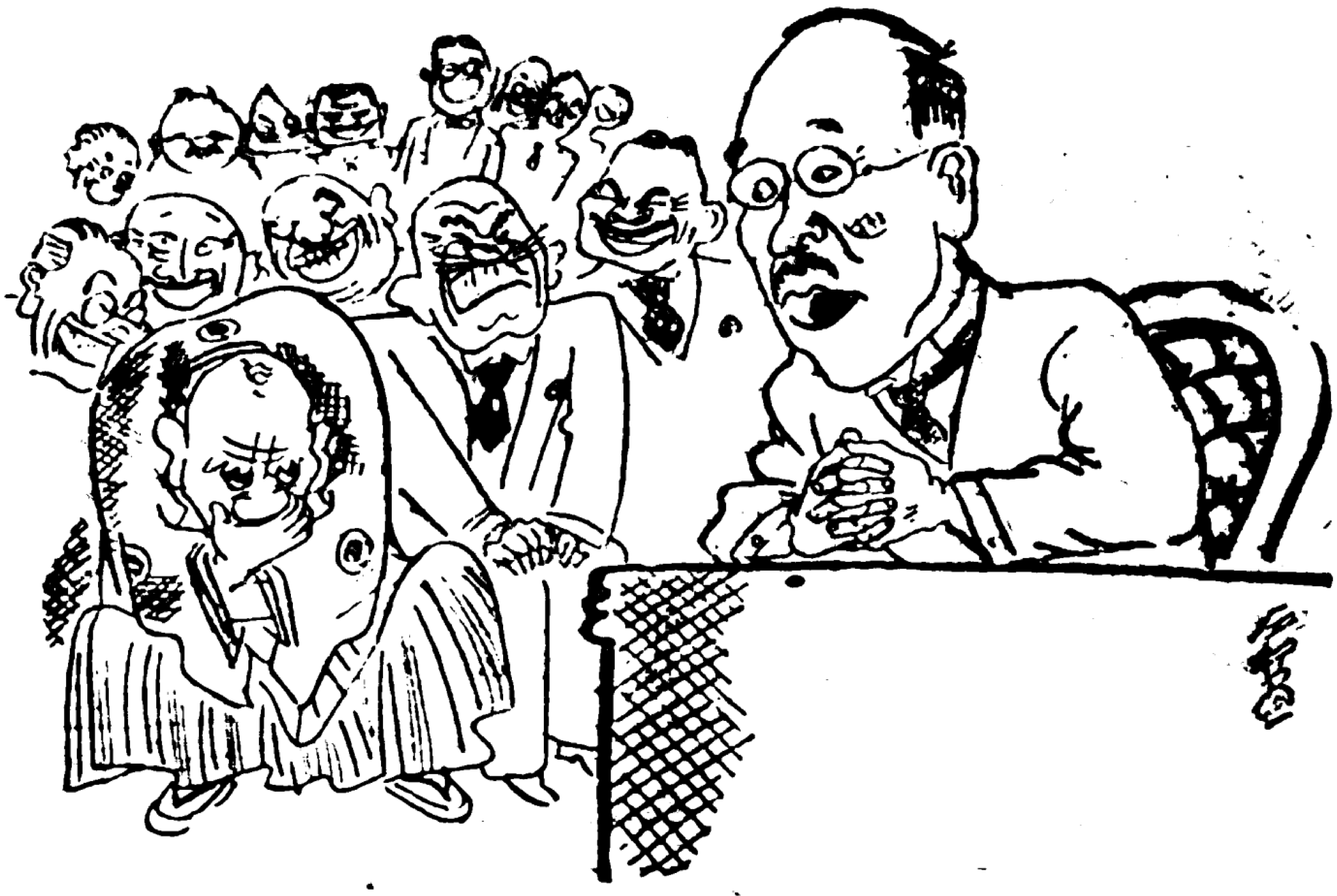
『糞をやつて來たか』大石は、また唯々諾々として、その通りにすると、禪師いはく、

『分つたか』大石は呆然として仕舞つた。禪師いはく、

『禪はここだ。腹の中をスッカリ空にするが可い。腹が無一物になつた氣持は格別だらう、どうだ』

少食長命の禪師

禪師には、概して少食長命の人が多いが、有名な石川素童禪師が八十才、西有穆山禪師が九十才、いづれも非常な少食で、淡白なものばかりを食はれた。北野元峰禪師は、その極端なもので、八十八才で元氣旺盛である。近代の大禪師、奕堂禪師は、七十五才まで生きられたが、見事な體格で、素敵な腕力、米俵一俵をヒョイ〳〵手玉にとつたほどだが、それでゐて極めて少食、三度ともに、飯は一碗、汁が一杯と定まつてゐた。



して長諮ならんことを望むといふのか、世にこれ位解らぬことはない。怪訝と好奇に滿された聽衆は、一齊に耳を敧てゝ演壇を睨んで、次の一語を聽かうとした。チャンバーレンは云つた。

『君が今少しく賢き人となる爲に』

聽衆は覺えず喚呼してチャンバーレンに共鳴したのである。

凡そ、彌次に對しては斯くの如き用意が必要と思ふ。

×　×　×

又、議長は、彌次を制し、議場を整理するに當つては、特別なる機智と勇氣とがなければならぬ。私が議員となつて以來、その點に於て最も傑出してゐたと思ふのは、奥繁三郎氏であつた。

あまりに亂暴な低劣な彌次を飛ばして議場の秩序を亂すものがあると、奥議長は特にハッキリした言葉で、

『××君、靜粛に』

と其名を指して一喝した。名を指されれば、速記錄にも殘り、不名譽なことになるので、大抵のものは止めてしまふ。斯くすること數回、それでも尚止めないものに對しては、斷乎として退場を命じた。その果敢な捌き方の快さは、今も尚私の目に髣髴とする。

今期議會に於て、委員長として豫算總會を統制した堀切君の手際も亦、鮮かなものであつた。

或時、某年長議員が盛んに彌次つたため、委員會は多少喧騷に陷つた。すると、堀切君は眞面目な顏をして、委員長席から其人を呼びかけて、

『××君、君にはお孫様が何人ありますか』と言つたものだ。

この奇拔な質問に逢つては、流石に豪勇な××君も多少狼狽せさるを得なかつた。さうして家にあるお孫様の手前、俄かに靜かになつたと云ふ喜劇的一場面があつた。

又與黨と野黨との間に、當局の責任者から或言葉を聽いたか聽かぬかといふことが問題となつて、結局『委員長は、どう思ふか』と質問した所、堀切君は言下に答へて、

『アイ、ドント、ノー』

この一言には敵も味方も笑ひくづれてしまつた。

議長、委員長などには、かうした機智と勇氣がなくてはならない。

今期議會中、私の最も強く感じたことは、何といつても無産黨の進出であつた。在來の議會に對して一脈の清新味を注入し、熱烈な眞劍味を示してゐたことは、從來絶えて見るを得なかつた一異彩であらねばならぬ。

私は自己の屬する政黨に於て、主として外交方面を擔當してゐるために、私自身が最も叫びたいと思ふ勞働問題、思想問題について、演說する機會が殆どないことを、頗る遺憾とするものであるが、無産黨の諸君が、勞働問題に對して、眞劍に且つ勇敢に戰つてゐるのを、見ることの出來たのは、大いに愉快とし、また大いに意を强うした所である。

從來の議會に於ける法律案でも、建議案でも、無産大衆の生活安定と其自由との爲に、重大なる意義を有するものとては、殆どなかつた。といつてい〻。

然るに、普選議會後、無産黨の議席から擧げらる〻叫びの中に、よし數に於ては少くとも、却つて大衆の叫ばんと欲する眞實の聲を聞くことが多い。私は今更の如くに普選の有意義なりしことを痛感せざるを得なかつた。

斯くて無産黨の進出が、將來わが議會に對して、益〻深刻なる意義を打ち込んで行くであらうことは、何人と雖も見のがしてはならぬこと〻思ふ。

無線時代

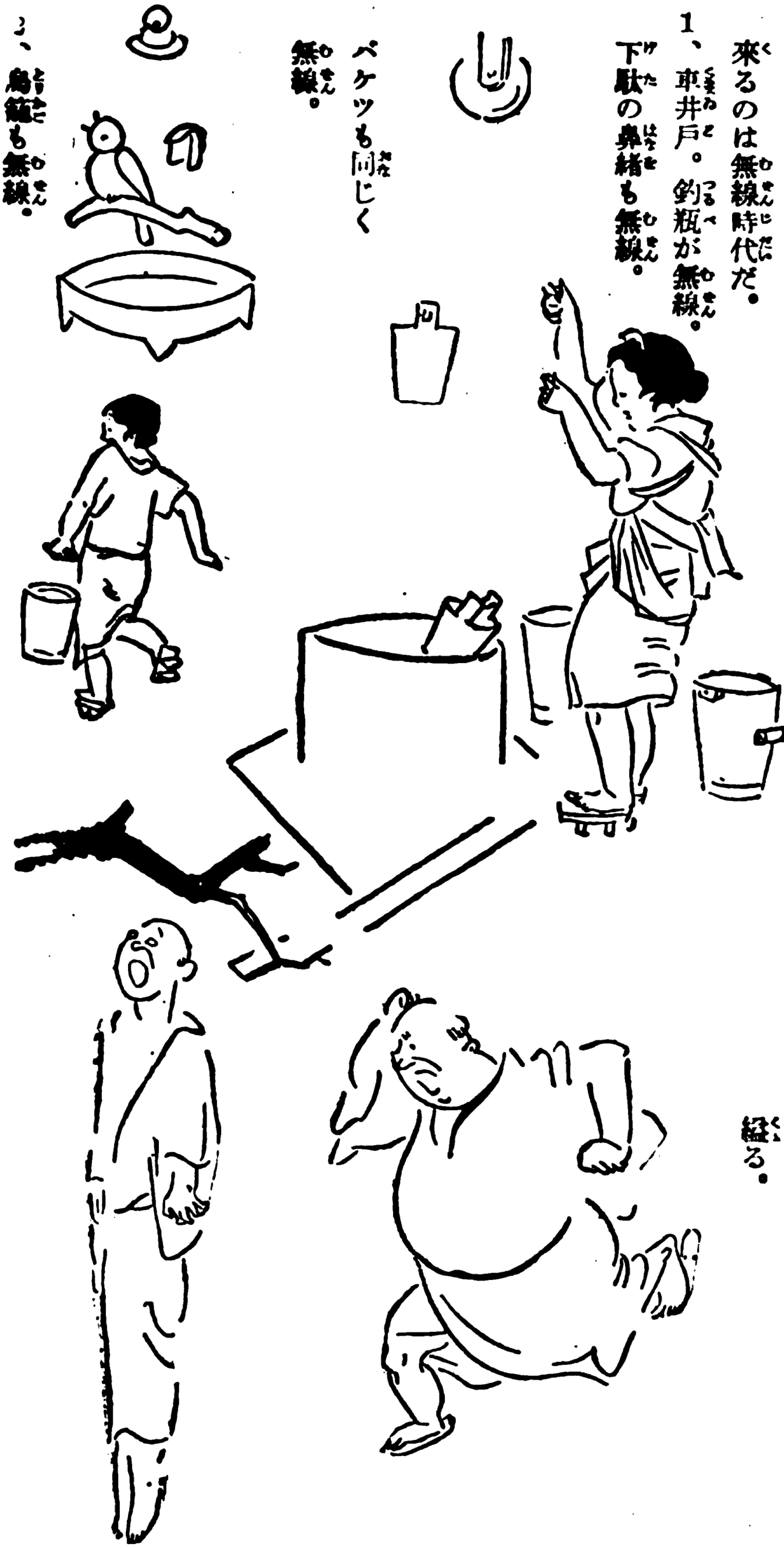
河盛久夫

無線電信。無線電話。これから來るのは無線時代だ。

1、車井戸。釣瓶が無線。下駄の鼻緒も無線。

バケツも同じく無線。

2、鳥籠も無線。

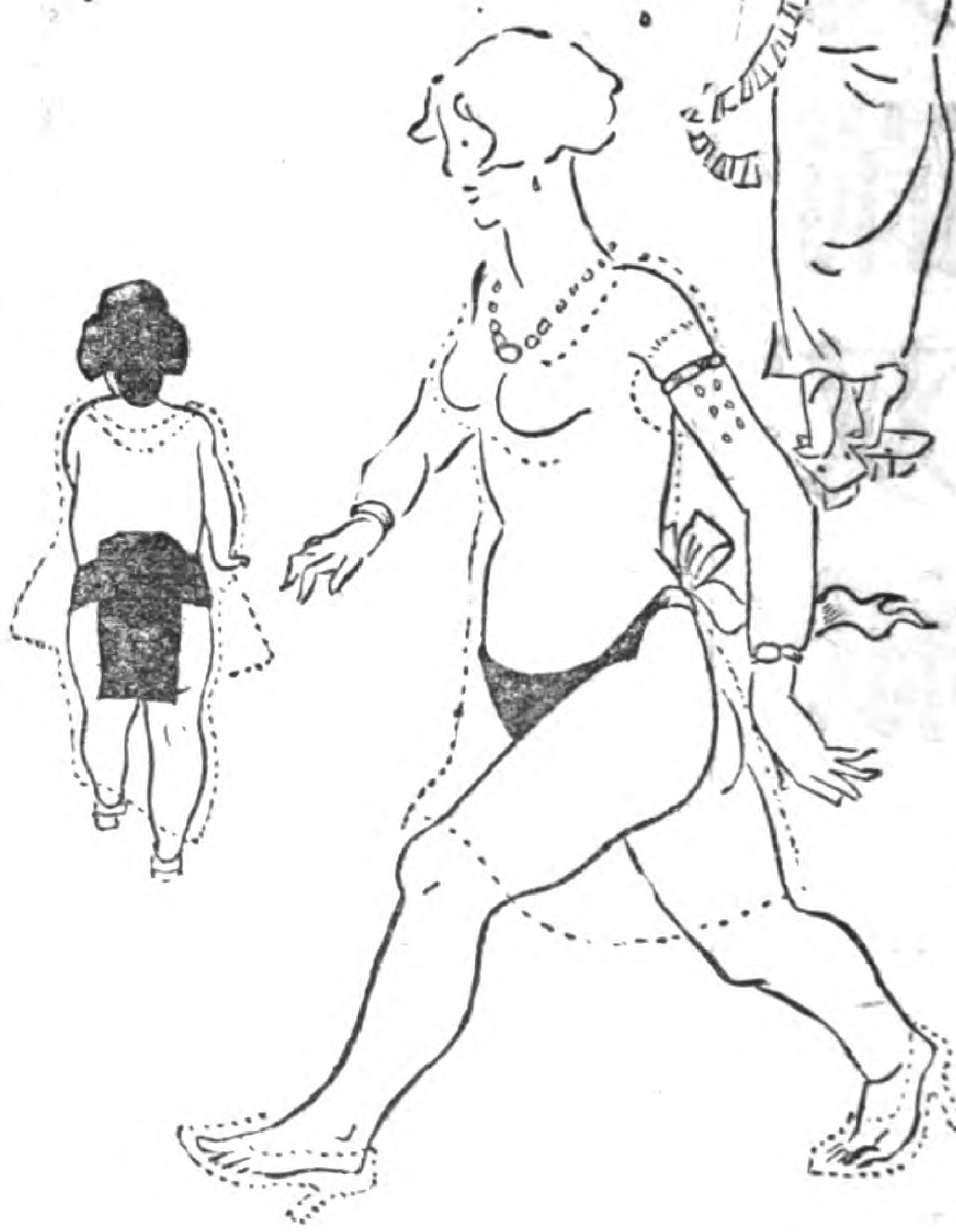


3、ムセン飲食をした人が、見つけられて、面目ないとて無線で首を縊る。



4、電信線も無線。で、鳥が止つてゐるところ。

5、物干の綱も無線。手さぐりで干す。



6、寒中裸で歩いてゐる人があるので、吃驚して訊いたら、無線で織つた人絹の着物を着てゐるのださうな。



風雲天満双紙

佐々木味津三
挿繪　小田富彌

一

決死の對決

——名にし負ふ大阪城の外丸大玄關は、元和の陣より年を經ること玆に二百有二十年、今もなほ昔乍らに太閤秀吉の豪華をとどめて、物言へば谺する程の靜けさを保ち乍ら、森閑として靜まり返つたまゝでした。

その、人たく静まり返つた人々の間に平八郎は、右手に水心子の短刀をのせた三方、左り手に証の箱二つを抱へ持ちつゝ、悠然としてさしかゝつて行くと、聲高に呼び入れて言ひました。

『大塩平八郎、火急の用向きにて登城仕つてムる。お係りの方々御出合ひ下さりませい。』

『なに、天満の先生でムりますとな！　只今お出迎ひ致しまするでムります。』

怪しみいぶかしみ乍ら、倉皇として出迎へたお城詰の青侍に、抱へ持つてゐた品々を手渡すと、取次も待たずにすぐさま御城代の居室なる奥大書院へ案内致させました。

時刻が尋常でないところへ、不審な品々を携へ乍ら、餘人ならぬ天満の傑物が不意に登城いたしましたので、城代丹波守のいぶかしんだのは當然でしたが、しかし、それはほんの一瞬でした。丹波守は信州松本六萬石を采邑して、夙に名君の譽が高かつたために、拔擢されて大阪御城代の要職に就いた程の器量人です。平八郎の只ならぬ氣色と、その下に着用してゐる白無垢裝束をちらりと眺めて、早くも事の容易ならぬことを明察したもののごとく、先手を打つて言ひました。

『尋常ならぬ面ざし、人拂ひせよと言ふのであらう喃。』

『はつ。御賢慮のほど、さすがは御城代様にムります。』

『褒めるな、褒めるな。そなたに褒められては丹波赤面致すわ。――では、いづれの者も早々に退出いたせ。』

まことに瞬のすツとなるやうた、御城代と丹波守とのお言葉ですが、侍臣の面々が御次のひと間で別間に引き退つたのを見ますと、平八郎のおもむろに先づ取り出したものは、水心子正秀の短刀をのせた白木のあの三方でした。覺悟の程の犯し難いのを物語るかのやうに、すいとそれを端坐してゐるわが膝の前に引きよせると、蒼白な面に強い決意を示し乍ら、重々しげに言ひました。

『御賢慮の如何によつては、平八郎このところに逝きまして、割腹致しますゆゑ、御城代におかれましても、お迷ひなく御答へ下されませ。』

『その一語、悉く丹波氣に入つた。しかと聞かうぞ。遠慮なう申せ。』

『恐悦に存じます。では、ちと異な事からお尋ね申しまするが、御城代は、御配下の者共がお可愛うムりまするか、それとも御支配の民草がおいとしうムりまするか、いづれにムります。』

『その方らしき事を尋ねをるな。きくが迄もない。民町人百姓は國の礎ぢや。それが可愛うなうて何としようぞ。』

『しかと左様にムりまするな。』

『念もないわ。予も聊か人に知られた丹波守ぢや。』



『そのお言葉承はつて、平八郎何より力づいて厶ります。然らば事は急を要しまするに依つて、只今より即刻弓削新左衛門めとこの所におきまして對決させて下さりませい。』
『なに！　弓削新左衛門と對決させせよとな！――ふうむ左樣か。察した通り、とうとうそちが憤起致しよつたな。』
『えッ。ではも早やあの、御城代におかれましても、弓削めの一埒ご存じなので厶りまするか。』
『ちらほらとよからぬ噂耳に入れたゆゑ、それとなう心痛いたしをつたが、事實ならば惡をきいて懲らさねばおかぬその方の性分ぢやによつて、いづれは、何か事を起すぢやらうと、今迄すておいたのぢや。』
『過分この上も厶りませぬ。それ承つては平八郎、愈よ勇氣づいて厶りますゆゑ、然らば即刻弓削めをお召出し下されませい。』
『呼ぶはよいが、對決させよと申すからには、動かぬ證據掴つての事であらうな。』
『お言葉をお眞似致すやうに厶りまするが、手前も聊か人に譏

られた[illegible]平八郎めに厶ります。[illegible]なくして、このやうな[illegible]訝がましい事申しませぬ。』

『これ聞かば丹波も安堵ぢや。では、兩町奉行も列座させるのであらうな。』

『はつ。弓削につながる配下の同心共も一つ穴の貉に厶りますゆゑ、序でにお召出し下さらば幸せに厶ります。』

――まことに天滿の偉傑がひとたび事を起さば斯くのごとく疾風迅雷、而してまたひとたび憤起すれば、斯くのごとくに悲壯峻烈、實にこれ迄のいぶかしかつた登城は、今にして初めて知らるゝごとく、不潔漢弓削新左衛門をこの機會に餘すところなく糺彈しようとの痛烈な決意からでした。しかも、今やそのうしろ楯となつた者は、別人ならぬ大阪御城代松平丹波守です。名は一片の城代に過ぎないが、事實に於ける威權は、西國三十三ヶ國の大番頭にも、等しい廣大さでしたから、凡そこれ位心強いうしろ楯はまたとないので、命令また直ちに一下、旨をうけて所士、番士、青侍共が時を移さず非常呼集に罷り出でましたので、雨となるか、風となるか、正邪、職を賭しての對決は、も早時の問題のみとなりました。

二

かゝるうちにもいく本かの短檠が赤々と點ぜられて、奥大書院は見る見るうちに物々しい[illegible]へられて、[illegible]た。正面二枚重ねの結構やかな[illegible]は、[illegible]守様の御座用[illegible]褥、その左のこれも劣らぬ見事な[illegible]には、江戸弓削新左衛門の御支配頭たる西町奉行内藤隼人正殿の着座席、右の同じく結構やかな一枚は、平八郎が忠勤をぬきんでてゐる東町奉行職高井山城守殿の着座席。――言ふうちに表の方大玄關に當つて、係りの者の呼びあげた聲がきかれました。

『東町様、西町様、お揃ひにて御登城に厶ります――。』

茶坊主に案内されて、慌たゞしげに姿を現はした者は、高井山城守と内藤隼人正の兩町奉行です。

『夜中、ご苦勞で厶つた。』

迎へ請じた御城代の言葉に、兩町奉行はいんぎんな挨拶を返してゐましたが、意外にもそこにはすでに平八郎が先着してゐて、しかもその兩脇には短刀打ちのせた三寶と、不審この上ない瓢を二つ引寄せ乍ら、峻烈な面ざしで差し控へてゐましたので、等しく怪訝に思つたもののごとくいぶかつて尋ねました。

『物々しげな御容子に厶りまするが、何御用厶いましての御招きに厶ります。』

『いやなに、平八郎が弓削新左衛門に不埒な所業があるによつて、予に對決させるやう取計へと申しをつたで喃。御足勞[illegible]

ら御陪席を願うたのぢや。』

きくと一緒に、いはゆるこれが人情と言ふもののよき實例でありましたらう。弓削の御支配頭たる西町奉行の面にはどうやら御自身の配下が糾彈されさうな空模様でしたから自づと響きが御自分のところにも傳はつて來ると思つたものか、サッとけはしい色が走りました。反對に平八郎の御支配頭たる東町奉行高井山城守の面上には、いとも會心さうなほゝ笑みか、ほのぼのと綻びました。わけても高井山城守なる人物が、歴代の奉行中に最も傑出した逸材で、その職にあること前後實に十一年、夙に平八郎の識見才腕には畏服されて、只の配下部下とは思へぬ程の信任がありましたものでしたから、よくやつてくれたぞ、と言はぬばかりなそのほゝ笑みを見て、平八郎の口邊にも自から微笑がのぼつたのは當然でした。



かくして、次第に一座の空氣が緊張の度を加へたとき――。

不埒至極にも酒氣を帶び乍ら、漸く姿を見せた者は、弓削新左衛門と並びにその一味配下達でした。それとも知らずにやつて來たと見えて、そこに城代初め兩町奉行が物々しげに御控へなさつてゐるのを見るや、したゝかにぎよツとなつたやうでしたが、それよりも平八郎のおや！とおどろいたのは、前夜の刺客のあの秋雄二郎が、ぬけぬけ

と麾下の中に纔を殘ねてゐたいぶかしい一事です。たしかにくゝしあげて窮面させておいた筈のその雄二郎が、いつのまにかぬけ出てゐたので、さては留守中の無人を狙らつて、救ひ出したかと早くも知つた平八郎が激怒の色をみせたとき、城代丹波守の重々しい一語が下りました。

『では平八郎！　望みの通り對決いたせ。』

いかで躊躇のあるべき！　肩衣サッとはねのけて、用意の白無垢下着決死の裃姿となり乍ら、ご免とばかり、ひと膝乗り出すと、短刀のせた白木の三方をずいと弓削新左衛門の面前に差しおいて、腹の髓迄威嚇するやうに言ひ放ちました。



『しかと見屆けて、平八郎のこの姿、よく見屆けられよ。これなる水心子正秀はわが家に傳はる稀代な業物、切れ味また無双と折紙つきの逸品ぢや。其許この對決に見事お勝ち召さらば平八郎、腹かッさばいてお目にかけ申す。なれども、もし貴殿御申開き立たずんば、よいか、弓削殿！　見苦しい振舞ひ致さず、これなる水心子を以つて、潔ぎよう自決致されよ！』

悲壯と言ふか、それとも峻烈と申しますか、抉ぐるがごとく痛烈に言ひ迫つたので、一座の者の水を打つたやうに、しいんと片唾を呑んだのは言ふ迄もないことでしたが、然るに汚吏新

左衛門は、凡そおぞましい奸物でした。
『何を申すか。自決せよなぞとは片腹痛いわい。身にうしろ暗い事なぞ一つもないによつて、何なりと申すがよいわ。』
　いづれもが等しくその峻烈さに打たれて、身じろぎすらもした者がないと言ふのに、ふてぶてしくも嘲笑ひ乍ら、小面憎くげに放言したので、ピリリと平八郎の鋭い一喝が下つたのは言ふ迄もないことでした。
『控へられよ！　控へられよ！　お上役列座の前も憚らず、その不謹愼は何ごとに厶るか！　では、見事に申し開き致さるるか！』
『念もないわい！』
『ならば言ひわけ立たざる折も、潔ぎよう處決致さるゝな！』
『くどいわ！』
『よをし！　これは面白うなつた。然らば承はらう！　貴殿のごとき下人の智恵で、これなる瓢の遺言、解き得られる道理は厶らぬ筈ぢやが、いかなる理由のもとに其許は、藤七母子へあのやうな片手落の裁きおつけ召さつた。』
『片手落とは何ごとぢや。何かと思へばそれしきのことに仰々しう騒ぎ立てゝ、對決呼ばりが片腹痛いわい。譲るべき立派な仔細があればこそ裁いて遣はしたのに、どこが不足ぢや。』
『なに！　立派な仔細が厶つたとな！　ますます面白い！　その仔細平八郎、しかと耳あけて承はらう！　さ！　申して見られよ。いかなる理由があつてか、とくと申して見られよ！』
『…………』
『いかゞ召さつた。廣言にも似合はず、忽ち返答にお詰り召さつたやうぢやが、答へのないはこれなる遺言の謎、解きえなんだゆゑに、依怙の裁きつけたと申さるゝか！』
『滅多な雑言申さるゝな！　そんなに聞きたくば聞かしてやるわい。藤七分、藤太郎分と書き認めたそれなる文字の墨色に、濃いと薄いが見えたゆゑ、藤七母子に勝ち裁きつけて遣はしたのぢや。それでもなほ依怙呼ばはり致すつもりか！』
　何たる、笑止千萬な遁辭でありましたらう！　藤七分への遺言と書かれた文字の墨色が、ほんの心持ち藤太郎分への遺言と認ためた方より濃く寫つてゐたため、それを勝ち裁きの理由にしたと、苦しまぎれな出鱈目の申開きをしたものでしたから、間をおかないで平八郎の怒發した大喝が飛んで行きました。
『愚か至極な！　何を出まかせ申さるゝかツ。でぶでぶと油太りするばかりが與力の能でないわ。賄賂取りの隱し藝にばかり浮身を窶さすと、たまには智恵袋の洗濯さツしやいツ。ここな外道者めがツ。』
『なにツ。またしても雑言ぬかしをつたなツ。然らばおぬし、見事にこの謎解いて見するかツ。』

聞いたら[illegible]これにおゐて[illegible]を[illegible]せかけましたので、[illegible]つひに[illegible]！　[illegible]、[illegible]話しての大お訣は、茲に至つて憤然声を吹きあげました。

『控へられよ！　解いて見するかとは何を申すかッ。天下に我が目、我が智慧の及ばぬものとてはない大隅半八郎ぢや。これしきの謎、解き得いで何と致すかッ。とくと眼をあけて見届けられよッ。』

凛然として言ひ放ち乍ら、側なるいぶかしき謎の瓢を手に取りあげて、二つを打ち並べたまゝ汚吏新左衛門の面前へ、それ見よ、と言はぬばかりに、ころり横へたかと思はれましたが、とはそも何たる不思議――妾腹の藤七分へと記された瓢の方は、ころりと横たはつたまゝでゐたのに、意外や正妻嫡子の藤太郎分へと書き記された瓢の方は、呼吸を待たないで再びまたぴよこりと起き上りました。しかもその立ち上り方が、不倒翁でもこれ迄鮮やかには行くまいと思はれる程、いとも見事にひよッこりとまた起き上りましたので、お城代を初め並居る面面は、おやッとばかりに等しく目を睜りました。汚吏新左衛門のぎよッと驚いたのも勿論でしたが、と見るや、莞爾と打ち笑み乍ら、いと小気味よげに言つたのは余人ならぬ天満の俊傑です。

『弓削殿！　いかゞでムる。しかと御覧召さつたか。形ちも同じ、寸も同じ、打見たところどこに相違もなささうな二つの瓢でござる[illegible]否寧ろ[illegible]たまゝおや、これこそ[illegible]ぬ怪しき謎。わが目、わが智慧[illegible]に、この[illegible]に一つとてもないと、今のさつき申し[illegible]たばかりだが、これにてもなほ大隅半八郎、この謎の謎が解けぬと申さるゝか。さ！　言ふべき言葉があらばいうて見られよ。』

『…………』

いかでこれに言葉が返へされませうぞ！　水から掴みあげられた泥鰌のごとく、只もぐもぐと口を動かしたばかりでしたから、同時に半八郎の抉ぐるやうな言葉が飛んで行きました。

『笑止至極な！　これしきの謎すらも見破る力がなうて何と致すかッ。さ！　今一度よッく見られよ！　嫡子藤太郎分の瓢は、いかに押倒しても、必ず其に、ほら、この通り起き上るに拘はらず、妾腹の藤七分は、いつ迄たつても倒れたまゝぢや。小西屋藤兵衛の遺言もまたこれが急所。お手前ごとき下根者は御存じ召さるまいが、凡そ瓢と言ふものは、ひとつ蔓に二十三十となる程見事ならう生り末生りが揃つたとても、摘むべき品は初生り即ち元生りが、只一個のみぢや。命態と元生りに限つて、いか程倒して見ても必ず其にぴんとまた起き直るからぢや。藤七の分が倒れたまゝでゐるは即ち末生りの証拠、これに引替へこれなる正妻嫡子藤太郎分が、今のごとく見事にちやん

と起き直つたは、とりもなほさず立派な元生りの證據ぢや。町人乍らさすがに小西屋藤兵衛は天晴れ智恵者、死したるあとにて妾腹、嫡子の間に跡目相續の爭ひあつてはならぬと存じたゆゑに、古へ大和の郷で瓢造りに從つた砌りの智才を利かして、斯くのごとくに見るも床しい遺言をのこしておいたのぢや。たとへ一つ蔓に生れた二人の子供であつても、末生りはいか程立派であらうとこの瓢のごとく倒れるが當り前、元生りの嫡子はまたこれなる瓢のごとくに、自づと起つて跡目相續すべし、また



起つが當然と二つの瓢を用ひて物言はぬ奥床しい遺言の謎をのこしおいたのぢや。然るにも拘はらず、身苟しくも與力の聖職にある者が、許し難き不義密通を致し、あまつさへ三百金の賄賂を掠めて、不埒至極な依怙の捌きつけるとは何たる事ぢや！　人の皮かむつた外道者めがツ。さ！　自決さつしやいツ。潔ぎよう自決さつしやいツ！』

『…………』

『答へのないは、これにてもまだ罪に服さぬつもりかツ。服さずんば服するやうに、動かぬ證據を以て不埒な條々いちいち發いてお目にかけるが、それでもよいかツ。』

『…………』

『ふゝうむ！　まだ剛情お張り召さるゝな！　然

らば藤七めの愚かな母親これへ招いて生きたる口から生きたる證據吐かして見せうかッ。それとも、先程そなたが水茶屋八竹に於て不埒働いたあれなる賢女芳音どのを呼び招いて、對決致させようかッ。』

『…………』

『卑怯至極な！　これ程申してもなほ剛情張り通す所存かッ。潔ぎよう御自決召さらば、平八郎武士の情けを以つて、この餘の舊惡は秘めかくしておいて遣はさうと存じをつたが、では、事のついでにこの十年來の舊惡も發いて進ぜようかッ。生玉の紙問屋平右衛門の娘をかどはかして、散々に弄んだらうへ、長崎表の遊女屋へ賣とばしたも同じおぬしぢや。按摩琢阿彌を罪なき罪に陷して、爪に火ともす思ひで溜めあげた金子百五十兩を奪つたもまたお手前ぢや。かくいちいち數へあげれば、百餘件の上も不埒な所業が嵩んでゐるが、どうぢや弓削殿！　これにてもなほ剛情張り通さるゝ所存かッ。』



『…………』

然るに何たるおぞましき破廉恥漢でありましたらうぞ！　これ程強く責め立てられても、頑として口をあけようとさへもしなかつたものでしたから、平八郎のふと目をつけたのは、あの愚かしき刺客でした。

『よしッ。然らば手を替へてお責め申さう！――こりや萩雄二郎！』

『…………』

『雄二郎と申すに、聞えをらぬかッ。』

『はつ……。き、き、きこえて厶ります。』

『聞えをらば、もそつと前へ出ませい！』

『…………』

『出ませいと言ふに、出をらぬかッ。』

『はつ……。出、出、出まして厶ります。』

『あれ程固く窮面しておいたその方が、これなる席へ臆面もなう參つてゐるは、察するにわれら留守中の無人に乘じて、弓削

めの一味が救ひ出したに相違ないが、何ゆゑかくして迄もその方をわが手から奪ひ返へさねばならぬか、何がゆゑにまたその方がわれらの命迄も狙ひをつたか、ありていに申してみい！　さ！　包まずに申してみい！』

『…………』

『笑止至極な！　その方迄が猿眞似致して剛情張りをるな！　さ！　申せ！　申さぬかッ。』

『はつ……。も、も、申します。只今仰有りましたやちに色々とうしろ暗い事ムりますゆゑ、あなた様を生かしておかば、枕も高うして寢られぬために、ぜひともお首にせよと、御命じなさつたのでムります。それゆゑ、手前があなた様に人質となつてゐては、この先何かと不都合ぢやと仰有りまして、ほんの先程――』

慄へ慄へ雄二郎が言ひかけたその途端でした。かく八方塞めの責め道具に遭つては、いかな汚吏御城代も、所詮も早や自決するほかはあるまいと思はれたのに、咄！　何たる不埓ぞ！　ちらりと新左衛門が、配下の者に目交ぜの合圖をしたかと見えましたが、それと同時です。何か前以つて諜し合せてでもあつたかのごとく、一齊にさッと立ち上るや、不意を衝いて短檠燭臺を蹴返へし乍ら、闇にまぎれてばたばたと逃げ走り出しましたものでしたから、憤怒したのは平八郎ならぬ御城代松平丹波守でした。

『不屆者達めがッ。逃げ走り出すとは何事ぢや！　捕へろッ、捕へろッ。手にあまつたならば斬つて棄てても苦しうないぞッ。早う行けッ。』

下知と共に、城内詰めの所士番士達が、いづれも犇めき立ちつゝ、追つ取り刀で驅け出さうとした刹那！　悠然としておちつき拂ひ乍ら、靜かに制して言つたのはわが天滿の偉傑でした。

『いづれも方、お騷ぎあるな。お騷ぎあるな。弓削のことゆゑ、大方このやうなことにもなるぢやらうと存じて、平八郎抜かりなく門弟共を表に手配しておいてムるわ。それよりも萬ケ一の事あつてはならぬゆゑ、各々方はこれにてお三方を御警固召されよ。』

立ち騷ぐ一統を押し鎭めておくと、先刻登城の砌りに門弟の二隊をひそかに配置しておいたあの御城内のお庭先へ、容子やいかにと逸らず急かずに悠揚として出で向ひました。

三

けれども、平山助次郎率ゐるところの第一線は、悲しや突破されたあとでした。

『二人三人打倒れてゐるやうぢやが、誰ぞ門弟のうちで理由でも

負うたか。』

『いゝえ弓削めの配下共で厶ります。』



『斬つたか。』

『峰打ち致すやう申聞けましておいて厶りますゆゑ、斬つてはをらぬ筈に厶ります。』

『弓削はいかゞ致した。』

『殘念乍ら取逃して厶ります。』

『いづれへ參つた。大手門めがけて逃げのびをつたか。』

『はつ。人數ではこちらの方が多勢で厶りましたが、何を申すにも對手は捨て身。味方のひるんだ隙を狙らうて、六人程がひとかたまりとなり乍ら、逃げ走つていつて厶ります。』

『では正一郎が何とか致してをるであらう。つゞけッ。』

よしんば第一線を突破されたにしても、なほ殘る第二線には、餘人ならぬ剛膽無双の慓悍兒が手ぐすね引いてゐた筈でしたから、急ぎ足に追つかけてい

つて見ると、嬉れしや、果然名物男その名に背かぬと見えて、手柄顔に言ひ叫ぶ聲がきかれました。

『先生先生！　お言葉通り、大鼠を取りひしいで厶りまするぞッ。』

『なに！　召し取つたとな！　たしかに弓削新左衞門ぢやか！』

『はつ。暗くてしかとは分りませぬが、でぶでぶと太つた工合、弓削めに相違厶りませぬ。』

『さすがに天晴れぢや。餘の配下共はいかゞ致した。』

『弓削さへ捕らば、小鼠共はどこ迄逃げ走らうと捕らへるに雑作あるまいと存じましたゆゑ、逃ぐるまゝに棄てておいて厶ります。』

『賢しい氣轉ぢや。では、あれなる門番詰所まで引いて参れ。』

然るに、灯りのもとへ引立てていつて打ち眺めると、こはそも何としたことでありましたらう！　熨斗目裃紋どころ、太つた工合恰好、なにさまちよつと見は弓削新左衞門そつくりでしたが、意外やたつた今城中奥書院に於て對決した當の本人とは、似てもつかぬ別人の化け新左衞門でしたから、弓削とのみ思ひ違へて押さへ捕つた慓悍児のぎよッとなつたのは勿論のこと、さすがの平八郎も、これにはしたたかに打ちおどろきました。

『よッ。影武者を使ひをつたな！　貴様はいづれの何者ぢや！』

『へえい……』

『へえいでは分らぬ。どこの誰ぢや！』

『西町御番所の獄門番を致しをりまする非人めに厶ります。』

『なに！　非人とな！　知つて影武者となつたか。知らずになつたか！』

『實はその、何とも面目次第厶りませぬ。三兩の小判に釣られまして、承知し乍ら影武者となりまして厶ります。』

『なにもかも弓削の差圖ぢやつたか！』

『へえい。宵から弓削様のお屋敷へ仲間と参りまして、一杯頂戴してをりましたところへ、何かは存じませぬが、御城代様からの火急なお呼び出しが厶りましたので、弓削様の申しますには、ひよつとすると大鹽めが何ぞ細工したやも知れぬ。もしそのやうな事であらば、先の先迄工夫しておかねばならぬゆゑ、幸ひお前とわしは太つた工合が瓜二つぢや、三兩遣はすゆゑ影武者に化けろ、とこのやうに仰有いましたので、お言葉通り弓削様と同じ姿につくりまして、あそこのお玄關先に隠れてゐましたところ、今さッきみなさまが矢庭と駈け出して参りまして、何でもよいから一つになつて早う逃げろと申しましたゆゑ、仰有る通りここ迄一緒に逃げて参りましたら、そちらの

討を命された分になつて捕へられたのでムりますこ』

姑息乍ら弓削もまたさる者、小癪にも妨害術策を働かして、奸計の裏を掻くべく、前からちやんと適宜の場合の影武者迄も用意しておいたことが分りましたので、失敗ならぬ失敗した憤慨兒の激怒したのは言ふまでもないことでしたが、しかし平八郎はそれをきくと同時でした。

『助次郎、正一郎！　門弟共の人數を改めて、すぐにつゞけッ。』

『では弓削めのあとを追ふのでムりまするか！』

『平八郎の目玉が黒い間は、あのやうなもの捕るに雜作はないゆゑ、今うろたへて追ふには及ばぬわ。それよりも屋敷が不安ぢや。秋雄二郎めを盜み出したあたり、影武者の用意までも手筈して參つた工合、もしか致すと、出先のあとの無人を狙らつて、何ぞ思はぬ狼藉いたしてあるやも知れぬゆゑ、すぐにつゞけッ。』

わけても身柄を保護中である芳音の身邊が氣掛りでしたから、弓削追捕は事の第二、先づ屋敷へと、たゞちに道を天滿にとりました。

四

然るに行きついて見ると、弓削の所業は愈々不埒、果然留守宅屋敷には不時にお異變がありましたら、直ちに報せてこいと、ゐた門弟達は、出かけに留守居者をえりすぐつていつたあとの年少者ばかりでしたから、充分に狼藉をほしいまゝにする暇があつて來たと見えて、妻女ユウは勿論のこと、若黨、太八、善助、なその中間を初め、殘留組の數十門弟、はては女中下婢の家族に至る部が、いづれも猿ぐつ輪を篏められて、むごたらしくもうしろ手にくくしあげられてゐたのです。のみならず一同をひとつ部屋に押し込めて、あまつさへその襖には、次のごとき憎々しげな貼り紙がしてありました。

『――平八郎、今度はお氣の毒乍らひと泡吹かしたな。おぬしばかりが智慧者でないぞ以後もたびたびかうしてお見舞致すゆゑ、寢首でも掻かれぬやう氣をつけろ。

――弓削殿配下、黒光刺客團。』

面と向はばひとたまりもなく縮み上つて了ふくせに、笑止至極にも黒光刺客團なぞと自稱し乍ら、無力にも等しい婦女子を對手に狼藉した事が、さも手柄ででもあるかのごとく嗤ふべき脅し文句が書きしるされてありましたので、平八郎の面は見る見るうちに青々と怒りのために青まつて行きました。先づ事の仔細をと、妻女ユウの猿ぐつ輪を手づから取りはづしてやる

と、きびしく訊き尋ねました。

『押し入つて參つた人數は何人位ぢやつた。』

『十二三名程でムります。いづれも黑裝束の覆面いたしまして、浪人風の方々にムりました。』

『時刻はいつ頃ぢやつた。』

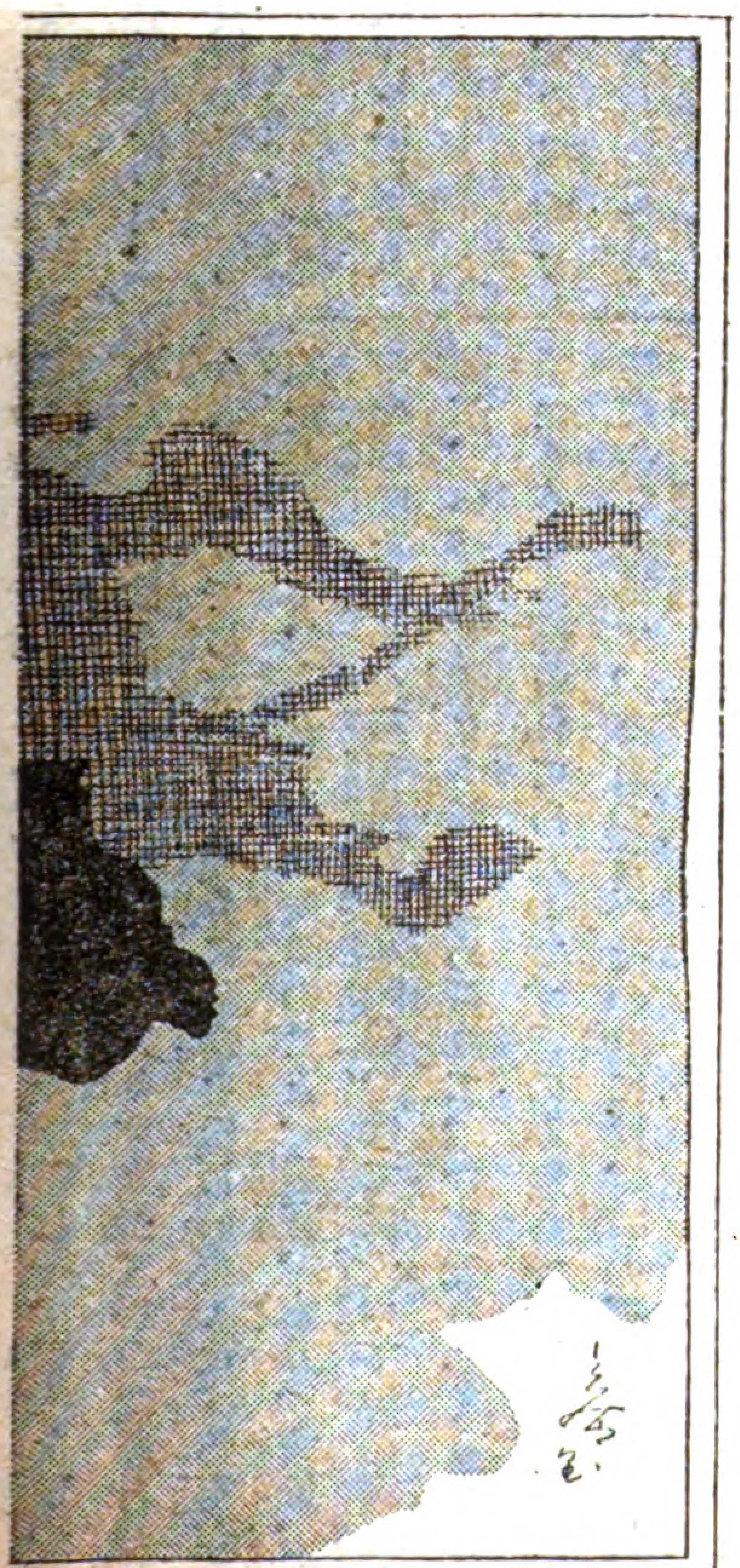
『御登城なさいましてすぐとにムります。何びとか屋敷のまはりでもつけ狙らつてゐたと見えまして、無人になつたのを見すまし乍ら、どやどやと押し入つて參りまして、この通りな狼藉をいたしましたうへ、むごたらしうもまた芳音樣をかどはかして參つてムります。』

『なに！ 浚らつて參つたとな！』

芳音の美貌に飽迄もよからぬ野心を抱いてゐるとみえて、果然、懸念した通りの結果でしたから、怒りのために平八郎の面の愈々青まつたのは當然でした。しかも、時刻は登城したすぐのあとと言ふのです。出拂つたそのあとの無人な留守宅に押し入つて、このやうな憎むべき狼藉所業を働いた上、白々しくも口を拭つて對決の呼び出しに應じた事が分りましたので、今はいかで許しえられませうぞ！

『弓削が爪研いでゐると知りつゝ、屋敷を無人に致しておいたは、平八郎一期の失策ぢや。なれども、もはやかうと知つては片時も逃がしておかぬぞ。助次郎、正一郎、灯りをもてッ。』

根が賢女の芳音です。鏡の破れたのを屆けて、さかしくも貞操の危急を訴へた程の讃ふべき賢女です。よしかどはかされたにしても、そのまゝ見す見すと浚はれて行くやうなことはあるまいと思はれましたので、念のためにその居室として與へやつたひと間を見調べると、案の狀、平八郎の目を強く射ぬいたものは、格鬪のあとを物語るかのやうに、散亂と取り散らされたまゝでゐる居間の敷居際から、ぽとりぽとりと謎のやうに廊下を傳つて、緣側先をずつと庭までふり撒かれてゐる粉白粉の粉末でした。しかも人工でこな白粉は、庭から更に門迄つゞい



て、門から更に往來までも、突然その浚はれ先を、教へ知らしてゐるかのごとくに、夜目にも白く點々として傳はり撒かれてゐたものでしたから、それと發見するや、平八郎の口から鋭く冴えまさつた下知が下りました。

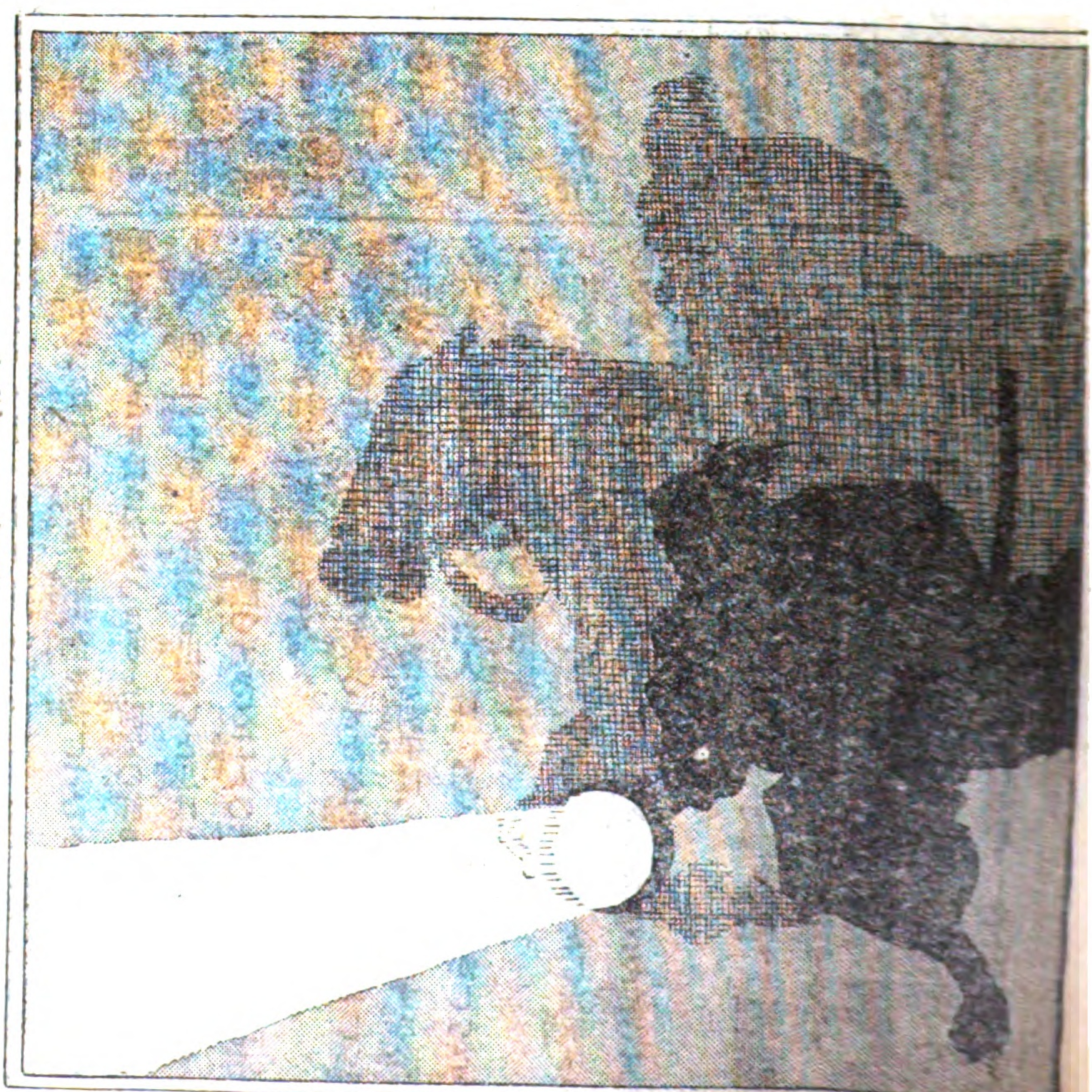
『正一郎、馬曳けッ。やはり芳音どのは、この非常の中にあつても天晴れ男勝りの賢女ぢやわ。これなる粉白粉はまさしく救ひの者に浚はれ先の道しるべとして、撒きおいたものに相違ないぞ。弓削めもおそらくあとから一つ家に逃げ伸びて、毒爪を研いでゐるかも知れぬ。早う馬曳けッ。』

命令一下、まをおかないでそこに曳き出だされたものは、黑鹿毛三才駒の逞ましい逸物でした。用意やおそしと、ひらり打跨がるや、さらに命令一下――。

『助次郎は殘つてしかと屋敷の警固をいたせよ！　正一郎はそれなる龕燈もつて、白粉を調べ調べ道案内せい！』

『はつ。心得てムります！』

凡そ慓悍兒にとつては打つてつけの仕事です。龕燈ふりかさ



しつゝ、躍然として驅け出すと、撒かれた白粉を頼りに、必死と先驅して行きましたので、馬上の平八郎は一鞭、また一鞭―

——蹄を鳴らしてひたひたとそのあとを追ひました。

——夜はこの時に至つて漸くしんしんと更けまさり、城中の對決より時を經ること凡そ四半刻、星も弓削新左衞門の憎むべき所業を痛嘆してか、黒い雲の彼方に姿をかくして、空は暗雲低迷とし乍ら、今にもポツリと、落ち出しさうな雲合でした。

龕燈ふりかざしつゝ、黙々として道にふり撒かれてゐる白粉をたよりに馬前を先驅して行く正一郎は愈ゝ必死。黒光刺客團と誇稱するおぞましき汚漢共は、悲しく美しい芳香をどこ迄攫つて行かうとしたのか、粉は半丁程の間隔を置き乍ら、黙々として一路大淀川べりを、上へ、上へと傳はつてゐるのでした。

三丁、六丁、八丁、そして十丁、十五丁、——然るに何としたことでありましたらう！

『おツ、先生！　残念では厶りませぬか！　ここではつたり白粉が途切れて厶りまするぞ！』

『なにツ、見えなくなつたとな！　今一度よく見しらべろ！』

『舟に乗せて、逃げ走りでも致しましたか。ここの岸邊のところで消えて厶りまするぞ！』

だが——その途端でした。薄闇に閉ざされた土手の向ふから、殺氣と劍氣を孕んだチャリーンと言ふ鍔ぜり合ひの音が、突如主從の耳を打ちました。

『よツ。劍の音が致しをつたぞ！』

等しく息をこらして、闇をすかした主從のまなこに、先づありありと映つたものは、一箇の駕籠でした。やらじ、と言ふかのごとく、前後から助け合つて、ぴたりとその駕籠に身をすりよせ乍ら、必死に前なる敵へ劍を擬してゐるのは、二人の黒い影です。ひとりはまだふつさりと前髪の浮き立つた十七八歳の少年、他は二十の上を幾つも出ないと思はれる若侍——しかも拔け合ひつゝ、駕籠を護つてゐる二人の者は、いづれもそれと見分けられる旅裝束でした。

それだのに、必死と駕籠を守つてゐる二人のその雄々しい影に向つて、一齊に刄を擬してゐる對手は、それに三倍する多勢の六人でした。しかもその六人は、いづれもいぶかしいことに、悉くみな黒裝束の黒覆面です。

折も折。場合も場合。——何者同志の何を目的とした爭ひであるか、天滿の偉傑平八郎は馬上から炯々とまなこを放つて、ぢつと闇を見すかしました。（つゞく）

突如、黒光刺客團に攫はれた賢女芳香の行衞や如何？　泰山鳴動つひに蹶起した天滿の偉傑大鹽の活躍は奈邊に展開するか？　而もその時、更に事件の行手に起つた怪しの爭鬪、疑問の駕籠も不思議なら——それを護る二人の若武者も更に奇怪！　茲に至つて、波瀾は更に波瀾を生み、雨となるか風となるか？　乞ふ次回を[illegible]お待ち下さい。

泰西名話選

乞食の報恩

三瓶常夫

其の頃跋扈跳梁したデーンと言ふ蠻族の襲來を受けて、アルフレッド大王は、身を以て王宮を逃れ、僅か數名の近侍と共に、英蘭の海岸の名も無い島に身を潜めた事があつた。昨日までは金殿玉樓に住んだ身を、賤が伏屋に起臥して、家來達が島の漁夫と一緒に洋に漁りした魚で餓を凌ぐ有様であつたが、さて一日、皆家來は海に出漁した留守、たゞ一人の小姓を相手に徒然をかこつてゐる處へ、一人の乞食がのそ〳〵と現はれて惠みを乞うた。

『惠んでやれ！』

王が命ずると、小姓は當惑げに、

『陛下、お金は一文も厶いません。』

『では食物を與へよ。』

『それも陛下へ供御のパンが一片と、葡萄酒が一杯殘つて居るだけで厶います。』

『宜し、汝はそのパンと葡萄酒を半分づつ分けて取らせよ。誰しも餓じい時はおなじ物ぢや。』

小姓は畏つて、王の命令の通り、パンを半片と、葡萄酒を半杯だけ、その乞食に與へた。



さて其の翌朝の朝まだき、王がまだうつらうつら眠つてゐる枕許へ、突然表の方から、時ならぬ人馬の響が傳つた。何事とガバとはね起きて見ると、意外とも意外、戰の場で別れ〳〵となつた王の股肱の勇士の一隊が、打揃つて到着したのである。夢かとばかり驚喜した王が立出ると、勇士達は、王の無事を祝して、その後王の所在を方々探ねてゐる所を、昨日一人の乞[illegible]

王は、不思議な乞食もあるものと思はれたが、何はさて今は躊躇すべきで無い。此の上は早速本國へ立戻つて、デーン人を追拂はうと、船出の命令を下された。

と、その時彼方の岩の上から、島中に大聲で告げる者があつた。

『アルフレッド王が勝戰への御船出ぢや。皆の者御見送りしたがよいぞ！　若い者は王樣の家來にして頂けや。王樣は天下に又とない情深い方だぞ！』

振り返つた勇士等は、『あれ〳〵、昨日の乞食！』と口々に叫ぶ。王が見ると、それこそ昨日パンと葡萄酒の施しを取らせた乞食であつた。島の若者も、乞食の聲に勵まされて、我勝に王の軍に從つた。斯くて王は英蘭の本國に七百の精兵を引率て立戻つて、美事にたゞ一戰で暴戾なデーン人を擊破して、王權を回復した。（完）



探偵小説

アパアトの殺人

大下宇陀兒
挿繪　林唯一

（一）

『笥井老人を殺すことが出來たとしたら……』

と、これは井神準作がこの三ケ月あまりといふもの、始終頭を惱まして來た問題だつた。彼は東京でも屈指の或る大銀行で、そこの現金支拂係を勤めてゐる男だつたが、その勤めの最中でも、或は又勤めを終つて自分の住んでゐるアパアトメントの一室へ歸る途中でも、この不可思議な考へ事は、まるで牛蝨のやうに、彼の腦髓へ粘着りついてゐて離れなかつた。

『まてよ、俺はまア、何といふ恐ろしいことを企らんでゐるのだ！』

時には無論彼も氣がついた。ふつと蒼い顏をして、その奇怪な考へを頭の中から振り捨てようと努力した。それが銀行へ出てゐる時であつたとすれば、急に勤めの方へ身を入れて、窓口から拂ひ渡す紙幣の束を、その熟練した指先で殊更念入りに數へて見たり、勤めの時間ではない、自宅へ歸る途中でもあつたとすれば、いき

なりその近所の活動寫眞館へ飛び込んで了ふ。スクリーンに映るさま〴〵の場面に、一時でも氣を紛らさうとするのであつて、だが結局はもの丶二三時間も經つて見ると、彼は又しても自分が、あれこれと筒井老人を殺す手段を考へてゐるのに氣が付いた。自分でも無論それが許すべからざる罪惡であることを知りながら、そして流石にそれを避けよう〳〵と努めながら、でも一日〳〵、恐ろしい罪へ近づいて行く彼なのだつた。

筒井老人を井神準作が知つたのは、もう半年以上も前になる。彼はそれまで或る下宿屋から銀行の方へ通つてゐたが、ふと、この緣が丘ハウスと呼ばれてゐるアパアトメントへ移つて來た。そこは獨身クラブと呼んでゐる人もある程で、獨身者ばかりが住んでゐる便利なアパアト、郊外目黒驛に近く、食事は自炊をしてもよし、又は階下の食堂で濟ましてもいゝ。彼は格別何の考へもなしにこのアパアトへ移つて來たが、するとその移つて來た翌々日、彼は筒井老人の訪問を受けた。

『や、突然に上つたのでございますがな、儂はお隣りの部屋を借りてゐる、筒井といふものですぢや。以後どうか御懇意に……』

老人は割合に若向きなパジヤマ風のものを身に纏つて、片手には、『筒井由之助』といふ名刺を差し出しながら、かう言つて準作の室へ來たのである。その時準作は、今もよく覺えてゐるが、かなり面喰つた形だつた。第一には、老人の[illegible]とした[illegible]つた風貌に驚かされたし、それに本來ならこちらから先きに出向いて挨拶をしなければならなかつた。彼は移つて來た日に下の食堂のボオイに頼んで、何々銀行員といふ肩書のある名刺を先方へ屆けて貰つただけであつた。それつきり放つたらかして置いたところへ、逆に向ふから訪問をされたわけなのである。

『あ、これはどうも……』

へどもどと、彼はこんな風に挨拶を返して、だが、これで兎も角も二人の交際は始まつたのだつた。雨降りの日など、準作が勤めに出ようとして自分の室から顏を出すと、そこにひよつくりと老人の立つてゐることなどがあつた。

『おゝ、これから銀行へお出掛けかな。ひどい雨降りで大變ぢやね。』

『はア、どうも腰辨だから仕方がないです。』

と、こんな風に半ば冗談めいた言葉を交すやうになり、それから次第に親密になつて、遂には老人の室へ準作が、將棋を差しに行くやうにもなつた。聞いて見ると老人は、一人の息子があるにはあるが、その息子が今は獨逸へ音樂の研究に行つてゐた。そしてその息子以外には一人も肉親のものがゐなかつた。

『つまり、儂は悴が歸つて來るのが樂しみなだけぢや。かう老年になつてはナ、他に何をしようと思つても出來はしない。ま

アヽア、かうして氣樂なアパアトメント住居でもして氣長にあれの歸朝を待つとるんぢや。』

　或る時老人はこんなことを言つたが、言はれて見ればこの老人の境遇が多少準作のそれに似てゐないこともなかつた。準作は幼少の時に兩親を失ひ、孤兒同樣にして育つた男である。兄弟もなければ、數へる程の親戚もない。非常な境遇だつた。そのことを老人に話すと、

『それアどうも、まるで儂と同じやうな身の上ぢやね。』

　と老人もそんな風に言つた位だつた。

　年齡から言へばその間にかなり大きな隔りがあつたが、かうしてお互に孤獨な同志、彼等が日一日と親密の度を増して行くのに不思議はなかつた。そのアパアトには無論まだ多くの人々が住まつてゐて、しかしその中でも特にこの二人だけが、まるで百年の知己のやうな交際を始めたのである。そして、だがそこにどうして準作が老人を殺さうといふ氣持を起したのだらう？　實は老人が、飛んでもないことを打開けた爲なのだつた。



　それは何でも、二人が知合になつてから四ヶ月程經つた時のことである。或る日老人は非常に喜悦に充ちた顏で、井神準作をその夜の晩餐に招待した。序でに言へば、老人は一人きりで暮してゐる代りに、いつも隨分贅澤な日を送つてゐた。食事などはいつも仲仲凝つたものを近所の料理店から取り寄せて、だから、老人が貧乏でないことは前々からも分つてゐ

た。そして、その粗末された晩餐といふのが、それは老人の部屋で主客二人だけのものであつたが、卓子には一流料理店へ行つても先づこの位のものと思はれる程の料理が並べられ、それに三鞭酒の罎までが添へてあつた。無論老人が、料理店へ命じて備へたものであつた。招かれた準作が一寸吃驚したやうに眼を瞠ると、老人はさも滿足さうに微笑した。

『はつは丶丶、これアね、儂のお祝ひの積りなんぢや。實はね、今日手紙が來たのですわい。』

聞いて見るとそれは、老人の獨逸へ行つてゐるといふ息子が、愈よ歸朝することになつて、近々に船へ乗り込むといふことたのだ。老人がどんなに歸朝を待つてゐたのか、その一事でも解ることが出來る。老人はそれからひどく機嫌よく準作を款應し、自分も三鞭酒の杯を幾つともなく重ねて行つた。そして揚句の果てに、ふと次のやうなことを言ひ出したのである。



『どうぢや井神さん、あんたは寶石といふものに趣味がお有りか？』

『え？』

あまり突然だつたので、準作が鳥渡答へに詰まつてゐると、老人はひよいと立上つて室の隅へ行つた。そこには衣裳戸棚が置いてあつたが、それをよいしよ！と言ひながら横へずらすと、壁紙の貼られてゐないザラ〳〵の壁が現れる。と、その床板に近いところに一ケ所微かに色の變つた場所があつて、老人が手をやると、ポカリと眞黒な口を開いた。

『これぢや〳〵。』

老人が悦に入つて呟きながら、その穴から取り出して來たのは、一見ひどく頑丈な鐵の箱だつた、深さと幅とが三寸ばかり、長さはその二倍ぐらゐのものであらうか、釦を押すと蓋がポンと外側へ開いて、中は燦然たる光に充たされてゐた。内側を銀張りにして、そこに夥しい數の寶石が收めてあつた。

『ほう！』

と言つて、思はず準作が息を呑むと、老人は一層滿足氣に頷いた。

『僕の全財産はこれなんぢやよ。僕は持つてをつた金を、全部この寶石に代へて了つたんぢやが、さア、大體のところ、これだけでも日本では一流の寶石店を開く位のものはあるんぢや。』

老人は先づこんな風に言つたのだが、成程それは實際素晴らしい寶石の蒐集だつた。見たところ、六七十カラットもありさうなダイヤが二つもあるし、紺碧の色を湛へたアクアマリン、金色の地に薄く綠色の瞳を開いた猫眼石、その他殆んどありとあらゆる種類の寶石だつた。老人の說明によると、彼は元非常な財産家であつたのだが、先きに言つたやうな淋しい身の上から、何か上品な道樂は無いものかと考へた末に、ふとこの寶石蒐集に着手した。日本人は元來あまり寶石には趣味のない國民と見えて、日本人の間だけでは滅多によい寶石は集まらない。それには幸ひ息子が外國へも行つてゐたので、廣くアムステルダムあたりまで手を廻して、及ぶだけのものは集めて見た。結局今では、全財産がこの小さな箱の中へひそやかに收められた、といふのであつた。

『だが、隨分思ひ切つた蒐集をなすつたものですね――』

寶石の光に眩惑されながら、しかし準作がこんなことを言ふと、老人はその寶石を再び元の場所へ蔵ひながら答へた。

『はつはゝゝ、多分あんたもさう言ふぢやらうと思つとつた。僕は今迄誰にだつて、僕がこんなことをしてゐるのを話してはない。倅だけは知つとるんぢやが、他の人に言ふと、誰にだつてこれは嗤はれる。全財産を寶石に代へるなんて事は、馬鹿か狂人のすることぢやと言つて、誰も彼も僕を馬鹿にしくさると思つて、まア、こつそりとかうして樂しんでゐたのぢや、はつはゝゝ、あんただつてそれその通り呆れたやうな顏をしとるんぢや。が、これで集めて見ると、何とも言へぬ樂しみがあるのですわい。』

何故老人がこれ程の貴重な蒐集を、いかに親しいとは言へ、偶然に隣り合つて住むことになつただけの井紳準作に打ち開けたのか。これは多分、老人が井紳準作を極度に信用してゐたせゐであらう。いつたいが準作は、若いにも似ずパツとしない、どちらかと言へば陰鬱な方の性格であつて、それが又一方から

ゐると、[illegible]

めたの寶物でも、恐らくはこのために老死するまで安樂に暮したのであらうし、老人も又、そこを十分に信用したのに違ひなかつた。——そして、だがこゝに恐ろしい罪の動機が生れたのである。その夜以來、井神雅作は、時々あの寶石のことを思ひ出し、それがやがては、老人を殺さうといふところまで進んだのだつた。

（二）

最初は無論、井神雅作も必らずしも老人を殺さうと考へたわけではなかつた。ふと見せられた寶石が欲しくなつて、それを盗み出すのも比較的容易なことだと思つた。老人は一人きりで暮してゐるし、例へば豫め老人に何かの輕い催眠劑でも飲ませて置いて、その眠つてゐる間に忍び込めば、第一、肝心の寶石の隱し場所は知つてゐるのだし、何も面倒なことはなささうであつた。が、そこで一歩深く踏み込んで考へると。實はこれが仲々困難なことなのだつた。

『これまで誰にも話したことはない。』

老人はこんな風に言つたではないか。寶石が盗まれた場合、當然老人は、唯一人それを知つてゐる筈の雅作へ嫌疑をかけるだらう。それが火を見るよりも明かだつた。盗み出すだけは盗

[illegible]ても、そ[illegible]

ないさ。

『では、殺すとして——』

この考へは、ふと思ひ出しただけでも、慄へ上がる程に恐ろしかつた。そして前に言つたやうに、彼は幾度となくその考へを放棄しようと苦心して、だが、一方に於ては、老人の子息が一日一日、日本へ近づいてゐることを意識して、無性に苛立たしく絶對に寶石を手に入れる機會はありさうになかつた。とすれば、その前に事を決行して了はねばならぬ。と言つて、では、どうしたらよいのであらうか？

後になつて考へて見ると、雅作がかうして容易に決心することが出來なかつたのは、勿論恐ろしい犯罪に對する怖れもあるにはあつたが、その一面には全く別な理由があつた。或はその方が、主として彼を躊躇させてゐたのかも知れないので、それは適當な殺人方法を發見し得ないといふことであつた。そして然も老人は、その後次のやうなことを言つたのでもあつた。

『儂はね、倅のところへあんたに特別世話になつたことを言つてやりませう。多分、船の出る前に倅の手へ屆く筈だが、先日の晩な、あの時お祝ひに二人で三鞭酒を飲んだことだい。それから、儂の蒐集した寶石をあんたに見せたところが、あんたは餘り寶石には興味がないやうだつた。だから、あんたには他の

もので何かの土產を買うて來いなどと、こんな風に言うてやりましたよ。』

これは準作の頭へがーんと響いた。老人がそれまで向ふへ知らせてあつては、例へ老人を殺したにしても、今度は歸朝した老人の子息が、寶石の秘密を知つてゐる筈の井神準作を疑ふのが當然なのだつた。殺人方法を、最も愼重に考へねばならなくなつた。一番よささうに思へるのは、老人を殺して置いて、自殺を裝はしめることであつた。毒藥でも飮まして、屍體の傍には、老人の筆蹟を眞似た僞の遺書を置く、これは案外成功するやうな氣がして、事實彼は、ひそかに老人の筆蹟を研究し始めたのであつたが、すると、その筆蹟が案外眞似易いものではあつたものゝ、ふと氣付いて見ると、彼は自分ながら莫迦々々しくなつて呆れて了つた。老人には自殺するべき理由が毫もなかつた。折角自殺を裝はせても、僞遺書に人を頷かせるだけの理由がなければ何にもならない。最愛の子息が今にも歸朝しようとするその矢先きに、突然自殺するやうなものがどこにあらうか!

が、かくして井神準作が、まるで惡魔に魅入られた魂のやうに、來る日も來る日も、たゞぢつとこの奇怪な企らみに耽つてゐた時、それは、あの寶石を見せられてから、殆んど四ヶ月の終りに近く、彼はその日の夕方アパアトへ歸つて來て、すると只ならぬ面貌をした筒井老人の訪問を受けた。

『井神さん!』

と老人は、取り亂した風はなかつたけれど、ひどく沈痛な調子で言つたのだつた。

『今日はあんたのお留守に、大變不幸な知らせがありましたよ。』

『ど、どうしたのです?』準作は何がなしにドキリとした。

『實はな、儂の伜が歸朝する船の中で、ひどいマラリア熱に罹されたんぢや。そして三日病んだだけで死んで了つたといふのぢやよ。』

『え?』

『井神さん、察して下され。儂は——儂は、愈よ一人ぼつちになつて了うた!』

筒井老人は子供がむづかる時のやうに顏を歪めた。泣き度いのを、ぢつと堪へてゐたのである。

『そ、それはしかし、そんなことがほんとうにあつたのですか。どうしてそれが知れたんです?』

準作は吃驚して訊ね返すと、老人はその顏を一層妙な風に歪めて了つた。

『無電ですわい。』

そして老人は首を項垂れたまゝ自分の室へ歸つて行つた。惱



[illegible]
[illegible]にそこへ[illegible]殘された[illegible]作には、この時實は頭の中に、火花のやうに素早い或る考へが浮んで來てゐたのである。それは、一瞬の間にパッと闇の中を照らしぬく、あの雷の閃光にも似た考へであつた。

『さうだ、老人が自殺をする理由が出來たやうだ！』

今や、全く悪魔に乘取られた彼であつた。耳には筒井老人がバタリと力なく隣りの扉を閉ぢる音を聞きながら、彼は少時の間、身動きもせずに、ぢつと空間の一所を見詰めてゐるのであつた。

（三）

その夜からかけて四日あま

り、井神準作はどんなに忙しい思ひをしたことか？　表向き彼は筒井老人を出來るだけ親切にしてやつた。翌一日は自分の勤めも休んで了ひ、終日老人を慰めてゐた。そしてその間には階下の食堂へ行つて、さも〳〵同情したやうな口吻で、そこにゐたアパアトの誰彼に向ひ、筒井老人がどんなにこの不幸を嘆き悲しんでゐるか、それとなく吹聴することを忘れなかつた。その實老人は、その悲嘆をぢつと胸の奥底に押し隱し、他見にはそれ程變つたところもなかつたのだが、それを準作はなるべく誇大に吹聴した方が便利だと思つた。老人の悲しみが大きければ大きい程、死んだ後でその自殺の理由が益々はつきりと誰の頭にも納得出來る筈なのだ。

實行の途中で老人の室に一度だけ忍び込む必要に思ひ付いて、彼は隙を窺つて老人の部屋の鍵を蠟型にとつた。アパアトであるから各室共、扉の鍵は異なつてゐた。エール錠といふ妙なのであるが、それを作る爲には薄い鐵片と鑢とを使つて殆んど丸一日の時間を費した。そしてこれが出來上ると、今度は贋の遺書の作製だつた。前には自分ながら莫迦々々しいと思つたことだが、老人の筆蹟を研究して置いたことが今は正しく役に立つのであつた。と言つて、これは決して容易なことではなかつた。幾度も文章を書き直し、三日目の夜に徹夜して、漸くのこと凡自分でも滿足と思ふやうな、いかにも尤もらしい書置きを作つた。老人には親族のないことを知つてゐたし、その遺書の宛名は、アパアトで最も親しかつた自分を選んだ。多少筆蹟は違つてゐても、自分の手へその遺書が歸りさへすれば、どうにでもして誤魔化すことが出來ると思つた。筆蹟を怪しまれないうちに、わざと自分がそれを紛失してしまふことも出來るのである。

『井神準作殿――』

といふ書出しで、但し出來るだけ文章は簡單に、彼はその中に老人が最愛の一子を失つた悲しみから自殺するといふ意味を明かにした。それを封筒に入れて了つた時、彼はもう事が半ばまで成功したやうな氣持にもなつた。

ふと、彼は又、老人の許へ屆いた無線電信が、何かの理由で飛んでもない誤報であつたのではないかしら、とそんなところへも氣が付いた。それは後にも分つた通り、全くの杞憂に過ぎなかつたのであるが、考へて見れば、若し萬一にして誤報であつたとしたところが、その誤報を老人が信用して自殺したとすれば、格別怪しまれることはなささうであつた。そしてその場合にはいづれ老人の子息が歸朝することになるのであるが、さうしたら、樣子を窺つて遺書を元へ戻すなり、或は又、そのまま自分のものにして了ふなり、どちらにしろ容易に行へることだと考へた。

こここ[illegible]
は[illegible]にお[illegible]の良るアルカロイド[illegible]を手に入れてゐた。友人の一人が門外漢になつてゐて、その高価の薬品から、その時は只物珍らしさに少しばかり貰つて來ただけのものであるが、それが偶然にも役に立つた。無味無臭、内服後約一時間半で反應を起すといふ、その毒物の一種獨特な性質も都合がよかつた。

讀者諸君は、こゝで井神準作が、これ程にも綿密な計畫を樹てたのにも係らず、たつた一つ、全然或ることを考へずにゐたことに氣付かれはしまいか。それこそはやがて準作の破滅を招いたもので、實際のところ、彼は實に案外な錯誤をしてゐるのである。と言へば諸君のうちには、老人が歸朝間際の子息に向つて井神準作のことを書いた手紙を出した、あの手紙を思ひ出される方もあらう。なるほど、その手紙が後になつて現れたとすれば、これは當然準作に嫌疑のかゝる大きな一つの原因だつた。が、幸か不幸、後に知れたところによると、この手紙は遂に最後まで誰の眼にも觸れずに終つた。それはマラリヤ熱で死んだ老人の子息、その着てゐた服の内ポケツトに收められてゐたのであつたが、消毒のため服と一緒に燒き捨てられた。では他に、果してどんな錯誤であらうか？　追々にそれは讀者諸君にもお分りになつて來ることとなのである。――兎に角井神準[illegible]

老人の許へ[illegible]
と、これは五月十二日の午后十時、彼はそつと老人の[illegible]たのだつた。言ふのを忘れたが、老人はいつも寢る前に熱いコヽアを啜る習慣があつた。彼はこれを利用する積りで、片手には自分で煮立てたコヽアの茶碗を持つて行つたのである。

『あ、もうぢきにお休みになる時間でしたね』

彼は何氣なくかう言つて靜かに入口の扉を閉めた。

『實はね、今日友人から非常にうまいコヽアだと言つて、こんなのを貰つて來たんですが、一つ味を見て貰ひに參りましたよ。』

岡井老人は、すると、嬉しさと悲しさとが入り混じつたやうな、ひどく奇妙な顏になつた。

『あ、ありがたう。この儂を、こんなにまでして下さつて――』

『いゝえ、何も大したことぢアないんですよ。』

受け取つたコヽアを、老人は一口啜つた。

『はて？』

『い、いかがですか？』準作はゴクリと唾を嚥み込んだ。

『これアあんた――』

『え？』

『うまいにはうまい、が、さうぢやね、ミルクを少し入れ過ぎ

たのかね？』

だが、かう言つただけで、老人は續けてそのコヽアを啜り込んだ。フー〳〵と息を吹いて、熱いのを冷ましながら、次第にその全部を飲み下して行く。床へ釘付けになつたやうに立ち盡した準作には、その間が恰も一時間にも二時間にも思はれる程の長さだつた。

『いや、どうも有難う。』

老人がかう言つて茶碗を準作に返す。準作は狼狽したやうにそれを受け取つて暇を告げた。

『まア、もう少し話して行かれてもよろしいぢやらうに。さうさう、儂は明日から一寸氣まゝな旅行をしようと思つとるが…』

『え、御旅行にですか？』

『何處へ行くか分らない。氣まゝな旅行ぢやが、さうすると當分お目にはかゝれない。もう少し話して行つて下され。』

『いえ、今夜は一寸仕事がありますので――』

彼は息を殺すやうにして自分の室へ歸ると同時に、そこでホツと大きな溜息をした。そして、すぐに茶碗を水で洗つて了ひ、身を縮かめて寢床の中へ潜り込んだ。



老人の室を一つ隔てた向ふには、某大學の助教授だといふ男が住んでゐたが、その男の室では折から二三人の客人があると見えて、賑かに何か笑ひ興じてゐる聲が、時々、どつと準作の部屋まで聞こえて來た。が、一時間二時間、次第に夜が更けて行くと、その客も歸つて行つて了つたらしい。

やがて、づるんと自分の寢床を拔け出した準作は、例のお手製の鍵と贋の遺書を携へて、人氣のない廊下を、スル〳〵と隣室の扉へ近づいて行つた。――ほんの十五六分、再び自分の室へ引返した時の彼の顔は、まるで墓石のやうに蒼ざめてゐたのである。

（四）

翌日は火曜日であつた。

前夜一睡もしなかつた井神準作は、頭の中が石を塡めたやうに重たく感じ、しかし、何喰はぬ顔で、老人の室がまだぴつたりと閉められてゐるのを盗むやうに見ながら、いつも通りの時間にアパアトを出掛けて行つた。

緑が丘ハウスと呼ばれてゐるくらゐで、そのアパアトは少し小高い丘の中腹にあつた。丘を下つて行く時、ふと背後のアパアトの窓から、筒井老人が自分を

ぢつと見送つてゐるやうな氣持がしたが、彼はぶるつと身を顫はせて、急ぎ足に丘を遠のいて行つた。

『どうしたい、君今日は何か頻りに考へてゐるね？』

銀行では、出來るだけ氣を引立ててゐたのであつたが、それでも一度だけ同僚からこんな事を言はれた。

『な、なんでもないよ。』

『さうかい、そんならいゝけれど、――オヤ、額に汗が滲み出してゐるぜ。』

『あ、汗が――』

準作は狼狽てゝ手巾を取り出しながら、それでも、どうにか



かうにか言ひ拔けた。

『なにね、いくらか頭痛がするんだけれど、――今日は何だか蒸し暑いね。』

銀行が引けて、愈よアパアトへ歸ることになつた時には、新しく又種々なことが考へられた。朝出る時は老人の室が閉まつてゐた。が、いづれは後になつて誰かゞそれを怪しみ出して、それから老人の死んでゐることが發見されてゐるだらう。いやいや、ひよつとすると、まだ誰もそれに氣付いてはゐないかも知れない。して見れば、自分はこの四五日アパアトへ歸るとすぐに老人を訪れて、何やかや世間話をすることになつてゐるのだから、自分がこのまゝすぐに歸つて行くと、自然の結果として自分が先づ老人を訪れて、その第一の發見者にならねばならぬ。どうも何となく不安なことではある。いつそ、他に用



事を拵らへて、もつと遅くなつて歸らうか……。

だが、彼は殆んど器械的に、通ひつけた道順に從ひ、午后五時過ぎ、到頭アパアトの近くまで來て了つた。見ると、別に變つたこともなささうである。彼は思ひ切つて二階への階段を上りかけた。彼の室は二階のフラットにあるのである。階段を上り切つて右へ曲がらうとして、と、彼はギヨクンとしてそこに足を停めた。

外面平靜には見えたものゝ、既に事は或る程度まで豫期したやうに進んでゐた。その廊下の突き當りから三番目が彼の室であるが、その隣りの扉の前に、四五人の人々が固まり合つてゐるのである、彼はスツと息を吸ひ込んで、だが、わざとそれをじろりと横目に眺めたまゝ、自分の室の扉を開きかけた。

『あ、歸つた〱！』

とその途端に、四五人のうちの一人が叫んだ。それは階下の食堂のボオイであつた。

『井神さん、いゝところへ歸つて來て下すつた。今ね、あなたのところへ迎へに行かうかなんて言つてゐたところです。』

『何故？』



『なにね、筒井さんが、今日中、一日部屋の扉を開ないんです。』

説明によると、人々の騒ぎ出したのが、つい今の先きのことであつた。いつも老人はこのボオイに好みの食事を吩咐けるので、その食事が下の食堂で出來ない場合には、これを附近の料理店へ註文するといふやうな順序であつたのだが、今日は老人が一度もボオイを呼ばなかつた。ふと不審に感じて、扉の外から聲を掛けたが返事はない。

『いえね。』とボオイは急に聲を潜めて言ふのであつた。『多分、そんなことがありはしまいと思ふんですけれど、そら、筒井さんは此頃ひどく沈んでをられましたからね――』

『だつて――』

『えゝ、まア〱、多分そんなことはないと思ふんですよ。ですけれど、親一人子一人だつたといふぢやアありませんか。』

準作は腹の中で凱歌を奏した。既に〱、人々は老人が自殺したのではないかと疑がつてゐるのだ。

『莫迦な！』

わざとボオイを叱り付けるやうに言つて置いて、彼は一旦自

『で、どうしようといふんですか？』と彼は訊いた。

『いや、あなたを待つてゐたんです。あなたが筒井さんと一番親しくしてゐたのですし、一緒にこの扉を開けて見ようと思つてゐました。――鍵がありませんからね、鍵を叩き毀すより他はないんです。』

頭の中では、例のお手製の鍵を、今日銀行へ行く途中で掘割の中へ投げ込んで來たことを思ひ出しながら、準作は、大聲に老人を呼んで見た、無論返事は無い、そこで、皆が騷がしい音を立てゝ、その扉を破壊して了つた。そして、

『あッ！』

と誰も彼も、愈よ扉が破壊されると、その入口でから叫んだ。寢側の寢臺から半分身體を落ちかゝるやうにのめらせて、筒井老人が死んでゐるのだつた。苦悶したらしく、片手を咽喉のところへやつてゐた。そして唇から黒ずんだ血を僅かばかり右の頰へ垂らしてゐた。

ボオイと、それから誰かゞ最先きにその寢臺へ駈け寄つた。續いて準作も駈け寄つた。

一瞬の間、誰も言葉を發するものがなく、眞蒼になつて老人の屍骸を眺めてゐた。

（五）

繰返して言ふが、井神準作は自分の犯行手順が完全無缺であることを信じてゐた。そして事實それから後少時の間は、萬事が豫定通りにスラスラと運んだ。そこにゐた一人が、老人の枕元にあつた贋の遺書を發見して、それはすぐと準作の手によつて開封された。準作はそれを讀み終つて、無言のまゝ、他の人達にも讀ませてやつた。誰



一人、それを疑ふものもなく、そしてそれは、間もなく目黒署から係官が出張して來て、その時にも繰り返されたことであるが、係官も矢張り疑ふ風を見せなかつた。老人が用ゐた毒薬は何であらうといふことになつて、口中にたまつてゐた血液が警視廳の鑑識課へ廻されたが、それにしても死因は明かに自殺だつた。その夜の八時頃には、係官も引揚げて了ひ、アパアトの人々は埋葬の手順などを相談することになつた。肉親のものがないといふので、それには當然最も親しかつた井神準作が萬事を切盛せねばならなくなつた。が、これとても彼は充分豫期したことであつたのだ。

で、かうして井神準作の氣持が、次第に緩みかけた時である。それは恰度、老人を知つてゐたもの達が集まつて、お通夜をしようといふことになり、一同がその室でとりとめもなく老人に關する追憶談などを交はし始めた時であつたが、この時始めて、準作のためには最も怖るべき罪の發覺の前觸れがあつた。といふのは、その時階下へ行つてゐた食堂ボォイが、稍〻慌てしく一同のところへ馳けて來たのだつた。

『あのね、今、筒井さんのところへ電話がかゝつて來たんですが――』

ボオイはかう言つた。いかに孤獨な老人ではあつたにしろ、その老人へ電話のかゝること位は、さう珍らしいことではない。が、場合が場合だつた。一同は妙な氣持で顏を見合せたのである。



『誰からかゝつたのだ？』と一人がポツンと口を切つた。

『えゝ、それがね、何でも辯護士で依田とかいふ名前ださうです。筒井さんへかゝつて來た電話は、今まで私が大抵取次いでゐたんですが、どうも始めての人だと思ひましたよ。ひよつとして、筒井さんの親戚つていふやうな人ではないんでせうか。』

『さうかも知らん。が、何と答へて置いたんだ？』

『親戚だとすれば都合もいゝし、それにどうせ新聞にも出ることでせうし、あけすけに自殺したつてことを知らせました。そしたら、すぐに出掛けるからといふことでした。』

淨作を除いた一同にとつて、それは何がなしホッと救はれたやうな報知だつた。かうした場合に、親戚らしい者が現れることは、何よりも好都合なことであるからなのだ。が、一方淨作には、妙にこのことが氣になつた。別になんでもないやうな、又は何か意味のありさうな、へんてこに氣懸りなものであつた。肉親の者がゐないといふことを信じてゐただけに、若しそれが老人の詐りであつて、然もその依田といふ人物が、老人の蒐集した寶石のことを知つてゐたとしたらどうであらう？　豫感といふものであつたかも知れない。この時に感じた不安は、次第に彼の胸を暗く重く壓倒して行つたのだつた。

『來ましたぜ。』

ボオイがやがて辯護士の來たことを告げたのは、九時半頃のことである。この人物は四十年配の稍丸顔な、一見して快活な好人物らしい容貌だつた。準作は僅かに安心しかけたけれど、それに續いて、その通夜の室へ這入つた人物を見ると、心臓がひとりでに激しく鳴り出した。それは屍體發見當時にもこゝへ來た、目黒警察の司法主任の山田といふ男の制服姿であつたからである。

『皆さん、どうも種々お世話樣になります。』辯護士は先づかう言つて挨拶した。『私は、この筒井さんの古い知合なのですが、どうも實に飛んだことで――』

辯護士は、そこで死者の枕下へ近づいて顔にかけてあつた白布を取り受け、ちつとその顔を眺めてゐた。そして、山田司法主任と何か小聲に囁き合ふ。うむ〳〵、と頷いた司法主任は、靜かに一同の方を振り向いた。

『あ、この中に井神さんといふ方がをられますか？』

『は――』準作はピクリとして答へた。

『あなたですか？』

『さうです、僕です。』

『ぢア――』と司法主任は辯護士に言ひかけた。『どうしますか先生、あの方が井神さんださうですが、井神さんだけに殘つて貰つて、他の方には一寸の間遠慮して貰ひますか？』

言葉附から判斷して、辯護士は司法主任から相當尊敬されてゐるらしい。が、さうしたことよりも、井神準作は自分が今どんな立場にゐるのか、それをはつきり見極めようとして頻りに焦つた。それは朧氣に、最も悪い立場のやうに思はれたり、又は全然さうでもないやうに思はれた。兎に角、落着かなければいけぬと思つて、皆がそこを立去る間、氣付かれぬやうに深呼吸をした。そして先づ彼の方から言葉を掛けた。恰も弱身を見せまいとするやうに。

『で、何か僕に用がお有りなのですか？』

『いえ、實は――』と辯護士はゆつくりと寢臺の傍の椅子へ腰を下ろした。『故人があなたには生前大變厄介になりましたさうで、慥か、あなた宛の遺書があつたとか聞きました。』

來たぞ！　と準作は思つた。遺書を見せろと言ふのだらう。だが、その手に乘つて堪まるものか！

彼は急に自分の服のポケットを探し始めた。

『待つて下さい、えゝ、その遺書を何處へ藏つたんだか、はてナ？』

言ひながら、彼は心中で向ふが何か言葉を挾んで呉れゝばいいと思つた。が、辯護士も司法主任も、意地悪く默つて準作の態度を眺めてゐた。

『妙ですな。誰かポケットへ入れたと思ふんですが、いえ、僕の室へ置いて來たのかも知れません。取つて來ませう。』

立上ると、始めて俵辯護士がそれを制した。

『いや／＼、もう結構です。それは又後のこととして戴いて、最初には私のことを大體お話致さなくてはなりませんが、先きに申しました通り、私はこの筒井さんの古い知合。つまり、元の顧問辯護士だつた譯なのです。故人は元相當の資産家であつたので、今はまあかうして、極めて變つた生活をして、私も長いこと音信不通になつてをりますが、私は前に大分お世話になりました。こんなところにをられるとは、實のところ、今日まで知らずにをりましたので――』

とこゝまで喋つて來た俵辯護士は、ふとこの時何かを思ひ付いた風であつた。かなり長い間、頻りと何か考へてゐた。準作の不安が又しても急に膨れて來る。と、漸くにして俵辯護士は言つたのである。

『あ、さうでした。矢張り、老人のあなた宛の遺書を拜見させて戴きませう？』

準作は非常に不愉快だつた。が、すぐに自分の室へ行つて、それから空手で歸つて來た。

『矢張りありません。ほんとに妙なことですが、紛失して了つたのかも知れません。』

チラリと俵辯護士の眼が光つた。そして、すぐとチク／＼した言葉で言ひ始めた。

『さうですか。ぢアそれは仕方がありませんが、ところで、多分あなたは、故人の莫大な財産がどうなつてゐるか、それを御存知でありませうな！――左樣、何しろこゝでは、あなたが故人と最も親しくしておいでだつたといふことですから。』

（六）

この時、俵辯護士の態度は、先刻までと大分變つて來てゐた。それは恐く叮嚀な言葉付きで、一語一語をゆつくりと考へてから喋る風であつた。準作はへんに身動きの出來ないやうな心持がした。財産がどうなつたかといふ質問に對して、無論、それが寶石に變つてゐるとは言へなかつた。當然知らないと答ふべきだつた。が、果してさう答へた方がよいのであらうか、何となく迂闊には口を開けないのだつた。對手の視線を避けるやうにすると、例の衣裳棚が眼についた。その隅に、あの鐵の小箱があつたのだが、それは今自分の室の押入れの奥に隠してある――。

『いえ、僕は、そんな財産のことなどは知りませんよ。』思ひ切つて彼は答へた。

『え、知らないんですか？』

『知りません。全然知りません。老人は一度もそんなことを話したことがありませんよ。』



『ほんとですか？』
『嘘は言ひません！』
怒つたやうに答へて、がた
準作は腹の心までゾクリとした。その時、依辯護士と司法主任とが、ハツトしたやうに眼と眼を見合せたのだつた。
『どうだらう、大分妙なことになつて來たが、――』
『さうですね、も少し訊いて見たらどうでせうか。』
二人はかう言つて準作の顏をじろりと見た。
『何が、何が妙なことになつたんです！』準作は、何か知らぬが取返しのつかぬ失敗をしたやうに感じた。
『さア――』と依辯護士は再び深く考へ込んだ。そして今度は前よりも一層静かな口調で喋り出したのだつた。
『さうですね、その妙なといふ譯を話してあげてもいゝんです

が、實を言ふと、この老人は昨夜一通の手紙を認めて、私のところへ出したのです。私は今日一日中外出してをりましたが、自宅へ歸つたのが八時頃で、すると老人の手紙でした。何しろ久しぶりですから、大急ぎで封を切りましたが、どうです、中には何が書いてあつたかお分りですか？』

『…………』

『お分りがない。さうでせう。老人は今日早朝、卽ち、その手紙が私のところへ屆かぬうちに出發して、何處か風光明媚なとこで自殺するといふ旨を知らせたのです。つまり遺書ですが、それを見て私は先刻このアパアトへ電話を掛けました。が、するとどうでせう。老人はこゝで自殺したと言ふぢやありませんか、私は一寸妙に思ひましたよ。』意外も意外、老人はほんとうに自殺する積りであつたといふのだ。準作は夢にもそんなことは思はなかつた。あらゆる思慮を廻らしながら、流石の彼も、そこまでは到底考へなかつた。が、そしてさうであつたとしたならば、さうだ、そこにはどんな手違ひがあつたのかも知れないのだ。一言も答へが出來ず、棒のやうに身を固くしてゐると、俵辯護士は猶もゆつくりと話を續けた。

『で、何故それが妙だと申しますと、老人は私宛ての遺書中で、誰にも姿を見られずに死ぬといふことを言つてゐます。いつたいがこれは、昔から時々老人が私に話したことなので、つまり、風光明媚なところで靜かに死ぬのが理想だつたのでせう。それが、突然に氣を變へたと言へばそれまでですが、兎に角さうした老人が、この室で毒藥自殺をしたといふことが、どうも妙なことに思へたのです。私は來る途中で、知つてゐた人もありますし、警察へ寄つて少しばかり事情を聞いて參りました。』

『そ、それがどうしたのですか？』準作には、このへんに廻りくどい俵辯護士の言葉附きが、無性に苛立たしく思はれた。何故この男は、こんなにも持つて廻つたもの言ひ方をするのであらう？――が、その氣持を俵辯護士は柔かく受けた。

『いや、それがすぐにどうしたといふのではありませんが、それで兎に角私は、最初に老人があなた宛に書いた遺書を見せて戴かうと思ひました。するとあなたはそれを紛失したと言はれましたが、どうでせう、遺書などといふものは、相當重大な意味のあるものですし、之れを紛失するとは、一寸不思議なことではありませんか。』

『そ、それはしかし、紛失したのかしないのか、まだしつかり探したといふんではないのですから、ま、まだ、有るかも知れません。』

『さうですか、では、それは後にもう一度探し出して戴くとして、だが、あなたは先刻、老人の遺した財産について、全然何も知らないと言はれましたね。』

『え、ええ、……言つたには言ひました……』

準作は自分が全くしどろもどろの返事をしてゐるのを歯痒く思ひながら、でもどうしてよいか分らなかつた。手の甲で頻りに額の汗を拭つた。

『いかゞです、矢張り今でも、それを知らたいと言へますか。』

『知りません。僕、僕は知りません。』

『知らないと仰有ればそれまでです。が、老人の遺書をお目にかけませうか！』俵辯護士が懐中から取出した一通の書面、それを井神準作はわな／＼と顫へる手先きに受取つたが、讀んで行くうちに、その顔がひどい苦悶で歪んで來た。

その手紙の始めには、先づ老人の自殺の動機を説明してあつた。動機は云ふまでもなく、準作の作つた贋の遺書と同様である。この奇怪なる一致、それだけでも準作には充分大きな打撃であつたのだが、文面は更に終りへ近づいて、顧問辯護士たる俵氏へ、老人の財産が全部寶石に變へられたことを述べ、續いて、この綠が丘ハウスに於て、老人がどんなに井神準作の世話になつたか、そして次には、下のやうな文句に移るのだつた。

……就てはその寶石箱は小生居室衣裳戸棚裏に殘し置き候。小生死後は遺産として前記井神君に贈呈仕り度く、該隱匿個所は貴殿以外、井神君のみ承知し居る次第に候へば、貴下御立會の上然るべく贈呈方御取計らひ煩はし度し、猶井神君には小生の決心を告げ申さず、只漫然と旅行に出掛けるやう申し殘す心算に候へ共、同君は資性隱直、前途好望の青年に有之、今後よろしく御引立下され度、特に懇願仕り候　匆々！……

あゝ、なんとそれは、かうした文面であつたのだつた。準作の行つた犯罪、それこそ實にも無意味なものに化したのだつた。默つて待つてゐた方がどんなに賢明なことであつたらうか？何等の不安なく公然と自分に贈られてゐた寶石の箱！

準作は、胸を、鋭い苛責と悔恨とで、ぎり／＼と緊め付けられるやうに思つた。悔いても／＼悔い切れなかつた。老人はどんなに自分を信頼し、さうして愛してもゐて呉れただらうか。それを、その老人を、無殘にも自分が毒殺したのだ！

俵辯護士は默然と準作の態度を眺めてゐた。そして、やがて靜かにその手を掛けた。

『どうです、あなたは先刻の私の質問が、どんなに重大なものだつたかお分りでせう。老人は明かに、その寶石のことをあなたに話してある筈です。それをあなたは知らないと言つた。これから私がこの隱匿場所を探して見て、そこに果して寶石があればまだしものこと、そこに無かつたとしたらどうします。そして、不幸にも、それがあなたの室にでもあつたとすれば……』

準作は唇をヒク／＼と動かしてただけで、何も喋ることが出來なかつた。俵辯護士と山田司法主任とは、互に頷きながら、室の一隅にあつた衣裳戸棚に手を掛ける。横へずらすとそこには例の隱し穴──。だが、遂に二人は肝心の寶石箱が影も形もないことを發見して了つた。

『あなたは、非常な心得違ひをしたのですね！』

俵辯護士が沈痛に準作の眼の中を覗き込んだ時、山田司法主任は、つとそこへ言葉を挾んだ。

『先生、もうこれから先きは私の方でやりませう。』

『調べて見るかね？』

『はあ、――意外なことになりましたが、兎に角この男の部屋に寶石があるかないか、それを第一に調べませう、そして、さうです、先刻の遺書を紛失したとかしないとか、あの返事の樣子では、まだ處分してはなささうです。眞僞の筆蹟は專門の鑑定家にやらせるとして、燒き捨てでもない限り、探し出すのは雜作ないです。』贋の遺書であることが分つた時、それが結局何を意味するものであるか、準作にも分り過ぎる程に分つてゐた。そしてその贋遺書は、その時、彼のポケットにまだ押し込まれたまゝであつたのだつた。

『嘘だ、嘘だ、そんなことはありアしない。』準作は身を捩ぢるやうにしてから言つたが、それは呻くやうな泣聲に近かつた。

――その時既に山田司法主任は、その大きな手を準作のポケットに突つ込んで、贋遺書を探し始めてゐたのである。

×　×　×

一方には腹の底からの悔恨と、他方には明かに贋物と鑑定された老人の遺書と、井神準作が、遂にその犯罪經路を自白したのはそれから後の間も無くである。どんな巧妙な犯罪でも、そこには必らず何かの犯人を裏切るやうな錯誤がある。これはその一例として、相當に犯罪學者の注意を惹くものでもあらうか。尤も、俵辯護士は後にかう語つた。

『や、實はね、最初は別にあの男を疑つてゐた譯ではない。前にも言つたやうに、老人が私へ寄來した遺書と違つて、へんなアパアトの一室で見苦しく死んだといふことが、少うし妙だと思つただけなんだ。が、あの男は贋の遺書を紛失したやうに見せかけた。あそこでふつと怪しいと思つたんだ。すると、だんだん怪しくなつて行つて、つまり、こちらからは偶然の成功とでもいふ奴だ。え？　司法主任の山田君かね、あれは學生時代に僕が少しばかり世話をした男なので、これも案内かた〴〵、あそこへ行つて與れただけなんだよ。』俵辯護士は、自分でもそれが意外だつたといふ顔であつた。

――了――

次號豫告

探偵小說　別人の血液

小酒井不木（遺稿）

稀世の探偵作家、不木氏の遺稿！である。逝去の直前、本誌の爲に熱魂籠めて執筆された、實に氏が最後の力作である。その精緻な推理と解釋、並にその熟達の筆力は、數ある氏の名作品中にも異彩を放つの大傑作であり、且つ、色んな意味に於て極めて意義深甚の作。偶ゝこの貴重の絕品を次號に於て發表し得ることは眞に小誌の誇りとする處である。



時代小説　大醜女物語

本田美禪
挿繪　磯田長秋

戀を煽る老士の同情

『や、お歸り』
加地は叮嚀に會釋した。
早苗は起つて父親に冊くやうに座蒲團を火鉢の前へ敷いてやる。
『捨てゝ置かれい』と口ではいつたが、滿足さうに源内はその座蒲團の上へ坐ると、腰から取つた大小を膝へ引きつけて置きながら、『城中へ行つて樣子を見たが、いやもう實にえらい騷ぎだ』
『仰しやつてゐらしつたやう、試しにお立會ひなさいましたか』
ほゝ笑みながら早苗は訊ねた。
『いや、行際には然うも思つて、高札までも見てまゐつたが、さて行つて見ると今いふとほりにいやもう偉い騷ぎの上に、檢査をやつてゐる美しい女中の腕の恐ろしさ！　女中でさへも是れだけの腕だとすると奧方の武勇のほどは測り知られぬ。是りやうつかりと立會つて——男なら兎も角も、女性のために敗れを取つては末代までの恥辱ともなる、まア〳〵止めにしようと思つて、たゞ武者窓から覗いたばかりで、すぐ引き揚げて來たのだが、外にも少し仔細があるのだ。喃う五郎太どの』と源内は加地へ眼を向け、『お身は那れだけの女丈夫に、向ふの知らぬ戀をして、命にかけても什うの斯うのと眼の色かへて騷いでゐるが、女の側へ近寄れる、いや、女をお身の物とする手段は考へ

てあるのかの』

『さア……』

加地は難色を面に泛へて『其れはまだ、御承知どほりに、當地へ着いたばかりの儘で、聢と考へてはゐませぬが、あの人達の領地たる濱町とかへ着いたらば、しつかりと腰を据ゑ、考へて見る積りで居ります』

『成程』源内は嘲けるやうに、『縁は異なもの味なものとか諺にさへいうてある。短兵急にやることは、或は得策ではないかも知れぬが、然ればとてお身のやう然う遲疑して居るのも好うない。些とも早く相手の前へ、お身といふ人間の體を現はして置かぬことには、話說の進めやうがないではないか』

『拙者も其れは氣づいてゐますが、何にせよ相手の主人は、拙者舊友で御さいますから、その邊もよく考へて取りかゝらねばなりませぬ』

『其れも然うだな』と源内はちよつと考へ、『では斯うしては什うあらう』

『何か御名案が浮びましたか』

『いや、名案といふほどではないが、お身はいつそ吉良殿の家來になつて見ては什うだな』

『その事も考へましたが、今いふとほり顏馴染、其れに殿下お小姓の身でありながら浪人をして、舊朋輩に仕官する……といふやうな事は道理上あるまじき儀で御さいますから』

『其所だ』源内は火鉢の縁を拳で一つとんと叩いて、『身共が斯う考へて見たのは其所だ。六十餘州の主人たる關白殿下の恩に負いて、多寡の知れた小大名、三萬石やそこら頂く舊朋輩に仕官するーーといつては筋が通りかねると、原來武士の身上は武藝をもつて第一とする、で、小雪殿の武勇を慕つて、指南を受けるために聚樂を脫け出し、遙々跡を追ひかけて來た。舊朋輩の交誼をもつて、當分の間世話をしてくれ、客分でも好い、家來でも好い。要はたゞ奥方を師と敬つて熱心に武藝鍛錬をするにある。この儀曲げてお賴み申すと斯う持ちかけて見ては什うだな』

『成程』加地は嬉しさうに面を崩して、『其れは名案！』さすがに貴所は御年配から、よい事をお教へ下すつた』

『本當にねえ』早苗も共に欣びながら、『然うあそばせばあの方のお側に始終ゐられますから、際を見てちよい〳〵と、貴下のお心をお訴へあそばす事も出來ますよ』

『はゝゝゝゝ同病は相憐れむといふ。お身もまた戀のためには苦勞をし續けてゐられるわけだが、早苗どの！』源内はやゝ調子を改め、『其れについてお身のためにな、躬は途中にて手紙を認め、吉良殿の許へ送つて置いたぞ』

『まアかの方にお手紙を？』

『うん』と源內は大きく頷き『いふまでもなくお身に代つて、お身が今日までに爲つくした辛苦の狀を精しく認め、何人にも氣取られぬやう、そつと吉良殿に渡すやうにと、使ひの者に吩咐けて持たしてやつて置いたのだ。吉良殿だとて同じ思ひの、お身のことは暫くも忘れる隙のなかつたことはいふまでもない話說であるから、今ごろはあの手紙を讀んで、淚を流して欣んで、おッつけお身と忍び會ふのを待ちわびて居るに相違ない』

『まア其んな事を認めて……?』

『然うだ、四つの鐘の鳴る頃までに、大手松原へ來てゐてほしい。その刻限には必と行くから、來てゐるといふ印には一つ咳拂ひをしてくれろ。お懷かしいお顏を見るのも今暫くの後かと漫ろに胸の躍るを覺える。仔細あつて是れは代筆、男の手だがお疑ひなさらぬやうに賴み入るとな、武骨な躬には案外な甘い舌ッ垂い文字を並べて、搔き口說くやうにいつて置いたで、大丈夫今夜は會はれる。さアそろ〱と支度して、いやまだ少し其れには早いか、はゝゝゝゝ』

と源內は獨り元氣で、

『兎も角も衣でも着更へて、綺麗になつて行かれるが好い。大手松原と申すのは、この町を大通りへ出て東へ行つて右へ曲つて、見付を入るとぢきにある。物の十町とはないのであるから、お身一個でも行かれるが、晦日近いので夜は暗い、御苦勞ながら加地殿に一緒に行つてもらうがよからう。躬が行くとよいのだが、知つてのとほり夕餉にはまた健かに飲まねばならぬのでーーはゝゝゝゝおゝ來たか!』といふかと思ふと、火鉢の前に据ゑてゐる體を悠々と動かして、渠は大胡坐に搔き直す。

宿の女中が夕餉の膳を運んで來たのだ。膳の上には、渠が今歸つて來た時、帳場に居つた宿の亭主に命じておいた德利がある。一本二本三本四本と、醉ふに從つて命じては、十本以上仆してのける。其れは何所で消つても缺かしつこない渠の酒癖で、今日もまたそろ〱と其れが初まりさうなので、早苗も加地もうんざりしたが、然し早苗には渠の好意で、今夜雅樂之介に會ひ得るといふ思ひの外の欣びがある。

加地もまた渠の好意でーーといふよりは發案で、明日雅樂之介に面會をして、縷々衷情を訴へた上、意中の人の身邊へ接近し得る欣びがある。で、いつもより心よく、兩個で酌を執つてやつたり、機嫌を取つてやつたりしてゐる間にいつか日が暮れて、渠が大醉して雷鳴に似た鼾を搔いて寢込んだ時にはもう四つ近くなつてゐた。

深夜松原の邂逅

暫くすると加地と一緒に、早苗は宿を立ち出てた。先刻源內

に数へられたる道順を經て城内へ入り、大手松原へかゝつて來たが、早苗の胸は高鳴つてゐる。何方を見ても夜の闇が漆のやうに下りてゐるので、衣裳の文は分らぬが、姙娠の身を庇ふため、防寒のために着けて來た被衣の色はほの白く、眞闇な裡に動いて見える。

聚樂邸での密會もこのやうな夜が多かつた。その折々の狎れそめは、淀が秀吉と亂酒した折、宿直の部屋においてゞあつたが、其れは春も酣な、風の暖かな晩だつた。其んな事を考へながらかの女は歩度を刻んでゐるので、その眼の前には懷かしい男の顏がちら／＼してゐる。

闇夜に忍び會ふのだが、久しぶりで會ふ男のために出來るだけの化粧をして來た。衣もまた源内の好意によつて調へた好いのを着飾つてゐるのだが、聚樂邸にゐるのと異り、道中にある悲しさには、衣桁にいつも焚きこめる伽羅までは手が屆かなかつた。

『でもお目にかゝつたら、いつものやうに信切にして下さるに相違ない。上樣の仰せに餘儀なく、あの御婚禮のお席からすぐ御發足はなすつても、私のことは忘れずにゐらしつたのに相違ないから、このやうにしてお跡を慕つて――その道中では種々の辛苦を嘗めて來たことをお話說したら不愍なものだとお思ひ下さるに相違ない。お腹の事もそれとなくお話說がしてあるのだものをね、奥方樣の手前にあつても、[illegible]二郡の主でゐらつしやる。大名になつてゐらつしやるのだ。私の體一つぐらゐは什うなりとして末長くお側に置いて下さるやうになすつて下さるに相違ない。此とも早くお目にかゝつて……。然うだ、四つの鐘の鳴るのを合圖に松原の中で咳拂がする。其れがかの方だといふやうに源内樣は仰しやつた。もう鐘が鳴りさうなもの、爰はもう松原だ』

『早苗どの……』と注意をするやうに加地は呼びかけ、『拙者は爰で待つて居ります。お身は獨りして行つて會はれい』

『難有う存じます。では什うぞ暫く其所で……』然ういひながら加地と別れて、早苗は獨りいそ／＼とまた闇中を辿り初める。

左手には堀がある、雁鴨などの水禽の鳴く音が低く其所から聞える。堀の向ふには石崖がある、蟠桓たる老松が黑くその上に立つてゐる。一幅白く見えるのは矢倉の側面の壁らしい。凛冽たる寒風に吹きさらされてざゝんと有力に鳴りながら[illegible]いてゐるのが、かの女の目ざす松原である。

『源内樣は仰しやつた』その松原に注意しながら、歩を運びながら心中でかの女は又も呟き續ける。『武骨な男には案外甘い舌ッ垂い文字を並べて搔き口說くやうに認めた。吉良殿もあの手紙を讀んだら、淚を流して欣んで、おッつけお身に忍び會ふの

を待ちわびてゐるに相違ないッて……。もう鐘が鳴りさうなもの、この松原の中からお聲が――おや鳴つた！』

とかの女は叫んだ。待ちかねた鐘の音が殷々として響いて來たのだ。

『はてな？』と早苗は少し失望しながら『何うしたんだらう』と思ふ途端に、

が、咳拂ひの聲はしなかつた。――

かの女の立つた位置から十五六間彼方の闇に、提灯の灯が現はれた。其れは矗々と立つてゐる老いたる松の木立を通して、人魂のやうに見えたのだつたが、その灯を見ると頭巾を被つた侍らしい人影が木立の中を歩いてゐるのだ。

『ひよつとしたら那れがかの方……？』

と思ふ途端に、咳拂ひの聲が低く聞えた。

『噫、然うだ、爰にゐます雅樂樣！』

と早苗は狂喜して走り寄る。

『お〻其所にか』

と、いふ聲は雅樂之介。

彼もまた狂喜して女の方へ寄つて來る。

『でもよくお來で下さいましたな』

『叱ッ』と雅樂之介は注意した。

その時はもう早苗の體は彼の眼の前に立つてゐた。

『こつそりと脱けて來たので、躬の爰にゐることを人に知られては困るのだ』

『其れは好う存じて居ります』

『だが好う追うて來てくれた』

といつた時には、感極つて啜り泣く被衣の中の女の體を彼はしつかりと抱きしめてゐた。

『精しい事は晝くれた手紙で承知いたしたが、何にせよ男の筆蹟、其れに餘り思ひ設けぬ……殆ど夢のやうな事でもあるので、半信半疑で來たのだが、この樣子では夢とも思へぬ。泣くな、泣くな、躬も泣きたいほど嬉しいが、泣いてゐては話說が出來ぬ。啼う、落ちついて悠々と』

『はい……』

とは答へたが男の胸に押しつけてゐる額は離さぬ。

『三萬石の大名になつても矢はり此のやうな所で忍び會はねばならぬ。百五十里の海山を脆弱い身にて越えて來た可愛いお身が同じ城下の宿屋に居るといふことを知つても矢はり表向には迎へることは出來ぬのだ。この寒い夜に斯樣なところで人目をかねて會はねばならぬ。其れを思ふと、お小性として二百石頂戴して居つた元の身が却つて兩個には幸福だつたな』

『奥方樣は今夜のことをお氣づきなすつてゞは御ざいませんの』



『其んな事は懸念はないが……ま、掛けよう』

『少しお待ちを』

と止めながら被衣を脱ぐと、早苗は其れを手捷く側の松の根株へかける。

『さ、什うかこの上へ』

『心ざしは嬉しいが、風は冷じく身に沁る。被衣を取つて寒くはないか』

『否え些とも……。あれッ！』と早苗は叫んだ。『提灯をお消しなすつてはお顔が見えないでは御ざいませんかね』

この堅いのは頭でないか

『いや、顔などは什うでも構はぬ。久しぶりで會うたのだ。はは』と笑つてのけたが、今灯を消した提灯を地上へぽんと投げ出すと、その手をもつて女の體を自分の方へ引き寄せながら、

『さて、其所で何よりもまづ第一に訊ねたいのは、お身の唯ならぬ體の事だが、もう幾月になつたのだ』

『はつきりした事は分りませんが、月の物の様子では、三月……四月ぐらゐかと思ひます』

『では餘ほど膨れてゐるわの』

『まア……』

『冗談でない』雅樂之介は矢はり眞顔で『其のやうな大事な體で……、文意で見ると悪者に出會つて難儀したとの事だが、腹の子には別條は……？』

『えい其れは――』

『でも大切な事ではないか』雅樂之介は飽まで眞顔で、『殿下お媒人に餘儀なくせられて、本妻として持つには持つたが、まだ一遍も暖かに――いや、永劫に夫婦としての語らひなどはせぬ氣ゆゑ、あの化物には小供は出來ぬ。すれば是れは身の曹司、三萬石の跡取りだ』

『其んな事は今ッから……』

『はゝゝゝ』笑ひながら『お手柄！　お手柄！　あの奥方は名だけの奥方、いはゞ床の間の置物だ。一生涯小供は出來ぬ。其れに身は領地へ着いて、長くても一年ほど、武藝鍛錬の出來次第、殿下お手入れの朝鮮へ是非出陣する積りであるから、いつ討死をせぬとも限らぬ。と、すると大事な小供だ。大名としての吉良の家名は末代までも傳へにやならぬで、男子を生んでくれねばいかぬ。いふまでもなく歸り次第に、今度召し抱へた家來に吩咐け、明日からは餘所ながら母子の保護をするやうに取計らふから安心してゐい。新領地濱町まではまだ大分の道程だ。獨り旅は心許ない。三萬石の妻の資格で下向するやうに手筈する。いや』ふと氣がついて言葉を改め、『不意に會うた嬉しさに、身勝手なことばかり申して居つたが、お身は立際に里の親

[illegible]へ、丸サ下りする由を、手紙でなりと知らせて置いたか」

「いゝえ……」

「其れはいかんな」

「でも親里へ知らせると、自然家樂へもその事が知れ、追手でもかけられて、悲しい事になりはせぬかと思つたもので御座いますから」

「其れは然うだが――啞ッ！」

雅樂之介は絶叫しながら、飛び上るやうにつと起つと、或る危險から遁れるやうに六尺ばかり左方へ飛んだ。きらりと光つて、自分の首を後から斬つてのけんとした白刃を見たのだ。

「什うなすつたので御座います」

怪みながら早苗も起つたが、起つと共にぴつたりと男の方へ體を寄せた。

「那れを見い！」

「まア」早苗は驚いて雅樂之介に指示された所を見てゐる。闇いので何者か、その面體も服裝もよく分らぬが黒影が二個、取組み合つて一團となり、暗闇中を彼方へ此方へ轉げ廻つては揉み合つてゐる。

「躬を討たうとした曲者を、何者か出て引ッ捉へ、咄嗟の間に躬の難を救うてくれた樣子だが、いづれが恩人か曲者か暗闇なので少しも分らぬ。憚りながらお名乘り下さい。曲者は躬が討ち取りますから」

「……」

「喃う、御恩人はお名乘り下さい」と重ねて訊いたが、尙ほ兩個とも口を開かぬ。

上になり下になり、死力を盡して揉み合つてゐる。眼を据ゑてよく見ると、双方共に覆面をして黒裝束をつけてゐる。その一人は大兵らしいが、他の一人は極めて小柄で、女性のやうなところもあるのだ。

「喃う、御恩人はお名乘り下さい」

雅樂之介は今拔いた白刃を提げて走り廻つて、取ッ組んでゐる兩個の體の轉げ廻はるのを追ひながら、隙を見て曲者に手を下すべく覘くのだが、兩個とも尙ほ口を開かぬ。

「拚腕ながら曲者は躬が討取つて御覧に入れます。喃う、御恩人はお名乘り下さい」

「殿！」このとき突如、叢の後から聲が起つた。

「何、躬を殿と申したやうだが」

「山邊めに御座います」

「年藏か」

「は」其れは闇中に兩手を支いて「この場には構はずに、疾う御旅館へお引取り下さるやうに願ひ上げます」

「解せぬのう」雅樂之介は怪みながらも、咎めるやうに山邊に

訊ねた。『汝は此所へ何しにまゐつた』

『恐れながらお後から御守護のためにこつそりと……』

『では先刻からのこの場の様子を？』

『は、いえ……。兎も角も御旅館へお引き取りのほど願ひ上げます』

『身の難を救うてくれたは――今揉み合つてゐる中の一個は――何者か汝存じて居るのか』

『そ、其れは……。いづれ後刻申し上げます。兎もかく殿は些ともお早く』



『ふん解めたわ』

と雅樂之介は心で唸いた。妻の小雪が、家老山邊年熊を連れ、自分の跡を尾けて來て、闇中にあつて竊聽してゐた事實を渠は悟つたのだが、然し今小雪の然うした、妻としてあるまじき行爲を敢てしたことを怒り咎めてゐる場合ではない。妻より先へ旅館へ歸つて、善後の策を充分に講じて置く方が得策だ。然う思ふと渠は忽ち早苗の手を執つて闇中を松原の外へ馳け出した。

痛烈なる肚裡の悲哀

『ひよんな事になりましたなア』

氣支さうに早苗はいつた。

『いや、心配はない。推量どほりのあの者が縱し身の妻であつたにしても、身に對して強い事な

どいひ得るやうな女でないから、無事に納まるに極つてゐるが、然し今はあまりに意外に、飛び出されたので愕然としたのだ。はゝゝゝゝ』と雅樂之介は強ひて笑つて、小雪などは眼中にないかのやうな態度を見せたが『いや、其れよりはお身のことだが、お身はこの暗い夜道を獨りで旅宿まで歸つて行けるか』

『はい、來際にも或方にそつと送つて來て頂いたので、其所まで行けばその方が待つてゐてくれる筈で御ざいますから』

『では不本意だが今夜は別れる』



いひかけて闇に透して、雅樂之介は四方を見廻はす。もうこの時は渠の旅館、舊小松帶刀の屋敷の門の前まで來てゐた。

『が、唯今も申したとほりに』と渠は續けた。『二三日中に家來を遣はし、躬の跡取りの母として耻かしからぬ旅裝を調へ、領地矢部の濱町へ向け、道中さすやうにいたすから、その心組みで居るが好い』

『難有う存じます。けど……』

『けどとは何だ』

『御領地へ着くまでは、もうお目もじは願へませんので』

『といふわけでもないが、今夜の事を知られては、まづ當分は遠慮して機會を待つて居らずばなるまい』

『其れも然うで御ざいますなア』と本意なさゝうに早苗はいつた。

『では氣をつけて行くが好い』

『はい』とは答へたが去りかねてゐる。

『何だ、什うした』

『貴下樣も我意に募つて、奥方樣と御喧嘩をなさらぬやうにあそばすやうにね』

『心得て居る。行きや！』

『………』

悄然として早苗は立ち去る。

少し行くと遠見がくれに、後から闇中を尾けて來た加地が現はれて連れ立つて、港町なる旅宿へ急いだ。

加地も舊友の雅樂之介には、面會したく思つたのだが、源内との約があるので、其れは見合せにしたのであつた。

歸つて見ると源内は、尙ほ矢はりぐう／＼と鼾を掻いて熟睡してゐた。

〰〰〰〰

小雪はじつと考へてゐる。昨夕松原においての出來事――忠僕お袖から聽き取つた事實によつて其れと悟つて、夫の跡を尾けて行き、其所に見出した呪はしい――夫雅樂之介と早苗とが密會して居つた有樣や、夫を討たうとした曲者の不意に現はれた事などおもふと、かの女の胸は激しい嫉妬と、疑惧と不安とに咬られるのだ。

『是れまでにも怪力無双と稱する者に出會つたが、あの曲者を見たやうな恐しい者は一個もなかつた。夫れが不意に夫の命を……今考へてもぞつとする。一體あれは何者だらうか』

と思ふと昨夕組み伏せて、秋毫のことで手捕にしかけた、その曲者に逃げられた無念に胸は燃えるのである。

『下から瓦破と跳ね返し、するりと脱けたのみならず、隙さずさつと斬りつけ山猿を何の苦もなく投げ出し、松原の夜の暗さに紛れて姿を消してしまつたが、あの模樣では武藝にも達してゐるやうに思はれる。其れが不意に夫の命を――領地へ着いた後ならば、舊領主阿蘇殿の身内の者が怨みを抱いて……といふやうにも解れるが、まだ爰は九州の鼻端、其れにやつと四五日以前に當地へ着いたばかりの我々、人に狙はれる道理はないのに……』

と不審を打つたが、道理では何とあらうと、眼の前に見た恐しい事實は儼として存じてゐるのだ。

『あの模樣では將來も、不意に現はれては夫の命を――事によると妾の命も付け狙ふものと見ねばならぬが……でも無事に濟んで昨夕は好かつた。其れといふも悔しい事を聞き込んだので夫の跡を尾けて行つたゝめの功名だつたが、吁、其れといひ、是れといひ……』

と更に思ふと、かの女の胸は千々に亂れて、涙は頬を傳つて

流れる。

聚樂第一の美少年、奥の淀、表の吉良と謳はれたほどの優雅男を、化物同様の身をもつてわが物とした上からは、いかなる事をしようとも情事の上の秘密など、寛大に見て置かねばならぬ。よし名ばかりの妻にしろ、妻として呼んでむらへる、其れをせめてもの幸福として、忍苦の生涯を送らねばなるまいといふ觀念をかの女は据ゑてゐるのだが、然ればとて八面時代、振分髪の時代から、夫と呼ぶことを許されてゐた事など思ひ廻らすと、また今更に痛烈な悲哀の情に囚はれるのだ。

『だがいかに歎いても、いかに悶えても致し方ない。生れもつかぬ化物にした疫病神をさへ今はもう怨まぬ事に極めてゐる。何を狼狽へて少しばかりの夫の浮薄移り氣にこの決心を動かさう、嫉妬を爲よう、女を憎まう。たゞこの上は夫のために身を贄にして誠を盡さう。三萬石の大名として恥かしからぬ男に仕揚げ、些とも早く朝鮮へ出陣さすやうにするのが肝要。お好きな人があつたなら、五人十人でもお側に置いて、自分に代つて御機嫌を取らせるやうにせずばなるまい――おやツ！』

ふと氣がついて顔を上げると、彼方の物音に聞耳立てる。

また今日も十五六人、仕官希望者がやつて來て、道場にあつてお袖から武邉の試合を受けてゐる。その叩き合ふ木劍の響きが又も聞えて來たのだ。

『行つてゐるの』と微笑しながら、『主計頭殿も仰しやつたやう、智勇兩つながら備はつた男は勝斗ないと見え、まだ一人もやつて來ぬ。武邉だけでもお袖を凌いで、遣らうと思ふ百石以上の扶持をよう取つた者もない。ほツ！また袖に行られたやうじや』

『御前樣』といふ聲が次に聞えた。『お目通りへ出ましても、お差支は御ざいませんか』

『誰じや、山邊か』

『は……』

『差支ない、入りや』

『御免』

襖を開けて入つて來たのは、家老山邊年熊である。渠はもう小雪のためには無二の忠臣となつてゐるのだ。

惻々人を動かす眞情

『何か用かや』

ほゝ笑みながら小雪は訊ねた。

『は……』

山邊は謹んで一禮したが、覆面の裡に絞り出された主人の故とらしい笑顏を見ると、渠は心中でほろりとしながら、

『意外な者が見えまして、不敵なことを臆面もなく申し出でたので御ざいますが、一應御前樣に伺つて……と存じましてな、お邪魔いたしたので御ざいます』

『どんな事を申してゐるのじや』

『見えましたのは五十前後と、二十六七の若侍との兩名なので御ざいますが、若侍は聚樂にて殿と御昵懇の仲とか申して、直にお目通りを願ひますので、殿にお伺ひ申した上で、唯今殿のお居間まで案內をして置きました。

『聚樂で殿と御昵懇とな』

『は、其のやうに申してゐました』

『どんなお人じや』

『別に是れと取り立てゝ申し上げるほどの御人體ではないかのやうに拜見しました』

『殿御寵愛の御女性が、お跡を慕ひまゐらせて遙々見えた折柄じや、事によるとかの方と一緒に今度お下りになられたお人かも測られぬ』

『手前も其所に氣がつきましてな、口うらを引いて見ましたが、其れについては一言も口を割らんので御ざいます』

『而て、今一個の人物は？』

『は、其れたので御ざいます』山邊はちよつと苦い顏して、『その人體も不敵なとほりに、不敵な事をずばずばと……』

『どんな事をの？』

『御高札の文意によると、武藝相當の知行を與へる——と申す話說だが、もし御前樣を打ち込んで、試合に勝つた場合には、何程の扶持をくれるかと斯う申すので御ざいます』

『興ある事を申す仁じやの』

『其ればかりでは御さいません』いふ中に淺からぬ憤慨の色を面に漲へて、『三萬石の大黒柱を、見事叩き折ればその者は三萬石の力があるのだ。三萬石くれるかとまア斯うなので御さいます』

『氣疎い事を申す仁じやの』



『は……』

『嬉しい仁が見えたものじやの』

『は……』

意外な言葉に、山邊はちよつと呆れた氣味で、主人の顔をまじ〳〵見てゐる。

『まだ折がなうて話さなかつたが、聚樂にて妾等が祝言さして頂いてそのお席でのお話說じや。殿下仰せには人の心は吝嗇にては決して獲られぬ。人心收攬の秘訣は金じや、知行じや。金知行をどし〳〵與へてわが腹心といたさにや駄目じや。治部(石田三成)が島(謀臣島左近の事)を抱へる時には三萬石の身上だつたが、自己の知行殘らず與へて少しも悔いるところがなかつた。この呼吸を會得して置け、身は家來の食客となり、家來の家の片隅に小さくなつて居つたからとて主人の估劵には拘はらぬ。しつかりと家來の心を掴んで居れば其れで好いのだ。英雄の士ほど知己に感ずる。忘却すなと仰しやつて種々御教訓をたまはつたのじやが、この御教訓の御趣意に基づき、今して見ようと思ふのじや』

『し、然し……』

『待ちや』は丶笑みながら、小雪は押へて、『無論殿に伺つて、お許しの出た後でなければ立合つて見るわけにはゆかんが……！、妾を好う聞いてくりや』

『は……』

『妾このやうな姿して、嫌はれながら御領地へ拗くお供申すのは、決して妾自身の希望に滿足を得るためではないのじや。吉良の家は三河の名門、源家の嫡流でゐらつしやる』

『其れは手前めも存じて居ります』

『で、什うかして御家名再興、天下大諸侯の一つとして、時めきたまふ御身分におさせ申したいと思ふので――たゞ其れのみが妾の願ひで……』

涙含んで來た目頭を小雪はてつと指で押へて、『恥も外聞も厭はずに斯うしてお供するのゆゑ、是が非でも二三作殿に御武藝をお仕込み申して、殿下股心の大將衆にも劣らぬ猛者になつて頂き、開闢以來聞きも及ばぬ世界御征服の御軍にお送り申し上げねばならぬ。其れには殿の股肱にも一騎當千の勇士が必用。妾もし男だとお供を願ふ筈なれど、女性の上にこのやうな…』

といひかけて暫く躊躇ひ、

『それは夢にだに怺はぬ事ゆゑ、せめて是れならと妾の見立てた勇士をつけてさし上げたいのじや。その男こそ妾の希望に叶つてゐるやうに思はれる。立ち合つて見ねば分らぬが、のツけから三萬石欲しいといふやうな大言は、尋常の武藝者や、押借ほどの米粒に有りつくために阿容々々と檢査を受けに來るやうな者等にいへることでない。たゞ其れのみでも賴母しい男といふことは知れてある。魂も確かりと、武藝にもまた達してゐよう。お身はすぐに彼方へまゐつて、殿にこの事を申し上げ、御意向のほど訊いて來てくりや』

『仰せでは御ざいますが……』

『いや』小雪は色を作して早くも押へて、『何もいやるな。妾の

眼に餘つてゐるのぢや』

『は……』とは答へたが、小督は既に起つて行きかねてゐる。小雪の勇武、小雪の怪力、小雪の侠氣には、我自身にも心服をして、この君のためならば犬馬の勞を將つて執らう。命も惜しむに足らぬ。況て所生の御恩がある。然う思つて故主に捧げた誠中無二の魂を新主の前へ投げ出して奉公をしてゐるのであるから、今見えてゐる壯漢も、自分の樣に新主には推服をするものとは思ふが、其れは立會つて見ての事。『萬一渠奴に行られた時には……?』と思ふとそれが氣がかりなのだ。

『あれほどの御勇武をお持ちになつてゐらつしやる。御女性ながら萬夫不當のお腕を持つてゐらつしやる。どう間違つても立會にお破れになる道理はないが、然ればとて總ての勝負は運賦天賦なものである。もし御不覺を取られた時には……』

然う思ふと主人のいふやう、然う容易には起てぬのである。

『何を遲疑!』小雪は終に自裂出しながら、

『早々と行つて伺つて來や』

『は、では……』と腰を上げつゝ、『お伺ひ申して來ますが、もし殿が其れはならぬと仰せになつた場合には……?』

『氣支はない』と小雪は言下に、『殿は御知行には未練はないのじや。殿下の上意止むを得ず領地御入部の道中にお就きなされたがお心は都の空に飛んでゐるのじや』

『でも唯今はかの方が……』

『否や』と筆を採りつゝ、『忝しい方がお出でになつても心にお心は御知行にはない。妾を憐むお心で御知行もまた憐んでゐられる。勝手にせいと必と御意ある、遲疑せず行つて伺つて來や』

と音吐を勵ましていふかと思ふと、裲襠の褄をぐいと端折り、褥の上にぬいと立つ。

もう斯うなつては仕樣がないので、小督は唯々として彼方へ出て行く。

劍客脇の道場では仕官希望の人達が、尚ほ次々に引ッ張り出されて、檢査を受けてゐると見え、えい、やッといふ掛聲や、木劍の音が激しくしてゐる。

その道場には大膽不敵の提言をした壯漢が、小雪がどんな返事をするかを痺れを切らして待つてゐるのだ。

渠は何者?(つゞく)

渠や果して何者! 女性ながらも天晴の女、大膽無敵の小雪を相手に、知行三萬石のやりとりを一擧に決せんとする奇怪至極の人物。彼よく小雪の快腕を挫いて本望を達するか、とまれ女丈夫と怪漢と、卍巴、阿吽の仕合は、本田先生獨特の筆致によつて、紙上に風雨を呼び雷霆を發ち、殺氣が氣渦まく中に、讀者の心膽を寒からしめる。乞ふ姑らく次號をお待ち下さい。

懐しきもの

鐘の音

河井酔茗

旅なれば
暁闇の薄らぐ頃、
汽車より降りし京の町。
まだ眠り覚めざるに、
いんいんと撞き出す、
寺寺の鐘の音
古き都の夜は明けんとす。

岡本かの子

たらちねの母の胸乳をふふみつつ
聞きにし夜半の風をわすれず。

矢野錦浪

だんだんと父に似て来る俺の咳。
乳母の眼にまだ此俺を危ながり。
ものの芽の白さに土の香を感じ。

吉植庄亮

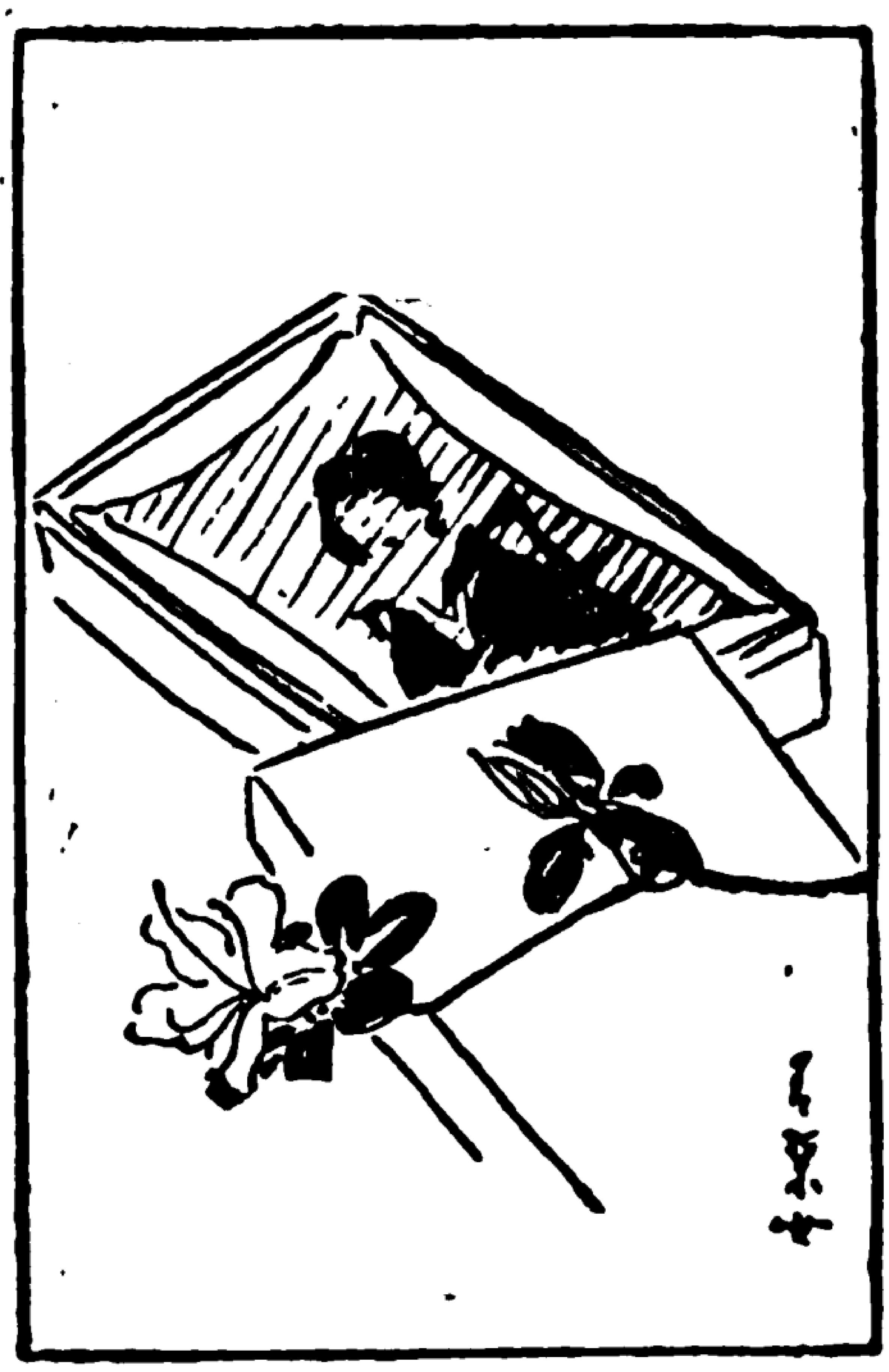
くろぐろとなりたる家にかへりきて
胸おちつけり雲雀をきくも。

すすいろに光る板戸や夏いまだ

ふるさとの家は涼しすぎたり。

村上鬼城

家清水の飲みあまりひく青田哉。
七夕や軒さしかはす城下町。
送火の消えて門田の闇夜哉。



震災で燒失した硝子の寫眞(母の面影)

棹内青葉畫

尾崎喜八

懐しきはかの口ぞ、かの瞳ぞ、
またかの小さき拳の柔かき握り心地ぞ!
健かに育ちて學校へ通はん頃は
あゝいと小さきリユクサックを擔はせて、
我が旅に伴ひつ、
親子して山々に歡呼せん美はしき願もありしに、
われ其兒をうしなひぬ、うしなひぬ。

長谷川かな女

椎の花咲くあたり御魂なつかしく。
薔薇に育ちし家のなつかしき。

三宅花圃

たのみてし子は早や逝きて
夢のことたどる我世や春の朧夜。
又もわが袖のつゆけきなぐさめて花にいざなふ友の情に。

武田鶯塘

國を出た時はと布子ほどきかね。
襟垢かつい惜しまれるかたみわけ。
まア〳〵も涙ぐましい十年目。

川路柳虹



池部鈞畫

ながい航路のはてに見える島影、
外國にありて故郷よりのたより、
陰欝なる冬空の晴れゆく間に見る太陽、
ゆきすぎた美女の化粧の匂ひ、
二月のすぎて温まる水の春
春のいづことなく消えゆく頃の空氣
その空の色、その夕ぐれの月かげ。

小笠原長生

舍利子觀よ空即是色花さかり。
夜櫻や名利に淡きをとこぶり。

宇都野研

枯野原青野となして萌ゆる草眼に
やはらかく踏むになつかし。
蠶豆も菜種もさきぬ雛芥子もと
眼に追ひをるも旅に來しわれ。

春野來れば放たれし犢馴寄り
きて小角生えたる面を擧げたり。

下村海南

朝あけのしづけき海に鰤釣りの
舟ちらばれりうねりながらに。
大鳴門逆まく潮のたゞ中を
わが舟はゆくかしぎながらに。



萬人向き成功の秘訣

池田藤四郎

この世に、萬人向きの成功秘訣といふものが、果してあるだらうか。すべての病人に、同じ處方をあてがひ得ざる如く、太郎に向く成功の虎の卷は、次郎に取つて不向きかも知れない。然しながら、一から十までとは行かぬにしても、兎に角、普通の人間が、世間並みの仕事に從事して、それを一と通り成功せしむるについては、其處に多少の手がかりとなる共通點があるべき筈だ。

ハーヴアド大學のタウシツグ教授は、それを探らうとして、目下アメリカ中の主立つた實業家一萬五千名につき、その成功の秘訣を調査して居る。

イギリスにも同じやうな調査の試みがあつて、現に英國商業會議所聯合會の書記長ダンウデイ氏は、實業界の有力者に向けて、その立身出世に關する急所を問合せ中である。問はれて答へた有力者中、ローントリイ會社の社長ローントリイ氏の如き

『他人と折合ふ精神』

であると力強く言はれた。

如何なる仕事も、人の和に缺くるところがあつては、成功覺束なしと見てよい。

多少の犧牲を忍んでも、人と和合して行くことを考へ、それを實行する。昔は强情我慢お山の大將我獨りでもよかつた。何事につけ、關係の廣くなつて來た今日では、それが通用せぬ。

この和合の精神を宿す銘々の肉體は、手の屆く限り大事に保護せねばならない。

丈夫な身體と、人の立場を尊重する和合の精神とを、充分に用意して、最も低いところからジリ／＼と進む人は、否應なく成功する。

成功とは、强ち三井三菱と同格に達する意味ではない。ア、いふ手合は、どこの國でも、數が少ない。アスコまで行くには、

今後稼業の發達から生れて來る新發明新發見によつてのみ、達し得らるゝズット上の天井である。

　先づ吾々は、世間並みの人物が、世間並みの仕事に當つて、意義ある成功の域に達することを考へねばならぬ。

　大多數の人々が、容易に成功せぬ最大の理由は、煎じつめると、

『並みの人が、並みの仕事にたづさはつて、並みの働きをして居るからである。』

　たとへば取り立てゝエラくもない人物が、書籍店を開いて、何の變りもない舊來の經營法以外に、一歩も足を踏出せ得ないとすれば、それは一生無事で終るにしても、恐らく成功者とは呼ばれまい。

　普通の學校卒業生が、漸く勤め口に有りついて毎日相變らず並みの勤め振りをして居るのでは、大した收穫もない筈だ。

　百發百中、成功請合の祕訣は、

『並みの仕事に對して、並み以上の働きをする。』

だけである。



小學校を出た世間並みの少年が、どこかの給仕ボーイに雇はれるとして、日本一の給仕ボーイになつて見せると意氣ごめば、彼は必ず並みの勤め振りに滿足せず、精を出して異常の働きを見せるに相違ない。現に受持つて居る仕事に、日本一の態度働きを示すのが、成功である。

　並みの人間は、定めの時間に出て、退出の時間を待兼ねて居る。日本一を目がけて進むものは、朝も早く出勤して、多勢の顔の揃ふ頃には、一仕事片づけて居る。歸りもその通り、翌日の仕事初めに無駄のないやう、一と通り準備をしてから歸る。

　それは決して六かしいことではない。並みの仕事も、念入りにやれば、早出遲引けを必要とするほどに、時間はかゝるものだ。それを厭ふやうでは成功が近寄つて來ない。

　この理窟の説明に、もつて來いの一例を茲に記して、平凡人の非凡振りとは、如何なるものであるかを紹介して見たいと思ふ。

　アメリカの或町場に、一軒の藥店があつた。この店は、客の

便利のため、廿四時間開け放しであつた。ある時、眞夜中も過ぎた二時頃、夜勤の手代Sが、机によりかゝつて、切りに帳簿から數字を寫し取つて居ると、突然店主が其處へ現はれて、

『オイ君、それは一體何だ。』

と、帳簿の數字を書き拔いたSの紙片を指した。

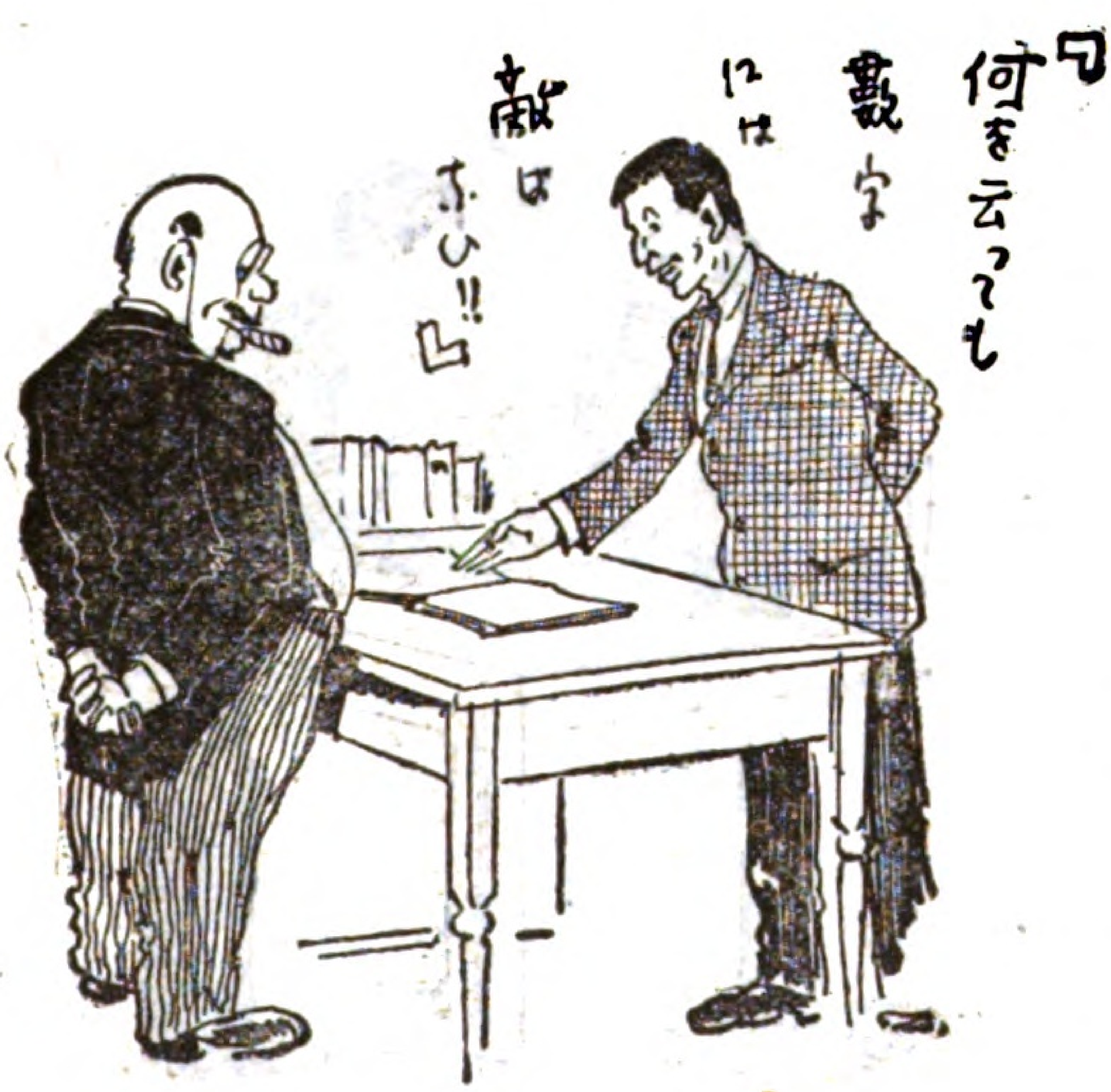
　店主は、Sが何事か良からぬことをして居るとのみ、一圖に思ひ込んで居たやうだ。彼は新參のSの素振を、何となく初めから怪しんで、それとなく氣をつけて居たのだ。不意に立現はれたのも、實はそのためであつた。

　そんなことには一向頓着なく、Sは答へた。

『夜分の賣上げを、いろ／＼調べて、統計をとつて見ました。大體出來上りましたから、明朝御目にかけます。』

『君は誰かに言ひつけられて、それをやつて居るのかネ。』

『別に言ひつかつた譯ではありません。唯自分の滿足のためで[illegible]



のは算盤に合はないことが分ります。』

『損なら店を閉ぢるまでのことだが、さうすれば、君自身の仕事は無くなるぢやないか。一生懸命骨を折つて帳面を調べるもいゝが、そのため自分の仕事が無くなつて了ふことを承知かね。』

Sは物靜に、そして心から斯う答へた。

『ソンナ事など別に心配しては居ません。兎に角一應この數字を御覽下さい。これは賣上げを時間別にしたものです。夜間營業と言へば、十時から翌朝八時までの夜通しで、夜通し店をあけておくと、大に儲かるとばかり見て居たものでせう。ところがこの數字を見ると、九割までは夜十時から十二時までと、朝の七時から八時までの三時間中に賣れて居ます。十二時から七時までは、まるで客足がありません。電燈料、煖房料、私の給料を拂つて、夜通し店をあけておくがものはありません。』

何を言つても、數字には敵はない。店主は目の前に、それを突きつけられて說かれたのだ。之に對しては一言もない。彼は[illegible]

Sはこの店へ來てから、未だ一ヶ月半にもならない。給料は前の半分にも足らず、その上夜勤めであつたから、大抵の人ならば喜ばぬ勤だが、彼にとつては、願うてもなき好機會であつた。と言ふのは、店主その人が土地に知られた器量人であり、三軒の藥店を不景氣知らずに經營して居るについては、其處に必ず何等か秘訣がある譯だと、實はその手腕にあやかりたかつたのだ。彼は評判の人物を見習はねばならぬと決心したものだ。

約束の時が來て、Sは店主と會見した。彼の主張は通つて、夜通し店をあけておくことは廢止となつた。夜勤の彼は容赦なく、その勤めを解かれた。十二時から七時までは全く費用倒れであることが、彼の手でハッキリ證明された以上、當然その時間中の店番は不必要だ。

夜勤を解かれた彼は、その場で新たに支店の支配人を命ぜられた。

Sは、普通の場合に、普通の役を受持つて、それを並み外れに處した從者の一人に過ぎない。それは要するに、誰にでも出來る藝當である。餘程ボンヤリした人物は別として、兎に角一と通りの人間が、少しの注意で眞劍に物事を考へると、恐らくSと同じ氣質にはなれるものだ。



この話は、今を去る廿五年前のことである。Sは最早五十歳に手の屆く年頃に達し、十四五軒の藥店を經營する外、いろいろの仕事に關係して居る。

彼は壹萬弗の貯金を資本にして、十二年目に五十萬弗の純利金を見るまでに、事業を發展せしめた。それは決して珍らしい並外れの成功とは言へない。然しながら平凡な人物も、其處までは必ず進めるといふ事實を見せたところに面白味がある。

彼は何事につけ、如何なる場合でも、事實を突き留めることに油斷しなかつた。それは誰でも必ず出來ることだ。

彼は周到の準備といふことに、身を入れた。そのためには、意外に永く奉公勤めをした。未熟な人間が、急いで獨立する

と、判を押したやうに失敗する。Sは充分それを心得て居たのだ。

Sの父は薬屋であつた。究めて貧乏ではあつたが、無類の潔癖でもあつた。Sは父に毎月十銭づつ貰つて、學校の餘暇に店を手傳つた。潔癖の父に仕込まれて、彼は瓶洗、窓拭、掃き掃除などに、格別念を入れた。縁の下を座敷同様キレイにしておくことも、店先の往來を掃き清めることも、父から授かつた潔癖の御蔭であつた。

一事業に成功する秘訣の一は、不斷の整理といふことだ。不斷の整理を怠る時は、已むを得ずして整理せねばならぬ時期に會ふのだ。切羽詰まるのは、一時の好景氣に乗じて、現状を忘れるからだ。勢に乗じて、アトサキを考へる暇もなく、猪突すれば、儘てどうにも始末のつかぬことになる。

Sは幸ひにして、物の始末を良くする父親の潔癖に仕込まれたのも、あながち難しいことではない。



しいことではない。

彼は、父の意見に從つて、中學二年以上の學校教育を受けなかつた。その教育の大部分は、手腕才能ある人物の下に働いて、自然に授かつたものだ。十五歳になつて、他へ勤めに出た。親の手許をはなれて、他人に使はれる方が、本人のためだと、父は考へた。

整理好きの彼は、不精者の番頭に嫌はれて、常に辛いことばかりであつた。幸ひ店主は、何か見どころがあつたと見えて、彼を外の店へまはして呉れた。その店で彼は二年足らず勤め、手當り次第何でもテキパキとやつてのけた。

その内に、一家は大都會へ引越した。修業らしい修業は、愈よこれからだとあつて、彼は日頃の望み通り、平凡人が平凡の仕事を平凡なみにやつて居る店を見つけ出した。

この店の主人は、博覧會仕事で小成金になつたのを幸ひ、その小金の一部分を薬店の買收に充て、遊んで居るのも勿體ないから何かしらやつて居るといふしるしに、細細と營業を續けて居たのだ。一日の賣上げは僅か八圓、利益と

働くことに決めた。但し一ケ月の賣上げ三十弗を増す毎に、給料一弗づつ給料を増すといふ約束であつた。

隱居仕事にやつて居た店は、若い血液を注入した結果、見る見るうちに繁昌して、一日五十八弗の賣上げを見るに至つた。Sの給料も、一ケ月百廿五弗といふ、その頃にしては珍らしい高に達した。

店の主人は、商賣こそ下手であつたが、金を貯めることは上手であつた。彼は或時Sが五仙か十仙程の果物を買つて來たのを見て、そんな贅澤をするものではないと戒め、無理やりに小遣帳を買はせて、小遣錢の出入を一々つけさせたくらゐだ。毎月の物見遊山に使ふ金は貳弗で澤山だと言はれてSはそれを克明に守つた。

さう斯うして居る内に、千百弗の貯金が出來た。何時かは必ず自分で一軒の店を持たうと決心したのも、その頃であつた。而かもそれには注文があつた。それは人口五萬くらゐの町場の下町へ狙ひをつけたものだ。お山の大將になるには、丁度その



迄お手傳の事と考へた。[illegible]に當る人から呼ばれて今の主先が、軈て望みの小さな都會であつた。

Sが夜通しあけはなしの藥店へ、夜勤の番頭に雇はれたのは、その時であつた。臨時雇にひとしい店番から、一足飛びに支店の支配人となつたSは、一時友人と組合つて別に藥店を開いたが、それも暫らくして自分の持分を七千弗で賣渡し、再び舊主人の元へ歸つて來た。尤も今度は三軒の支店を、全部管理することになり、自分の所持金を半額入れて、配當を受ける身にさへなつたのだ。それ以來、卅五になるまで、彼はその店で働き、その歳になつて漸く一軒の主人となつた。殆んど廿年以上、彼は藥店の仕事に經驗を積み、一本立ちとなるまでには、彼是れ一萬弗餘の金が出來た。この長い歲月間、彼は少しの油斷もなく、準備をして居た。抜目なく充分に支度をした結果は、一本立ちとなつてから數年ならずして、目覺ましく現はれた。一軒の店は、軈て七軒に殖え、終にそれが今日では十五軒の小ぢんまりとした連鎖式小賣店を組織するやうになり、外に玉突店、食堂、不動

産賣買店などをも、片手間に經營するといふ繁昌振りだ。どれもこれも、皆盛大にやつて居るについては、必ず何か成功の秘訣がある筈だと、或人に聞かれた時、Sは斯う答へた。

『本當の秘訣などといふものはありません。凡て事實を突留めることが肝腎です。面倒でも進んで事實をつかまへる。半可未熟が一番よろしくない。商ひにしても、何が儲かつて、何が損をして居るかを突留めず、唯漫然と全體を見て、損得をきめたのでは面白くない。引曳られて居る品物は、一々損得を吟味して、更に力を入れてやる場合もあらうし、全く扱はぬことにもなります。藥店で取扱ふ品物は、千を以て算ふる程の多數であります。その一々について損得の事實を承知して居なければならぬ。それも手後れとならぬ内に、調べて了ふ。私の部屋に掛けてある數字澤山の黒板を見て、人はさういふ贅澤の調べをしては、嘸金の要ることでせうとおつしやるが、多少の金をかけても調べをつけておかぬと、遙に以上の損失が目こぼれになります。面倒は元より覺悟です。どんな事柄でも、面倒を厭うては、手に入りません。』

Sは又、使用人の信用を得るのが名人だ。一度雇入れたものは、決して出さない。使用人の間違を正し得ぬのは、自分の罪だと固く信じて居る。不正直極まるものでも、能く話合つて、正しい筋道を示せば、必ず本心に立歸つて正直な働き者になると、彼は實例を示してそれを主張する。性急な人間も始末が惡い。氣の臆するものは一層困る。Sはさういふ人達を決して見捨てず、手を盡して善導した。

臆病は、事實を正視し得ぬからだ。知識から自信も勇氣も生れるとは、誰しも能く言ふことだが、實際それに相違ない。

Sの母親は、常に彼に對して、親切に教へることを忘れなかつた。一と頃彼は、商賣を發展せしむるについて、思案に餘つたことがある。何をやつても旨く行かない。次から次へと色々の考案は浮んで來るが、ドレもコレも面白くない。その度毎に、彼は曾て母親に戒められた言葉を思ひ出す。

『倖や、廿通り考へて、その中から一つ良い思案がつけば、それで結構だ。決して氣をおとすなよ。廿番目の思案をする時、更に一層力を入れて考へ、外の十九を忘れて了ふのだ。』

動物奇談感激畫帖

犧牲

山縣五十雄

英國の名將バトラー將軍がアフリカ内地を旅して、とある湖水を渡つた時、峨々たる岬角に、見事な大理石の記念碑を望見した。處も處、物も物、由緒や如何にと、船中の故老に尋ねれば、聽得たり一場の動物哀話。

當て此地の駐在武官ゴルドン大佐は、愛犬を岸に待たせて、この湖中に游泳した。と、突如、犬は大佐を望んで猖々として吠え出した。右往左往、起つてもゐても居堪まらぬ樣子。大佐も變に思つて、ふと振返ると、驚くべし、數間の後には、獰惡なる一頭の鰐が、大浪を打たせつゝ突進して來るではないか。『失敗つた！』拔手を切つて渾身の死力――だが、時は既に遲い。大鰐の毒牙は將に大佐の足に及ばんとした。

刹那、ざんぶと水中に飛込んだのは愛犬である。疾風の如く大佐と鰐との間に泳ぎつくと、いきなり猛然として這個怪物に食つてかゝつた。その瞬間、大佐は一歩身を脱して虎口を免れ得た。後には湖上見る〳〵眞紅に染つて、犬は終に姿を見せなかつた。

岬角の記念碑こそは、大佐が此忠犬に濺いだ血涙の結晶である。

（林　唯一　畫）



護王の鷹

山中峯太郎



成吉思汗大王が、或る日、秘蔵の鷹を自から拳にとまらせて、野へ勇壮な鷹狩に出た。折しも夏の炎天に、狩りをつゞけ、泉を探ねて森へ分け入ると、何故か鷹は忽ち大王の拳を放れて、森の上へ高く飛び去つた。渇きに喘いでゐる成吉思汗は、岩間に流れ下ちてゐる細い水を見るや否や、銀の杯を取出して清涼な水を受けた。そして今しも唇をつけようとする刹那、颯と羽搏きの音と共に、舞ひ降りてきた鷹のために、杯を蹴落された。『何をする?』と、成吉思汗は、杯を拾ひ上げ、水を受けて飲まうとする瞬間、再び降りてきた鷹のために、またも折角の杯を落された。

激怒して劒を抜いた大王は、三度、杯に水を滿たして飲まうとする、そこに飛び降りてきた愛鷹を、一氣に斬りすてた。そして、岩に散つた鮮血を避けて、水の湧く所へ上つて見た時、そこの泉の底には、誰か知らう…毒蛇の屍骸が沈んでゐるのであつた。大王は杯と劒を投げすてゝ愛する鷹のために哭いた。

（上原古年畫）

猿の母性愛

安藝三郎



ヅドン……一發、彈丸は正に命中した。仔猿を背に負つた牝猿の腰を見事に貫通して。

『しめた！』

上州四萬温泉の獵師文藏は、百發百中の名射手であつたが、この時ばかりは躍りあがつて喜んだ。一彈で親子二匹の猿を射留めたと思つたから。

キキキ……と牝猿は斷末魔の悲鳴をあげたが、その苦痛の瞬間、彼女は激しく軀を搖ぶつて背の仔猿を引下ろすや否や、さつとばかりに傍の枝へと投げつけた。仔猿の墜落を防ぐ最後の死力を盡したのである。

仔猿は吃驚して他の枝に飛びついたが、牝猿は一溜りもなく大地に墜ちた。無論即死である。

文藏は、その夜、家へ歸ると、濁酒をしたゝか呷りながら、恨めしげに鐵砲を眺めて呟いた。

『獵師なんて因果な商賣だ。俺は明日から百姓すらあ』

死の瞬間、子を思ふ親猿の心を察すると、文藏は堪らなかつたのである。

（井川洗厓畫）

名馬小紫

岡田東魚

『斯く恙なく引揚げるを得たは、偏にこれ神助の賜物――』

慶長五年九月、關ヶ原の合戰に敗れた島津義弘入道惟新は、惡戰苦鬪、漸く一方に退口を得て、伊勢路から大阪に歸ると、かねて信仰する住吉神社に、愛馬小紫を奉獻し、御禮をかねて身の武運長久を祈つた。

が、斯くなつては、關東勢の押寄せぬ間に、一刻も早く歸國して再擧を計る外はない。その儘船路をとつて國へ志すことになつた。

惟新の船が、岸を離れようとした時、如何してそれを感じたものか、神社の厩に入れてあつた小紫が、俄かに暴れ出した。そして圍ひを蹴破り、さへぎる者を蹴倒して舊主の跡を慕つた。

船はもう沖へ出てゐる。小紫は何の躊躇もなく波間へ飛び込んだ、かくて泳ぐ事三町餘り、が、とても追ひ付くことが出來ぬと諦めたか、悲しげに嘶くや、陸へ引返した。

船は段々遠くなる。小紫は身も世もあらぬやうに悲しげに嘶いては、そこら中馳け廻つてゐたが、やがて船が見えなくなると、社殿へ飛び入り、柱に故意に頭を打ちつけて死んだ。　（小山榮達畫）





ラヂオと愛犬

大井松太郎

チツト・ビッツといふ英國の雜誌に、ラヂオのおかげで、和蘭の或大學教授が盗まれた愛犬を取返したといふ話が出て居る。

其犬は英國へつれられたが、盗んだ者の手許から逃げ出してさまようて居たのを田舍の或醫師が見付けて憐れに思ひ、我家へつれ歸つて飼つて居た。或日其醫師は和蘭の放送局から傳へて來る其大學教授の講演を聞いてゐたところ、側に居た犬が其聲を聞いて非常に興奮し、擴聲器の中を覗いたり、四邊を探がし廻はつたりした。其樣子を見て、醫師は犬が舊主の聲を聞き分けたのではあるまいかと思つて試みに、其敎授へ交渉して見たところ、果して推察通り、其犬は幾月か前に何人かに盗まれたものであることが分つた。そこで醫師は直に其怜悧な犬を舊主の家に送り返した。

（加東三郎畫）



芳崖と老猫

柳原綠風

劃世的の大畫聖、狩野芳崖翁は生前頻りに猫を愛した。その晩年神田小川町在住當時の飼猫は『たま』と呼ぶ老猫であつた。

明治二十一年十一月一日、翁は例の通り小石川植物園内の圖畫取調掛(今の美術學校の前身)事務所に出勤して、有名な慈母觀音に金砂子を蒔いてゐたが、どうも大儀でならぬからと、後事を橋本雅邦に賴んで、珍らしく俥で歸つて來た。たまは『にやア』と、いつもの通り翁の歸宅を出迎へたが、常になく眞つ青な顏色を見ると、とても物憂はしい樣子をして翁の病床に侍し、爾來全く食餌を攝らず、文字通り寢食を忘れて枕頭につききりであつた。

翁は越えて五日、終に六十一歳を一期として永眠されたので、たまは悄然として依然絶食のまゝ葬儀を見送ると、そのまゝ行方不明となつたが、どこを何うして辿りついたものか、その初七日谷中長安寺の翁の墓前に骸となつて横はつてゐたといふ。(八幡白帆畫)

猛犬の最期

赤松月船

長野縣諏訪郡玉川村の或る獸醫の家に火事が起つた。折柄の烈風に煽られて瞬くうちに火は一家をつゝんだ。獸醫は不意の出來事に吃驚しながらも年頃愛育してゐた馬を救ひ出さうと厩の中に駈け入つたが、あつと云ふ間もあらばこそ厩の屋根が燒落ちて獸醫の姿が見えなくなつた。すると愛犬ポチが猛火の中に躍り入り昏倒せる獸醫をくはへ出して來た。人々が獸醫を介抱してゐる間にポチは又何處ともなく駈け去つたが、ほどへて獸醫の息子と一緒に再び姿をあらはした。ポチは二里あまりを隔てた村に駈けつけて息子をひつぱつてきたのであつた。全燒のあとの慘狀、人事不省の父――歎き悲しむ息子を見て、ポチはキヤンキヤンと一聲高く悲痛の叫びをあげたかと思ふと、其場にばたり倒れた。よく見ると、ポチは胴から足にかけて大火傷を負ひ最早起つことが出來なくなつてゐたのであつた。壯烈極まるポチの死骸に對して感動の淚を流さぬものはなかつた。（神保朋世畫）





猿の報恩

八波則吉

これは肥後の國に起つた事實です。麗らかな或日のこと、乳飲子を入れた畚を濱邊において、その母親は潮干狩をしてゐました。すると、キヽと妙な鳴き聲が聞えますので、ひよいと見ると、一匹の猿が大きな鳥貝に足を挾まれて苦しんでゐるのです。『まア、可哀相に』母親は猿の側へ寄つてゆき、『どれ〱』と云ひながら、その貝をこじあけて、猿を助けてやりました。猿は嬉しさうに何度も〱お辭儀をして今しも山の方へ歸らうとしました。その瞬間！けたゝましい物音がしたと思ふと、一羽の大鷲が畚の中の乳飲子を攫つて大空を翔つてゆくではありませんか。『あれえ！』母親は狂氣の如く追ひかけましたが、たうとう鷲の行方は分らなくなつてしまひました。その夕刻、母親は絶望のあまり、山の中に泣き倒れてゐますと、どこからともなく一匹の猿が攫はれた乳飲子を抱いて來ました。猿は可哀相に體中血まみれになつてゐましたが、乳飲子にはかすり疵一つ受けてはゐませんでした。

（小田富彌畫）



腹が空つた！

淺邊默郎

犬の喧嘩で感情が分るといふことは、最近故高橋虎雄氏の研究で明かに證據立てられた。が、喧嘩でなく完全に人間の言語を發し、感情を訴へる犬が、五年前獨逸に在つた。

『腹が空つた！』

ハーペン・ランドと呼ぶ百姓女が、或る日バタ壺をさげて、ガルデレーゲン附近の野徑を通ると、突然背後で聲がした。振回つて見ると誰もゐない。只大樹の下に前趾をたてた一頭の牡犬が、口を開いて物欲しげに此方を見てゐるだけであつた。行過ぎると又た腹が空つた、腹が空つたと連呼する。聲の主は確かに犬。ハーペンは肝を潰してバタ壺を投げ、眞蒼になつて逃戻つた。

その犬は森林の看守人エーベルドの飼犬ドンであつた。忽ち非常な評判になつた。歐羅巴各國は勿論、米國からいろ〳〵の動物學者、心理學者が研究のため集つて來た。新聞雜誌記者は潮のやうに押寄せた。つひにドンは漢堡の動物學會長フォッセレル博士の面前に立たされて、嚴密な試驗をされた。その結果、抑揚はあまり明瞭ではないが、母音は比較的よく發音されることを認められた。ドンの得意とする言葉は『お菓子』『おやすみ』のほか、やはり最初の一句であつた。

『腹が空つた！　腹が空つた！』

（石井滴水畫）

孝子を救つた犬

隼三郎

『僕、薬を買つて來ます。直ぐ歸りますから我慢してゐて下さいよ、ねえ、お母さん』

今年十三の清太郎は家を飛出した。飼犬のギンが後を追ふ。父（秋田縣河邊郡岩見小林區署出張所員唐津寅市）は生憎出張中、母が胃痙攣で俄に苦しみ出したのである。明治三十年秋の霖雨、處々に山崩れや出水のあつた際のこと。

日は暮れた。母一人病床に悶えてゐると、思ひがけぬ父の寅市が戻つて來た。雨は益々降募る。清太郎はまだ歸らない。父母は頻に案じてゐると、倉皇しくギンが馳込んだ、全身ズブ濡になつて。『おゝギンか、坊はどうした』ギンはたゞ父の裾を啣へて無暗と引張る。胸を跳らせながら蹤いてゆくと、約一里、三内川の岸に到つて、ギンは礑と止つた。見ると松の木蔭に倒れてゐるのは正しく清太郎。而も息は既に切れてゐる。『やゝ』父は驚倒した。ギンは頻りに猖々と吠えた。斯てはならじと肩に引かつぎ家に歸つて手當をすると、清太郎は息を吹返した。

薬を買つて歸る途中、誤つて川に落ち、一町餘も流されたのを、ギンが啣へて引上げ、急を父に知らせたものである。

（富田温一郎畫）





目隱しされた馬

中江利秀

歐洲戰爭のまつ只中だつた。死傷山をなせども收容さへも出來ない激戰が毎日つゞいた。

其時勇ましく戰線を馳驅する一英國騎兵があつたが、飛來する敵彈を避くるに由なく、どつと馬から落ちると、其儘息は絶えた。さうした場合、馬は直に駈去るのが常である。然るに其馬は去らない。主人の死骸の側に首うなだれて眷戀の情に堪へぬ者の如くである。

之を見た塹壕内の兵士は聲を絞つて馬を呼んだ。馬は時時こつちを向く丈だつた。――銃丸は馬の耳を掠めて飛ぶ、砲火は馬の脚下に爆發する。馬は元來怜悧な動物、この危險を知らぬ筈はないのに。

數時間經つた。『あの忠義な馬を見殺しには出來ない』砲戰の隙を計つて數人の兵士が塹壕を飛出した。手綱を引けども〳〵、馬はぢつと主人の死骸を見詰るばかり。兵士等は空しく塹壕へ引上げねばならなかつた。

『何としても救出さなくちや』『どうだ、目隱をしては』『さうだ〳〵』そこで又數人が飛出して其馬に目隱しをした。そしてやつと陣地へ連れ歸ることが出來た。――

この馬が其後、隊の誇となつた事は言ふまでもない。

（小寺健吉畫）

小象の運命

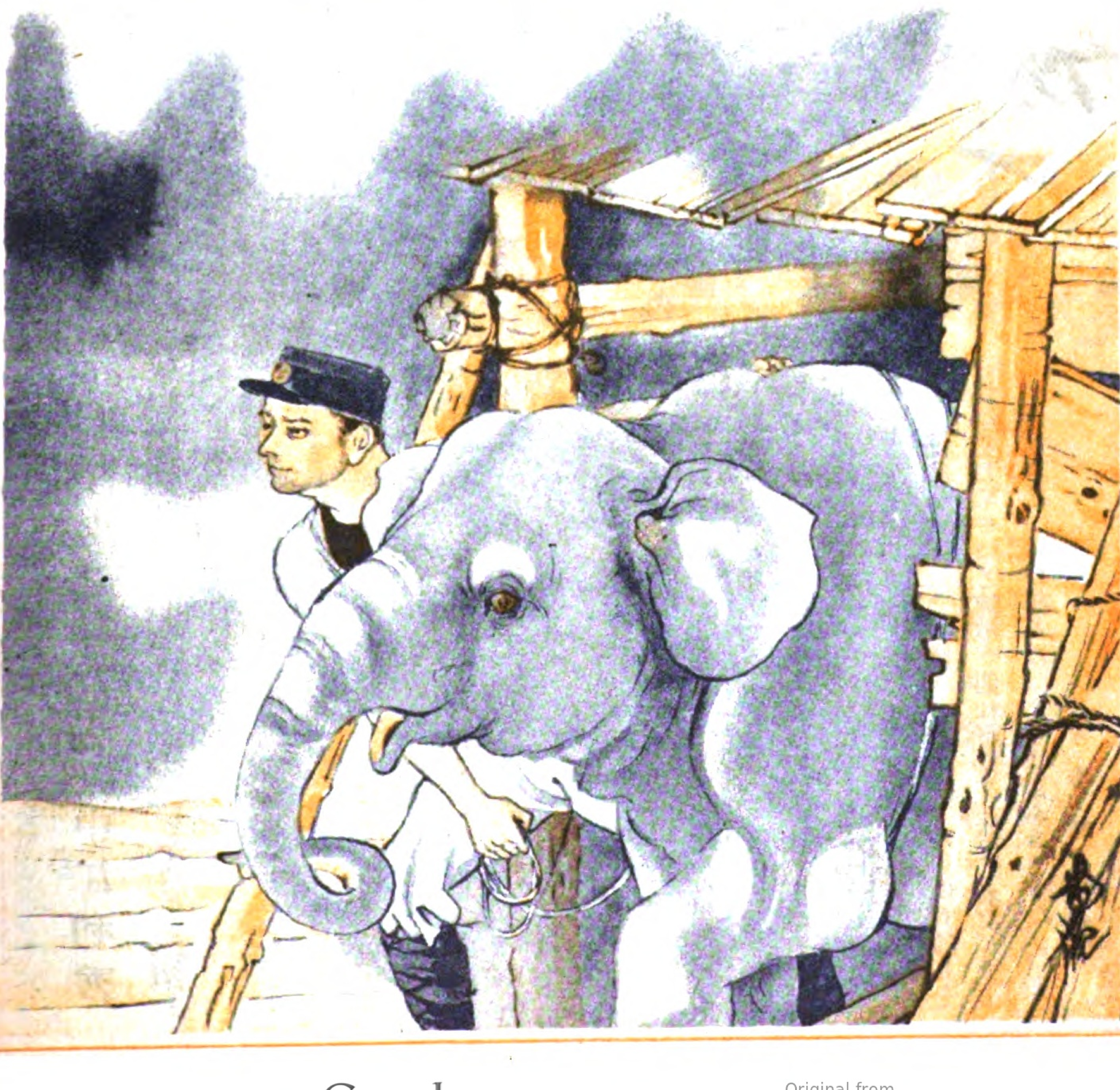
森野清

大正十二年九月一日の大震火災に、淺草の花屋敷では危險を慮つて、猛獸は全部銃殺して了つた。園丁の福井酉造は獅子、虎、狒々を泣く〱片づけて最後に象の檻へ向つた。折柄象の檻はコンクリートの工事中だつたので、屋根へ葭簀が被せてあつたが、千束町の方面から延びて來た火の手は既にこの葭簀へ燃え移つて、中に居た象はヂリ〱と生き乍ら燒かれて居た。

『可哀想に……』獸とは云へ、毎日手鹽にかけてきた動物を銃や火事で殺す事は全く忍びない事だつた。殊にこの象は六十二歳の老齡で、立派に大悟徹底したものゝ如き大往生を遂げたのであつた。目のあたりその健氣な最期を目擊した園丁は『おゝ』と叫び乍ら、大工の細工場へ入れておいた小象の許へ駈けつけた。その時あたりはもう一面火の海だつたが、小象は園丁の顔を見ると、喜色滿面の樣子、鼻で嬉しさうに助けを求めた。

園丁はその恭順ぶりに感激して、決死で之を救ひ出し五重塔の處まで逃げのびた。飮まず、食はず、雨晒し五日、遂にこの小象は命をとり止めて今も猶花屋敷に健在である。

（尾竹國觀畫）



虎と日本犬

山川靜夫

『百獸の王とはよういうたもの、いかな猛犬でも虎の前に出ると、吠えることすらかなはぬな』

濶達な秀吉は、新しく渡來した虎が大好きだつた。近在から犬を集めさせては、生きてる儘虎に與へて、興に入つてゐた。

或日のこと、係の者が、今迄にないとても大きな、白黑の斑犬を連れて來た。これまではどの犬も、檻へ入れるともう氣死の狀態で、わけもなく食はれてしまつたが、この犬は檻に入ると同時に、隅に陣取つて毛をさかしまに立て〻虎を睨み、低く唸りはじめた。

『おや！　面白いぞ』

人々は息をころして見てゐると、虎は何を小癪なといはんばかりに、咆哮一番、眼を瞋らして飛びか〻つた。と、颯と身を交したかの犬は、飛び違ひざまに虎の喉に食ひついた。虎は怒つた。左右の爪で、寸々に犬の體を引裂いた。が、いつかな放さない。たうとう物凄い爭鬪の果、相打になつて斃れた。

『珍しい！　よしある犬に違ひない』と調べさせたら、攝津丹生の山田の獵師の犬で、（罪なくて虎の餌食になるとは何たる因果、敵をとれ）と言ひ含められた結果と判り厚く跡を弔はせた。

（尾竹竹坡畫）



老犬の雪冤

安倍季雄

萬延元年の冬、出羽の庄内は連日連夜の大吹雪だつた。その最中に、酒井家の老臣石原平右衛門の屋敷では、續けて三晩、何者かゞ忍び入つて、殿拜領の西洋兎を七頭まで盜み去つた。

『一度ならず二度三度、この不始末は何事だ』烈火のやうに怒る平右衛門への手前、用人某は、邸内から罪人を出したくない一心から、日頃厄介扱ひにしてゐた老犬マルに罪を被せて吹雪の中を追出してしまつた。

それから五日目の深更、石原家の庭前で、突然けたゝましい悲鳴。何事かと平右衛門、追取刀で出て見ると、驚いた。滿庭の雪を眞赤に染めて、犢のやうな山犬が三頭まで嚙殺されてゐる。其中の一疋の咽喉笛に嚙付いた儘、虫の息で倒れてゐるのは、正さしくマル。

『おゝマル、赦してくれ。お前の樣な忠義者を疑うたは俺の不覺。武士の我身が恥しい。平右衛門かうして詫るぞ!』降積む雪の上に兩手をついて淚潸然。マルはその懷に鼻面を埋め、二三度低く鳴いたと思ふと、息は絶えた。

『忠犬マルの墓』と刻みつけた丸石の墓標が、私の子供の時まで石原家の庭前に立つてゐた。

（近藤紫雲畫）





主人の屍を護る

廣田芳園

『それッ！ 森武藏守が落馬したぞ！ 首を取れ、首を取れッ！』

長久手の戰に、必死となつて家康の旗本に突進する森武藏守長可の勢ひに、主君危しと見た井伊直政の手は、横合ひからドッと鐵砲を亂射した。何かはもつて耐るべき、長可は眉間を打たれて落馬した。

と見るや、首を取つて功名せんものと、群り寄る徳川勢。

長可愛馬『百段』は、この時勃然として怒り、近寄る敵兵を或は蹴飛し、或は前足で跳飛し、縱横無盡に暴れ廻つて、寄せつけない。その裡に長可の郎黨がかけつけて、辛くも主人の屍を肩にかけて引きあげた。

百段もこの働きで、槍創二ヶ所被つたが、命を完うして歸り、畜類ながら長くその忠實と勇名を謳はれた。

（太田[illegible]一畫）



親友たらずんば敵

井原康雄

これは近着の倫敦デーリー・メール新聞に出て居た話である。英國サーレー郡エッシヤといふ所にスカンプといふ名の犬が或家に飼はれて居る。此犬は頗る元氣な犬で、よく近所の犬と咬み合ひをするが、中にも一番仲の惡いのは其飼主の隣に住んで居る人の飼犬であつた。

つい近頃のこと、或朝スカンプの主人は彼が其居間の窓の下でキヤン〳〵悲しげな聲を出して鳴いて居るのを聞いた。スカンプはよく吠えるけれど、今迄に鳴いたことがないので主人は變に思つて外へ出て見た。するとスカンプはいかにも嬉しさうな樣子を見せて、庭の中をあちらへ走り、又こちらへ走り返りなどして。自分について來れといはんばかりに振舞うた。主人は彼の後について行くと、彼は庭の隅にある井戸へまつしぐらに飛んで行つた。其井戸の中にはスカンプのけんくわ相手の隣人の飼犬が落ちて今にも溺れさうになつて居る。スカンプの主人は早速助けを呼んで、力を協はして息も絶え〴〵なる其犬を救ひ上げた。スカンプは大喜びでしきりに其犬を嘗めた。それから二三日の後其犬がすつかり元氣を回復したが、スカンプは以前の通りそれを相手に毎日のやうに咬み合をしてゐるさうである。（三上知治畫）



文化人か野蠻人か

青山師範學校長　長谷川乙彦

一、アゼン人とスパルタ人

昔、希臘のアゼンに芝居があつた時、一人の老人が後れて入場した爲に、座席がなかつた。止むを得ず、老人は其の邊りをうろ〳〵してゐた。

アゼンの青年達は、老人の困惑したやうな樣子を見て、互ひに笑止がつた。しかし誰一人として席を讓らうとするものはなかつた。

老人は席を求めて歩いた。丁度スパルタの使節が着席してゐる所へやつて來た。老人を見ると、使節は直ちに立つて自分の椅子を提供した。

喜んで之に坐した老人は、心からスパルタの使節に感謝すると共に、四邊の人人に對して曰つた。

『アゼン人は、誰も善の善たることは知つてゐる。しかし之を實行するのはスパルタ人のみである』と。



私はこの話を或る書物で見たことがある。

『それは善い事だ。道理だ。けれども實際はその通りに行へるものではない』

吾々の間でも、こんな言をいつて、行はぬ方に理窟をつけるやうな習慣さへある。以ての外だ。

『あの老人は立つて居る。氣の毒な事だが、まあ誰かゞ席を讓るだらう』

などと考へて、自ら實行しようとしない。これでは結局、いつ迄たつても眞の進歩改善は望めないではないか。

總ての事は理論よりも實行でなければならぬ。

二、雨に濡れぬ心

友人から聞いた話がある。——

英吉利の或る公園の音樂堂で演奏會があつた。その日は朝から曇天であつたが、午後になると、ボツリボツリと降り出した。所が生憎、雨覆ひの設備がない。聽衆の衣袂は次第に雨にぬれて來る。

併し演奏はまだ終らない。壇上の樂人は、帽子眉庇を傳うて落ちる雨の雫も、更に氣には止まらぬかのやうである。

「雨にぬれるのはいやだが、演奏中に席を立つことは他の妨げにもなるし、第一演奏者の眞劍な態度に對しても相濟まない」

かう考へた人々は一人として座をはなれるものがなかつた。一方、演奏者はどうかといふと、雨にぬれるのも厭はずに、聽衆が熱心に而も靜肅に、自分達の藝術に共鳴して呉れてゐるその態度に感激して、雨降らば降れ、風吹かば吹けと、たゞ一意奏樂に精進したのである。

結局、聽衆の方は演奏者の心術に同情をし、演奏の方は、聽衆の熱情に感激しながら、降りしきる雨の中に、豫定の如くプログラムを進めて、一糸亂れず、極めて整然と音樂會を終つたといふことである。

これは相手の精神と人格を尊重するの精神に外ならぬ。人を人として立てながら、我は我として立つ——義の觀念に徹するのである。

こゝに我等が反省する必要はないだらうか。

三、下足を急ぐ國民



我國に於ける劇場とか音樂會とか、其の他多くの人が會合する場合を見ると、雨が降つて來た時どころではない、何事もない平常の場合に於ても、それが終りに近づく頃になると、もうザワ〳〵と立ちかける。舞臺や壇上の事などは忘れてしまつて、下足や預け物などを取るのに夢中になつて、吾れ先にと歸りを爭ふ。その混雜の狀はまことに沙汰の限りである。斯くて終演まで靜肅が保てることなどは、絶對に無いと謂つてもよい。

一事が萬事だ。斯くの如き例は世間到るところに存して、心ある者をして坐に顰蹙に堪へざらしめる。

凡そ此等の自己の便宜の爲に他を顧みない自儘勝手な行動に對しては、大いに社會的制裁を加へる必要がある。それと共に人おの〳〵が其の淺ましい利己心を愼み畏れて、お互ひが立派な社會を建設するやう努力すべきである。

殊に東京、大阪などの大都會は、交通が頻繁であるにも拘らず、交通機關の設備が十分でないのと、お互ひの間に自省力が缺けてゐるために、汽車、電車、乘合自動車の乘降には、老人子供をさへ押し退けて先を爭ふその醜狀は眞に嘆ずべきものがある。

甚しきは車掌と乘客との間、或は乘客と乘客との間に、聞くにたへない罵詈叱咤の聲を聞くのも敢へて珍らしとしない。淺ましい極みではないか。

されば老幼婦女に對して席を讓るやうな人は滅多になく、汽車などではなかな

人分も占領して、而も知らぬ顔の罪惡人りをきめ込んでゐる堂々たる紳士さへある。呆れて物が言へない。
尊敬と同情と互讓の精神が缺けてゐるからだ。

四、何が文化人か

古來、君子國を以て誇り、個人道徳に於ては見上げた人も少からず、又世間もその不義不徳を責むることには相當に嚴格な我が國民にして、事一たび斯うした社會道徳に及ぶと、自ら恬として恥づる所なく、世間も亦當り前の事として責めようともしない。これは一體どうした事か。私共は寧ろ不思議にたへないのである。

日本も世界に乘り出してから既に六十年、いかに社會的訓練が出來てゐなかつたからとて、もういゝ加減に目覺めてもよささうなものではないか。
國粹を唱へるばかりが愛國ではない。

ることも亦愛國である。國民の品位を高めて、世界の何人にも愧づるところなからしめるは、更に貴むべき愛國でなければならぬ。愛國心の旺盛を以て世界に誇る我が國民にして、いまだ玆に目覺め得ないといふ事は抑ゝ何故であらう。



私は信ずる――一國文化の程度は、凡そその國民の社交上の秩序と社會的規律によつて評價さるべきものであることを。

は夜の明けぬ現代人は、この意味に於て、果して文化を口にする資格があるだらうか。
『他と共に！』それが吾々を眞の文化人にする唯一の合言葉でなくてはならぬ。

日本一の浴衣

一記者

柄は新鮮で上品、染は清楚美しく、生地は飛切り極上、その上もちがよく値段が圖拔けて安いといふ、日本一の浴衣が「婦人俱樂部浴衣」と稱して、夏に魁けて、今度本社代理部及全國の特約店から大々的に賣出します。柄の如きも百數十種、粹向、澁向、實用向と皆さまのお好みに應じて居りますが、何れも優美、飽くまで高雅、お蔭で賣出し早々から、もう偉い大評判を頂いて居ります。御希望の方は本社代理部へ直接でも、又各地の特約店にでも御註文下さい。尚本社代理部宛ハガキで御申込みなれば、鮮明な寫眞入り型錄を無代で進呈致します。

名家

唄　　大木篤夫

青麥のにほふ日なりき、
カイガラを耳にあてつつ
遠潮の鳴るを聽きにき、
わが戀やをさなかりき。

庭を見る人（室生犀星の印象）　　萩原朔太郎

その人は鹿か、牛か
犀のたぐひか
大きな草食獸の角を生やして、
雨氣の中で庭を見てゐる。

手を愛する　　井上康文

私は愛する
働くその手を
逞しく節くれだつた手を
おお　人間を生かす萬能の手を――。

泰西文豪逸話選

働き損

佛國のルーアン學院が褒美を懸けて詩を募集した事があつた。期日までに諸方から集つた詩を審査委員たちが檢ると、誰の眼にも際立つて良く見えるのが二つあつた。さて其中どちらを採らうかと言ふに就いて、委員達の論が二つに別れ、雙方熱くなつて言ひ爭つたが、とても果しが附きさうに無いので結局一つの褒美を二つに分けて贈る事になつたが、勿論雙方とも不承たら〲である。そこで、作者二人は何者で有らうかと、名前を隱してある紙片を除け一同眼を皿の樣にして見ると、兩方とも同じ人でラアープ。

無勘定

レッシング、或時自宅で錢貨の亡くなる事が度々あつたので、若しや家僕の所爲ではあるまいかと疑つて、それを試驗す爲に一掴の金貨を卓子の上に置いて、友人の許へ往つた。友人此話を聞いて、「言ふまでも無いが、君は其金の勘定をして置いた

短唱

芽ばえ

生田花世

しやくやくの赤き芽ばえに
おもひいづる青春のこころ
はつ戀はかりそめならじ
しやくやくのその芽をふむな。

偶成

尾崎喜八

むかふの方、遠くには懐しい人生の聲々、
此處には平野の夕榮と單純な草木、
此世の善と美とに感謝の挨拶をして、
詩人の一生を終りたいのが私の願ひだ。

母に

百田宗治

私を眠らせて下さつた貴方の唄で
私は私の子供を寝かせます。
この子がまた自分の子供を眠らせる時に
うたふ唄をばかうして私は教へます。

られ」シフシンダ膝を叩いて『おつと、それを言はれた」

哲學の利益

伊太利の文豪トルクワトー・タツソーが始めて詩を作つて其名を全國に馳せた時、タツソーの父は之が爲に息子がもつと有利な稽古事を怠るやうになりはしまいかと心配して、タツソーの許に行つて、哲學や作詩に身を入れてゐる事を厳しく叱つて、さんざんに罵り嘲つた。處がタツソーは辛抱強く黙止つてゐたので、父はいよいよ威丈高になり『全體お前がそんなに大事に思ふ哲學と言ふものは何の役に立つのだ』と絶叫ると、タツソーの答へに『お父さん、哲學は貴父の劇しい嘲罵を私が耐へ得るやうにしてくれました』

神童

ヴオルテールは幼年の頃から頓才に富んでゐた。それが七歳の時、六十ばかりの老貴族がヴオルテールの前で『斯様いふ風に賢い子供はともかく成人の後には莫迦になるものだ』と言ふと、ヴオルテールすかさず『貴君は若い時分は餘程賢かつたに違ひ無い』と言つた。

後藤新平伯の面影

澤田謙

□日本一の美少年

後藤伯は珍らしく立派な顔容の持主であつたが、子供の時分も評判の美少年であつた。

須賀川の醫學校時代、學生が集つて、

『男と女と何方が美しいだらう』

といふのが問題となり、危ふく女に軍配が擧らうとしたとき、誰かゞ、

『しかし男にも後藤のやうなのがあるぞ』

と言つたので、忽ち形勢逆轉、つひに男の方が美しいと決まつたといふ程、天下の男性の美を代表した美少年であつた。

しかし豪放な彼は、貧乏なせゐもあつたが、いつでもボロ〳〵の着物を着、ズタズタの袴をはいて、平氣であつた。

『後藤、何だその袴は。……少しは縫へ、みつともないぞ』

と注意すると、

『さうか、有難う』

と、翌日は、袴の裂目を觀世縒で、結んでくる。

『何故糸で縫はないんだ』

と、詰ると、彼は昂然として言つたものだ。

『我輩は醫學を學ぶために、この學校に入學つたんだ。裁縫の勉強に來たんぢやない』



□同情二圓の人格

有名な相馬事件で、後藤伯が入獄したのは、伯が錦織剛正の孤忠に同情のあまり、生來の義侠心から、三千五百圓の證文に印を捺してやつたのが、錦織とぐるになつて、相馬家百萬の財産横領を企てたのではないか、との嫌疑からであつた。

『一圓や二圓ならいざ知らず、三千五百圓といふやうな大金を、單なる同情心から保證するといふのは、可怪しいではないか』

と、豫審判事から突つこまれると、

『つまり貴官の同情は、一圓か二圓分の同情しかないのだ。我輩の同情は廣大無邊だ。要するに人格の相異である』

と豪語したため、ますます心證を悪く

して、豫審判事は、いよ／＼意地惡くからまつてくる。つひに伯は、ふと母堂の愛してられた夢窓國師の歌を思ひだして、默つてそれを書いた紙片を、豫審判事に手渡した。



さかりをば見る人多し散る花の
　跡をとふこそ情なりけれ

人盛んなれば、チヤホヤする人は多いが苦境に陷ると顧みる人はない。その錦織の苦境に同情して、援けてやつたんだといふ意である。

その歌に感じたものか、以來、豫審判事の態度はガラリと變つて、非常に鄭重になつた。

後年伯が遞信大臣になつて、徳島に旅行したとき、『辯護士西川漸』といふ名刺を持つて、會ひに來た人があつた。記憶にない人なので、斷らうとすると、

『名刺の裏を見て下さい』

と言ふ。その裏には、『さかりをば』の歌が書いてあつた。往年の豫審判事であつたのだ。直ぐに二階に招じて、往時を一晩、語り合つた。

□奧州の薩摩芋

相馬事件のため浪人してゐた後藤伯を拾ひ上げて、その奇才を用ひたのは、陸軍次官の兒玉源太郎伯であつた。

時は日清戰爭が終つて、皇軍が續々として歸つてくる。檢疫をやらなければ、折角戰爭には勝つても、流行病のために、日本國民が總倒れにならぬとも限らない。そこで、

『兎に角、豫算をつくつて見よ』

との兒玉次官の命令。——やつて見ると、何うしても百萬圓はかゝる。百萬圓といへば當時は大金で、石黑子などは、

『君はそんな大きなことを言ふからいかん』

と忠告したが、後藤伯は平氣でそれを持ちだした。すると、意外にも兒玉伯は、

『ふゝん。では百五十萬圓あれば、完全に行くな』

といふので、即座にそれを決定してしまつた。後藤伯もその明敏果斷に驚いて、この人ならばと、その事業を引受けることになつた。



ところが、一年かゝつても難かしい仕

事を、僅か二ヶ月でやるんだから、まるで太閤様が清洲の城を築いたやうな騒ぎだ。これはビクともしないが、下僚にゐる人がみな軍人で『なんたあの若造め』と、馬鹿にして不平を言ふのには、誠に仕事の能率上困る。到頭後藤伯、癇癪玉を破裂させて、

『君たちは奥州の薩摩芋みたいなものだ。筋ばかり多くつて、何んにもならん』

と、怒鳴りつけたものだ。それは海軍の將校は、腕につけてる筋の多いほど上級である。筋が多いのを鼻にかけて威張るのを、皮肉つたものだ。

そんなことで、非難は伯の一身に集中し、なかには兒玉次官にまで訴へるものもあつたが、兒玉次官は、

『俺だつて默つてやらせてるではないか。君方もまあ辛棒しろ』

と、ピッタリ押へつけたのだつた。



この兒玉次官の太ツ腹と、後藤伯の巨腕とによつて、未曾有の檢疫事業も完成した。この似島の檢疫所こそ、獨帝カイゼルが、

『他のことでは世界の何物にも負けないが、檢疫所だけは、とても似島のにはかなはん』

と、驚嘆したそのものである。

□籐椅子にグウ〳〵

後藤伯は癇癪持で、氣に入らぬことがあると、頭から火の出るほど、猛烈に叱り飛ばすが、後は大風一過、もウ忘れたやうに、却つて『叱つて氣の毒だつた』とでも思ふのか、その人に物をやつたり、伯の方から機嫌をとるくらゐであつた。

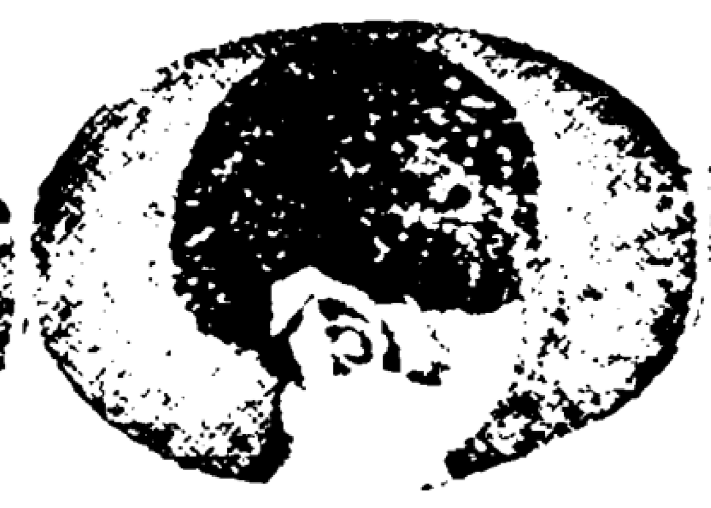
葉山の別莊が出來てまもなく、後藤伯はその玄關にかゝると、急に烈火のやうに怒りだして、ステッキで杉戸を一枚一枚、叩きこはしてしまつた。

さア、周圍の人はビク〳〵者で、誰一人、近寄る人がない。よく調べて見ると、その杉戸のあまりケバ〳〵しいのが、氣に入らぬのであつた。

ところが、プン〳〵怒つて奥へ入つた後藤伯が、何うしたのか馬鹿に靜かで、ガタとも音がしない。

恐る恐る、家人が覗いてみると、何のこッた。籐椅子の上で、グウ〳〵鼾をかいてるではないか。これには家人も、あきれてしまつた。



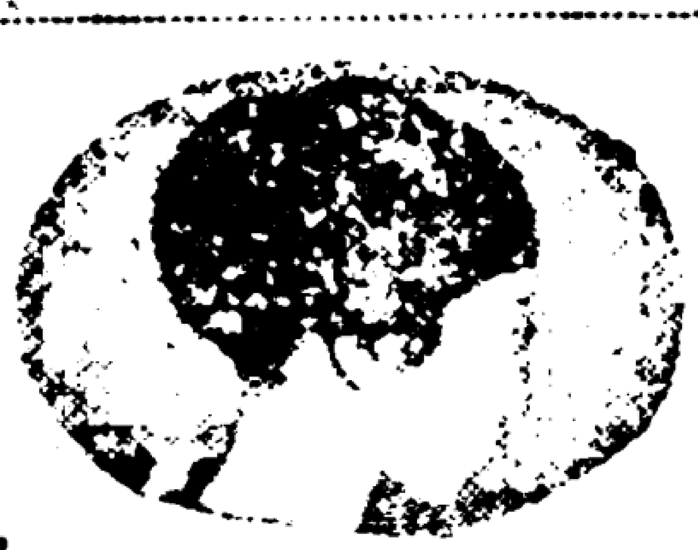



婦人方は勿論、男子の方も

是非御覧下さい！

▲令嬢奥様の模範的夏姿畫報
▲果物の切り方むき方頂き方
▲新時代の奥様はかうありたい
▲娘夏姿百態（よい振り悪い振當世娘氣質）
▲世渡り上手下手（婦人常識の手引！）
▲萬年新妻で暮す秘訣
▲上手なお金の働かせ方貯め方
▲醜い口元を美しくする整形法
▲夏の客の接待法と訪問の心得
▲『娘二十ごろ』座談會
年頃の娘の戀愛結婚等の問題について名流の大氣焔談會
▲夏の小兒科病院　竹内薫兵博士
怖ろしい小兒病について先生の尊い御研究の發表！





▲疫病によく効く不思議な靈寺
▲髪や體の悪臭をなくする法
▲道具なしで出來る夏の飲物
▲新家庭の樂しい晩餐
▲衛生的な美容バンドの作方
▲五十錢で出來る子供服十種
▲ユーモア怪談集　文壇大家新人數名
▲家庭讀物　緑の城（小公子物語）加藤武雄
世にこれ程純に麗しく又面白い物語があらうか？本篇は原作以上と定評ある先生の名譯！大評判です

……以上「婦人倶樂部」七月號に掲載！

この外婦人方に切實な記事、面白い小説大小數十篇を滿載した同誌は、早くも到る處、素晴しい評判です。（定價五十錢）

◇六月十五日頃發賣（今から最寄りの書店へ御申込置き下さい）

漫畫

魅力の世の中

夫婦篇

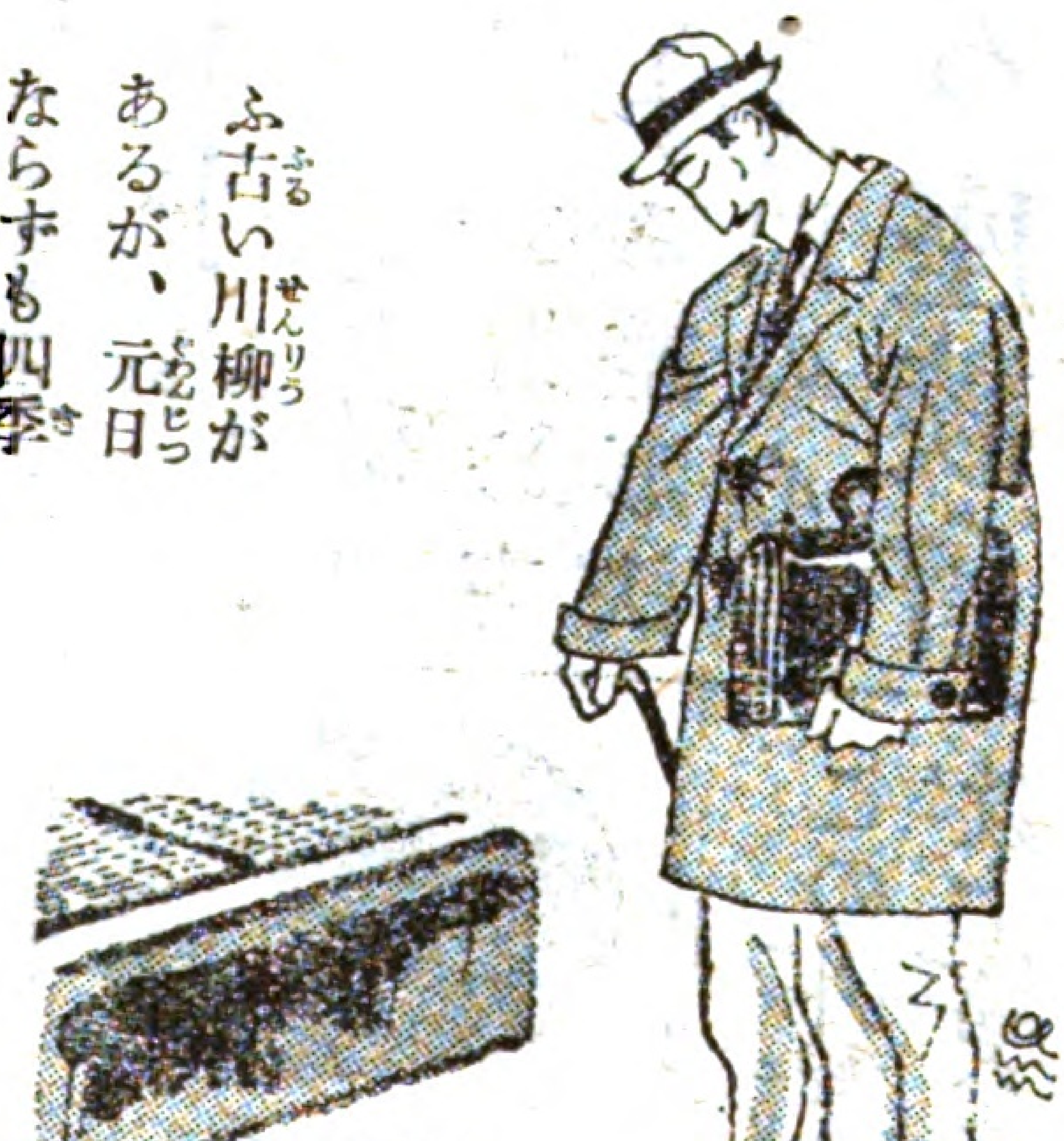
田中比左良

▲くよ〳〵して日を送る苦勞性の面々にこの漫畫を贈つて言申す、『さうくよ〳〵し給ふな、貴方の人生には未だこんな魅力が殘つてゐる』と、

▲くよ〳〵せぬ樂天家の面々にこの漫畫を贈つて言申す、『君、うつかり嬉しがつてると、こんな纖妙な人生の魅力を見逃すぜ』と、



一　『元日や己が女房に一寸惚れ』といふ古い川柳があるが、元日ならずも四季折々晴着を着た時の女房はその都度新鮮な感じがして新しい他人を同伴してるやうな感じになる。



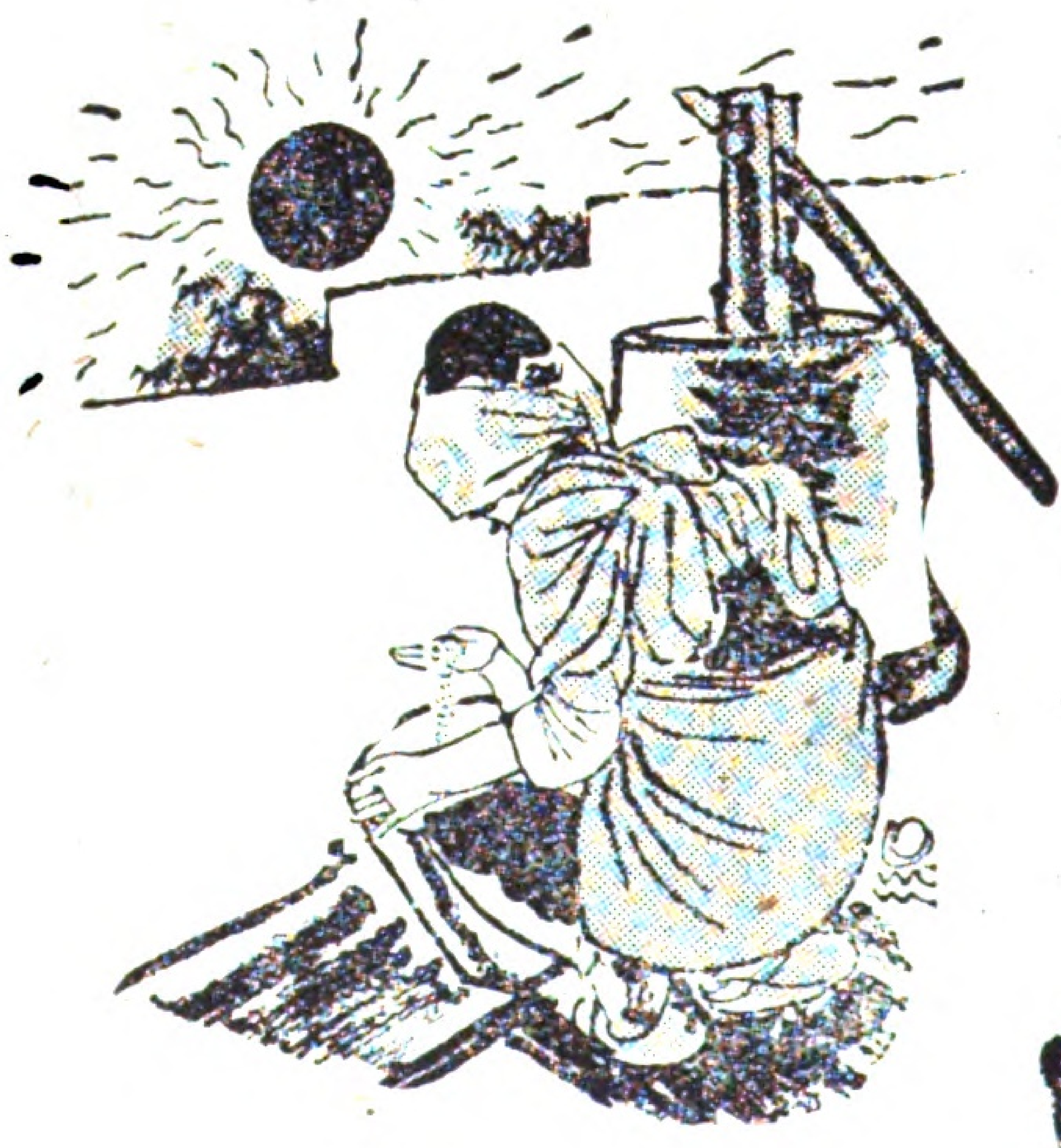
二　勤め先から歸つた時『お歸り遊ばせ』と女房に兩手を突かせるにはあまりに手不足な家庭だが、その代り女房の脫ぎ捨てた下駄が兩手つかへて出迎へてゐる、ずゐぶん朽ちてるが男下駄より色彩が有る、桐の臺を足の指と踵で黑く擦り穿つてゐるが之は俺の家庭に盡して吳れた功績の深さと色の濃さだ。



三　猛烈に夫婦相打ち相鬪かつたが幸ひにして颱風一過して後は光風霽月、すつかり心が打解けて女房が汲んで吳れた冷水一杯、これがたゞの冷水と違つて甘いのなんのつて……



四　動物園を見物した。鳥獣の雄は雌に較べて著しく美しい天然の飾りと美しい聲とを持つてゐた。同伴の夫を振り返つてみると、天然の青髯が男らしく青々と匂つてゐた。黒い髯が凛然と美しかつた、『やつぱり妾の美人より主人の好男子の方が級が上なのかしら』



五　うちの主人は働きが無い、晴着一枚活動一ツ見せて呉れる稼ぎが無いと罵るもの丶、今磨いでゐるこの米はみんな家の人が稼いで呉れたものだ。お米は一粒一粒綺麗に光つてゐる。何萬何千といふ無數のお米は一粒一粒寶玉のやうに光つてゐる。これはみんな家の人の玉の汗の結晶だ。



六　この彫刻はなるほど立派な彫刻だ。だが家の女房もこの彫刻同樣女性の立體美を具へてゐる筈だ。丸い乳房もありや丸い手足も有る。その女房は俺の持物だ、俺に授かつてゐる生きた彫刻だ。



壯絶快絶　猛獸を生擒にした痛快談

小山莊一郎
挿繪　齋藤五百枝

はしがき

獅子やゴリラのやうな兇猛な野獸を、唯一發でコロリと仕止めるといふのは、容易ならぬことだ。況んや、それを生擒るのを職業とするに至つては、全く超人的存在である。鋼のやうな膽ツ玉と、名人藝の技がなくては出來ぬ。

いふまでもなく、唯一發でコロリと參らせるのは、猛獸生擒家には大の禁物なのだ。だから、犀の子一匹擒へる爲に、熱帶の恐しい泥澤の邊で二ケ月も野宿するといふやうな、非常な忍耐と冒險を敢へてすることもある。そんな時には、目的が犀の子だから、その目的を邪魔するものは、虎でも野象でもライオンでも、目にも止らぬ早業でやつつけてしまふ。卽ち、猛獸獵家達の鼻高々と自慢する事柄も、猛獸生擒家にとつてはホンの朝飯前の藝當に過ぎないのだ。

だから、世界に猛獸獵家は多いが、猛獸生擒家は至つて少ない。そして猛獸獵家達は自分の冒險を喜んで語るが、猛獸生擒家はその素晴しい經驗を、職業上の

秘密として容易に人に話さない。これから私が話さうとするのは、歐洲第一の猛獸生捕家ジョーヂ・エム・ビスターニー君が、近頃珍しくも試みた打明け話で、奇絶！ また壯絶！ 眞に痛快淋漓な話である。

「鰐の故郷」へ

英吉利國立動物園の人氣者だつた大鰐が死んだ。

早速、然るべき後釜をと、歐羅巴及び亞米利加の猛獸仲買に檄を飛ばして物色したが、何しろ死んだ第一世は年齡百四十歳といふ素晴しい大物だつたので、それに劣らぬものは、とても仕入の鰐にはないことがわかつた。

『ぢや、仕方がない、金はいくら掛つてもいゝから、誰れか、猛獸生捕の專門家を原産地に派遣して、一つ、ド偉い本場物の大鰐を生捕つて來て貰ふんだな』

といふことになつた。

そこで白羽の矢が、曾つては猛獸獵家として勇名を謳はれ、今は、山猫、豹、虎、野象、犀、大猿等々の、生捕にも飼馴らしにも、歐洲の猛獸生捕家中で一頭地を拔く美須谷君に立つた。

『宜しい、實は退屈で困つてゐたところだ、早速出掛けよう』

と美須谷君は二つ返辭で引受けた。

この噂さが傳はると、今迄、欲しいものがあつても、自分で猛獸生捕家を原産地へ派遣することの出來なかつた諸國の動物園から、好い機とばかり、いろ〳〵な注文がくる。

『ついでに、私の所へ斑馬を一つ』

『私の所へは、例の一尺以上の大蝦蟆を』

『御面倒でも、是非ゴリラの兒をお願ひしたい、それも出來るなら、ゴリラの兒はとても育てにくいから、二三匹お願み致します』

といふ有樣。中には、

『御都合がついたら、印度からヒマラヤへ廻つていたゞけませんか、實は歐羅巴に珍らしいあのヒマラヤ熊が欲しいのですが……』

と、贅澤をいふものすらある仕末。

どうせ世界的の猛獸生捕の名人が、猛獸の巣へ飛び込むのだ、鰐一匹を生捕る位ぢや食ひ足らぬ。美須谷君はこれ等の注文を、出たとこ勝負として最後の責を負はずに引受け、若い猛獸獵家として令名のある愛弟子死門君と唯二人、英京倫敦を出發した。

向ふところは印度大半島の胴中に當るナーバダ大河の奧の奧、――俗に「鰐の故郷」と呼ばれ、處によつては「鰐が蛙ほどゐる」とさへいはれてゐる人外の魔境だ。



大草原の怪物

ナーバダ河の奧地は、アマゾンなぞと違つて、樹木の力は大したこともないが、雜草の繁茂振りが物凄い、高さ一丈を越すやうなのがベタ一面に密生してゐる。

しかも、この大象の背がたゝぬやうな大草原は、世界で一番猛烈で機敏な猛獸、ベンガル虎の領土なのだ。いや、虎ばかりぢやない、時には獅子も姿を見せる、また長さ三十尺を越す熱帶の名物、胴中一抱へ程の大蛇もゐる、いはゞ恐しい猛獸怪物の巣窟なのだ。

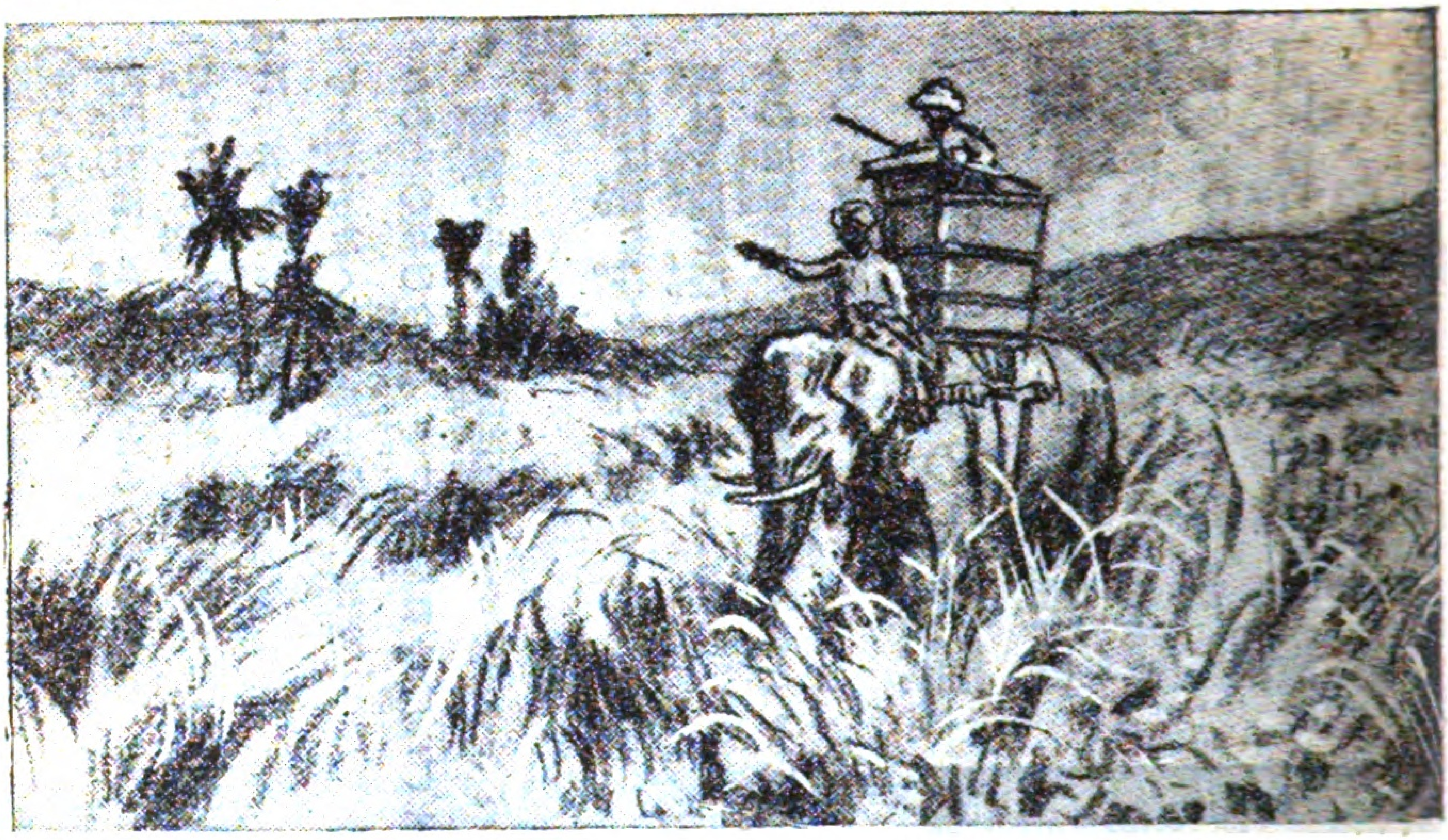
國を出て三ケ月半の後、漸くこのナーバダ河の奧地にやつて來た美須谷君と死門君は、直ちに猛獸狩りに經驗のある土人七人を助手に雇入れ、これもかういふ蠻地の旅行に馴れきつた四頭の象に分乘して、ナーバダ大河を河沿ひに奧へ奧へと突進した。かくて最後の土人部落、ホシヤンガバツドを後にすれば、これから先き東方三百餘哩は、人間が殆んど住んでゐないところ――

ホシヤンガバツドを出て三日目の朝のことだ。またもこの油斷も隙もならない、恐しい大草叢を越えねばならぬことになつた一行は、人も象もあらゆる音を忍んで突き進んだ、約半時間もして漸く通り越せさうになつた時、先頭を勤めてゐるとても悧巧な象の「黑」が、不意に歩みを止めた。

『素破！　ござんなれ！』

眼も速いが氣も捷やい、そして何ものでも銃殺するのがとても手つ取り早い死門君は、愛銃を取直して、大象の背中からチーツと前方を見透した。獅子？　虎？　いづれにせよ、唯一發のもとにやつつけてしまふ心算なのだ。

（普通なら、いくら音を忍んで歩いたにせよ、四頭の大象が行



列を組んで、ノソリ／＼と近づく音を聞きつけたら、大抵の猛獸は尻尾を捲いて逃げてしまふ筈だ。それを却つて象共が歩みを止めるといふのは餘程の剛敵に違ひない、それとも何か事情があるのか…）

異常に緊張して、あちらこちらを見廻してゐた死門君は、やがてギヨツとしたやうに、或一點を凝視した。

見よ！ 眼前十數歩の先、草の薄くなつた木の下で、珍無類な大手踊が演ぜられつゝあつた。

『成る程、これでは逃げようにも逃げられなかつた譯だ』

と、思はず死門君が口の中で呟いたも道理、「印度の偉大なる森林の猫」といはれてゐる――例の縞虎の、しかも六尺に餘る素晴しい奴が、大孔雀の片股を啣へて、振つて、振つて、振り捥ぎらうと、夢中になつて振り廻してゐるところだつた。

が、何といふ美しさだ！

さらぬだに綺麗な孔雀の羽毛は、熱帯の強い、明るい光線を受けて、五彩輝くばかりである。しかも、虎の振り廻すにつれて、右に左に、或は上に下に、舞ふが如く踊るが如く翻へる華やかさ。――そしてその度毎に、例へば麗しい飾り扇でも折り毀すやうに、孔雀の尾が揺れて亂れては、折れて散亂する。その眩さ！ その美しさ！ ……だが、それだけ一しほ、酷らしくも惨しくもある。

（それにしても、ものを捕つたら、風のやうに素早く啣へて逃げる印度虎が、何故いつ迄も愚圖々々と獲物を振つてばかりゐるのだらう。そして孔雀の方も、未だ確かに生きてゐるのに、何故少しも聲を立てないのであらう、それに頭も見えない）

餘りの不思議さに、射つことのとても早い流石の死門君も、銃を向けることさへ忘れて、なほも注意深く、凝つと見詰

めた。

（解つた！）

死門君は、危く叫ぶところだつた。

見えない筈だ！　孔雀の頭は疾うに呑まれてゐるのだ。——

では、呑んだ奴は何物？

いふ迄もなく、印度名物の大蛇だ！

この邊の草の色と、少しも違はぬ色をしてゐる大蛇、しかも、胴體の中ほどは醤油樽ほどもあらうといふ素晴しく大きな奴だ。

大蛇は首を呑んで引ツ張る。

虎は片股を啣へて打振る。

その度毎に、孔雀が身をもがく。と、その美しい翼が、キラ、キラ、パツと陽に輝く——

虎と大蛇の大決鬪

「黑」はかういふ場合には、人間以上に注意深い、場所馴れのした、とても賢い象である。

「黑」は自分の立つてゐる處は草が深く、今、虎と大蛇が戰つてゐる處は草の淺いことにチヤンと氣がついたらしく、彼は死門君ともう一人の土人ギーサを脊中に乘せたまゝ、丈餘の草の中へしやがんでしまつた。

と、あとの三頭の象もみなこれに倣つて蹲る。

「黑」がしやがんだのは、口にこそ出さないけれど、

（わたしが斯うして、草の中へ姿を隱してしまへば、蛇と虎とは戰ひを止めませんから、貴君方も草の中から、ゆつくり、上手に御見物なさい。そして好い時機を見計つて、鐵砲で御射ちなさい）

といふ、とても老巧な考へからやつたのである。

以心傳心、一行九人は顏見合せて肯き合ひつゝ、しやがんだ象の背からそうつと降り、てんでに前の方へやつて來て、巧みに體を草の中に隱しながら、眼前の珍光景を隙見し初めた。

今、孔雀の股を啣へて打振る縞虎が、孔雀の體の一部を、振



り切つて喰ひ裂き得たなら、恐らくはこの喧嘩は、それで兩方へ物分れになつたであらう。けれども、美しい羽根は散亂するが、活きてゐる孔雀の肉體は、流石の縞虎にも、容易くは喰ひ捩ぎることが出來なかつた。

さりとて、大蛇も、呑みかけた孔雀の頭を金輪際放すことではない。なほも執念深く、引ツ張り合ひ！

この勝負、いつ果つべくも見えなかつた。

突如！　眞に突如！　氣の早い虎は、ポイと咥へてゐた孔雀を放した。そして、

『ウオーツ！』と咆哮一番。

電光のやうに身を躍して、大蛇の咽喉を目がけて飛びついた。

（さてこそ！　勝負あり矣！）

と――思つたのは間違ひであつた。

流石は大蛇も曲者、胴體から上を異樣に波打たせたかと見てあれば、間一





髮、身を轉じて、虎の鋭い牙は空しく空を噛んでゐた。

それと殆ど一瞬！ 大蛇の胴から下は、尾の方から烈しい音をたて、虎の體へ殺到する。立直るひまも、身をかはすすきもない、見る間に虎の胴から肩へかけてグルリ一卷き、ハッと思ふ間に、初めの比較的細い一卷が、見る見る中に太く太く變つて行つて、直ぐに三卷半になつたかと思ふと、ボンと虎の眼玉が兩方共飛び出してしまつた。

と、虎の鼻と口からカーッと鮮血！

餘りの早業に、流石の縞虎も聲も立て得ずに參つてしまつたのだ。

大蛇の放れ業

やがて勝ち誇つた大蛇は、縞虎の全く息の絶えたのを見濟まして 虎の胴締を解いた。胴締めの解けたあとの虎の胴は、宛ら瓢簞の括れのやうに細くなつてゐた。てもさても物凄い怪力ではある。



『今だ！ 射つなら今だ！』

然り絶好の機會だ！ 死門君は、草原の中からその愛銃を取りあげた。そして唯一發とばかり、大蛇の鎌首目がけて狙ひをつける。

と、美須谷君は、はやる愛弟子の耳に口をつけて低く囁いた。

『虎の敵を討つてやつても無駄だよ、默つてもう少し見てゐたまへ。面白いことが始まるから……』

『でも、まさか、胴體こそ太いけれど、漸く握り拳位のあの首の細さでは、とても縞虎を吞むことは出來ますまい』

言はるゝまゝに素直に銃を下ろしながらも、死門君は如何にも不審さう。

『いや、何とも言へない、僕は一昨年、やつぱりこの印度半島の東部で、牝鹿を丸吞みにしてゐる大蛇を射止めたことがあるが、とても素晴しい放れ業を演ずるよ。一體、大蛇といふ奴は、自分でこりや吞めるなと見込みをつけなけりや、決して締め殺さないさうだからね。まあ、どんなことをするか、此處からそうつと、見物してゐようぢやないか』

一同肯きあつて、なほもヂーッと見物する。

と、大蛇は吞みかけてゐた孔雀を吐き出した。さりとは貪慾な奴！ あんな危急の際にも、吞みかけてゐた孔雀を今までその儘にしてゐたのだ。――が、或は、戰ひが餘りに電光石火的に變化したので、吐き出す暇がなかつたのかもしれない。

やがて大蛇は、その美しく光る尻尾で、虎の死體を二度も三度もひつくり返して、確かに死に切つてゐるのを見屆けてから、虎の頭のところへ、自分の鎌首を持つて行つた。案に違はず、虎の頭から吞みかけようとするらしい。

が、それにしても、あの大きな虎の頭を如何して吞むのだらう、そして、あの突張つた虎の兩手、兩足を如何處置するか――

みんなは、片唾を吞んで眼を睜はる。

意外！ 大蛇は直ちに虎の頭を吞みこむ代りに、死んだ虎の

緊と結んでゐる口をあけて、無理矢理その鎌首を突込んだ。そして、稍々暫くヂッとしてゐる。

ケタ〳〵と低い舌の音。

さてこそ、大蛇の奴！　虎の生き血を吸つてゐるのだ！

さしも剛膽な死門君も、こんなことが初めてなだけ、思はずブルッと寒氣を感じた。

しばらくしてから、ヌーッと虎の口から脱け出した大蛇の鎌首は、果して血みどろだつた。

その血みどろの鎌首に、爛々と光る二ツ眼、ジロリジロリと四邊を睨め廻はす。

と、忽ち、二尺ほど地面から擡ちあがつたかと思ふと、一行九人がひそんでゐる方へ目がけて、スーッと向つて來る。

（さては感づいたか）

覺えずドキッとした死門君は、またも銃をとつて身構へる。と、美須谷君が慌てゝ引き止めた。



「愈々これからが面白いのだよ、射つては萬事お仕舞ひになる」

その聲の終るか終らぬのに、もう虎の死體は殆ど見えなくなつてゐた。といふのは、早くも身を飜した大蛇が、恐しい速さで虎の體全體を、その三十尺からの長い體で、一寸の餘地もないやうにグル〳〵巻きにしたのであつた。

と、ギウーギウーと締めつける。その度毎にボキ、ボキッと虎の骨の砕ける音。恐しい力だ！　やがて再び大蛇が身を解いた時には、虎の骨といふ骨は悉く折れ挫けて、全身綿のやうにグタ〳〵になつてゐた。

してやつたりと大蛇は、如何にも落着き拂つて、虎を呑みはじめた。

が、これがまた素晴しい放れ業だ。いくら綿のやうになつたとはいへ虎は虎だ、もとより拳大とも見える大蛇の細首を、容易すく通りさうもないのに、口を喉まで開けてゴクッゴクッと呑んでゆく。が、無理は矢張無理だ、大蛇の口は裂けて血がポタリ



ボタリと滴り落ちてゐる。が、何といふ貪慾さであらう、大蛇は一向平氣で、丁度大きな足で、堅い靴足袋を穿いてでも行くやうに、依然、無理呑みに呑みこんでゆく。

斯ういふことは、生れてはじめての死門君は、唯驚きあきれて眼を瞠るばかりで、言葉も出ない。

人間と大蛇

『君！ こん度こそ感心してゐる時ではないよ。虎一匹丸呑といふ大御馳走に腹一杯になつちまつたら、大蛇先生、もう此處に用はなくなるから、左樣ならとも言はずにスーッと行つてしまふ。――けれども、今、君の一發で射殺したんぢや、猛獸生擒家としてはつまらない。……僕がこれから出掛けて行つて、一寸大蛇先生をお引止め申して來るから、見物して居給へ』

美須谷君はこともなげに斯ういふと、直ちに大草原の隱れ場所から、飛び出さうとした。

『いけません、虎さへ苦もなくやられる代物に、人間が直かに向ふなんて、無暴極まる』

死門君は、吃驚して引止めた。

『安心し給へ。僕は虎より智恵がある。いきなりあの大蛇の咽喉首へ飛びつくやうな愚はせんよ。これでキット先生を御引き止め申して見せるから』

美須谷君は、その逞しい右の手をぐつと死門君の前にさし出した。その手には、猛獸生擒家にとつては大切な武器、ラッソ捕繩を一たぐり握つてゐた。

ラッソ捕繩とは、カチ、カチに堅撚りにした、長さ二十尺から三十尺内外ぐらゐ迄ある、丈夫な細繩である。これを遠くから逃げる猛獸に追ひ縋つて、輪投げ式に猛獸の首ッ玉なぞへ投げかける――と、猛獸はそのワナになつてゐる綱の端に引つかかつたが最後、逃げれば逃げるほど、自身の力でその綱に締め括られてしまふ。いはゞ、このラッソ捕繩を使ふ巧拙が、猛獸生擒家の價値をきめるやうなものなのだ。

美須谷君が、世界で有數なラッソ捕繩の使ひ手であることを、知り拔いてゐる死門君は、遂にニッコリした。

『だが、細繩で搦め擒るにや――少し相手が大き過ぎますなあ――』

『ナアに大丈夫、見て居給へ』

さう言ひ捨てるや、唯一人草原から美須谷君が飛び出した。

と、サッと空中に跳るラッソ捕繩の輪！

實に見事な繩捌きだ。今、虎を一匹呑み終はつて、一息入れてゐる大蛇の鎌首を中心に、パッサリ落ちたのである。

してやつたりと美須谷君は、直ちにラッソ捕繩を左手に持ちかへ、右の手をポケットに突込んで取出したのは、最新式のブロ

ーニング短銃。狙ひもせずに拜み射ちー
ドンと一發！　確かに命中。
驚いたのは大蛇だ。思ひもよらぬ人間の襲撃に、すつかり慌てゝ三十餘尺の胴體をデングリ返して逃げ出した。が、ドツコイさうはゆかぬ。

美須谷君が短銃で、態と大蛇の頭を射たずに、外れつこの無い胴體を射抜いたのは、膽を潰して逃げる力を利用して、大蛇の咽喉首をラツソ捕縄でグーツと締めつけようといふ作戰なのだ。

忽ち、ラツソ捕縄がピンと張ると、大蛇は首を締めつけられて、再びデングリ返つた。

『旨い！』

餘りに見事な美須谷君の手際に、草原の八人は、吾事なれりとばかり飛び出さうとした、と、美須谷君は、

『危い！』

と呶鳴りつける。

それと同時に、自身もどうしたのか、颯つと地面から二尺餘りも空へ飛び上つた。

間一髪！　その飛び上つた美須谷君の足の下を、とても猛烈な勢ひで、横なぐりに打拂つて行つたものがある。

それは大蛇の尾であつた。

危い、危い、本當に危かつた。美須谷君が今ぼんやりしてゐたら、丁度、先刻の虎のやうに、一遍に薙ぎ倒されて、死物狂ひの大蛇に、グル／＼巻きにされて巻き殺されるところだつたのだ。

『足手纏ひだ！　いゝといふ迄出ちやいかん』

美須谷君は、なほも猛烈に反撃する大蛇の尾を巧みに避けながら、仲間の者に注意した。

首こそ捕縄で括られてゐるものの、そんなことで容易く弱るやうな大蛇ではない、のたうち廻つて暴れに暴れる。

が、美須谷君もさるもの、その猛烈な大蛇の反撃を、或は飛燕の如く鋭く、また胡蝶のやうな柔さを以て、右と左に逃げ廻りながらも、ラツソ捕縄を一杯に張つて、分厘の隙も緩みも與へず、グイ、グイ、ダイと引き絞る。

その勇ましさ！　その危ふさ！（つゞく）

壯絶！　快絶！　何んたる痛快無比の大場面、大冒險であらう!!
獰猛恐るべきこの大蛇を美須谷君は如何にして生擒るであらうか？
今や危機一髪、のるか反るかの瀬戸際！
本號は僅にその序幕戰、以下心魂を寒からしむる驚天動地の活場面は快男兒美須谷君の大飛躍と共に、いよ／＼悲壯凜烈の度を増し、息づまる如き興味に何人の血をも湧かしめねば措かないであらう！　次號を待て!!



出世力士 越の海勇藏

田邊南龍
挿繪 井川洗厓

荷物が歩く

越後國高田の在今町、現今の直江津でございますが、こゝで江戸相撲柏戸宗五郎が、初日を取り、宿へ歸つた所へ、訪れたのが、十七八の身丈の小さい元氣者、むつくり肥えて愛嬌のある顏をしてゐます。

若『お關取、私は相撲が大好きだ。お弟子にして吳れませんか。歸る時に連れて行つて下さいな』宗『アハヽヽ、肥つてゐゝ身體のやうだが、如何にも身丈がちつこい。それぢやア力士になれないぞ。まアよせ』若『そんなことを言はないで、力があるから弟子にしてお吳んなさいよ。どんな辛抱でもするからね。えゝ關取』宗『さうか。小人島の大關位にはなれよう。ああよし〳〵』若『弟子にして下さいますね』宗『あゝよし〳〵』笑つて奧へはいつてゆく。若者は喜んで、バラ〳〵と駈けて行つてしまつた。

さて晴天三日の興行、大當りでいよ〳〵打揚げ。力士、年寄、行司、呼出、皆荷造りをして宿々を出立する。中に柏戸の弟子達も荷物を擔いで柏戸を中央に出掛ける所へ例の若者、包を脊負つて駈け付けた。

若『關取、豫ての約束、お弟子にして連れて行つて下さい。御主人にお暇を貰つて、この通り荷拵へして來ました。さア連れて行つて下さい』宗『おい〳〵、弟子にした覺えはないぞ。そんな小さい身丈をして、駄目だい』若『あれ、此間弟子にして吳れといつたら、よし〳〵と二度も三度も承知しておいて、今になつてそんなこと言つても駄目だ。相撲取は噓をつくものかい』宗『お前、どこの者だ』若『越後屋又兵衛といふ酒屋の若者勇藏といふんだ』宗『そんなら越後屋さんに會つて詫びをしてやる。元の通り奉公しろ』勇『駄目だ。旦那が止めたが、どうし

ても力士になると強情張つたもんだから、さう云ふのなら力士になれ、立派な力士になつたら出入をさしてやる、さもなければ敷居を跨がせねえと、突出されて來たんだ。どうしても弟子にしておくれ。約束したんぢやないか』宗『困るなア、親父と阿母に會つて話をしよう』勇『兩親はないよ』宗『兄弟は』勇『何もないよ。獨り者だい』宗『ウーム』勇『弟子にしてくれなきやア死んでしまふ』宗『困らせるなア』時に弟子の柏山が、

柏『關取、うつかり冗談は言はぬもんぢや。かう覺悟して來たのぢやから、二日か三日か連れて行つてやんなさい。その中に途中で飽きて歸りたくなるだらう。私が御主人方へ送つて詫びてやりませう』と云ふので、宗『さうか……では來いよ』と、とうとう承知してしまつた。

勇『あゝ有難う。皆さん、頼みますぞ』弟『汝ア幾つだ』勇『十八』弟『フヽン、小さいな』勇『小さい〱といふなよ。皆さん、身丈は小さくても、力があつて手を覺えりやア、力士になれないこともあるまい』宗『生意氣な野郎だなア。おい、重い物を澤山持たせろ、小言をいつて弱らせてやりやア、斷念めて歸りたがるだらう』關取の命令だといふので、他の弟子達は、

○『勇藏、これを背負つて行け』△『勇藏、俺のも擔いで行け』□『勇藏、この藥箱も腰へさげて行け』いろ〱な品物を預ける。まるで荷物が歩いて居るやう。ノツソ〱と、山のやうに、品物を負はされて平氣で歩く。二日三日と宿を重ねるに辛いやうに〱大勢が仕向ける。だが、涙一滴零さない。はいはいと溫和しく隨いて來る。飽きさうにもしない。

宗『柏山、野郎、江戸まで來るぞ。厄介ぢやなア』柏『はい、でも可哀相だ。江戸見物でもさして返してやりませうよ』宗『さうかい』

江戸へ着いて、淺草元鳥越の柏戸の家へ戻る。女房が呆れて、

女『關取、こんな小さい者を弟子にすることがありますか。馬鹿馬鹿しい。何故斷らないの』宗『ウム、瓢簞から駒が出ると云ふことぢや。俺がうつかり弟子にしてやるといつたものだから、何處までもその言葉根を捉まへて、とうとう江戸までついて來をつたよ。まア旨い物でも食はして賑やかな所を見物させて、小遣ひ持たしてかへしてやらう』

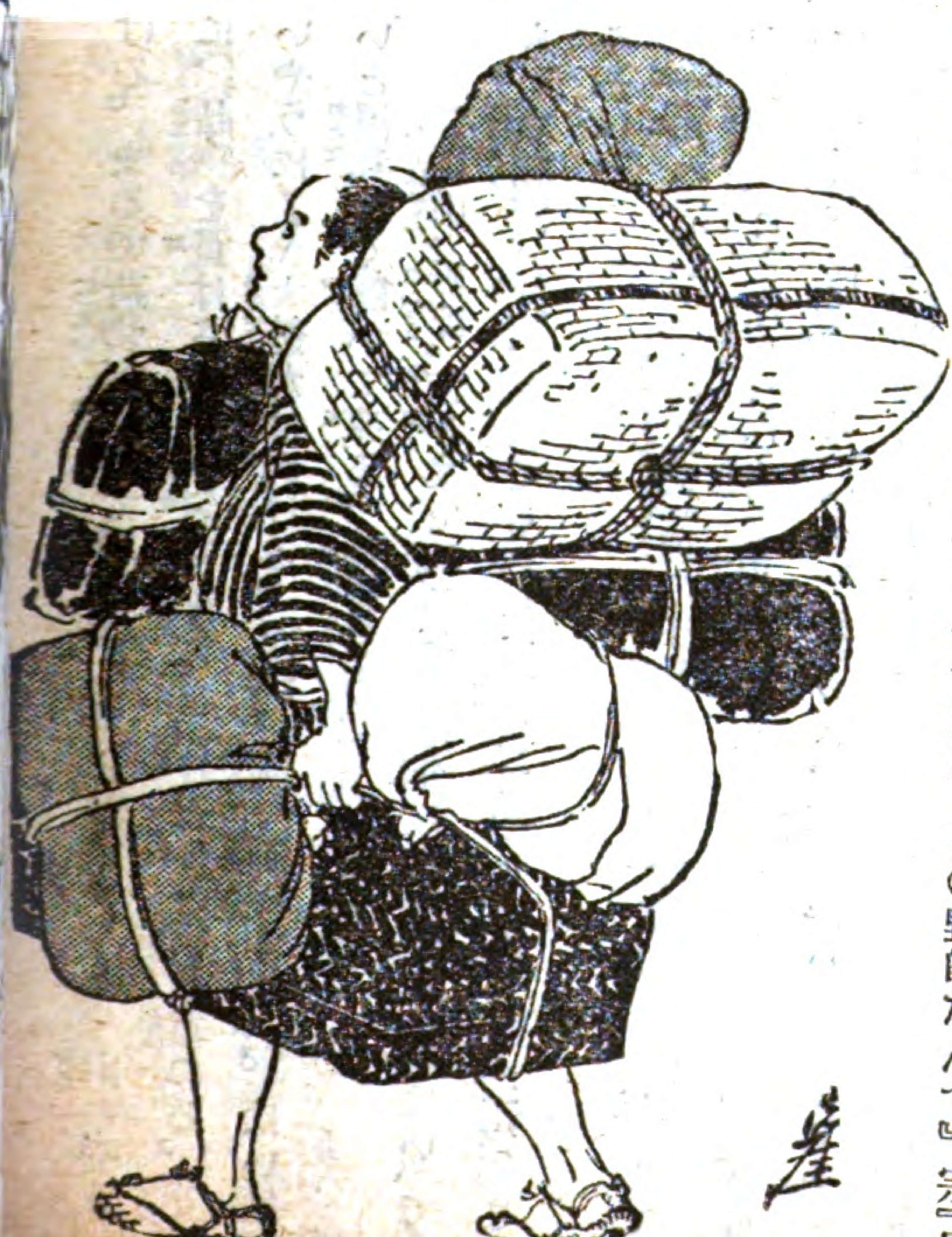
芝神明の本場所がもう直ぐ迫つてゐるから、柏戸の弟子は猛烈な稽古を續けてゐる。それを見た勇藏、勇み立ち、勇『關取、師匠さん、わしにも稽古をつけて下さい』宗『駄目だい。そんな身體をして。なにツ力がある。幾らあるものかい。俺の眼に適ひはない。力士になれぬ者に稽古をするのは無駄ぢや。なまじ汝が斷念めることが出來なくなるといかんから、まアよせ。見物さして國へかへしてやる。綺麗な着物をこしらへてやるぞ。

小遣ひもやるぞ。断念めろい』

勇『綺麗な着物は要りません。お小遣ひも要らないから、何でも力士にして下さい』宗『困らせるなア。よし〱……野郎共、勇藏に稽古をつけちやアならんぞ』弟『はい』土俵に下りて稽古を頼まうとするが、誰も受付けない。仕方がなく、ぢつと見てゐるばかり。

出世褌を貰ふ

關取が外出した後、女房も留守。勇藏は柏戸の部屋をせつせと掃除して、大きな座蒲團の上にドツカリ坐り、勇『いゝなア、家のお師匠さんのやうな身分になると。幕の内のなかでもパリパリで、而も小結。あゝ羨ましいなア。かうなりたいなア。野郎共、野郎共、さういつて威張つても、皆へい〱してゐる。關取々々といはれて、縮緬の着物を着て、立派な脇差をさして。あゝ羨ましいなア。勇藏、勇藏、野郎共……こんな聲でよぶんだ。師匠さんの聲に似てるだらう。勇藏……』別の座敷で、これを聞いた弟子の一人、弟『あい、關取、何か御用ですか。勇藏々々と呼んでゐなさるが、勇藏の野郎、何處かへ行つたとみえて、見えませんよ』勇『アハヽヽヽ、あんなことをいつてやがらア。俺が師匠さんの聲色を使つてゐるのを、師匠さんと間違へてゐやがる。彼奴はよく俺を虐めるぞ。師匠さんの聲色を使つてやらう……野郎、勇藏は居ないか。勇藏はな』弟『はい』勇『今に立派な關取になる見込のある奴だぞ』弟『はい』勇『身丈は小さいが、馬鹿にするない』弟『はい』勇『可愛がつてやれよ』弟『はい』勇『旨い物を食はせてやれよ』弟『はい。關取は馬鹿に勇藏を贔屓にするなア』で、サラリと障子を開けた。弟『この馬鹿野郎、關取の聲色を使ひやアがつて、この野郎奴』ポカ〱ッ。勇『あ痛え痛え。御免なさいよ』所へ柏戸が歸つて來た。宗『何してゐる』弟『はい、關取の聲色を使ひやアがつて、私は關取と間違へて、はい〱云つたら、この野郎なんで』宗『馬



鹿な野郎だな。アハヽヽヽ可笑しなことばかりしをるわい』勇『エヽ關取、お歸りなさいまし。肩を叩きませうか』宗『ウム、叩いてくれい。えらく肩が張る』後へ廻つて、コト〳〵叩いたり揉んだり御機嫌を取る。

宗『あゝ、勇藏、汝、小ッこいから、力士にはなれんが、その調子はうまいものだ。勇藏や、力士をあきらめて、導引揉療治になれ。按摩になれ』勇『力士にならうと云ふ者を、按摩になれ揉療治になれとはあんまり違ひ過ぎる。そんなことを言はないで、關取、折角弟子にしたもんだから、稽古をつけて下さいよ』宗『駄目ぢや〳〵』コト〳〵、コト〳〵。勇『どうです。効きますか』宗『ウーム』コト〳〵、コト〳〵。勇『どのくらゐ力があつたら力士になれませう』宗『迚もそんな小力ぢやア駄目だい』勇『關取、私は褌がないが、せめて皆さんのやうに褌の一本も欲しい。あの幅の廣い太い犢鼻褌をくれませんか』宗『よし〳〵。故郷へ今にかへす男だが、せめて取褌ぐらゐは一本やらうかなう。可哀相な奴ぢや』柏戸は立上り、戸棚の中から葛籠を出して、その中より選み出した一筋の褌。宗『ホラ、是は俺がな、若い時に締めたのぢや。久しう藏つ



てあつた。それ、柏戸と書いてあるだらう。この褌を汝にやる』勇『あゝ有難う存じます。關取の出世褌ですね』宗『ウム、さうだ』勇『こりやア嬉しいなア』推戴いて次の室へはいると、裸になつてこれをしつかりと締め、やがて稽古場へおりて

來た。

勇『さア兄弟子關取から褌を貰つた。稽古をつけて下さい』

汐『駄目だ〳〵』何と言つても稽古をしてくれぬ。勇藏はがつかりした。

そのうちに芝の神明樣、晴天十日の興行の初日となつた。昔は兩國、神田の明神、深川八幡、芝神明、皆本場所に用ゐたものでございます。柏山利助は大勢の弟弟子を從へて、まだ暗いうちから家を出る。

あとで師匠の柏戶。宗『勇藏』勇『はい、關取さん、何です』宗『汝ア今日留守をしてをれ。柏山が若い者を連れて出掛けたやうぢや。俺は御贔屓の旦那樣の所を二三軒廻つて場所入をする。よく留守居をしてをれ』勇『そりや情ないなア。お供をさして下さい。留守はお內儀さんや女中さんがゐるぢやアありませんか』宗『いや、駄目だ。汝も留守居ぢや。なまじひ本場所を見せると、却つて爲めにならぬ。家に居れと言つたらをれ』勇『さうですかい』宗『おい、おかねよ。勇藏を外へ出すなよ』內『はい、畏まりました』そのまゝ柏戶は出て行く。後姿を凝視めて嘆息をした勇藏、

勇『あゝ情ないなア。本場所を見る事も出來ずに、何で故郷の越後へ歸れよう。よし、お內儀さんに內密で、そツと裏口から逃げ出し、遠くは行くまい、柏山關の跡を追駈け、あの人は優しい人情のある人だ、賴んで場所を見せて貰はう』と、支度をして、

勇『みんな化粧褌の入つた長い葛籠を擔いで行く。何も持たずに行くと力士のやうでないから、俺も何か擔いで行かう』

不圖思ひ當つた兄弟子の寢卷十三枚、長く疊んで風呂敷に包み、貰つた褌を懷へ入れ、背が低い、小つこい〳〵と笑はれるから、高足駄を穿いてお內儀さんの目を忍んで、そツと裏口から飛び出した。

これからトツ〳〵トツ〳〵と柏山の跡を追ひかけたが、間もなく追付いた。だが、歸れと云はれるのが辛いから、默つて後から隨いて行く。京橋を渡り新橋の詰へ來た時に、此邊なら大分離れてゐるから、元鳥越の家へ戻れとは言ふまいと、思ひ切つて大聲に、

勇『柏山關イ、今參りましたよ』柏『エツ誰ぢや。ヤア勇藏、何しに來た』勇『はい、場所を見さして下さいまし』柏『ウム、師匠さんが許した譯ぢやアあるまいな』勇『はい、二三軒御贔屓のお客樣の所を廻つて場所入をする、汝はしつかり留守居をしろといはれました』柏『そんなら何故家にをらぬ』勇『柏山關、考へて下さい。越後の高田の在からお供をして來て、稽古は一遍もつけてくれず、本場所さへ見ることはならぬとはあんまり悲しい。斷念めて歸りますが、せめて本場所だけ見せて下さい

な。それでなきやア歸りません。頼みます。貴方は優しい人だ。情のある兄弟子ぢや。どうぞお願ひ申します』ボロ〳〵泣き出した。貰ひ泣きをした柏山、

柏『あゝ可哀相な奴ぢや。憫然な奴ぢや。關取が冗談に請合つたから惡いのぢや。よし、師匠さんに叱られてもいゝ。連れて行つてはやるけれども、その代り本場所を見たら、それを諦めとして國へ歸れよ。よいか』勇『はい、戻ります』柏『ウム、そんなら來い……待て〳〵。その扮裝はどうしたんぢや。何だつて高足駄を穿いてるんだい』勇『はい、歸りに雨が降るといけないから……』柏『馬鹿野郎、晴天十日の興行に、初日から雨に降られてたまるかい縁起の惡いことを言ふ奴ぢや』勇『はい』柏『何を擔いでるんだい』勇『へえ、何も持たないと、お相撲の弟子のやうでなくてみつともないから、兄弟子の寢卷を十三枚擔いで來ました』柏『いよ〳〵いやな奴ぢやなア。雨が降るの寢卷だのと、相撲には寢るといふ言葉は嬉しくないぞ』勇『はい』柏『人がきいたら、寢卷だなんと言ふな』勇『はい、それぢや起卷といひませうか』柏『ハヽヽ、下らぬことばかり言ふ。さア來い』勇『はい、皆さん頼みます』○『フヽン、厄介な野郎が附いて來やがつたなア。馬鹿野郎、河童野郎』皆に惡く言はれながらスタスタ供をする。

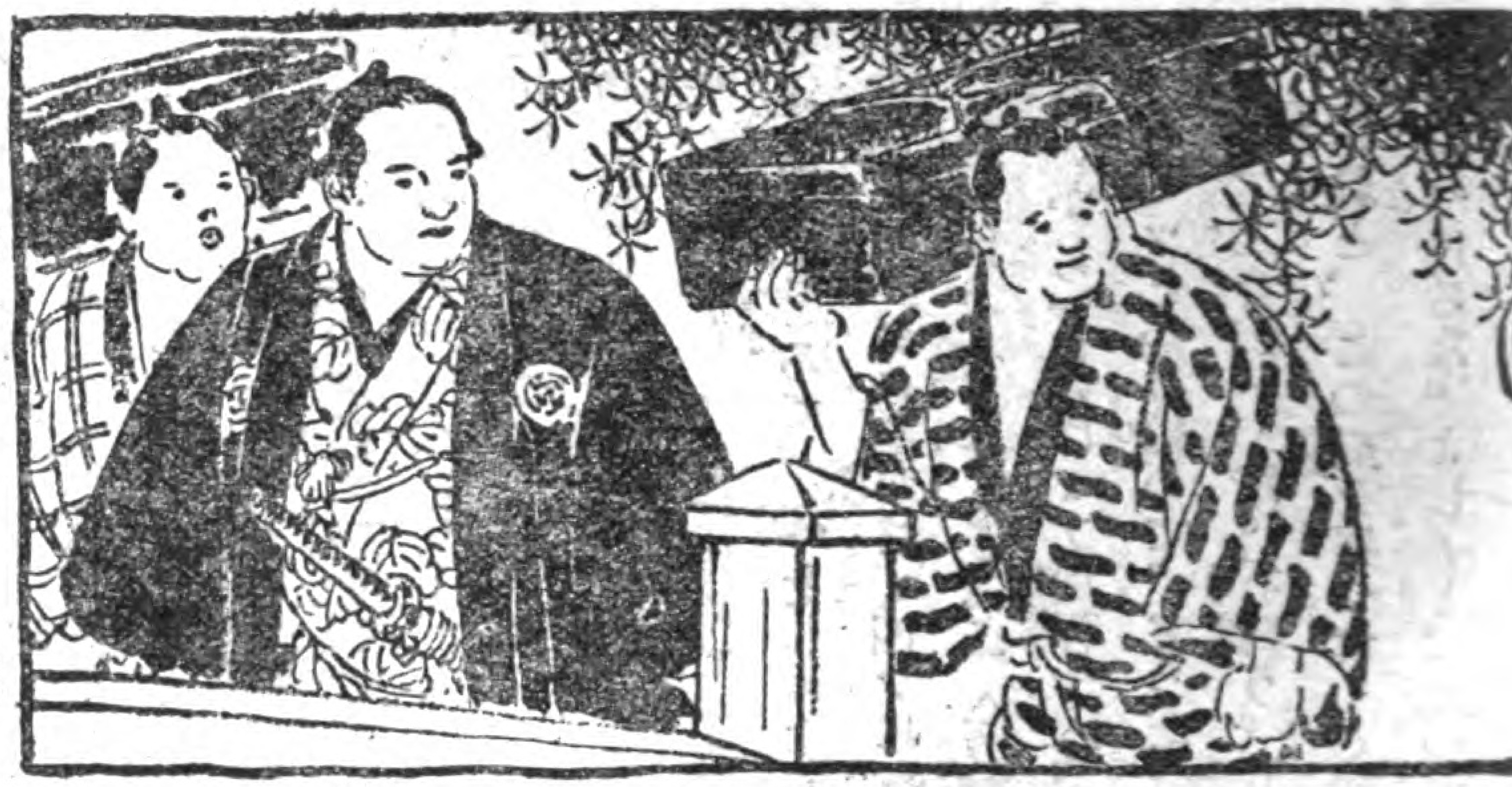


柏『おい勇藏、場所が近くなつた。親方衆に會つても、行司衆に會つても、關取衆に會つても、柏戸の弟子だといふな。そんな小さい者を弟子にしたと言はれては、師匠さんの恥ぢや。默つてろ』勇『はい』柏『たゞ見物して居れ』勇『はい、宜しうございます』太鼓の音を聞いては、もう胸を躍らせてをります。

名無しの力士

やがて例の褌を支度部屋に置いて、見物の中にもぐり、
勇『御免なさい〳〵。前へ出して下さい。脊が低いから、前の方へ出して下さい』グン〳〵グン〳〵進んで行く。まだ早いのにもう八分の觀客、尚ほ後から後から〳〵客は押掛けて來る。
勇『あゝ本場所は大層なものだなア。廣いなア。故郷の今町の、時々掛かる相撲だけぢやア詰らない。本場所を早く見たいと思つたが、これ程ぢやアないと思つた。あゝ有難い』ヨイショ〳〵と云ふ聲がする。土俵の上を見れば、當時日の下開山で横綱免許、日本無双の名力士といふ噂を取りました谷風梶之助が、土俵の眞ン中に立つて十人掛り、十人の飛付を朝の間に始めたのでございます。大阪興行の時に、谷風は五人掛り五人飛付をして、名高い話を殘しましたが、江戸の本場所、初日に十人掛りをしたのは、實に珍らしいことでございます。

二段目の最も強い猛烈な豪勇力士を十人土俵に並べ、これが更る更る谷風を目がけて飛付いて掛かります。ヨイショ、ドシン、ヨイショ、ゴロリ、見事に投げる、倒れた者が砂を拂つてイヤードシンと又打つ突かる。ヨイショ、ゴロリ、ドシン、鞠を投げるが如くに左右へ投げる。その見事なこと鮮かなこと、多くの見物は手に汗を握り、醉へるが如くになつて見惚れてゐる。勇藏、我を忘れて、
勇『偉いッ。恐ろしい強い力士だなア。もういゝ年輩だが、どうだい、アラ〳〵又倒した。大きな身體であんな腹をして、コロコロ倒れらア、おゝえらいなア。この力士は強いぞ。こんないゝ力士は高田の今町へ來たことはねえ。併し俺なら負けねえ



な。アッやられた。アッ打ツかつた。アッ尻餅をついた。アハヽヽ、まだ朝飯前かな。あんまり負けやうがひどいなア』〇『やい〱默つとれ。餘計なことを言ひやアがるな。靜かにしろい』勇『へい』〇『へいぢやねえや。毆るぞ。愚圖々々言ひやがつて。默つて見てろ』勇『はい……アッ又倒れた。アッ又』〇『蒼蠅えな。撮み出すぞ』勇『へえ、御免なさい……アラ〱、アラ、強い綺麗な身體の力士だなア。手も綺麗だが、身體も綺麗だ。肥つてるなア。いゝ顔をしてるぜ』〇『喧ましいな、この野郎』△『もしもし、お客様方の邪魔になるから、默つて見てゐなさいよ』勇『へえ』

肩を叩かれて優く制されたので、勇藏が振返へると、色の白い脊の高い黒羽二重の紋付の衣類に正博多の帶を締めた立派な人。

勇『へい、御免なさい。お前さんのやうに優く言はれると、思はず頭がさがる。他の人達のやうにあんな惡口を言はれると、つい此方も憤然とするね。へいもう喋べりませんから、御免なさい』△『アハヽヽ、靜かに見てお出でなさいよ』勇『へい、有難うございます。少々伺ひますがね、あの強い力士は、一人の方は何と云ふんです。十人の力に向つて戰つた人……』△『あの關取を知らないかい。谷風關ぢやよ』勇『谷風。あゝ、それぢやア横綱の谷風梶之助といふ關取はあの人か』△『ウム、さうだ』勇『あゝ強い譯だなア。日本一のお力士だね』△『まアさうだね』勇『へーえ……もし私は彼處へ出て谷風關と相撲を取つて見たいんだが、いけないかね』△『えッ、素人は出られませんよ』勇『素人ぢやないよ。私は力士ですよ』△『力士、お前が』勇『えゝ』△『どこの部屋だい』勇『柏戸宗五郎の部屋の者ですよ』△『フム、何といふんだ』勇『勇藏といふんです』△『いや、相撲の名は』勇『相撲の名はまだ關取が付けてくれないんで』△『名無しでは困るなア』懐から貰つた褌を出して、

勇『旦那樣、この通り柏戸と書いてありませう、師匠さんが若い時の出世の褌だといふてくれたんです。これが何より證據ですよ』△『フム、稽古は餘程つけたか。どの位稽古をして

習つたな』勇『いゝえ、一遍もまだ稽古を受けないんです』△『そりや無理だなア。名もない力士が、谷風關の向ふへは廻れないぞ』勇『私は越後の生れだから、越後の勇藏として出たいなア』△『越後の謙信といふのはあるが、越後の勇藏とは初めてだ。それもよからう。關取は如何なる人にでも稽古をつけて下さる。相手をして下さる。裸になつて、締込をして、あれへ上つてお辭儀をして、ドン〳〵と關取の胸に打ッ突かりなさい。コロリと倒されたら自分の身體に附いた砂を拂つて、又向ひなさい。彼方樣の身體に砂をつけては惡いから』勇『エ、倒れないから大丈夫だ』△『おや〳〵、お前は正氣かい』と云ふうちに勇藏は裸になつて

勇『御深切ついでに、貴方、この褌を締めつけてくれませんか』△『よし〳〵。では締めてやる。もつと腹を凹ましなさい』勇『はい』ところで、褌をしめながら、かの人物、懷中から半紙を出して、これを小さく四ツに疊んで肛門へ當てる。

勇『おや〳〵、何をするんで』△『餘りいきんで、粗相するといけないから』勇『はゝア成程』△『それ、もう少し腹を凹まして。ギユッとかう締めて。どうだ。いゝ心持だらう』勇『へえ、こりやア工合がいゝな。有難う。旦那、濟みませんが、私の着物と下駄と、この扇を持つてゝくれませんか』△『厄介なことを言ひつけるな。よし〳〵、預つておいてやる』勇『有難う。ちやア彼處へ出て、默つてお辭儀をして打ッ突かればいゝんだね』△『さうだ』勇『貴方は相撲のことが詳しいが、何稼業です』△『アハヽ、私は行司の木村庄之助だよ』勇『アッ、行司木村庄之助てえと、可なりの所だね』庄『何だ。可なりな所てえのは』

世の中にはひどい力士もあるもので、立行司の木村庄之助に汚い衣服と下駄を持たせて、平氣で土俵へ上つた。

横綱を負かす

イヤー、ドシン、ドシン、續いて掛かる二人の力士を更る代る投げて、今しも谷風、一足體を退つたる所へ韋駄天のやうに驅け上つた勇藏、全身の力を籠めてドシンと打つ突かつた。脊の低い勇藏は、谷風の胸まで額が屆かず、臍へ打ッ突かつた。怪力無双の小男に頭を打附けられ、さしもの谷風、ヨロ〳〵と後へ退り、

谷『おい、ちよつと待つてくれ』勇『へい』谷『今、俺の腹へ打ッ突かつたのは誰ぢやい』勇『ヘッ、こゝにゐます。私ですよ』谷『ホウ、小つこいなア。汝か』勇『はい』谷『見馴れぬ男ぢや、どこの部屋の者ぢや』勇『へえ、柏戸宗五郎の部屋です』谷『何といふ名ぢや』勇『へえ、名はまだないんです。只の勇藏』谷『只の勇藏』勇『へえ、勇藏てえんです』谷『フヽン』勇『師匠さん

か、身丈が小さいから、少しぐらゐ力があつても力士にはなれぬ、よせ〳〵といはれます。本場所を連れて行つて見せて下さいと、兄弟子に賴んで見に來ました。さうしたら、日本一の關取が皆さんを投げてゐる。取りたくなつたから、行司の木村庄之助に……』谷『何だい、木村庄之助とは』勇『へい、木村庄之助さんに着物と下駄を預けて、今敎はつてこゝへ上つたんです。一度打ツ突かつたんですよ。日本一のお關取に相手をして貰へば、わしはもう死んでもいゝんです。故鄉へ歸りますよ。可哀相だと思つて、五六度相手をして下さいな』谷『ウーム、幾つだ』勇『十八です』谷『フム、よし、打ツ突かつて來う。しつかり來う』勇『はい』アラ、、、力聲を揚げてドシン。谷『野郎、待て』勇『へい』谷『ウーム、偉い力ぢやなア』勇『關取、野郎待てはなしにして、やつておくんなさいよ。力がぬけるから』谷『フム、さア來い』イヤー、ドシン。谷『ウム、押して來う』ヤツと額を谷風の臍にあて、兩手を伸ばして褌を摑み、勇『ウーム』と、頭をひねりながら押して行く。月代が少々生えた所で、その髮の毛が臍にあたる。ギユウ〳〵と頭をひねりまはされるから、チク〳〵痛い。且つは擽つたい。谷風は力もはいらぬ。谷『ウーム、こりやアかなはん。痛い相撲ぢや。擽つたい相撲ぢやな』勇『アラ、、、ウーム』グイ〳〵

押す。だんく押されて、到頭左の足を谷風土俵の外へ出した。

谷『おい、もういゝ。俺が負けだい。よせ、放せよ』勇『アラ、、』谷『もういゝ。分つた。俺が負けぢや』勇『アラ、、ラ』谷『コラ、この通り踏み切つたい』勇『あゝ有難い。もう死んでもいゝ』谷『よく死にたがるなア。汝アなかく偉いぞ』勇『谷風關、わつしが勝つたんですかい』谷『さうぢや。ハ、、ヘ、俺が負けちや』見物はたゞ呆氣にとられ、勇藏に引付けられて観入つてゐる。うしろから土俵に上つて來た雷電爲右衛門。



爲『師匠さん、串戯も程にしなされや。知らぬ人は本當に負けたものぢやと思ひます』谷『いやア爲か。本當に負けたんぢやい』爲『エッ』谷『奴は怪力ぢや。怪しい力と云ふのはあれぢやらう。身丈が小こくて疾い力があるぢや』爲『ウム』谷『尤も痛くて摸つたい相撲ぢやで、可笑しくなつて、力もぬけるがな。兎に角押されて踏み切つたんぢやい。爲、汝稽古をつけてやれ。痛いぞ、可笑しくなるぞ。爲『フーム、不思議な力士ぢやな。ようござんす』藝道熱心な雷電が勇藏に向ひ、

爲『おい小倅、俺が稽古をつけてやる。さア來い』勇『あゝ大きいなア。今の谷風關よりもう一廻大いや。貴方の名は』爲『雷電ぢやい』勇『あゝ雷電關か。聞いてるく。谷風關とどつちが強い』爲『それやア師匠さんの力が強い』勇『さうか。そんなら俺は勝つだらう』爲『なにッ、この野郎、さア來い』師匠に劣らぬ雷電が、仕切つて胸を擴げてゐる所へ、ヤアくドシンと打ッ突かりますと、谷風より上脊がありますから、臍まで頭は屆かない。下腹へ打ッ突かつた。

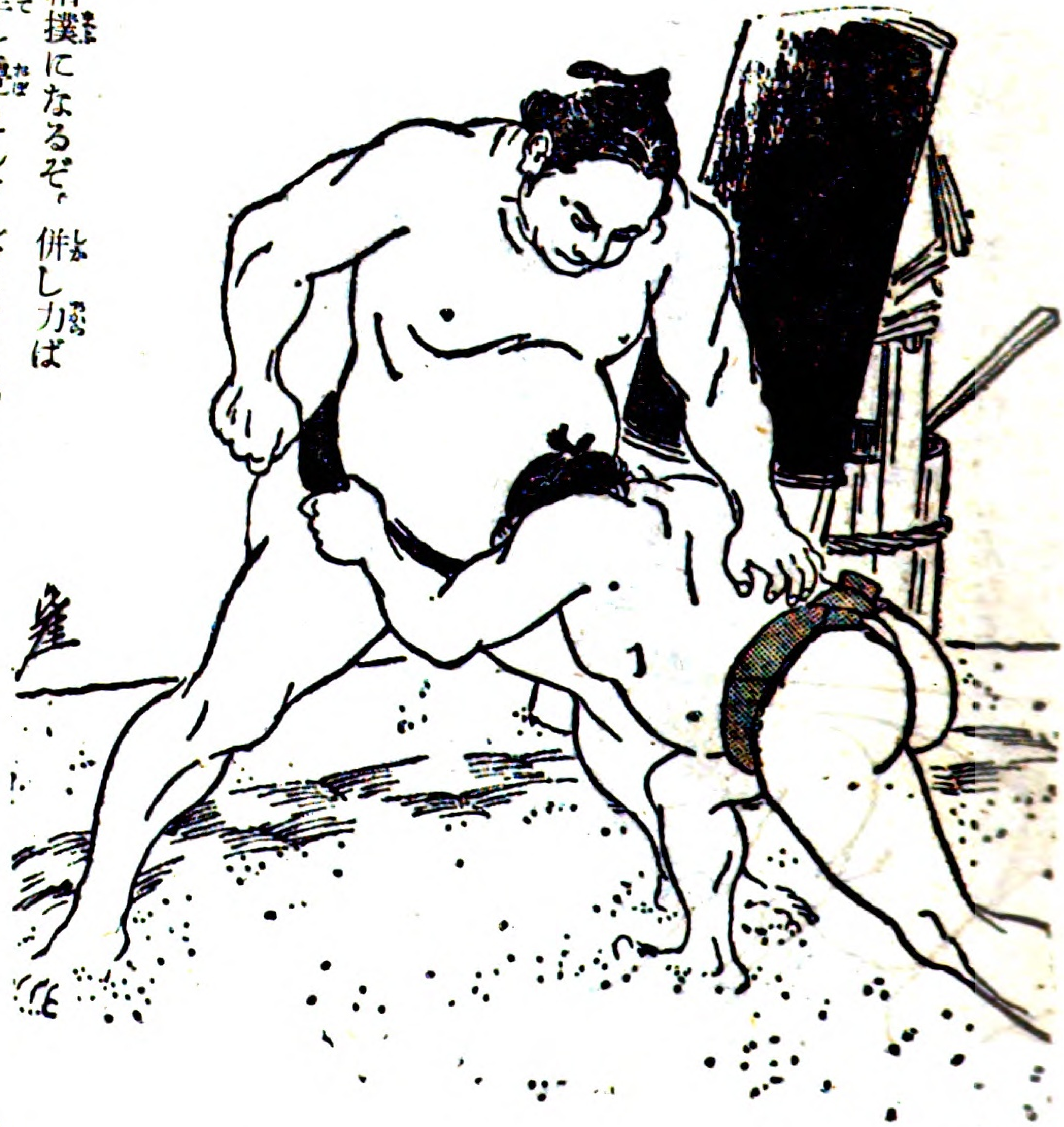
爲『プッ、野郎、待てい』勇『ホウ始まつた……アラ……ドッン』爲『ウーム、押して來う』下から顋をあて、褌へ手を掛けて、勇『ウーム』と頭をひね

りながら、又も押して行く。爲『成程、こりやア擽つたい、痛いわい。アハヽヽ、師匠さんの言うた通り、こりやア痛い相撲ぢや』勇『ヤアー、ウーム』と、押すが、雷電は大地から生じた磐石のやう。勇藏は懸命になつて尚も押して來る。その怪力には流石の雷電感じ入る。

爲『よし。こりやアいゝ相撲になるぞ。併し力ばかりではいかん。相撲は手を覺えんければならぬ。そこを一つ見せてやらうかい』と、勇藏が掴んでをりまする褌を取る手をグツと下から閂に絞り上げた。

爲『どうぢや。野郎、どうぢや』勇『ウーム、何ぢや。關取』爲『これは閂ぢや。片閂ぢやい』勇『片閂。何だ、こんなもの。この力は心張棒ぢや』爲『ホヽウ、偉い奴ぢや。ウーム』土俵で口を利くのはならぬのだが、思はず雷電も不思議な小男勇藏のために釣込まれて口を利いた。

爲『もういゝ。引分ぢや』勇『なにツ、雷電關、引分だと』爲『あゝあさうぢや。分つた〳〵。汝のやうな強い小僧には初めて會つた』汗をダク〳〵搔いて、勇藏は喜んでゐる。



師匠の尻餅

ところへ柏戸宗五郎がやつて來た。

宗『谷風關、雷電關、家の小僧を相手にするのはよして下さい。危ない。殺してしまつたらどうする。どうぞ調戯はんで下さい。あれは相撲を思ひ切らせるんぢやから』これを聞くと、谷風はにつこり笑つて、谷『柏戸關、わしが負けて、雷電が引分だつたよ』宗『あの勇藏が。エ

エ冗談ばつかり』谷『いやア本當ぢや。貴方は見込がないとて、まだ一度も稽古をつけてやらんのぢやな』宗『あんな者見込はないで』谷『それはいかん。貴方、あれへ出て稽古をしてやつて見なされ。見込がありますぞ。あゝ柏戸關、怒つちやこまるが、あの勇藏をコロリと轉がしたら、谷風は酒一駄買ひませう』傍に笑つて聞いてゐた雷電が、

爲『師匠さんが酒一駄買ふなら、柏戸關、わしは魚を一船買ひませうよ』力士の言ふことは大袈裟です、一駄だの一船だのと。柏戸は苦い顔をして聞いてゐましたが、やがて支度をして土俵に上り、

宗『さあ勇藏、稽古をつけてやる。來い』勇『師匠さん、有難う。だが一寸聞きます。谷風關や雷電關と師匠さんとはどつちが強い』宗『下らぬことを聞くない。俺も若い時はな、フム、何だつたけれども、今は……まアいゝわい、そんなこと』勇『今は敵はないか』宗『默つてゐやがれ。さア打ッ突かつ



て來い』勇『はい、では行きますよ』アラ、、、ドシン、柏戸の胸に打ッ突かりますと、宗五郎ヨロ〱となつた。

宗『野郎、ウーム、これは妙ぢや。これは不思議な奴ぢやなア。これ程の力士とは思はなんだ。さア來い』イヤードシン、又柏戸はヨロヨロとよろめく途端、三度目にアラ、、、ドシンと打ッ突かつたらヨロ〱ズシンと尻餅をついてしまつた。

勇『アハ

り、靴下を買つたり、身のまはりの仕度をするのに、取つておきなさい。そして殘りは、ちやんと貯金しなさい、……これから先は、自分のことは、自分でするやうにして、お母さんに世話をかけなければ、それでいいのだよ』

『さうですか、僕は、貯金をします』

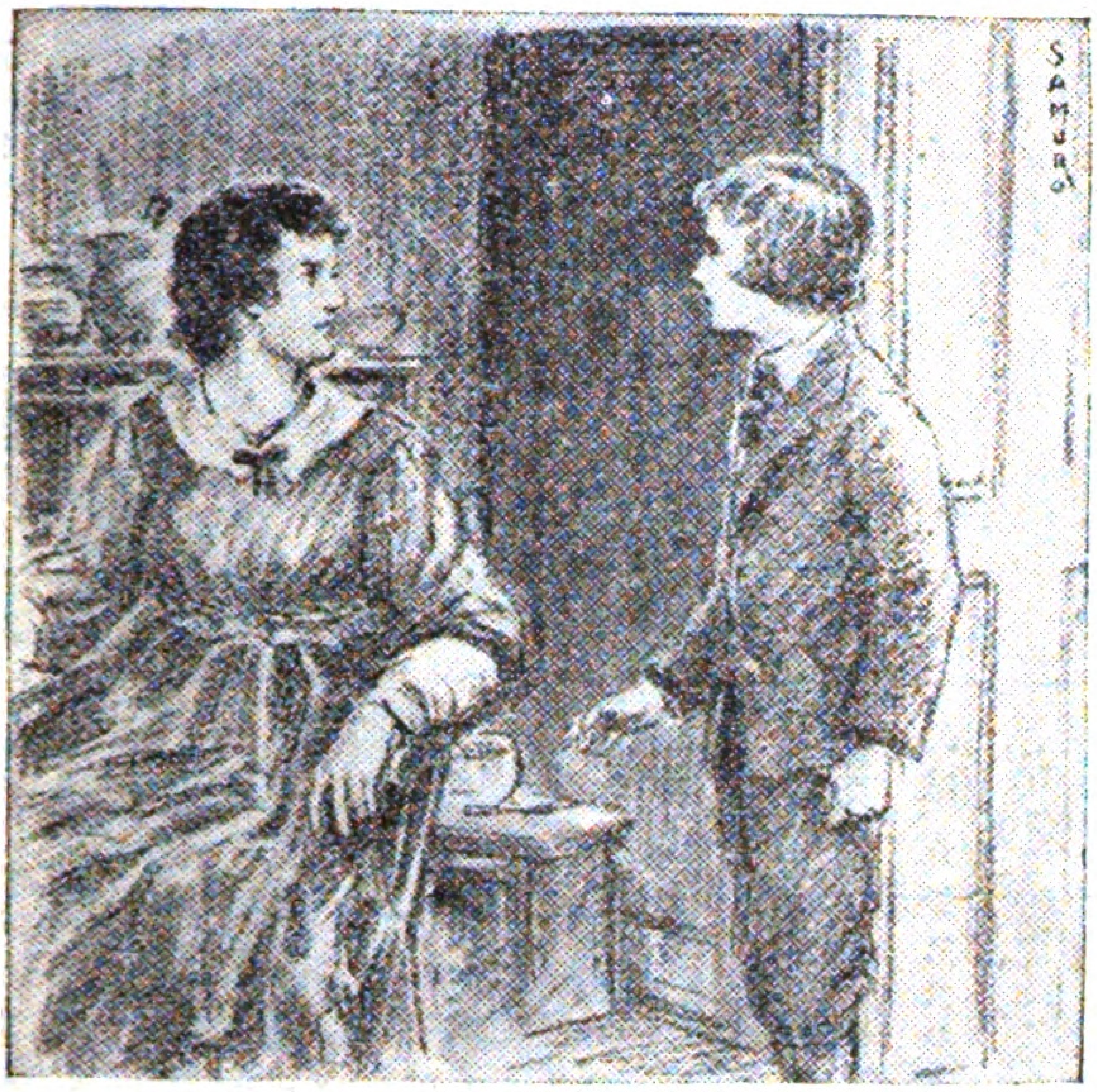
彼は、會社につとめてゐる中に、此うして壹年の間に、三十七弗五十仙の貯金をした。

『彼の少年は、なかく働くぞ』

社でも、イーストマン少年は信用を博するやうになつたが、事實彼は陰日向なく骨身を惜まずして働いた。夜は夜で、獨學をつゞけてゐたが、彼の熱心な執務ぶりは、重役の眼にも止つた

給仕から社員となつて、一年六百弗の体給をうけることになつたのは、數年後であつた。

『本社と最も關係のふかい銀行で、簿記係主任に缺員を生じたから、ぜひ引きうけて貰ひたい』



彼は、突然、重役の拔擢をうけて、簿記係主任に推された。体給も、一年一千弗に增額されたが、同時に彼の責任も重かつた。こゝでも、數年の間、滯なくつとめてゐたが、其の中に餘り働き過ぎた爲か、健康をそこねた。心配して診療をうけると、ドクトルは小首をかしげた。

『君は、休暇をもらへるかね』

ドクトルが質問した。

『はい、長い間無缺勤で働きましたから、御願すれば、二月ぐらゐの休暇は得られるかと思ひます』

『そりや好い按配だ、では、早速休暇をとつて、轉地療養にゆきなさい、更に病氣は、精神過勞だから、どこか風景のいゝ田舍へでも行つて、のんびりと二月ばかり遊んで來ることだね、さうすればすぐに心氣を恢復して、元の身になることは、請合ひだよ』

『何處が宜しうございませうか』と、イーストマンがきいて見た。

『さア、田舍なら何處でもいゝさ、……サント・ドミンゴ島などは何うだね、大變景色がいゝといふ噂をきいてるが……』

『さうですか』と、彼は、ドクトルの家を出ると、頭取に事情

『さうだ、學問をするといふのは、世の中の爲に何等か爲になる仕事をするやうな人物をつくり上げることだ、……それなら、何も、學校へゆかなくても出來さうだ、僕は、學校々々といつて學校ばかりに眼がくらんでゐたので、今迄そこへ氣づかなかつたのだ、修業は、一生のことだ、死ぬまでかゝることなんだ、中學といひ、大學といひ、それを終れば、學問がすんだと思つたら間違である、僕はこれから世の中に出よう、さうすればほんとうの生きた學問が出來るし、お母さんの手助けも出來るし、一擧兩得だ』

やつと、安心が出來ると、今迄眼の前にかぶさつてゐた薄い膜が剝ぎとられたやうに感じた。さうなると、新しい元氣が、身内一ぱいにみなぎりあふれてくる。

『やつて見せるぞ』

ベツドから、むつくりと刎起きた時には、夜はもう明けて、今朝も和やかな曉の光が、窓の隙間から流れてゐる。

『お母さん』

彼は、勝手で働いてゐる母親の處へ飛んで行つた。



ヂョージ・イーストマン氏

『あ、ジョージ、お前、眼が眞赤だよ、どうかおしかい』

母親は氣遣しさうに見守つて居る。

『いゝえ、僕、これから働きます、そしてうんとやります、お母さん、安心して下さい、もうお母さんに心配をかけませんから……』

『何だらう、お前、大變はしやいでゐるけれど……』

『僕、嬉しくて堪らないんです、何だか大きな聲を出して、歌ひたくなりました、僕は、これからほんとうの勉強をするんですよ』

ひとりで、悦に入つてゐる。彼の魂は、この時全くよみ返つて、多事多難な生活戰上の闘士となつたのだが、果してよく荒波を乘切ることが出來ようか。

二

イーストマンが、給仕として雇はれたのは、ロチエスター市の保險會社であつた。一週三弗の給金をもらつたが、それが寫眞機王の始めて手にした收入である。

『お母さん、僕は三弗頂くことになりました、どうか、お母さんが遣つて下さい』

彼は、母親の前に差出した。

『いゝえ、ジョージや、その三弗はね、お前が巣をつくろつた



◇……泰西成功美談……◇

七轉八起の寫眞機王イーストマン

富田清萬

一

『涙と共に一片のパンを割き、夜をこめて、淋しくベッドに泣明したものでないと、神の攝理は判るものでない』

これは、文豪ゲーテのかいた『ウイルヘルム・マイスター』の中に出てくる主人公マイスターが、路傍に於て、竪琴をかなでてゐる街上音樂家から聽いた詩の一齣である。

十四歳になつたヂョージ・イーストマンも、今ベッドのなかで、打伏せになつて、こつそりと泣きつゞけて居る。

『僕は、どうしたら好いんだらう』

これから先のことを考へると、厚い闇が幾重にも重なり合つて、彼の眼の前に展げられてくるやうである。

彼は、一八五四年、米國紐育州オネイダ地方のウオータービルに生れたが、間もなく一家は、今住んでゐるロチエスター市に移つた。父親は、此町に商業學校を起したが、まだ十分成功せぬ中に、ぽつくりと世を去つた。殘つたのは六歳になる彼と、彼の母と、そして少からぬ借財とであつた。でも、母親は氣丈な性だつたと見え、素人下宿のやうなことをして、どうにか一家をさゝへ乍ら、イーストマンを養育した。

その間の未亡人の苦心は並大抵でなかつた。彼には、よくそれは分つてゐる。だが、もう學校をやめねばならぬと宣言された時は、深い谷底へつき落されたやうに感じた。

『お母さんが、お困りになつてゐるのは、僕もずつと前から知つてゐる。だから無理ではない、それに、お身もお弱いんだから……。だが、僕は、もつと學校へゆきたいな』

彼は、勉強をつゞけたかつた。實際、知識慾にかられて居る十四五歳當時の少年にとつて、學事を抛つのは、何物にもかへ難く悲しいことに相違ない。

彼は、夜つぴてまんじりともせずして泣きあかした。

涙腺がつき果てた時、彼は一つの決心を得た。

ことに最初公言して居りますので、之もお氣の毒ながらお斷り致して居ります。

斯の如く解約者なきこと、中途からの申込激增のこと眞に天下の奇觀とも申すべく、而して、之を總てお斷りすることは、天下の信望愛顧に對して誠に申譯なく存じますが、一面、一旦公約したことにも背きたくなく、乃ち十分の御賢察を希ひ上げ度く、玆に一言致す次第であります。

婦人倶樂部ゆかた 大好評大賣行！！
御註文はお早く！賣切れます



本社特製『婦人倶樂部ゆかた』は大へんな人氣となりました。藝術味溢るゝ素晴しい柄模樣、生地はよし染色は鮮かなり、それに値段の安いこと、市價とは數段の違ひ、流石は大日本雄辯會講談社だと、註文殺到！販賣店も工場もまるで戰爭のやうな騷ぎです。反數限りあり、此際は早いがお勝ち！詳細は婦人倶樂部六月號を御覽下さい。或は又、本社代理部へハガキで御申込になれば美しい詳細のカタログを無代で差上げます。

天覽試合記念臨時劍道大會

宮中に於て、畏くも天覽試合の行はせられた翌日、五月六日、小石川社長邸の野間道場では、天下名劍士の御上京を機とし、臨時に大會を開きました。天覽試合の審判、範士中山博道先生、天覽試合の勇將高野茂義、大島治喜太、大麻勇治等の諸先生を始め大長、大澤、白土、中村、横溝、甲田、富川、八木、高須の諸先生、其他宮內省、警視廳等御關係の諸先生多數御多忙中特に御臨場、本社々員少年のため御深切な御稽古をなし下され尚又、三本勝負紅白勝負等を致しました。

社員 大久保周八君逝去



本社『雄辯』編輯部主任大久保周八君は、豫て腎臟病のため療養中の處、去る四月廿四日、動坂町自邸に於て永眠致しました。

君は明治二年生れ享年六十一歲。夙に育英に志し、明治二十六年東京高等師範を卒業、東京、德島兩師範の敎諭を經て沖繩中學校長に榮轉、名校長として令名があり、後、大正十二年十一月本社に入社『雄辯』を主宰して功績淺からず、今や雄辯の黃金時代を現出せんとする機運に際會して居りましたが、俄にその訃音を聞き痛惜に堪へません。

君の人となるや、學才秀で識見高く而も溫順よく人を容れ、加ふるに壯者を凌ぐ活動振りにて、長老として名記者として、社內一同の等しく敬慕し依賴する處でありました。返すぐ〜哀惜の極み、こゝに謹んで冥福を祈ります。

大日本雄辯會講談社ニュース

新に『巡回修養講座』開設 講師は川村理助先生



本社二十周年記念社會奉仕事業の一『巡回雄辯法講座』は、既報の如く、目下久留島武彦先生を講師として各地を巡講、到る處大歡迎大感謝を受け猶續行することになつて居りますが、更に又、新に『巡回修養講座』を開設、全國に修養講演會を開くことに致しました。

講師としてお願しました川村理助先生は、我國教育界の重鎭、現代の聖者として一世敬仰の大人格者であります。その説かるゝところ悉く血と涙の體驗を經た生きた教訓で、今迄先生の講演數數千回、之を聞いて感動感泣せぬ人はありません。

小學校、中等學校、青年團、處女會、會社、工場、商店、其他適當數の聽講者があれば、どこでも講演いたします。講師會場其他一切の費用は小社負擔、大體九月から開講の豫定で、追つて詳細の規定を發表いたします。

小説『母』大出版 鶴見祐輔先生著



鶴見先生が、本社『婦人倶樂部』のために熱筆を揮はれた小説『母』は、大熱狂裡によく此の六月號を以て完結すると共に、四方の熱烈なる御要望により、改めて一册の單行本として廣く世に頒つことに致しました。

『母』は先生自らいはるゝ如く、薄倖なりし先生の母君の弔合戰として、一字一涙、渾身の熱情を籠めて執筆せられた感激感涙の物語でありまして、苦難を超えて輝く母朝子を中心に、戀愛問題も、夫婦問題も、親子問題も家庭問題も、經濟問題も、全て人間の本當の道が顯現されて居ります。而もその面白いことゝ、到底一般の小説の及ぶところにあらず、何人も熱狂！ 菊池寛先生、佐藤紅綠先生等も激賞せられて居ります。

これこそ、現代の家庭に社會に一大光明を放つ名小説！ 全日本の男子及び婦人の一讀を切望いたします。（尚、口繪中の廣告を御覧下さい。六月初旬發行、定價二圓、送料十四錢）

出版界の奇現象

本社の、修養講談兩全集は、順調に進行、六月初めに第八巻を配本することになつて居りますが、面白いことには、一般に全集といへば、中途から段々と解約者が出來、中には初めの三分の一になつたとか五分の一になつたとかいふ噂さへもある位ですが、本社の兩全集は、解約どころか却て、續々と新規申込があるやうな次第で、書店もこれには全く驚いて居ります。尤も、讀者の相互間に於ける居代りは兎も角、本社としては、お氣の毒ながら新規の申込は絕對に御ゆるしを願つて居りますが、近時、配本の進行と共に、希望はいよいよ加はり、頻りに再募集をと切々のお勸めもありますが、再募集は、絕對に致さぬ



知つて置きたい 洋服の話

① 燕尾服



燕尾服 ①



タクシード ②

これは一般人の最大禮服である。上着はチヨッキの丈にも等しく短かく、腰の上で燕の尾のやうに伸びてゐるから燕尾服と呼ばれるのであるが、この上着の短いのには面白い傳說がある。昔大ナポレオンが戰時中、フロックコートを着てゐた所が、どうも動作に不便である。それで軍刀で上着の裾を切つてしまつた。凱旋してこのフロックコートを着て祝賀會や招待會に臨んだので、紳士達はナポレオンの好む異樣な服こそ、我々も用ひねばならぬ所のものであるとなし、倣うて短い上着にした。これが卽ち燕尾服の起りだといふのである。もう一つの說は、イギリスの或女皇の夜會席上、或紳士が食物を落して上着を汚したので、切り捨て、平然として居つた。女皇は之を見てその勇氣を愛し、以後此型の服を禮服としたといふのである。いづれにしても、燕尾服の起原はさう古いものではない。



フロックコート ③



モーニングコート ④

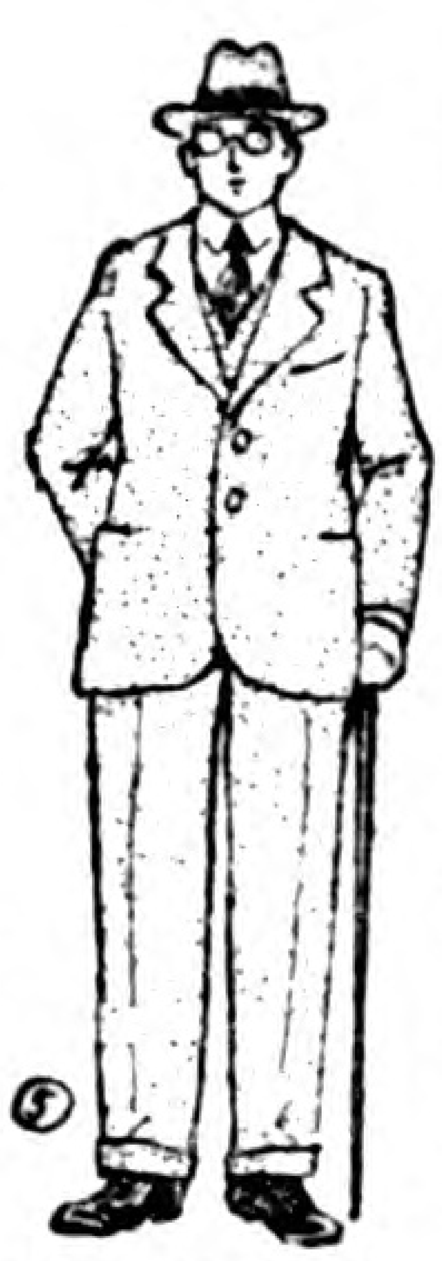
② タクシード

燕尾服の代用服。タクシードといふのはアメリカの一地名で、その地方から流行し始めたから此名がある。英國では之をスモーキング・ジャケット(喫煙服)或はディンナー・コート(晩餐服)といふ。

③ フロック・コート

一名デー・コート、卽ち晝の禮服ともいふ。フロックコートといふ名稱は、蛙の形に似てゐるので蛙卽ちフロッグから出たといふ。

④ モーニング・コート



背廣 ⑤

古くは必ず午前中のみ着用した禮服であるからモーニング(朝)コートといふ。歐米では定則として男女とも朝晝晩を區別して衣服を替へるのが正しい儀禮とされたのであるが現今ではそれ程嚴重でない。

⑤ サック・コート

所謂背廣服である。サックとは卽ち袋といふこと。上着は簡單に袋のやうに仕立てたのが始りであつたからサック・コートと呼んだのである。我が國に始めて傳つた時分は背中に縫目をつけず一枚の廣い布地を用ひたから背廣と云つた。



インバネス ⑥

⑥ インバネス

この名はスコットランドの地名から取つた。現今我が國で着用する二重廻しはこのインバネスの形の變つたものである。

もするものではないから、出來るだけ丁寧にやつてお呉れよ、……と仰しやいましたので……それに旦那樣が、朝鮮へお出かけの時、俺が留守になつても、お前が俺のつもりになつて呉れ、と仰しやいましたので、つい丁寧に丁寧にとやつたものですから、旦那樣のお懷ろ合ひは充分心得てゐながら、とうとう豫算を上らせて了ひまして、何んとも申譯がございません。とんだ御心配をかけまして……實は、旦那樣のお叱りがなくとも、自分では、あと〳〵のことをK君（副棟梁）に頼んで置いて、こつそり大阪へ往つて一年ばかり働いて、超過した分だけは自分の責任として形をつける覺悟だつたのが、さうまでせずに濟んだのは、本當に有り難いことだと思つて居りますんで……もう、いただくやうなものはございません』と、いつて、何うしても勘定をしないのである。棟梁の心持を汲んで見れば、前年、病妻病兒を抱へて途方にくれてゐた時、近所の親戚から其の話を聞いて、ほんの心ばかり物をやつたことや續いて子供が死んで、葬ひの費用に困つてゐる時、少しばかり都合してやつたことなどを何處までも恩に着てのことではあらうが、それでは私の氣が濟まない、懷ろ工合がよくても惡くても、やるべきものは、やらねばならぬ。それに大工が眞劍に、まことを以てやつたればこそ、建具屋も、庭師も、鳶の頭も、皆損をしてまでもやつて呉れたので、大工にしても、一文の儲けどころか、足かけ五ケ月瘦せる程心配してゐる。それにまだ先月の家賃も拂へぬといふ貧しさではないか。私は妻に命じて、一封は棟梁へお禮として、一封はその女房へお中元として、無理やりにポケットへ押し込ませてやつた。すると、お盆の十五日に棟梁が和服に羽織がけでやつて來た。そして懷ろから一葉の寫眞をとり出して佛壇に供へて『御隱居樣、有り難うございました。お陰樣でございました』と、いつてお線香をたてゝくれたのであるが、その寫眞は思ひがけなくも、私が五月の二日に東京驛を立つ時、プラットホームで撮つた見送りの寫眞の中から、父の分だけを拔き出して引伸した父が最後の面影であつた。

も彼も遲れて了つて濟みません、豫算も大分上つて了つて……』と、いつては、とん／＼ずこ／＼である。

斯くして、大體これで宜い、といふことになり、『翌日からは參りません』種々御心配をかけまして、と、棟梁の福島が、ペコリとお辭儀をしたのは、月を越えての七月の十二日の夜であつた。

『ぢやあ、大工さん計算をしてお呉れ、長い間御苦勞をかけましたね……十八日までは濟んだんですから、十九日からの分を……』と、妻がいふと、

『いえ、いただきません。こんなに遲らせたり、



豫算を超過させたり……本當に濟みませんでした』と、ばかりで、棟梁は計算などしようともしない。そこで、私が、

『や、棟梁、それはいけない。第一、全然請負仕事といふのではない、前の設計から見れば木口もよくなつてゐる、仕事もずつとよくなつてゐる、建具にしても何にしても、これだけのものが出來上つてるんだから、豫算の超過は仕方がない。仕合せな事に、國の親爺がいくらかの金を遺してくれたから、超過したといつても、始末が出來るから心配はない。それにお前は、まだ先月の家賃も拂はないといふではないか。お盆だといふのに、子供に浴衣の一枚づつも着せねばなるまい。そんな頑固なことをいはずに勘定をしたらいゝだらう』といふと、棟梁は、

『有り難いお言葉でございます……私は高名な旦那樣のお宅を建てさせていただいただけでも名譽でございます。お國の御隱居樣がお出でになりました時、大工さん、普請といふものは一生に幾度

今でもあの人のあの刹那の叫び聲が私の耳の底に殘つてゐるやうにさへ感じられる。

それは全く何といふ悲しく痛ましい親心の叫びであつたらう。而も何といふ尊く美しい人間心の叫びであつたらう。

ある大工の棟梁

俳人　臼田亞浪

『今時、珍らしい男だなあ……』と、しみじみと感心したことがある。それは、ついこの頃、といつても去年の夏、青々とした芒原の眞ん中に、私のこの石楠花居が出來上つて、引越してからのことである。

六月の十二日といふに、父の葬ひを濟まして、家郷小諸から引揚げては來たものの、新居はまだ〳〵、とん〳〵ずこ〳〵やつてゐる。肝心の建具も、雨戸がはいつた位のものである。

私が滿鮮の旅へ出る時、六月の十日頃に歸つて、十三日には移るから、その積りでやつて置けと、棟梁の福島(英造といふ)に吩ひつけて置いたのではあるが、この鹽梅では迚も直ぐには這入れさうもない。そこで棟梁には十八日に越すと傳へて置いて、腹では二十日に越す目算をたててゐた。

さて、その二十日に越しは越したものの、門も建てねば、雨戸もしまつてゐない。青芒を靡けて吹き入る風は涼しいとはいふものの、不用心で仕方がない。ところへ、つい二三町先きの堀の内の某家へ強盗がはいつたといふ物騒さに、妻や姪は、『迚もおち〳〵眠れさうもない』と、いつてゐたのである。

『申譯けございません、遲らした上に、大分豫算を超過させまして……』と、棟梁は、ひたすら詫言をいつてゐた。そして、二十日の晩だけは久し振りに——それまでは二た月も三月も自分の家へ歸らずに普請小屋や女中部屋に泊つて工事を督勵してゐたのである——自分の家へ歸つて往つたのであるが、二十一日から今まで通りやつて來て、朝から晩まで、とんとんずこずこやつてゐる。それがまた專門の大工の仕事ばかりではない、左官の眞似もやれば、鳶の仕事もやる、その上夕飯が濟んでからも定り切つて十一時頃までやつてゐるのである。妻などが心配して『もう、おやめなさいよ、體がなくなるといけませんよ』と、いつても『なに構ひません……それよりも本當に從

落中の若者の殆ど大部分を率ゐて人のいやがる親不知方面の除雪作業に參加したのであつた。しかも、彼が率先して出かけた其の仕事の爲に、彼の率ゐてゐた若者達を十三人までも死なせてしまつたのだ。

私はあの吹雪の渦まいてゐる廣いプラットホームに狂ふが如く右往左往してゐた大勢の人々の中に交つて、しよんぼりとして隅つこに唯一人しやがんでゐた古木治郎吉の父の姿を今でもあり／＼と憶ひ浮べることが出來る。私はその時その人の心のうちをおもひやつて泣かずにはゐられなかつた。近寄つて言葉をかけることすら出來なかつたほどに、私はその人が氣の毒であつた



しかも、他の多くの慘死者の死體と共に、彼の息子の死體――頭から上がひどく壓しつぶされてむごたらしく變形した其の死體が、いよいよ彼の面前に運び出された刹那、跳ね飛ばされたやうにその傍に驅け寄り、つくづくと其の醜く變り果てた息子の顔に見入りながら、

『よう死んでくれた！　お前が生き殘つてたりなんかした日にや、俺は村の人達に顔向けがならんのだつた。皆の先達をしたお前の顔もこれで立つんだぞ。』

から叫んだ時のあの人の様子は、私に永久忘れ難い貴い印象を殘したのであつた。

『よう死んでくれた！』

てゐた。

しかし、彼等はいづれも彼等の美しい社會奉仕精神の爲に殉じた尊い人々であつた。彼等のうちの誰一人賃金などを目あてにしてゐたものはなかつた。彼等は多く村々の青年團の名の下に集つて進んでかの決死的作業に參加した勇士であつた。そしてそれらの悲壯な死をとげた勇士達の中には、年來私の親くしてゐた蓮臺寺といふ部落の青年團員十三名も交つてゐたのであつた。

その場合の私には無論どの死體もどの死體も一樣に貴い感激を與へたのであつたが、就中その蓮臺寺青年團の人々の死體が一種特別な印象を與へたことは當然なことであつた。

私はそれらの親愛な人々のあまりにもむごたらしい死體に面接する毎に、狂的に近い氣持にさへならずにはゐられなかつた。



彼等はその日の早朝十七人一組となつてかの危險地へと赴いたのであつた。しかもその中の十三人までが慘死者として運ばれて歸つたのであつた。

此の十七人の蓮臺寺青年團の其日の團長は彼等の中でもとりわけ私の親しくしてゐた古木治郎吉といふ青年であつた。彼はその部落では最まじめな青年の一人であつた。最も頭のしつかりした男でもあつた。農事の改良にかけても彼は珍らしく熱心な忠實な働き手であつた。從つて彼は何事につけても部落中の青年の先達とされてゐた。その日にも彼はその部

『よく死んでくれた！』

文藝家　相馬御風

今から八年前の大正十一年二月四日のことであつた。

その日大勢の私達の仲間は、私達の町（新潟縣西頸城郡糸魚川町）の停車場で、荒れ狂ふ吹雪の中を半狂亂になつて右往左往してゐた。それはその前日の夕刻親不知の難所で大雪崩の爲に慘死した人達の死骸を受取る爲であつた。

連日の降雪の爲に此の附近の鐵道は全く不通のやむなきに至つた。列車はあちこちに立往生して危險が刻々に深刻の度を加へて行つた。義に勇んだ村々の青年達はそれを見るに忍びないで、つひに死を決して奮ひ起ち、隊を組み團を成してそれ〴〵除雪の作業を助けに出かけたのであつた。

最後に二月三日の日が來た。その日わけても危險といはれてゐた親不知附近の鐵道線路除雪の任に當つた最勇敢な青年達が終日の必死的作業を終へて、綿のやうに疲れた體を臨時に仕立られた列車にのせて、親不知驛から東方に向つて歸りを急ぎつつあつた時、突如として崩れ落ちた大雪崩の爲に列車もろとも雪の底に葬り去られてしまつたのであつた。

四百尺もある高さの山腹から約一千坪ほどの廣さの大雪崩が折から通過しつゝあつた列車の上へなだれ落ちたのだから溜つたものでなかつた。九十名の慘死者と四十餘名のむごたらしい重傷者との血で、何丈といふ深さの雪が眞赤に染められたのも當然な結果であつた。

死骸は牛馬の死骸でも運ぶやうにいづれも貨物車の板敷の上に藁を敷いてその上に列べられてゐた。そして列車がプラットホームに着くと、人々は臨時に用意された藁繩製のモッコ同樣の擔架で、それらの死骸を一つ一つ指定された收容所へと運ぶのであつた。死骸はいづれも草鞋を穿いたまゝの作業姿であつた。どの死體もどの死體も顏面は一樣に紫色に脹れ上つてゐた。頭がつぶれて、眼の玉の飛び出てゐるのもあつた。腰から下がもぎとられて臟腑が悉く露出してゐるのもあつた。頭が砕かれて腦味噌の出てしまつたのもあつた。手のないもの、足のないもの、首のないもの、シャベルが腹から背へ突通つたまゝになつてゐるもの……そしてどれもこれも皆血みどろになつ

三男君が農學士になつて、就職難に苦しみし時、先生は『何んでもせよ、東京市の人夫にでもなれ』と云つて、何所へも紹介してやらなんだ。三男君は決心して、父の名を云はず、獨力で東京市の人夫となつた。

流石に人夫の半天をきて、父の家の正門から出入し難く、初めの中は裏門から出入して居た。所が或日ソレを先生に見付けられた。先生は『何ぜ正門より出入せぬか。何にが恥しい』と叱りつけた。それからは三男君正門から堂々と出入した。

此の三男君も、實に能く働いて、監督に認めらるゝに至つたが、其の頃又先生の子たることも知れて來た。そこで『成程なあ』と感心されて日比谷公園課へ採用さるゝに至つた。



○

伊藤先生の此の仕方には、全く『其の子を千仭の谷底へ蹴落す猛獅』の概がある。

その人にはそれつきり逢はない。が、いまも田舎の風景を考へると、その人の心持がしみじみと生きかへつて來て、その日その時、桃畑で感じたことが思ひ出され、また新しく胸をうたれて涙ぐましくなる。

子を千仞の谷底へ

教育家　西川光二郎

本年一月早々亡くなつた諸名士の中に、伊藤一隆と云ふ先生がある。

伊藤先生は今の北海道大學の前身札幌農學校の第一期卒業生で、水産科を專攻し、北海道では水産界の恩人として著名である。後ちに石油事業に關係したが、此の方面でも日本石油事業界の恩人として知られて居る。而して日本禁酒運動の率先者としては、更に／＼有名であるが、識者の間では『伊藤先生は水産界で云々、石油界で云々、禁酒運動で云々と云ふよりも、人格の子として、大に珍重すべき人であつた』と云はれて居る。

伊藤先生は若し富をいたさうと思へば、水産界にある間に、幾度も其の好機があつた。石油事業に關係して居る時にも、幾度も其の好機があつた。併し一度だつて、金儲に心を傾けたことはなかつた。此の間の消息を知れる人々は、何れも先生に敬服して居る。

○先生に就て、私の最も感心して居る一逸話をお話しよう。

○先生の長男眞一君が、中學校を卒業した時に、今後の方針を協議すべく、遙々越後の父の石油事務所まで訪ねて行くと、先生は言下に、此の上學校に行くに及ばぬと云つて、當時其の會社で最も嚴格だと云はれて居た米國技師の下へ、伊藤の子たることを秘密にして、平の勞働者として放り込んだ。此の時父の命に服從した眞一君も偉いが、斯く斷行した父も偉い。

眞一君は、能く辛抱した、能く働いた。自然に先生の子たることの知らるゝに至りし頃は、モウ彼の米國技師の眼鏡に叶うて、無くてならぬ人となつて居た。眞一君は今は其の石油會社の支配人となつて居る。

○

るから肥料になりまさあね。石ころだつて、生きてるから家の土臺になつてくれたり、水をふせいでくれまさあ。どんなものだつて、ありがてえもんでさあ。』

あゝ、私はうなだれてしまつた。

その人はにこにこしてゐるのだが、私は土の上に身を投げ出して泣きたかつた。そしてしばらくしてから、私はその人に別れて人のゐない野原の方に行つたが、ほんとに枯草の上に涙を落としてゐた。

凡ては生きてゐる、ありがたいものだ、――私はしみじみとそれを考へねばならなかつた。そしてそれはうれしいといふよりか、なにとなくさみしくされるやうな、茫然とした心持であつた。それから四五日、私はいつまでも心にこびりついてはなれないその人の言葉に、醉つてゐるやうになつてゐた。



私はそれからよくその人に逢ふやうになつた。

その人の家をたづねたこともあつたが、その人はその後あまり話をしなくて、いつもにこにこ默つてゐた。そしてある日はその人をたづねると、そこの主人の娘が嫁入りするといふのに、その送りの祝言の席にその人がゐなくて、兄である主人が言ふのであつた。

『ありやあね。かういふ席が嫌ひでね、土つぽじりが好きでけふも野良ですよ。酒も呑まないし、米の飯だつてぜいたくだつて言ひまさあ。ほんたうに生れつきの百姓でさあね。』

その人が生れつきの百姓であらうか？

私はその村をはなれる時、その人がぶらりと山の旅に出てしまつたので、逢ふことが出來ずにしまつたが、それでもかう心にちかふことを忘れなかつた。

『××さん、あなたの心持を私も生かして見せますよ。』

『え丶。』

『忙しいんですねえ。』

『なあにい丶んですよ。こちらにお這入りなせえ。』

私は何んの氣もなく聲をかけたのであるが、言はれるまゝに木戸口から中に這入ると、敷いてある筵の上に腰を下ろして、その人がすぐ傍の桃の枝に木鋏を入れるのをながめてゐた。そしてしばらくして、また何んの氣なしにたづねた。

『あんたあ剪定が上手なんですつてねえ。何にかこつがあるんですか。』

『なあに。』

その人はにこにこしてゐた。

『なんにもこつなんてありませんや。ねえ、ほらかうしてすかすでせう。そしてどの枝にもよくおてんとさんのあたるやうに剪定するんですよ。』

『なるほど。』

が、私が立ち上つた時、その人の口から出た言葉が、すぐに私の胸をぴりぴりとふるはせた。

『おてんとさんてえらいもんでさあ。ほれね、生きてるものはおてんとさんが無かつたら死んぢまうでせう。桃の木だつて生きてまさあ、おてんとさんが好きでさあ、だからさうするんですよ。』

ぐつとそれが私の胸をうつて來た。そして私にまたすぐたづねずにゐられないものがあつた。

『あんたあ、田や畑の手入れも上手ですつてねえ。』

『上手つて譯ぢやあありませんや。』

その人はにこにこしてゐた。

『土だつて生きてまさあ、深くうなつておてんとさんをすつて貰へば、作物をよく育てるにきまつてゐまさあ。』

『……』

私はほんとに何んにも言へなかつた。

土だつて生きてまさあ、――その朴實な言葉が胸にしみとほると、聖者の聲をきいたやうな氣がした。生きてる、生きてる、となにか大きなものがひゞくやうに、身體中がぞうつと總毛だつて、胸の中が熱くなつてくるのがわかつた。そしてぼうつとしながら、いつか瞼があたゝかくなつて來た。

『なんでも生きてゐまさあ。』

その人はつゞけた。

『わたしやあ、山が好きでねえ。暇があると出かけますがねえ。那須山の奥に這入つた時にやあ、大きな石一つでも、杉の木一本でも、生きてゐて話をしてくれるやうな氣がしましたよ。草や木は生きてゐて知らない間に伸びまさあ。ありがてえもんですよ。そしてなんでも生きてゐる、枯れた草も生きてゐ

心を洗ふ 途上美談

土は生きてゐる

詩人 福田正夫

その人は村の他の人達と別に違つたところはなかつた。村の中産の農家の弟で、三十を半ば過ぎてゐた。どちらかといへば小柄で、まつ黒い顔をして土に荒れた手をしてゐた。そして違つてゐるといへば、その人が嫁を貰ふことが嫌ひなことや、家の中にちゞこまつてゐることが嫌ひで、いつも田や畑にゐるくせがあり、たまの休みにも働きつゞけることをきいてゐた。そしてそこの多摩川べりの小さな村の教員をしてゐた私は、その人を桃づくりや畑づくりの上手な農夫として知つてゐた。半年ばかりの間に、青年會の集りなどで、二三度逢ふ機會があつた。

『あの人は學者ですぜ。』

あとで青年の一人が私にさゝやいたことがあつた。そして畑の中で、ふところから本を出して讀んでゐることなどをきかせた。が、そんな集りにくるにも、その人は仕事着のまゝで、繩の帯をしめてゐるのであつた。どこかしつかりしたところがあるとは思つたが、あまり物を言はないでにこにこしてゐるのが、すぐれた人といふ感じを私に持たせてくれなかつた。

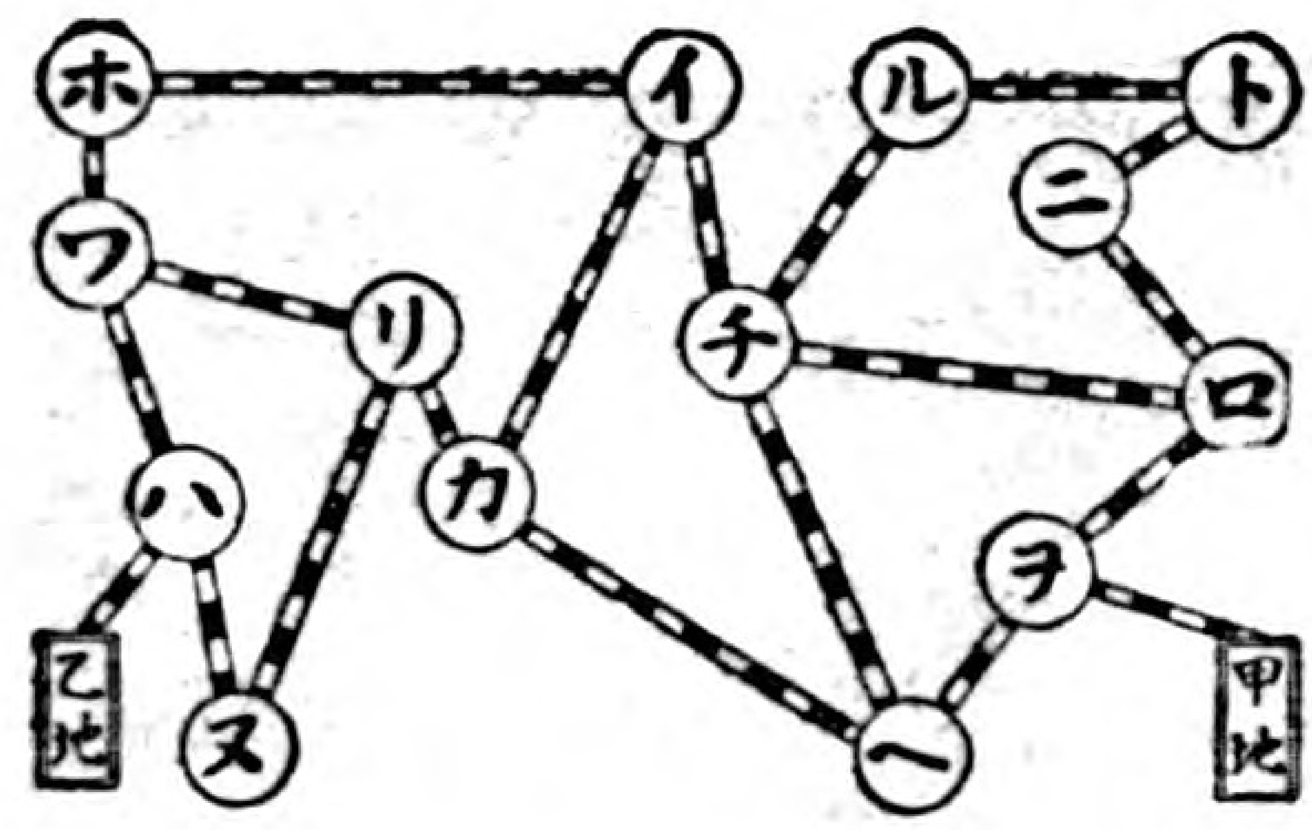
十月末、小春日を浴びてその人が桃畑の中で、桃の剪定（無駄な枝を切ること）をしてゐるのを、私が散歩の途中でみつけた。

『剪定ですか。』

美事に持ち上りましたらお慰み。

(六) マッチの軸を七本使つて、正方形を三つ、三角形を四つ作つて下さい。

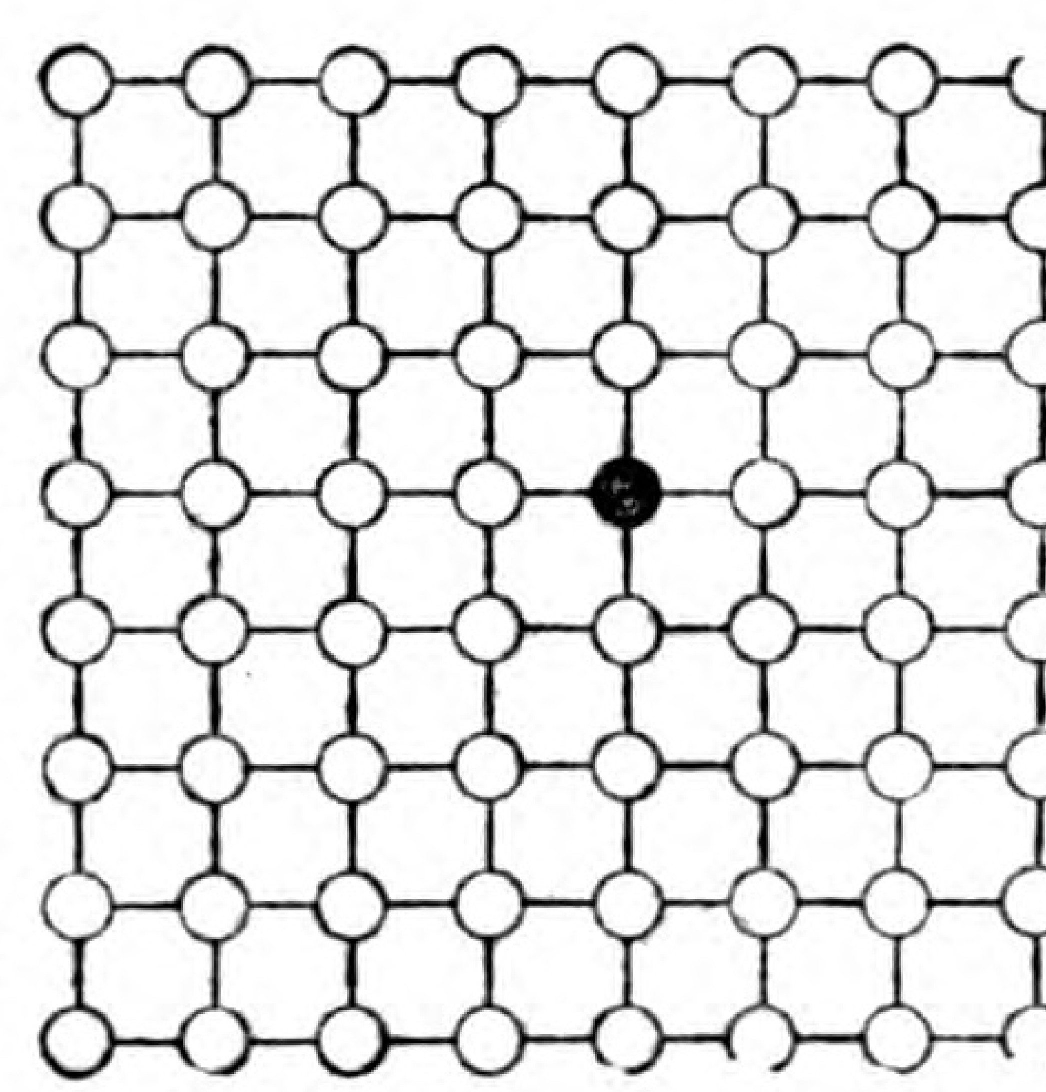
(七) 名所見物



圖中○印は名所舊跡です。今或人が汽車で甲地を出發して乙地に行くのですが、途中これ等の名所を殘りくまなく、見物して行き度いのです。けれども同じ道を二度通ることは絕對に嫌ひです。どんな順序に見物したら良いでせうか。

(八) 銅貨拾ひ

圖の樣に、一錢銅貨が六十三枚碁盤目に並べてあります。圖中黑い印のところを出發點とし、同じ道を二度通らない樣にして、六十三枚全部の銅貨を拾つて、又元の處へ歸つて來るには如何に歩いたらいゝでせうか。



(九) 考へ物

(1) 縱になつて休み横になつて働くもの。
(2) 見せる時に見せないで、見せない時に見せるもの。
(3) 乾いた着物をぬいで濡れた着物をきるもの。
(4) とられても貰つても厄介なもの。
(5) 必ず同伴で歩くが決して並んで歩かないもの。

(十) 眼の間違ひ

(1) 左圖の三人の中何人が最も背が高いか。



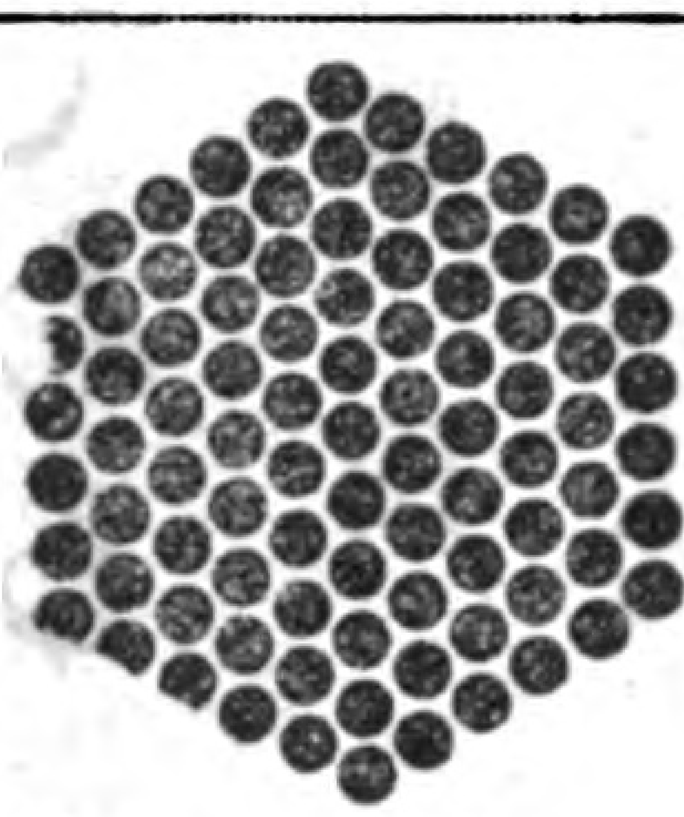
(2) 左圖の二つの正方形の中何れが大きいか。



(3) 人間の眼には盲點と云ふものがあります。今左の眼をかくして、右の眼だけで×の印を見注めつゝ眼を近づけたり、遠ざけたりすると右の●が見えなくなる所があります。其が盲點です。



(4) 離れて見ると丸が六角形に見える。



(5) 双方とも正方形であるが長方形に見える。



本欄の解答は二九五頁にあり

萬人熱狂 新案智慧くらべ

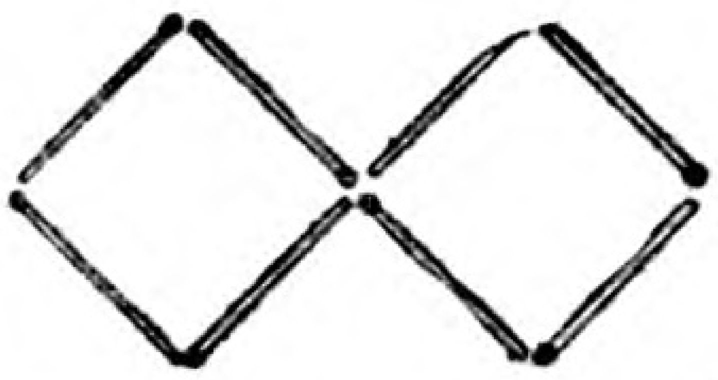
(一) 渡し舟



旅の夫婦が二人の子供と一匹の犬をつれて、とある渡場に來ました。そこには十六貫の目方を積む事の出來る、そして子供でも渡る事の出來る、縄をたぐつて渡る舟が一隻あるばかりです。船頭は誰も居りませぬ。夫婦は體重各十六貫で、子供は二人共各八貫目あります。そして犬は川を泳ぐ事は出來ませぬ。果して此一家は、川を渡ることが出來るでせうか。

(二) 三つの正方形

八本のマッチで圖の樣に、正方形を二つ作り、これをマッチを增さずに正方形を三つにするにはどうしたら良いでせうか。



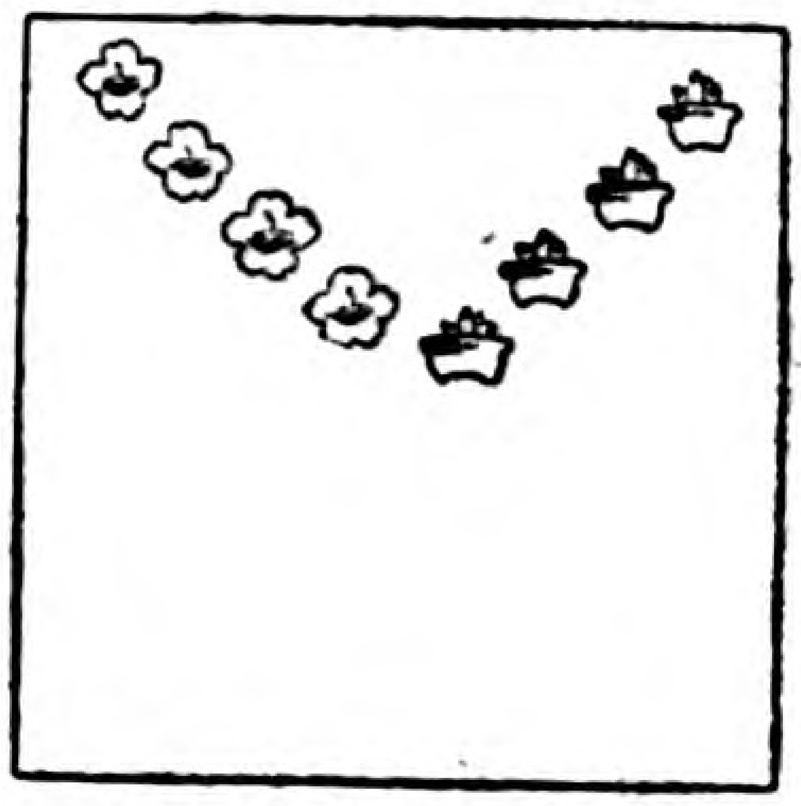
(三) 平均速度

晴れ渡つた眞夏の或る日曜日に、私の家では、一家打揃つて、自動車で郊外へ遊びに出掛けました。往きは一時間十哩の速度でしたが、還りは同じ道を、一時間十五哩の割合で走りました。往復平均一時間の速度は何哩であつたでせうか。



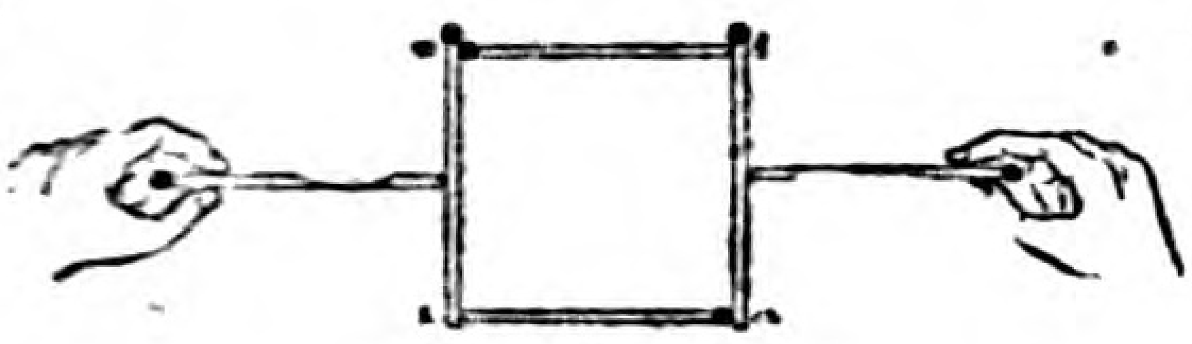
(四) 布地の截斷

圖の樣に四つの花と四つの植木鉢とを織り出した一枚の布地があります。此布を四枚の同じ形に切つて下さい。但し、一枚毎に花と植木鉢とが表れてゐなければなりませぬ。



(五) マッチの持上

こゝに六本のマッチがあります。下圖の如く、平かな板か、或ひは机の上に、やゝ正方形に組み、それを左右の二本のマッチで靜かに持ち上げるのです。



女の間に行はれて居る文身の飾りもなく、森林の附近には土人の部落は全くなく、其且つ近頃土人の部落から行衛不明となつた女は一人もない事が確められた。これ等の點より察すれば、猿と間違へられた黑女は、恐らく幼兒の時に猿にさらはれて森林につれ行かれ、其處で成長したのであらう。此斷定の下に獵師は無罪放免となつたけれど、彼は其後は獵師の職を捨てゝしまつた。

◇一頁一萬五千圓の原稿

チヤールス・ヂツケンスは前世紀に於ける英國第一流の文豪で、多くの傑作を出して今猶多數の愛讀者を有つて居るが其名著中でもピクウイツク諸篇と題する滑稽物語は彼が出世作であつて且つ傑作中の傑作であることは何人も知つて居る事である。



此ピクウイツク諸篇の原稿が一枚一萬五千圓といふ驚くべき値段で昨年の倫敦で賣れた、即ちヂツケンスの肉筆の原稿五枚が競賣に出されたが、最初は一萬圓と呼び聲がかゝり、それから段々とせり上げられて、四萬圓から遂には六萬五千圓と迄上つて行つた。此六萬五千圓と値を附けたのは紐育の書店主ガブリエル・ウエルス氏であつて、多分此人の手に落ちるであらうと思はれたところ、此時費府の書店主ローセンバツハ氏が現はれ出で、更に高い値をつけたので、こに此等二人の間に競爭が開始され、遂に七萬五千圓でローセンバツハ氏に落札することゝなつた。

――をはり――

る。『こゝに一の面白いエピソードがある』など用ひられる。

○クーポン

新聞雜誌などでちよい／＼見る廣告の一種。紙面の一部を限つて『この券書入申込の方はこれ／＼の特權を與へる』などとあるのがそれです。廣告を出した新聞又は雜誌の反響を見る一の方法です。

○ジレンマ

板ばさみ。窮境。何れにしても困る、一を立つれば他の一が立たぬ場合、『ジレンマに陷つた』と云ふ。

○デリケート

微妙なる。敏感なる。など譯してよい。その點は云はねばならぬが極めて纖細でそう簡單でないときに『その點は實にデリケートでねえ』などとそれとなく苦衷を表はす。

○ヒント

暗示。大體の見當を傳へることを『ヒントを與へる』と云ひ、思ひ付きの材料を云つて『何かのヒントにでもなれば結構です』など使はれる。

ず一月程前肺炎にかゝり入院したので、まさか殺すわけにも行かず、醫師は手を盡して治療した結果、トムソン老人はすつかり全快して退院したので、病院の方では入院費は取れないのみか、此後何年の間毎週二磅宛拂ひ出さねばならぬか分らず、目出度もあり目出度もないといづれもこぼしながら笑つて居るさうである。

◇猿の間に成長した女

阿弗利加内地の英領カメルーンス地方に於て大農園を經營して居る獨逸のある拓殖會社の監督から近頃伯林の本社へ到達した報告書の中に世にも珍らしい事實が述べてある。其事實といふのは一人の女が猿と同棲して居たといふので、ロンドン・タイムスの伯林通信員は其記事を抜萃して曰く、會社に雇はれて居る土人の獵師が、此程或深い森林に分け入つて獵をした。此森林は今迄に人が足を踏み入れたこともない密林であるが、獵師は



一群の猿を見付け、中にも或大樹の股に腰を掛けて居る特に大きく目に立つのを狙ひ撃して、首尾克く之を打留めた。近づいて見ると大猿と思ひの外樹下に倒れて居るのは一人の黒女であつた。獵師は驚いて直に引返し、此事を其地方の首府ヴイクトリアの官憲に自訴して斷罪を待つた。官憲に於ても[illegible]打捨て難き事件として直に調査を開始したが其殺された黒女が何處の何者であるか如何に手を盡すも遂に分らなかつた。其女は全く裸のまゝで、此地方の土人の

新らしい言葉

○エキストラ

ある一定の劇場に専屬することなく、劇場とか映畫撮影場に不足のある時、臨時に傭はれて出演する俳優のこと。エキストラ・プレーヤーの略。臨時俳優、補助俳優のことです。

○プロパガンダ

本來の意味は布教團であるが、轉じて「傳導」「手びき」となり、更に再轉して「宣傳」「自家廣告」となつた。『彼はプロパガンダが上手だ』など用ひられる。

○アウト・ライン

梗概。外廓。内容の細目に渉らずに、ほんの大體の骨子だけを一通り話をすることを『ほんのアウト・ラインだけ話をする』など用ふ。

○エピソード

挿話のこと。或る物語中に他の小物語を挿し込む場合、その小物語のことを云ふのであ

先頃アスキス氏が死去して以來、夫人は喪に服して暫く靜かな日を送つてゐたが、此程室内裝飾の顧問として働くことを思ひ立ち、左の如き名刺を調製して之を普く知人の間に配布した。

火水木、午前十時半より午後一時迄の間に於て室内裝飾の件につき御相談に應ずべく候
料金一回五ギニイ、但しコンミツシヨン申受けず候

オックスフォード伯爵夫人

ベッドフォード、スクエア町四四
電話番號 八四八四

(註) 一ギニイは邦貨十圓二十五錢

(右 アスキス未亡人 左 ナンシー孃)

◇ロンドン病院の大見込外れ

ロンドン市立病院の大見込外れと題して近着のデーリー・メールは一つの面白い記事を載せて居る、曰く八年前ジヤック・トムソンといふ老人が此病院へやつて來て、役員に面會し、自分は頼りない獨身者で、八十歳になるが、遠からず誰かの世話になつて臨終の水を飲まねばならない、ついては今迄に貯蓄した金一千磅(一萬圓)を此病院に寄附するから、病氣の時には無料入院を許して貰ひたい、それから健康の間は生活費として每週二磅(二十圓)づつ支給して貰ひたいと申出た。病院の役員達は此老人が餘命幾何もないと思はるゝので、喜んで此申出に應じ、千磅の寄附を受けた後、老人の希望通りに契約を結んだところ、それが大見込外れであつた。トムソン老人は其後頗る健康よく生き存へ、每週二磅の支給を受くる爲めにニコ〳〵顔で病院へやつて來て既に八百三十二磅を取り返した、のみなら



葉で、「莫大小」と書くのは「大小莫し」といふ訓みで、この織物の性質がまことに工合よく伸縮自在で、大小共に當てはまる所から出たのだといふ。



○藪入り

「養父入り」とも書く如く、父を養ふ、即ち傭人がその兩親の機嫌を伺ひに家に歸ることをやぶ入りといふのである。



○仁輪伽

俄狂言の略で、急に趣向をつけて座興を助けるといふ意味である。昔宴會の席で、何の用意もなしに俄かにその場で狂言を始めて一座を笑はせることが流行した。のち遂に專門のニハカ藝人が出來るやうになつた。



海外奇聞珍妙無類話の種

◇英國前首相の未亡人職業婦人となる

職業に貴賤はなく、勞働は神聖であるとの信條から、外國では社會上地位の高い人でも種々の職業に從事し、中には我國では卑しい仕事と思はれて居るのにさへ就いて働いて居る人が少なくないからである、最近の著しい一例は英國の前內閣大臣であつたハーバート・サミユエル卿の愛孃ナンシーといふ今年二十二歳になる令孃は昨年オツクスフオード大學を卒業した後米國に渡り、今は紐育の或大きな陶器店で店員で働いて、職業婦人の寄宿舍で暮して居る。困窮の爲めでなく、實際生活の研究の爲めであるが、健氣な心がけである。





此ナンシー孃よりも更に地位の高い婦人で最近職業婦人となつたのは英國の前首相アスキス氏の未亡人である、此未亡人は伯爵夫人であるが、此夫人は英國現代の才女の一人で、文筆に秀で、著作も少なからずあり、且つ美術の鑑識と室內裝飾とには專門家といへども舌を捲く程の教養を持つて居る、

言葉の起り

○アーメン

基督教徒が、祈禱の最後に唱へる言葉『アーメン』といふのはもとヘブライ語であつて誠實とか、確實とかいふ意味の語である。即ち『我が祈りは誠にこの通りでございます』と眞意を誓ふ言葉である。



○一帳羅

たつた一枚の取つて置きの着物を一帳羅といふのは、一挺蠟の語が訛つたので、一挺の蠟燭は燃えてしまへばあとがない。甚だ心細いといふ譯である。

○莫大小

ポルトガル語の「メヂアス」が轉訛した言



けると云つたやうにするのである。胃や腸の診斷に、バリユーム化合物の溶液（葛湯位の堅さにして）を含用させてから、レントゲン線を用ゐると、癌腫其の他の病竈が、喫驚するほど明瞭に判るのである。

透視の狀態を寫眞に撮すことも容易である。元來レントゲン線なるものが、透過力を有つてゐるのであるから、寫眞の乾板は箱とか黑い紙とかで嚴重に包裝した儘で……つまり普通の光線を充分に遮斷したまゝで……瞬間又は數秒の露出を行へば、それで撮影が出來るのである。

此の透過力に就いては、局外者は少し考へ違ひをしてゐるらしい。硝子とか水とかの透明の物が、一番强く透して見えるらしく想はれるが然うで無い。透明の物體であつても、此の光線の前には、或る程度の不透明を表はすものがあるかと思へば、不透明又は半透明の物であつても、或る程度の透過を爲し得るのである。光は、物體の比重と厚さとに應じて透過度を異にするのである。

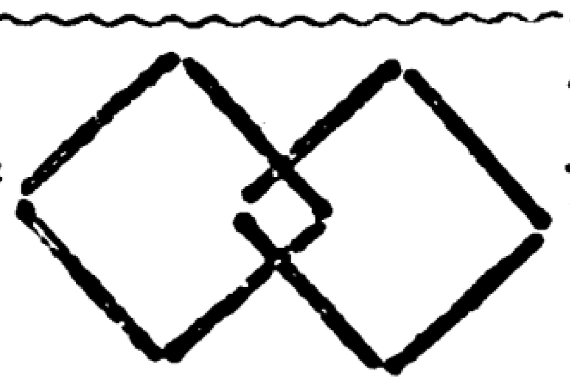
前にも述べた通りに、レントゲン光線は、發見以來僅かに約三十年の歴史より有つてゐないのであるから、今後其の研究の完成した曉には、その應用、その効果が、如何に吾々人類の幸福の上に影響するか、それは今日に於て猶ほ大きな疑問であり、又Xである。此の意味に於て、レントゲン線は、矢張りX光線たるの實を備へてゐるのである。

——をはり——

智慧くらべ解答

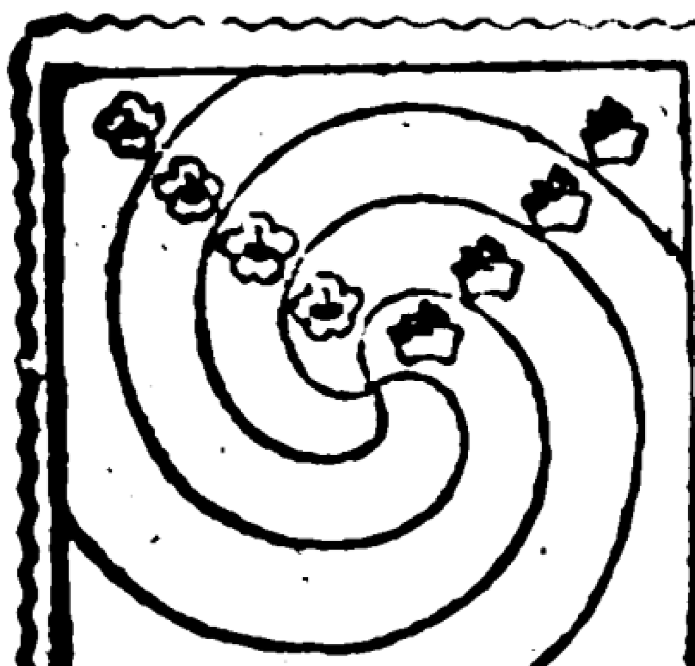
（一）兄弟二人で渡り兄が歸つて來る。父が渡り弟が歸つてくる。兄弟が渡り兄が歸つて來る。母が渡り弟が歸つて來る。兄弟が渡り兄が歸つて來て犬をつれて渡る。

（二）



（三）大概の人は平均十二哩半と答へますがそれは誤で十二哩が正確です。出發地と目的地との距離を例へば六十哩として計算して見ませう。全行程百二十哩に要した時間は往は六時間歸りに四時間合計十時間です。從つて平均一時間には十二哩走つた事になります。

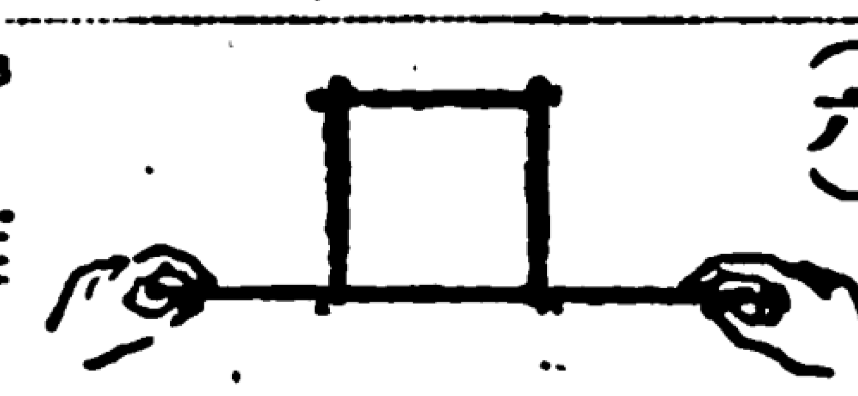
（四）



（五）

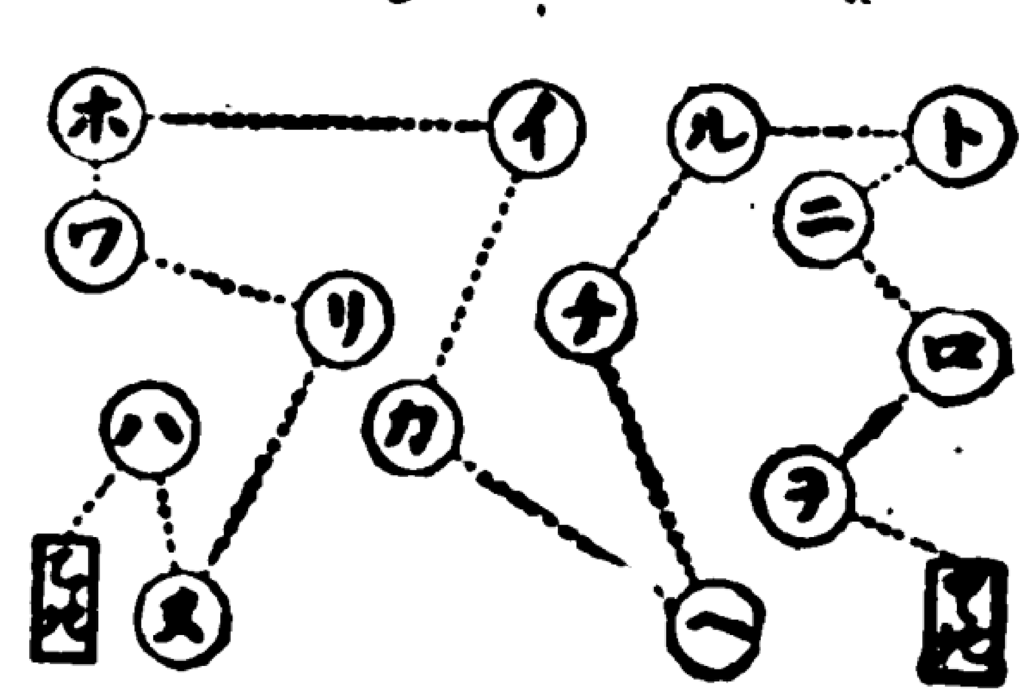


（六）

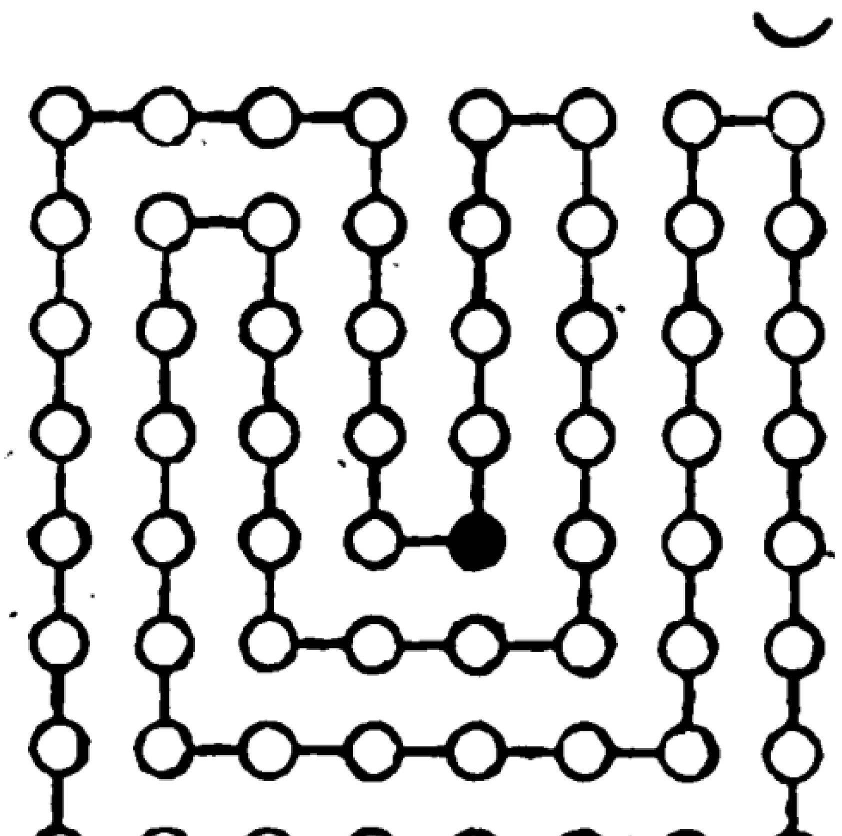


圖の如く手許を持てば上ります。

（七）



（八）



（九）(1)琴 (2)芝居の幕 (3)ものほし棹 (4)カルタ會の札 (5)兩脚

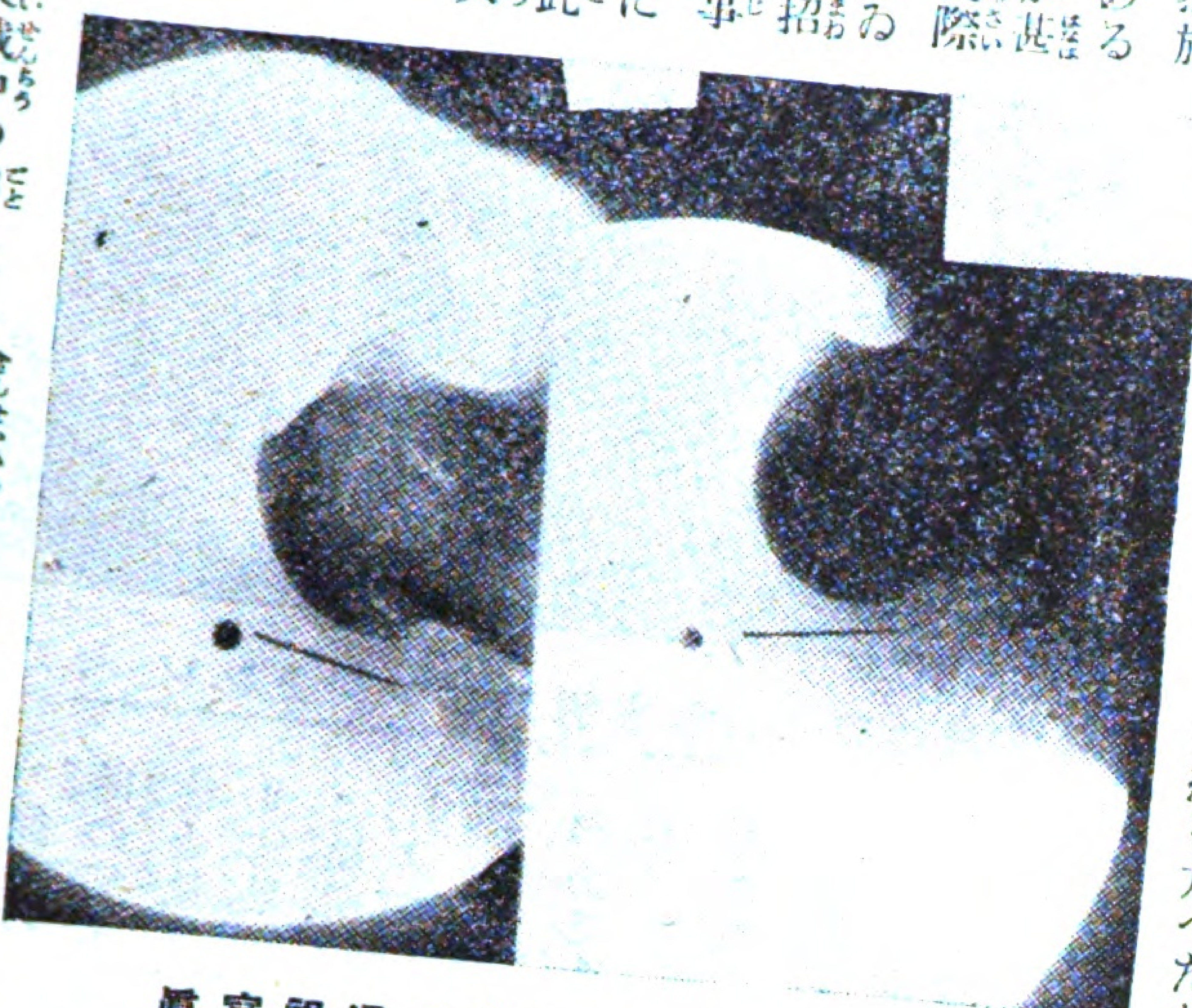
（十）(1)子供が一番高い (2)左右同じ大きさ（以上問題は三〇〇頁にあり）

は、一定量の放射によつて、或る期間を限り、又は根本的に妊娠を止めて了ふ事も容易である。人工流産なども、手術的苦痛を受ける事なしに、一回の放射で、安全に目的を達してゐる。

併し、往々にしてレントゲン療治の際に、火傷を受けたと云ふ話を聞く事がある。之れは全然施術者の技術未熟に因るものであるが、元來レントゲン療治其の物が甚だ難かしいものなので、學理と實際の兩方面に、充分の造詣を有つてゐない以上、從來はかうした失敗を招く事のあつたのも、蓋し避け難い事情に在つたかも知れぬ。が、最近に至つて測定法が完成されたので、此の法則をさへ嚴守すれば、過去の失敗を繰返す虞は無い筈である。

▲體内が寫眞に撮れる

透過力の應用方面も、却々範圍が廣い。醫術方面ばかりでなく、歐洲大戰中の如きは、禁制品の檢査にさへ用ゐられた事實がある。探偵上に應用して良成績を擧げてゐる國もある位である。が、何んと云つても、醫術上の應用が、一番に廣く、且つ完全に行はれてゐるのである。



足に刺さつた縫針の透視寫眞

負傷した場合、骨折があつたか何うかを確認するには、レントゲン線を用ゐる以外に良法は無い。それを用ゐなかつたが爲めに、一流の外科醫ですらも、骨折のあつたものを、無いとして治療を加へたが爲めに、取り返しの附かぬ失敗を演じたり、又は全然骨折の無かつたものを、有つたとして入院せしめたりした實例は澤山ある。骨折とか異物の體内に存在してゐる場合に、レントゲン線診斷を必要とすることは、今日では事新らしく説明するまでも無く、能く了解されてゐると思ふが、それればかりで無く結核其の他の機質的、形態的變化を有する病氣の診斷には、殆んど總べての場合に、レントゲン線診斷を用ゐるのが、完全な方法と言つて可い。恰度聽診器の如く、廣く應用せられる日の、一日も早く來らん事を望まざるを得ないのである。

金屬の粥（バリユーム化合物）や、瓦斯の如きものを服用又は注入して、その上でレントゲン線診斷をすると、一層明確に、體内の病的變化を確める事が出來るものである。例へば、沃度加里液を、輸尿管から膀胱や腎臓へ送つて、レントゲンを用ゐて透視する、關節内や頭蓋内へは、空氣を注入して、それからレントゲンを掛

に補ひ得るのである。

結核と云へば、世人の多くは直ぐ肺結核を聯想するほどに、此の二ツは結び附けられて考へられてゐる。けれども、結核は肺ばかりに來るものでは無い。淋巴腺、腎、關節、肋膜、腹膜、腸間膜、腸、腎臟、膀胱、睾丸、婦人生殖器なぞも屢く侵されるものである。俗に瘰癧と云ふものなども、結核が淋巴腺を侵したものなのである。



レントゲンに透視された人間の顔（四十歲の女）

瘰癧の如く、一局部の侵された場合にも、それを局部的の病氣と見て了ふのは安全で無い。寧ろ全身症の一分症と見て、全身療法を行ふのが、ヨリ合理的であり、ヨリ結果が良いのである。レントゲン線を放射すると、啻に局所の結核を癒すばかりで無く、同時に、全身の免疫力、抵抗力をも著しく增進させるものであつて、その證據には局所の治療に先つて、先づ血色が良くなり、熱のあるものは平温となり、榮養も恢復し、體重も增加する。そしてから局所に治療すると云ふ事實を常に認めるのである。

癌腫や肉腫のレントゲン治療も、最近頗る好成績を示すやうになつて來た。不治の難症と目せられた癌腫の中でも、子宮癌は一番好い成績を示してゐる。少し位時期の遲れたもの、又は、手術後に再發したものでも、全身の衰弱さへ甚だしくならない前ならば結構に癒す事が出來る。子宮筋腫の如きは、一回乃至二回の強力放射で全治して了ふものである。

病氣治療の目的以外にも、本人の體質其の他の關係からして、姙娠を避けなければならぬ必要のある場合なぞ

物學的の作用の方が、却つて大きいかも知れぬ。

X光線を醫術上に應用する場合は主として、透過力を診斷用に、生物學的の作用を治療用に用ひるのである。併し、生物學的作用の研究は、透過力の研究よりも遙かに遲れて、最近漸く其の完成を見た位のものであるから、それだけ、レントゲン線の治療上に於ける効果は、未だ充分、世間に周知されてゐないやうである。

そこで第一に疑問を起させるのは、一種の光線に過ぎないレントゲン線なるものが、何うして病氣の治療に利くか、殊に本質の異つた色々の病氣に共通して効能があるか、と云ふ點である。藥物療法を偏重する傾向を有つてる現在の人々には、一層そうした疑問が濃厚に起り勝ちである。で、其の理窟を極く簡單に述べて見よう。

レントゲン線を人體へ向つて放射した場合、その量が少い時には、その放射を受けた部分が刺戟されて……と云つて痛くも痒くもないが……その部分の機能が高まる。つまり、發育、催進と云つた結果を來すのである。モ一歩其の量を増す時には、今度は反對に、一時又は長期に亙つて、その機能を沮碍し、發育停止するものである。更に大量を放射すると、生活機能が失はれて了ふ。植物に例へれば、枯れると云ふ狀態になる。結核や癌腫なぞが無くなる。即ち治癒すると云ふのは、此の狀態を指して云ふのだ。即ちレントゲン線其の物が、自然に備へてゐる特質を、巧みに利用して治療の目的を達するのである。

放射分量の多寡は、その結果に於て、斯うした相違があるのであるが、更に其の波長の長短の差によつても、その結果が種々に別れて來る。その上に、人體の部分々々によつて、その感受性に非常な差等がある。骨とか腱とか筋肉とか云つた部分は、比較的敏感では無いが、生殖腺とか淋巴腺とか云つた部分は、可成り敏感なものである。つまり、放射分量の加減、波長の差、並びに被放射部位の感受性の差と云ふものを、適宜に考量斟酌して施術するが故に、レントゲン線其の物は、唯だ一種に過ぎないけれども、之れを放射した結果と云ふものには、多種多樣な差が生じて來る譯である。そこに、一ツの光線が色々の病氣に利くと云ふ事實が現はれると云ふ事になるのである。

レントゲン線が、皮膚病なぞに藥物の及ばぬ効力があると云ふ事は、もう餘程前から知られてゐたものであるが、最近行はれてゐる深達療法によれば、體内深部の病氣をさへ完全に治療する事が出來るのである。その主なるものは、結核性の諸病、癌腫筋腫、肉腫なぞである。

元來結核性の病氣に對しては、それを根本的に治療し得る特効藥と云ふものが、今日の所では未だ發見されてゐない。が、結核其の物が、自然に治療する傾向の多いものであるので、そこを狙つて、自然治療の機能を催進せしめようとするのが、現在に於ける唯一の療法なのである。所がレントゲン線は、前にも述べたやうに、その本來の特質が、結核病を根本的に治療せしめ得るだけの能力を有つてゐるので、藥物療法の缺陷を充分

と、憚らなくなつたやうに叫び出した。

『何うして？　何が不思議だ？』

レントゲン教授は、漫然として聞けば、何んの變哲も無い一つの叫びをすら不問には附さなかつた。その時既に、大發見の宮殿に入る鐵の扉は、半ば開かれてゐたのだ。

その學生は、眞空管内で燐の燃えるやうな、あの幽微な深青色の陰極放射線が閃めく度に、室の一隅の棚に列べてある藥瓶の或る一つが、屹度螢火のやうな一種不思議な光を發するのを見て驚いたのであつた。

教授は直ちに其の瓶を取出して見た。それは臭化白金バリユームの入つてゐるものだつた。臭化白金バリユームと陰極放射線。此の二ツの間には、何にか、人間の知識の鋤で耕されてゐない所の神秘があるのだ。自分は必ず、その神秘を拓いてやる、と彼は斯う決心した。そして段々研究を進めた結果として、その年の十二月放射線の一新種即ちX光線を發見した旨を公表するに至つた。越えて一八九六年の一月二十三日に開催された醫理學會は、滿場一致の決議を以て、その新放射に對して、教授の名譽を表彰すべく、彼の名前を新光線に冠してレントゲン線と命名したのである。



發見者レントゲン博士

▲結核や癌腫の治療

斯うして發見されたレントゲン線即ちX光線は、普通の光學上の知識だけでは、到底説明する事の出來ない程、複雜な性質を有つてゐるものであるが、素人解りのするやうに極めて簡單に云つて了へば、高壓の電氣……少くとも六七萬ヴオルト以上、現今行はれてる深達療法の目的には二十萬ヴオルト内外……の電氣を、特種の硝子製眞空管に通じて發生させた所の、極く波長の短い光線（放射線）である。此の光線は、不思議な透過力と、生物學的の作用とを有つてゐる、前者即ち、或る物體を透通して見ると云ふ力が、その不思議さがまざ〳〵と誰の目にも映ずるだけに、廣く世間に知られてゐる。が、その醫術上の效果に至つては、後者即ち生

趣味の科學

魔の光線レントゲン

醫學博士 向井又吉

▲偶然の大發見

最近の醫學界へ、最も大きな衝動を與へたものはレントゲン線、即ちX光線の發見であらう。此の大發見の榮譽を擔つた人は、獨逸ウルツブルク大學教授ウヰルヘルム・コンラート・レントゲンと云ふ物理學者である。レントゲンは、レンネツプ河畔のレンネツプ市の商家に生れて、實業方面に立つべく運命附けられてゐたやうに見えたが、何うしたものか幼年時代から物理學に深い興味を有つてゐて、遂には其の方面の權威を以て目せらるゝほどの大學者となつた。

が、多くの大發見、大發明の動機が……例へば、引力、蒸氣、時計と云つたやうに……偶然の機會に其の端を發してゐたと同じく、X光線の發見も矢張り、平凡至極の偶發的事柄から生れたものだ。未だ突き止められない宇宙の謎の、無限に大きく多いのに比べて、吾々人間の智識は、餘りに乏しい。それだけに、今後發見又は發明されべき、大きな問題も、數へ切れぬほど澤山あらねばならぬ。吾々の耳、吾々の目には、吾々の自覺しない間に、此の大發見、大發明の謎を解く所の鍵となるべき暗示や機會が、間斷なく、觸れては去り、現はれては消えてゐるに相違ない。つまり、それを看破り、その謎の鍵を確乎摑むだけの實力が、此方に無いから、折角の暗示や機會をも逃がして了ふのだ。ニユートンやワツトやスチヴンソンやの偉人は、その實力を有つてゐた。そこで初めて、偶然が偶然でなくなる。砂礫の中から大きな寶石を見出し得たのだ。レントゲン教授は、實に、宇宙間の斯うした大きな謎の一ツを解き得るだけの偉大な實力を有つてゐたのである。

時は西暦一八九五年、レントゲン教授は恰かも五十一歳、學者として當に脂の乘れ切つた絶頂であつたが、例によつて大學の實驗室で、眞空管に電流を通じて、色々の實驗をやり乍ら、學生達に講義をしてゐた。と、その中の一學生が、

「何うも奇怪しい！不思議だ！」

『何しろ尾が垣根の上に垂れてたんだからね、どんなにしたつて三十碼はあつた』

ジョン君、又押す。

『二十碼は確かだつた』

これでもジョン君承知しないで又押した。

すると、主人公は憤慨してふり向いた。

『馬鹿奴、お前はその猿は尾無しだと云へつて云ふのかッ』

◇卵の買ひ方

大きな卵の欲しい或る男、市場へ行つて鷄卵店の前で店番に曰つた。



『黒い鷄の卵が二打ばかり欲しいんだが』

『戯談云つちやいけませんぜ。黒い鷄の卵と白い鷄の卵と、誰が見分けがつくもんですか』

『わしには出來る』

『ぢや、御自分で選つて下さい』

思ふ壺にはまつた男、一番大きな卵を二十四、思ふ存分に選り出して得々と引揚げた。

◇そりや又あんまりな

ロビンスンと云ふ極めて情深い紳士が、或る朝早く朝飯前に庭を歩いてゐると、庭の門の處で枯草を滿載した荷車が横倒しになり、小さな子供がせつせと枯草を車へ積み直してゐる。これを見たロビンスン氏、

『君は獨りでそれを皆車へ積むのかね』

『さうです』

『ちあお出で。仕事の前に朝飯を食べさして上げるから』

『でも、お父さんがよく思ひますまい』

少年はためらひながら云つた。



『なあに、私と朝飯を食べたつて、お父さんが何を云ふものかな。さあお出で〱』

で、少年は枯草の山を殘したまま家へ入つて、朝飯の御馳走になつた。

『さあ、飯が濟んだら庭を一巡り散歩してから、仕事にかゝつた方がいゝ』

『でも、お父さんがよく思ひますまい』

少年は又お父さんを氣にして云つた。

『お父さんの事は心配しなくつてもいゝよ。私の綺麗な庭を見せて貰つたつて云へば、喜ぶよ、きつと』

そこで少年はロビンスン氏の後へついて庭を一巡りした。すると、ロビンスン氏は、今度は綺麗な繪本を持ち出して來た。

『五分や十分これを見て遊んでつてもよからう』

『でも、お父さんがよく思ひますまい』

これで同じ言葉を三度目である。

『君のお父さんはこんな機會を逃すのをこそよく思ふまいがな。だが、君は先刻から同じ言葉ばかり繰返してるのはどうしたんだ。お父さんがそんなに恐いか。お父さんはどこにゐる』

『旦那』

と少年は帽子へ手をかけながら、

『お父さんは枯草の下にゐます』

『？　？　？』



◇當人より確か

自動車が衝突して投げ出された人が病院へかつぎこまれた。心配さうに枕邊へ立つてゐた細君、醫者に、

『大分惡いやうですのね』



『いや、全く死なれたかと思ひましたよ』

これを聞いた夫、頭を動かして、

『死んぢやゐないよ。まだ生きてるよ』

『靜かにしてらつしやい。所夫、貴方よりか醫者の方がよく御存知ですから』

◇ズボン綺譚

チアリイ君はズボンがぼろ〳〵になつたので、既製品を買つて得々と歸つて來た。さて穿いて見ると長過ぎる。で、細君に少し短くしてくれと頼んだ。

『駄目ですよ、今は。赤ちやんのお衣服を縫つてるんですもの』



で、母親に頼んだ。

『今は駄目々々。お父さんのジャケツに釦をつけなくちやいけないから』

で、チアリイ君は鋏と針を持つて、自分で短くした。すると、チアリイ君が寢た後でこれを知らぬ細君が又短くした。翌朝早く起きた母親が御丁寧にも又短くしてしまつた。で、チアリイ君が何も知らずに意氣揚々と穿いて見たら、何と、膝までしかなくなつてゐたのである。

◇それでも困る

ペルシアへ旅行した或る人が、故郷へ歸つて來ると、召使のジョン君を呼んで、

『旅をした人と云ふものはね、旅行中に見聞した珍らしい事を得て話したがるもので、しかもそれには嘘が多い。おれもその轍を踏みはしないかと心配してゐる。で、お前に頼んでおくがな、おれが旅行の話をしてゐる時は、お前はおれの椅子の傍へ寄つてゐて、餘り法螺を吹くやうだつたら後から押しとくれ。さうすりや修正すからね』

ところが或る日のこと、この人が友人と飯を食ひながら、つい話に夢中になつてしまつた。



『君、僕あ尾が六十碼もある猿を見たぜ』

ジョン先生、こゝぞと後から押した。

『少くとも五十碼は確かにあつたな』

又、ジョン君が押すと、

『別に測つて見たわけぢやないが、四十碼はあつたに相違ないよ』

ジョン君が又押す。

…………………………の人た』

と里見君は徳子さんの虫の居所に氣がつかないで語り續けた。

『あなたは見榮坊ね。』

と徳子さんは突然親の仇を討ちにかゝつた。

『え？』

『お父さんが變人なら、あなたは見榮坊でございますわ。』

『何うして？』

『御自分の見識本位よ、御見識さへ立てれば私なんかは何うでも宜しいんでございませう。』

『憤つたのかい？』

『いゝえ。』

『でも顏色が變つてゐるよ。』

『私、悲しくなりましたわ。』

『何故さ？』

『叔父さんのところへは、私、唯一度眞の形式的に連れて行つて載いた丈けでございますからね。』

『又行くさ。』

『今度のことでも、あなたは叔父さんから訊かれない中にお話し下さるのが當り前ぢやございませんか？』

『さあ。然う思つたんだけれど。』

と里見君は念を[illegible]かれた。

『叔父さんが折角御親切に然う仰有つて下すつたら、一應私に相談して下すつても宜しいぢやございませんか？ 私、昨日の朝から幾度泣いたか知れませんのよ。』

『それぢや俺が一存で斷つたのが不平なのかい？』

『……………』

『しかし俺だつて、困るから何うぞお願ひ申上げますとは言へないよ。お前には叔父さんでも俺には重役だからね。見識張る次第でもないが、俺も男だ。』

『男でございませうよ。』

『え？』

『あなたは昨夜私が起きて下さいと申上げた時、「鼠だ〳〵」と仰有いましたわ。』

『言つた。』

『それから音が靜まつてから、「泥棒なら尚ほ靜かにしてゐなければいけない」と仰有いましたわ。そんな男があつて？』

と徳子さんは妙なことを武器に持ち出した。叔父さんに悉皆背負つて貰へさうな機會を里見君がノメ〳〵逸して來たと思ふと、腹が立つのだつた。（つゞく）——、作者佐々木邦氏はこの新家庭双六に渾身の力を注いで居られます。到るところ熱狂的大歡迎を受けてゐるのも決して偶然ではない。——

『叔父さんは百圓あれば百圓、二百圓あれば二百圓寄越すところだつたもの。』

『七十圓しか持ち合せがなかつたんでございませうね。』

『確かに然うだつた。紙入を明けて内身を悉皆くれたんだからね。俺は重役つてものはもつと持つてゐるものだと思つてゐたよ。』

『五百圓ぐらゐ入れてゐることがあるつて、お母さんが仰有つてゐましたわ。』

『然ういふ時に當ると宜かつたんだが、矢つ張り運がない。それで惜しいのさ。』

『でもあなたの出やう次第よ。』

『何うして？』

『困るやうなら相談に來いと仰有つたさうぢやありませんか？』

『それは然うだけれども。』

『いらつしやれば宜いわ。』

『馬鹿を言ふな。』

『あら！』



である。

『俺は固辭して來たんだ。』

『然うでございましたか。』

『しかし叔父さんはナカ／＼行き屆いた人だ。酸いも甘いも心得てゐる。』

『…………』

『俺の人格に何處までも敬意を表してくれる。』

『…………』

『困るだらうから何うかしてやらうとは決して仰有らない。萬事遠廻しだから、俺はお前を貰つても顔が潰れない。』

『…………』

『それでゐて結局はおれが力になつてやるといふことに歸着する。遣り方が巧いよ。「四谷を當てにするな。あれは變人だから」つてね。』

『父が變人でございますの？』

『うむ。』

『…………』

『里は四半分さ。俺が四半分引き受ける。』

『でも惜しいわ、此方のお金を使ふのは。』

『ひどいね。』

と言つたもの丶、里見君は嬉しかつた、あなたのは私のものといふ思想がこの程度の家庭では早く發達する。

『それに品物が出ないとも限りませんからね。』

『そんなことを當てにしてゐると失望するよ。』

『いゝえ、大塚さんの奥さんの御親戚が警視廳の刑事課へ勤めてゐますの。今日奥さんが態々そこへお出になつて特別に頼むで來て下さいましたから、出るかも知れませんよ。』

と徳子さんは昨日の夕刻と打つて變つて樂觀してゐた。取られた品物が戻ると思つたり、里から支度を爲直して貰へると思つたり、女といふものは空頼みで生きてゐる。



里見君は元來懐ろ具合に人生觀を左右される人だ。盜難には落膽したが、同僚と叔父さんから見舞を貰つた上に、郷里からタンマリ來る當てがある。それでこれも昨夜とは違つて元氣頗る旺盛だつた。

『惜しいことをしたよ。』

と夕飯の箸を取りながらニコ〳〵した。

『何故？　あなた。』

と細井さんは立ち上つた里見君を呼び止めて、
『これは俺から徳子へ見舞だ。』
と上着の內ポケットから取り出した紙入の內容を押しつけた。
『恐れ入ります。』
『遠慮は要らない。』
『はあ。有難うございました。』
と里見君は眞赤になつた。
夕刻、徳子さんは里見君の歸宅を待ち受けてゐて、
『あなた、今朝お母さんが來て下さいましたのよ。私、些つとも叱られませんでしたのよ。』
とイソ〳〵しながら報告を始めた。
『えへん。』
『皆つてことは無理ですけれど、半分ぐらゐは何うかして戴けさうなのよ。』
『えへん。』
『何あに？　あなた。』
『お土産だ。』
と里見君は細井さんから貰つて來たものを徳子さんの鼻先へ



突きつけた。
『あらまあ！　何うなさいましたの？』
『叔父さんからお前へお見舞さ。』
『まあ〳〵。』
『行き屆いてゐるよ。流石に苦勞人丈けのことがある。感心した。』
『七十圓ございますわね。』
と徳子さんは十圓紙幣を數へて見た。
『明後日あたりは郷里からも來る。一寸成金だね。』
『私、着物の方は里から拵へて戴く丈けで辛抱しますわ。』
『少しは何うかなりさうかい？』
『えゝ。精々半分ぐらゐでせうけれど。』
『皆背負はしちや氣の毒だよ。
『半分よ。』
『お前は半分で納得する約束だつたぢやないか？』
『えゝ。それですから半分で宜いのよ。』

てす』

『一體何うしたんだね？』

『昨日の朝六時少し前に徳子が起きますと、雨戸が一枚外れてゐましたので……』

と里見君も昨日から二十何回繰り返して充分に手に入つてゐた。

『朝まで些つとも氣がつかなかつたのかい？』

『はあ。』

『若いものは羨ましい。』

『つい不覺を取りました。』

『いや、俺は不眠症があるからさ。』

『はあ。』

『ところで何うだね？ そんなに取られちや早速困るだらう？』

『さあ。』

『都合がつきさうかね？』

『はあ。郷里へ言つてやりました。』

『成程。』

『何うにかなる積りです。』

『四谷は當てにならないよ。あれは少し變人だから。』



『そんなこともございますまいけれど。』

『萬一、その、何だね、困るやうなことがあつたらだね。俺のところへ相談に來なさい。』

『有難うございますが、自分の不注意ですから、自分で何うにか都合をつけます。』

『それちや然うし給へ。』

『はあ。』

『四谷は變人だからね。』

『さあ。』

『それぢや又。』

『失禮致しました。』

『あ。一寸待つてくれ給へ。』

『音がするんですもの。六輔に「起きて見て來て下さい」って頼むでも、「鼠だく。怖くはないよ」って、自分で怖がつて起きてくれませんの。』

『男のくせにそんなに弱いの？』

『決して強い方ぢやありませんわ。』

『それは然うと、徳子や。』

『はあ。』

『お前達は何處かで見て貰つたの？』

『易者？』

『え〻。』

『六輔はそんなこと嫌ひですわ。』

『でも、する丈けのことはして見る方が宜いぢやないの？　私、歸りに寄つて上げるわ。』

『然うね。けれども……』

『六輔さんが小言を仰有つて？』

『い〻え。そんなことはありませんけれど。』

『お金は私が出しますよ。』

『それぢや何うぞ。』

『まあ、勘定高い子だね。』



『オホ、、、。』

『オホ、、、。』

と母子の話は例によつて盡きるところを知らない。

その日の晝過、里見君は會社で細井さんに呼びつけられた。徳子さんの叔父さんだけれど、公務の關係は重役だから、會社では部下の禮を執る。里見君は竊かに細井さんの態度を研究して見て、公私の別の可なり嚴しい人と承知してゐる。

『何御用でございますか？』

と心の中では或は叱られるのかとさへ思つた。

『まあ、掛け給へ。』

『はあ。』

『今食堂で望月君から聞いたが、君は泥棒に入られたさうだね？』

と細井さんは稍急き込むだ口調だつた。

『はあ、會社で申上げては如何かと存じまして、つい……』

『大分やられたさうぢやないか？』

『千圓ばかりです。それが生憎のことに徳子のものばかり

ら、手つかずでしたけれど。』
『旦那は一々鍵をかけて置く方が宜いのよ。』
『その積りでしたが、お母さんがその中に叔父さんのところへ連れて行つて下さると仰有つたでせう?』
『えゝ。』
『それで、私、何を着て上らうかと思つて、一昨日あれこれと出して見て、ついそのまゝにしたものですから。』
『それぢや私の所爲?』
『まあ然うよ、早い話が。』
『ひどいよ、この子は。』
『オホヽヽヽ。』
『でも差當り困るわね。』
『何處へも出られませんわ。』
『私に賠償させる積り?』
『オホヽ。でも六輔はこの間申上げた通りよ。』
『何とかしてくれますよ。』
『いゝえ。』
『お郷里へ言つてやつたでせう?』
『それが大きく吹つかけると仰有つてたつた二百圓よ。迚も駄目ですわ。』
『街の通り皆と思つても、それはお前が無理ですよ。災難ですから、諦めをつけなければね。』
『えゝ。』
『私もお父さんに御相談して何とか色をつける積りですけれど。』
『本當に濟みませんわね。』
『今更言つても仕方ありませんが、お前達が餘り出て歩くものだから、狙はれてゐたんですよ。』
『刑事も然う申してゐましたわ。』
『氣をつけるんですね、これに懲りて。』
『昨夜から戸に一枚々々釘を差して置きますの。』
『然う毎晩は來ますまいけれど。』
『いゝえ。別のが來ないとも限りませんわ。氣味の悪いものよ、入られた後は。』
『用心するに越したことはありません。』
『私、昨夜は夜半に二度も目を覺ましましたの。』
『怯えてゐるのね。』

『唯々諾々ぢや體面にかゝはるといふのさ。評判が惡くなつてしまつて、一向昇級しない。まさかその爲めでもなからうが、去年首になつた。』

『成程。』

『分つたかい？』

『君だつたら何うだらう？』

『僕は會社員だよ。』

『唯々諾々の覺悟かい？』

『無論さ。手向ひをして怪我をしちや詰まらない。』

『その點は安心なものだよ、君にしても里見君にしても。』

『何故？』

『縛られてから目を覺まさあ。』

『斯ういふ皆見君があるものかね。』と里見君は持て餘した。



翌朝、徳子さんからの知らせが着くと、唯さへ寄りつきたいお母さんは手のものを置いて飛んで來た。

『不用心なことね。』

と咎めるやうに言つたものの、今更仕方がない。

『私のものばかりよ。』

『然うだつてね。一體何うして入られたのさ？』

『別に入られるやうな仕向けをしたんぢやありませんのよ。いつもの通り六時少し前に起きて見ますと、雨戸が一枚外れてゐるでせう？　おやと思つて……』

と徳子さんは物語り始めた。昨日から十數回繰り返してゐるので、上手になつてゐる。但しお母さんには取られた品物を一一詳しく話した。有り餘つて拵へたお支度でない。襦袢一枚帶一本にも二人の間に苦心や陰謀の歴史がある。

『夏帶は？』

『えゝ、夏物は大抵よ。冬物の方は鍵をかけて置きましたか

と川上君は何處までも人柄が好い。
用件が盗難見舞だから、物騒な話に花が咲く。泥棒から强盗に移つて、

『戸締りを嚴重にして置くことだよ。僕が一つ見てやらう。』

と坂本君が申出た。

『いや、それには及ばない。今朝刑事に敎はつた。』

『泥棒の方から言ふと、入り好い家があるさうだが、こゝは丁度その條件に當てはまつてゐるのかも知れない。』

『よせよ。』

『一度あることは二度あるからね。』

『内から釘づけにして置くから大丈夫だ。』

『地震の時出られないぞ。』

『それも然うだね。』

『二度あることは三度で、三度目の正直は强盗だらう。』

『よせよ。』

と里見君は德子さんが怯えるのを恐れた。

『强盗といへば、僕の親戚に氣の毒な人がゐる。』と川上君が思ひついた。

『何うしたんだい？』

『入られたのさ。』

『怪我でもしたのかい？』

『いや、怪我はなかつたが、陸軍の主計だからね。』

『君の話は分り悪いね。』

と坂本君が口を出した。

『主計でも軍人だぜ。』

『それが何うしたんだよ？ もつと長く話し給へ。ポツ〱切るから分らなくなる。』

『縛られたんだよ、强盗に、唯々諾々として。それで怪我はなかつたが、默つてゐれば宜かつたのに、有りのまゝを刑事に話したんだよ。するとそれが上役の耳に入つたのさ。』

『又切れたよ。それから？』

『後は常識さ。』

『簡潔過ぎるよ、君のは。』

『兎に角、軍人だらう。お互のやうな唯のサラリイ・マンぢやない。』

『成程。』

かい？』

『然うさ。』

『實に不思議だ。』

『いや、不思議ぢやないよ。僕達は枕元の簞笥を悉皆引き出されて、朝まで知らなかつたんだからね。』

と川上君は一段上を行つてゐる。

『君のは當時評判だつたよ。』

『實はまだあるんだよ。』

『あれから又やられたのかい？』

『いや、秘密があるんだ。』

『何んな？』

『妻が默つてゐろと言ふから匿してゐたが、實は泥棒の野郎に愚弄されたんだよ。取られたのは仕方がないが、あれ丈けは考へ出すと腹が立つ。』

『これは聽きものだ。』

と坂本君は失策なら誰のでも宜い。

『枕元が直ぐ簞笥で、奴、仕事が爲惡いものだから、蒲團のまゝ一間ばかりグルッと引つ張りやがつた。それを些つとも知らずにゐたんだから驚くだらう？』

『呆れるよ。』・



『朝目が覺めると、方角が變つてゐる。それで直ぐに氣がついたのさ。』

『そんなことぢや身體を盗まれても知らないでゐるだらう。』

『實際だ。』

『張合がないね。』

『餘程力のある奴に相違ない。手がかりはそれ丈けさ。』

『刑事には話したのかい？』

『うむ。』

『何と云つてゐたい？』

『然ういふことは往々あるつて。』

『嘘をつけ。』

『ハツハヽヽ。』

『取られたものは到頭出なかつたんだね？』

と私は參考の爲めに訊いて見た。

『うむ。』

『僕のところのも駄目だらうな。』

『出るものか。易なんか見て貰ふと損をする。』

『君は見て貰つたのかい？』

『うむ、三軒が三軒違つたことを言ふから何にもならない。』

『同じことなら文句を言はないで僕達の顔を立て給へ。』

といふやうな押し問答の末、

『それぢや恐縮だけれど、戴いて置く。有難う。』

と里見君は納得した。

『漸く物の道理が分つたね。』

と坂本君も滿足だつた。

『實は一々お禮を言ふのが面倒だからさ。』

『そんなことだらうと思つたよ。しかし香奠よりは宜からう。』

『それは然うさ。』

『强盜だつたら、今頃はそんなことになつてゐないものでもない。』

『ソロ〳〵始めたね。』

『用件が濟むだから、もう個人の資格さ。少し惡口を言ふかも知れない。』

『それは斷らなくても分つてゐるよ。』

『泥棒に入られた人間の惡口を言つても、それを返すなんて言つちや困るよ。』



『大丈夫だ。』

『僕は川上君の次は君だらうと思つてゐたが、果してその通りだつた。』

『泥棒に入られる順番かい？』

『いや、ボンヤリしてゐる程度さ。』

『おや〳〵。』

と里見君は頭を掻いて、

『川上君、異存はないかい？』

と訊いた。

『ない。』

『諦めが好いんだね。』

『坂本君は特別さ、僕達は當り前さ。』

と川上君も私を甘く見てゐる。

『里見君、泥棒の入つた時、君達はこの部屋に寢てゐたんだらう？』

と坂本君は蚊帳の釣手に目を留めた。

『然うさ。』

『この襖は開けて置いたんだらう？』

『うむ。暑いからね。』

『それで隣りの部屋の簞笥を開けられるのが分らなかつたの

『何だい？』
『實は今晩は川上君と二人で課を代表して上つたんだよ。』
『ふうむ。それで？』
『斯ういふ事情だから、お邪魔でも勘辨して貰ふ。』
『何を言つてゐるんだい？　ゆつくり話して行き給へ。』
『帳面の方は無勘定にしてくれるやうにお執成しを頼む。』
『何の帳面だい？』
『奥さんの覺え帳があるつてぢやないか？　邪魔に來た奴の回數をつけて置く。』
『馬鹿ばかり言つてゐるね。』
『いや、庄司君から警戒されて來たんだよ。』
『何うも彼奴は宜しくないことばかり言ふ男だ。』
と中見君、必ずしも來訪者を厭ふのでない。來れば無論歡迎する。しかし來なくても、徳子さんがゐるから淋しがらない。今やその徳子さんが再び存在を示した。急に改まつた二人にお茶を薦めて、

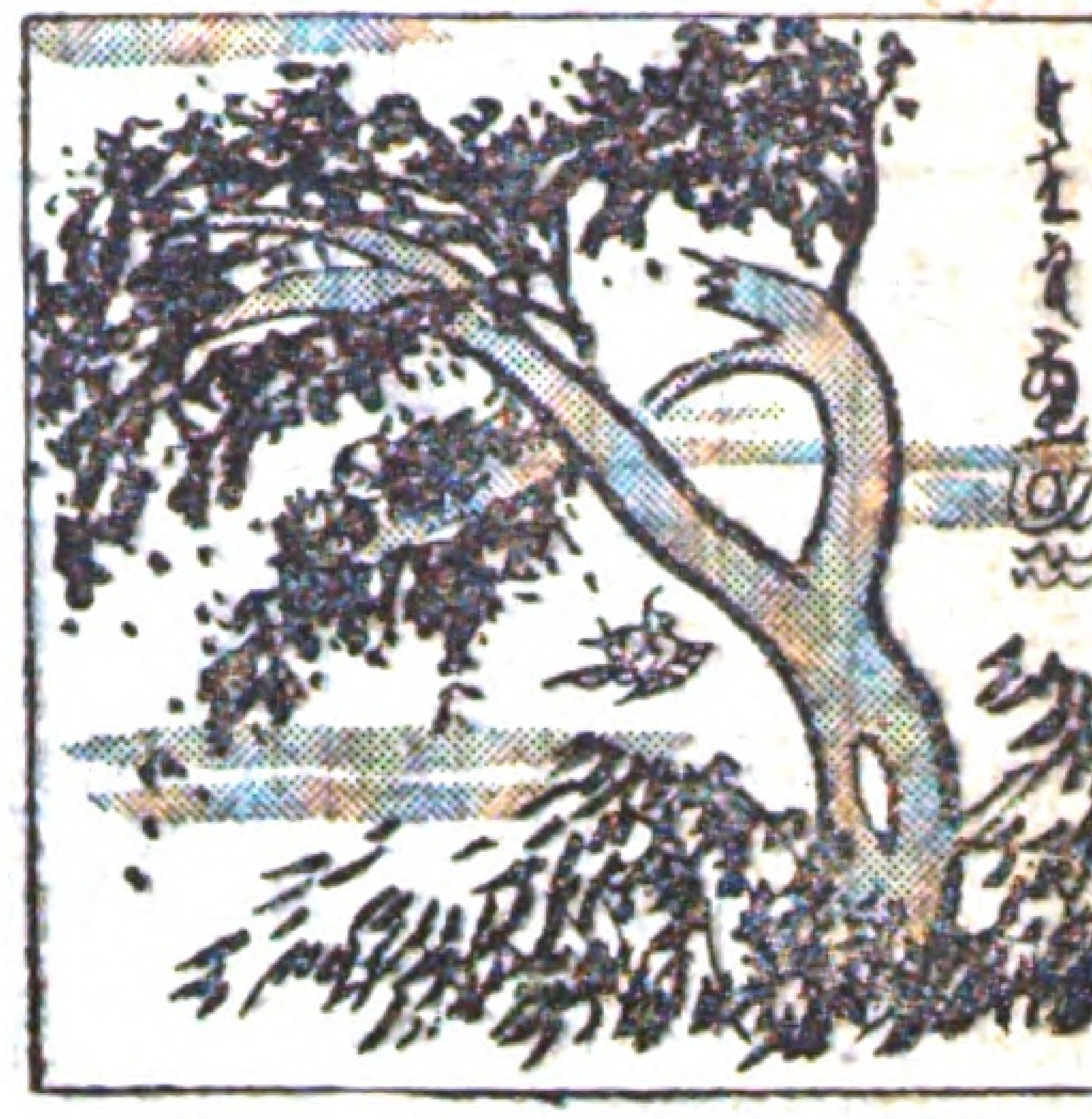


『何うぞ御ゆつくり。』
と會釋をして又消えた。
『早く用件を片付けて上下を脱いでしまはう。實は課長初め一同から宜しくといふので、金一封、お見舞さ。』
と坂本君は懐中から取り出した。
『あんなにお斷りして置いたのにね。』
『いや、眞の形式だよ。かれこれ言ふほどのものぢやない。』
『しかしこれはお斷りする。盗難は類燒なんかと違つて、自分の不注意だから、貰つちや氣が濟まない。』
『君、それぢや僕が困る。僕は貰つたんだから。』
と川上君はその爲め勸誘の適任者としてついて來たのだつた。普通の慶弔以外に類燒見舞の新例を殘したのは望月課長で、盗難の方は川上君が開祖といふことになつてゐる。前例が鼻の先に坐つてゐては仕方がない。
『御好意は分つてゐる。頂いたも同じことだよ。』

『さあ。掛け給へ。』
『早速手紙を書いてゐたね？』
と坂本君は椅子を引き寄せた。
『うむ。』
『郷里へだらう？』
『然うさ。』
『盗難にかゝり明日にも差支へ候間金二百圓至急願上度かい？』
『君は見たね？』
『見るものか。』
『でも圖星だもの。』
『金高もかい？』
『うむ。』
『ハッハヽヽ。』
『坂本君は天眼通だ。』
と川上君も笑つた。
『君のところは實際不用心だよ。』
と坂本君は首を傾げた。
『何故？』
『今も川上君と二人で三度も四度も呼んだんだぜ。』



『然うかい？』
『川上君が里見のノロ輔つて呼んだのが聞えなかつた？』
『僕、そんなこと言ふものか。』
と川上君は正直ものだ。
『些つとも聞えなかつたよ。』
『言はないんだもの、聞える筈はない。』
『分つてゐるよ。』
『仲が好過ぎると第三者の聲なんか耳に入らないんだね。』
と坂本君は未だ諷ふ。
『手紙を書いてゐたからさ。』
『あれぢや三圓五十錢の白靴を失敬されても分らないよ。』
『値段丈け餘計だ。』
『兎に角、些つと氣をつけ給へ。』
『よし〳〵。』
『時に里見君、これから改まるぜ。』



諧謔小説

新家庭双六

佐々木邦
挿繪 田中比左良

禍福

『御免。』

といふ聲がする。來訪者は既に再三呼んだのだけれど、里見君は徳子さんを相手に盗難品の見積りを郷里への手紙に書き込むでゐたので氣がつかない。

『君、これだから入られるんだよ。』

と一人が囁いた。

『ゐないのか知ら？ 御免！ 御免下さい。』

ともう一人が聲を勵した。今度は通じて、徳子さんが立つて來た。

『まあ／＼、何うぞお上り下さい。あなた、坂本さんがお見えになりましたのよ。』

『やあ／＼。さあ、何うぞ。』

と里見君も現れて請じる。來客は直ぐに客間へ通つた。

『取散らしてゐまして。』

と徳子さんがテーブルの上を氣にする。

『宜いよ。』

と里見君が片付ける。その間に、

『奥さん、今朝は何うも飛んだことで……』

と坂本君が挨拶を始めた。

『私のところは經驗がありますから、特別に御同情申上げます。』

と川上君も改まつた。

『何うも態々恐れ入ります。』

と徳子さんは好[illegible]して、後を里見君に讓つた。

日本對各國俚諺番附

行司
- 同情　わたる世間に鬼はなし
- 親切　親切は至るところにある

勸進元
- 迅速　思ひ立つたが吉日
- 延引　延引は時を盗むものなり

日本ノ部

- 横綱　三ツ兒の魂百まで
- 大關　石橋も叩いて渡れ
- 關脇　塵も積つて山となる
- 小結　家貧にして孝子出る
- 前頭　二兎を追ふものは一兎を得ず
- 同　噂をすれば影とやら
- 同　惡錢身につかず
- 同　我が身をつめつて人の痛さを知れ
- 同　人は盗人明日は雨降り
- 同　朱に交れば赤くなる
- 前頭　夫婦喧嘩は犬も食はぬ
- 同　念には念を入れよ
- 同　船頭多くて船山へ上る
- 同　猫に小判
- 同　石の上にも三年
- 同　雪は豐年の兆
- 同　女心と秋の空
- 同　急がば廻れ
- 同　待てば海路の日和とやら
- 同　釋迦に說法
- 前頭　蟻の穴から堤が崩る
- 同　鳥なき里の蝙蝠
- 同　親しき仲にも禮儀あり
- 同　安物買ひの錢失ひ
- 同　あぬいてのつばき
- 同　早や起きは三文の德
- 同　一文惜しみの百失ひ
- 同　馬鹿につける藥はない
- 同　飼ひ犬に手を噛まれる
- 同　今いり二十日

各國ノ部

- 横綱　小兒は大人の親
- 大關　渡船に乘る前に川を見よ
- 關脇　多くの小は大となる
- 小結　卑賤の小馬中より駿馬が出る
- 前頭　一時に走つたり吠えたりは出來ぬ
- 同　鬼の話をすれば蹄の音が聞える
- 同　惡しく得て惡しく費す
- 同　首斬る罪人にも三日の日延あり
- 同　天氣のいゝうちに枯れ草を作れ
- 同　黒石は白くなるためしなし
- 前頭　痴話喧嘩はキッスで納る
- 同　とろ火は甘きパンを作る
- 同　料理人多くて美を損ふ
- 同　豚の前に眞珠
- 同　層一層城は築かる
- 同　水の下は饑饉雪の下には豐年
- 同　秋の暑と老人の健康は當にならぬ
- 同　急いで食へば咽喉へつかへる
- 同　雨雲の通り過ぎるまで待て
- 同　祖母に鷄卵の吸ひ方を敎へる（やうなものだ）
- 前頭　小さい穴で大船が沈む
- 同　盲者の國には一目の人が王なり
- 同　禮儀禮容は自己を守る濠である
- 同　甘い取引は二度考へよ
- 同　太陽に向つて唾せよその唾爾にかゝる
- 同　早や寝早起きする者貧困を知らず
- 同　瓦一枚惜んで棟を腐らす
- 同　我まま直す藥なし
- 同　駱駝に乘りながら犬に噛まる
- 同　新らしい箒はよく掃ける

愛知縣　山川武夫作・早稻田大學講師　花園兼定校閲

、胸に一物有明の、月の光で見て取つた、お主の盗つた共ものを、些と此方に入用だ、キリキリ置いて消えて失くなれ」權『何だと此の野郎、馬鹿こけ、消えてなくなれとは何だ、この大けえ身體が何處へ消えて失くなるだ。馬鹿野郎』ブ『アレ……何を小癪な』

權『何が小癪なだな』ブ『何を小癪なだ是れだよ』權『放さねえか、此の野郎』ブ『いけねえな、忘れてしまつてやがる、仕樣がねえな……オイ〳〵忘れちやア駄目だよ、肝腎な所だよ』權『何だ、肝腎な所とは』ブ『立廻りだよ』權『立廻り、さうか、喧嘩か、喧嘩なら負けねえぞ、サア放せ、此の野郎、尻ツ尾を取つちやア駄目だ、放さねえか此の野郎、ソラどうだ』權助いきなりブラ右衛門の頭をポカリやつた。驚いたのは見物見『何だオイ、



これアいけねえ、舞臺で本當の喧嘩が始まつたよ、この方が面白いよ……ヤイヤイ權助、大分強いな、俺等見て居る、一つ相撲取つて呉れ』權『宜し相撲なら負けねえ、サア來い』ブ『相撲取るんぢやアねえ、目を眩すんだよ、引繰返れアいいんだよ……さう〳〵後ろへ手を廻して押へてろ』○『ア、縛られやアがつた、權助、態ア見やがれ、縛られたな』權『馬鹿こけ、前から見ると縛られてゐるやうでも、後ろで繩尻を押へて居るぞ……何だ、嘘だ、嘘なんぞ吐くものぢやアねえ、疑ぐるなら見せべえか、ソレ此通りだ、どうだ』權助の奴は兩方の手を放して踊り出した。吉『いけねえな、今度は踊り出しやがつた、仕樣のねえ野郎だ、權はねえ、本當に縛れ〳〵』到頭本當に縛つてしまつた。こじり上げると云つても本當にやるんぢやありませんか、前に打たれて居るから幾らか口惜しい、本當に縛の穴へ突込んで、ブ『サア何者に縛まれた、眞直に白狀しろ』權『ウーム、五十錢貰つて番頭さんに縛まれた』

——をはり——

ーイ、確かりやれッ、權助、マンマをどうしたんだい、マンマを焦がしたかア」權『馬鹿アこけ、俺アこの家へ來て飯炊いて給金取つて以來、一遍も飯なんぞ焦がしたことはねえ、汝等そげなことを吐かしやがつて飯の炊き方てえものを知ンめえ、飯の炊き方てえものは、初めチョロチョロ中パッパ、じわ〱時に火を引いて、赤子泣くとも蓋取るな……』吉『オイオイいけねえな、どうも、臺詞を忘れて飯の講釋をしてやがる……マンマと寶藏に忍び入り』權『マンマと寶藏につッ入り』吉『つッ入りぢやないよ、忍び入りだ』權『忍び入り……』吉『奪へ取つたる讓葉の御鏡……』權『奪へ取つたる柚子味噌の背物……』吉『意地が穢ねえと見えて食物のことばかり言つてやがる、ゆづり葉の御鏡だよ』○『ヤイ柚子味噌の背物は金山寺ぢや』權『何をッ此の野郎、横から口を出すない、誰だと思つたら爲の野郎だな、喧嘩こくだ、チョックラ出ろ』權助カン〱になつて怒つてしまひます。その内に後ろから出たのが夜廻りの提灯屋ブラ右衛門、この人は芝居の心得のある人ですから、權助の刀の鐺を持つてトントン〱と三つ退らうとしたんだが、權助は中々退らない。仕樣がないから無理に引張つてブ『曲物待つた、今宵夜廻りの道すがら



17



大島伯鶴師熱演の大長篇講談

『三家三勇士』

いよ〱次號から掲載!!

水戸、尾張、紀伊三家三勇士の、眞に痛快無比、壯烈極る大武勇講談、これ大島伯鶴師十八番の名講談中の名講談！　氏が一世一代の大熱演は恐らく天下を熱狂せしめねば措かぬであらう！　次號をたのしみにしてお待ち下さい!!

つて今時分便所なんぞへ這入つてるんだよ』權『俺アも我慢すべえと思つたが、幕が明く途端に出たくなつただ、憎腹下つてるだから、我慢してやつて若し舞臺の上でやつちやア汚ねえと思つて……』吉『冗談言つちやアいけないよ、舞臺でやられて堪るかい、出るんだよ』權『何處へ出るんだ』吉『何處へぢやアないよ、藏ア切破つて出るんだよ』權『ア、さうだ、忘れちまつた』吉『忘れちやア困るよ……刀はどうした』權『刀、アレ雪隱に忘れて來た』吉『仕樣がねえな、刀を雪隱に忘れたりしちやア、呆れたものだ……サア〳〵此方の桝から出るんだ〳〵』と云ふので權助を突き飛ばしたから、權助ヨロ〳〵として壁際共前へ轉がり出た。○『オイ源さん、御



四

覧よ、出たよ、出かたが不思議だね、轉がり出やがつたぜ、向脛を撫でてらア……恐しい汚ねえ脛だな、これが伊勢屋の坊ちやんかい、變るもんだねえ、役者は化物てえがね、それは隨分と變るものだけれども、形まで變るのは不思議だね、若旦那はさう瘠せては居ねえんだけれども、何だか恐しくデブ〳〵肥つて短かくなつちまつたな』源『矢つ張り凝つてるんだね、何處で詰めたんだね』○『こりア褒めやうぢやアねえか……ヤア〳〵蒼大將ツ、お賴み申しやすツ、日本一ツ、天道樣ツ、舞臺を背負つて立てツ、女殺しツ、年増殺しツ、新造殺しツ、人殺しッ……』權『チョックラ ハア此の野郎前え出ろ、どうもハア穩かでねえことを吐かしやがつたな、年増殺し、新造殺し、人殺しとは何だア、馬鹿こきやがつて、俺ア人殺しでねえ、飯炊の權助だで……』○『どうでえ、伊勢屋の若旦那かと思つたら權助が出て來やがつたんだ、エラク威張つてやがらア……ヤイ〳〵權助、しつかりやつて呉れツ、牛蒡燒いて押ツ付けるぞッ』權『何だ、此の野郎、牛蒡燒いて押ツ付ける、馬鹿野郎、ハア俺を猿だと思つてやがるな、俺のやることを見て魂消るな……エ、ありがたやアー、かたじけなやアー、マンマと……マンマ……難かし字書きやがつたな、こんなハア難かしい字は俺ア讀めねえ、マンマと……、俺ち[illegible]かね、マンマー、マンマー……』○『ヤ

けア困るな、ぢやア斯うしよう、今の曲物の裏に書いてやらう、お前に讀めるやうに假名で書いておくから、讀みながら述べたらいゝだらう』權『讀みながらなら雜作ねえこんだ、それぢやアやるべえ、それからどうするだ』吉『お前が行き掛ると後から出るのが袴を穿いて股立を取つた夜廻りだ、お前の刀の鐺を持つて、トントン〳〵三つ退る「曲者待つた、今宵夜廻りの道すがら、胸に一物有明の、月の光で見て取つた、お主の盜つた其物を、些と此方に入用だ、キリ〳〵置いて失せやがれ」斯ういふ、さうするとお前が「俺のものした此物を汝等に渡してなるものか、其處を押開いて通してしまへ」向ふが「何を小癪な」ポンと拂ふのが端緒だ、チツタンチツタンチツタンタン、この鳴物に合はして立廻りをやるんだ、十分にやつて吳んねえ』權『それアとても十分には出來ねえだ、俺アえらく腦が惡いだからな、クルクル廻つた日には目が眩るだ』吉『馬鹿だな、この男は、立廻りだつて立つて廻る奴があるかい』權『アゝ立つて廻るんぢやアねえのか』吉『さうよ』權『どうするだ』吉『困るな、どうするだつて早くいへば喧嘩か』權『イヤ俺喧嘩なら負けねえ、相手は誰だ』吉『相手になるのは提灯屋のブラ右衞門か、あの野郎ハア生意氣な野郎だて、うんとハア打擲るべえ』吉『擲つちやア いけないよ、芝居だよ』權『ナーニ芝居だつて二ツ位宜かんべえ』吉『宜くはないそんな、亂暴しちやア困るな、それからブラ右衞門がお前に當身といふやつを喰はせる』權『御馳走樣でがす』吉『何を』權『御馳走樣でがす』吉『何だい、御馳走樣てえのは』權『當身を喰はせるんだんべ』吉『馬鹿だな、當身を喰物と思つてやがる、喰物ぢやアないよ』權『當身と云ふのはどんなものだな』吉『拳固を拵へてお前の横ツ腹を力にまかせてドンと突くんだ』權『命懸だ、止すべえ五十錢返すべえ』吉『又出しやがつた、

見るんぢやアないよ、無遠慮で困るな』權『さうでねえ、後で入つて居らぬと喧嘩にならねえ』吉『そんなことはないよ』權『幾ら入つてるか、イヤー五十錢入つてるな』吉『何故そんなことを大きな聲で怒鳴るんだよ、仕舞ひなよ』權『イヤー貰つとくべえ』吉『所でな、お前に頼みがあるんだ』權『ヘイ』吉『と云ふのは外ぢやねえんだが、芝居を一つ演つて貰ひたいんだがどうだい』權『有難えな、錢イ貰つて好きな芝居を演らして貰つちやア濟まねえ、難かしものは迚も出來ねえだ、どんな事をやるだ』吉『伊勢屋の若旦那の代りに鎌倉山の非人權平といふ役をお前にやつて貰ひたいな』權『ヘエどんな事をやるだな』吉『することは雜作はねえ、寶藏へ忍び込んで寶物になつた鏡がある、そいつをお前盗んで來ればそれでいゝ』權『止すべえ、五十錢返すべえ、どうも五十錢貰つて泥棒になつちやア國の阿父ちやんに申譯ねえ』吉『冗談言つちやアいけねえ、本當に盗人をする奴があるかい、狂言でやるんだよ、鏡だつて本物ぢやアない、小道具で土藏は納豆の曲物だ、こいつへ銀紙が張つてある、鏡のやうに見える、こいつをお前が樂屋から出るときに懷ろへ入れて出る。權『ハアさうか、それでハア安心した、ぢやア本氣に盗むんでねえだな』吉『當り前だ、本當に盗んで堪るものか、狂言だよ』權『そんならやるべえ、それからどうするだ』吉『それから拍子木が入つて幕が明くと、黄八丈の着物に紺獻上の帶、朱鞘の大小といふ扮裝で、五分月代の髪を被て土藏を切破つて出るんだ……土藏を切破るつたつて向ふから見ると紙で土藏のやうに出來てるんだ、それを切破つて出て來るんだ、切破つて出て來たら刀を鞘に收める、さうして盗んで來た鏡を恭しく戴いて「有難え忝けねえ、マンマと寶藏へ忍び入り、奪ひ取つたる譲葉の御鏡、小藤太樣に差上げりやア、褒美の金は望み次第、人目に懸れば一大事、少とも早くオ、さうだ」これだけのことをお前がやりやア宜いんだ』權『えらく長え文句だな、そんな長え文句はとてもハア一遍や二遍ぢやア覺えられねえだ』吉『困るな、急場に覺えて異れな



前さん、今言つた高え所に被つかつて居る女ッ子だ、何とかいふ女ッ子だな、さうだ、ひかるちうだ』吉『ひかるといふ女があるかい、お輕だな』權『又間違えた、えらく光る物騒してるだからひかると間違えた』吉『よく間違へるな、で何か由良之助をやつたのは何といふ人だ』權『野良野郎をやつたのは下新田の茂十てえ奴でがす』吉『變な名だな、旨く行つたかい』權『それが旨く行かねえ』吉『旨く行かねえ、どうした』權『其處にゐるのはお輕でねえか、さういふ聲は由良さんだんべてえ所があるだらう』吉『だんべてえのは變だな、あるよ』權『それを茂十の野郎が見物がえらく居たもんだで逆上やがつてな、そこに居るのは汝は權助でねえか……』吉『これはいけねえな、お輕と權助は大變な間違だ、お前困つたらう』權『困らねえさ、この野郎仕樣のねえ野郎だと思つたからな、そのあけた穴を埋めたでがす』吉『偉いなア、あけた穴を埋めるなんて豪氣なものだ、何と言つた』權『如何にも俺は權助だが、さういふ汝は下新田の茂十でねえか……』吉『穴も何も埋りはしねえやな、滅茶々々だ』權『何でも下りろ下りろちうて長え梯子を突ッ掛けた



だ、こんなものをハア下りるのは小面倒臭えと思つたからな、わし尻を捲つて飛び下りたでがす』吉『大變なお輕だな、見物は默つて居たかい』權『イアー默つてねえ』吉『何か言つたらう』權『どうもハア魂消たもんだ、お輕の癖にしやがつて尻捲つて飛び下りるちうことはなかんべえ、今見ればお輕の股倉に變なものがブラ下つてゐた、あのブラ下つてゐた物は何だてえから、どうも負けちやアゐられねえ、默つて見てろ、今日のお輕は雄であるだ……』吉『冗談言ふなよ、雄のお輕と云ふのがあるかい、マア宜いや、手心があればそれで宜いんで、これはホンの少しだ、煙草買つて湯に入る位の錢があるんだ、お前にやるから取つて置きねえ』權『ヤー要らねえ、お前樣には厄介になつてるだ、止すべえ』吉『折角出したものだから取つてお置きよ』權『さうでがすか、ぢやアマア御遠慮なしに頂戴します、幾ら入つてるか……』吉『中を

行かにやアなんねえと思つてな、急いで駈出して來やした。何かお使ですかな』吉『イヤお使ぢやアないよ、お前を呼んだのは外ぢやアないんだが、少し聞きたいことがあるんだ』權『ハイ何でがす』吉『お前が國にゐる時にだな、些とは芝居などをやつたことがあるか』權『こりやア魂消た、マア番頭さんのお言葉とも存じませんで、國にゐる時にハア芝居を些とやつたことがあるか、かちうのは宜くねえ言葉だな、かとかとてなんちうのは人を疑ぐる言葉だて……』吉『イヤ氣に障つたら勘辨して與んねえ、疑ぐる譯ぢやアないが、少しやつたことがあるかい』權『やつたことがあるかなんて馬鹿こかねえもんだな、わし此處へ來て飯を炊いてるだから飯炊權助だ、國へ居て見さつせえ、偉えもんだ、お役者樣でがす』吉『お役者樣は宜かつたな、どうもものが叮嚀過ぎると可笑しいや、何をやつたい』權『何をやつたつてハア色々なことをやつたでがす、わしが國を出る時にやつた狂言が何とか言つた、ア、いゝ、はなでーちん提灯ぶら……』吉『言ふことが可笑しいな、はなでーちん提灯ぶらなんて聞いたことがない、假名手本忠臣藏の間違ぢやアないか』權『さうだよ、忠臣藏だ、えらく提灯がぶら下つてるだで提灯ぶらと間違へた』吉『妙な間違をしたものだな、いゝ狂言だね、大序、二段目、三段目、四段目、五段目、色々な所がある、お前の演つたのはどんな所だ』權『わしの演つたのが何ちう所か、何でも高え所に女ッ子が載つかつて鏡見てるだな、さうするとお前、下に野良野郎が書出しを讀んでるだな』吉『言ふことが不思議だな、高え所に女が載つて鏡を見てゐる、下にゐる野良野郎が書出しを讀んでると云ふのはをかしいな……ア、ぢやア七段目だな』權『それだ、七段目ちうかな』吉『何をやつた』權『何をやつたつて俺ア女形さ』吉『お前が女形かい、ヘエ頑丈な女が出來たなア、丈夫一式てえ女だな、手織木綿見たやうな女だ、いゝ役ぢやアねえか、赤い前掛を締めて手の鳴る方へと出て來るな、あれか』權『あれぢやアねえ』吉『あれでない、ちやア どれだ』權『どれだちうてお



四

やア蒼蠅いから苦情のないやうに、運賦、天賦で一番籤を引かう、良い役を引けば無論のこと、惡い役を引いても苦情なし、相談も纏つて宜からうと云ふので籤を引いた。引いて見ると惡い役でも苦情が言へない、腹の中は面白くはありませんが決めたからどうも仕方がない。稽古をやります。愈々初日になつた。當日は見物が一杯來て居るが役者が來ない、役がいかないと云ふ騒ぎ。吉『困つたねえ、伊勢屋の若旦那はどうしたんだな、見物は一杯來て居るんだがね、あの人が來れば幕が開くんだけれども、どうしたてんだな』△『エ、それは今急にお使でお斷りが來ましてな』吉『斷りが、何だい』△『風を引いたんで少々熱が高いので今日は伺ひ兼ねるから皆樣に宜しくと斯う云ふ譯で』吉『いけねえな、困るなア、もう少し早けれぱどうでもなるんぢやアねえか、今日になつて其麼ことを言つちやア困るな、間に合はないよ、見物はあの通りワイワイ怒鳴てらア、仕様がねえな、だけれども代り位來るだらう。誰か』△『エ、エ代りは來るさうです、番頭さんの安兵衛さんと云ふ方が來るさうで』吉『安兵衛さんなら知つて居る、太つた人の赭ら顔だ、芝居が出來るのか、あの人は』△



『さうでがすな、芝居は餘り巧くないんですがな、算盤は大變巧いんでがす』吉『冗談言つちやアいけねえ、錢勘定するんぢやアねえやな、算盤が巧くたつて芝居が出來なければ何にもならねえぢやアねえか、仕様がないな、どうも、今急に代りと言つた所で大變だ、ぢやア斯うしよう、あの田舍者で飯を炊いてる權助、彼奴はね、些とは手心があるんだらう、チヨイチヨイ箒なんぞ擔いで見得を切つてゐやがる、面白い奴だ、彼奴に押ッ付けてしまはうぢやないか、ア、直ぐ呼んで來てお呉れ、たゞ呼出しちやア駄目だよ、番頭の吉兵衛が呼んだと云へば直ぐ來るから、直ぐ呼んで來てお呉れ……ア、さうか、御苦勞さん、直ぐ來るッて、ア、御苦勞さん……ア、來た／＼、サア／＼此方へ來な、立つてちやアいけない、坐んなよ』權『エ、今俺薪割るべえと思つたら吉兵衛さんが呼んでるちうから、お前樣が呼ばつてるなら何はさておいても



落語　素人芝居

三遊亭小圓朝

挿繪　脇谷素文

相變らずお笑ひで少々の間お目を拜借致します。十人寄ればお氣は十種で、お氣合と云ふものが御銘々にお變りになります。從つて好嫌ひと云ふものがございます。先づ御酒のお好きなお方がございます。中には甘い物を日に一遍喰べないと何だか間が拔けて居るやうな心持がしていけないなんと云ふ色々でございまして、見る物聞く物がその通り、浪花節のお好きな方もあればお芝居のお好きなお方もある。好きを通り越して芝居をたゞ見て居るばかりちやア面白くねえ、一つやつて見たいと云ふので、素人芝居なんと云ふのが能くございます。是れはどうも旨く行く道理はない。商賣人でも間違つて演ることがございます。けれども素人衆のお演りになるのは給金を取るのぢやない、道樂でやるんですから、東京で一二を爭ふ劇場を借りてさうして何百圓と云ふお金を投じてやるなんてことも昔はありました。役不足と云ふものがございます。これは誰しも良い役がしたいと云ふのは當り前の話で、忠臣藏でもやらうぢやないかと云ふことに事が決まるとどうも厄介、同じお錢を出すんだから勘平をやつて見たいと云ふ人ばかり、與市兵衛をやる人は一人もない。○『ねえモシ』△『ヘエ』○『エ、忠臣藏てえことになりました、狂言が。所で役割なんでがすが、一體貴方は何をおやりになりますな』△『さうでがすな、同じことなら一つ勘平を願ひたいんでがすが』○『結構でございます、ぢやアまあ貴方は勘平、そちらの方は何をおやりになりますな、狂言は忠臣藏なんでがす』□『勘平を願ひませう』○『そちらの方は』×『手前も勘平です』言ふ人が殘らず勘平、仕方がない、面倒臭いからと云ふので皆勘平にしてしまふ。此奴に鐵砲を擔がして舞臺へズツと列べてしまつた。幕が開いた。吃驚りしたのは見物です。始から終ひまで勘平だ。○『オイ吉さん、御覽よ、舞臺を』吉『何だい、こりやア、始から終ひまで勘平が列んでるな、何だつてこんなに勘平を列べたんだい』○『列べる譯だよ、かんぺい式だい』詰らないことを言つて混ぜつ返して居ります。やる度の苦情です。けれども好きな連中ですから其の時期が來ると演りたくなる。苦情があつち

ハ、、』勇藏、宗五郎の手を取つてグッと引起し、塵を拂つて、勇『師匠さん、貴方を倒して濟みません。堪忍して下され』師匠さん今度はわつしに一遍打ッ突かつて見なされ。宗『馬鹿野郎、默つてろい。あゝ恥しい。併し偉い者ぢやなア。俺は目がなかつた。飛んだ金箱ぢや。偉い弟子が來をつたわい』非常に喜んだ。見物一同もたゞ呆氣にとられて見てをりました。木村庄之助はニコニコ笑ひながら、着物と下駄を携へて、勇藏を頻りに讃めそやす。

さてこの勇藏、柏戸、雷電、谷風三力士の薫陶を受けて、ドンドンと頭角を現はし、數年ならぬうちに幕内力士に昇進しました。越後の國から出身したと云ふので、番附面に越の海勇藏と現はれ、寛政に於ける小兵力士でよく大敵を倒し、名聲を揚げたのは此男でございます。出世相撲越の海勇藏の一篇、これまでと致します。（をはり）



数百人の實驗殆んと例外なし

すばらしい皮膚病藥の發見

皮膚病中の難物たる水虫タムシの特効藥が出た。昨年我が社石澤氏の頑固な水虫が見事に全治した外、社員十數名に試驗し悉く著效を奏したので、本社代理部でも弘く本藥を推奬して居る。

▲貴社御發賣の二回水を買求め使用せしに二ケ年間のタムシが、藥名の通り二回で全治し歡んで居ります。大阪府茨木町坂下小一郎

▲貴社の二回水はステキに效きまして、二年越のみづ虫が見事に治りました。誠に有りがたく御禮申上げます。長野縣小諸町大塚賢

▲貴社二回水の效能顯著にして多年の水虫に惱みし小生此靈によつて救はれた喜び、默し難く厚く御禮申上候。大分縣速見郡八坂村藤澤橋男

▲私事數年來頭部から局部に瘙痒限りなき田虫が靈藥二回水にて全治し回生の歡びに浸つて居ります。鹿兒島縣伊集院町久保チヨ

▲貴社ヨリ先頃買求メタル二回水使用ノ結果遂ニ全治ノ模様見エ候ニ付壹圓ノモノ二個至急御送付願上候。軍艦青葉小菅恭造

——定價十二瓦入壹圓・送料内地二十錢領土五十錢——

東京市本郷駒込坂下町　講談社代理部　振替東京六六二九番

を訴へて、休暇をとることにした。其間、どこへ轉地療養にゆかうかと考へたが、ドクトルの云つたサント・ドミンゴ島も面白いと思つた。丁度、その時、本國では同島に海軍根據地をつくることになつてゐたので、世間の噂に上つてゐた。で、彼は、島へゆくことに決めた。

安心するやうに、母親にも打ちあけて、旅行の仕度をしてゐると、日頃仲よくつきあつてゐる友人がぶらりと訪ねて來た。

『おい、君は、休暇をとつて旅行するんだつてね』

『さうだよ』

『只、ぼんやり旅行するのか』

『む、ドクトルがぼんやりして居ればいゝと云つてる』

『しかし、一日や二日は我慢も出來ようが、長い間そんなことをしてゐると、倦きるぜ、寫眞機械をもつて行つたら何うかい、そして景色のいゝ處があつたら撮して來て、お母さんに見せたり僕等にも紹介したりしたら、面白いと思ふがね』

『そりや思ひつきだ、でも僕には寫眞なんか撮れない』

『旅行の日取を少し伸して、寫眞術を稽古すれば出來るよ、君の聰明な頭でやれば、すぐ覺えるよ、さうしたら屹度いゝ』

『よし、やらう』

彼は、興味ある事だと思つて無氣になつた。そこで、彼は本を買つたり、寫眞師に教はつたりして、カメラを買つて、旅行に出かけた。給仕上りのイーストマンが、寫眞機王になつた動機は、こゝにある。だが、病氣になつて、寫眞機をもつて、保養の爲旅行に出かけたものは、彼の前に幾人かあつたに相違ない。只、彼がこれらの人々よりも、一歩すぐれてゐたのは、實際、寫眞機をとり扱つて見ると、いろ〳〵改良せねばならぬ缺點を發見したことにある。

『もつと工夫したなら、簡便な寫眞機が出來る筈だが……?』

そこへ着眼したのが、彼の成功の第一段階であつた。

三

まだその頃は、乾板が發明されてゐなかつた。いづれも、濕板を用ゐてゐたので、面倒な手つゞきで、これをつくるのが、寫眞師にとつては、重大な仕事であつた。硝酸銀や、コロヂユームや、硝子板など、同じ原料をもつて、もし乾板をつくることが出來たら、非常に手輕なものとなる。

『どうかして出來ないものだらうか』彼は、考へ出した。

旅行を終へると、健康もすつかり恢復し、且又寫眞の技術も上達した。彼は、そこで乾板製作の發明を思ひたつたが、元より銀行の方をやめて、これに沒頭することも出來なかつた。晝間は、簿記係主任として、相かはらず働いてゐたが、夜間は、藥品の匂ひでムッとむせ返るやうな暗室に閉ぢこもつて、研究をつゞけた。土曜から日曜へかけると、行員はみなピクニックに出かけるもの、芝居見物に出かけるもの、一日の行樂に耽つたのだが、彼のみは、暗室に入つたきり出て來ない。氣も心も疲れて、ぐつたりとなつたまゝ、藥くさい部屋でうと〱となることとも珍しくなかつた。

『イーストマンは、一體、何をしてゐるんだ、この頃まるで燈心のやうに痩せて了つたが……』

げつそりと頰はこける、眼は凹んでくる、一生懸命になつてゐたが、偶〻、英國の寫眞雜誌に、ゼラチンで乾板を製作することに成功したといふ結果が發表された。

『それなら、きつと出來る筈だ』と、彼は初一念を捨てなかつた。その間にも何度か失敗をくりかへしたが、ある夜、どういふ途端であつたか、一枚の硝子板の表面に塗つた藥品が乾いた。

『おや、これは不思議だ』と、彼は、電氣に打たれたやうに感じたが、試みにもう一ど、前と同じ方法をもつて、臭化銀の細粉とゼラチンとを調合した後、この實驗をして見ると、やつぱり乾いた。

『これだ、これだ』

彼の努力は酬いられて、いよ〱乾板は完成し、これを製作して賣出すことになつた。無論銀行の方はやめて、『イーストマン式寫眞乾板』と名づけて、市場へ出したのは、一八八〇年十月半であつた。彼は、やつと二十六歲、それも正式の學問をしたわけではない。全く獨學の力で、化學や工學に頭を突込んだ。そして誰に相談するでもなく、誰の援助を求めるでもなく、自分一個の力を頼りにして、こゝ迄到達した。

乾板の發明は、無論寫眞界の一大革命である。從來の濕板によらずして、この乾板で寫眞が撮るとなれば、取扱は便利となる費用は低廉となる、延いては、素人でも一寸した手加減を加へさへすれば、すぐに寫眞が撮れることになる。

幸、元母親の處に下宿してゐたヘンリー・ストロングが來て、彼を助けることになつた爲、製作工場を擴張した。注文は殺到した、一ケ月四千弗の製產高をあげるに至つた。ところが、その翌年になつて、ピタと注文が止まつた。段々調べて見ると、市場の風評は甚だ面白くない。

『イーストマンの作る乾板は、あれは駄目だ、一冬過ぎたら、感光性が鈍くなつて、役にたゝない』

かういふので、彼は驚いて、自ら實驗して見ると、全くその通りであつた。

『これは不可ない、こんな不完全な物を賣り出しては申譯ない』

彼は、市場へ手をまはして、彼の製作した乾板を殘らず買上げた。そして倉庫に山のやうにつまれてゐる賣殘りの種板と共

に、俺の惜しげもなく[illegible]今迄に得た利益は、これが臨幾らず吐出して、元の無一物となつた。彼は、誰にも會はなかつた、飯もくはず、水ものまず、悄然として工場の隅に考へこんでゐた。

『夢だ、まるで夢だ、……俺は、これから先何うしたら好いのか』

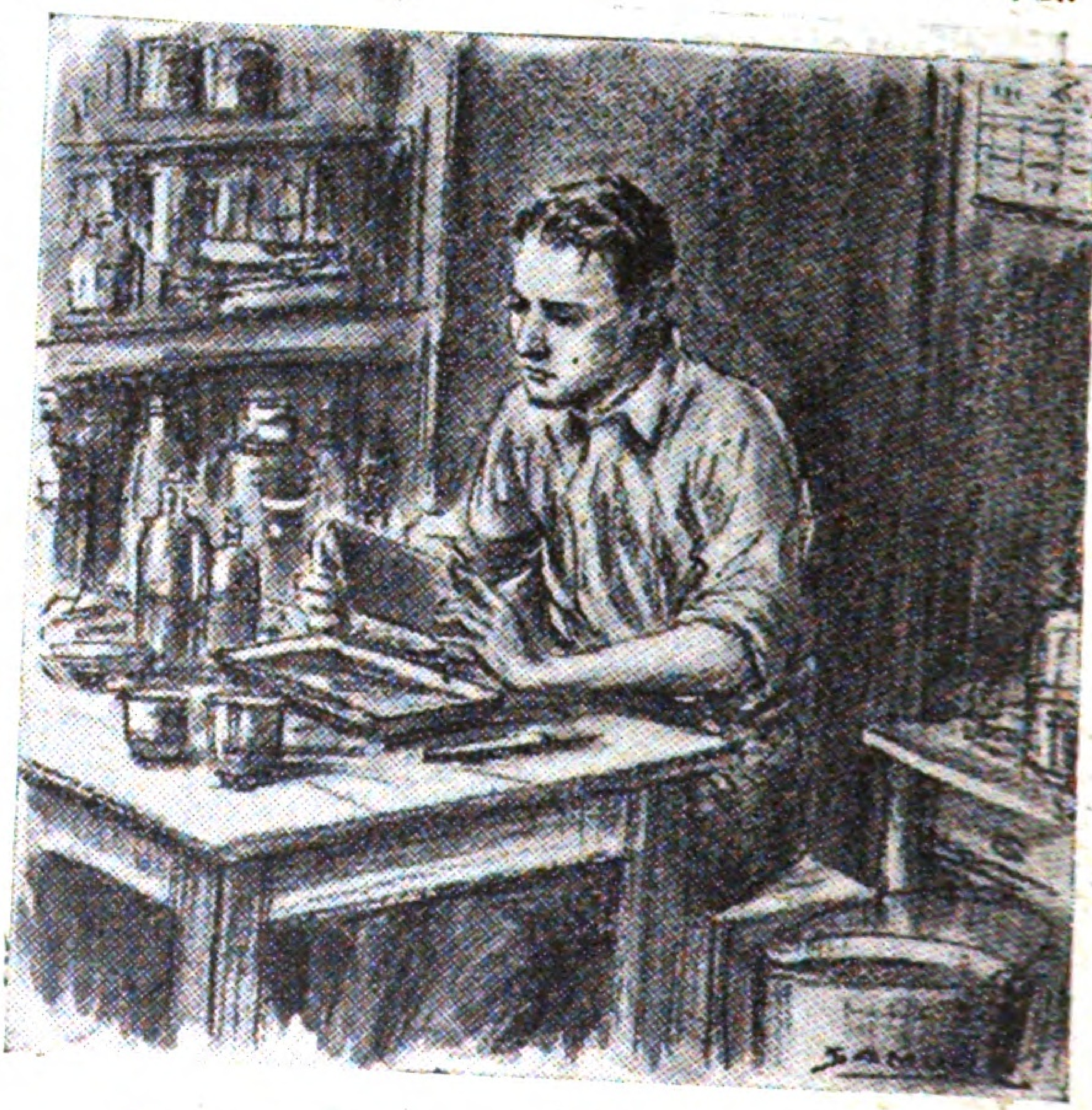
彼は迷はざるを得なかつた。

『無論、世間では自分のことを惡しざまに罵つて居るに違ひない、詐欺か、かたりか、山師か、いづれさういふ類の人間のやうに云ひ囃してゐるに違ひない、……あゝツ、今迄の苦心が水の泡となつた』

魂の拔け出した人のやうになつて、がつかりしてゐた。此ういふ時、人間はフラ〳〵となつて、死神に囚はれる。失敗して、孤獨となつたこの場合、彼を勵まして、再起を決心せしめたものは何であつたか。それは冒頭にかゝげたゲーテの小說中の言葉である。

『俺のよんだ小說、さうだつけ、……泪と共に一片のパンを割き、[illegible]攝理は分るものでない、……正しくそれだ、俺が孤兒となつたのも、神の攝理、俺が少年時代から苦勞をせねばならなかつたのも神の攝理、今此うして折角成功したと思つた事業が蹉跌したのも亦神の攝理だ、さうだ、こんなことで落膽してはいかぬ、これこそ神が自分に下したまうた大試煉である、俺は、最後の力をふるひ起して、此の發明を完成しなければならぬ、改めてやるぞ』

イーストマンの心中には、故しらぬ力強い刺戟が、むく〳〵とわき起る。彼は、失敗に屈しなかつたのである。



四

『イーストマンは、何處へ行き居つた、えらい失敗をしたので、顏向けがならず、夜逃げをしたと見える』

町のもの〻噂に上る頃は、彼の姿は、ロチェスター市ヴルウト街の工場から消えうせてゐた。彼は、この時海を越えて英國にわたり、シェフイールドのニユウカツスル寫眞研究所の一研究生となつてゐた。

『何もかも、やり直しだ』

さういふ覺悟で、彼は、光學や化學の研究に沒頭して居た。

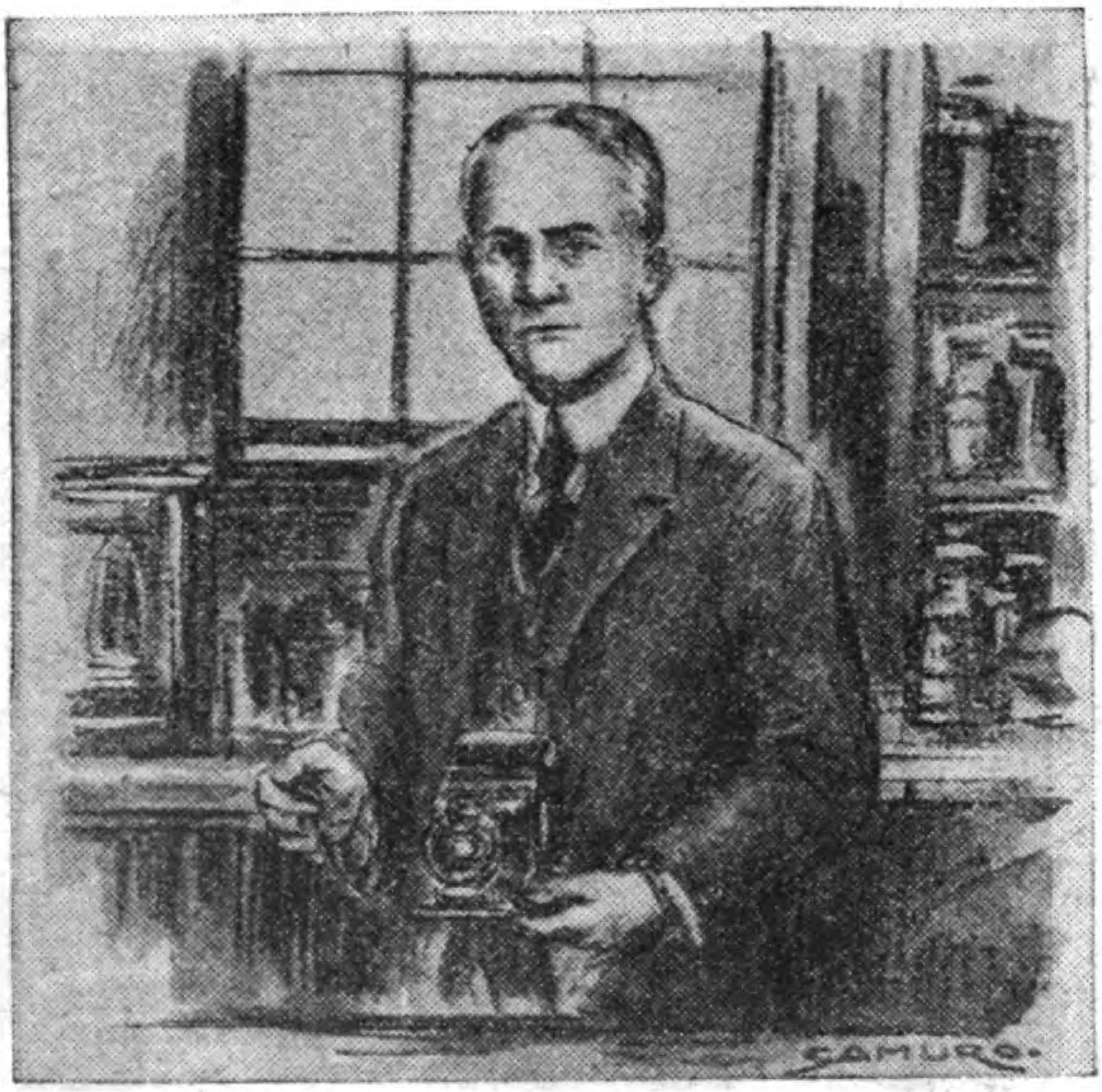
彼が最初、自分の小さな研究室に於て發明した乾板は、云はゞ偶然の機會によつて得られたもので、十分なる科學的基礎から生れ出たものではない。そこに缺點があつたので、こゝでは、一年たつても、二年たつても、感光性の稀薄とならぬ乾板をつくることに專心した。その結果、數月の後に、彼は目的を達したのである。

『失敗は成功の母とは、うまく云つた、……今度こそは、もう大丈夫だ』

自信がついた處で、又ひよッこりと、チエスターに現はれた。一八八三年六月初のことである。

『イーストマンが、どこからか歸つて來たさうな、何をするつもりかしら』

又、町の人々は眼を聳てた。もと使つてゐた職工は再び呼戻された。蜘蛛の巣だらけになつてゐた工場は、帚き清められた。久しく沈默してゐた烟突からは、勢よく黑い烟が吐出され[た。]



『おや、又始めたな』

不審に思つてゐると、イーストマンは、ストロングの援助の下に再び乾板の製作に手をそめた。

『今度新たに工夫した乾板を一度御つかひ下さい、一年後二年後に、感光力が鈍つたなら、代金は頂きません』

彼は、かう聲明して、市場へ賣出した。

紐育や市俄古の寫眞師が試につかつて見ると、果して、優良品だつたので、先きの不名譽を取りかへしたのみならず、非常な歡迎をうけた。彼の工場は元のやうに繁榮に赴いた。此うなると、競爭者が續々と現はれて來たので、眼先の鋭い彼は、ぐるりと方向を轉換した。

彼は今度はフイルム製の乾板を工夫して、つひに是も成功した。フイルム製の乾板は、エゲイソング活動寫眞に用ふるやうになつて、急に需用が增加した。

『乾板を賣るには、寫眞機を專門寫眞師のみに托しておいたのでは面白くない、手輕に事物をうつし得るやうな値の安い機械を工夫して、一般素人の間に寫眞熱を鼓吹せねばいけない』

イーストマンはさう考へて、寫眞機の改良を企てた。技師の

ウイリアム・ウオーカーが、これに熱中して居ると聞いて、ウオーカーと共に研究をこらした。

今、吾々が旅行の際持參する輕便なコダック・フイルム寫眞機は、かうして二人の力で出來上つた。

『釦さへ押せばよい、跡は當社が引受けます』この標語の下に市場へ賣出すと、人氣は此のコダックに集つて、全米は勿論、世界の隅々、アフリカの國までも擴つて行つた。

『コダックといふのは、一體何ういふ意味ですか』

彼にきくと、笑つて居る。

『何の意味もない言葉ですよ』と、けろりとして居る。

『ぢや、あなたの作つた語ですか』

『さうです、調子が強く響くし、それに世界の人々が誤らずに發音出來るし、眞似の仕樣もない無意味の言葉ですから、商標としては最も適當して居る』

聞いて見ると、うまく考へたもので、こんな處にも彼の着眼の鋭さが閃いて居る。

其後、フイルムも、機械も、絶えざる努力をもつて改良され、今も尚されつゝあるので、寫眞機は全く一般人に開放された。

二十年前一人の使用人しか居らなかつたイーストマン工場は、今や數千萬の資本を擁して、數千人の從業員が、數百萬の寫眞機に附屬品を製作しつゝある世界最大の工場となつた。町の名も、コダック街と改められた位。

六十歳にして[illegible]立派に勉強出來る、結局、勉強は一生の仕事であると考へ、辛苦の修行をつゞけて、つひに今日の運命を開いた。だから、今もつて七十五歳の彼はまだ勉強を繼續して居る。百萬の富を擁し、寫眞機王といはれ乍ら、手を空しくして遊んで居らるゝ身が、毎日々々寫眞化學の發達を志しつゝ努力して居る。夏休みになると、天幕をもつて、北カロライナ州の山間に出かけ、そこで自分で煮炊をし乍ら、此の老翁は何事かを考案しつゝある。

知らず、此の次發明さるゝものは、何だらうか？（完）

演説會はかうしたい

日本の雄辯界も普選以來、俄に活氣を呈し、全國各地に雄辯研究會が設立され講演會や演説會が大盛況を呈するやうになつたことは洵は喜ばしい現象だ。しかし從來の演説會には改良すべき點が多々ある。眞の演説會が開かれていゝ筈だ。眞の模範演説會！それは今度、世界的新人として令名高き鶴見祐輔氏と東都各大學の辯論部員とで開催された演説會だ。何せ一方は世界的大雄辯家、一方は潑剌氣鋭の若武者とあつて此の演説會は且て見られない壯快を極めたもので、鶴見氏の大獅子吼に對する學生諸君の痛烈なる質問戰などは全く文字通り火花を散らした。これは雄辯主催の模範演説會。その實際記事は同誌七月號に掲げられたが、今、非常な評判になつてゐる。



娯（ご）

都々逸

掛合一り思案に暮るるか秋の
二はに哀れな蟲の聲。
三重になつたは何より彼より
四めが實家への土産物。
五つも會ふ時や氣休云へど
六々顏さへ見せぬ君。
七つ瘦せ斗りと思へぬ私
八つれた貴方の昨日今日。
九へぬお前の氣質と知れど
十はにや置かれぬ俺の胸。

「ノ」の字の魔術

（オヤ！　名前が品物に變つたぞ）

○かづ子……數ノ子。
○たけ子……竹ノ子。
○くま子……熊ノ子。
○米子……米ノ粉。
○すみ子……炭ノ粉。
○かめ子……龜ノ子。

美人ものは附

「九々」洒落づくし

△大きくてよいものは……眼。
△小さくてよいものは……口。
△赤くてよいものは……唇。
△白くてよいものは……歯。
△長くてよいものは……髮。
△短かくてよいものは……爪。
△細くてよいものは……指。
△太くてよいものは……腕。
△廣くてよいものは……胸。
△高くてよいものは……鼻。

△御兄弟衆は何人ですか？
（兄さんが六人よ）

△此のホーレン草おいくら？
（三把二十四錢です）

△お亡なりになつてから何日目ですか？
（死後二十日目で御座います）

△何句ぐらゐ作つたかね？
（詩句三十六）

△午からの賣上げは？
（午後二十五圓あつたわ）

△此の朝顏はいくらかね？
（六鉢四十八錢にしときます）



樂（らく）

お笑ひ寸鐵落語

◎、二十四孝



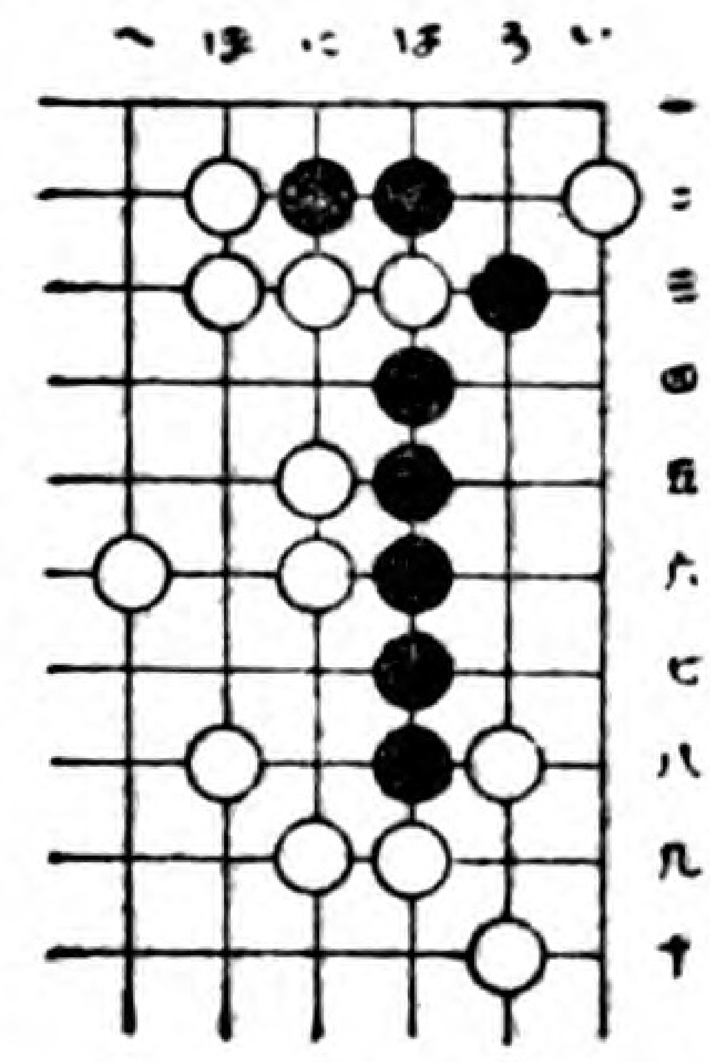
支那の二十四孝の話を聞いた親不孝の亂暴者、歸つて來て、母親に筍を食へと云ふが、夏のことだから筍はない、そこで體中に燒酎を吹きかけて寢た。その翌朝、母親に向つて、昨夜は蚊に食はれずに樂に寢られたらうといふと『馬鹿を云へ、お前が燒酎を吹いて寢て了つたから、一晩中團扇であふいで遣つてゐた』

◎、笑ひ茸

笑ひ茸を煎じて飲んだ男、絕えず笑つてばかりゐる。笑ふ門には福來るの譬に洩れず、世界中の金がこの家へ集つて來

○詰碁新題（黑先結果如何）

五段　福田正義出題



○詰將棋新題

四段　小林黍桂出題



○聯珠新題「青嵐」

珠叟　淸水吾石出題



○本題は或る競技大會の席上で有段者の手合に演じられたので す。白が（十四）の手を反對方面に止めると一寸面倒になつたでせうが圖の如く



た。錢その上へに天上の金まで下りて來た。天の神は大いに驚き、この金を取戻さうと、一同の星に命じて口を揃へて笑はした。下界の金はこの聲を聞いて天へ登らうとすると『イヤ行つてならぬ行つてならぬ、あれは皆そら笑ひだ』

◎、片側町



浮世床の亭主が、芝居の話に夢中になつて、客の片方の鬢を剃落した。客は驚くまいことか、火の樣になつて怒ると、亭主涼しい顔で『當分片側町をお歩きなさい』

濁澄番附

濁	澄
ばか（馬鹿）	はか（墓）
だい（臺）	たい（鯛）
ぐち（愚痴）	くち（口）
ぎん（銀）	きん（金）
ごま（胡麻）	こま（獨樂）
がん（雁）	かん（寒）
きじ（雉子）	きし（岸）
あぜ（畦）	あせ（汗）
くわじ（火事）	くわし（菓子）

行司　刷毛に毛があり禿に毛がなし

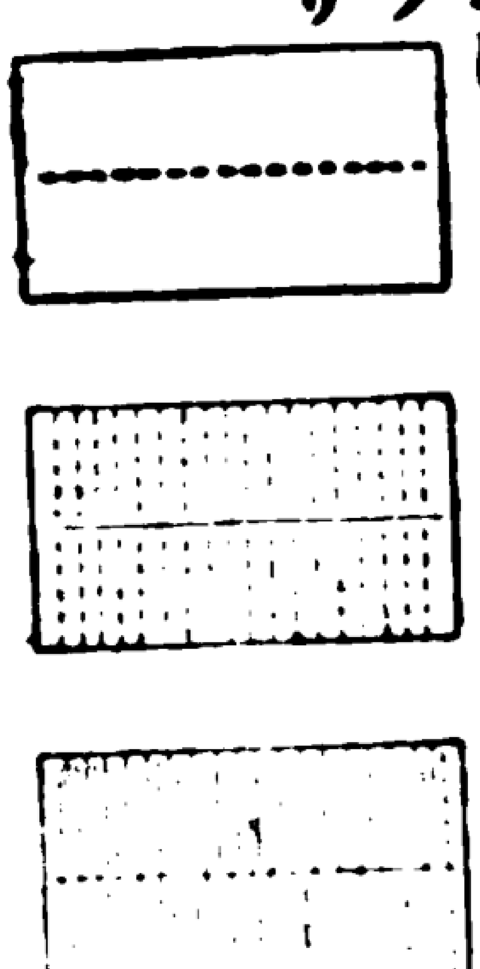
年寄　たいしやう（大將）　だいせう（大小）

◎、大どろ

三兩の金の工面がつかず、女房にガミガミ云はれるので、我慢が出來ず家を飛び出した男、ほんの出來心で、さる家へ忍び込む。初めてのこと故、勝手が解らず、いろいろ滑稽を演じてゐる中に、とうとう穴藏へ落ちた。この物音を聞いて主人が駈付け、誰か穴藏へ下りて賊を捕へろと云ふ。穴藏の底では「下りて來てみろ只には置かぬ」と脅かす。誰も怖がつて下りようと云にない。主人は氣をいらち、一兩やるから入れと云つたが誰も入らぬ。そこで二兩ではどうだ、やつぱり返事がない。そんなら三兩やらうと云つた時、穴の中から『三兩なら俺の方から出る』



これはビックリ ハガキ大の日本紙に直徑四尺の穴があく!!



ハガキ大の日本紙（成る可く上等の）を先づ上圖の如く二つに切離さぬやうに紙の眞中を切る。次に紙を半分に折つて、中圖の點線の如くに切る。（折目の方から切らない事）最後に下圖の點線の如く、折目の方から兩端に向つて切る。然し、幾分か切目を殘して置かなければいけない。之を開けば大の男が自由に通り拔けられる程の直徑四尺位の穴が出來ます。但し、縦の點線で表はしてある切目の間隔を成るべく小さくすれば、する程、大きな穴になります。



室(しつ)

迴文俳句（上下から讀んでも）

○長居する妻は母待つ留守居かな（ナガヰスルツマハハマツルスヰカナ）

○孫の子は悦ぶ頃よ箱の獨樂。（マゴノコハヨロコブコロヨハコノコマ）

○掃き除けた雪や早や消ゆ竹の際（ハキノケタユキヤハヤキユタケノキハ）

牛込若松町一〇八 [illegible]

（詰將棋、詰碁解答前號懸賞解答は四五九頁にあります）



▽『まあ手ぎは好くおやんなさい。』△

三人は丸ビルの中へ、人ごみに押されて入ると、兩方に別れた。

上野と宮川は、十七年勉學の土俵ぎはの日である、と思ふと、とても緊張した顏をして、昇降機に乘つた。五階で廊下へ出た。××會社を尋ねて、「控室」と張札がしてある扉を、おそる〱押して入つてみると、もうすでに、同窓生が多勢、ギッシリと詰込まれた樣に來てる。

『ヨウ！』『ヨウ！　來たか！』

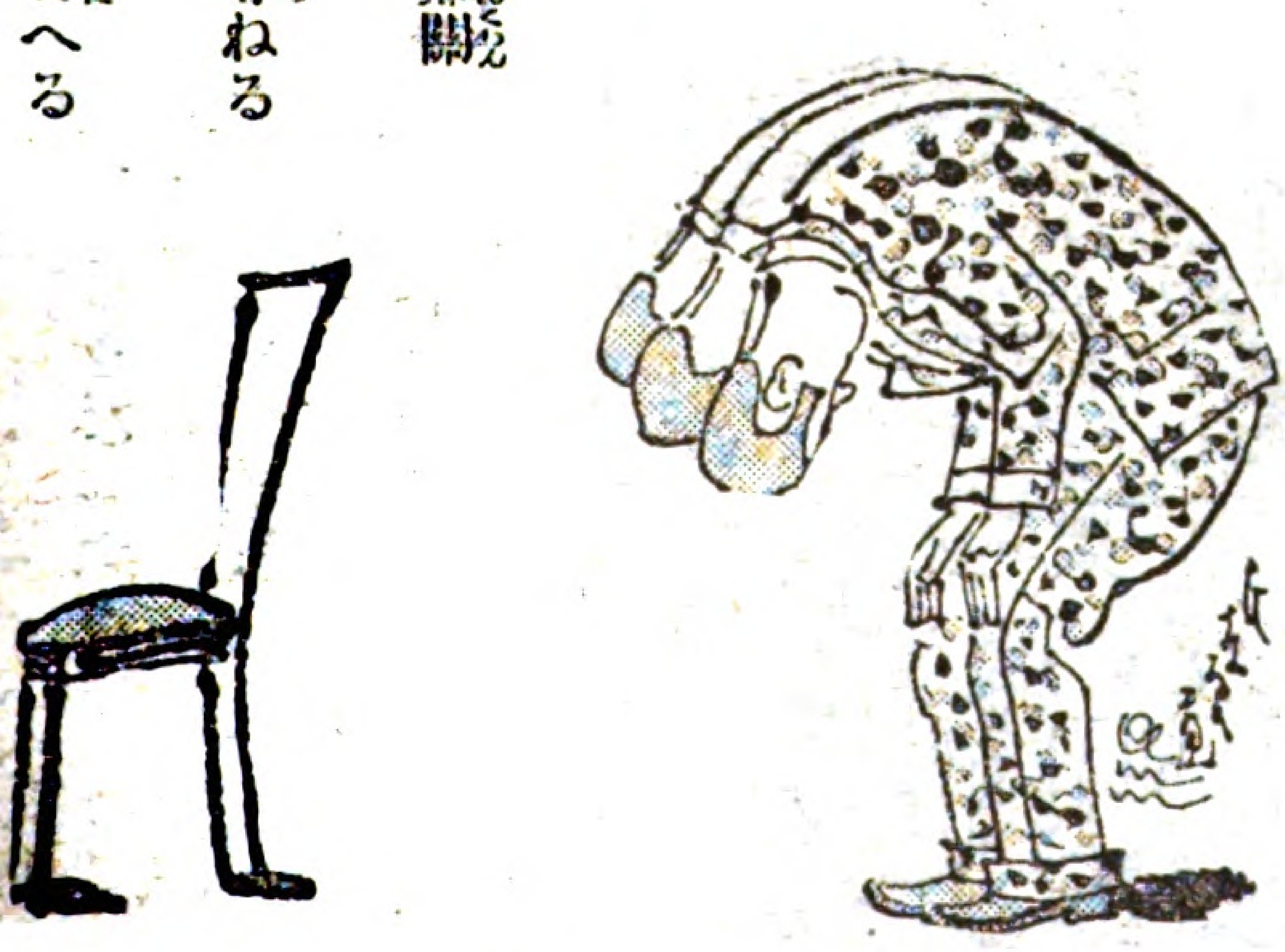
『こッちへ入れ！』

▽志願者百八十二人。採用人員三名。△

さう思ふと、上野も宮川も、悲哀な表情になつた。辨當を寫眞機の袋へ入れることさへ、眼の前の難關なのだ。

『まだ初まつてないんか？』と、尋ねる上野の手足が、ふるへてきた。

『今に呼びに來るだらう。』と、答へる一人も、心もち蒼ざめてる。



宮川も情ない顏をする。

『五菱物産ではね、「君は女性が好きですか？」つて、いきなり訊いたさうだよ。』

『やりきれねェな。山田は通過したんだね、何と答へやがッたらう？』

『山田はね、「あなたがお好きの程度に、僕も好きです」と答へたさうだよ。』

『あざやかに遣りやがッたな、山田の奴！』と、宮川は羨ましさうに顏を赤くした。

『己れもさう訊かれたら、さう答へてやらう！』

と、上野はカンニングの癖を出した。

『いつたい、重役の前で「僕」といつたもんか？「私」と改まつたもんか？　どッちが好いいんだらうね？』

『さア、それよりも第一に、扉をノックして入つたもんかなア？　呼ばれて直ぐ行くんだから、ノックは反つて點がわるく



日頃の猛者が神經過敏になつてゐる。

そこに、少年の給仕が入つてきた。

『橋口進さん、重役室の方へお出で下さい！』

瞬間に皆がシーンとなつた。

▽重役の面會が初まつたのだ△

橋口は悠々と出て行つた。

『第一着に呼ばれて、彼は自由通過ぢやねエかな？　有力な紹介で。』

『すると、後の採用は只二人だ。』と、多勢が心細い顔を見合せる。

橋口が直ぐ歸つてきた。扉の蔭から、

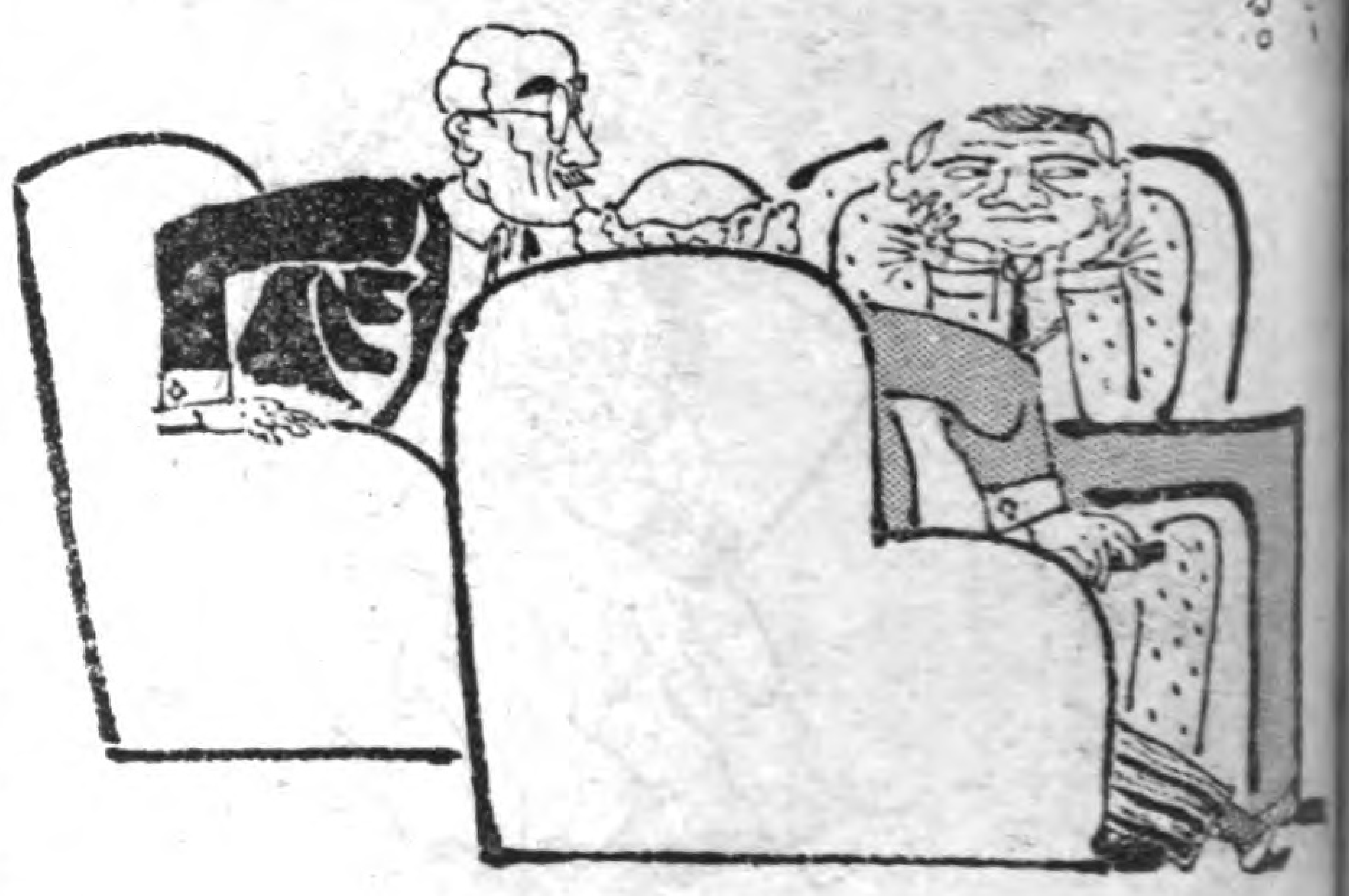
『オイ、上野！　次ぎはお前だ。』と、腮で招く。

上野はドギマギして慄へた。宮川が小聲で尋ねる。

『オイ、橋口、何を訊かれた？』

『君の卒業成績は何番ですかツて、いきなり訊くぢやねエか。』

『ウム、それで何と答へた？』



ですたア言へねエから、この會社へ學校から通知が來てる通りです、と言ふとね。よろしいお歸りなさいと、それきりだよ。』

『いけねエな。』

『いけねエ。落第だ、ハヽヽ、ハヽ。』

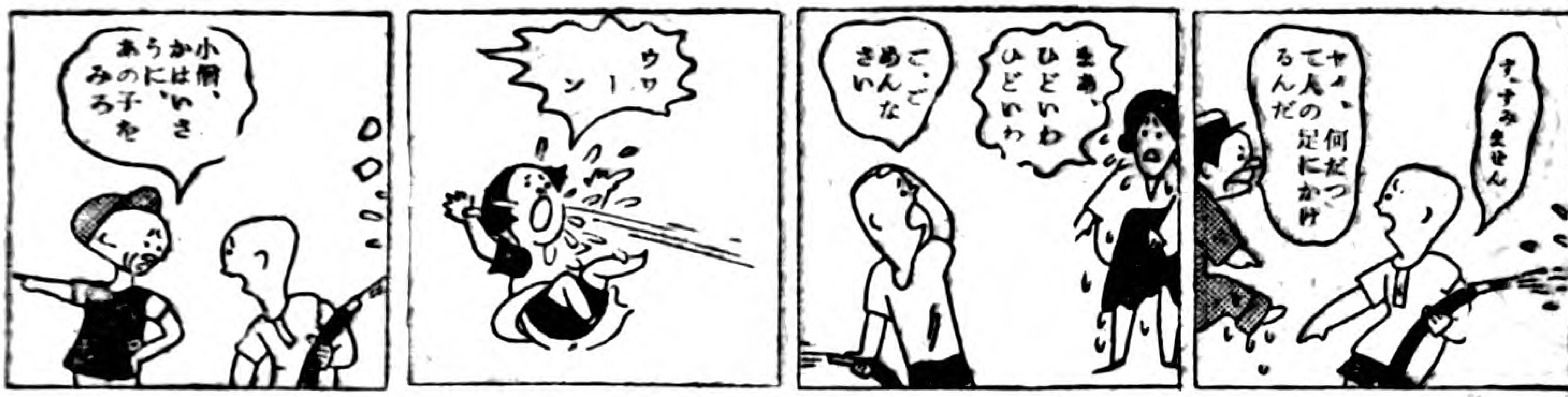
橋口は兩肩を聳えさせて出て行つた。

▽重役室の前に立つてる上野純一△

しきりに扉をノツクしてゐる。全身が緊張の姿だ。扉には、××セメント株式會社と金文字で入れてある。室内から答がない。上野は思ひきつて、ソツと扉を押すと、中へ入つた。

廣い一室。四つの大机に、それ〴〵重役が嚴しく控へてる。眞中に貧弱な椅子が一臺、ポツネンと置かれてる。上野は慌てゝその椅子にお辭儀をした。

『お掛けなさい。』と、正面の重役が言ふ。社長らしい。ドツシリした聲だ。



上野はお辭儀をした椅子に、半分ほど腰を下した。

『上野純一さんですね。』と、正面の社長らしいのが、また言ふ。大きな眼が光る。

『ヘツ、上野純一です。でございます。』

と、上野は自分の眼がチラ〳〵した。

『どうして、この會社を志望なさツたのですか。志望の理由は？』

『僕は、私は、その、セメントといふものが、つまり、好きだから、……でございます。』

『ハ、ア、お好きな理由は？』

『それは、セメントが、卽ち、とりもなほさず、堅いから、でございます。』

『堅いには違ひないが、それだけの理由ですか？』

上野は冷汗でビツショリになつた。こんなことなら、志望の理由ぐらゐ考へてくれば好かつた。が、今の瞬間こそ運命が極まる土俵ぎはだ！と、ブルブルして答へた。

『僕も人間が堅いから、でございます。』

四人の重役が皆、微笑した。



▽『よろしい。お歸りなさい。』△

正面の重役が、さう言つた。非常な謎の言葉だ。

『よろしい。お歸りなさい。』といふのは……？ いつたい、吉か？ 凶か？

上野はフラ〳〵と立上つた。また扉の前でお辭儀を、今度は四人の重役に、一人づつした。すると、

『宮川厚さんをお呼び下さい。』と、横の方にゐる人から言はれた。

上野は夢中で廊下へ出た。控室へ來て、

『宮川、お前だ。』と、手の巾で額の汗を拭くと、

『オイ、何を訊かれた？』と、皆の眼が、不安に燃えてゐる。

『セメントの理由だよ。』と、上野はまだ足の慄へが



止まらない。

『エッ？　セメントの理由？　變だな。』

『原因だよ、志望の。』

『なに？　脂肪の？　あぶらかい？』

『違ふよ、この會社を志願した理由さ。』

と、上野はやッと平生の元氣を回復すると、手足が初めて、自分のものになつた樣な氣がした。

皆は默つてしまつた。セメント會社を志望した理由とすると、

▽何か名案はないか？△

皆が智慧を絞る顏になつた。

一方に、重役室で同じことを訊かれた宮川は、椅子を立上ると答へた。

『卒業して食へないと困るから、どこの會社でも、僕はいゝんです。』

『よろしい。お歸りなさい。……鈴木三郎さんを次ぎに呼んで下さい。』

『かしこまりました。』と、宮川は絶望した。

鈴木三郎から後の者は、滔々と『志望の原因』に名論を吐いた。セメントと日本の工業政策を論じて、經濟界の將來を豫言した秀才もゐた。重役は四人とも耳を傾けてゐた。

▽一週間すぎ。銀座の夕べ△

××寫眞機商會へ、新調の背廣を着た三人の青年が、嬉しさうな輝いた顏をして入つてきた。が、買つて行つたのは、三人とも大形の袋(サック)だけだつた。

橋口と上野と宮川である。後姿を見送りながら店員が囁いた。

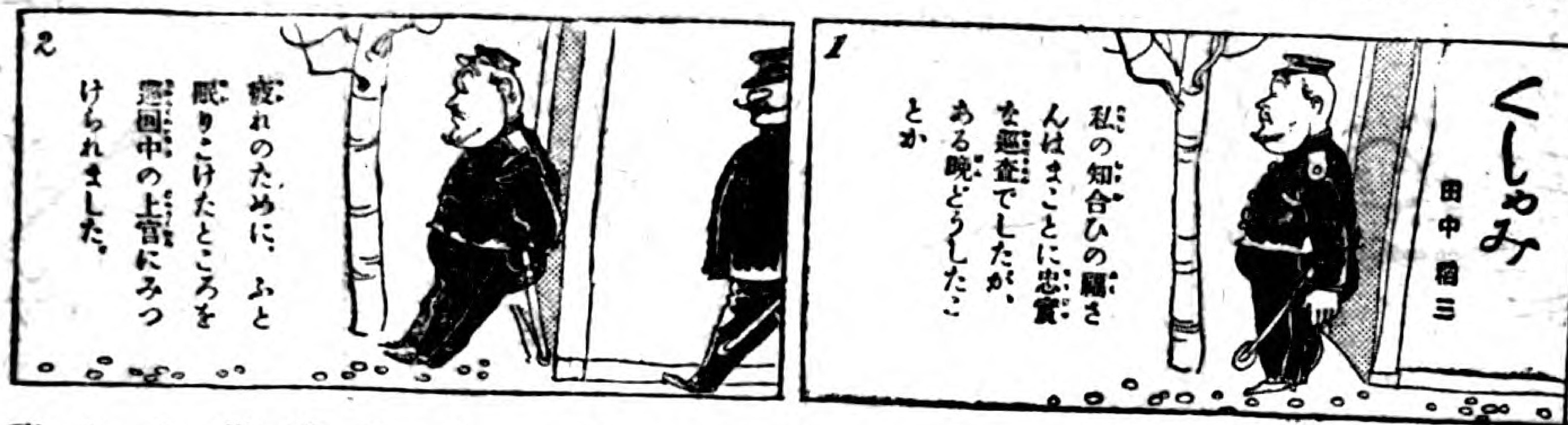
『ハ、ア、月給取の卵子が三つ孵へッたな。』

（をはり）

トランク事件

大木雄三

さしゑ　池部鈞



場所……小さな停車場の待合室

人物……中年の紳士、驛長、旅客大勢(學生、行商人、大工、子供を連れた夫人その他)運送屋の人夫

紳士はベンチに掛けて、洋書を讀んでゐる。側に人間一人位入れさうな大トランクが横へてある。

向ふ側のベンチに大工と風呂敷を背負つた行商人が頻りに話してゐる。

學生が三人連れ立つて來る。各々ベンチに掛ける。それでベンチは滿員となる。

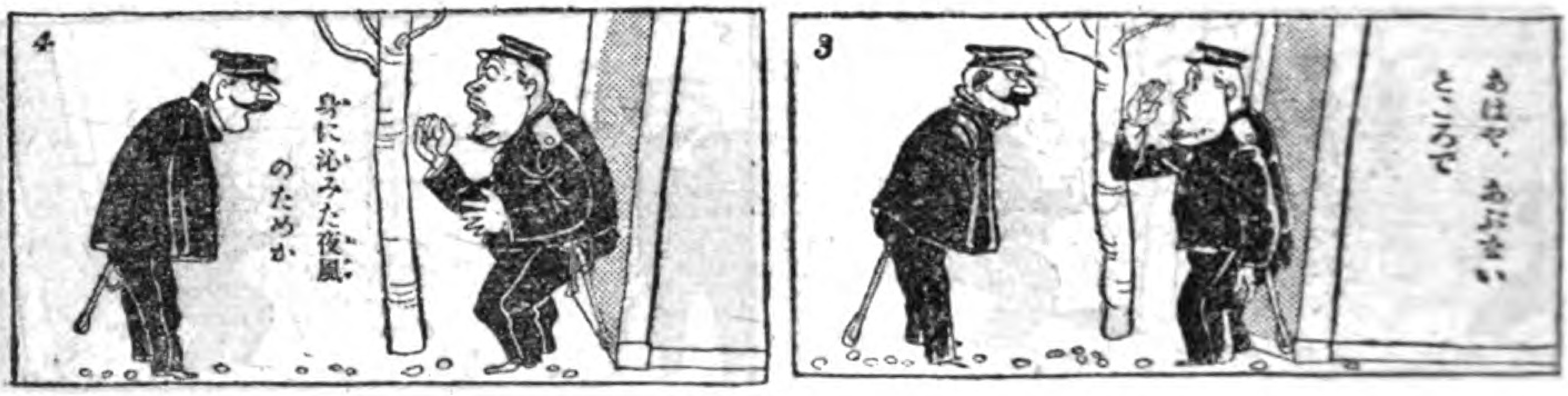
學生甲『面白かつたな。』

學生乙『愉快だつたよ。鍾馗が、木馬から落ちるなんて、實際見られた圖ぢやないね、だから僕が嗤つてやつたら、目をむいて睨みつけたぜ。』

學生甲『ぢや、君はこんど體操乙だよ。睨まれたら災難だからな。』

學生乙『それでいいよ。君と同じになるから嬉しいだらう。』





學生甲『此奴ッ。』

二人、肩や手など引張り合つて戯れる。學生丙は黙つてみてゐる。學生丁が走つて來る。

學生丁『あゝ、疲れた、参つた。間に合はないかと思つたよ。』

學生乙『莫迦だなあ。二十分もあるぢやないか。』

學生丁、柱の大時計を見て『おやつ。』と言つてから懐中時計を眺め、

『畜生、止つてゐるんだ。』

學生達哄笑する。大工、行商人この様子に引き入れられて笑ふ。

學生丁、ぐるぐる見廻すが、ベンチに空のないのを知ると、羽目板へよりかゝる。

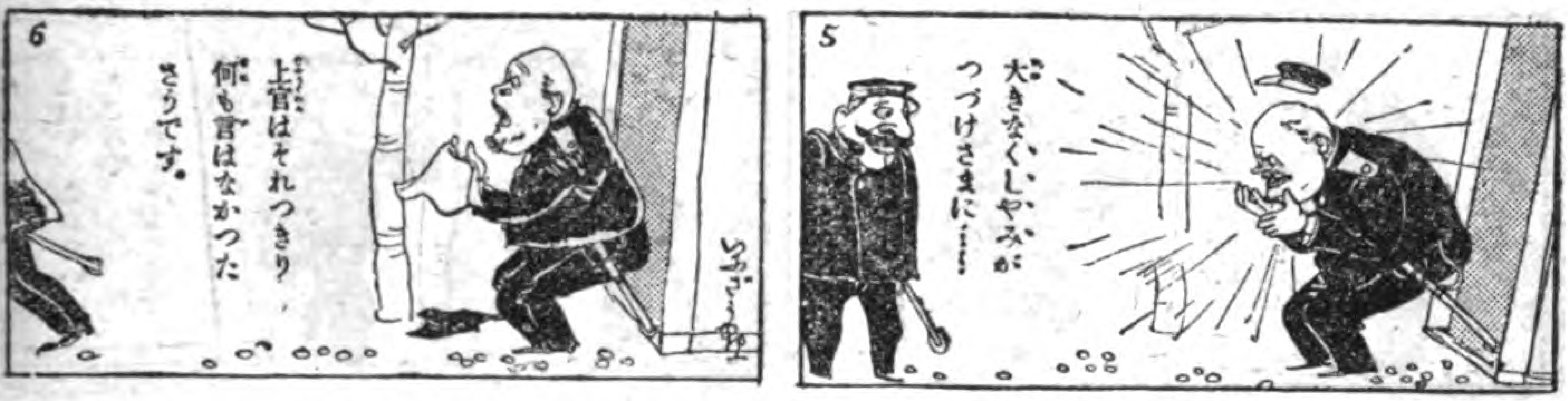
子供を二人連れた婦人來る。静かに見廻してから、ベンチのないのを知ると、大トランクに一寸目をやる。學生達、氣の毒さうに夫人を見、トランクを見る。

紳士は、相變らず讀み耽つてゐる。

大工、子供連れの婦人を見、それからトランクをぢつと眺めて、『チエッ。』と舌打ちする。



その他旅客、一人づつ登場して、いつか五六人になる。



學生甲『こゝへお掛けになりませんか。』と立つ。

續いて乙も立つ。

婦人『いゝえ、よろしいのでございます。どうぞその儘。』

學生甲、乙叉席に戻る。

待合室にゐるすべての人の目が、憎々しげに、トランクと紳士の上に注がれる。

學生丙、思ひ切つたやうに、だがわざと紳士の方へは向かないで、

『日本人は公德といふことを考へないといふが、それは實際だね。自分さへよければといふ個人主義があるね。』

學生甲『うむ。』

學生丙『それで平氣な顏してゐるんだからな。』

紳士、やつぱり本を讀み續ける。

行商人、掛けた儘で『そこの旦那、あんたの荷物を、一寸下へ下して頂けませんか、御大切な品物で



せうけれども。』

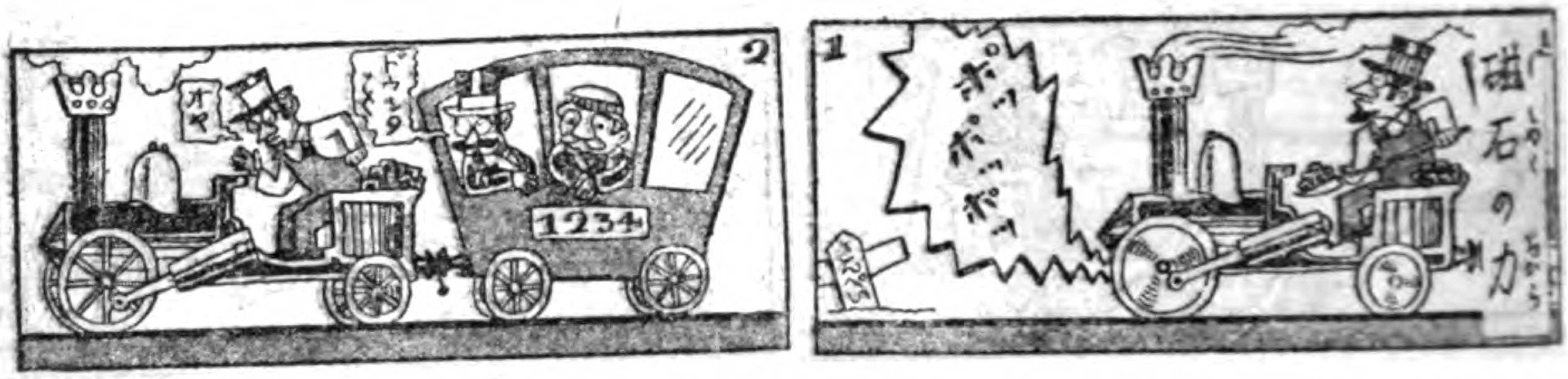
紳士、顏を上げ、あたりを見てから、又本に目を移す。

大工『チエッ。』と言つて立つ。紳士の側へ近づいて、

大工『お前さん、耳が無えのですかい。先刻から、皆さんが、あゝ言つてゐるのに、聞えねえふりなんかして（次第に昂奮する）冗談ぢやねえ。あゝして子供さんを連れた女の方せえ立つてゐるのに、氣の毒たあ思はねえのか。かういふ場所へ來たら、お互ひ樣に小さくなつて、一人でもよけい掛けるやうにするのが人情ぢやねえか。見れば立派ななりをしてゐるが、これくれえの理がわからねえつてのか。』

紳士、自分に言はれてゐることに氣付く。

紳士『僕は別に、何もしてをりません、茲にぢつと讀書してゐるだけですが。』



大工『何もしてゐねえつ（トランクを指して）此れは何だい、こんなに、人間四人分もの場所をとつて……』

紳士、むつとして『亂暴な。僕は……』

この問答のうちに驛長室のベル鳴る。學生丙、何か心得たらしくその場を去る。

大工『洋服を着たところで、金縁眼鏡をかけてゐたところで、驚きはしねえんだぞ。人情を知らねえ奴は日本人ぢやねえ。』

驛長、學生丙と共に慌しく入り來る。人を押し分けて進む、大工すこし身を退く。

驛長、靜かに『困りますな。あなたも立派な紳士ぢやありませんか。公衆の迷惑といふことを考へて下さい。』

紳士、怒つた調子で『君迄が僕を侮辱するのですか。一體僕がいつ公衆に迷惑をかけたといふのです。それを訊かう。』

驛長、冷かに『では申します。この大トランクがある爲に、御婦人や子供が、あゝして立つていらつしやるのです。これを下して頂きませう。』

紳士、皮肉に『それは困る。僕は厭だ。』

大工、行商人、學生、その他、口々に紳士に向ひ不都合を鳴らす。

驛長『何としましても下して頂かなければなりません。私は職權をもつて申してゐるのです。』

紳士、きつぱり『厭だ。』

大工『それなら俺達で下してしまへ。』

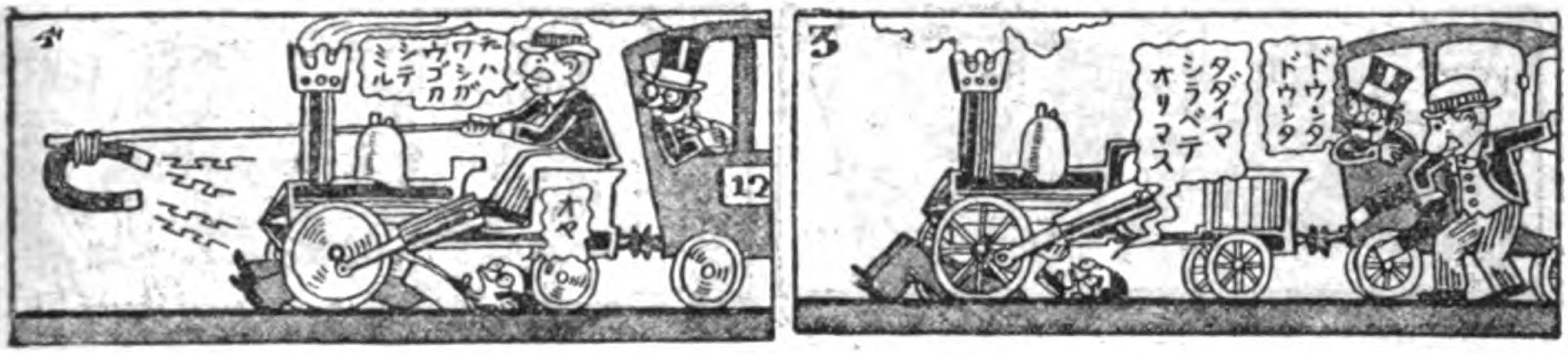
學生達『やれ。』

場内騷然として、大トランクに群り寄る。する時、運送店の人夫二名登場、一名は人を掻き分けて中へ入る。

人夫の聲『おい。有つた。此處に有つた。』

驛長、大工、學生その他、この有樣にびつくりして顏を見合せる。その中を掻き分けて、人夫二人は、トランクを擔いで入口を出て行く。

紳士、大きく笑ふ。――幕――

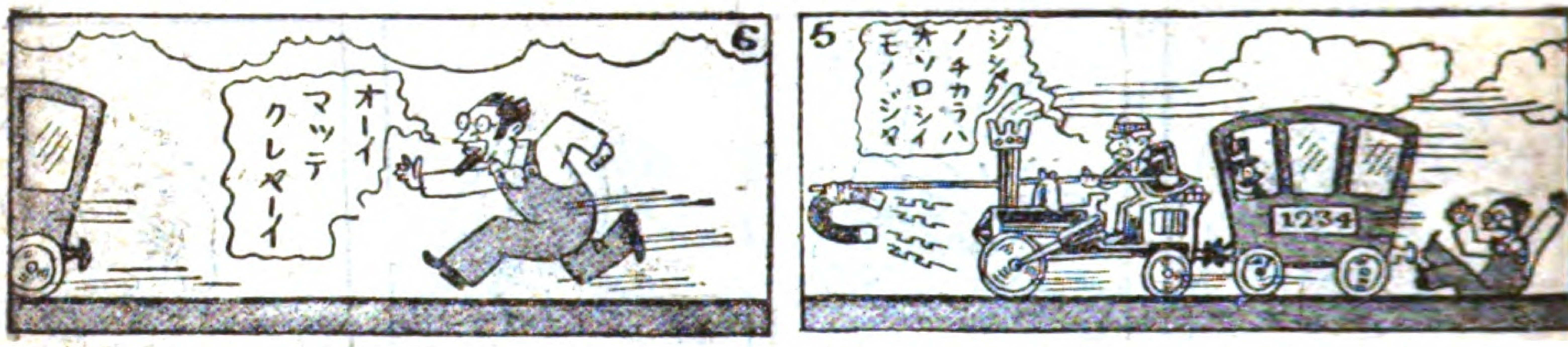


時計は動く

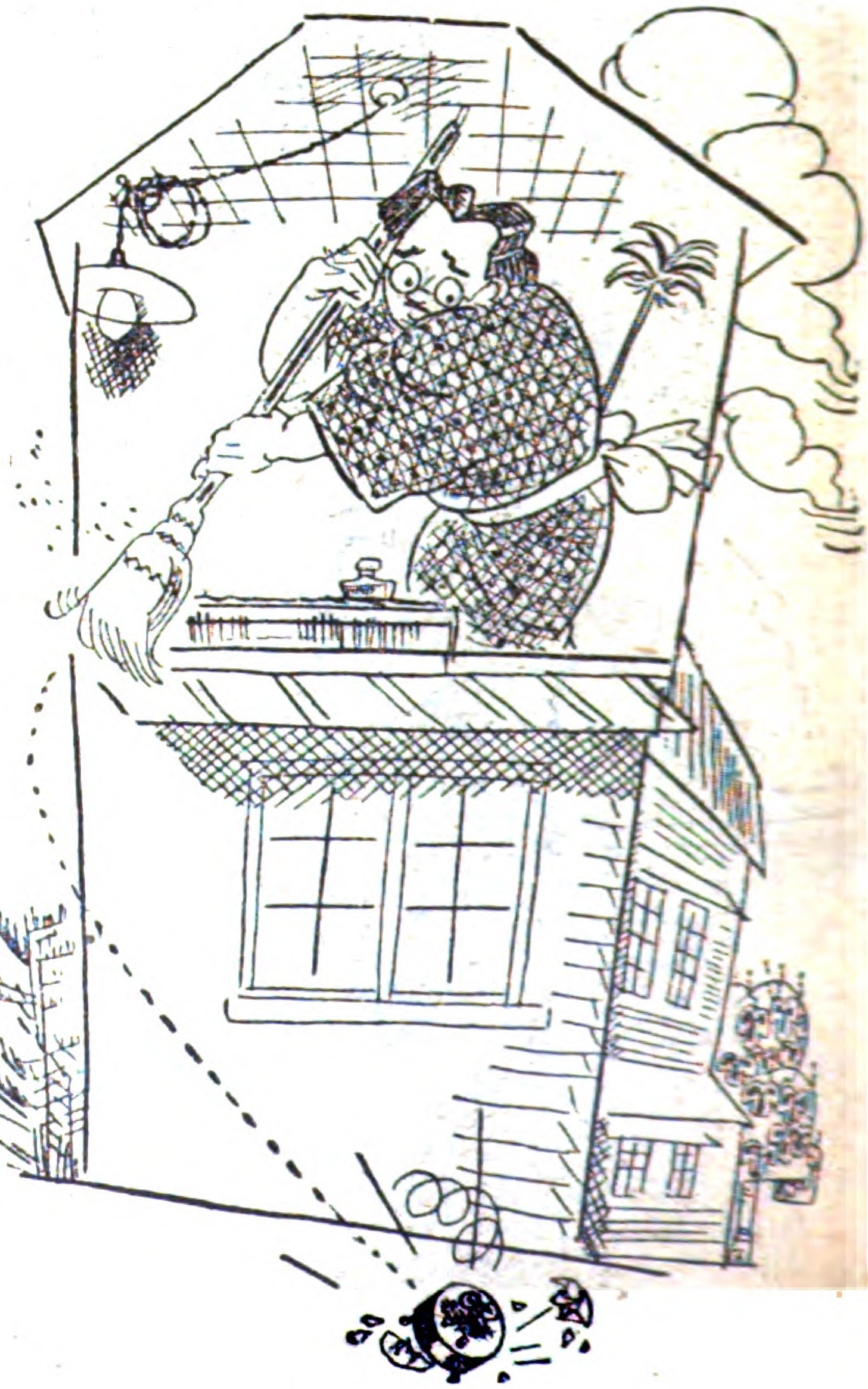
川上三太郎
さしゑ　宍戸左行

『おい半四郎居るか？』
『誰だい、長五郎か、開けて這入れ。』
『心得た。』
　名前だけ聞くと清水半四郎に岩井長五郎、両人如何にも優男のやうだが、何うして何れも六尺近い髯面男である。共に法科に籍を置いて級も同じなら故郷も同じだが、その上趣味も同じなのはまだよいとして、両名揃ひも揃つて大食漢なのだ。だから級の或る皮肉屋は斯んな事を言つた。
『清水と岩井を一緒に置いたら、何んな下宿屋だつて屹度破産するか、それでなければ内儀が神經衰弱になる。』
　彼等自身もさう悟つてか下宿だけは別にして居た。然し毎日必ずどつちかゞどつちかの下宿を訪問するから結果に於ては同じかも知れない。
『何うした馬鹿に元氣がないぢやないか。』

　座敷へ這入るなり岩井は聲をかけた。見ると清水は顔を三角にして机へ頰杖を突いて居る。何うも頗る不景氣である。
『一昨日來る筈の爲替が今日未だ來ないンだ。明日は君日曜で郵便局は休みだ。故郷では俺を干乾にする心算かしらんと、今考へて居る最中なンだ。』
『さては近頃美味い物を食はんと見えるな。』
『食はん〳〵。少し位堅くつてもいゝ。フエルト草履のやうなカツレツをウンと嚙み切つて見たいよ。』
『何うも物凄い形相だね。一文も無しか？』
『たつた二錢だ。これぢや錢湯にも行けない。』
『やれ〳〵……だが表は好い陽氣だぞ。所謂春風駘蕩といふやつだ。俳人一茶曰くさ、陽炎や手に下駄穿いて善光寺——何ンな者だつて迚も家になンぞには居られない陽氣だ。』
『さういやに誘惑するない。兎に角一文無しで



はね。』
『大日本天氣晴朗無一文——といふ句があるが、なるほど大の男が金二錢也では困るな。』
『時に君は何の用があつて來たンだ？』
『さう／＼肝心な用を忘れて仕舞つたよ。實は何だ、君の誰か知つて居る奴で、時計を賣らうといふ人間はないだらうか？』
『時計？　誰が買ふンだ、君がか？』
『勿論僕だ。君も知つて居るだらう僕の机の上に長年乘つて居た目覺し時計さ。あいつ隨分活動して居たンだが到頭昨日部屋を掃除する際、僕の箒に引懸つて二階から庭へガチャン！　と落ちてその儘粉微塵さ。ところが僕は君、有名な寢坊だらう。目覺しがないとなると何時まで寢て居るか譯が解らないだらうぢやないか。先づ學校の力で午後二時頃から始めて呉れるか、それでなければ僕が目覺し時計を買ふか、何つちかなのだ。』
『そこで時計を買ふ事にしたンだね。なるほど、よしそれぢや一つ僕のを賣らうか？』
清水は斯う言ひながら押入から引摺り出した。
『何うも恐ろしく醜穢な時計だね。古色蒼然といふのは聞いた事はあるが、これは超古色だよ。君これでも動くのかい。』
『冗談言ふない。昨日まで此の本箱の上で活動して居たぢやないか。』





『あゝあれか。然しそれを又何だつて今日になつて押入なンぞへ押し込んだンだ。』

『實は今晩道具屋へでも賣り飛ばさうと思つてね。何しろ腹の虫を慰問してやらないと、何うやら暴動でも起しさうなンだ。』

『はゝはゝは。よし、それぢや僕が買つてやらう。』

『有難い、買つて呉れ、頼む。』

『よし、先づ二圓二十錢だな。』

『おい／＼よく器械を見て呉れ、買つた時は十圓以上したンだぜ。それに二十錢とは妙に半ぱぢやないか。』

『半ぱにも何にもこれつきりしかないンだ。』

岩井は机の上へ財布を逆さに振つて見せた。

『弱つたな。然し何しろ金を見たら迚も腹の虫が承知しない。よしそれぢや二圓二十錢で賣らう、さあ！』

『よし、それぢや買つた。なるほどよく見ると却々好い時計だ。動いてる／＼。』

『當り前さ。昨日まで使つて居たンだ。』

清水は未練さうに愛馬にでも別れるやうな顔をして時計を見ながら金を仕舞ひ込んだ。それと見た岩井、

『おつと待つて呉れ。君濟まないが、その中から二十錢だけ僕に貸して呉れ。電車賃だ。』

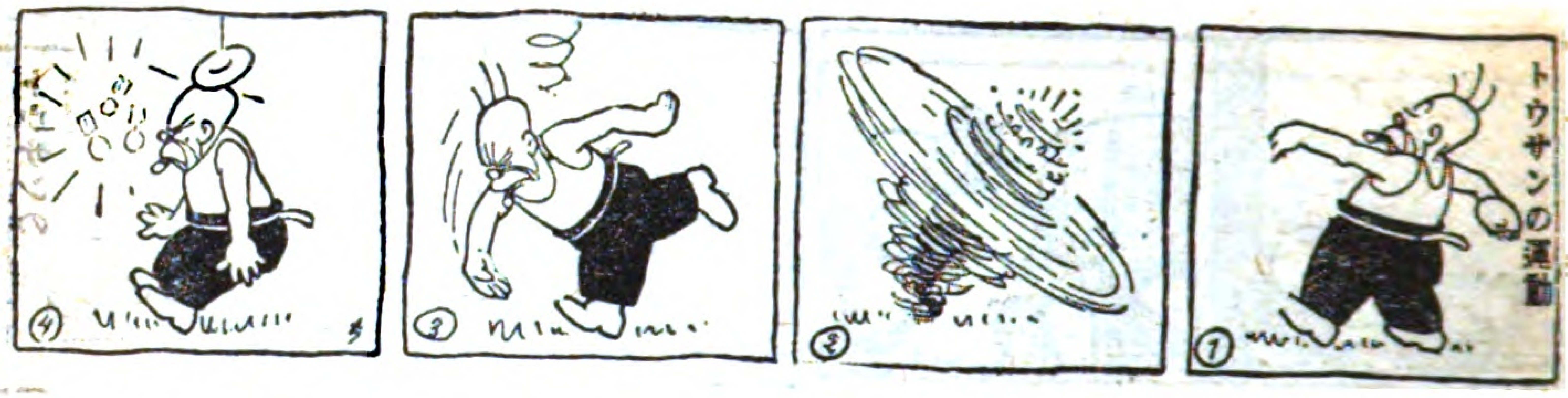
『おい呆れたね、こりや。世の中に圖々しいといふのも隨分あるが……』

『まあ／＼愚痴を言ふなよ。それより兎に角一寸散歩に外へ出ろよ。電車道まで一緒に出ろよ。』

『よし、それぢやブラブラ出掛けるかな。』

懐ろの具合が好くなつた清





水君、急にニコ〳〵顔で立ち上つた。ちらりと鳥影、鰹がぽつんと豆太鼓を打つた。

○

『カツ一丁、ナマ一つ！』

『牡蠣酢三つ、お銚子二本！』

『芙蓉蟹兩箇！　白飯がつきまアす！』

和食、洋食、中華料理。何でも出來て値段が迚も安い。だからまだ日が暮れた許りだのにもう客はギッシリだ。その間をほつそりした女給が右往左往、乙鳥のやうに縫つて居る。名もお目出度い寶來食堂、その片隅の食卓が我が岩井君と清水君が既や滿腹の態である。見れば景氣がいゝ徳利が二本、二人共それで眞赤になつて居る。

『あゝ食つた〳〵。二三日振りで思ふ存分食つた。』

『さうだらう。流石の僕も、今日の君には迚も敵はん。』

『何にしても愉快だ。それに此の酒が空腹の故か馬鹿に効いたね。何しろ散々歩いた末だつたからなあ。』

『全くだ。あゝキンキラキンノ、キンキラキン――

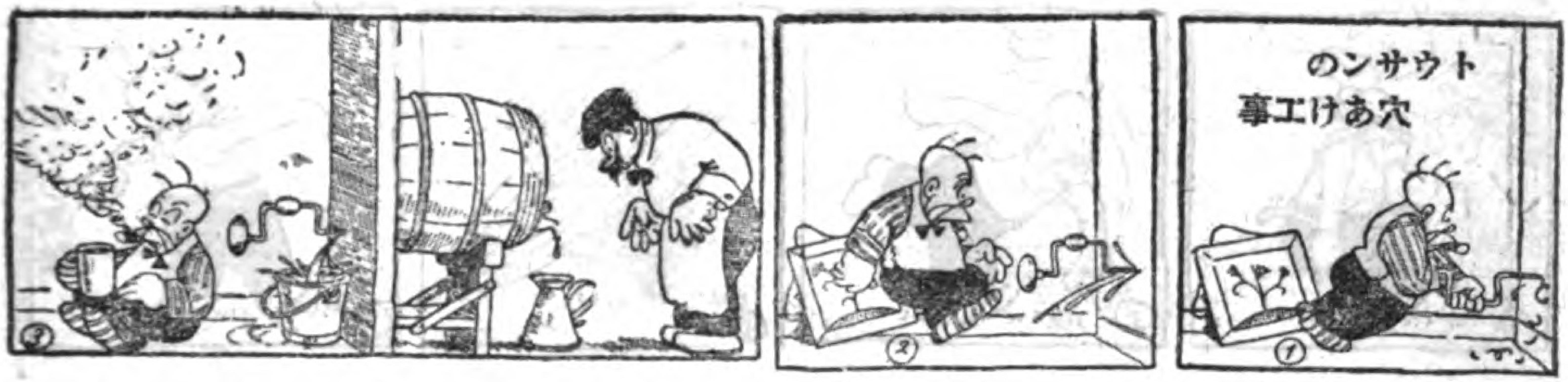


か、ウーイ。』と岩井君も負けずに陽氣だ。

『はゝは、久し振りで故鄕の唄が出たな。よしそれぢや僕もやらう。』

岩井君と清水君は好い心持さうに唄ひ出した。

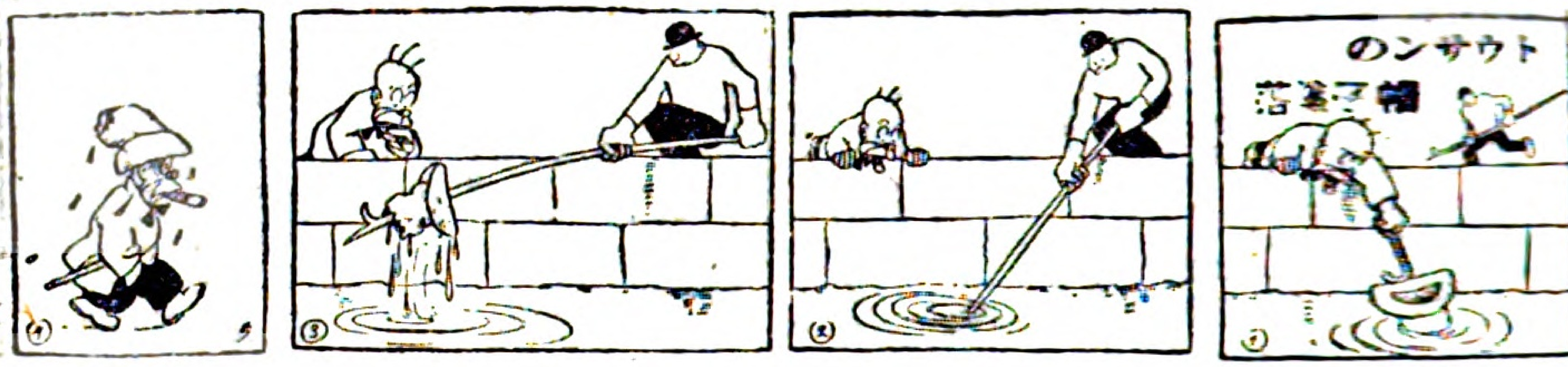
『とろゝん、とろゝん――河童唄ふ、醉へば唄う



て、河童眠るウ……』
『とろゝん、とろゝん——河童嘆く、酔へば嘆いて、河童眠るウ……』
『酔へば唄うてエ……』
『酔へば嘆いてエ……』
『河童眠るウ……』
『眠る、眠る、たゞ蒼、蒼々、蒼ウ河童眠るウ——』
途端に岩井君の膝の下から、けたゝましい鈴の音が鳴り出した。
『ヂリ、リ、リ、リ、リ！』
河童の唄には別段驚かなかつた周圍の御客も、此の突然寶來食堂を屋鳴り震動させた鈴の音には驚いた。さうしてみンな一齊に岩井君と清水君の方を振り向いた。然しそれより尙慌てたのは當の岩井君だ。彼は狼狽して立上るなり、恰で田圃で鯰でも摑んだやうに、
『コン畜生、コン畜生！』と言ひながら件の怪物を眞赤になつて無暗に押へつけた。然し怪物は鳴るだけは遠慮會釋もなく鳴り續けた。さうしてあとは處女のやうに黙つて仕舞つた。
清水君もハッと仰天した。彼は女給を呼ぶと大急ぎで、
『會計だ〳〵。』と叫んだ。
『二圓二錢頂きます。』
『エッ！』
彼はヒヤリとした。そして袂の中の金をみんな摑み出しながら岩井君に囁いた。
『おいチップをやつて呉れ、チップをやつて呉れ！』
『だつて僕は二十錢……』
『何でもいゝからやるンだ〳〵！』
岩井君は火吹達磨のやうな顔をして十錢玉を二ツ拋り出した。
『何うも毎度有難う！』
『又入らしつて下さいな！』
『お近い中にね！』
二人は蒟蒻玉のやうに往來へ飛んで出た。

○

『あゝ驚いた〳〵。僕は突然こいつがヂリ〳〵ヂリとやり出した時には、世界中の時計が一遍に鳴り出したやうに顚動したぜ。』
『俺だつてさうだ。然し此の時計は實に正確だなあ。俺は七時にちやんと合はして置いたンだ。』
『冗談ぢやないぜ。何だつてそンな時間に合はせて置いたンだい。だから今みたいな突拍子もない時に鳴り出すンぢやないか。』



『いや、然し、僕の合はせて置いたのは晩の七時だつたンだ。君が明日の朝七時に……』

『おい〳〵馬鹿々々しい。晝間七時に合はせて置けば晩の七時にヂリ〳〵鳴り出すのは當り前ぢやないか。チエッ!』

『まあさう怒るなよ。』

『おまけに僕は電車賃の二十錢迄チップに取られて仕舞つて、一文無しだ。』

『俺だつてさうだ。そンな事を言へば、ヘンなのは君の方より寧ろ僕の方が餘程、ヘンな氣持だ。』

『何故?』

『何故つて岩井、まあ考へて見ろ。今から四時間前には僕は無一文だつたが其時計は僕の所有だつたンだぜ。それが四時間後の今は何うだ。依然として無一文であるのみか、時計は君の所有になつて居る。』

『つまり所有權が移動したに過ぎないのさ。よしそれ程君が其の時計に未練があるンなら、僕が明日保證人の處から二圓借りて來て君に貸してやるから、それで再び買戻し給へ。さうすればそれこそ依然として君の所有だよ。』

『なるほど。それぢや君、明日二圓貸して呉れ。それでその時計を買ひ戻さう。』

『さうしろ〳〵。』

『全く岩井、君は頭腦が好いぞ。』

『なアにそれ程でもないさ。その代り僕はその二圓で牛肉を奢つてやる!』

『時計といふものは色々役に立つものだのう。』

『僕は今度の試驗に「所有權の移動」といふ問題が出たら、此の實例を書く心算だ。』

春や朧、その朧の深い中を、我が岩井君と清水君は、悠々乎として歸途に就いた。時計は動く、ちくたく、ちくたく……。

—(完)—

所得税（實話に據る）

上司小劍

さしゑ　前川千帆



明治二十年の頃。所得稅法の初めて實施されたる時。

大阪船場の荒物屋。

主人。所得稅て、けッたいな稅やな。これや、一體、なんぢやい。

丁稚留吉。旦那、知りなはらんのかいな。所得稅ちうのはな。……

主人。所得稅ちうのは、……なんぢやい。われ知つてるかい。

留吉。知つてますがな。所得といふのは、得る所と書いておまへう。得る所といふのは、どういふところやろ、その、臺所のことかなア。

隣家の丁稚常二郎。それみい、留やん知れへんがな。所得稅といふのはなア、拾うたもんに稅をかけるんや、一圓拾うたら、お上へ十錢納めるといふ工合になア

主人。さうか。そんなら、物を拾ひさへせなんだら、納めいでもえゝ稅やな。これや氣樂でよい。

にこ〳〵しながら、よそいきに着更へて、縞の羽織の襟のかへり工合を氣にしながら、出て行く。隣家の酒屋の主人を誘ふ

酒屋の女房お春。まア、折角誘ふとくなはつたのに、お氣の毒さんだすな。うちの良人はもう行かはりました。

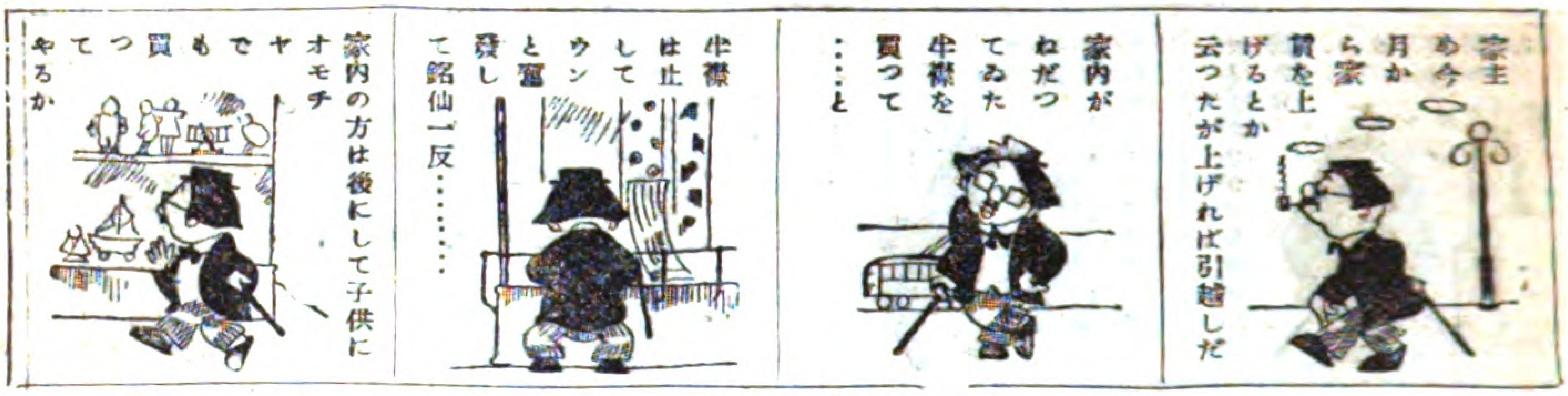
主人。あゝさよか。えらい早いな。

酒屋の女房お春。さうかて、一時からだッしやろ。もう一時半廻はつてまッせ。

主人。さうだッか。うちの時計狂うてるのんかいな。いんま一時打つたばつかりやつたが。……そんなら、いて來まッさ。

齒の弛んだ利休下駄の音、ギク〳〵、カラコロ。荒物屋の主人は、やがて、區役所の鐵門を入る。受付にかゝつて、呼び出しの葉がきを見せると、『これは小學校ツ。』と言つたきりで、窓をぴしやんと閉める。『なんの こッちや。』とぼやきながら、主人は、また、ギクギクカラコロと、程近き小學校に向ふ。

そこには、多くの人が集つて、運動場でうろうろしてゐる。一時といふ呼び出しには、二時間の懸け値があつて、ほんたうは、學校が放課後の三時からだとのこと。『なんのこつちやいな。』のぼやき聲が方々に起つて、中には一遍歸つて、出なほさうとするものも

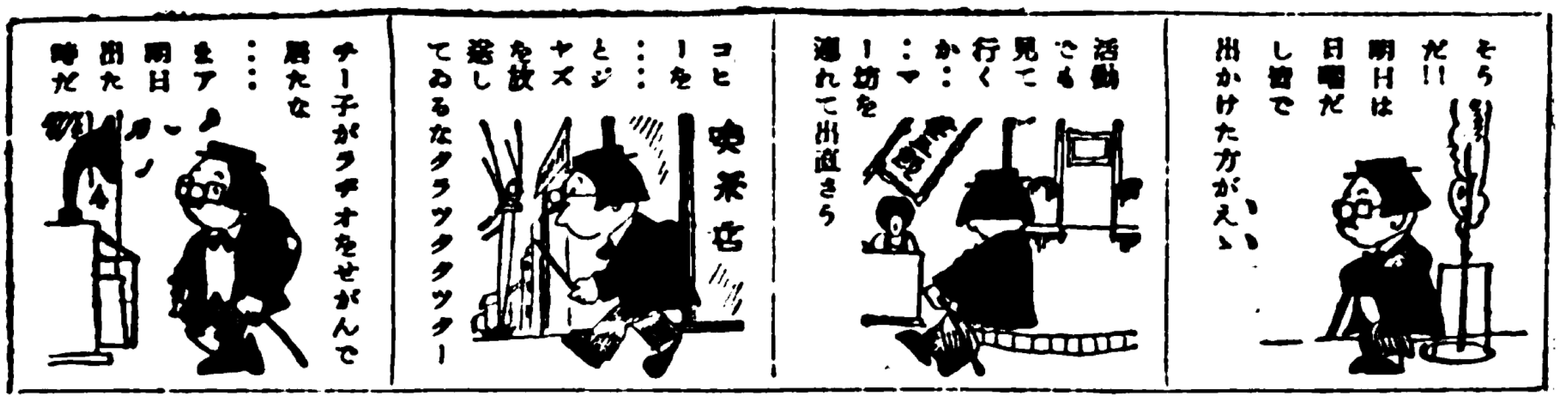


ある。

荒物屋の主人は、八方を物色したけれど、見知つた顔は、一箇もない。どうやら、船場中で名うてのよい衆（金滿家のこと）が多くて、同じ船場の住人とは言ひながら、自分の如き荒物屋の小商人なぞは、あまり居らぬやう、こんなことなら、來るのでなかつた……と後悔する。隣家の酒屋の主人も、向ひの風呂屋の主人も、いくら探したツて、かいくれ姿が見えぬ。けツたくそがわるい、去んでこませ、と表門へギクギク、齒の弛んだ利休下駄を鳴らして行くと、門が閉まつてゐて、區[illegible]かせつてゐる。『一度出頭したものは、外出を許さんじ』ぽんとやられて、荒物屋の主人は、タジタジ。いよ〳〵もつて、けツたくそがわるい。



やがて、時刻が來ると、兒童たちはじろ〳〵、『これから大人の學校か。』とでも言ひたげな顔をして、ぞろぞろ歸つて行く。五組ばかりの教室を打ちぬいて、何かの折りの式場に似たものを拵へ、ガヤガヤガタ〳〵と、一と騒ぎあつて後、一同は運動場から、そこへ呼び入れられた。『お天氣でよろしおましたな。』とか、『雨やつてごらうじ、びしよ濡れだツせ、こないに待たされて。』とか、不



事を畜ひながら、皆々子供のかける低い、小さい腰掛けに、どかり。『あゝア、しんど。』『お茶ぐらゐ出さうなもんやなア。』『わたへ、ちよツきり十二時に來て、三時間から待ちましたがな。』なぞと、やかましいことおびたゞしい。其のやかましさを打ち消して、税務官吏、區役所の吏員とゝもに、正面の壇上に現はれる。

區役所の吏員。どうもお待たせいたしました。

會衆の一人。ほんまに待たしなはつたなア。

區役所の吏員。これから、××税務署直税課長の、所得税に關するお話があります。

直税課長。今日皆さんにお集りを願ひましたのは今度新らしく出來ました所得税に就いて、皆さんによく御諒解を得ておきたいと思ふからであります。申すまでもなく、納税は國民の當然な義務でありまして、兵役とゝもに、名譽の義務として、必らず守らなければならない大切な義務であります。這回法律として公布されました所得税は、一ケ年三百圓、一ケ月にしまして平均二十五圓の所得あるものは納税しなければならないのでありまして、皆さんは少しも隱さないで、其の所得を屆出にならなければなりません。官吏にしても、月俸二十五圓以上のものは、この法律に據りまして、所得税を納めなければなりません。官吏の俸給の如きは、どうしても隱すことが出來ませんが、皆さんのやうに商人の方々は、故意に儲け……利益金を少くして、所得を隱し、所得税を免かれよう、……こんな不德な方もありますまいが、どうか、皆さんも官吏の俸給の如く、少しも隱さず、明細に、……

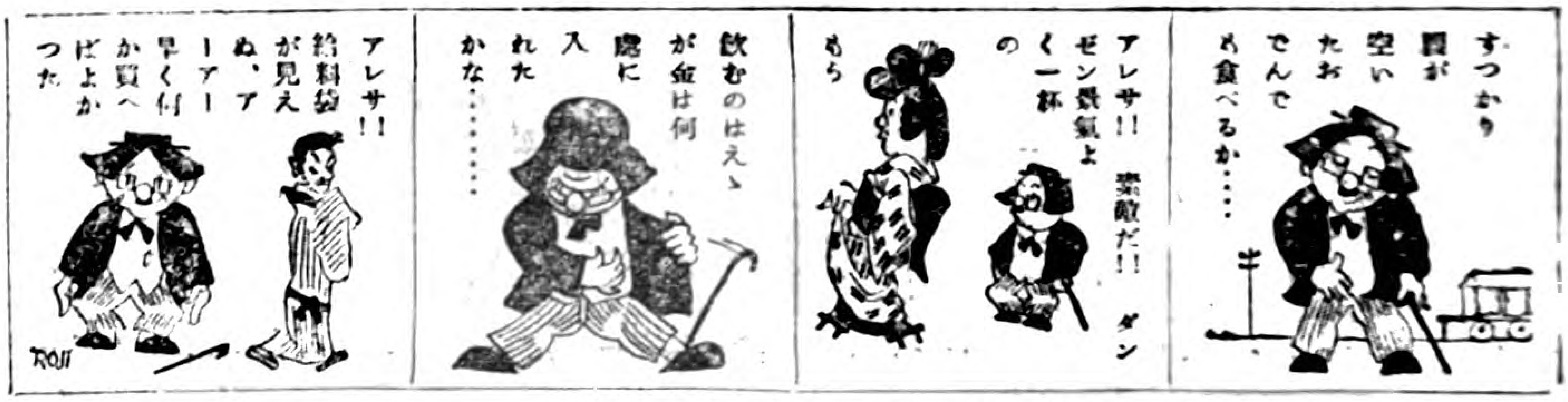
荒物屋の主人。なんのこッちや。拾うたもんの税やないのか。隣家の常どん、嘘言ひよつた。（小さく私語）

會衆甲。あんたの月給なんぼだんね。二十五圓より上だつか。（税務官吏に向つて、大きく叫ぶ）

會衆乙。つゞまるところ、まア、營業税や地租や家屋を納めました上に、また儲けに税をかけようとするお上の慾から來てまんねやなア。

直税課長。（むツとして）慾





といふことはない。所得に税をかけるといふことは、税として一ばん正しいものです。皆さんが、ほんとに正直な申告をして下さると、將來は、すべての税を廢して、所得税と其の附加税ばかりにすることが出來るかも知れません。さうなれば、政府においても、徴税の費用と手數とが省けて、お互に大利益、大便利であります。どうか正直に申告をしていたゞきたい。

區役所の小使が二三人出て、所得申告用紙を一同に配り、其の記入法に就いて、區役所の吏員の説明が、長々しくつゞく。



會衆丙。ちよッとおたんねしまんがなア。

區役所の吏員。はア、なんですか。

會衆丙。かうやつて、商賣の儲けに税をかけられますとなア。……

區役所の吏員。はア。

會衆丙。若しや商賣の手ちがひで、損をしました時は、お上から、償うてくれはりまッか。

區役所の吏員。そんなことおまへん。(税務官吏の顏を見る)

漫畫家
自畫像十人集



田中比佐良氏　麻生　豐氏　宍戸左行氏　水島爾保布氏　前川千帆氏

會衆丙。あゝさよか。さうするとまア、本願寺さんへ納めもんをするのとおんなしで、寺から里へは何も出まへんのやなア。

直税課長。(憤然として、卓を叩きつゝ)あゝア、これ〳〵、今日は國の税法に就いて説明をしてゐるのです。冗談を言つてはいかん。(儼然として戒告)

これで集會は終り、會衆いづれも退散。荒物屋の主人も自分の店へ歸つて來る。

丁稚留吉。旦那はん、お歸り。

女房お鶴。旦那はん、お歸り拾ひ物の税のことで。………

主人。いゝや、そやない。儲けに税をかけはるね、うちの儲けも月二十五圓ぐらゐはあるやろがな、まア、十五圓ぐらゐにして屆けときまへう。(申告用紙を女房に見せる)

女房お鶴。それがよろしおまんなア。(煩雜な申告用紙を見てゐる)



それから、一年過ぎて、税務署の一室。

税務官吏の甲。どうも、此大阪では所得税の結果がわるいね。東京は大層成績がいゝといふが。………

税務官吏の乙。なんしろ商業地ですからね。出すことは、袖口から手を出すのもいやぢや、といふやうな人間が多くて。

税務官吏の丙。それで生意氣なことを言ふやつがありましてね。……先日も松屋町の饂飩屋へ所得税申告の勸誘に行くと、税務官吏は昔の貢取りや、基督も貢取りと一所に食事をしなかつたとか、食事をしたのが問題になつたとか、なんとか言ひよつて、話を無茶苦茶にしてしまひよつた。

税務官吏の甲、乙。はゝゝゝゝ。

税務官吏の丙。時に僕、一つの名案を持つてるんですがなア。

税務官吏の甲。どういふことです。それは……

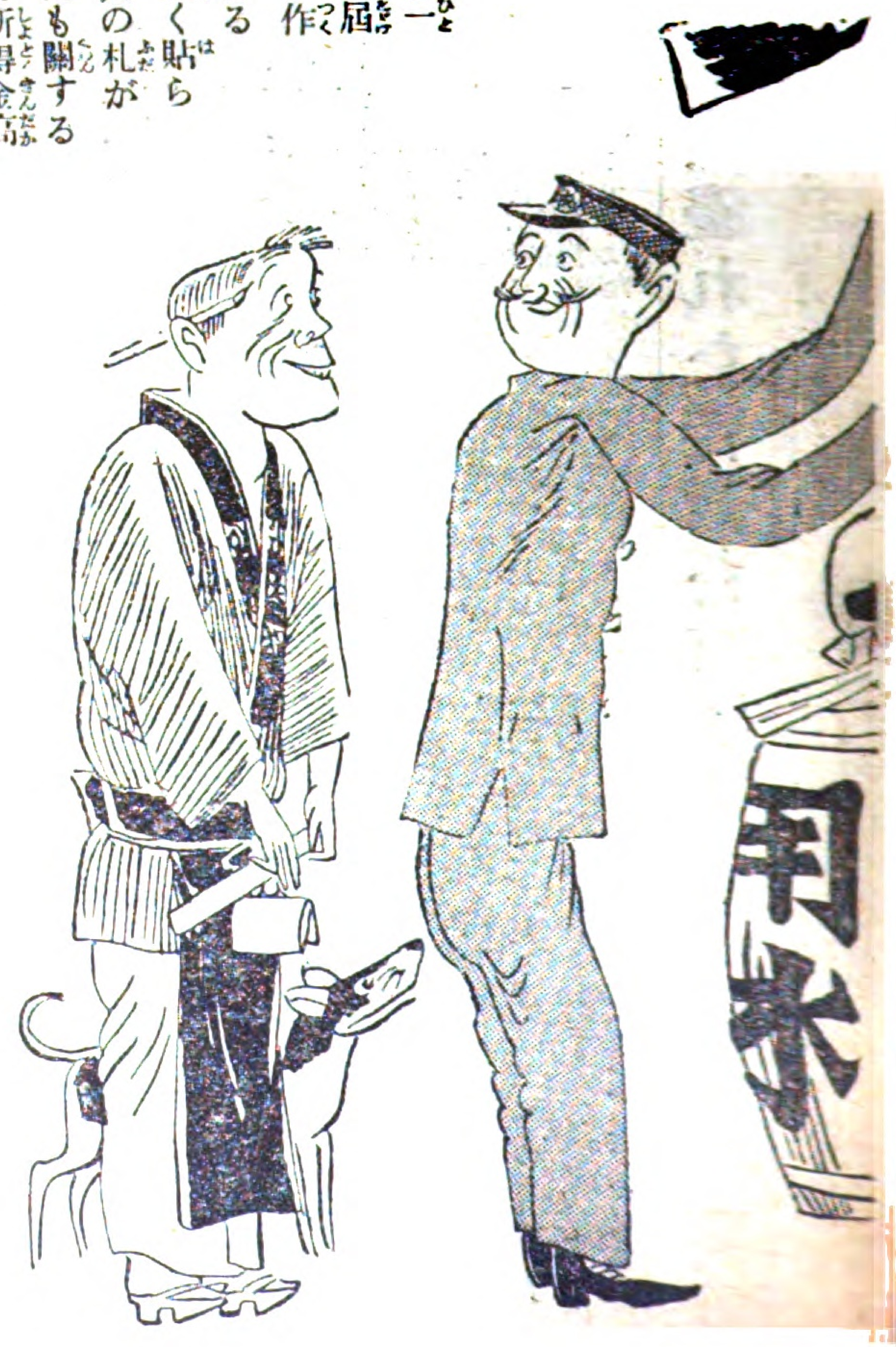


牛島一水氏　宮尾しげを氏　細木原青起氏　長崎抜天氏　清水對岳坊氏

税務官吏の乙。この大阪は商業地ですから、市民に金錢上の利益の心の強いのは當然ですが、それとゝもにまた、名譽心もなかく強い。そこを一つ利用して、所得金高屆濟の證といふ紙札でも作り、所得税を納めてゐる家の戸口へ、ごく見安く貼らせることにしたら、其の札がないと、商賣の信用にも關するといふことで、爭うて所得金高を屆け出やしないでせうか。……中には三百圓未滿の所得を無理に三百圓に殖やして屆けるものもないとは限らん。……

税務官吏の甲、乙。（手を打つて）妙案、妙案。

この手段、圖にあたりて、大阪の市中家々の戸口に『所得金高屆濟』の物々しい證票が貼り出された。



荒物屋の主人。あかん、あかん。うちも一つ、所得税を納めて、あの札を貼つてもらはう。

女房お鶴。あの札がないと、隣り近所へ肩身が狭うていきまへん。

丁稚留吉。こなひだ。仕出し屋へつくりをあつらへたら、あんたんとこは所得税の札がないさかい言うて、出前をあとまはしにしよつた。けッたくそがわるい。

（をはり）

新しき肺病薬は何故に生れ出でたか

何故に、是を皆様の前にお奨めするか

次から次へとあらはれてくる肺病薬は、おそらく今日では、何百種あるかわからないと思ひます。そんなに澤山ある薬の中へ、またこゝに新しいものを發表したところで、それは、少しも皆さんの注意を惹くに足るものとは思ひません。

この記事を御覧になる方の中にも、さだめし、またかといふ氣持で、或は一笑に附し去る方もないとは限りますまい。それほど、今日に於ては、肺病や肋膜炎の所謂特効薬や家傳の妙薬といふものが、あまりありふれ過ぎてゐます。

それにも關らず、私共がこゝに一つの新しい肺病の薬として、皆様におすゝめしようとしてゐるのは、そこにかなりの自信を持つてゐるからであります。一笑に附し去るには、あまりに確な薬の効果を持つてゐるからであります。

全く私ども自身の過去における苦い體驗の上から推して考へてみても、この病氣のために惱む方々に對して、おすゝめせずにはゐられないといふ、寔に人情――止むにも止まれない同情に驅られるがためであります。

しかし總てが合理的でないならば、皆様の納得を頂くことができないと思ひます。たゞ單に、この薬が肺患に效くといふだけでは、皆様は用ひようとはなさるまい。なぜに、これが効くかといふ理由を聞かなくては、皆様はそれを用ひようとはなさるまい。

もし、私共のお奨めする新しい肺療薬『ッベルシン』が、その效果について、合理的に説明できないやうなものであるならば、勿論私達は、皆様にこれをおすゝめしようとは思ひません。この薬が從來のものに比してどんなに變つた多くの特徴を持つてゐるか、その二三を擧げてみたゞけでも、この薬が肺患治療の上に、いかに合理的の效果を奏するものであるかといふ事を知つていたゞけませう。

他に優れた特徴を有する新しい肺療薬

第一にこの薬は、私共の肺臓に繁殖する結核菌の蠟様皮膜を溶解して、つまり丸裸にして、而も徹底的に、病源を絶滅させるところの喰菌作用を促すのに、非常な効果を奏する

ことであります。

第二に、この薬は、結核菌を病竈内に孤立させて、そして、いろ〳〵な病菌との混合傳染を未然のあひだに防止し、或は病菌の命を短縮して、もつとも怖るべきところの結核の消耗熱を喰止めることに、特殊な效果を發することであります。

第三に、この薬は、絶對に解熱劑もまた鎮咳劑も倂合せぬものでありながら、肺患の方が用ひて、有熱の場合などにも極めて順當に體温の下降を示し、なほ喀痰咳嗽をも持久的に全止することであります。つまり、これは『ツベルシン』特有の效果のためで、まづ何よりも病菌の活動を停止し、或はその滅退を意味する有力な證據であるといふことができるのであります。

かうしてはじめて、いかなる病状のいかなる場合に用ひても、決して副作用を起すといふことがないので、何よりも理想的だとされてゐます。

專門的の說明を用ひるならば、この薬については、まだ〳〵多くの特徴を申し上げられますが、どなたにもわかるやうに說明するには、この三つのこと以外に、くだ〳〵しく說明する必要はありますまいと思ひます。

この三つのことだけを以てしても、肺患の方は、是非ともお用ひなさるべきものだといふことができます。またこの三つの特徴をもつてみても、私共は皆様に是非試みていたゞきたく思ふのであります。

今日までにおきましても、多くの肺患の方がこの『ツベルシン』を用ひて、そして以上あげたところの效果を實地に經驗されてゐますのみならず、短時日の服用中にも、一様に食慾が進んでくることで、とかくは減る一方であつた體重までもめき〳〵と增加するのでどなたにでも驚嘆されてゐるところであります。かうした他に優れた特徴のあるために、斯學の權威として知られてゐる土肥博士のごときは、肺結核治療中の第一の薬として、廣く同病者の間に、この『ツベルシン』を推奬してゐるのであります。

かくの如く專門家の間にも、病者の間にも實際上の效果の爲に重用されてゐるといふ事は、百の理論よりも力強い事實だと信じます。

もし、いろ〳〵な薬を用ひて、またいろ〳〵の療法を試みて、それでも充分に效果を認めることのできない肺病の疑ひある方、常に蒼白く疲勞し易い腺病質の方、慢性氣管支カタルや喘息の方、肋膜炎や腹膜炎に惱む方、初期の肺尖カタルの方は申すまでもなく、或は二期、三期と進んでゐられる重症の肺患の方もまた腸結核でお困りの方も、是非、この『ツベルシン』を御試用なさつていたゞきたいと思ひます。過去に於いて、この薬を用ひた方を失望させたことがなかつたやうに、今後に於いても必ず、皆様を失望させるやうなことは、決してなからうと信じます。私共は信じてこの薬をおすゝめ致します。皆様も信じてこの薬を用ひていたゞきたいと思ひます。

それで、私共のおすゝめするその本物がどれほど良質のものであるか、それは皆様の一人々々が、事實の上で、證明していたゞくことができようと信じます。それを希望しておすゝめする次第でございます。(吉松生)

美談の華逸話乃泉

澄宮殿下の御純情

春の休みがしまつて新學期が始つた。

こゝは學習院の一教室――教壇に立つた先生はにこやかに生徒を見渡して、

『この休みの間勉強をしましたか、した方は手をお上げなさい。』

といふと生徒はみんな小さい手を上げた。

澄宮殿下も同じやうにお手を高くお上げ遊ばされた。

さて、放課後のことである、澄宮殿下は御附の者を召された。御附の者は何事かと御前に罷り出た。すると殿下は、

『宮はさつき先生からこの休みの間勉強をしたかと問はれた時に、みんなと一緒についうつかり手を上げてしまつた。しかし今考へて見れば毎日勉強はしなかつた。實に先生に僞りを申してすまぬことをしたから、直ぐお斷りをして來てくれ。』と大變御心配の様子で仰せられた。御附の者はたゞ恐れ入つて、

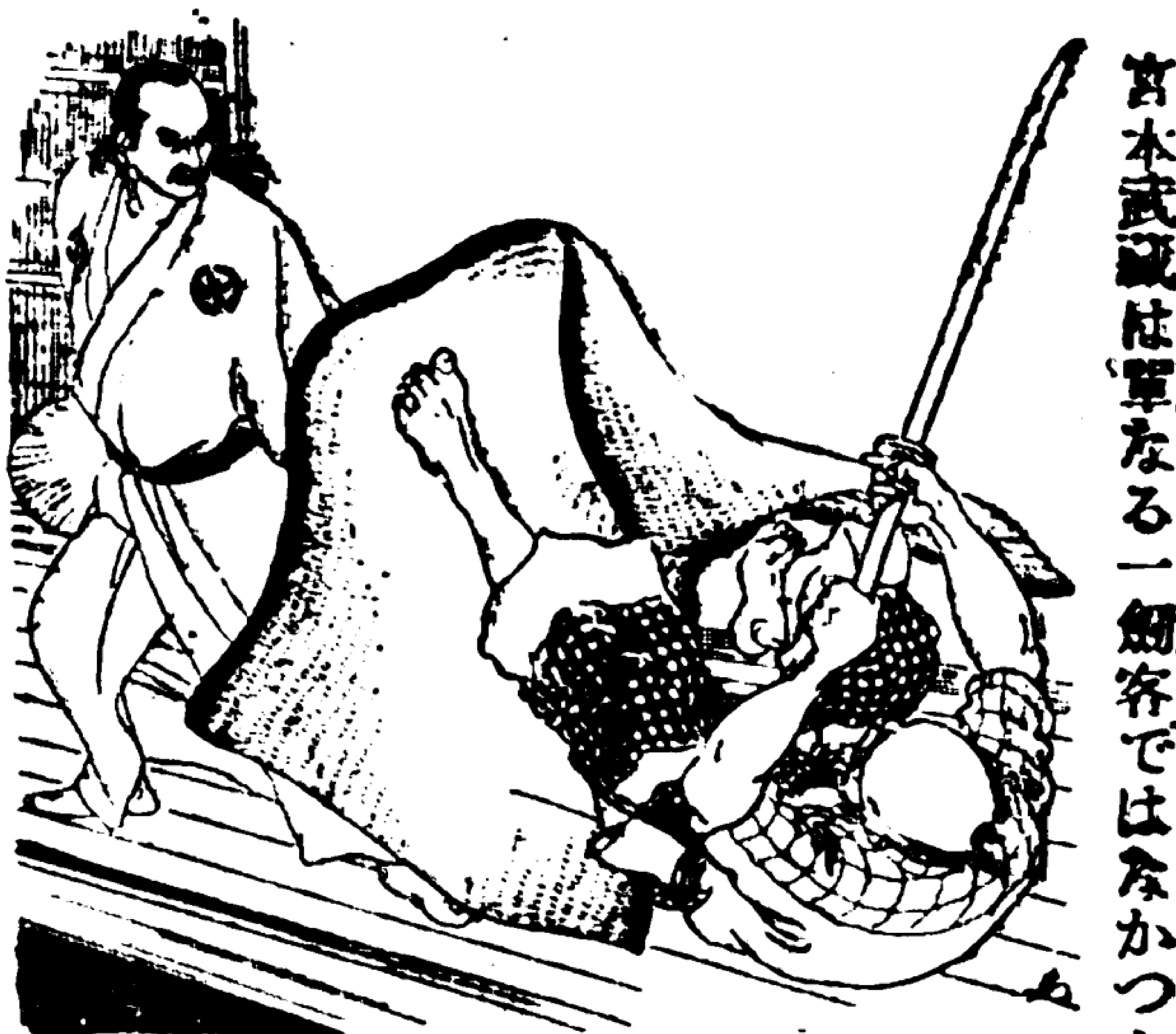
『決して御心配には及びませぬ、ただ教科書をお讀み遊ばすばかりが御勉強ではございませぬ、お休みの間海や山や雲や植物に就いていろ〲お話をお聴きになりましたし、又昆蟲の御採集もなさいましたが、これらは皆御



[illegible]邸の中でございます。[illegible]と一緒にお手を[illegible]にされたと云つて決して先生を儼つたことにはなりませぬ。[illegible]御心配をなさいませぬやう。』

と申し上げると殿下ははじめてホッと御安心を遊ばされた。後でこのことを御附から承つた受持の先生は、殿下の至誠な正しい御心に熱いうれし涙がこぼれて〱とめどがなかつた。

どちらが油断してゐた



宮本武藏は單なる一劍客ではなかつた、繪も描けば彫刻もやる、そしてそれが十分名人と云はれるほどのすぐれた腕前であつた、五十歳になつた時、武藏は悟境に到達した。

『人は決して斬られるものではない。』といふのが即ちそれである。そこで彼は刀を差さずに歩いた。禪語に無心無心大無心とい[illegible]

はいかにも武藝者としか見えなかつた。

さて、或る夏の夕方。武藏は庭先の緣臺に莫蓙を敷いて、悠然として凉しげに團扇をつかつてゐた。門人の一人が『よし、かういふ油斷を見すまして一本打込んでみよう。』と息をころして後から窺ひ寄つた、まさに武藏の身體は隙だらけである、門人は振りかぶつた木劍をはつしと武藏の肩先を目がけて打下した。

『あつ。』

といふ叫び。

意外にもそれは門人の口から洩れた、武藏は二間あまり向ふに悠然と立つてゐる、門人は地上にひつくり返つて強か腰を打つて苦悶の體！

これは一體どうしたことか。

太刀風三寸にして早くも氣配を知つた武藏は、はつとばかり飛びのいた、然もその時、緣臺の上の莫蓙をグイと引いたからたまらない、今し後の緣臺の端に立つて木劍を振り下した門人は、アハヤと云ふ間に足を掬はれ、地上にひつくり返つたのであつた。

武藏は、

『人の油斷をねらつたのはよいが、自分の油斷を忘れをつたのう。』

と云つてカラ〱と快笑した。

希運禪師とその母

黄檗の希運禪師は、幼い時佛門に入り師を尋ね道を訪うて遠く江西に學んで居た。ところが禪師の母は恩愛の情に堪へやらずわが子に逢ひたい逢ひたいと泣きくらしてゐるうち到頭目を泣きつぶして了つた。その後母は行脚の僧の宿をして手づから洗足をするのを例としてゐた、希運禪師の足には瘤があつたから、母は、若しもわが子にめぐり逢ひはせぬかとそれをせめてもの心だのみとしてゐたのであつた。

二十年はすぎた。禪師は行脚の因み郷里を訪れてみた、變り果てたわが母、わが家、禪師の心は動かされずには居られなかつた。併し、自分は未だ大安心の境涯を得てゐない。こゝで母の恩愛に引かされてはこれからさきの修行を如何にせん。そこで禪師は瘤のない方の足を二



度出して自分が希運でないことをそれとなく示し、翌日落ちる涙をふり拂つて出立したが、途中でふと同參の知人に逢うたので、陰ながら母に逢うた喜びを物語つた。するとこの僧が家に行つてこの事を告げたから母は驚いて氣狂のやうに杖に縋つて後を追ひ、清福といふ渡し場に至つた、その時日は暮れかけ、禪師の舟はもう中流に乘り出して了つてゐた。母は大聲でわが子の名を呼びながら前へ前へと踏み出し到頭河の中に落ち込んで了つた。禪師は幽かにわが名を呼ぶ聲を聞いて急ぎ舟を回したが、その時はすでに母は溺れ死んだあとであつた。そこで禪師は松明を取つて母のために菩提を弔らふ偈をよまれた。

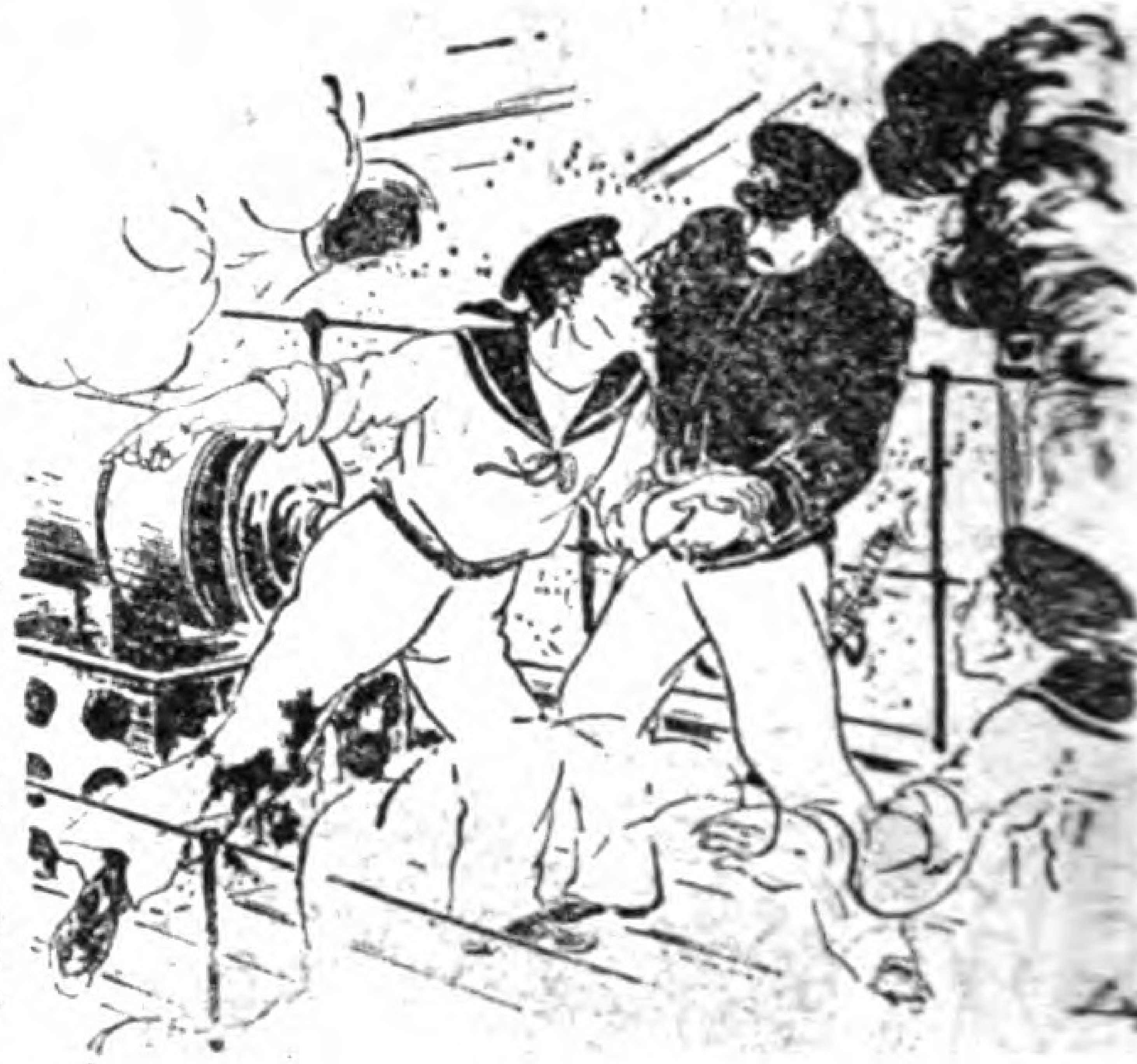
その後禪師は層一層修行を勵んだ、一は自分のため、一は母のため——さうして遂に黄檗一宗を起すほどの大偉僧となり得たのであつた。

身を以て防舷物となる

明治三十七年六月二十四日、丁度旅順口封鎖の最中港外に起つた出來事である。

第六十三號水雷艇が母艦日光丸に魚形水雷を取りに行つた。一體海上にあつては兩方とも走りつゝあるのだから、接觸する時にはどうしてもドシンと激突する。そこでさういふ際には必ず母艦から防舷物を下して、激突によつて生

する兩方の毀損を防ぐことになつてゐる。



第六十三號がまさに母艦に接觸せんとしつゝあつたとき防舷物はまだ下されてゐない。しかも下すにはもう間に合はない、どうなることかと一同が膽を冷してゐる瞬間、艇の中から一人の水兵が躍り出たかとおもふと、矢庭に兩艦の間にはいつた、即ち身を以て防舷物の役目を果したのであつた、そのために水雷艇も母艦も何の難もなく助かつた。

併し身を以て防舷物となつたのだから堪つたものではない、右の脚は折れてしまひ、隨所から血が迸り出てゐる、それでも水兵は平氣で、折れた脚のまゝ立上り數歩艇長の前に進みよつて、

『艇長、見事に防ぎました。』

『おゝお前はあつぱれな者だぞ。』艇長はかう云つて水兵の手を握りしめたが、その兩眼からは熱い涙が雨のやうに下つた。水兵は尚もひるまず、

『私の脚なんかどうなつたつてかまひませぬ、それよりも艇の方が大事です。』

と云つて莞爾としたかとおもふと、この時初めてばつたりと倒れた。壯烈を極めたこの情景を見た上官も水兵もおいおいと聲をあげて男泣きに泣いてしまつた。

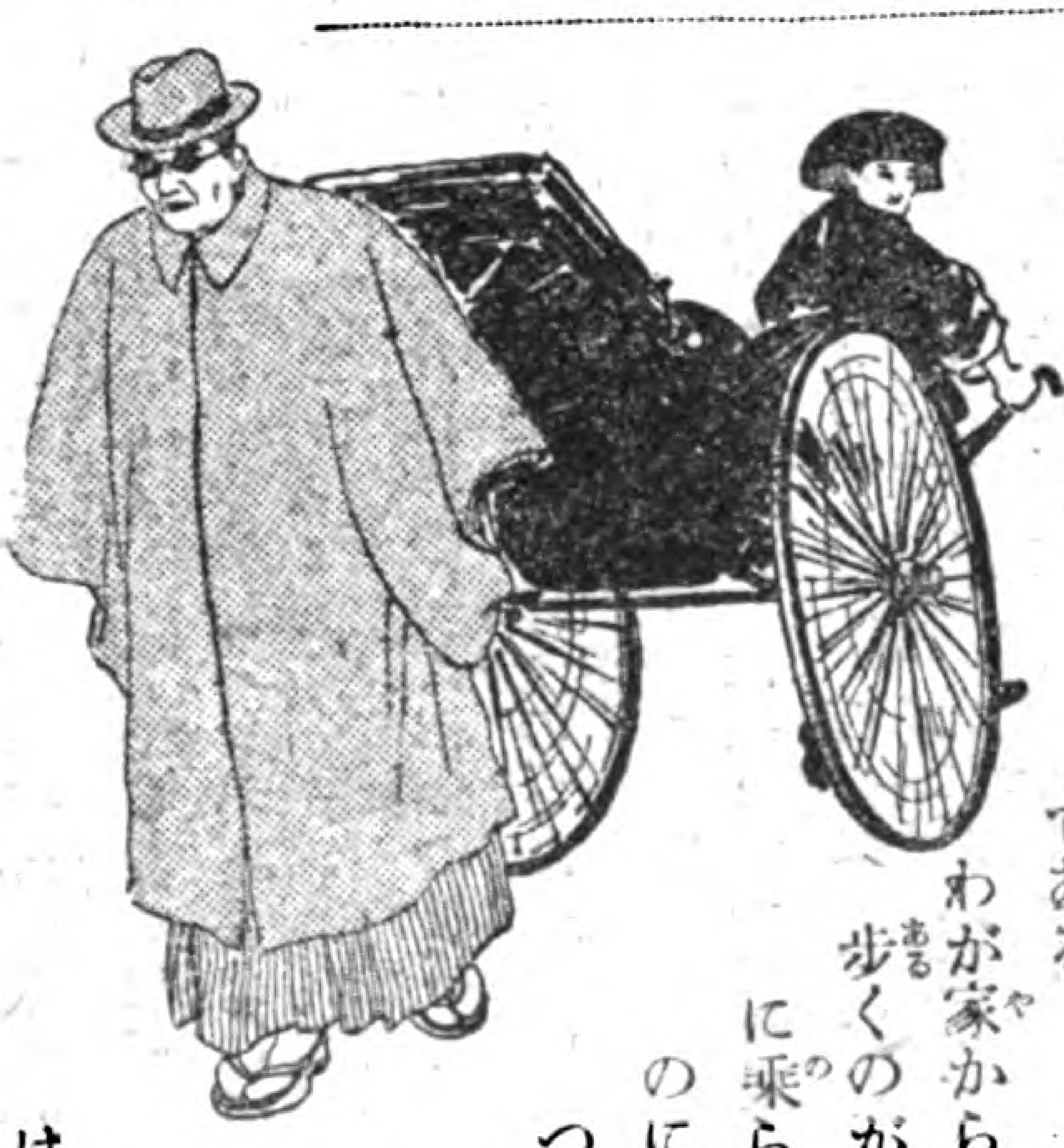
名人の心がけ

攝津大掾とは、北白川宮から賜つた名で、藝名は越路太夫といふのである。語りの美しいこと、聲のいいこと、それにおつとりした上品な風采、いかにも名人らしい名人である。

わが家から文樂座へ通ふのに歩くのがきまりで決して俥に乘らない、そして歩くのにも十分呼吸をはかつて靜かに歩みを運んで行く。老年になつたので、

『もう俥に乘ることにしたらよいではありませぬか。』

といふと、太夫は頭を振つて、



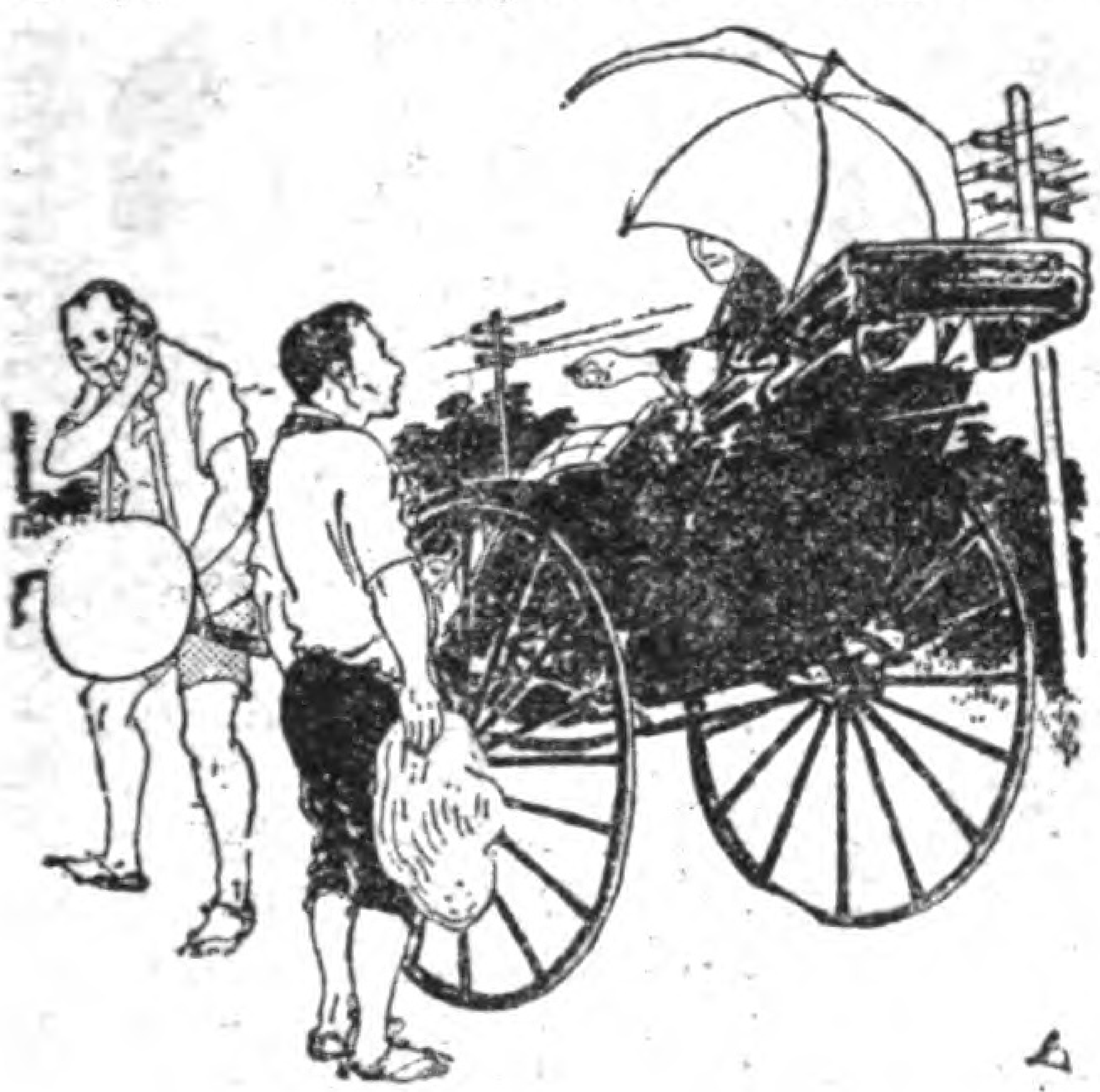
『わたしが歩くのは、自分の藝を大切におもふからです、私は決して急がず、牛のやうにゆつたりと歩いて行く、氣を落着けて歩きます。さうすると、向ふへ行つてから少しも呼吸に故障が起らない、俥に乘ると、どうしても揺れるから呼吸に變りが起る。さうすると自然語り口が亂れる、淨瑠璃には俥は悪いとおもつて乘らないのです、殊に年をとつたら、餘計に氣をつけなくてはならぬ。』

と答へた。

流石に名人と云はれる人は心がけのほどがこまかい。

文久坂の由來

伊勢の諸戸清六翁は一代の間に千萬長者となつた人で、商賣にかけて機敏且つ放膽なことは驚くべきものがあつた、隨分思ひ切つたことをやる人であつたが、併し又一厘一錢たりとも大切にして



無駄なことには決して出さなかつた。

或る夏のこと、翁はめづらしく俥に乘つて桑名の町に近いある坂道にかかつた。折柄の日盛り、容捨なく上からは照りつける、車夫はハツハと暑苦しい息を吐き乍らのぼつて行くのであつた。するとこの有樣を見かねたものか田圃に出てゐた百姓の一人が俥の後押をしてくれた。俥が坂の上まで達した時、俥上の翁は懐の財布から文久錢一枚を取出して、

『どうも御苦勞でした。』と云つて御禮のしるしにそれを百姓に與へようとした、百姓は御禮など貰ふつもりではなかつた。たゞ車夫を氣の毒に思ふ餘り、後押をしただけであつたが、それにしても文久錢一枚御禮にくれるにしては餘りに少い、そこで憤然として受取らずに立去らうとした。翁は、

『待て〳〵、お前に云つて聞かせることがあります。』

と呼びとめた、そして言葉を續けて、

『たとへ文久錢一枚でも金はやはり金、天下通用の大切なものです、桑名の町を一日目を皿にして歩き廻つたとて文久錢一枚拾ふことは出來ますまい。又一枚の文久錢も使ひやうによつては何萬圓何十萬圓に殖すことができる、お前のやうな考へだからこそいつまでも百姓をしてゐなければならぬのです。』

とたゞならぬ顏いろで諭した。それ以來人々はこの坂の

ことを文久坂とよぶやうになつた。

大君のことを忘れるなッ！



元治元年蛤御門の戰ひに久坂玄瑞は重傷を負うてだうとばかり打倒れた。玄瑞の部下品川彌二郎は、當時二十二歳の血氣盛り、亂軍の中にあつて奮闘をつゞけてゐたが、玄瑞の倒れたのを見ると、かねてより死なば諸共の覺悟をしてゐたことゝて、側に駈けよつていきなり腹掻つさばいて果てようとした。

その時、息もたえ〴〵瀕死の境に落ち込んでゐた玄瑞は、くわつと兩眼を見開き、聲をはげまして、

『馬鹿もの奴！大事な身體をかゝる敗軍の間でわざわざ捨てようとする男なら俺は七生まで絶交するぞ。俺は深傷を負うたのだから仕方がない死ぬるのだ。しかし俺の志をお前たちが繼いでくれなかつたら、勤王の大事業はどうなるのだ！……大君のことを忘れてはならぬぞッ！』

と叱りつけた。そして、早く逃げろと遠くを指差すので、品川は今は詮方なく涙に咽びながらその場を立退いた。玄瑞はその後姿を見送つてニツコとしたがやがて間もなく息が絶えた。

奴隷の報恩



ローマの軍がグルメンタム市を圍んだ時の話である。市の中から幾多の奴隷や市民が逃れでて、ローマ軍へ降伏して、市を攻めるのに手傳つた。その時ハオンとレムと云ふ二人の奴隷は、同じく市を逃れてローマ軍の中へ投じた。市は終に陷落して、ローマの兵士は雪崩の如くに侵入し、掠奪を逞うした。

その時二人の奴隷は再び自分の仕へてゐた女主人の家に駈け入り、矢庭に肩に擔いで軍中を通り抜けようとした。

『コリヤコリヤ共方たちはその女をどうしようと云ふのだ。』

ローマの兵士が詰問した時に、ハオンは答へた。

『ハイ、實は私共は此の女の處に使はれてゐたので御座いますが、日頃酷使されて苦しめられて計りゐましたので、今こそその復讐をしようと思つて作れ出してゐるのでございます。』

ローマの兵士は無言のまゝうなづいて二人をそのまゝ軍中を通過させた。かくてハオンとレムの二人は、舊主人を安全なところに連れて行つて密かに隠まうて了つた。

やがて戰ひもすみ平和になつて、二人は女主人を舊邸宅に連れて、愈よ忠勤を勵んだ。實は平素此の女主人は奴隷を優さしく扱つてゐたので、斯く二人が頓智を働かせて救つたのであつた。後にこのことがローマの司令官に知れたけれど、その志は賞す可きであると云つて、罰せられる代りに恩賞を與へられた。

天海和尚の用意

狠兒天海和尚が、柏崎に行かうとして、とある土橋にさしかゝると、隨行の一人が下駄の緒を切らして、ちよつと狼狽へた。

すると和尚は、かねて用意の麻の細紐を取り出して與へ、

『下駄の緒と玉の緒は、何時何處で斷れるかわからぬものぢや。各〻方は用意が出來ておいでなさるかな。』

と、一同の顏を見渡した。



臨機應變問答

豐太閤頗るのお氣に入りに曾呂利新左衛門と云ふ滑稽人があつた。或る時、近習の一人がその秘訣を訊ねると、新左衛門は相變らずのケロリとした調子で、

『貴殿は、毎日御飯をたべますか。』と妙なことを問ひかへす。

『勿論、一日三度は必ず食べてゐる。』

『その御飯の味は如何ですか。』

『左樣、これと說明出來る味があろやうには思はれぬ



が……』

『では、お菓子の味と如何でせう。』

『お菓子のあまくて美味いことは誰でも知つてゐる筈。』

『は、は、は、貴殿は御飯をやめて毎日お菓子の食べたい方ですね。』と曾呂利は笑ひながら云ふ。近習は自分が馬鹿にされてゐる様に思つたので怒つて、

『そんなことの出來る筈はない、拙者は今貴殿にどうしたら殿下の御意に副ふかをおたづねしてゐるので、御飯の指圖を受けてはゐない。』と云ふと、曾呂利は眞面目に答へた。

『されば、そのお答へを申上げた筈ですがまだお氣づきになりませんか、例へて言へば私は、殿下に御飯をすゝめてゐるために飽かれないもので、他の人達は巧言令色のお菓子を差上げるので、二度三度、四度目にはお嫌な顔もなされるのです。』

◎智頓は瞬間の神で天才は時代の神（佛國俚諺）

楢崎平太郎氏と語る

一記者

五月號所載『裸一貫！輝く友情！』と題した楢崎平太郎氏の成功苦心談は、讀者各位の異常の感激と、各方面からの多大なる讃辭とに迎へられた。殊に吾等の欣喜に堪へなかつたのは、美談の主人公たる室蘭商業會議所會頭楢崎氏が上京の序を以て本社を訪はれた事である。齢耳順を越えて尚矍鑠壯者を凌ぐ概ある氏は、あく迄謙讓の温容を以て具に往年の奮闘と忍苦を物語り、吾等をして再び新なる感激にひたらせた。氏の親しく語る所と吉澤氏によつて傳へられた所とは相違した點がある。依つて氏の談話を抄錄、讀者各位に御知らせする。

二十才にして上京、先づ第一に寄食したのは政界の利者井上角五郎氏の家であつた。さうして刻苦多忙の餘暇和佛法律學校に學びやがて實業界へ雄飛を志した氏は卒業と同時に山平商店に於て株式研究をなすこと約一ケ月半、遂に機は到來した。明治三十一年七月、壯志盛んなる氏は勇躍して井上氏の經營する北海炭鑛會社に入社すべく渡道した。在社二年其間、氏の華々しき奮闘振に着目した氏の恩人横山久次郎氏（當時釜石鑛山所長）は、氏に委ぬるに室蘭代理店を以てした。

實に此の知遇こそ他日氏が北海道否——日本に於て雄飛する端緒であつたのだ。爾來、氏の經營活動する各種の事業の蔭には、常に横山氏の指導と後援があつた。

『私が今日世間から成功者だとか何だとか噂されるやうになつたのも、みんな先輩の御蔭です、殊に横山様に對してはどうして御恩返しをしてよいか分らぬ位御厄介になりました。』

とあく迄報恩感恩の至誠を以て語る氏の人格に對し吾等は今更の如く頭の下るのを覺えるのであつた。



偉大なる盲人

山縣五十雄

五官を完全に具へて居ながら、何等社會に貢献せぬのみか、或は其寄生蟲となり、甚しきは罪を犯してこれに迷惑を與ふる人間の屑が少なくない世の中に、不具でありながら猶よく公益を進め、名を揚げ、身を立てる偉人も亦稀でない。先年八十二歳の高齢で倫敦に於て永眠した偉人なる盲人、サア・フランシス・ゼー・キャムペル博士の如きは其一人である。

博士は米國に生れ、四歳の時アカシヤの刺で眼を傷つけたのが原因となつて失明した。漸く長ずるに及んで好學の心篤く、不自由な身體でありながら人一倍勉强して學問音樂を修め、後獨逸に留學して之を大成した。

業を卒へて米國に歸つた時は、米國に於て正に奴隷解放の爭論が沸騰して居る頃であつた。キャムペル博士は奴隷解放に反對の南部の出身であつたに拘らず、勇敢に奴隷解放の正論を主張したので、同郷人の排斥を受け、彼が黒人に文字を教へたことの爲めに、私刑に處せられんとするの危難に遭つた。

幸にして彼が盲人たることが知れ、不具者を絞刑に處するは餘りに殘酷であるといひ出す者があつたので、其爲めに生命だけは助かつた。然し此事の爲めに彼は郷里に止ることが出來なくなり、英國に遁れて其國の人となつた。

倫敦に來着後、彼は同じく盲人で法律の大家であつたアーミテーヂ博士と交を結び、協力して盲人教育の爲めに倫敦水晶宮の附近に盲人師範音樂學校を起した。開校當時生徒は僅に二名に過ぎなか

夏七題

渡邊汲

山の池に犬つれて泳ぐ男かな　（淺茅樓）



女たゞ二の腕だけのむし暑さ　（空壺）



風鈴や足立てゝ寢る蚊帳の人　（綠環）



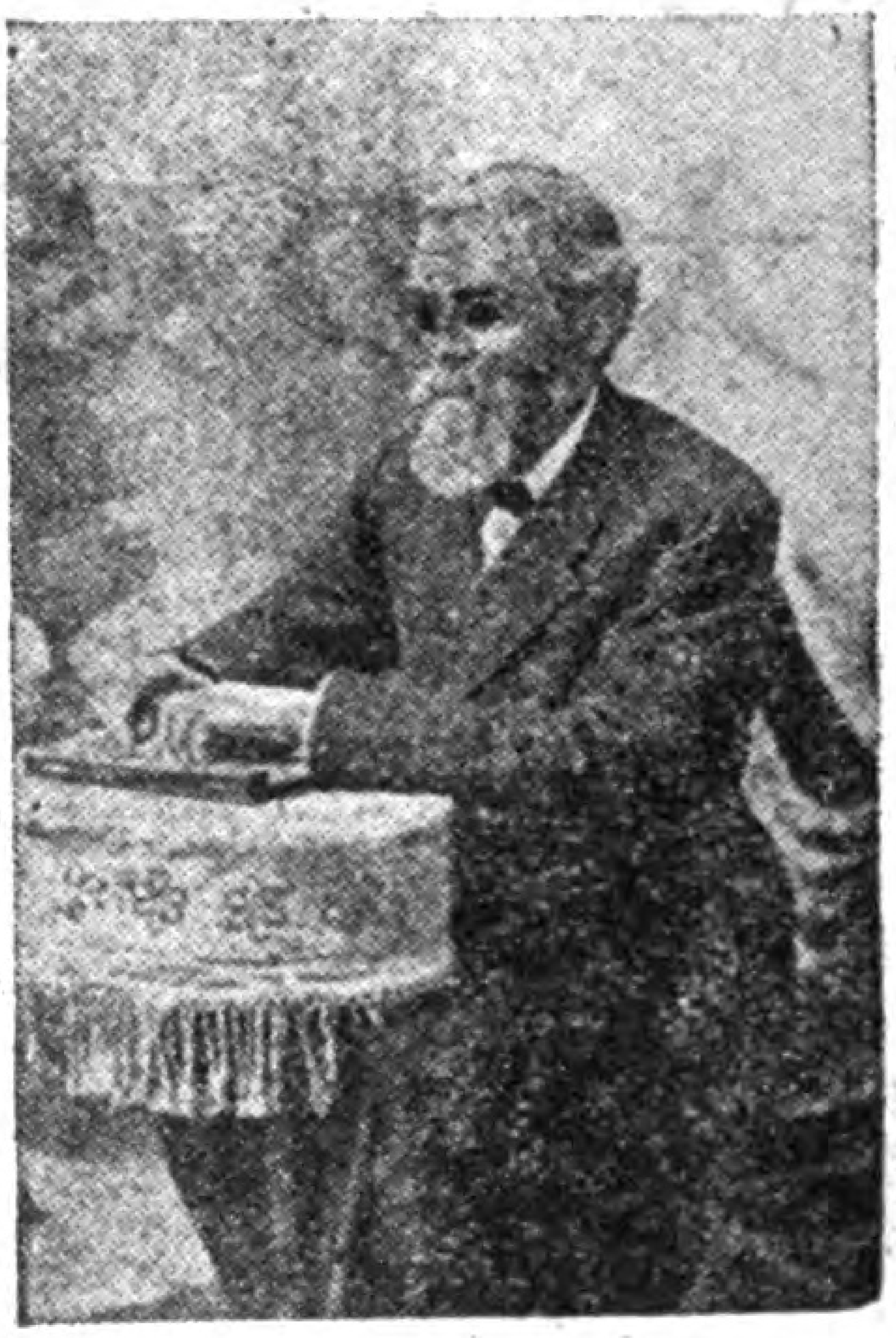


電話きゝつゝ扇つかへる舞妓かな　（[illegible]人）

づたが、次第に博士の名聲が傳はり、其學校は隆盛に赴いて、後には世界の各國から多くの盲學生が遊學する迄になつた。大阪毎日新聞社で盲人の爲めに發行する點字新聞の主筆である中村京太郎氏も此學校の出身である。

博士は從來の盲人教育法に一大改革を導き入れた。即ち從來盲人は深高なる學問を修むるに適しないとの世間一般の考を一變せしめ、手藝に止らず、高尚なる學問を盲人に教授するの可なるを示し、又盲人の教育に最も大切なるは體育なることを明にした。それが爲めに世界の盲人が恩惠を受けたことは非常なるものである。

博士自身が頗る熱心なスポーツマンで嘗てアルプスの高峯モン・ブランの頂上に登つた事すらある。碩學チングル博士が驚いて、「君は眞に盲目なのか、僞物ではないのか」と質問したといふ話がある。


サアフランシスキヤムペル

博士の學校を參觀した人は、いづれも此學校の生徒が盲人であるかを疑はざるを得ない程に、スポーツが盛に行はれて居る。彼等は自轉車を乗り廻し、テニスをやり、氷滑りを行ひ、遊泳を樂しむ等殆ど常人と異る所はない。

從來盲人は活潑なる運動を爲すことを許されなかつた。これが爲めに常に家内に閉ぢこもり運動不足の故に心身共に衰弱せざるを得なかつた。キヤムペル博士の新教育法は彼等がよく活潑なる男性的スポーツを行ひ得ることを證明し、其爲めに彼等が強健なる身心を發達して、不具ながら社會有用の人物となり得ることを明白にした。キヤムペル博士は十數年前永眠したが其逝去に先だつ五年前に其勳功を表彰する爲に英國々王陛下は彼にサアの勳爵を授けた。



名人達人

決死の大試合

昭和天覽試合

高野、持田兩範士の大熱火戰

鳴弦樓主人

挿繪 尾竹國觀

此處は宮城内、三の丸覆馬場、場の南玉座には、畏くも、至尊の出御、その左右には、高松宮、閑院宮、梨本宮、朝香宮各殿下ほか若宮五殿下――御まじろぎも遊ばされず、今し、戰はんとする試合に見入られてゐる。

試合は今、劍道指定選士決勝試合、いよ〳〵この一戰によつていづれか一方が天下に覇を唱へる最終戰――昨日（昭和四年五月四日）の豫選により全日本三十二名の名劍士より、八名を拔いて今日の天覽試合となり、今またその八名より、勝者四名をすぐつて所謂準決勝となり、更にその四名（二組）の決戰によつて遂に最後の決勝戰――範士高野茂義對範士持田盛二の立合ひとはなつたのである。

『指定選士決勝試合、高野茂義、持田盛二』

試合係りの聲と共に、玉座の正面にしつらへられた掲示板はクルリ廻轉、高野茂義、持田盛二の八字が白紙にクツキリと書き出された。

さすがに今日は天覽の試合、御前のこととて、場内水のやうに靜肅、たゞ息づまるやうな緊張のうちに、兩劍士の出場を待つ。

○見渡せば、中央なる試合場を圍む東西北の陪觀席には、田中首相、小川鐵相、中橋商相、三土藏相、山本農相、原法相、白川陸相をはじめ朝野の名士一千餘、一般陪觀者二千餘、うしろあがりの拜觀席に、身動きもせず、試合場を凝視してゐる。

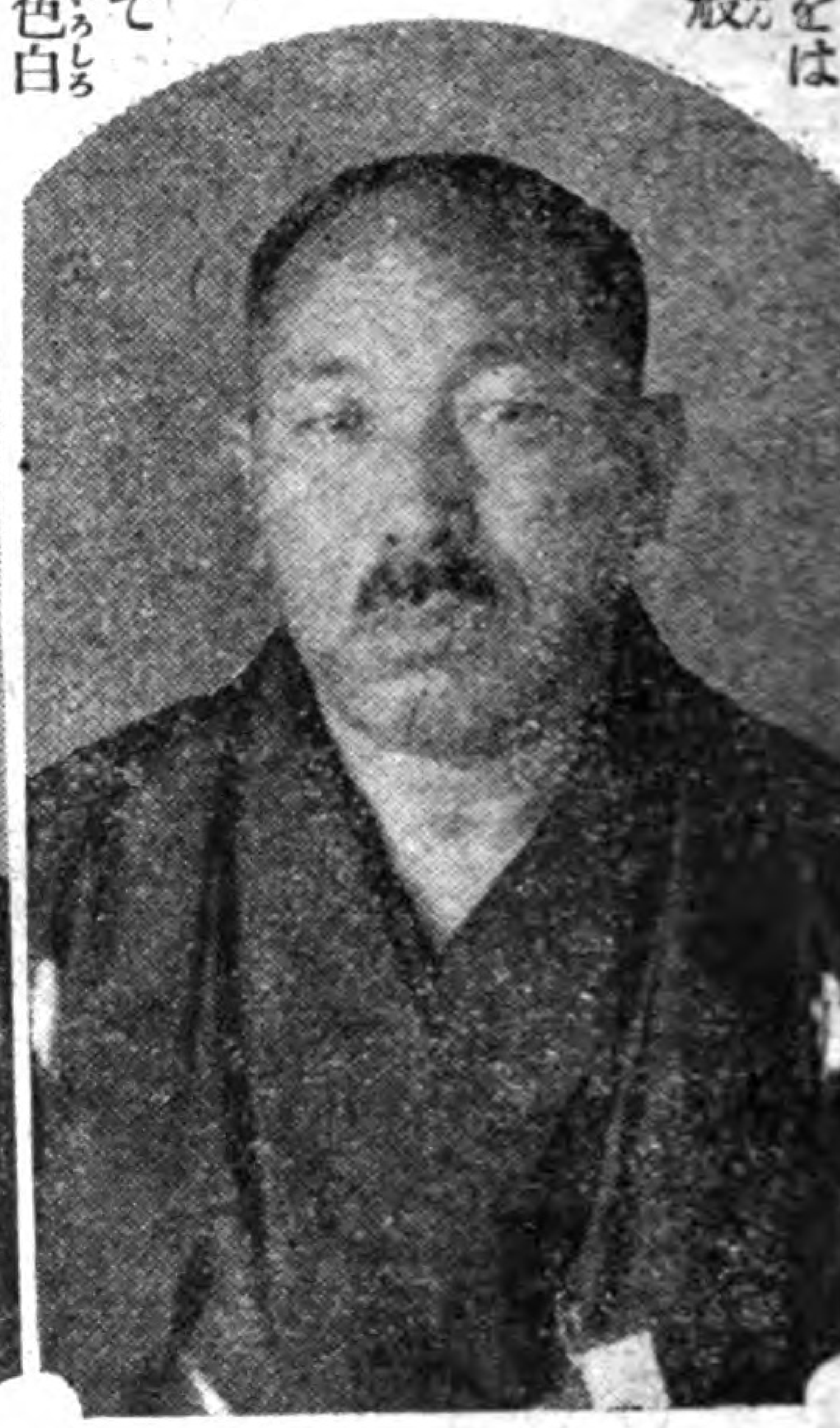
今や滿堂の眼はみな一點、中央なる試合場にそゝがれてゐる。イヤ、場の周圍、水色白の鯨幕の間に見ゆる若葉さへも、風にゆらぎつゝ、この一戰をのぞくかと思はれた。

○

さても兩劍士は――高野茂義は東より、持田盛二は西方より、しづ〳〵として出場したが、見れば、高野氏の足は、この光榮にか昨日の負傷も忘れたかのやうに屹然とした。

見よ、全國三十二名劍士のうちより、すぐりにすぐつたこの兩士、朱塗りの胴に身をかためたる高野茂義は、五尺五寸二十三貫、堂々として威風あたりを拂ひ、黒塗り胴の持田盛二は、亭々五尺七寸の長軀、そのカタチのよさ、實に繪の如き劍士、高野氏當年五十四歳、持田氏、四十五歳、共にアブラののり切つた盛り、前者は、滿鐵劍道師範、後者は、朝鮮總督府劍道師範の職にある。

滿洲勝つか、朝鮮勝つか――兩士は先づ恭しく玉座に敬禮、向き直つて相對し、一禮徐かに劍をとつて進んだ。



高野茂義範士



持田盛二範士

ピタリとつけた！

默！　默！　默！！

兩士共に聲なく、たゞ互ひにジリ、ジリ、ジリ、而かも劍尖や火を吐くばかり、その進退や觀者をして、われ知らず、慄然たらしむるものがある。

『よい哉！』

『仕かけは？』

『いづれより！？』

このワク〳〵たる觀者の膽、この息づまる滿堂の靜、たゞ兩士進退の足音のみ、ススツ！　ススツと物凄く耳をうつ！

さすが剛愎一世に鳴る高野氏も、今は極めて愼重に、而かも



極度の緊張に、刻々機の熟するを待つもの〻如し。
果してこの局面の爆發や如何に？
途端に響く截鐵の矢聲、『エーイ！』
持氏の聲に高氏の應へ。『オウ！』

靜寂の樏へパッと破れて一時にりイん！　滿堂の空氣またおのづから矢聲に和してりん、りん音を發するかと思はれた。

○

さるにても高野茂義氏の強剛さよ！

昨日の豫選に於いて、錚々たる指定選士、近江佐久郎（教士）大長九郎（教士）近藤盛一（教士）の三人を、例の得意、大膽極まる左片手の上段を以て、徹頭徹尾壓服し、殆んどこれを近寄しめず、相手をして手も足も出させぬ大力量を發揮し、今日また準々決勝に於て警視廳師範堀田捨次郎（教士）と戰つては、相手堀田の勇を物ともせず、奮戰忽ちこれを破り、ついで準決勝に移るや、試合上手を以て鳴る大麻勇治（教士）が、捨身の太刀に無二無三、せめて一太刀見舞はんものと、全力を傾倒して突進むのを、頭から呑んで物にせず、スポリ！スポリ！　輕くとつて、この大剛を斬伏せんものと彌が上にも意氣込むのを、堅く構へてわたり合ひ、接戰遂に十數合この梟敵をして何等爲すところなく葬つた剛劍の冴え、その氣分、その劍膽力、恐らく當代氏の右に出づるものなきを思はしめた。

さすがは水戸藩劍道指南役の家に生れ、長じては耆宿高野佐三郎氏にその天才を認められて老高野の後繼者となつた小野派一刀流無双の使ひ手である。

しかしてまた、相手持田盛二氏は、東京の齋村五郎氏



と相並んで、その太刀さばきに於て、獨特の妙味、その温和なる性格に似ず、その劍の鋭どさ驚くばかり、昨日、先づ東京の大島治喜太（教士）を劈頭に破り、つゞいて佐世保の納富（教士）北海道の大澤（教士）を屠り、心ゆくばかり突き小手、胴の妙味を發揮して滿場をヤンヤと云はせた。

さればこそ、昨日以來、

『齋村氏が、豫選に負傷して最後迄戰へなかつた以上、强剛高野氏にあたるものは、持田氏のほかないだらう』

と取沙汰され、人をして早くもこの一戰を豫想せしめたのであつた。

青年時代、根岸信五郎翁及び、高野佐三郎氏の門に遊び修行したるが故に、高野茂義とは相識の間であるが、その太刀筋は、殆んど反對、高野氏の雄渾堂々たるに對して、持田氏は俊鋭慧敏、更に之を劍に譬へんか、高氏は厚く重く、幅廣き剛劍、持氏は名工の苦心になる細身の銘刀を思はするものがある。

一は氣を以て優り、他は技を以て優る、とも謂はうか。

○

ジワリ、ジワリ……高氏は次第に相手を追込んで行く……ピタリとまつた。振りかぶつた！　そしてまた左上段、如何にあらんかと思ふ時、スツ、スツと二足三足、靜かに、しかし力強く追行けば、持氏誘引の意味にてさからはず巧みに相手の氣分をはづした。

『何を！』

と、高氏、更に進まんとすれば、持氏、場をまはりえで東西一轉、玉座に近く相對すとき、機やありけん、高氏の劍、

『面！』

ズーン！　モロに行つたと思ひきや、持氏パッと退くわづかに半歩、『面』はつひに眞向にきまらずして淺し。

もとよりこれ持氏が長身の德、若し彼れにしてもう一寸低かりせば、この面はたしかにザックと腦骨に斬り込んだのだ。

カラ〳〵ッ！　カラッ！　兩者の劍はこの攻防には刄を合はして絡み合つた。パッと距る、兩者の間約二尺、高氏一足パッと下らんとした。一瞬、持氏得意の突き一閃、危ふく手元に繰り出し、左手やまさに延びんとすれば、高氏頭上に右手をパッと放し、のけぞり氣味に氣をはづす、實に兩士の攻防の妙、思はず、膝を打つばかり、

『ウム！』

『ウム！』

心ある士といはず、滿場の眼は、首は、たしかに一齊にさう肯いて、この理攻めの戰法に醉はされてゐる。

兩士更にまはつて元の陣、高氏はまたも左上段、而かも前の構へを充分にして、一足サッと進まんとした。この時早くかの時おそし、持氏パッと體を左ひらきさざま、一劍ピュッと空に鳴つた。



『胴！』―（右胴）

ピーン！　快音響く間髮をいれず、

『胴あり』

表審判高野佐三郎氏の宣告。

滿場ホッと吐息してたゞ、

『フーム！』

『フーム！』

○

茲に於いて高氏は、例の如き左上段のうちにも、更に前の用心を堅固にして、相も變らぬ大膽不敵、ジリリッ、ジリリッと進み行けば、持氏も氣分を高潮させ、相對峙して下らなかつたが、相對峙して立つては高氏の優、またも追込んで來ようとする出鼻を挫く爲

裂帛、

『エイッ！』矢の如き突き一本、あはれ劍尖ぐさと敵の咽喉に突きとほつたか？

『アッ！』惜しい哉この突きの一手、劍尖、わづかに咽喉に觸れしのみ、若しこれが、充分の氣合に行つたものならば、モロに敵を突き貫いて了つたのだつたが……。

○

しかし持氏は、これによつて氣を得た。が高氏亦些かも怯まず、いよいよ勇を皷して上段より面に、小手に打ち下ろしたが、持氏の俊敏、巧みにこれを避け、立直るや互ひ機をはからひつゝ劍尖息づく如きとき、高氏はやをらまた上段に振りかぶつた。思ひきや、その刹那の間、

『エッ！』持氏の體は、そして劍は、一丸飛箭と振りとんだ。

『ピュッ！』一劍ザクリ、高氏が上段の右小手をバラリ！

『ウーン！』さすがの高氏も、その一聲！



『小手あり！』と、高野審判の聲――この時に於ける滿場のどよめきさすがに莊嚴なる御前とて拍手歡聲こそないが、場内三千餘の感嘆は、さすがに大きなどよめきとなつた。

やがて兩士は、玉座に敬禮して、靜かに退場した。

凄まじかりし哉この一戰！ 近來かくの如き含蓄ある試合を見たることなしの感を抱いたのは、決して筆者一人ではない。

かくて天覽劍道大試合に於ける最榮冠は、範士持田盛二氏の占むる所となつた。

それにしても相手高野氏の剛勇、その前日に於ける足部の大負傷を物ともせず、たゞ天覽の一語に感激し、勝敗を度外視して出場したる態度の立派さ、蓋し特筆大書すべき佳話である。

名士の談話室



東京音樂學校長 乘杉嘉壽氏

松江高等學校長時代に地方の青年團に講演を頼まれて行つた時、講演の前に青年の演説を聴いた事がある。

壇上の青年、誰も彼も、はちきれるやうな元氣で熱辯を振つてゐる。

所が其内に一青年が、壇上から『青年自覺の目標』と云ふ演題で滔々とやり出した。『仲々うまい事を云ふ』と段々聴いてゐる内に何だか内容が覺えのある演説だなと思つてゐる中に、青年はわれるやうな拍手場裡に悠悠降壇した。私は其後姿を眺めてゐるトタンにはつと思ひ出して覺えず膝を打つた。覺えがあつた筈だ。其青年が、壇上から叫んだ『青年自覺の目標』こそ、私が嘗てキングに寄稿したものだつたもの。

一言一句も誤たず暗記した努力は正に第一等賞に値すると推賞したよ——ハハ、、。



社會教育家 久留島武彦氏

『先生!! どうしたら聴衆の心を捉へることが出來ますか?』

『身振りはどんなにしたものでせう』

等の質問は、私が地方に出るとよく受ける質問だ。

それに對して私は、

『諸君は根本問題のあることを忘れてゐる。私は停車場に着いた時から、既に諸君に話しかけてゐるではないか。

若し、私が料亭にあつて酒を飲み、妓と戯れてゐる姿を諸君が見たとしたならばどうであらう。私の演説に耳を傾けては與れまい。否、私が過去の生活に於て、苟くも諸君の指彈を受けるやうな事をしてゐたならば、いかに私が巧妙に演説しても諸君の心は私から離れるにちがひない。

要するに、演説は言葉や身振りの問題ではない。人格其者だ。其人の全部が演説をしてゐるのだ』

と答へてゐる。



本社々長 野間清治氏

近頃、西洋風のスポーツが非常に盛んになつて來たのは、勿論結構な事だが、併し、我國には、肉體を養ふ上にも、精神を鍛へ魂を作る上にも、無上の効果ある武道のあることをお互は忘れてはならない。

今度の天覧試合の如き國家的壯擧の機會には、必ず其光景や結果をラヂオで放送するとか、新聞號外を出すとかして日本全國、津々浦々熱狂する程度までにして見たい。

かくして上は大臣、大官から少年少女に至る迄、宏大無邊な武道の德にひたる事が出來たならば、其處から根強い日本の力が生れ出るではあるまいか。

名士の談話室は毎號非常な好評です。次號はもつと澤山の名士の一粒選りの談話を掲載する豫定です、御期待を願ひます。

キングを評す

長田幹彦



長田幹彦氏

昔はたゞ低級な男女間の情痴の世界ばかりを描いてゐても、それで立派な小說として江湖の喝采を博し得たものであつた。ところが最近十年間に、讀者の教養や趣味好尚がめきめき向上してきて、小說も到底そんな程度の、いゝ加減なものでは滿足されなくなつてきた。それは作家自身がさういふ傾向を馴致したのではなくて、讀者の眼にみえぬ大きな推移がいつかしらさうした結果を生んだのであつた。

小說は唯泣いたり、笑つたりして、その場かぎりに讀み捨てられてしまふやうなものではもう可けない。讀んだあとで、いつまでもいつまでも何かゞ深く胸の底に殘つてゐて、それを反芻することによつて、云ふに云はれぬなつかしい味はひが湧いてくるやうなものでなくては、大きな價値があるとは云へない。少くとも人間性の深い奧底に觸れるとか、或ひは宇宙人生の歸趨を朧ろげながらでも暗示するとか、又はそれを讀むと、かうやつて生きてゐることに無限の歡びを感じるとか、さういつた社會的價値のあるものでなければ、現在の讀者は滿足しないに相違ない。それは極めて古臭い考へのやうであるが、古來の名篇傑作を讀むと、いづれもさういつた堂々とした偉大さに打たれるのである。

最近出版物の威力の激增したことは、眞に驚くべきものがある。特に雜誌「キング」の如きは嶄然その首位を占めてゐて、百萬、百二十萬といふやうな、寧ろ恐ろしいほどの發行部數をもつてゐる。それは何故かといふと、この雜誌の目標が、時代そのものにぴつたりしてゐるからではなからうか。雜誌報國といふやうな溢るゝばかりの熱誠をもつて編輯されるところに、萬斛の妙味があるのではなからうか。

我々の眼から見ても、「キング」に載る小說は何等かの意味で絕えず時代をリードしてゐる。所謂小說好きの讀者ばかりを相手にしてゐるのではなくて、あらゆる方面の、あらゆる讀者を包容してゐる舞臺である。從つてこの雜誌に出る小說は、幾百萬の大衆が讀み、大衆が批判し、大衆が値ぶみをするのである。渺たる社會の一角に蟠踞してゐる文壇が、その評價を支持するのではなくて、日本語を解するあらゆる民衆がこれを支持するのである。もつと適切に云へば、即ち日本人全部がこれを支持してゐるといつても、決して過言ではなからうと信ずるのである。

百萬、二百萬の大衆を感激させたり、熱狂させたり、鼓舞したりすることは、到底常人の力で出來るものではない。それこそ選ばれた何人かの人によつてのみ、初めて成就される偉大なる事業である。「キング」がよく萬難に耐へ、すぐれた作家の立派な作品を集めて、終始さうした意味で不知不識の間に日本の文化史上に絕大なる貢獻をしてゐる態度は、眞に敬服に値するものといはなければならない。

己れよりも優れたる人を賞讚する讚美の感は、人間の胸に宿る最も高尚なる感情なり。（カーライル）

天下の驚異！

現文壇を代表する八大名家の八大傑作!!

……本誌次號より逐次發表……

◎徳川慶喜……眞山青果

◎國士物語……佐藤紅綠

◎題未定……山本有三

◎心の日月……菊池寛

◎道元と時頼……中村吉藏

◎無頼漢……加藤武雄

◎南風……長田幹彦

◎二宮尊徳……武者小路實篤

この作品こそ眞に劃時代的の大内容!!

世を明るくし國を良くし清なる感激は何人の魂をも打ち搖がす!

而も興味の最高潮を行く逸品揃ひ!

御期待を乞ふ!!



修養小說

孔子とその弟子

友納友次郎
挿繪 尾竹竹坡

一

孔子の一行が諸國をめぐること八年目、孔子の名は國々に知れ渡り、諸侯は我こそ一行を迎へようと爭ふのでありました。

魯の哀公の六年、孔子六十四歲、楚の國へ招かれた時、陳蔡兩國の野を通つたのでした。

敵國の楚の國へ、孔子に行かれたら、それこそ大變、鬼に金棒です。

陳蔡の兩國はそれを恐れて、孔子の一行を陳蔡の野に包んで、楚の國へやるまいとしたのでした。

孔子の一行こそいゝ迷惑です。

陳蔡の兩軍も、さすがに罪のない孔子の一行を殺すことは出來ません。じつと見守つたまゝで數日をすごしたのでした。

困つたのは孔子一行です。

七日の間、呑まず食はず、死んだやうになつて過したのでした。

ある朝です。多くの弟子たちが死人のやうに眠り轉げてゐる時、孔子はそつと起きでて、靜かな曠野の中で、一人考へに耽つてゐました。

ばさくと落葉を踏む音がしました。たしかに人の足音です。

『誰ぢやな？』

ふりむいた孔子は聲をかけました。

『先生、私です。子貢です。』

やがて薄の枯穂の間から、面やつれのした子貢の顏がほの白く浮びました。

『おゝ子貢か。』

『先生、お冷になつてはいけません。まだあまりお早うございます。』

まだ明けやらぬ曠野には、霜がまつ白くおりてゐました。

『賜や、こゝへおかけ。』

孔子は腰かけてゐた枯木の根の半分を子貢に讓りました。

『遠慮は入らぬ。さあおかけ。かうしてゐると夜氣が骨まで滲み入るやうで、かへつていゝ氣持ぢや。』

子貢は默んで顏をながめながら、嬉しい淚でいつぱいになりました。

顏の色といひ、杖を握つた手の光澤といひ、何といふ生き生きしさだらう。これがどうして、七日の間も飯粒一つ通さないで、餓に迫つてゐる老人と思はれよう。日毎に學を講ずる音聲も、琴を彈ずる吟詩の聲も、何一つおとろへないで、ふだんの態度そのまゝなのを見ると、子貢にはそれが奇蹟としか思はれません。

『先生、先生は今詩を吟じてゐられたやうでしたね。』

『うむ！』

『どうして先生の聲はあんなに朗らかでせう。愧かしいお話ですが、私達はもう歩くのさへ億劫なくらゐです。かうしてゐると陳蔡の軍兵に殺される前に、餓て死にさうです。皆がさう申してをります。一層のこと陳蔡の軍勢と戰つて、ひと思ひに死んだ方がましだと……』

子貢は訴へるやうにいふのでした。

『賜や、あれをごらん。』

指さす杖の彼方には、陳蔡の兵達に焚き捨てられた野營のかがり火が、力なくとろくと燃えてゐました。

『賜や、敵はあの通りぢや、攻めることもならず、退くこともならず、たゞ私達を見守るだけぢや。わたしを憎むのではない。わたしが楚の國へ入ることを恐れるだけぢや。たとへ百萬の兵があらうとも、恐るべき敵ではないのぢや。』

『…………』

『わたしたちは、まもられてをりさへすれば、それでいゝのぢや。ところが敵はわたしたちを逃してはならないのぢや。疲れるのは味方ではなくて敵ぢや。』

だまつて聞いてゐた子貢の肩が、ぴく／＼と動きました。

『ちがひます。ちがひます。もとより陳蔡の軍は恐れるに足りません。恐るべきは餓です。餓には勝てません。』

子貢は如何にも不平にみちた聲でした。

孔子はうなづきながら、

『うむ、そのとほりぢや、なるほど餓もおそろしい敵ぢや、しかしまだおそろしいものを知つてゐるか？』

『…………』

『それはお前たちの弱い心ぢや。』

叱られても弱つてゐるのは本當です。

『先生、申し譯がありません。しかし、誰もが餓ゑてゐるのです。先生の講義も聞いてゐる間だけは、やつと力をとり返してゐるのですが、それがすむと死人のやうにころがつてしまふのです。もう日の光を見るの さへ痛いくらゐ です。先生は聖人です。私達は凡人です。』

『聖人も凡人も、心は一つぢや。』

子貢にはその心一つが、もうどうにもならなくなつたのです。



落ちくぼんだ目、やせこけた頰、誰もかれも飢ゑた餓鬼です。地獄の亡者そのまゝです。人間もこゝまで落ちれば、外のことは考へなくなります。

『たつた一片の燒肉が食べたいな。』

と昨日も子路がいつたのでした。

『塩つからい握飯が食べたい。』とも誰かゞいつたのでした。そんな話をすれば、へこんだお腹がちく〱痛み出して、喉から手が出さうです。

眠つてゐる時にまで、ぽつぽと湯氣をたてる白い飯を夢に見る始末、

『たべたいな、たべたいな。』

こんなことではと思ふ心の下から、やつぱりそれです。

子貢は泣き出したい氣がしました。

『賜や。』

呼びかけられて、はつとしながらあわてゝ師の顔を仰ぎ見るのでした。

おごそかな眼、心の底まで見とほす眼、それでもやつぱり慈愛のこもつた眼なのです。

『賜や、おまへはわたしをどう思ふ。』

『…………』

『深い學問をした、大學者と思ふのか？』

これは又意外の問です。

『どうぢや、どう思ふ？』

『大學者です。大聖人です。』

『いゝや。』

『ちがひますか？』



『わたしはたゞ一つのことをしとげる人間ぢや、その一つとは誠ぢや。いゝか、たゞそれだけぢや。』

話はぽつつりと切れました。

白みかけた東の空には、金色の光が二筋三筋、すうつと雲を

貫いてゐます。はてしもない曠野が、目の前にずつとひろがつてゐるのです。

『いゝ朝ぢや、一緒に歩かうか。』

平らな氣持になりきつた子貢は、胸一杯に大きく朝の空氣を吸ひながら、元氣よく答へるのでした。

『先生、いゝ氣持ですね。』

朝風が薄の穗をかるくなでて通りました。

二

匡の難につぐに桓魋の難、それも苦しかつたにちがひないが、この陳蔡の難に比べると、物の數ではありませんでした。

匡人に捉はれて、牢獄の憂目を見た時も、

『天が今わたしを亡ぼしたら、文を後世に殘すものはあるまい。如何に匡人が亂暴でも、わたしを亡ぼすことは出來まい。』

と、自若として大勇を示したのでした。

宋の司馬桓魋が、孔子を殺さうとした時も、

『天は德をわたしに授けた。桓魋はわたしをどうするつもりぢや。』

と、一喝の下に斥けたのでした。

しかし、この陳蔡の難ばかりは、どうすることも出來ませんでした。



淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、子路、子游、子夏などの十哲の人々さへ、弱りこんでしまつたのです。

一番の不平家は何といつても子路でした。

その怒りと不平とを、じつと見てゐなければならない孔夫子の心は、身を切るやうなつらさです。

ある朝のことでした。雨露さへもしのぐに足りない枯草の小屋から、孔子の聲がしました。

『由や、由や！』

不平家の大將子路は、饑と疲れでげつそり弱りこんだ體を起して、ひよろ／＼と立ち上りました。

それでも師の前へ出ると、つゝましく一禮して、師の言葉を待つのでした。

『由や！ お前はあの曠野の詩を知つてゐるか？』

『存じてゐます。兕（野牛）に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に卒ふといふのです。』

『それぢや、それぢや、野牛でもなく、虎でもないのに、荒野でのたれ死するとは、何といふなさけないことぢやといふ詩ぢや。』

『…………』

『わたしたちの運命がそれによく似てゐるとは思はないか？ わたしはまるでわたしたちのために作られた詩のやうに思はれて、つく／＼と考へさせられるのぢや。』

『…………』

『由や、わたしは本當のことが聞きたい。お前の思ふ儘が聞きたい。こんな野牛のやうな目に會ふといふのは、わたしの德が足りないからではあるまいか。それとも、わたしの說く道が間違つてゐるのだらうか。』

子路は流石に驚きましたが、やがて決心の色を浮べて、きつぱりといひました。

『先生、人が信じないといふのは、まだ仁が足りないからではないでせうか？ 天下にいれられないといふのは、まだ智が足りないからではないでせうか？』

師の德を疑つたおそろしさに、子路は我ながら體がちゞまるやうな氣がしたのでした。

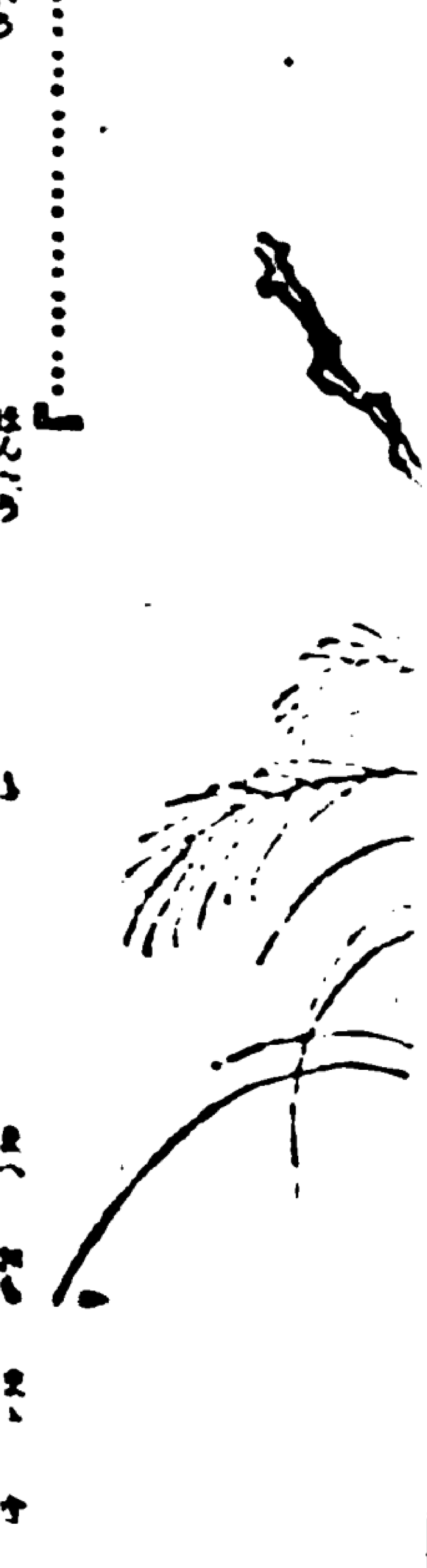
『由！』

孔子の聲は急に改まつて來ました。

『お前は勇氣が足りない。仁者の言をすべての人が聞き入れるものなら、あの忠義な伯夷や叔齊が首陽山に餓死する筈がないではないか。智者のいふことがすべて容れられるものならば、王子や比干は紂王に割かれるわけがないではないか。』

『…………』

さすがの子路も、二の句がつげませんでした。



『あちらへ行け。』

子路が泣きさうな顔をして出て行くと、入れちがへに子貢が這入つて來ました。

『賜や、わたしが天下に入れられないで、こんなに苦しむのは、まだ徳が足りないからではあるまいか。お前の考へが聞きたい。』

子貢は師の顔を仰ぎながら、かしこさうな目つきで口をきりました。

『先生、私は先生の教があまり大きすぎるからだと思ひます。つまり、現世にはあまりに高遠過ぎるのです。も少しお下げになつたら如何でせう？』

『賜や、お前は道を信ずる力が弱い。よい農夫のまく種子は、みんな生えると思ふか。よい細工物は何人にも好かれると思ふのか。作物には嵐があるものぢや、人には好き嫌ひがあるものぢや。』

こんどは顔回が這入つて來ました。落ちくぼんではゐるが、水を湛へたやうな眼差は、いつもの通り澄み切つてゐました。

『回や、わたしの運命は曠野の詩そのまゝぢや、こんな目にあふといふのは、わたしの力が足らないからではあるまいか。』

『先生、先生の道は至大です。天のやうな氣高さ、海のやうな深さです。先生の德があまりに大き過ぎて、天下に容れ得る人がないのです。だから——』

『だから？』

『だから、容れられなくても、ちつとも氣にすることはないのです。』

『うむ！』

『私は思ひます。現世のやうに腐敗した世の中には、容れられないのが本當です。容れられないところに、先生の價値があるのです。さうして、私は——』

顔回はいつになく雄辯に語りつゞけるのでありました。



『道を修めないことは、私達人間の恥だと思ひます。深く道を修めた聖人があるのに、それを用ひないのは君主の恥です。國を持つ人達こそ愧づべきです。私達にとつては、容れられないことが何の恥でせう。かへつて私には、先生がいよ〳〵氣高く感じられて來るのです。大きい難に遭へば遭ふだけ、毅然とした先生のお姿を見ますと、先生の尊さが一層身にしんで、私はうれしくてうれしくてなりません。よし及ばなくても、先生の道を守らうと固く決心したのです。先生！ 私はうれしくて〳〵、うれしさで一杯です。』

ひしと顏囘の手を握りしめた孔子の手は、わな〳〵とふるへてゐました。

『おゝ囘！ わたしを知るものはお前一人ぢや。お前のやうな天子があつたら、わたしは命を投げ出して仕へよう。囘！ お前はどう思ふ。陳蔡の難はわたしたちにとつては幸福だと思はぬか。』

互に信じ合つた二人の 魂 は、うれしさにふるへてゐるのでした。

三

饑と寒さとに困しめられながら、陳蔡の軍勢に圍まれて既に七日、いつまでまつても救の軍勢は來ませんでした。



その夜、子貢は巧に敵の目をぬすんで、圍をぬけ出し、楚の昭王に救を乞ひ、息をつく暇もなく、

再び陳蔡の假屋へかへつて來ました。

『昭王が援兵を出してくれるさうだ。』

『何時？』

『明日はきつとこゝへ着くことになつてゐる。』

『愉快。愉快。』

『子貢萬歳。』

一同は雀躍して喜びました。

それよりも、もつと皆を喜ばしたのは、子貢が持つて歸つた一袋の米でした。

『おい、子貢が米袋を下げて來たぞ。』

『米袋！　本當かい？』

『本當だとも。』

『子貢萬々歳だ。』

みんなは喜んでをどり上つたのでした。

裏では今顏回がたゞ一人、默々としてその米を炊いてゐました。

『久しぶりで白い飯を炊くのだ。これで先生はじめ、皆の命がすくへるから有難い。湯氣のたつ白い飯を食べる時の皆の顏！　おゝそれが見えるやうだ。』

顏回は嬉しさうに火を燃してゐるのでした。

この時裏口へ出た子路は、突然はつ！　として立ちすくみました。

『あ、いけない。いけない。』

子路の胸はどき／＼と早鐘を打つやうです。

釜の側の顏回が、ひとつかみの飯をすくひ上げて、ふつ／＼と吹きさますやうにして、口の中へ入れたのではないか。さうして又そつと蓋をしたではないか。見てならぬものを見たおそろしさに、子路はもうわな／＼ふるへてゐます。

子路はおそる／＼、足音をしのばせて引かへしました。

幾度打消さうとしても、この目が現在見たのです。

『わたし一人だけだ。默つてをらう。』と思ふ心の下から、

『いけない。かへつて友を殺すのだ。友の不正を許すのは、親し友の態度ではないのだ。』

正直な子路の眞率な心が、むら／＼と湧き出て來るのでした。

『苦しい。わたしは見たものを見ないふりすることが出來ない。先生へ申上げよう？……いや、しかし、先生は回を愛してゐられる。回は我々仲間の最も徳望の高い君子なのだ。それなのに、おゝ恐るべきことだ。やはり人間は動物なのだ。だが……そんなことがあつてよいものか知ら？　いやあつてはならない。わたしはわたしの目を疑はねばならない筈だ。しかし、現在たしかに見たものを……？』

子路は一人もだえながら、たうとう孔子へ云はうと決心しました。師の驚きと悲しみとを知りながら、云はないではゐられなくなつたのでした。

つか／＼と室へ這入つて、いきなり、

『先生！』と叫びました。

『先生、君子も窮することがありますか？』

孔子はなじるやうなまなざしで、しげ／＼と子路の顏を見つめてゐました。

『實は今……』子路は今見たまゝをそのまゝ云つてのけて、さも自分が罪を犯した罪人のやうに首をうなだれました。

『先生、囘は竊したのです。』

側にゐた子貢が口をだしました。

『君子も窮することはある。しかし君子はみだれないものだ。囘は小人ではない。わたしはお前の眼を疑ふか、わたしの耳を疑ふより外はない。囘を呼べ、聞いて見よう。』

子路がはら／＼してゐるところへ、落ちついた顏で顏囘が這入つて來ました。

『囘や、今日は曠野で初めての飯ぢや。ちやうど亡母の四十年目ぢや。御初穗を供へたいと思ふが……？』

皆の目が、いひあはしたやうに囘の身一つに集まりました。さうして誰もが耳をふさぎたい氣持で、氣の毒さうに囘を見つめてゐました。

『先生、惜しいことをしました。私は蓋をとつて、加減を見ようとしたはずみに、枯葉の煤が這入りましたので、黑い汁が滲んではと存じまして、掬つて捨てようと存じましたが、あまりの勿體なさに、煤を吹いてつい頂いてしまひました。先生、どうか御許し下さい。』

露ほどの汚れも見えない顏囘と、それを信ずることの出來ない孔子の氣高な行樣を見るにつけ、子路と子貢は美玉の前の石ころのやうに、我身が愧かしくなつて來ました。

『あゝさうか。それは惜しいことをした。ではこの次にしよう。』

孔子の目は信ずるものゝ誇らしさで輝いてゐました。

『もう飯も出來た。やがて救の兵も來よう。辛抱した甲斐があつたなう。はつはゝゝゝゝ。』

孔子は晴々しく、空を仰いで笑ひました。

高僧物語 智岩和尚の徳行

唐の智岩和尚は、智勇並びすぐれた人で、元は士大將であつた。思ふところがあつて、浣公山の寶月禪師に就いて出家した。

隋將、張綽などといふ友達は、それ／＼國守の地位を占めてゐたが、智岩が出家したと聞くよりわざわざ訪れて行つた。浣公山は深山で孤寂たとへがたいものがあつた。智岩を見るより、

『君は氣がちがつたのではないか、何のためにこんなところにゐるのだ？』

『君達のいふ通りだ、俺は氣がちがつた、だが俺のは正氣に醒めようとする氣ちがひだ。』と答へてにつこりした。

智岩は後に山を出て石頭といふ都に行つた。そしてその癘病院で、病人達のために法を說いた。また看護をした。口づから膿を吸ひ、穢れを洗ひ、親切を盡した。永徽年中病院で亡くなつたが、息絶えて後も顏色變らず、芳香を生ずること十日あまりに及んだ。

評判 流行 人氣の渦巻！

到る所大評判！賣行き愈々白熱化

婦人倶樂部ゆかた

流行界の王者だ！浴衣界の代表だ！こんなよい柄は初めて見た！値段が安い！染めがよい——それこそ實にスバラシイ評判、呉服屋さんでも驚いて居ります。品物は豊富ですが何分凄い程の賣行、お求はゼヒ早く願ひます。

お求めは早いが勝ち！ゼヒ即刻！

ゆかた大畫報進呈

婦人倶樂部浴衣の柄模樣は全部婦人倶樂部六月號に發表して御座いますが、本社代理部へハガキでお申越次第、新聞二頁大の美麗大畫報を無代進呈致します。ゼヒ柄模樣だけでも御覧下さい

◇讀者奉仕 お値段は驚く程の大廉價！

新柄百餘種



寫眞——右は水谷八重子さん御考案の「石清川」を着た八重子さん中は、水谷まさる先生の小曲「はかない戀」の浴衣を着た梅村蓉子さん左は、「一ツ葉の香」を着た英百合子さん、共に非常な評判の柄模樣です





涼味タップリ、藝術味溢るゝばかりで目も覺めるやう、令嬢向、若奥様向中年奥様向、少年少女向殿方向各種、全部で百餘種、細眞岡、五本絽、ボイル、選擇は御自由です

ゼヒ本社代理部宛大畫報御申越の上御一覧下さい

壹萬圓大懸賞

柄がよく、品がよく、お値段が飛びぬけて安い上に、お買上一反毎に、一万圓大懸賞のくじ引券を進呈致します。

東京市本郷區駒込坂下町
大日本雄辯會講談社代理部
（振替東京二九三〇番）

芝居物語　重の井子別れ

清見陸郎作
井川洗厓畫



一

丹波の城主由留木殿の御館は朝からごつた返す騷ぎだつた。それもその筈、かねてから話の纏まつてゐた遠州濱松の入間家へ、今日ぞ愈〻當家の御息女調姫が、養女としてお輿入れをなすべき御出立の日に當つてゐたから。されば御門前にも、玄關先にも、供廻りの者がひし〳〵と詰めかけて、相圖の一言が宰領から下り次第、すぐに行列が繰り出せるやうに滯りなく手筈が整つてゐた。

處が、いざ刻限といふ時になつて、思ひもかけぬ椿事が突發した。肝腎の調姫その人が、『東へ行くは厭ぢや。』とむづかり出したのだ。何しろ年はまだ十そこ〳〵、したい三昧に育てられて來たお大名のお姫樣の事とて、殿樣も、奧方も、誰の云ふ事も耳へは入らなかつた。それを何とかしなければならないのが、お乳の人重の井と奧家老本多との役目だつた。

『まうし、お姫樣。』重の井はわさと怖い顏をして見せた。『下々の子供でさへ、七つ十では物の聞き分けがござります。ましてお前樣は濱松へござれば、入間殿の總領嫁御と、侍づかれるお身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば、女でこそあれ、乳母は腹を切らねばなりませぬ。さあ、よいお子ぢや。お輿にお召しなされませ。』

嚇しつ賺しつ云ひ聞かせど、姫君は何としても御承知がない。はてはおい〳〵と聲を上げて泣き出して、せつかく乳母や腰元どもが骨を折つてして上げたお化粧をも、代なしにしてしまふ。奧家老の本多は、怖らしい皺面に無理に作り笑ひを浮べながら、頻りと東國の繁華なさまや、生活の面白い事を並べ立

てるのだが、そんなわざとらしい老人の諫が、柔らかな少女の胸に觸れよう筈もない。彼も重の井も顔見合せて、唯當惑の溜息をつくより外なかつた。

『お乳の人樣、面白い事がござります。』

その時一人の腰元が慌だしく入つて來て、重の井にさう云つた。

『御門前に供待ちをしてをります馬方の中に、十ばかりの小倅つ子がをりますが、それが道中双六とやら東海道の絵を廣げ、味な事して遊びます。御機嫌直しにお目にかけたら如何でござりませう。』

いかさま、それも一つの手段かも知れない。子供といふものは、ほんのちよつとした事で氣が變るものだから。身分の賤しい馬子でも、子供ならさまで憚るにも及ぶまい。とにかくためしに御前へ呼び出す事になつた。

二

やがて問題のその子供馬子は、腰元の案内で庭口から現れた。年は姫君と同じぐらゐであらうか。剃下げの野郎額、廣袖の布子に三尺帶を前結びにしたが、恐れ氣もなく縁端にツイと腰をおろす。

『やれ〳〵、あり樣遂はあつたぼこしゆもない。傍輩どもと賭け徳に、道中双六打つて、吝の錢ほどしてこませと思うたに、人呼び廻つてなんでやる。』

馬方詞といふのであらう、譯の分らない事を早口に云ひ出したので、お乳の人も他の者も釣りこまれてどつと笑つた。

『さて〳〵そなたは悧巧者ぢやな。』と重の井が聲をかけた。『して、年は幾つ、名はなんと云ふぞ。』

子供はませた口調で、

『年は今年十一、五つの年から馬追うて、一代若衆にならで、はえぬきの念者ぢや。處で、名は自然薯の三吉。』

『さてもよい名ぢや。聞けば道中双六が上手ぢやげな。お姫樣のお慰みに、一つこゝで打つてたもれ。』

もとよりこれは三吉に取つてはいと易い註文。そこでのそのそとお座敷へ上り込み、姫君の前へ双六を並べてみんなして打つ事になつた。

ヘこれ〳〵御覧ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を、ゐながら歩む膝栗毛馬、はいしい道中双六。南無諸佛分身と、書いた六字を六角の……

三吉は生意氣に鉈豆煙管を口にくはへながら、こんな小唄のやうな物を口ずさみながら、頻りと双六の賽を振る。京を振出しに、大津、草津、關、龜山、だん〳〵旅程が進行して行く間には、一人が他を追越したと思ふと、又他に追ひ越される。お

泊り、飛越し、いろ／＼とあるうちに、めき／＼お姫様が優勢になつて、とう／＼第一着で江戸にお着きになつた。幼い調姫には、紙の上の道中と、現實の東海道旅行とが一つになつた。それには三吉や、お傍の衆の聲援もあづかつて力があつたのだが、何しろ姫君は上機嫌になつた。今鳴いた鳥がもう笑つて、

『かう面白い東とは、今までおれは知らなんだ。さあ／＼行かう、はや行かう。』とおせき立てになる。

『やあ、ござらうと仰しやるか。そりや目出たいわ、目出たいわ。又もや御意の變らぬ間に……』

奥家老本多は狂喜して、すぐに行列を揃へるべく玄關の方へ飛んで行つた。

『そんならま一度大殿様、お袋様とお盃。』重の井はさう云つて、姫君の手を取り立ちかけたが、そこにつまらなさうな顔をして蹲る三吉を見ると、『これもみんなそなたのお蔭ぢや。今褒美をやる程に、暫くそこに待つてゐや。』

姫君、お乳の人、腰元共も續いて立つて、ガランとした廣間には三吉一人が取殘された。

三

金碧燦爛たるからした大名の奥座敷などは、無論馬方の子なる三吉には初めてに違ひない。で、彼はさも珍らしげ



にしばらくあたりをキヨロ〳〵見廻してゐたが、やがてそれだけでは滿足ができなくなつたか、のこ〳〵立上つて、そこら見て廻らうと行きかけた。と、青疊でズルリと滑つた。起き上つて又歩くと、又こけた。いつもさゝくれだつた莚ばかりを踏みつけてゐる下司の足には、すべ〳〵の備後の表は性に合はないのだ。

『えい、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、こちの家が結構でござる。』

鼻つ張の強い三吉は、それでもこんな痩せ我慢を云つて、ごろりと座敷の眞中へ寢そべつた。

しばらくそのまゝで時が過ぎた。と、正面の襖が靜かに開いて、重の井一人が戻つて來た。手には美事な菓子をうづ高く盛つた文匣をさゝげた。

『ほんにそちは健氣な者ぢや。』三吉の行儀の惡いのに呆れながらも、重の井はにつこりして、その傍に坐つた。『道中双六お目にかけ、それ故に姫君樣、東へござろと御



意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有難う頂きや。お錢三筋、買ひたい物買やや。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に會はうと云や。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身



はよく〳〵であらうの。』

丸々と肥えふとつた三吉の頰のあたりを、何やら思ひありげな情趣のある眼で、お乳の人はじつと見つめた。すると三吉の眼が、又食ひ入るやうな強さで彼女の面に注がれた。

『由留木殿の御内、お乳の人の重の井樣とはお前か。そんならわしが母樣ぢや。』

あなやと思ふ間に、三吉の小さい體は重の井の胸にしがみついた。

『何を云ふぞ、慮外者。そのやうな馬方の子のなんでわしが母であらう。』

重の井は呆れて三吉を挘ぎ放したが、三吉は聞かずに又武者振りついた。

『なんのない事申しませ

う。わしが親はお前の昔の連れあひ、この御家中にて番頭伊達の與作、その子はわし、こなさんの腹から出た與之介はわしぢやわいの。』

その父なる與作は、殿樣の御勘氣に觸れて鄕國丹波を立ち退かねばならなかつた。それは三吉が三つのをりとて、自分としては記憶はないけれど、その後彼は沓掛の乳母の許に



引取られ、それから話を聞かされてゐるので、事情はよく知つてゐる。悲しい事にはその乳母も、彼が五つの時に病死したが、そのをり彼女は彼に一つの守袋を與へ、これを證據に由留木殿のお乳の人重の井樣と母子の名のり遊ばせと遺言した。それから三吉は近所の人に養はれて馬追ふ術を習ひ覺え、今は近江の石部の馬借に奉公してゐるのだつた。

『これ、守袋を見さしやんせ。なんの噓を申しませう。』

そこまで語つて來ると、三吉は急いで懷に手を入れて、肌に着けたその證據の品を取出した。一目見るなり重の井はハツとした。そこに長い歳月の距りこそあれ、正しくそれは彼女自身針を動かして、子供の爲



に縫つてやつた物に違ひない。おゝ、ではこれは自分の子だつたのか。忘れようとしても忘れ得られない、あの與之介が生長した姿であつたのか……

『この通りお前の子に紛れはない。ほかに望みはなんにもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一緒にゐて下され。美事沓も打ちまする。この草鞋もわしが作つた。晝は馬追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拜みまする、母様。』

三吉はお乳の人の膝

にしがみついて、聲の限りに泣き入つた。

四

重の井の胸は張り裂けるやうだつた。話の様子と云ひ、守袋と云ひ、それがわが子である事に今は一毫の疑ひもない。いつそこの場で名のつてしまはうか。いやいやそんな事をしたら、大切なお姫様のお名まで出るやうな事が起らうも知れぬ。それではどこまでも知らぬ顔して、叱り懲らして追ひ返さうか。可哀想に、そんな事ができるものではない。それに、年よりもませた悧發氣な様子では、なまじひな詐り事なぞはすぐと覺つて、却つて母を蔑む氣にならうも知れぬ。——重の井はとつおいつ思案の後、やがて何事をか決心したやう、衝と三吉の手を取つて引寄せた。

『さても大きうなりやつたのう。したが、とても成人せうならば、侍らしうなぜ尋常には育たぬぞ。顔の道具手足まで、母はかうは生みつけぬ。美しい黒髪を、このやうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞや。』とハラ〳〵と泣いて『これ、よう物を合點しや。腹から生んだは生んだれども、今では子でも母でもない。淺ましうなり下つたを、嫌うて云ふではさら〳〵ない。こゝの譯をよう聞きやや。』

子供の前ながら今は包むにも包まれず、重の井は三吉の父親、守達の與作との馴れ染めのそも〳〵からを語つて聞かせた。その頃彼女は御前様附きの腰元、與作は奥小姓、互ひに若木の戀風に、一夜が二夜と重なるうち、いつか彼女は懐胎の身となつた。やむなく病氣と詐り沓掛在所に隠れて、生み落したのは與之介の三吉。誰知るまいと思ひきや、その事忽ち御前體に洩れて、男は御追放、女はお手討と事定まつたが、彼女の實父竹村定之進の切腹で、やつと彼女の罪は赦された。本來なら、その時彼女は與作の跡を追つて、倶に放浪の旅に赴くべきだつた。



倂し、由留木の御館でも、ちやうどそのをりお姫



樣がお生れになつて、恰好なお乳の人がなくお困りの御樣子だつた。重なる御恩を報ぜんため、重の井は父の遺言に從ひ、最愛の夫を捨てゝ姫君のお傍に上る事となつたのだつた。

『男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし云

やんなや。さあ、早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生れ性。現在わが子に馬追ひさせ、男の行くへも知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事ぞ。』

歎きながらも重の井は、ひよつとこの樣子を他人に見咎められでもしたら大變と、早く三吉を追ひやらうとあせつた。三吉はすゝり上げながらもなか〳〵動かうとはせず、

『悲しい話を聴きました。さりながら、常に乳母が申したは、姫君樣とわしとは乳兄妹の事なれば、母樣にさへ逢うたらば、父樣も出世なさるゝ由。御訴訟なされて下さりませ。』

と云ひかけると、重の井は慌てゝ押へた。

『あ、その乳兄妹云はぬ事。姫君樣は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉といふ馬追ひが乳兄妹にあるなどと、どう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうでも重い事……』

行かせよう、行くまじと母子が揉み合ふうちに、奥で聞ゆる女の呼び聲――

『お乳の人はどこにぞ。御前から召しまする。』

今は躊躇はできなかつた。心を鬼にして重の井は、三吉の手を取つて無理に庭先へ引きおろさうとした。三吉もこの上は強情も張れず、シクシク泣きながら立上つた。腰の手拭を取つてすつぽりと馬方冠り、しを〳〵と行きかゝるその後影。重の井はもう堪らなくなつた。走り寄つてひしとその背を抱き締めた。



『これ、ま一度顔を見せてたも。山川で怪我しやんな。雨風、雪降り、夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで、患はぬやうにしてたも。千三百石の代取りが、なんの罰ぞ、咎めぞや。』

思ふさま泣いてから、彼女は懐を探つた。さうして在つただけの金を袱紗に包んで三吉に渡さうとした。三吉は邪慳に突きのけた。

『母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬお構ひ。その一歩もいらぬ。馬方こそすれ伊達の與作が總領ぢや。母樣でもない他人に、金貰はう筈がない。えゝ、胴慾な。母樣覺えてゐさつしやれ。』

三吉は燃えるやうな眼で重の井を睨みつけた。唇の兩端が引釣つたやうに顫へて、いくら泣くまいと怺へても、大粒の涙がポトリ／＼と頬を流れ落ちた。

*　*　*　*

歎いても怨んでも、浮世の義理は結局この二人の者に、表立つて母よ子よと名のりをする事を許さなかつた。奥ではこの間にすつかり用意が整つて『はやおん立』とさゞめき立てた。なんにも知らない宰領どもは、三吉の細首を引つ掴むなり、無理やりに姫君のお輿の傍まで連れて行つた。さうしてお姫様のお伽に、十八番の馬子唄をうたつてお聞かせ申せと



命じた。

いつもなら知らぬ事、今三吉は唄どころの騒ぎでない。涙ぐんで返辭もなくうつむいてゐると、宰領は眼を剝いて、ポカリ三吉の頰ぺたを食らはせた。三吉はわつと泣き出した。泣きながらもやつぱり謠ふより外はなかつた。

へ坂はてる／＼、鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの土山雨が降る……

姫君のお乘物はその唄の間に動き出した。行列が花やかに續いた……

（をはり）





蜂須賀小六

村上浪六
挿繪 小山榮達

關八州を手に握る歴代の北條家と、當時の戰國に軍さ神といはれた武田信玄と、この二人を重縁の姻戚に持ちて加之も海道隨一の大武者たりし今川義元を眞正面の敵に受け、わづか五郡の兵を以て一撃の下に粉碎した織田信長の名は實に天下の耳目を驚かしたが、その信長も地利と水利を占められた美濃の齋藤家に向うては洲股の砦一個を滿足に築き得ないばかりか、第一に佐久間信盛が逃げ歸り第二に柴田勝家が逃げ歸り第三に從弟の勘解由左衞門元貞が殺されて、ますます策の施しやうもないところへ、ひよこりと鎌首を持上げた木下藤吉郎、にやにや笑ひながら膝を進め、御心配に及びませぬと大膽に引受けたのは、ふしぎの緣の蜂須賀小六あるがためで、久しく其名を聞いて居た信長は思はず手を叩いたが、この音は芝居の拍子木に等しく戰國の舞臺をクルリと廻轉した事になる、つまり洲股の築城は、信長のため旗を京師に樹てゝ四海を壓した覇業の第一步で、秀吉のためには身を卒伍より起して豐太閤となりし運命の第一步で、小六正勝また秀吉のため出でて戰陣の雄將となり入りて帷幄の參謀となりし第一步で、

豆のやうな洲股の砦を築いた事は實に天下の大勢を作り出した基になッて居る、

洲股の築城以後、いやしくも秀吉の動くところには形影相件うて必ず小六正勝がある、毛利對陣の中國探題として秀吉の播州姫路に居城した時、小六は蜂須賀彦右衛門尉と稱して同國龍野の城主で五萬三千石、たま〳〵勃發したのは本能寺の兇變で、その機を逸せず秀吉の耳に私語て天下經營の端緒を啓かしめた大膽細心の工夫また正勝である、

本能寺の變は直接表面の明智光秀よりも寧ろ天下の動き工合に於て、信長對秀吉、秀吉對正勝と、かういふ微妙の機運を作り出した因縁上、こゝに本能寺の一篇を加へて置くのも一種の興味的で、さのみの蛇足にはなるまい、

(本能寺)

天正十年六月二日、短かい夏の夜まだ明け放れず、都は夢に包まれて、やう〳〵東天の空の白みかゝらうとした頃、六角の南、錦小路の北、油小路の東、洞院の西、本能寺の四方より幽かに物音が響いて來る、

客殿の奥深く殘燈の影に寢覺勝の枕をあげた信長は、十四歳の春より四十九歳の今日まで亂麻の如き戰國の間に馴れて來た耳を欹てながら、例の大音は猶更の夜陰を破りて、

『誰かある』

次の室に宿直して居たのは森三左衛門可成の子、蘭に應じて、

『蘭丸これに居りまする』

『あの物音は正しく軍兵が押寄するぞ、物見せい』

はッと答へて其まゝ廣緣に走り出し、高欄に足を踏掛けて柱に身を卷きつゝ片手に廂裏の桁を摑みながら見渡したが、まだ明けきらぬ空は薄闇くて何物も見えない中に、なるほど人馬の響きが段々と次第に近づいて來る、

や、たゞ事でないと大地に飛降り、庭前の松の木に攀ぢ昇りて、白みかゝる空の雲透に見えたのは、朧げながら兼ての心に判然と映りし水色桔梗の九本旗、

すはこそ、ごさンなれ光秀と、取て返して信長の前に跪き、

『日州めと覺えまする』

信長は首肯て、

『相違あるまい』

その聲を後にして自己の居室に飛込みし蘭丸、甲冑を取出して身に纏ふ遑もない、手馴れし十文字の大身槍を提ツさげて、まづ骨肉の情愛に弟の坊丸と力丸の枕を槍の石突に跳ね起した、

『生命の御用あるぞ、傍輩に後るゝな、一門の名を汚すな』

いひ捨てゝ身を躍り出し、音高く板の間を踏鳴しながら大音聲に觸れ廻る、

『上樣に謀反の奴あり、御座に近寄らすな、起きよ面々、ぬかるな人々』

妻戸を押倒し障子を蹴破り襖を踏飛して走り廻り叫び廻りし蘭丸當年十八歲、膂力は十人必死の太綱を引戻すといはれた大剛の不敵さで、坊丸は十七歲、力丸は十六歲、この三人は年子の兄弟に生れて居る、

事こゝに及べば更に動ずる色もない信長、白綾の單衣に二重の丸帶を前に結び、近侍の松壽丸が捧げた太刀を見返りもせず腰に橫たへ、高橋虎松に双廣の大薙刀を持たせ、五人張り滋籐の強弓を携へながら、いかなる下郎



にせよ眞ツ先に近づく奴へ褒美のため我矢を賜はるぞといふ態度で、悠々と板廊下を步み出した姿は、馬上の武者振よりも却ツて恐ろしく物凄い、

ほの〴〵と明け放れ行く空の朝風に飜へりし旗さし物、どツと起りし鬨の聲、既に本能寺の四方は十重二十重に圍

まれ、はや塀を乘越え總門を開いて押寄せた中より先を爭ひながら廣庭に亂れ入る奴原、ほの暗い殿上より見下せば、いかにも射よげに矢ごろ近くへ進み來る、

信長は幼少より音に聞えた弓勢で、閻魔の廳の土産話にせよと笑ひながら、鋭く矢繼早に覘うて切ッて放てば、またたく間に十餘人、ばたり／＼と面白く斃れる、

その弓勢に恐れて、暫し近づくものもない時、明智方に名高い蘭地甚九郎、三宅孫十郎、並川金右衞門、四方田又兵衞、いづれも戰場を我家と心得た場數の古兵、右府公とて鬼神ではあられまいと、混合ふ味方を搔き分け射伏せられた死骸を飛越て進みしが、まだ薄闇い殿上の緣先に白き單衣を纏うて威猛高に立てる信長の姿、あり／＼と眼前に見上ぐれば、古今の猛將といふばかりでなく、きのふまで御所と仰ぎ上樣と畏み加之も自己の主に逆臣といふ氣怯れのため、おもはず五體の居縮むやうな心地して太刀も槍も付けられない、

その躊躇うたところへ信長の近侍お小性で祖父江孫丸、小川愛平、魚住勝七、薄田與五郎、伊藤彥作、落合與八郎の面々二十餘人、年來の御恩この時なりと鋒鋩を揃へて死物狂ひに斬込だので、入亂れた血煙に流石の信長も暫くは矢を放たぬ獨言、

『かはいや若き者ども、みごとに働くぞ』

その外よりも呼び合ふ聲々と打合ふ刄音が手に取る如く聞えて來て、總門の前を見渡すと、まッ黒に押寄せた軍勢、かゝれかゝれと采配を振る馬上の武者は、たしかに光秀の一族らしい、せめて彼奴を遠矢に射落さうとして、弓を取直したところへ村井又兵衞と木村治郎右衞門の二人、これは明智方に生命知らずの荒武者で、横合の落緣より進み來るを見るや否、

『推參なり下郎め』

大矢を番うて手近に村井を射斃したが、先刻より散々に引絞りし弓の弦、ぱちりと音して切れ揚りしを幸ひ、こゝぞと太刀を眞ッ向に近寄りし木村の肩先、兜首の隙間を片手なぐりの弓杖で、はッしと打てば緣より轉び落ちて再び這ひ上る勇氣もない、

弓を捨てゝ大薙刀を取り、なほも戰はうとするところへ走せ付けたのは坊丸と力丸の兄弟、あはれや全身に血を浴びて信長の脚下に打伏しながら、

『勿體なや、名もない雜兵原に御

手を下し賜ふか』

『蘭丸、いかにせしぞ』

『願くば一時も早く、御最期を勸め奉れと、兄の申し付を言上いたしまする』

十七と十六の兄弟、其まゝ信長の眼前で刺違へた哀れさを振返りながら、奥殿に入らうとした時、いづこより忍び入りしか、黑革緘の大具足に身を固めた一人、廊下傳ひに妻戸の蔭より現はれて、一禮もろとも大膽に名乘をあげた、

『明智光秀に深く賴まれし安田作兵衛、恐れながら丹波者の槍筋を御覽に入れまする』

安田作兵衛國次は分別の深い男といふばかりでなく、丹波一國に聞えた槍武者で、泣て光秀を諫めたが用ひられずに泣て從ひ、平生信心の愛宕權現へ一晝夜の祈願をかけ、右府公の御首級は餘人に渡すまい、この安田が手に落させ給へと、實は光秀その首に餘憤を漏すかと恐れたので、人知れず隱して埋めたい念願、加之も武勇の聞れは箕浦大内藏と古川九兵衛と三人、兜の鍜も具足の胴も袖も草摺も黑く押並びて敵に背後を見せた事なく、明智の三羽鴉と唄はれた名物男である、

信長も安田の名を聞かぬ事はない、さるものと思ひながら今更になりて、陪臣と戰ふは最後の恥辱と心得たらしく、名乘りし聲を耳にも入れず、其まゝ障子を閉して入りし影、ありくと殘燈に映るを見て、御免なりませと突出したのは丹波の名槍、たしかに大願成就の手應あり、御首級を賜はらうと進みし時、飛鳥の如くに走せて來たのは森蘭丸、大童に頭髮を振亂し、紺の越後布に鶴の丸を白く染拔きし廣袖の端は領首に結び、ずたくに斬裂かれた紅梅綸子の大口を高く取て數個所の淺傷を負ひし面魂、年は若し氣は猛々しく身の丈も勝れたる白面の美男で、荒れたる金剛童子を描き出したやうである、

『おのれは作兵衛』

安田も一目に、

『おのれは蘭丸、待ツたるぞ』

安田の素槍と蘭丸の十文字と人交ぜもせず、からくと物凄い音を立てゝ穗先を搦み合ひながら信長の首を急ぎし作兵衛、わざと後退りに欄干へ押された如く、この敵を廣庭に誘き出さうとして後ろ飛に飛降りたが、運悪く雨落ちの切石を蹈みし溝の中へ袖草摺を敷入れて仰向けに嵌り込み、跳ね起きようとしても、ぎッしりと大の鎧武者が詰りし重さで身動きも出來ない、

これを上より見下した蘭丸、まのあたりの天罰、思ひ知れと叫びながら槍を縱に持直し、胸板を覘うて拜み突に突下した穗先、つるりと胴を辷りし十文字の片刃に相引の糸を切り太股の

間に男根を割りて貫かれた安田作兵衛、その槍の柄を物馴れた両手に引くと共に欄干を越て縁の上へ跳ね上るや否、電光一閃、抜打に身を沈めて蘭丸の雨脛を斬飛し、奥殿を目がけて二歩三歩、進みかけたが大事の深疵に堪らず、ふら〱とした五體は支へ難くなり、どッと大地に落ちたのを遥かの彼方より馬上に見て居た明智左馬介光俊、おもはず鞍坪に伸び上りて、

『鴉の飛びやう狂うたぞ、引ッかけて來い』

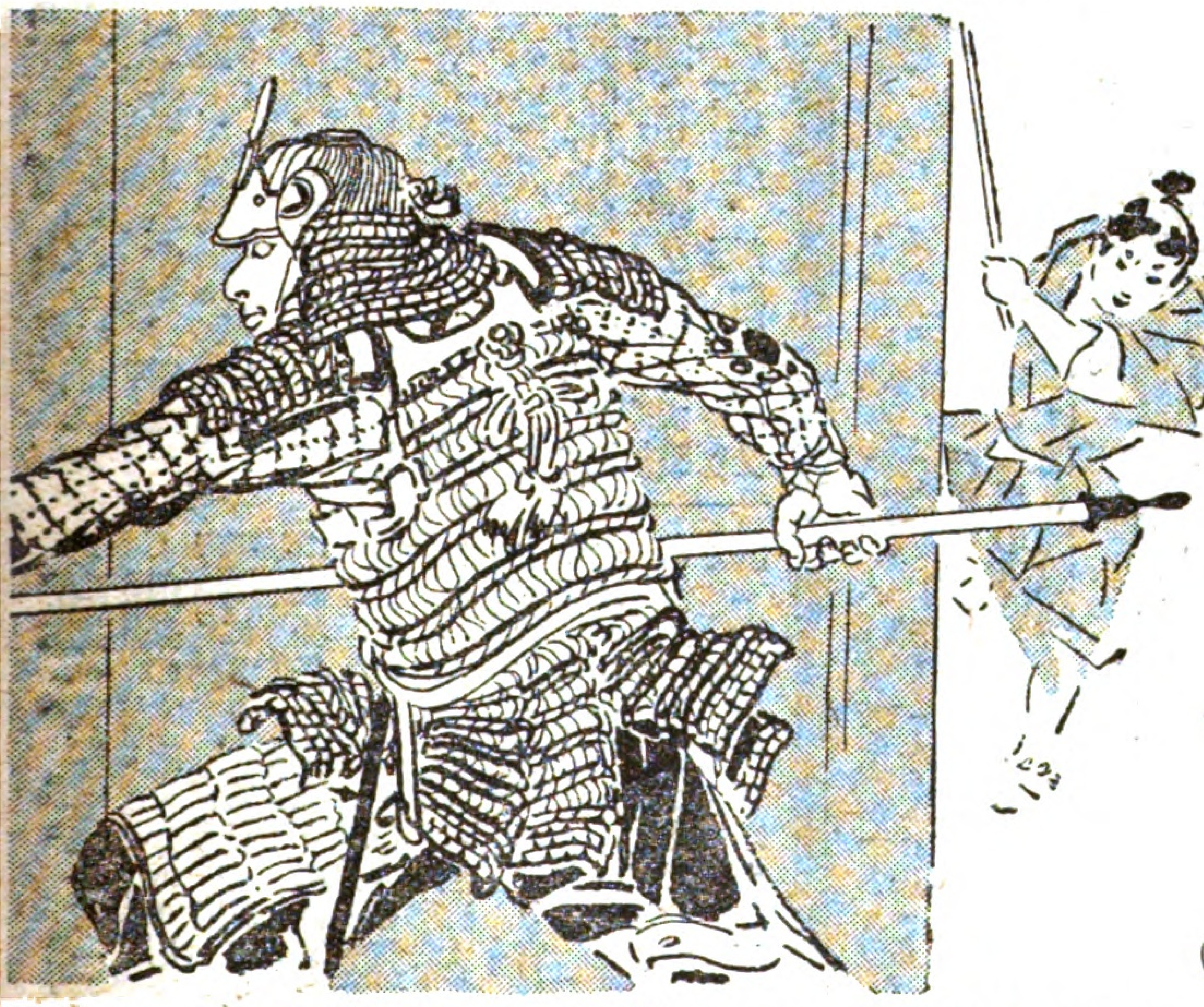
四方田又兵衛、一番に駈け出して蘭丸の首を取り、安田を肩に掛けて後陣へ返りし時、はや既に奥殿より黒煙を吐いて大書院も小書院も庫裏も眠藏も一面の猛火に包まれ、敵に斃れ味方と刺違へ火に飛込みて一人の生殘りしものもない

信長の本能寺へ入りしは六月朔日の朝で、三位中將信忠は妙覺寺に入り、式日の禮として信忠より信長に伺候し、夕暮まで中國征伐の物語りに酒宴を催したのが父子一生の別れで、加之も僅かに百二十餘人の近侍を召連れて要害のない本能寺へ宿りしといふ事が既に油斷大敵、さしもの亂世に生れ千軍萬馬の中より位は正二位に至り官は右大臣に陞りし天下の武將も、その終りは案外に脆く曉の露と消て仕舞ひ、妙覺寺に宿りし信忠も僅かに五百餘人で、父と一手になる事も叶はず、南の空に本能寺の變を知りながら二條の城に立籠り、いかにも信長の子と

して恥ぢぬほどに華々しく戰うたが、せめての思ひ出は三法師を此世の忘れ形見に殘して、城に火をかけ小性の鎌田五介に三十一歳の首を介錯せしめたのは織田家の運命こゝに盡きる時が來たのである、

本能寺に黒煙の立昇るのを見て、すぐに急使を西國の羽柴筑前守秀吉に發したのは長谷川宗仁で、第一番の使者が達した時、これを自分の陣屋に奥深く押込で味方にも知らせず、おいおい後から順々に馳せ來る使者を悉く途中に待受けて差止め、いち〳〵その注進を内々そツと秀吉の耳に私語たのは蜂須賀彦右衛門正勝で、恐らく信長の滅亡を報じたばかりではあるまい、

もし秀吉の右の耳へ天下の形勢ここに一變せりと私語たものを多年の肝膽相照した蜂須賀彦右衛門とすれば、その左の耳へ乾坤一擲の大博奕を打つは今なりと私語たもの智略縱横の黒田官兵衛孝高で、當時この黒田と蜂須賀は秀吉の兩翼となりて毛利對陣の一切を引受け、かの有名な高松の水攻めに武士道の精華を唄はれた清水長左衛門宗治降復の書札も全部この二人の名宛である、



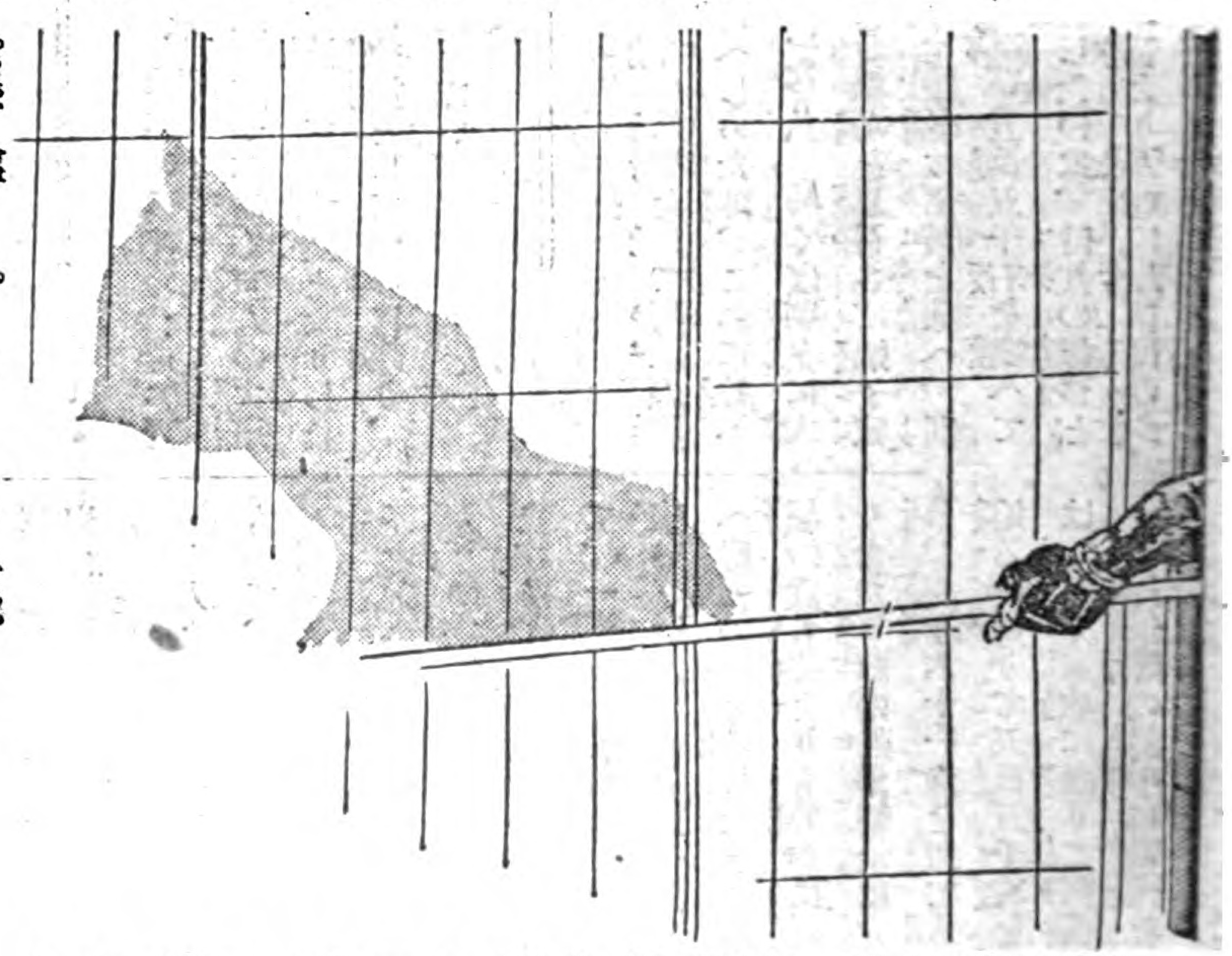
長谷川宗仁に後れず茶屋四郎次郎また急使を泉州の堺で信長征西に從はうとして居た徳川家康の許に發したが、きくや否、其まゝ出奔して河内より大和の奈良に入り、伊賀越に伊勢の白子より參河の大濱に渡り、ほうほうの體で岡崎へ逃げ歸りし工合を見ると、流石の家康も本能寺の變には膽魂を潰して顏色を失ひ、あツと呆れた後の思案も出ず、どうなるか一寸先は闇の世の中で、無論この時の明智光秀は既に大津と山科と宇治と伏見と淀の五個所に兵を伏せて家康の來るを待受け、鰌掬ひのやうに笊の中へ入れようとした危い時である、

然し信長に師事した家康よりも、

織田家に殘る一族と柴田勝家の輩よりも、光秀の殿も氣味惡く恐れたのは草履取から身を起した羽柴秀吉で、彼奴こそ我大敵と見て居るが、幸ひ今は山陽道の十個國を領せる毛利の大軍と合戰の眞ッ最中、容易に引揚げることは出來ない、動けば忽ち追撃の鏖殺に逢ひ、本能寺の變を聞けば前後の難に狼狽て度を失ふべしと窃かに微笑を浮べた時は、何ぞ圖らン東西兩軍の和議を講じ始めた時で、毛利の陣中よりは安國寺惠瓊、秀吉の陣中よりは蜂須賀彦右衞門、互ひの誓詞は既に取交されて居た、

その誓詞に先ちて秀吉は信長の死を敵に打開け、和戰いづれにあるかを問ひしといふ事は、いかにも史上に痛快を極めて居るが、これは秀吉の膽略を示した後人の作僞で、當時の形勢、なかなかさういふ暢氣なものではない、

本能寺の煙は六月二日の曉方で、その悲報は三日の深夜に達し、四日の朝は和睦の誓として清水長左衞門に自刄せしめ、五日の夜に入りて後、だしぬけの不意の疾風の如く去り、六日の途中から始めて信長の兇變を敵に通じ、西片上より船に乘りて赤穗に着し、八日に姫路の我本城へ歸るや否、直ちに風呂へ飛込み風呂の中から丸裸のまゝで物頭を呼び寄せ、あすの一番貝を吹けば飯を炊かせよ、二番貝には人夫を揃へ三番貝には勢を揃へて出陣の用意せよと、さらに夜を徹して城中の金銀米穀を調べ兵馬武具を整へ、九日の早天には全軍を城外の印南野に繰出して旗を樹てたが、以上七日の間を殆ど一睡もせずして電光石火の如くに働いた秀吉の勢力絶倫は古今その比類がない、



當時の風習で陣中に居た祈禱坊主が眉を顰め、今日は出でて再び還らざる大惡日なりといへば、秀吉はこれを聞て笑ひながら、出でて再び還らぬは我ための大吉日なり、もはや此城に用

はないぞと晝夜兼行で十一日の朝、攝津の尼が崎に着し、やうやうこゝで半日を寢込み、雷の如き鼾聲中より身を起して目を開けば英氣さらに幾層倍で、一日を越た十三日は天王山を取切り、はや既に明智光秀と山崎に戰うて居る、

信長は光秀のために覇業を空うし、光秀は秀吉のため覇業の基を築いて、その以後は快刀に亂麻を斷つが如く巨人の大道を濶歩するが如く、一睨の下に四海を靜めて豐太閤となりしまでの間は、この小說『蜂須賀小六』の續篇として他日に讓り、ここに聊か晩年の正勝を左に掲げて置きたい、

天正十二年の二月、豐太閤は正勝多年の功勞を以て阿波の國に封ぜんとし、その旨を前田玄以に傳へしめた時、これに答へていふ、もはや天下は治りて我は老いたり、願くば朝夕に大阪の城を仰いで殘年を終りたし、もし我微功を思召さば嫡子家政に賜はりたいと、太閤その意を汲みて家政に阿波を與へ、別に正勝の賄ひ料は丹波河内の良田を撰び五萬五千石を與へて城の天主臺に近く玉造へ邸宅を構へさしたのは、時代の推移と共に表面は君臣なれど小六と藤吉郎の昔より互ひに思ひ出の多い間柄で、いふにいはれぬ情味が溢れて居る、

正勝は其まゝ大阪の邸にありて阿波に移らないが、蜂須賀家の老功たる稻田以下の七人衆へ一書を送りて、我子のため國事を囑した文中に、阿波守は若く候間、諸事御引立御意見賴み置候、もし各ゝ力の才覺にも不及儀は拙者方へ可被仰越候としてある、

主人より家來への文面としては殆ど類例のない慇懃を極めたもので、その家政は十三歲で姉川の合戰に名を知られ後に阿州の蓬菴公と稱せられたほどの傑出した人物であるが、親として子を思ふ念々の情愛、いかにも涙ぐましいところがある、もし各の才覺に及ばざる儀は拙者方へ仰せ來さるべく候とは、ますます家政のために陰ながら心を勞した父子の情が忍ばれて、一面また我は大阪にあるが汝等の思案に餘りし事は申して來いといふ安心を與へ、警告を與へて、それとなく偉大の力を添へ嚴格の威を示したところは、いかにも正勝その人の面目が戰場の武者振よりも鮮かに現はれて居る、

また正勝の無慾恬淡は元來の性格で、その翌年の五月二十三日、行年六十一歲を以て大阪の邸に死せしが、はや既に死期の迫るを知りて五萬五千石を太閤に返還し、左右に召使うた家來は悉く家政に送りて阿波へ移らしめて居る、

群雄爭奪の渦中に戰國を經て來た當時の諸將中、動もすれば

功を爭ひ利を逐うて見苦しき暗鬪を極めた當時の諸將中、始めに相許した秀吉と終生の肝膽を照し合うて自己の功に誇らず自己の利に走らず、阿波一國の封を辭して朝夕に大阪城を仰ぎながら晩年を送り、別に與へられた五萬五千石を悉く死期に返還せしが如きは元龜天正の年間、他に一人これを眞似たものすらない、

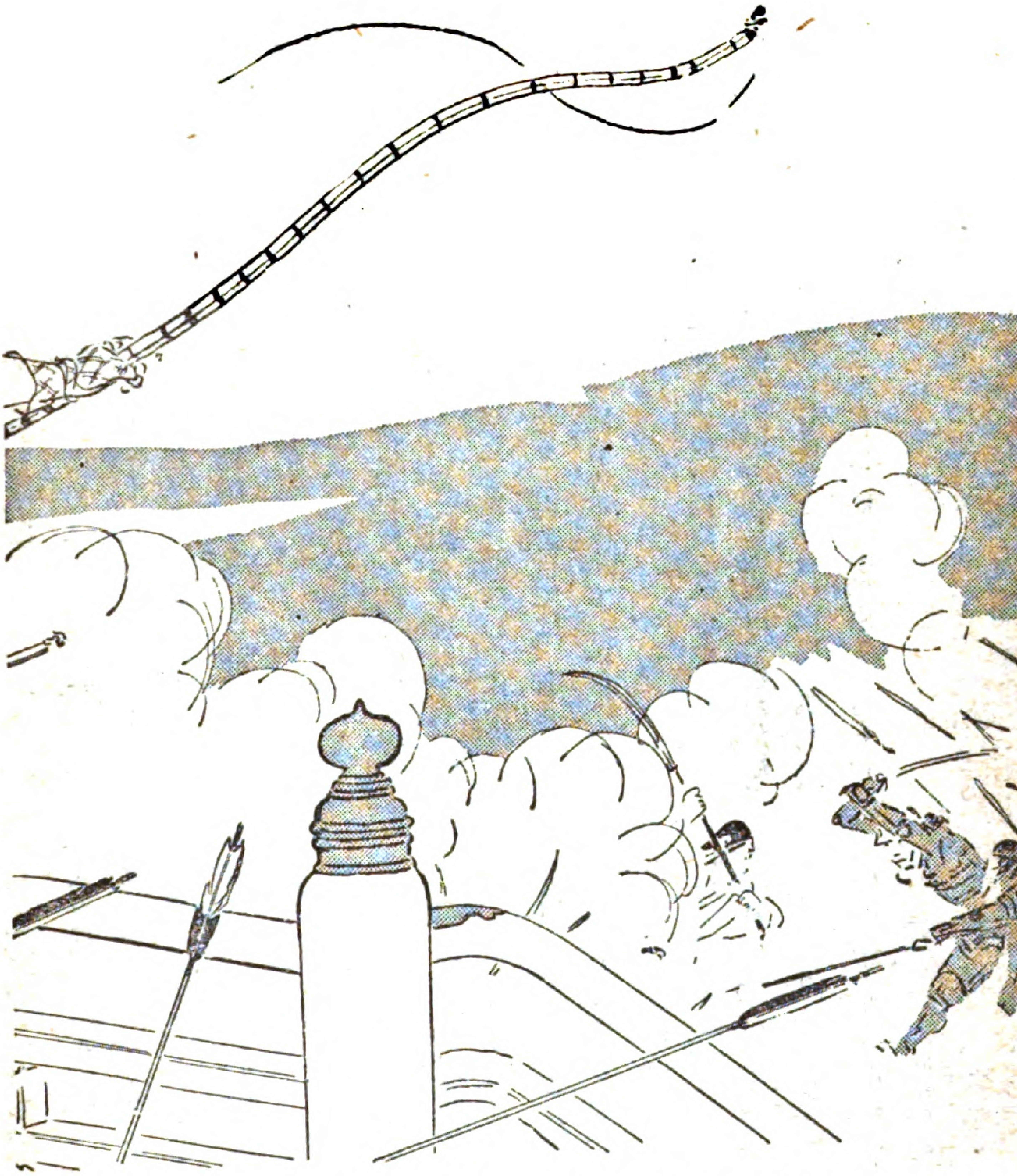
正勝の生前、阿波守家政に向うて、いかに世は成行くとも汝は時の天下に從ひ時の大名たるべし、我は草鞋を穿て山野を馳け廻りし小六のまゝで終るべしと、身に絹布を纏はず食に嗜好を命ぜず、同胞いづれも時を得顔に富貴を競ひし中に超然として禪僧の如き枯淡の終焉を遂げた此人に對しては、ありし昔を偲ぶ感慨無量と共に流石の豐太閤も容を改めて心から泣たであらうと思はれる、

屍山血河を物の數ともせざる太閤のため心からの涙を流された蜂須賀正勝は、當然また江戸内府と稱した徳川家康のため、その生存中、うか〳〵油斷のならぬ男と見られたに相違ない、家康の烱眼あの無慾人だけは利を以て誘ふ事の出來ざるものと睨まれたに相違ない、

もし正勝をして關が原の戰ひに生存せしめたとすれば、どういふ態度を取るかといふ事は、只これ一場の推測に過ぎないが、恐らく正勝の性格としては關が原の戰ひを待たず、太閤の死と共に世を避けて閑雲野鶴に伴ふべき人と思はれる、また佛門に入るは正勝の家に傳へられた血の流れで、正勝の祖父たる正昭は兄の死後に子なきため還俗して家を繼だ龍空禪師、叔父の寶道は高野山の光明院十二代の住僧、自分の弟が同じ高野山の常林禪門、一家の血脈を見れば祖父も叔父も實弟も皆それ〳〵佛緣に深い人々で、加之も正勝の名利に囚はれざるは生涯を通じた自然の性である、

つまり正勝は太閤のために難を辭せず太閤のために功を誇らず太閤の知遇に感激の生涯を捧げた人で、太閤の死後その身を諸將の間に進めて再び謀に取り戰ひに馳すべき人とは思はれない、太閤の死これ我事の終りであるとしたに相違ない、

この正勝を父として膝下に生れた家政は慶長五年、江戸と大阪と東西の確執いよ〳〵深く諸將分裂して天下二分の形勢を示した時、豐臣秀頼の命として、もし大阪方に與せば阿波の外に播磨と丹波の百二十萬石を與ふべし、もし命に應ぜざれば阿波の領土を返し大阪の邸を去るべしと、家政これに答へて、阿波の國は故太閤より賜はりしところ令嗣公これを收めんと思召さば只これ命に從はんのみ、恨むらくば小人奸臣の幼公を過らしむるものありと、直ちに國土を返還して身を雲水に托し、剃髮して蓬菴と稱し、高野山に登りて光明院に入りしは四十三歲の時で、大勢を見るの明と共に利祿のため惑々たらざる恬淡の風



は、いかにも父の正勝に肖て居る、また關が原の一戰に再び阿波の國を得た時は、勝浦郡の中田村に別館を構へ、その傍に豐國大明神の社を建て丶舊恩を忘れず、太閤の靈を祭りて朝夕これを拜して居る、さらに德島城の高きところに稻荷の社を築き、その社前に額づけば遙かに海を隔て丶大阪城の方角に當りし如きは、世は移り變れど人知れず亡父の志を空しうして居ない、

正勝の祖父の正昭も小六と稱し、父の藏人正利も小六と稱し、また嫡子家政も小六と稱したが、小六の通稱は正勝を以て天下に聞えて居る、

正勝の生前は從四位に敍せられ修理亮に任ぜられ、死後の法號は福聚院殿良巖淨張、骨を埋めし墓も朝夕に大阪城を仰ぎ見る地位で、それがために出來た名ではないが、そこを古くから浪華名所の夕陽が丘と稱して、現在なほ今日の町名に殘りつつあるのも亦これ英雄を想ひ起させる



懷舊の種である、（終）

この小說は昭和二年十二月に筆を起して一年半の讀者諸君に見えたが、こゝに一まづ終りを告げて前篇とし他日また後篇を出す事としたい、但しキングの紙上に掲載するか別に單行本として刊行するかは著者の自由にある、たま〳〵本月本日を以て去年の即位大典に賜はりし贈從三位の朝旨策命使が大阪の夕陽丘に於ける小六正勝の墓前に立つ事となりしは、著者として無上の感激に堪へない、

昭和四年四月二十二日　村上信



新日本を生む力

衆議院議員　鶴見祐輔

一

　すべての人間は、二六時中たゞ一つのものを求めてゐる。それは『心の中の平和』といふものだ。

　ある人の金錢を求めて踠き苦しむのは、今日の世に於て、自分と自分の家族に三度の食事を與へる爲には金錢がなければならないと思ふからだ。相當の財産があつて初めて明日の食事の心配がなくなるからだ。それは明日の食物に差支へた經驗のある人でなくては解らない。

　或人は職業を求め、或人は聲名を求め或人は戀を求め、或人は宗教を求め、或人は闘ひを求め、或人は快樂を求める。それは煎じつめて見れば、さうしなければ氣が濟まないからだ。氣が濟むといふのは心が平和を得るといふことだ。

　今日の日本民族のうちには、あるいらいらしたやうな望みがある。踠きがある。悩みがある。どうしてもこのまゝでは、じつと安心してゐられないやうな苛立たしい氣持が、六十餘州に滿ち〳〵てゐる。どうしても、日本はこのまゝでは濟まない。さういふ氣が、この大きい空氣のうちに磅礴してゐる。

　幕末の日本にもかういふ氣持ちがあつたに違ひない。大化改新前の日本にも、あつたに違ひない。百五十年前の佛蘭西にもあつたに相違ない。

　さういふ漠然たる何物かを求めて日本民族は、奔流のごとき社會變化の世相のうちを流れ下つてゐるのだ。

　光はいづこより來るのだ。

　力はどこから生れるのだ。

二

　かういふ時代に、大きい宗教が生れる

ユーモア小品

◇新家庭風景

『ねえ所天時計が又とまつたのよ。どうしたらいゝんでせうね。よく調べて何とかして下さらない』善良な夫は時計の針と字盤をとり除けて、眼鏡で機械を仔細に檢べ、よく油をさすなど出來るだけの事をしてやつた。

　けれども、時計は動かなかつた。夫は癇癪を起して寢てしまつた。

　翌朝の事である。



『ねえ所天どうして時計が動かないんだか、判つてよ』

『どうしたんだい』

『あたし、捲くのを忘れてたのよ』

◇何れにも適用できる原則

　着物の事にはとんと無頓着な老篤學者が、或る時、旅行に出ようとした。

『あなた、せめて新調の御着物を召していらしつたらどう』

『旅に出る時は、どんな風をしてゐたつて關はんよ』

『どうしてです』

のだ。大きい殉教者が出て來るのだ。道のために倒れる殉教者の血のうちから、大きい力が生れてくるのだ。

その殉教者、どこから出てくるのだ。私は、その殉教者を、日本の『母』のうちに求める。日本を救ふ力を、清純な『母』の愛のうちに求める。日本民族を導く光を、清朗なる『母』の德操のうちに求める。

この地上の最も美しきもの〻一つは『母』として女性の愛である。地上の最も莊嚴なるもの〻一つは、『母』としての女性の受難である。冬の夜雪に伏し、夏の日光に晒されて厭はざるは母の愛である。飢ゑて子の爲に食を割き、死に臨んで子のために恐れざるは母の力である。ゆゑに人類發達の史實を尋ぬれば、世上事功を樹てたるの男子にして、賢母の訓化に浴せざりしもの一人もなしといふも過言でない。母は文明を造り、國家を支へ、宗教を生み、藝術を創造したのだ。

その母としての愛と力とに於て、理想に近きものが日本の女性であつた。私は日本の女性を禮讃する。ことに母としての日本の女性を禮讃する。それが世界に誇るべき日本の寶なのだ。その母を、貴き理想の母を、今日の日本民族は求めてゐるのだ。今日の日本民族の苛立つた心は、母の慈愛によつてのみ和められ、今日の日本民族の惱める心は、母の叡智によつてのみ導かれる。日本を救ふ力の一つは、日本の女性が、莊嚴なる母となることだ。

私の處女作たる一卷の小說『母』は、か〻る心持をもつて記されたのだ。それは小說といはんよりは、全日本に對する一つの檄文だ。主人公朝子の一生を通じて、私は日本の男性と女性とに呼び掛ける。それは、昨年私の著述した英雄待望論の姉妹篇なのだ。

愛なき家は榮えず、愛なき民族は興らず。愛の至純なるものを、私は母としての日本の女性に發見する。日本の強き力は、そこにあるのだ。

因に「母」は伊東深水畫伯裝幀 四六判包裝定價二圓送料十四錢 大日本雄辯會講談社發行。六月初旬發賣豫定 詳しくは廣告頁を御覽下さい。



『誰もわしを知つてゐるものはないからな』

『おや、たぜ家にいらつしやる時には、ちやんとした風をなさらないんです』

『なアに、みんなわしを知つてゐるからさ』

◇野人禮にならはず

『ポムペイや』と、主人が黒奴の下男を呼んだ。

『お前、ジョーンスさんのとこへ手紙を持つて行つたらうた』

『はい、旦那しやま』

『手紙を お渡ししたかね』

『はい、旦那しやま。けど、あの方は字がお讀めになれましねえ』



『どういふわけだな』

『ジョーンスしやまは盲だ』

『盲だと。どうして判つた』

『うらがお手紙をお渡ししましたらばな「お前の帽子はどこにある」――「お前の帽子はどこにある」――「お前の帽子はどこにある」――つて三べんもお訊ねになりましただ。うらがの帽子はちやんとうらがの頭に載つかつてゐますのにな、ハ、、、』

讀書家としての後藤伯爵

少年團日本聯盟理事 子爵　三島章道

私の知つてゐる所謂偉い人の中で、平常殊によく本をよまれる點で感心してゐるのは故後藤新平伯だ。後藤伯はずゐ分多忙の方だつた、朝早く面會に行つても大抵十數人の人が待つてゐる。そして一日中かけまはられる。その急がしい間にいつのまによまれるのであらうと全く驚かされる。例へば、後藤伯は少年團の本はありとあらゆる本をすつかりよんでゐられた。日本語の本でも少年團の本はもう十數册ある。それをよくこまかによまれ朱線を入れられ、又、御自身の感想を朱でかき入れられる。少年團の新刊書が出ると、眞先によまれるのは後藤少年團總長だ。その上、英語の本もよまれる。まだたりなくて、兒童心理學、ダルトンプランなどの本を私に命じて買つて來させてかたつぱしから讀破された。

私は後藤總長の所に本を持つて行く度に、すぐあとで『あすこにこんな事がかいてあつたが君はどう思ふ』なぞと云はれるので、總長の所へもつて行く前によんでおくが、それが實際まにあはない位だつた。だから後藤總長の少年團の演説は一回毎に新組織が加へられてゐる。後藤伯のお仕事はずゐ分多かつた。少年團はその一つに過ぎないのにそんなにその方面の書をよまれたのだから、他のあらゆる方面の本もよまれたのであらうと思ふ。あの急しい中にどうしてよまれるのであらう、まさかねないでよまれるのでもなからうと實際思ふ位であつた。

隱れたる昭和の國士
其日庵先生

小壯十七歲の時に大望を抱いて上京し、以來六十六歲の今日まで、一身を賭して國事のために奔走されてゐるのが、其日庵杉山茂丸先生である。

明治、大正、昭和の久しきに亙り、生死の巷を縱橫に往來しながら、名聞を求めず、榮達を願はず、終始一貫市井の間に悠々たるその高潔の人格は、世の尊敬渴仰の的である。

先生は、その五十年間に於ける交遊實に四方に徧く、常に元老大官に面接して、天下の大事を談笑のうちに決するといふ稀な風がある。國會開設運動以後、日清、日露の二大戰役を始めとし、苟も我が歷史を彩る重大な問題に對し、先生ほど、表裏併せて其機微に通じてゐる人は恐らくあるまい。又それらの多くの事件に親しく參畫し、寢食を忘れて邦家のために力を盡されてゐるのである。



從つて明治大正の史實を半面的に叙述する人は外にあつても、裏面の眞相を傳ふる人々は先生をおいて他にない。

「俗戰國策」は、先生が思ひ出深き多年の活躍を語つて後世に遺さんとする畢生の快著であつて、この僞らざる飾らざる告白によつて不可思議とされてゐる先生の半生の閱歷はつひに明らかにされた。又、決鬪介添事件、條約改正事件、爆彈事件、古鐵責め事件、日露開戰、電車市有問題、その他、明治大正の秘史外傳として貴重な史料であるばかりでなく、井上、尾崎、後藤、伊藤、頭山、大隈、松方、山縣、兒玉、星、寺內、乃木、小村、桂、原、板垣、加藤、田中その他を描く、實に明治大正の傑人傳ともいふべきである。先頃物故された後藤伯爵の面目など眞に躍如たるものがある。

その興味深き點に於ては古への戰國策にも優るべく、老て益々盛な意氣は、書中の隨所に打てば響くの槪があり、刻下の人々にとつては絕好の修養書である。堂々六百七十七頁の大著、就中、各所に入れられた細木原靑起畫伯の挿繪は一層の精彩を添へてゐる。（定價貳圓五拾錢送料十六錢　本社發行）



社會美談

孝女の至誠に甦る工夫

東京成女高等女學校々長　宮田修

何時天子様のお通りがあつても

つい此頃の事と聞いて居る。

朝鮮鐵道では全線に亙つて、軌道の振動檢査が行はれた。振動檢査と云ふのは、列車が軌道を走る時に感ずる振動の程度を計つて、その邊の軌道が良く出來てゐるかどうかを檢べることである。云ふまでもなく、軌道は平面であり、車輪は丸い形であるから、車輪や軌道に凸凹のない限り、車は滑に走つて行く筈である。ところが誰もが經驗する樣に、鐵道旅行にも往往、自動車や人力車を飛ばす時と同じく、小さい振動を感ずるのみでなく、時に大きな振動を覺えてまどろむ夢から突然、覺まされる事さへある。所詮は枕木の置き方が惡かつたり、バラスの撒き方が粗末であつたり、若くは軌道と軌道とのつなぎ目に不備があるからである。

　そこで、何處の鐵道にも、保線事務所と云ふものを特設して線路全體の監督をし、更に全線を幾つかに區切つて保線區と稱し、この區域の責任を件の保線區長始め、係員全體に負はせて居る。

　ところで、最近行はれた朝鮮鐵道の振動檢査に於て、名譽ある第一等賞の選に入つたのは、實に大邱驛を中心とする延線何哩かの大邱保線區であつた。

『稀れに見る模範保線區である。』

　當時の檢査官は、餘りに善く出來てゐる線路に感嘆して、激賞措かなかつた程である。

　何うしてそんな善い線路が出來たらう。

　その理由は種々あらう。大邱保線區の人々が、鐵道工學の造詣深かつた事。大邱保線區の基礎道路の土質若くは地層が、特に堅牢であつた事。其他種々の理由もあらうが、特に見逃がせないのは、保線區の人々が、勤勉誠實であつた事である。

『何時、天子様のお通りがあつても差障のない、立派な線路を作らうぜ。』

『さうだ。骨身を惜まず働かう。』

保線區の人々の間の、これが標語となつてゐたのだ。彼等の前に勞銀の多寡もなく、彼等の後に監督の目もない。

唯純眞な至誠の一念と、渾身から迸り出る汗と脂とで打ち込む鶴嘴であるから、立派な線路の出來るのが當然である。

『來る日も〱、あの通り働いてゐるのです。先日の大洪水の時など、激しい流の中に、枕木を背負つて立つてゐた工夫もありました。向ふに見えるあの危險な崖の上から、レールを綱で引張つてゐた者もありました。私如き無能な男の部下に、かくも粒選りの感心な工夫ばかりが揃つてゐるかと思ふと、私は涙が零れます。何うか彼等を賞めてやつて下さい。』

保線區長の四竈達三君が、目を瞬きながら私にさういつた。ともすれば賃銀の爭奪に血の雨を降らし、勞務の節減に爭ひの絶えぬこの頃、果して、こんな人々がゐようかと思はれる程、この大邱保線區は平和の風が吹き和らぎ、歡喜の波が漂つてゐる。殊に『何時天子樣がお通りになつても差障のない線路を作らう』といふ彼等の相言葉は、何といふ力強さであらう、何といふ氣高さであらう。これこそ、保線區の人々の最高理想でなくて何であらう。そして、その高遠な理想に向つて、照る日も降る日も、孜々として働く彼等工夫こそ、人間として最善の道を歩む人々でなくてはならない。

『然し、始めからさうではなかつたのです。こゝに一人の感心な工夫がありますが、その男の美しい心が、四周の者を勵まして遂に、今日に至つたのです」。まあ聞いて下さい」。その男の話



を致しますから……』

四竈君は、さういつて茶をすゝつた。

その工夫の話とは何か？　今、その話を、私の言葉で次に書いて見よう。

呪はれた過去を持つ男

工夫の名は野間良之助といつた。

彼は十五歳の時石工の弟子となり、軈て獨り立ちとなるや國を飛出し、渡鳥の如く東北地方を流れ廻つたのである。

何うせ碌な生活はしてゐよう筈がなかつた。飲む、打つ、買ふ、果ては喧嘩亂行。甚だしきは、或る女と關係を結び、姙娠と聞くや、その夜突然逃げ失せてしまつた事もある。



後列左端に女の子を抱けるは野間良之助氏、前列右端白背廣服は宮田修氏、その左は孝女中田雪子さん

然し、故郷忘じ難く、ある年ふらりと家へ戻つて來た。そしてある造船所の職工となつたのであるが、荒み切つた彼の生活は、そこでも不首尾の門があつて遂に馘首されてしまつた。

『勝手にしやがれ。この造船所ばかりに日は照らないぞ。』

自暴自棄の捨科白。そして、酒と女に狂ひに狂つた心を慰めようと藻掻くのであつた。

『それでは結句、お前の身のためでない。心を入れ替へて眞面目に働いて呉れ。』

年老いた父が手を突いて、涙と共に意見するのであつた。

『ほんとうに、君もその年になつてゐるんだ。お父さんやお母さんの氣にもなつて上げえ。』

小學校の先生をしてゐる從兄が、傍から口を添へる。

『ふん、何とかいつてるやうだ。』

野間君は、馬耳東風と嘯いてゐる。その憎々しさといつたら、傍の見る目も怺へられない位である。

『これ程いつても判らないか！　出て行け、この親不孝者！』

堪り兼ねて父も遂に呶鳴り立てた。側にゐる從兄も愛想盡きたか仲裁しようともしない。

『さう仰有るな、良が悪いのぢやなくて、酒が悪いのですか

ら、醉ひが醒めたら、私がよく言ひきかせます。』

流石母親は女だけに、この急迫した場面に堪りかねて臺所から飛出して來ると、おろ／＼しながら仲裁する。

『お前が甘やかすからいかんのぢや、出て行けといつたら、さつさと出て行け。』

行懸り上、腹では泣いてゐても表面父の言葉は峻烈であつた。

『出て行かんで何うするものか！　俺は、この家へ湧いた蛆蟲なんだ。手前なんか餘計な口出しやがつて、生意氣な奴だ。』

ボカリと、傍で眺めてゐた從兄の頭を、茶碗で撲つた。血がタラ／＼と流れ出した。

そんな騷ぎのあつた數日後、野間君は父の印形を盜み出し、無理な金を作つて、石工として渡鮮したのである。

『家にゐてさへ身を持ち崩したお前だ。朝鮮三界にゐて何をするか知れた事ぢやない。まあ儂の側にゐて呉れゝば、たとへお前が何うあらうと心配が薄い。お前に出て行けとはいつたが、お前が家出してからといふもの、一晩だつておち／＼と寢たことはない。儂と一緒に戻つて呉れ、お母さんの心配だけでも、解くしてやつて呉れ。お願ひする。』

老の身を朝鮮三界まで運んで來て、老父は野間君を伴れ戻さうとしたのである。

『糞面白くもねえ。』

老父の涙に滲む心情も、荒み切つた野間君には何の潤ひにもならなかつたのみか、其の夜、彼はソツと荷造りして家を拔け出すと、夜行列車で京元線を走つてゐた。

置去られた老父は、翌朝、絶望に倒れさうになる躰を支へながら鄕里へ歸つた。

『危いッ！』

下車の際、氣拔けのした老父は遂に、列車から振り落された。

『年寄りだ、早く病院へ／＼。』

驛員達が大騷ぎして、老父を病院へ擔込んだ。命に別狀はないが、可成り重い怪我であつた。謂はゞ、野間君が突落したも同然である。

遂に、野間君は、その最後の仕事場をこの大邱保線區に見出したのである。けれど、彼はまだ眞人間ではなかつた。料理屋の食逃げ下宿屋商店の踏倒し、そんな事は朝飯前の仕事であつた。

『錢が無いんだから仕方がねえ。俺が惡いんぢやなくて、貧乏人を製造する社會が惡いんだ。借金取りなら、俺のとこへ來るより、表の八幡樣へ行つて、何故貧乏人を作つたか聞いて呉れ、アツはゝゝゝゝ。』

酒臭い息を吐きながら、野間君は勝手な事をいつてゐる、年齡正に三十八歲、何時になつたら、彼は眞人間になる事であらうか？

孝女の至誠に甦る

大郎の町外れ、鮮人の汚い三疊程の狹い小屋を借りて、長い病に仆れてゐる一人の石工があつた。家には、同じく病に臥す七歳の男の子の外に、十二歳の女の子が、この二人の病人を看護してゐた。石工の妻は家計の助けをするために、他に奉公して家にはゐない。

無論見る影もない貧乏である。病人の醫藥は愚か、その日その日の食事さへ碌々出來ない程である。最も辛いのは、零下十二三度といふ嚴しい寒氣の中で、燃料がないため溫突も焚かぬ冷い床に、綿のはみ出した薄い蒲團にくるまつて、慄へながら夜を明かす事であつた。昨年の暮の事である。

『よう、父つあん、何うしたね？』

訪ねて來たのは、野間君である。勿論、酒氣芬々としてゐる。

『何うも斯うもありません。病氣で仕事を休んでからは、全く酷い目に遭つて居ります。』

『ふむ、見れば成程、困つてゐるやうだが。』

『はい。お話になりませんが、まあ、聞いて下さい。お話致しますから……』



汗と垢で汚れた蒲團から頸を出して、病人が物語る。

『實はこの春、私が病に倒れてから、續いてこゝに寢てゐる一男と、總領娘の浪子とが枕を並べて病みついてしまひました。五月の末には到頭浪子は、可愛想に碌な手當も受けずに死んでしまひました。』

病人は鼻を鳴らす。野間君は、酒の醉を醒まされる。

『——家内一人の痩腕ぢや病人の藥どころか、其の日〳〵の煙さへ立てかねますので、朝鮮人の方々にお願ひしてそこにゐる雪子を使ひ走りをさせて戴いては駄賃代りに貰ふ漬物が、私共にとつては何よりの御馳走です。』

『ふむ……』

『すると、その時です。この雪子を、置屋へ周旋しようといふ人があつたのです。』

『成程、標緻が好いから、藝者には上玉だ。』

『ところが、この娘が承知しません。』

『親不孝な娘だな！』

『いえ、さうでないのです。賞めてやつて下さい。親の口からさういつては可笑いが、この子のいふ事には私もつい泣かされました。――お父さん、あたし、どんな處へでも奉公に行きますから、何うか犬畜生のやうな奉公だけはさせないで下さい。食べるに不自由なら、あたしはこれから、何にも食べずに居ります。お父さんの側で餓死しても、藝者にはなりません。――野間さん、私はその時、聲をあげて泣きましたよ。善くいつて呉れた、貧すれば貪するで、お父つさんは、危く人非人になるところだつた。もう何處へもやりやしないから、堪忍して呉れと、娘を抱いて泣きましたよ。』

病人は咽んだ。野間君も今や、脳天を撲りつけられた感じである。

『――野間さん、私は死んでも本望です。この年端も行かぬ娘の眞心からの看護を受ければ、何あに醫者の藥なんぞ、飲まなくても善うござんすよ。まあこの娘が弟の世話をする處を見てやつて下さい。親鳥が子鳥を温め育てるやうに至れり盡せりです。親の私が見てゐて嬉しいやら、可愛らしいやらで、泣かされ通しです。』

野間君はもうそこにゐられなかつた。喜の字を越えた父母を泣かせ通しに泣かせた不孝者の彼は、この小さい十二の雪子の前で、慚愧せずにはゐられなかつた。

遂にはそこを飛出すと、我家へ歸り、正月の仕度に買つたばかりの餅を持つて、再び病人を訪ねた。

『おぢさん有難う。』

雪子は素直に餅を貰つたが、一片を食べ、一片を一男に與へると、他は戸棚にしまつた。

『明日また一男さんにやるんです。』

何うしても食べようとしなかつた。

野間君は星空を見上げながら歩いてゐた。

『三十八にもなつた立派な男が、あの十二歳の娘に劣つた心しか持つてゐない。情ない奴だ。』

自ら愧ぢ罵りながら家へ戻つた。

『今日から俺は、眞人間になるぞ！』

突然の言葉に、妻も吃驚したが、本氣にはしなかつた。

けれど、その言葉は野間君の吐いた始めての眞實であつた。

間もなく保線區長にもこれを誓ひ、郷里の兩親にも一生懸命に詫びをして、愈よ眞人間になつたのである。

『何時天子樣がお通りになつても差障ない線路を作らうぜ』

その眞實の言葉は、この野間君の口から迸り出たのである。

彼は今や、汚い殻を脱ぎ捨てゝ、模範保線區に働く人々の先頭に立つて、腹の底から立派な工夫になつてゐるのである。

『私の部下は、皆立派な男揃ひです。けれど、一際目立つのはこの野間君です。私は孝女雪子を思ひ、再生した野間君を思ふ

時、實に立派な一冊の修養書を讀むの感があります。』

四竈君はから賞讃した。然り、一個の美しい光明は、萬人を照らさずにはゐない。再生した野間君は、今後、更に多くの人人に尊い教訓を與へ、人々の心を善導する事であらう。大邱保線區が模範線路として、第一等賞を得たのは或は、小さい事かも知れない。

澁澤家の家訓



第一則　處世接物の綱領

一、常に愛國忠君の意を厚うして、公に奉ずることを疎外す可からず。

一、言、忠信を主とし、行、篤敬を重んじ、事を處し人に接するには必ずその意を誠にす可し。

一、益友を近づけ、損友を遠ざけ、苟も己れに諂ふ者を友とす可からず。

一、人に接するには必ず敬意を主とすべし。宴樂遊興の時と雖も、敬禮を失ふことある可からず。

一、凡そ一事を爲し一物に接するにも、必ず滿身の精神を以てすべし。瑣事たりとても之を苟且に附す可からず。

一、富貴に驕る可からず、貧賤を患ふ可からず、唯た知識を磨き德行を修めて、眞誠の幸福を期す可し。

一、口舌は禍福の因つて生ずる所の門なり。故に片言隻語と雖も、必ず之を妄りにす可らず。

第二則　修身齊家の要旨

一、父母は慈にして能く其の子弟を教へ、子弟は孝にして能く其の父母に事へ、夫は唱へ、婦は隨つて、各其の天職を盡すべし。

一、能く長幼の序を守り、互ひに愛敬して敢て憎嫉紛爭の事ある可らず。

一、勤と儉とは創業の良圖、守成の基礎たり。常に之を守りて苟も驕り且つ怠ることある可らず。

一、凡そ業務は正經のものを選みて之に就く可し、苟も投機の業又は道德上賤む可き務に從事す可らず。

一、凡そ事を起すには、先づ其の始めを愼み既に之に處しては勉めて忍耐恒久の念を厚うし、猥りに之を變更し又は之を放却す可らず。

一、慈善は人の貴ぶべき所のものなり。故に緣戚故舊の貧困なる者は、勉めて之を救恤すべし。唯々その方法を鑑みて、之をして獨立自活の念を失はしむ可らず。

一、家僕婢奴は篤實なるものを選む可し。寧ろ魯鈍なるも薄佞辯なる者を使用す可らず。

一、家僕婢を遇するには、能く之を愛憐撫恤して、中心奉公の念を厚うせしむ可し、然れども恩愛に狎れて僭上怠慢の心を生ぜしむ可らず。

一、凡て同族なるものは、同族會議に於て決議したる事項は瑣事なりとも必ず之に違背すべからず。同族に關すると一身に關するとを問はず、事の重大なるものは必ず同族會議に於て決議の後之を行ふ可し。

一、毎年一月の同族會議に於て、家法朗讀式を行ふに際し同族中知識德行ある年長者、この家訓を朗讀し、更らに之を講演して同族は必ず之を尊守する事を誓ふ可し。



阿彌陀樣とお二人

内田清一

颼々と木枯の吹き荒ぶ二月の夜の八時すぎである。我が佛教界に生佛と仰がれ、又斯界第一の雄辯家と稱せられた前田慧雲博士は、牛込見附の停留場で電車を乗り捨てると、やがて、その前に客待して居る俥夫を呼び、牛込矢來町までと命じて、車上の人となつた。

その夜は寒さが殊の外に酷しく、大地は既に凍てついてゐた。俥がかの勾配の急な神樂坂へ懸ると、車輪は凍てた道路を後に辷つて、引上げる俥夫の苦しさは白い吐息の慌しいのでもそれと知られた。

車上でこの容子を見てとつた博士は、如何にも氣の毒におもつて、

『大層苦しさうだね、此處らで下車て歩きませう……』

と云ふと、俥夫は、之を謝して、

『何！ 大丈夫でございます』

俥夫は喘ぎながらとうとう頂上の平坦な道まで登り切つた。そして轅棒を平にして一息入れると、彼は徐ろに話し出した。

『旦那樣、先刻は御親切によう仰つて下さ



いました。旦那樣、あの坂は急ではございますが、私は平常、阿彌陀樣と二人連で仕事をして居ますので、餘所眼には苦しさうに見えましても、私にとつては決して苦しくはございません。旦那樣、この御國ほど良い處がございませうか、上には天子樣が御座らして、私達下々の者まで安樂にして下され、また阿彌陀樣と云ふ有難い佛樣が至らぬ處をお助け下さいますからね。旦那樣はどういふ御宗旨か存じませんが、私達は家内一同この阿彌陀樣にお縋り申して居ります。わけて私の樣に外へ出て稼ぐ者には、どんな辛い時でも、私はこの佛樣と御一緒に働いてゐるのだと思ひますと樂々した氣持になつて仕事が出來ます。これがほんとの御利益で、これ位有難い事はないと存じて居ります。先刻のあの坂でも、旦那樣の御覽になつた程、私は一向に苦しくもなく樂な氣持でございました……』

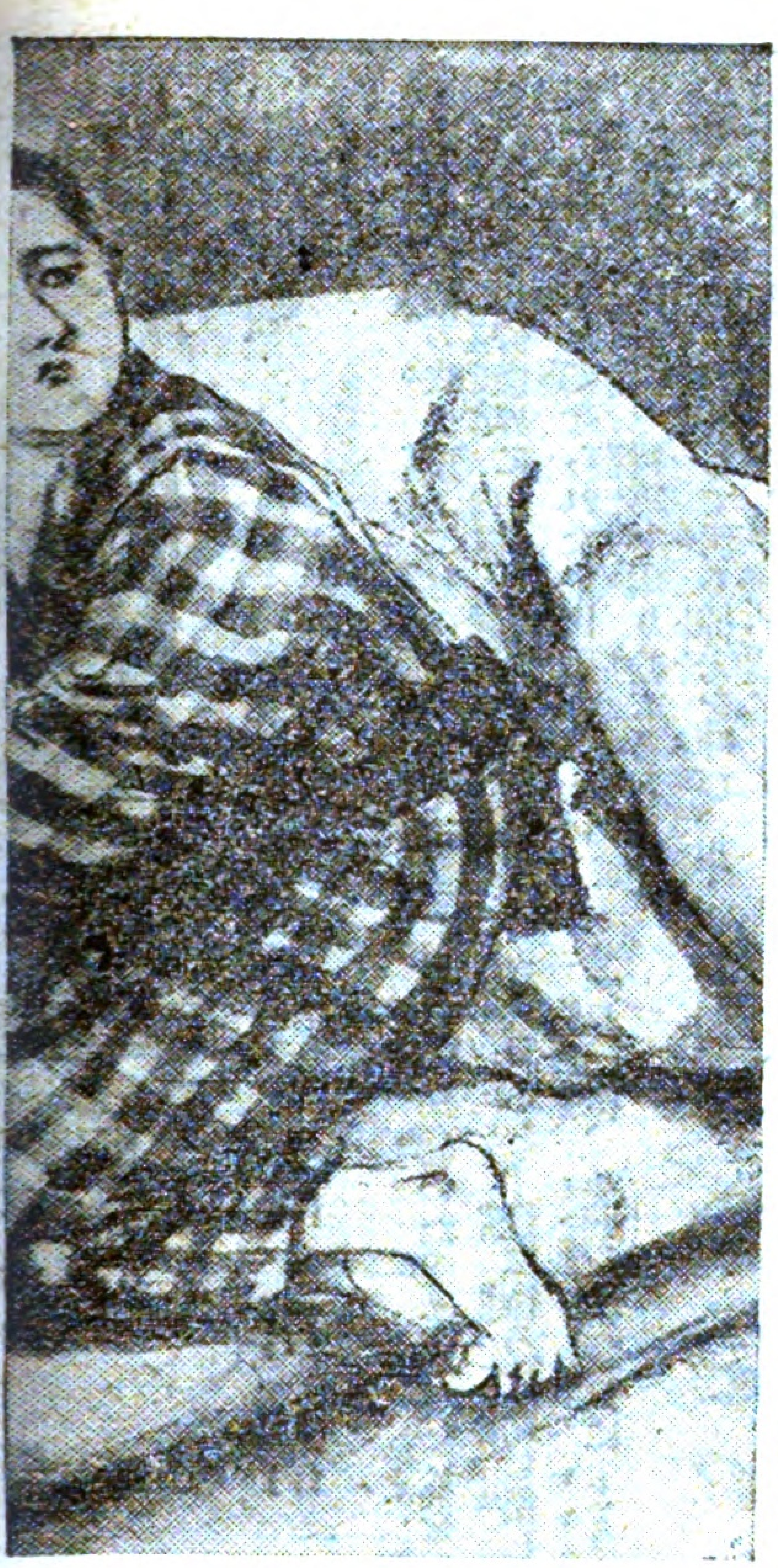
と云つては、口の中で念佛して居るのであつた。

車上にあつてこれを聞いた博士は、この俥夫の純信に感激してさすがに返す言葉もなく、たゞ落涙合掌、更に俥夫のために祈るのであつた。そしてそれ以來、博士は説教の都度、この俥夫の話をしたが、聽衆は誰一人感動せぬ者はなかつた。



愛の勝利 疑問の使者

鹿島孝二
林唯一畫



ある眞夜中の事だつた。信一は隣に寢てゐる父の激しい呻き聲で、ふつと目をさました。少年ながらも親思ひの信一は、びつくりして跳ね起きて見ると、父は齒を食ひしばり、ウンウン唸りながら、床の上を轉げまはつてゐる。
『お父さん、どうしたんです』

信一は思はず父の體に縋りついた。父の體はまるで火のやうに熱かつた。寢衣もじツとりと汗にぬれてゐる。
『お父さん、しつかりして下さいよ！　どこか痛むんですか』
信一はもうおろ〳〵聲である。
『胃だ、胃だ、胃痙攣だ』
苦しい息の下から、父がやつと應へた。
『えツ、胃痙攣ですつて！』
信一はぎくりと胸を衝かれた。それもその筈、つい一年前、この病氣で大事の大事の母を喪つた悲しみが、まだ信一の胸にはまざまざと殘つてゐる。信一は目の前が暗くなるやうな氣がした。
『お父さん、しつかりして下さい。胃痙攣は落ち着きさへすれば、何でもないんだつて、お醫者樣が云ひましたよ。ねえ、お父さん、しつかりして……』
父を力づけようと思つて、さう云つてゐる間に、

信一はもう悲しくなつてしまつて、思はず涙の聲を呑んで口をつぐんだ。

　この病氣は注射さへ間に合へば直ぐ癒るけれど、手遅れになると死ぬことがあると、前に醫者の云つたことを信一は覺えてゐた。



　どうしたらいゝだらう。早くお醫者さんを呼んで來て注射をしなければ、お父さんは死んでしまふかも知れない。と云つて、自分が醫者を迎へに行つたあとで、もしも父が死んでしまつたら……さう思ふと、この父をこゝに一人殘しておいて、自分が出てゆく氣にはなれなかつた。父子二人きりの淋しい家庭には、他に行つてくれる人もなし、眞夜中の事で、近所の人も來てはくれない。

『あゝどうしたらいゝだらう。早くしないと、お父さんは死んでしまふかも知れない』

　とつおいつ、信一はたゞもうおろ／＼するより外はなかつた。

　たつた一人の父、どんなに自分一人を可愛がつてくれたか知れない父、その父が今死ぬかも知れないと思ふと、信一は今はもう夢中になつて神樣にお願ひせずにはゐられなかつた。

『神樣、お願ひでございます。どうぞお父さんを助けて下さい。僕の壽命を縮めても構ひません。僕はまだ何も孝行をしてないんです。どうぞ僕がえらくなるまで生かしておいて下さい。どうぞお願ひでございます。僕はたつた一人のお父さんに孝行をして上げたいんです……』

苦しがる父の體を撫でさすりながら、信一は一生懸命に神に

祈つた。けれども父の苦痛は、些とも輕くなる樣子は見えなかつた。あの我慢強い父が、大聲をあげて轉げまはつてゐる位だから、餘程苦しいに違ひなかつた。たうとう父もたまりかねたか、

『信一、も、もうお父さんは駄目だ！』

信一の手を握りながら、ぢつと信一の顔を見上げた其眼には、涙が一杯光つてゐるのが見えた。信一はもう身も世もあられずワッと聲をあげると、ひしとばかり父に泣きついてしまつた。と、その時だつた。誰か表の戸を叩くものがある。

『今晩は、今晩は』

それは聞き馴れない男の聲だつた。が、信一は飛上るほど喜んだ。この場合、よし誰であらうと、信一には百萬の味方を得たやうな氣がしたのである。信一は飛んで行つて表の戸を開けた。

見ると、信一は驚いた。そこに立つてゐたのは、正しく醫者の太田先生ではないか。



『アッ、先生！』と云つたきり、信一には二の句がつげなかつた。

『御病人はどうしました？』

太田先生は例の深切な樣子で、さう云ひながら、信一には頓着なく、さつさと奥の間へ通ると、早速診察を始めたが、

『ほう、これは猛烈な胃痙攣だ』

さう呟くと、手早く注射の用意にかゝつた。藥がまはるにつれて、父の顔からは見る見る苦痛の色が消えてゆく。それを見ると、信一は思はず先生の前に頭をさげ、

『先生、ほんたうに有難うございました。お陰で助かりました』

さう云つて、はら〱と涙をこぼした。

『いや、もう大丈夫。早く知らせてくれたんで、大きによかつた』

これを聞くと、信一は父の事でつい忘れてゐた一つの不思議を思ひ出した。

『先生の所へお知らせしたんですつて。誰がお迎へに行つたん

でせうか』
『うん、何でもこゝの主人が胃痙攣だから、直ぐ來てくれろと云ふんでね』
『ぢやア近所の小父さんか小母さんでも行つて下すつたのか知ら。それにしても家へ聲もかけないのは變だなア』
信一にはそれが不思議でならなかつた。が、その夜は父が快くなつたので、嬉しまぎれにそのまゝ寢てしまつた。翌日、父が禮まゐりに近所を尋ねて歩いたが、
『まアさうでしたか。些とも存じませんで。それなら一寸聲をかけて下されば、私共が參りましたのに……』
皆がさう云ふばかりで、自分が行つたといふ人は一人もなかつた。それで太田先生の所の書生さんに訊いてみると、
『何でも詰襟の學生服を着た二十歳ぐらゐの鳥打帽をかぶつた人でしたよ』



と云つたが、父にも信一にもそんな人に覺えがなかつた。
『をかしいなア』
信一は父と顔を見合はせて不思議がつた。そして何だか、薄氣味の悪い妙な氣持にならずにはゐられなかつた。
その夕方、一通の手紙が屆いて、すべての謎が解かれた。宛名は只『鶴岡君』とあつて、差出人の名は書いてなかつた。
『鶴岡君、自分の名も書かない手紙を上げる無禮を許して下さい。何を秘さう、僕は昨夜君の家へ泥棒にはいつたものです。驚いてはいけません。僕がやつと君の家の座敷へ忍込んだ時、突然君のお父さんが胃痙攣を起されたのです。最初僕はしめたと思ひました。その混亂中にゆつくり仕事が出來るからです。併しそのうちに君が起きて、お父さんの介抱を始めました。僕は次の部屋からその樣子を見てゐましたが、いつか仕事のことなんか忘れてしまつたんです。君が泣きながらお父さんを介抱してゐる樣子が、實際他事とは思はれなかつたからです。僕はつい泣かされてしまつた。ほんとに君と一緒に泣いてしまつたん

です。僕にも丁度君と同じやうに、たつた一人の父が國にゐるんです。だが、僕は今まで父の事なんぞ考へたこともありません。東京へ勉強に來たのに、不良少年の仲間にはいつてしまつて、故郷の父からは金をこそせびれ、一度だつて慰めてやつたりしたことはありません。全く僕は不孝な悪人だつたのです。それが計らずも君の昨夜の美しい孝心を見せられて、夢がさめたやうな氣になりました。そして心から泣きました。さうなると、もう仕事どころではありません。そつと氣づかれぬやうに外へ出ました。そして一散に表通りの醫者へ驅けつけました。僕はどうしてもさうせずにはゐられなかつたのです。

お父さんはもう快くなられたことと思ひますが、僕は陰ながらお父さんと君の幸福を祈つてゐます。僕のやうな者が祈らずとも、君のやうな人は神樣が守らないではゐますまいが――

鶴岡君、僕はこれから故郷へ歸ります。そして君をお手本にして、僕は老いた父に孝行をします。父はどんなに喜ぶでせう、それを思ふと、僕も心が躍るやうです。

では、左樣なら。この上ともお父さんをやさしくして上げて下さい』

――をはり――

植民奇談 親ごころ

今も尚、里人によつて語り傳へらるゝ死に直面して輝いた、氣高くも尊き母性愛。

大自然の試練に耐へて先人未踏の新天地を開拓する植民者は、常に時代の先覺者のみが負擔すべき努力と危險とに高價な犧牲を支拂ふべく運命づけられてゐる。

今は昔、蝦夷地開拓の當初、奥地深く分け入つて親子睦じく開墾に從つてゐた純朴な農夫があつた。竹の柱に茅の屋根、南瓜を食ひ水を飲み、夜に日を次いで汗と泥に包まれた彼等ではあつたが、それは却つて夫婦、親子の愛の絆を彌が上にも强くして、夕陽山の端に沈み、黄昏の色增す頃、三分心の洋燈の下、煮物する榾火に集うては一家團欒に幸福な人生は續けられてゐた。

夫の留守な或る日の夕方であつた。戸外に誰か近づいた樣な足音。坊やは爐傍に猫を抱いてゐる。夫の歸りと思つた彼女は『御苦勞樣』とやさしく立ち上つた。

其の時だつた。あらうことかあるまいことか、雨戸は激しい一撃にメリ〳〵ッと破れ飛んだ。

ハッ！と立止つた彼女の前に現れたのは、熊！巨熊！

戰慄と恐怖に立ちすくみ、混亂に陷らんとした頭に、吾兒の危險を電光の樣に直覺した彼女は、身の安全を計る前に吾兒の無事を考へた。否、自ら犧牲となつて兒を救はんとした。

『坊や！熊だ!! 早く俵の中へ!!!』

血に飢ゑた巨熊は猛然として襲ひかゝつた。彼女は引き倒された。坊やは空俵の中へ。

アッ！巨熊の爪は彼女の頰に。鮮血はサッ！とほとばしつた。

『坊や、出ちやいけないよ。お母樣の樣に食はれてしまふから』

半ば失神した彼女の唇からもれた最後の言葉。

限りなき愛と慈みをこめし尊き血潮に埋つた母親に取り縋つて泣き沈む坊やの健在は心置きなく彼女を天國への旅につかせた事であらう。（小平元次）

戰場佳話　西洋の鳥居強右衛門

首度岳風

『呀! 白旗を振つてる! 全隊止まれ』

特別の命令を受けたギアコニ曹長の一隊が前進を續けてゐると、前方の森で數人の獨兵が、しきりに白旗を振つてゐる。

『また投降兵だらう、うるさいが仕方がない、俺れが今談判してくるから、若し怪しい素振りでも見えたら、構はぬからブッ放せ』

と命じて置いて、曹長は單身談判に出かけた。曹長が投降獨兵に近づいた時、

『貴樣は捕虜だぞッ。』

と、突然拙い佛蘭西語でどなつた者がある。

意外に驚いて後を振り向くとこれはしたり木影から數名の獨兵がパラ〳〵現れて有無を言はさず曹長を引きたふした。多勢に無勢曹長は無念の齒がみをしながらたうとう敵將の前へ引き出されることになつた。

『もうジタバタしたつて駄目だぞ、生かさうと殺さうと俺の勝手だ。どうだい、物は相談だが、もし今夜吾々を貴樣の隊のゐる所まで案內すれば許してやる。いやなら即座に銃殺するぞッ!』

『馬鹿ッ。俺はフランス人だぞ。死んだつてそんなことが出來るものか。銃殺結構。』

と言ひ放つてギアコニ曹長はハッタと相手をにらみつけた。……がすぐ何を考へたか態度を改め、

『いや、前言は取り消します。命にはかへられぬ。御命令に服從しませう。』

『ハッハッハッ……好し、前言を取り消すなら許してやる。恐怖が貴樣を賢明にしたやうだ。ぢや案內せい。』

銃劍を握つた兵卒に護られて、ギアコニ曹長は一隊の先頭に立つて步まされた。

その夜は月が無かつた。暗に乘じて、百餘の獨兵は、一擧佛軍の虛を衝いて、塹壕を奪



から百メートルばかりの所まで來た。

『オイ、もう近くなつたらう。』

『すぐ其所です。あの黒く見えてゐるのがさうです。』と曹長は沈痛な聲で答へた。

前方に人のけはいを感じた佛軍は直ぐさま火蓋を切らうとした。『獨兵に違ひない、謀られたギアコニ曹長の仇討、思ひ知れ』とばかりまさに引金を引かうとした時、獨軍の將校は大聲に叫んだ。

『君、君、イギリス兵だ、イギリス兵だ。』

佛軍は一寸躊躇した。味方打ちは出來ない、危機正に一髮、此の時早く

『打てッ! 獨逸兵だ打て!』

暗を破る大喝、正しくギアコニ曹長の聲だ。

事破れたと見て獨兵がギアコニ曹長を銃劍で突き刺さうとした時、佛軍は一齊に火蓋を切つた、前列の獨兵は算を亂して斃れた。ギアコニ曹長は早くも地上に伏して一髮の間に生を勝ち得た。(了)



神經衰弱・老衰・病弱・生殖不能等の……根本的藥療法遂ひに發見さる

御困りの方には何よりの御知らせ

織田華光

人生の最大不幸

病氣と云へば、何病と雖も、不幸ならぬものはないが、特に今や世界各國共通の、一大流行病となりつゝある神經衰弱、生殖器障害ヒステリー程、悲慘なものはありません。精力は衰へ、思考力は鈍り、執務、勉強、作業等、凡て頭腦、神經を使ふ仕事には、堪へられぬやうになり、遂には人間の總ての快樂を奪れてしまふのであります。

此の恐るべき神經衰弱の眞原因は、永らくの間、專門醫師にも不明で、只神經衰弱とのみ申して來ましたが、英國の大生理學者、スターリング氏に依り發見、立證された「ホルモン」の學説に依り、果然、此の不可解の謎は解かれたのであります。

ホルモンとは何?

ホルモンとは覺醒素とか、刺戟素とかいふ意味のもので、人間にしても、他の動物にあつても、身神發育維持のため、實に必要缺くべからざる要素であります。ホルモンは男子は睾丸、女子は卵巢、男女兩性とも腦下垂體松果腺、甲狀腺等と共にある、それぞれのホルモン腺から、絶えず産出する分泌液で、其の作用は、精神、肉體兩方面の發達を促し、消極的には、體内の有害物を破壊し、積極的には、身神の生育、保健につくすもので、各種ホルモンは、常に圓滿な調和を保つて行くと云ふ事が、最も必要な條件であります。

若し、いづれかのホルモンが、僅かでも調和を亂したり、過不足を來したならば、それが即ち疾病を起す、根強い原因となると申します。就中神經衰弱、ヒステリー、生殖器障害の眞原因は、實に、男女生殖ホルモン腺、即ち睾丸及卵巢の、ホルモン産出不完全や、濫費消耗のためであります。

ホルモンの重大作用

即ち各種ホルモンの豐富なる内分泌が行はれて居れば、疾病は決して、身神に宿れないのみか、清き美しき血液が不斷に胸に高鳴り、幸福な人生が展開するといふ、身神ともに、一生立派な男子であり、また美しく優しき女子であり得るといふ、思ひ切つて働けもする、愉快に暮せる、豐かなる性の幸福も與へられる、容貌が活氣を帶びて來る、眼精が活々と輝く、頭腦が非常によくなる、氣分に落付が出來る、血行が整つて來て手足の冷えるといふことがなくなるといふ。熟睡が出

來る、年老いても、白髮が增さず、頭髮が脫けず、皺襞がよらず、食慾が衰へず、一生をば常に、青春の光の中に生きることが出來る、實にホルモンは望しいものである。

危險賣藥に迷ふな

此のホルモンが發見されて以來、各國の醫學、藥學の關係者達は、先を爭つて、下等動物の牛とか、羊等の睾丸や卵巢から、各種ホルモンの精分と思ふ部分を集め、丸藥に錠劑に或は注射藥とし、殊に昨今神經衰弱、ヒステリー、生殖不能の特効劑と稱し、盛に誇大な廣告をし、發賣中の藥劑も、實に不親切極るもので、服用すればする程、習慣性になる危險な催眠劑を用ひたり、一時的刺戟や興奮劑を用ひ、さも効果あるもの丶如く素人目を瞞着せんとするもの、効力少くして、胃腸障害の副作用を有するもの等です。然も之等の不正品に限り價格は驚くべき高價であります。斯樣な程度の、不眞面目の藥劑に、貴重な錢を捨てる位なら、安價にして、かつ容易に手に入る、生葱を一日三四本、常食とした方が遙に有効です。安眠も出來、輕い神經衰弱や生殖不能位は全治致します。

根本的療法の新發見

しかるに、重症の神經衰弱やヒステリー、生殖器障害の根本療法は、實に困難なもので全治したやうでも、時々再發し、遂には慢性となるのでありますが、今回新發見された「精壯」は之等の諸症に、的確に効果を與へ從來發賣中の諸藥劑とは、根本的に違ふのでありますから、如何なる重症者も、數日の服用で、かならず、成程と頷かされませう。「精壯」は吾々體内にある、彼の各種ホルモン腺を蘇ひ、その機能を活潑にし、總ての內分泌をば盛大ならしめ、圓滿に完全なる調和を遂げさす、最も合理的の藥劑で、慢性の神經衰弱症が十數日の服用で全快した實例や、あらゆる治療を試み効なかりし、頑强の生殖不能症が、僅か日數の服用で回復した實例、其の他ヒステリー、陰萎、早漏、夢精、不感症、老衰、極度の貧血等が、短日でよくなつた實驗感謝狀も實に澤山御座いますが、極最近の例一二を揭げれば

「精壯」に後半生を救はれた

東京市外大森町山王下　渡邊敏殿

私は十年來の慢性神經衰弱と生殖器障害で、その上に實にひどい便秘で永らく不愉快な日を送つて來ました。その間には醫者數名より治療を受けトツカピン、スペルミン、スペルマチンとあらゆる藥も服用しましたが、私には更に效きませんでした。郊外生活でもしたらと現住所へ移轉したのでしたが、之もだめでした。ところが昨春友人からすゝめられ精壯を試みましたら二日目の朝から數年來且つて見ない自然の心持のよい便通があり、それからは每朝同じ時刻に通じがある樣になり、五日目頃からは又何とも云へぬ自然の睡眠が出來頭が非常に輕くなり二瓶目に手を付ける頃は爽快なまるで生れ變つた氣分になる事が出來ました。全く精壯の御蔭で藥病から救はれました。只今では生殖器障害も全く治り幸福な日を送つて居ります。

記憶力增進の妙藥なり

讀賣新聞社記者　小中村淸象殿

私は幼少の頃は記憶力の好い方でしたが、二十歲の頃から惡くなり始め昨今は非常に惡く困つて居りましたが、精壯を服用し始めて未だ永くはないが非常に具合がよく、且つ驚いたのは二晩位徹夜しても殆ど疲勞を感じない事です。實に偉大な效果のある藥劑です。

◇頭腦明晰氣分晴々となる

三越呉服店編輯長 須藤鐘一殿

毎年春になりますと頭が重いのが常でしたが精壯を服用して居りますと、生れ變つた樣に輕くなり氣分が晴々となります。尙讀書疲れのした時の回復には特效があります。

◇氣力回復最良藥なり

海軍中佐 島谷藤一郎殿

強壯劑として精壯を服用したが、氣力の衰へた時の回復には實に妙である。病弱者の滋養強壯藥として實に申分ないと思ふ。

◇悲しかりし私の不感症も今は夢！

山本學士夫人殿

女の口から、こんなことは、まことにお恥かしいお話ではございますが、もうこゝ六七年もといふもの、まるでひどかつたので……淋しき朝夕をかこち、主人にも申譯ないことに涙ぐんで居りましたが、今はもうすつかり救はれました。喜びの言葉も出せない位に……

◇手術しないで若返つた精壯の偉力

仙臺市北四番町一〇五 高木良造殿

四十歳でもう極度の陰痿に罹り、さまざまな醫師に瞞されまして、ひどく悲觀して居りましたが、ふと「精壯」が手に入つて、それを試み始めて三週間目には、不思議にも若返つて參り永の惡夢から目覺めたやうに、實に無上の歡喜に浸ることが出來ました。

◇緻密なる設計等にも頭腦頗る明快

山口商事株式會社電氣部々長 下野秀逸殿

發電所の設計のやうな、實に緻密な仕事などになると、甚だしく頭腦を惱まされて困るものですが、幸にこの「精壯」を手に入れてからは、まるで彼の若返り藥の注射を受けた折のやうな頭腦が常に保たるので、その驚くべき效驗には舌をまいて居る次第でございます。

◇身神共に若返つた

共立印刷株式會社長 片岡鹿之助殿

藥を服用して若返らう等の考へはなかつた只近年氣候の關係等で多少身神の疲勞を感ずるので、何か適當な物はないかと一二試したが面倒でも按摩を取つた方が遙に效目があつた。ところが昨冬知人からの話で精壯を一瓶試みて驚いた。身體は暖まり頭が輕く氣分爽快となり二十日餘の服用で身神共に確に若返つた。老後の榮養劑として實に理想的と思ふ。

◇刑事件の辯護にも一向今は疲勞せず

法學士辯護士 島尾東八殿

刑事問題の非常に難しい事件等となりますると、不眠不休晝夜の別なく活動を續けなくてはならないのが、私共の職務ですから、私共の多くは神經の衰弱いたすのを始終苦にいたして居ります。然るに私は、この「精壯」の服用を始めて一週日からは、實に非常な身神の變化で、如何なる活動の後にも、疲といふことを全く知らなくなり、頭腦の明晰になつたことゝ、また根氣の強くなつたのとには、實に驚かされて居ります。以來「精壯」は、私の家庭では、常備藥といたして居ります。

以下實驗報告は紙面の都合上省略別册になつて居りますから御入用の方は御申込下さい。

尙ほ精壯は精神を過勞する人身神共に疲勞する人睡眠不足の人には此の上ない妙藥です。殊に事務家、研究家、學生、俳優、飛行家、運動家、藝妓諸士に御試用を御勸め申上げます。

此の『精壯』を御希望の方は左記代理部にて一手にお取次ぎを願つて居ります。

藥價、小瓶（六十錠入）約一週間分、金貳圓五拾錢、大瓶（百八十錠入）約三週間分、金七圓送料內地十五錢、領土五十錢、東京市本鄉區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ。

醫學博士賀川哲夫先生實驗處方

信用出來るワキガ藥完成

＝特に御困りの方々へ本社より頒布＝

ワキガに惱まされる

方々にとつての大きな脅威である時候が又又速度を早めて襲つてまゐります。すれ違ひさま鼻をつく様なワキガの悪臭こそ何物にも形容しがたい不快なものであり、何人でも面を外向けずには居られぬ厭はしいものであります。ことにそれが妙齡の婦人でもあれば如何程顏かたち美はしく整つてゐても、誇らかな衣裝をまとうてをつても、一種たとへがたい侮りと、顧みる價値さへないものとしてのさげずみを受けなければなりませぬ。

殊にわきがに惱む方々にとつての不幸、不運なことは、自ら何となく退け目となり、

未婚者も既婚者も

その運命に暗い影のさすことは、あまりに多い悲慘な實例をわたくし共は見て居るのであります。

この病症は汗の多い性質の方に多いのでありますが、烈しいのになりますと腋の下が眞紅になつて拭いても拭いても拭き切れず、見るからに氣の毒な程で御座います。

恐ろしいことには、この病症は遺傳に關係があるもので、知らず〱のあひだに、可愛いお子さんにまで及ぼす多くの事實がありますから、この症狀の方は單に身だしなみから許りでなく是非とも治しておくべきものであります。然もこのワキガの治療法としては昔からいろ〱な方法が試みられてをりますが仲々思ふやうに參らぬものでをります、又一時抑へのいろ〱撒布料とか、つけ藥もありますが、どれも捗々しくなく治り難いものばかりであつて、光線療法などや皮膚の切開術なども試みられる方もありますが、

多額の費用を要する許り

で、體質により、症狀により到底百發百中と申すわけには行きませぬ。賀川博士は多年皮膚科の專門醫として年齡や體質にかゝはらず、しかも少しの副作用のない、簡單に自家療法の出來るワキガ止めの發見に苦心せられた結果、漸く得られたのが、茲に發表いたしますワキガ止めであります。この新發見のワキガ止めは、いかに重症の惱みでも一度用ひたなら少なくとも二十日間は忘れたやうに臭氣が止まり、遂にはだん〱薄く弱くなり、常用すれば全く驚くほど滿足な結果が得られる貴重藥で、かつてない不思議な効きめをもつ新發見品であります。しかも撒布劑やクリームのやうに衣服を汚す憂ひなど更になく用ひてスグに乾き、跡をのこさず、粘り氣もなくサラ〱として普通の狀態と少しも變らないのが特長で、ほんとに我も人も厭ふこのワキガに惱む方々にとつての大きな福音と申さねばなりませぬ。このワキガ止め一つで永年の惱みが救はれ、どんな暑い季節にも氣兼ねなしに應對も外出も出來、心おきなく事務に從事する事も出來るのは幸福な事です。

賀川博士御處方のワキガ止め新劑（馴香）の驚くべき効果に就いては今更くど〱しく說明を要するまでもない事で、今日まで多數實驗者も素敵によく効くと非常に感謝されて居る丈に、一度御試用願へば必ず喜ひと御滿足を頂ける事請合で御座います。今までに色々な方法を用ひて一向に効果なく不治の病と諦らめて居らるゝ御方も、この賀川先生の（馴香）丈は一日も早く御試み下さいませ。價は一瓶二圓、送料三瓶まで內地十八錢海外五十五錢東京本鄕駒込坂下町四八大日本雄辯會代理部（振替東京六六二一九）で御取次致します。



之は案外 一字の悲喜劇

神代種亮

河豚と洋服

九州北部の某市長が、東京の親戚へ病人の見舞に出て來て、留守宅へ電報を打つた。

フクスグオクレ。

受取つた細君は一寸迷つた。主人は背廣服で行つたのだが、何かの事で禮服が入ると云ふのか。病人が案外早く癒つたので魚の河豚を欲しがるから送れと云ふのか。そこで照會の電報を打ち返して、フクかフグかを問ひ合せた。其の返事は、

フグニアラズレイフクナリ。

此れで用は達したのであつたと云ふ實話がある。其の細君が早合點をしなかつたから宜かつたのであつたが、河豚を關西では多くはフクと濁らないで呼んでゐるから、そゝつかしい婦人であつたならば、土地の名物の河豚を送つたかも知れない。此れは新聞にも出た話である。

東京つ兒は、物の端は『はじ』と必ず濁つて言つてゐるから、橋と端とは間違はないから、

このはしわたるべからず。

と云ふ制札の『はし』を端の義に解釋して、橋の眞中を渡つて通つたと云ふ笑ひ話には縁が無い。餘談であるが、夏目漱石や、芥川龍之介の小説には端の字に『はじ』と振假名が附けてある。



複合名詞や熟語などの下の語は濁るのが古い語法であるが、東京言葉には松茸を『マツタケ』四十雀を『シジフカラ』片側を『カタカハ』移替へを『ウツリカヘ』と云つたやうなのが少くない。谷崎潤一郎氏の名作『お艶殺し』は『オツヤコロシ』と濁らないで讀むのが東京式である。板鼻検校が『田毎の月』と云ふ歌の題を得て即座に、

我が心なぐさめかねつ更科や
姨捨山に照る月を見で

と詠んだと云ふのは名高い話である。此れは古歌に在る名高い歌の最後の一字に濁り點

を加へて意味を逆にして、自分の歌としたのである。更科の姨捨山に照る月を見ても何ほ我が心は慰められないと云ふのが古歌の意であるが、「見て」を「見で」とした爲に、盲人である自分は此の名所の月を見ないから心が慰まぬのだと云ふ別の意味に成つて、檢校の歌に生れ變つたのである。百人一首の中に在る、

人はいさ心も知らず古里は
花ぞ昔の香に匂ひける。

の『いさ』に濁り點を附けてない歌留多は無い位で、讀む人も其の通りであるが『いざさらば』の『いざ』では歌の意が破壊されて了ふから、作者紀貫之の靈は年々の正月を泣くであらう。『人はいさ』人はどうぢややらとある所に此の歌の情趣が顯つてゐるのである。



濁り點を笑話に作つたものには、松山助之進と云ふ浪人が夢に、

まつたぐひなきあした哉。

と云ふ句を得て之を『松比ひなき朝かな』即ち松田が上もなくめでたいと解して祝宴を開いてゐる席へ、近所の粗忽者が來合せて、

松田首なきあした哉。

と濁り點を間違へて讀んだと云ふのがある。殿樣の前で、

長閑なる枕に懸るお庭松。

と謡ふべき句を、

咽喉が鳴る。早や死にかゝる。鬼は待つ。

と歌つて不興を蒙つたと云ふ話もある。移轉の貼り紙に、

かなしやくしやかんぺゑかめいどへひつこし申候。

とあつたのを、『金杓子屋勘兵衛、龜戸へ引越し申し候』と讀まずに『悲しや櫛屋勘兵衛が冥土へ引越し申し候』と讀んで泣いたと云ふのもある。殿樣から庄屋へ、

のうぜんかづらのかはをはいでだせ。

と仰せになつたのを右筆がツの濁り點を一字上のカに打つた爲に『凌霄花の皮を剝いで出せ』が『能善が面の皮を剝いで出せ』と成るので、能善と云ふ坊主を引き出して意地めたと云ふ話もある。漢學の先生へ薩摩藷を贈つたのに對して、

いもくわんみことにけつかうなりたしやす。

と禮狀が來たのを、『藷玩味。殊に結構なり。多謝す』と讀まずして、『藷食はん。見事に穴が明り出しやす』と讀んだと云ふ穢いのも有る。

考へ物としては、舊くから、

ほととときすほととときすきす、ときすきす
まつまつわれにきかせはつこゑ

と云ふ歌がある。『ほとゝぎす、程時過ぎ、時過ぎず、先づ待つ我に、聞かせ初聲』と讀むのである。

長い珠數

本郷駒込の傳通院の横町の傳燈看板に、

コマゴメビヨウホン。

と書いたのが有る。市立駒込病院の近所であるから、之を「駒込美容院」と讀む人は少いかも知れぬ。片假名で『美容』と讀ませるつもりならばヨとウとを引着けて書き、其の他の字の間隔を平均に少し廣くする外あるまい。

昔將軍が鷹狩に出たいと思つて前日に天氣を役方へ尋ねたところ、

明日は雨降り
候天氣にて
は無御座候

と書いて答へたと云ふ作り話がある。此の文章は續け讀みにすれば「明日は、雨の降る天氣ではない」と云ふ意に成り、中で上下に切れば「明日は雨が降る。天氣ではない」と云ふ意に成るのである。

昔、靫太夫が淨瑠璃本を讀みながら朱筆を以て點を打つてる所へ、懇意な珠數屋が訪ね



名人にも似合はない』と云つて歸つた。其の後程經て、太夫から珠數屋へ註文の手紙が屆いた。

二どまはしてくびにかける珠數

と云ふのである。珠數屋は之を讀んで、寸法の長い珠數を作つて持つて行つた。太夫は之を見て、長過ぎて註文とは違ふと言ふ。珠數屋は、『二度廻して、首に掛ける』には此れだけの長さが入ると言つて承知しない。そこで太夫が『其れは讀み違へだ。二度廻し手首に掛ける珠數を註文したのだ。二度廻して首に掛ける珠數なんて、そんな物を拵へるのは珠數屋にも似合はないことだ』と笑つたところ、珠數屋は始めて文章に句切りの大切な事を悟つて、後の日の惡戯を謝[illegible]

らばボタンのやうなものでもあらうか。電報の句切りを違へて、泣いたり怒つたりしたと云ふ例には、學校へ出してる息子から、

カネオクレタノム。

と打つた電報を、父親は『金を呉れたら酒を飲む』と解して怒り、母親は『金が遲れた、毒を飲む』と解して泣いたと云ふのがある。作り話であらうが、物を書く上の心得には成る話である。山陰道の小都會での實話と聞いてゐるが、浪花節好きの人があつて、次の驛の町にゐる同好の友人へ、

コンヤナラマルアルスグコイ。

と打電した。『今夜奈良丸があるから直ぐ來い』と云ふのである。が、受取つた方では、以前に金策を頼んだ事もあつたので、『今夜なら、マル有る。直ぐ來い』と讀んで、

カネデキタアンシンセヨ。

と返電したと云ふ事であつた。

明治維新、我國が世界に向つて門戸を開いてから、西洋の文物は潮のさすやうな勢ひで流入した。之を見て最も喜ばなかつたのは神風連である。道路を歩くのに電信線の下を通らねば成らぬ時には、扇を頭上に翳した程、[illegible]

な[illegible]め、電線に觸れて熊本に入り、[illegible]た後、市中に火を放つて鎭臺を襲ひ、鎭臺司令官種田少將の官邸に亂入した。其の時に愛妾小勝が東京の兩親へ宛てて打つた電報がある。

タンナハイケナイワタシハテオヒ

此の電報は、急使に持たせて次の局から打たせた爲に、縣廳の公報よりも早く東京に着いた事と、一音信十五字の中に要を盡してゐるだけでなく其の場の光景をも眼の前に浮ばしめるのとで、全國的に有名なものと成つた。後には、

檀那はいけない私は手傷
　代りたいぞえ國の爲

と唄にまで歌はれ、電報の認め方に不慣れであつた當時の民衆には電報文句の模型とも せられたのであつた。少將横死の後、小勝は堅く其の操を謝し、長襦袢を記念に與へたのであつたが、二年經つて西南戰爭に其の巡査が討死した時にも之を肌に着けてゐたと云ふのは、此の名文電報の發信者にふさはしいロマンスである。

神風連の次に熊本城を襲つたのは薩摩健児[illegible]話がある。

ソタタンハイソウシサツマタハコオフタ。

之を東京の方ではサツマの三字が誰の眼にも飛び込むので、シの所で切つて『賊軍敗走し薩摩煙草を服す』とは何の事だらうかと判讀に苦しんだと云ふ。シを下に附けて讀めば、『賊軍敗走、自殺又は降服』と讀めて發信者の意が通ずるのであるが、漢文直譯式の文句ではあり句切りもしてないので、突嗟の場合なので讀み手を迷はせたのである。

去年の大阪新聞にあつたのは、旅先の主人へ宛てて家内の人から『娘の花子が下駄を欲し[illegible]て、

ハナコニゲタヌノム。

と電報を打つたところ、主人は之を『花子逃げた。探む』と讀んで、慌てて歸つたと云ふのであつた。この下に句切りをするか又はニをノとすれば、間違ひも起らなかつたのであらう。



老人の驚き

言葉を寫すのは文字であるから、書くにも讀むにも、心すべきである。三十年も前の事變であるが、軍艦天城の一水兵が過つて溺死したので、『溺死して死骸不明』の旨を遺族へ打電した。其の返電には、

クビワタスナラウケトリニユク。

とあつて、翌日、父なる老人が紋附袴の禮服で軍艦へ來たので艦長が會つたところ、如何

何にも謹嚴な口調で述べたのが、『誠に作か相濟まん事を致しましたさうで、何とも申譯が御座いません。死骸は渡りませんでも、せめては首だけでも頂戴する事が出來ますれば本望で御座います』と云ふ嘆願であつた。電報に依つて老人も驚いたであらうが、艦長も此の挨拶には驚いたのである。事の起りは、

ウミニオチテシスシタイワカラズ。

と打つた電報の第一字ウが、ツに讀める書き方であり、下のカもタに似た書き方であつたので、全文を『ツミに落ちて死す死體ワタラズ』と讀んだのであつた。



（當時賞め囃された小勝の錦繪）

長唄の越後獅子に、

越路潟お國名物は樣々あれど、田舍訛りの片言まじり、しらうさになる言の葉を雁の便りに屆けて欲しや。

と云ふ文句がある。此の『しらうさ』は白兎の略語であるとか、方言の何であるとか、種々の解釋が行はれてゐたのであるが、植松安氏に依つて、『しゝうた』であつたことが發見され、其れに依つて吉住小三郎氏も公けに『獅子唄』と歌つたので、放送の際にも更められてゐる。此れは最初の本に『しゝうた』とあつたのであるが、版木がだん〱磨滅して了つて、新らしい版木を彫る必要が起つた時に、其の磨滅した版で刷つた本では第二字の『ゝ』の右上側に點があつて變體假名の『ら』に讀まれ、下の第四字も『さ』の字の横一が消えたもののやうに讀まれるので、深く調べないで『しらうさ』として了つたのであると云ふ。一人の版木屋が間違へたのが元で、百年の間も、間違つたまゝ歌ひ續けられて來たのであつた。

附言。講談社の雜誌には、社の原則として、假名遣ひが標準辭書に從つて使はれ居り、文法にも、漢字の用法にも深く注意してあるのは、國民文化の上に大きな貢獻であると信ずる。雜誌報國を標榜して邁進しつゝある同社が、小さい假名一個にも熱血を罩めてゐるのは、誰人にも看取出來るであらう。大部數を刊行してゐる雜誌や新聞は其の任務の一つとして、國語愛の思想を具體的に示すべきものであらねばならぬ。

正誤――前號の『お菓子は無いのか？』に對する（有るの場合）の返事は『はい』です。

ユーモア學篇

マッチを借りる話

凡太郎

諸君は路上でマッチを借りる事ぐらゐ譯はないと考へるかも知れない。だが、時として世の中は、なか〳〵さうはいかぬものである。さて——

或晩のこと、私は葉巻に火を點けようと思つて町の角へ立ち止つたが、生憎マッチがないので、暫らくそこで待つてゐると、上品な相當の風采の人が通りかゝつた。

『もし〳〵。失禮ですがマッチをお持ち合せになりませんでせうか』

『マッチですか。ありますよ』

その人は上衣の釦を外して、チョッキのポケットへ手を突込んだ。

『一つあつたんですがね。下のポケットへ入つてゐたんだが——それとも待てよ、上かな。一寸待つて下さい。この包をこゝへ置いて、探しますからな』

『いやもう結構です。そんなにして戴いては、ほんとに』

『なに、これしきのこと、直ぐ見つけて上げますよ。確か何處かに一つあつたんだが——』と、指でポケットを探りながら、

『ですが、御覧の通り、チョッキにやありません。私は大抵……』

見てゐる中に、その人はだんだん興奮して來る。

『よござんすよもう。チョッキになけりや貴方は大抵……何、そんな事はどうでも宜しい』

『ま、ま、お待ちなさい。時計と一緒に入れたに相違ないと思ふんだが。どつちにもないと……。お待ちなさい、外套を探して見ますから』今はもう餘程焦だつてステッキを投げ出し齒をがちがち云はせて、ポケットを掻き廻し始めたのである。



『こりや乾度家の惡戯小僧の仕業だな。歸つたら酷い目に會せなけりや。あ、乾度尻のポケットです。濟みませんがもう一度私の上衣の尻を調べるまでお待ち下さい。きつと……』

私は弱つてしまつた。

『いや、もうどうぞ。そんなにお騒がせしちや濟みません。もう宜しいんです。外套をお脱ぎになる必要はありませんよ。あ、あ、まア手紙を雪の中へお投げになつたりして……あ、ポケットが破れてしまひます。どうぞ、まアさう上衣を亂暴なさらないで……いや、坊ちやんを、そんな事でお責めになるなんて……、ああどうぞ、そんなにお荷物をひどい目になさらないで下さいまし』

すると、この人、欣喜雀躍の體で、上衣の裏地の中から手を引き出し、

『ありました〳〵』と、叫びながら、

『これ〳〵』と、それを街燈の下へ持つて來た。見れば、何と、それは爪楊枝であつた。

驚破！と私は隙を狙つて、やう〳〵逃げだし、ホッと息をついたことである。



家庭セクション

また濡れたまゝでおくと、廻りの縫目の絲が弱つて底がくされます。

主婦心得草



濡れた雨傘を疊んだまゝ一晩置くと紙質が弱くなりますから、開いて陰干しにし、翌日一寸日光にあてます。餘り日にあてると紙がパリ〳〵になつて、ロクロなども痛み易いですから、水氣が乾いたらすぐ取込まねばなりません。また三日も四日も霖雨に逢つた場合は、傘をひろげて上から清水をかけ流しておかないと、黴が生えて乾いてから汚點になります。

◇

オーバー・シユースは使つた度に必ず取りはづし、中をきれいに掃除して陰干しにします。日光に乾かすことは禁物、

◇

革靴はつねに適當の温度をもたしておくことが必要で、それにはクリームを塗らねばなりませんが、惡いクリームは却つて革をわるくします。殊に梅雨期はその注意が必要です。少し値段は高くとも、クリームは上等の方が經濟です。

◇

白地物を汚れたまゝでおくと、黒くぽつぽつが出來て、この汚點は洗つてもなかなかおちません。といつて洗濯しても雨のために乾かすことが出來ないと、やはり黴が生えます。それには一度きれいに洗つて、お天氣になるまで清水につけておくのが一番です。

◇

暑くなると米に虫がつきますが、梅雨期にも虫がつきます。虫のついた米は、味が惡いばかりでなく、炊いても早く腐

上品下品
——意氣と野暮

○襟—無地は上品、絞りは意氣、

○髪—丸髷、高島田、桃割は上品、つぶし島田、銀杏返し、洗髪は意氣。

○帶—斜めに締めると意氣。

○色—赤、黄、青は下品で野暮、緑、紫、橙等の間色は上品となり意氣となる。

○線—直線は意氣、曲線は上品、例へば縞は意氣で、模樣物は上品の類。

○形—すべて正しい形は上品、圓にしても正しい圓は上品、楕圓形は下品の類。

○分量—面積では小、高低では低、太いよりは細い方、廣さでは狹、厚さでは薄いのが上品。その反對は下品となり野暮となる。例へば太いステツキよりは細い方が上品、厚着よりは薄着が意氣の類。

敗ります。一月に二回ぐらゐは米櫃をすつかり空にして、隅々の糠をきれいに拭きとり、天日に乾かすことが必要です。

◇一年を通じて物の一番腐敗しやすい時季は梅雨期です。子供のお辨當などに決して前日の殘り物を用ひてはなりません。翌朝食べるものでも、必ず前晩に一度火を入れておくことを忘れない様に、殊に赤ちゃんの牛乳にはくれぐ〵も注意がいります。

◇この季節にはよく下痢をおこしやすいものですが、腹痛があつての下痢ならば一時的のものですから、さほど心配はありませんが、腹痛なき下痢、それに熱でもあれば等閑にはなりません。たゞ少し腹工合がわるいと言ふ程度ならば、韮の味噌雜炊をたべると不思議になほります。韮は下痢によい許りでなく、鹽でもんで切傷などにつけると、血もとまり傷口もぢきに癒えます。



心配御無用

疊にインキをこぼした時

インキが疊の目に浸込まぬうちに、お湯でも水でも、澤山に流しかけます。拭いては流し〳〵二三度くり返すときれいに取れます。あわてゝマゴ〳〵してゐると、インキは遠慮なく疊に吸ひ込れます。手早くすることが肝要です。

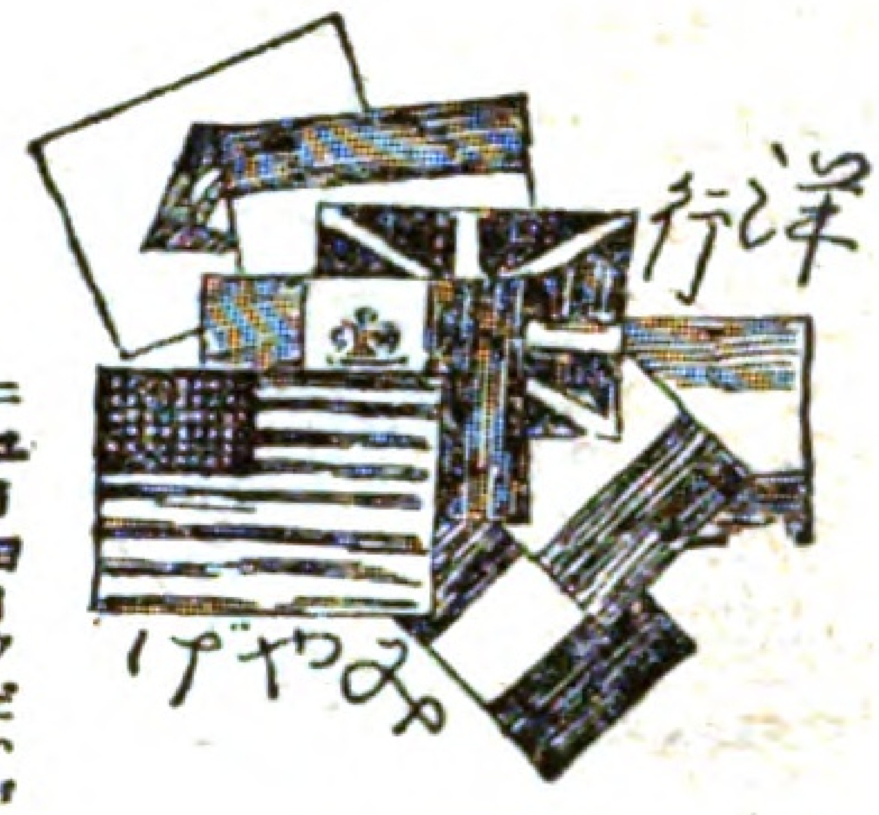
卒倒した時

腦貧血や腦充血をおこして卒倒した場合、やたらに大聲で名前をよんだり、水を吹かけたりしてはいけません。第一に帯や紐をといて胸元をゆるやかにし、靜かに仰臥させて、手足が冷えぬやう湯たんぽで暖ためます。そして葡萄酒でも口に注ぎ入れて醫者を待つことです。幼兒などが痙攣をおこした場合もこれと同じ手當をなし、なほ浣腸をすれば申分ありません。



齒の痛い時

小楊子に脱脂綿をまきつけ、丁字油か桂皮油、ホフマン液などを浸して穿洞のなかにつめこみ、頬を冷水でひやし、鹽水でうがひをすると一時いたみが凌げます。ケレオソートを使ふ人がありますが、これは唇や舌などにつくと火傷したりいたんだりしていけません。また里芋をすりおろして生紙にのべ、頬へはりつけても効目があります。但し乾いたら取代へ〳〵しなくてはなりません。



洋行土産 歐米諸國と『キング』

商工省囑託　岩崎英祐

◇紐育大學で『キング』を引張り凧

私が紐育コロムビヤ大學に於て研究中のことだ。同大學内に日本よりの留學生を中心として、日本人學友協會なるものが組織されてゐる。これは田口、桂、其他の同胞學生諸君が献身的に盡力されてゐるのであるが、その中に備付けられてある故國の雜誌類の中では、『キング』が一番早く汚されてしまふとのこと。

更に一つ、紐育は百二十五丁目の邊り、グラント將軍の墳墓に面して、ハドソン河を俯瞰する絶景の丘上に建てられたるロツクフエラー氏寄附の國際會館は、實に驚くばかり完備したものであるが、現に世界各國の七十餘民族の男女學生約五百人位を收容してゐる。その中には我が同胞學生も十五六名ばかり寄宿して、孜々として研鑽に勉めてゐる。

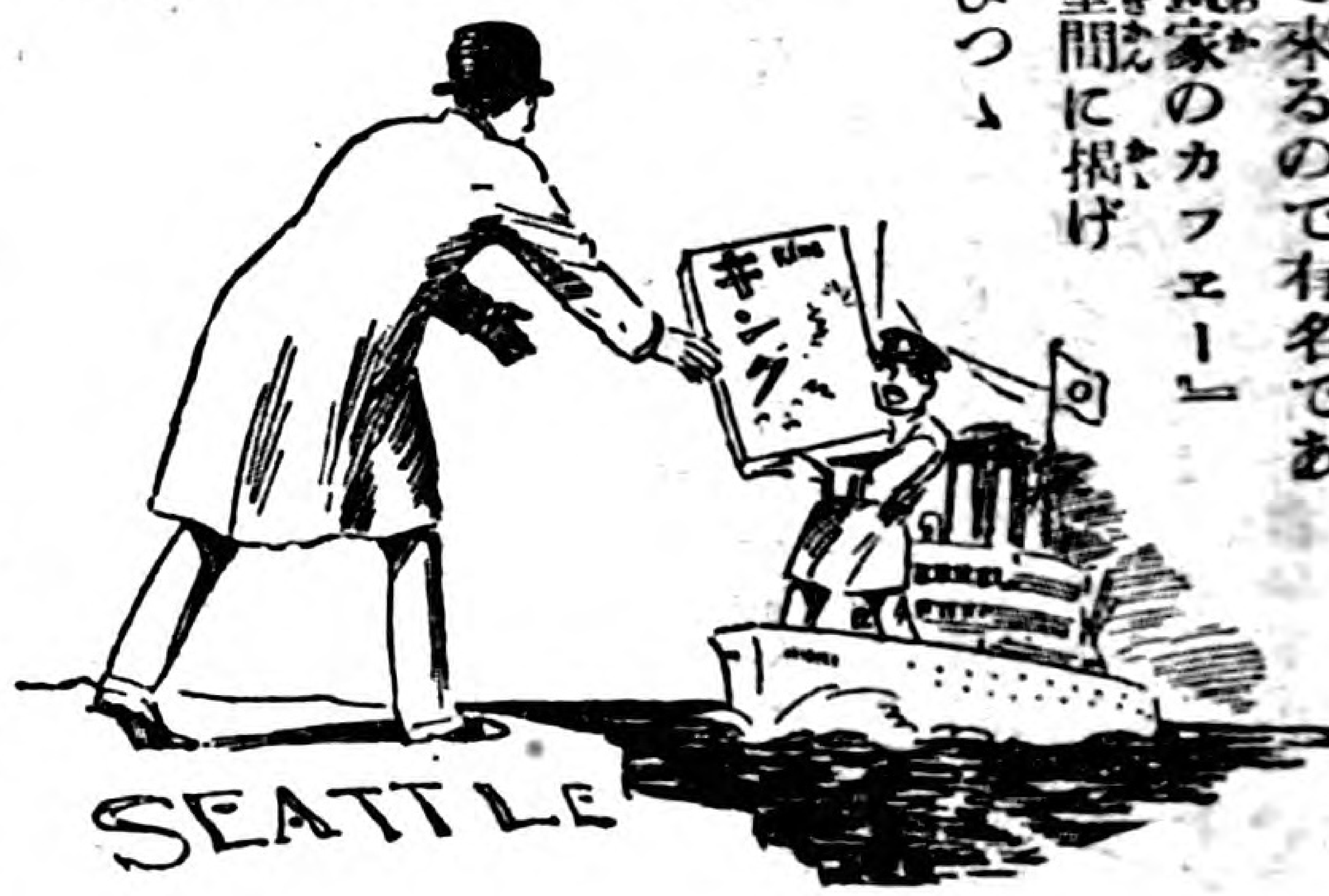
そこにはシヤトルで雜誌を經營して萬丈の氣焔を吐いた高橋清次郎君を始め早川、鐘ケ江の諸君が頑張つてをつたが、その高橋君は『キング』の愛讀者、而して紐育で一番早く『キング』を日本から取り寄せる人といふので有名であり、又大自慢である。私共は、どうしてさう早く取りよせるかと、いつも不思議に堪へなかつたが、やつと分つた。その秘訣なるものを素破ぬくと、シヤトル航路の日本船の事務長に懇意な人がゐるので、之に頼んで置くらしい。桑港航路では日程が懸り過ぎて駄目だからだ。ところが斯うした苦心の高橋君が、その苦心の甲斐もなく、いつも『キング』の初讀みをすることが出來ない、といふから面白い――『キング』が眞先に高橋君の處に着く。と知つた一味の連中は、それとばかりに早速同君の室に押し掛けてゆく。そして交代で『キング』を讀む。讀み出したら、いつ明くといふ折がない。高橋君感心してその體を眺めながら『困るなア』

◇『キング』の繪畫を批評する巴里の藝術家

巴里のモンマントルやモンパルナスは世界の歡樂郷だ。巴里氣分が横溢してゐる。

そのモンパルナスのカフエー・ロートンドやカフエー・ドーム

には、世界中の畫家が集つて來るので有名である。ロートンドの如きは『畫家のカフェー』と呼ばれ、正札附の繪畫が壁間に掲げられてをるので、酒盃を味ひつゝ畫趣に浸ることが出來る。カフェーで常設繪畫陳列場を兼ねてをると思へばよろしい。全く特殊の情調だ。そこには各國の美術雜誌が人の見るに任せてあるが、『キング』も光彩を放つて、飽くまでも日本を代表してをつた。誰れかゞ寄贈したものであらう。



私が巴里で交際つた人々の中で、藤田嗣治畫伯と併稱せられて驚くべき腕の冴を見せてゐる温厚の天才畫家木内克君などの家には、秋の夜永に巴里在留の畫家や劇評家——中には屋根裏の畫家も交つて、何時も千客萬來だが、席上こゝでも『キング』は話題に供せられる。あの表紙、あの口繪、あの材料、あの頁數でもつて、どうして僅に五十錢で賣れるかと、一同から異口同音に疑問が起される。流石に畫家連の集りだけあつて、表紙繪、挿繪、漫畫などに就ても深刻なる批評も出るが、結論としては故國の一流の畫家が總動員の上『キング』に執筆されてどうして僅に五十錢で賣れるか。むしろ不思議である。が何はともあれ、『キング』は美術雜誌としても殆ど非難の餘地がないといふにあつた。

實は『キング』の世界進出について、調べれば調べるほど驚異に値ひするものがあるので、これはたゞ同誌の記事が勝れてゐるといふばかりではあるまい、その挿繪・寫眞等の美術的方面に於ても、何等か特色がなければならぬと考へ、その方面の批評をも聞きたいと思つてゐるのであるが、こゝに圖らずも、これら專門家の所見を聞くを得て、『キング』研究に一段の深みを加へることが出來たのは愉快である。

次は値段だ。これはまた一層強力な影響を持つものでなくてはならぬ。既に上記の如く巴里畫家の間でも問題になつてゐるが、私は更にこの方面に就て、その道の專門家から切實な批評を聞くを得た。次にそれを述べる。



◇世界一の雜誌編輯長の「キング」觀

世界一の雜誌は、米國カーテス出版社より發行せらるゝサタデー・イブニング・ポストであることは餘りに有名である。週刊雜誌で三百萬冊賣れる。即ち一ケ月には千二百萬賣れる割合だ。原價は四十錢位の經費を要するのに拘らず、只の十錢で販賣するのであるから、これには何人も驚かされる。この雜誌の安く賣れる理由は——といへば他でもない、巨額の廣告收入に依つて經營せらるゝからである。



私は米國費府に滯在中、この雜誌の名編輯長ロリマー氏を訪問しては、忙しい間にいろ〳〵敎へを受けたものだ。

ロリマー氏は『ロリマーの爲にアメリカの文學が墮落する』とまで、反ロリマー氏の文士連中から惡口を云はれてをる位に、米國の文壇に對しては力強い勢力を占めてをる。全く米國の文學者でロリマー氏から睨まれたら一生浮ぶ瀨がない。何故なら、米國に於て若し『サタデー・イブニング・ポスト』に自己の製作が掲載せられないやうでは、一流の文學者と世間が認めて吳れないからだ。それ程の信用と勢力をこの雜誌が握つてをるからだ。

このロリマー氏と三回ばかり對談した場合に、彼の机の上には日本の雜誌も一二冊は置かれてあつた。『キング』も其中の一つであつた。ロリマー氏は私に對して、

『この雜誌が、僅かに日本の貨幣で五十錢、米國の金で二十五仙位で賣れるとは、餘り低廉過ぎはしないかね』

と語つて、暫くの間あの重厚な顏にも米人特有の驚愕の意を漲らせてから、重ねて『成程低廉い雜誌だ。日本でよくこれで算盤が採れますね、野間清治氏は確かに日本の巨人だ』

と言つた。世界一の雜誌の名編輯長から折紙を附けられた『キング』の編輯關係者たるもの、少々ぐらゐは鼻を高くしても、このところ誰からも苦情は出まいと思ふ。

◇獨逸政府は『キング』を通じて日本精神を探求す

何人も獨逸は復興したと申す。確かにその通りである。原因はいろ〳〵あるだらうが、その最大の原因は何と云つても軍備費の不必要なことであらう。不生產的な軍備費を移して以て產業の振興に注ぐといふのだから、復興の眼醒しいのは當然のことではあるまいか。況んや國民の勤勉、それに加へて產業合理

化の下に、專心產業立國を徹底せんとするのであるから鬼に金棒、復興しなくては寧ろ不思議な位である。

その獨逸の外務大臣は鐵腕縱橫の巨人ストレーゼマン氏だ。私が一日この巨人を訪問したところ、生憎病氣で靜養中だといふので東洋局長に面會して、四方山の談話を交換した。その時この局長は隣室のシュルツ博士を呼んで、日本の雜誌を持つて來させた。見ればそれは『キング』ではないか。局長は、

『これは貴國で一番發行部數の多い眞面目な雜誌だと評判されるので、購入して部下に讀ませてをります』

『これは政治雜誌でもなし、經濟雜誌でもありませんから、貴方方の御參考にもなりますまい』

と私は率直に述べた處、彼は明快に、

『日本の精神が掴めますので……』

日本國民よ、銘記せよ。私はこの言葉を聽いた刹那に、獨逸の復興の一日にして成らざるを知り、顧みて頭上三斗の冷水を浴びせられたるが如くにヒヤリとした。『キング』を以て『日本精神』研究の資料とする調査の精密さは、何と惊くべきものではなからうか。

之につけても、今や『キング』は日本國民に對して單によい雜誌を提供すると云ふばかりではなく、實に國際政局の一部をも擔當してゐるものであることを、キングの編輯者は一層深く自覺して貰はねばならぬ。『國民外交』の上から觀ても日本に無くてはならぬ雜誌となつたことを自覺して貰はねばならぬ。



◇南歐の都ナポリ大學『キング』を教科書に採用す

私はムツソリニーの國、イタリアにも行つた。水郷ベニス、花の都フロレンス、永遠の都ローマを巡遊してナポリに向つた。こゝは『ポンペイ最後の日』によつて有名な埋沒市街ポンペイの近くでベスビアス火山の麓に位し、風光極めて明媚なる土地である。西洋人の諺に『ナポリを見てから死ね』とある程の土地である。誰もが美しい憧れの氣分をもつてはるぐくと此處南歐の端までも巡遊するのに無理はない。

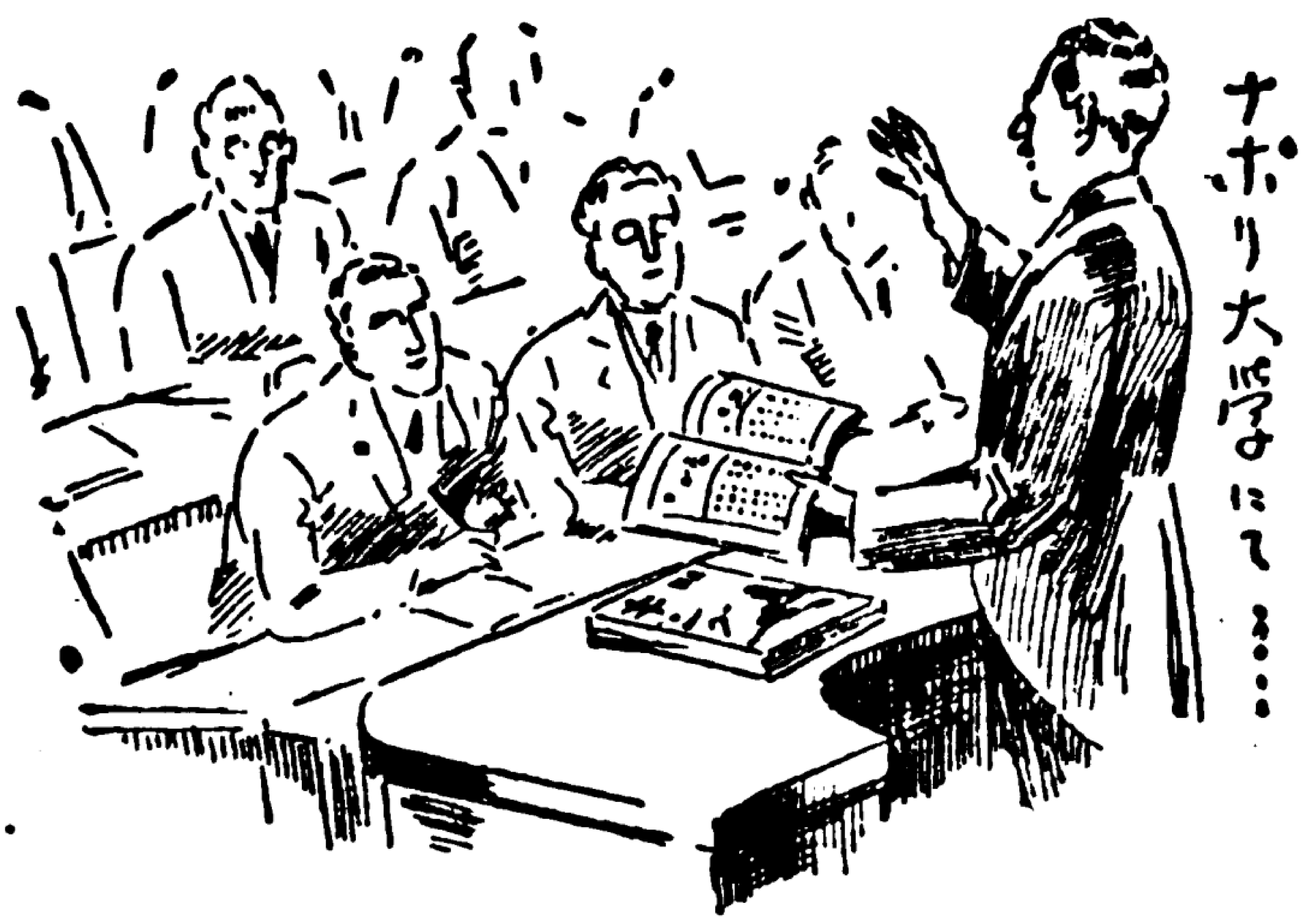
このナポリには、ポンペイ考古學で有名なるナポリ大學がある。大學には東洋語學科が置かれて、主として日本語を教授してゐる。教授は温厚な若い篤學者ヴンチャーニ氏である。私はローマの下位春吉氏の紹介で、このヴンチャーニ教授に面會した。現在大學で日本語を研究するイタリア學生は約二十名ばか

りあるさうだ。教授はいふ、

『學生の教科書として適當な日本語の書物が見付かりませんので、當分日本の國定教科書などを使つてをります。……が併し大學生に八九才の小學生の本では興味が湧かない。そこで試みに「キング」を副讀本として採用して見ましたが、編輯の丁寧なのと內容が堅實で而も面白いので學生は大喜びです』

之を聽いて私の心地は覺えず躍つた。

顧みれば日本も偉くなつたものだ。數千哩の彼方、南歐イタリアに於て日本語の『ア・イ・ウ・エ・オ』や『いろは』の初步より學ぶ學生があるとは、なんと心强いことではないか。この日本語教授の裏面には、日伊兩國の親善の爲に一身を犧牲に供してをられる下位氏のやうな國士の涙ぐましい努力を忘れる譯にはゆかぬ。今後日本の國力の發展に從つて、日本語と雖も追々と世界に普及されよう。日本人としても普及させねばならぬ。さうしてその使命を『キング』が負ふといふのも面白いことだ。



それに就いても飽くまで努力が必要だ。『キング』が其一例である。努力すれば『キング』の如くに、求めずして世界の隅々にまで勢力を延ばすことが出來る。古人曰く『德、孤ならず、必ず隣あり』と。要はその德である、努力である。

日本に於ける『キング』の勢力は、私も略ゝ知つてゐた。併しそれの歐米先進國への進出が、まさかに斯くの如くあらうとは、實のところ思ひもよらなかつた。今やその實狀を調査するに及んで、私は驚歎を禁じ得ないことを告白する。

『キング』の進出は、卽ち日本文化の進出である。日本國民精神の展開である。或一部を除くの外、久しく埋沒されてゐた日本文化が、久しく閑却されてゐた日本國民精神が、今や堂々として世界の舞臺に乘出して、まさに重要なる一役を演出せんとするその輝かしき雄姿を『キング』は表徵するものであらねばならぬ。たゞに『キング』の爲に喜ぶのみではない。

自ら國民雜誌を以て任ずる『キング』は、事實、世界の識者によつて、日本の國民雜誌たるの評價を確められた。『キング』たるもの、益ゝ自重して、眞に自重自愛されんことを切望する。私がこれを言ふ所以のものは『キング』に喜ばれん爲めではない。日本文化の爲に、日本國民精神の爲に、その昂揚を期待するからである。

◇人皆事を行ふに當りて難事を擔荷せらるゝは喜ぶべきことなり　アレキサンダー

少年倶樂部は、日本の少年諸君をよくし度いといふ大信念のもとに出してゐる雜誌です

少年倶樂部は、少年に力を與へます。あなたの御子弟を立派に育て上げようと思召でしたら、是非この少年倶樂部を與へらるゝ樣おすゝめします。

『學校では教科書、家庭では少年倶樂部』とまで云はれてゐます。少しの不安も無く、絶對の信頼をおく事の出來る少年雜誌が、日本にある事は頼母しいことです。

―記者―

少年倶樂部愛讀者の宣誓

一、皇室を尊び、御國を愛します。
一、父母を大切に、兄弟仲よくします。
一、先生を敬ひ、目上の教に從ひます。
一、友達には誠を盡し、互に勵み合ひます。
一、すべての人に親切、動植物をいたはります。
一、偉人の徳を慕ひ、撓まず修養に努めます。
一、博く學び深く考へ、知識を豐にします。
一、言葉も行も正直に、男らしくします。
一、いつも快活、身體を丈夫に鍛へます。
一、元氣一ぱい、勇んで困難に當ります。

落語漫畫

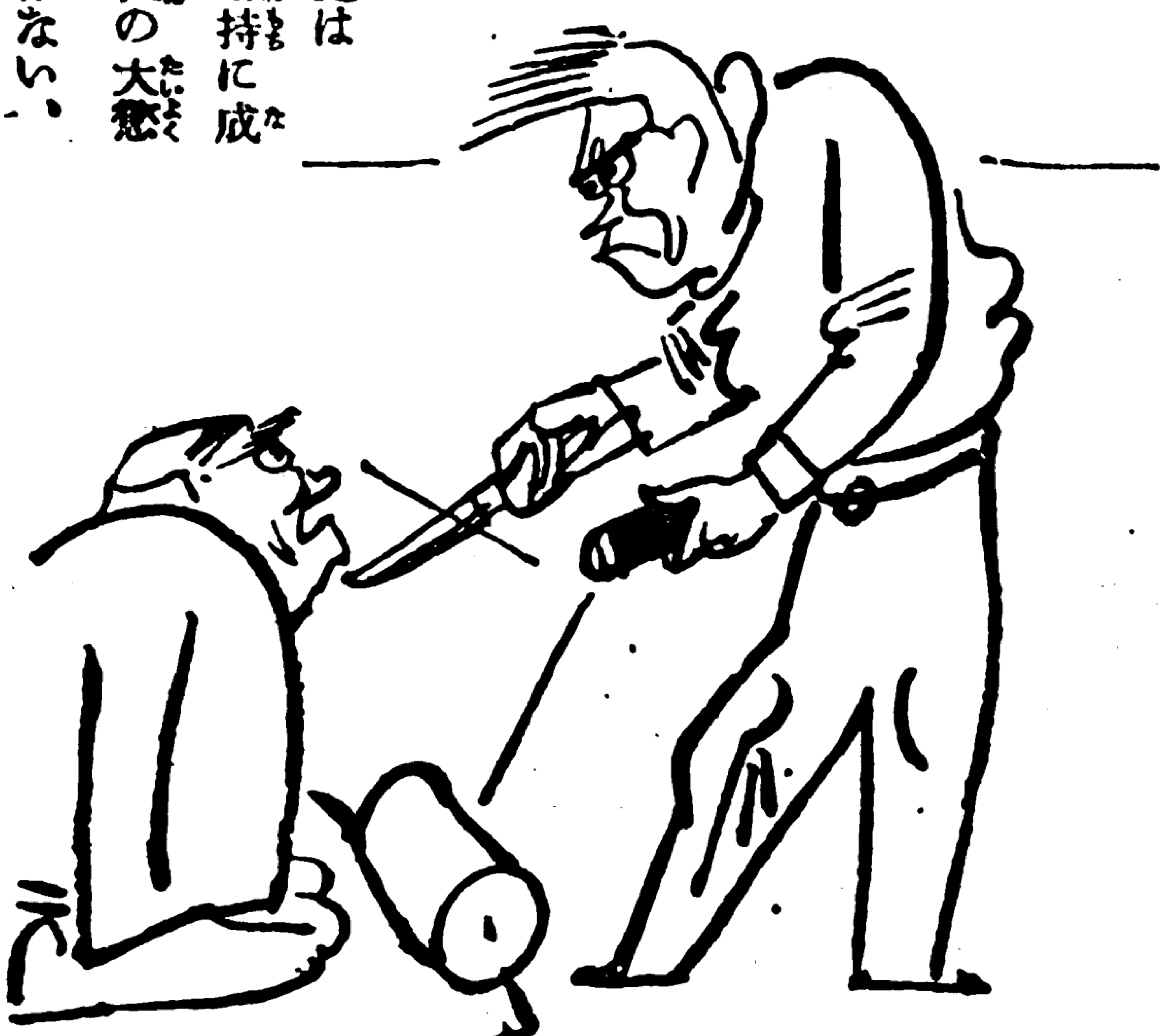
無慾は大慾

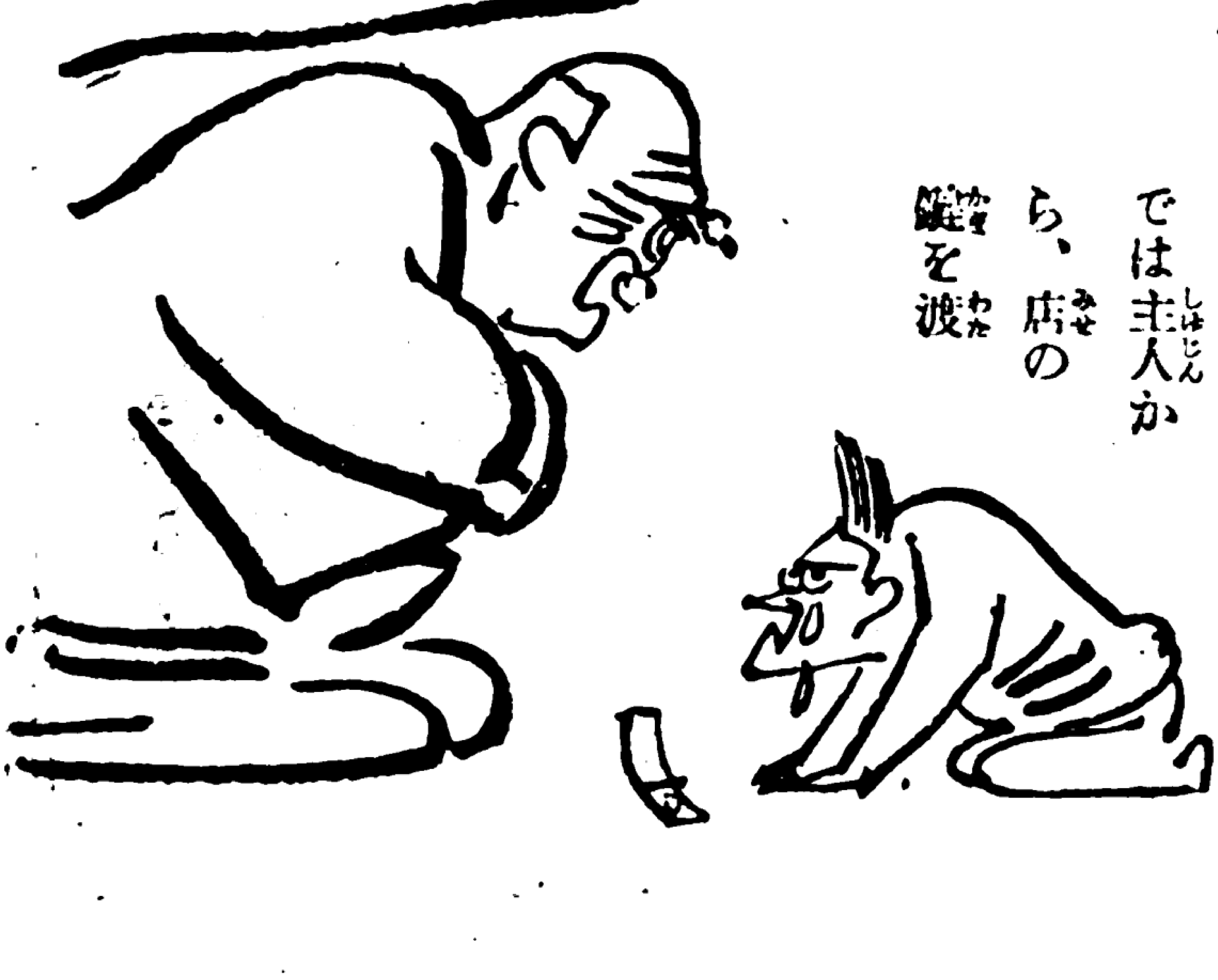
池部鈞　作並畫

或晩尾張屋へ一人の强盗が入つて、型の如く凄い文句を並べ、金を出せと主人を、おどかした。

主人の久兵衞さんは、苦勞人で譯の分つた人、

『アー宜ろしい金が欲しければ百でも二百でも宜いだけあげるが然し御前さんだつて、生れついての泥棒でもあるまいし人から無理に取つた金は使つても面白くあるまい、此處は一つウント働いて、自分で大金持に成る氣はないか、男と生れて其位の大慾が無くちや――、生れた甲斐がない、わしから見たら御前さんなんか、無慾過ぎて、馬鹿正直で氣の毒だ、オイ若いの働く氣があるなら、わしが世話してやるよ』





泥的スッカリ恐れ入り、涙をこぼして、謝し、改めて、店員に使つて貰ふ事に成つた。

此泥公、とてもよく働き、五年間夢と過ぎ、今日では主人から、店の鍵を渡

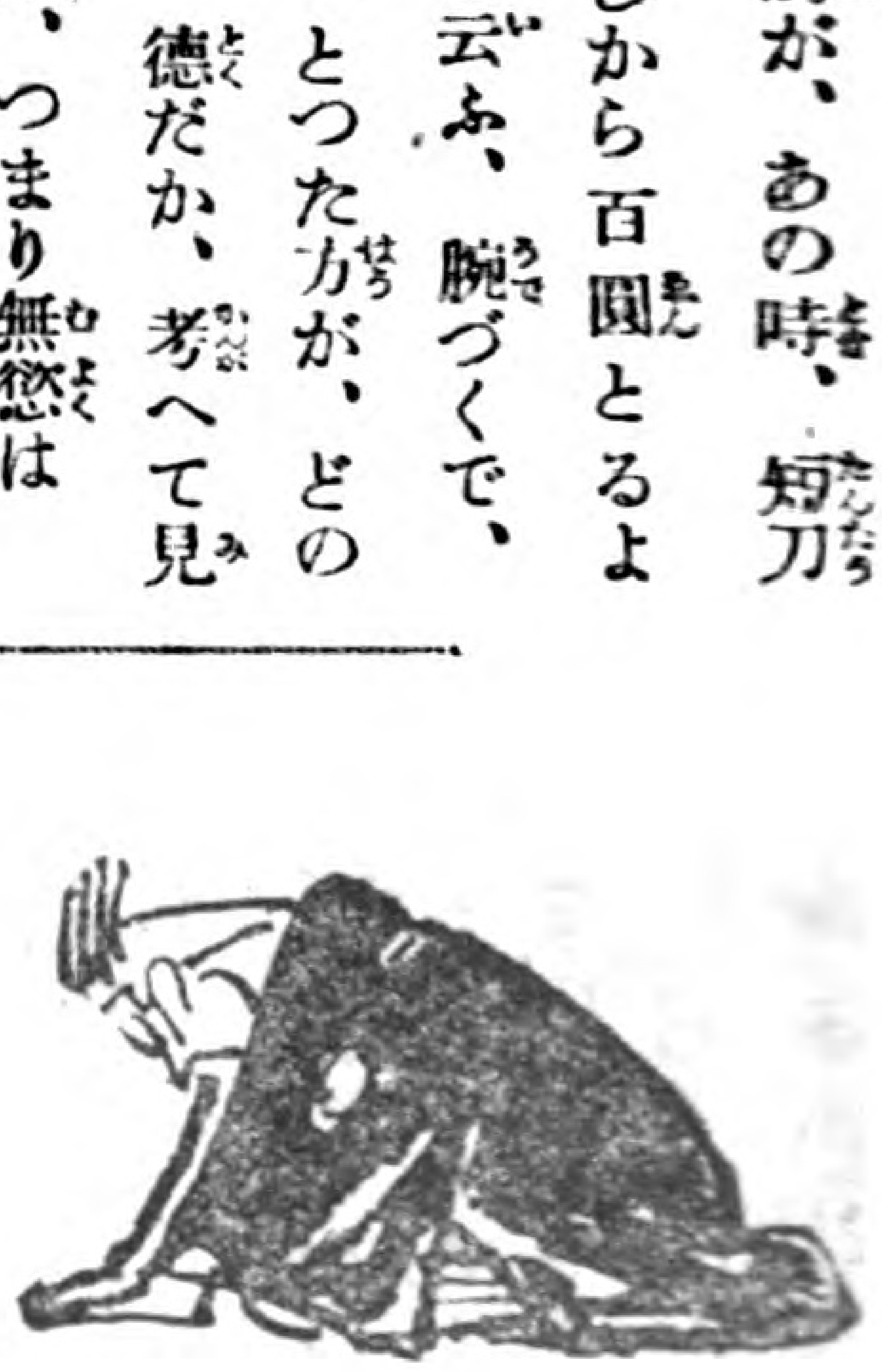
されスッカリ白鼠となつてしまつた。

さうして、最後には、一人娘の御婿さんとなつて、十萬圓の財産ある尾張屋を繼ぐ事になつた。



主人『どうだ、お前が、あの時、短刀で、おどして、わしから百圓とるより、今日、實直、と云ふ、腕づくで、わしから、十萬圓、とつた方が、どの位、お前にとつて、徳だか、考へて見たら、直ぐ分る事だ、つまり無慾は結局大慾だ、どうか其つもりで之から、尾張屋を大きくしておくれ』

『有難う御座います、よく分りました。つきまして、此處で一時御閑を頂きたう御座います』





『閑をとつて、どうする』

『へ――もう一ぺんどつか財産の有りさうな所へ泥棒に入り改心して其處の御婿さんになり、もう十萬圓許り稼いで參りませう』（終）



今思ひ出しても顔の赤くなる話

不幸な再會

馬場夢太郎

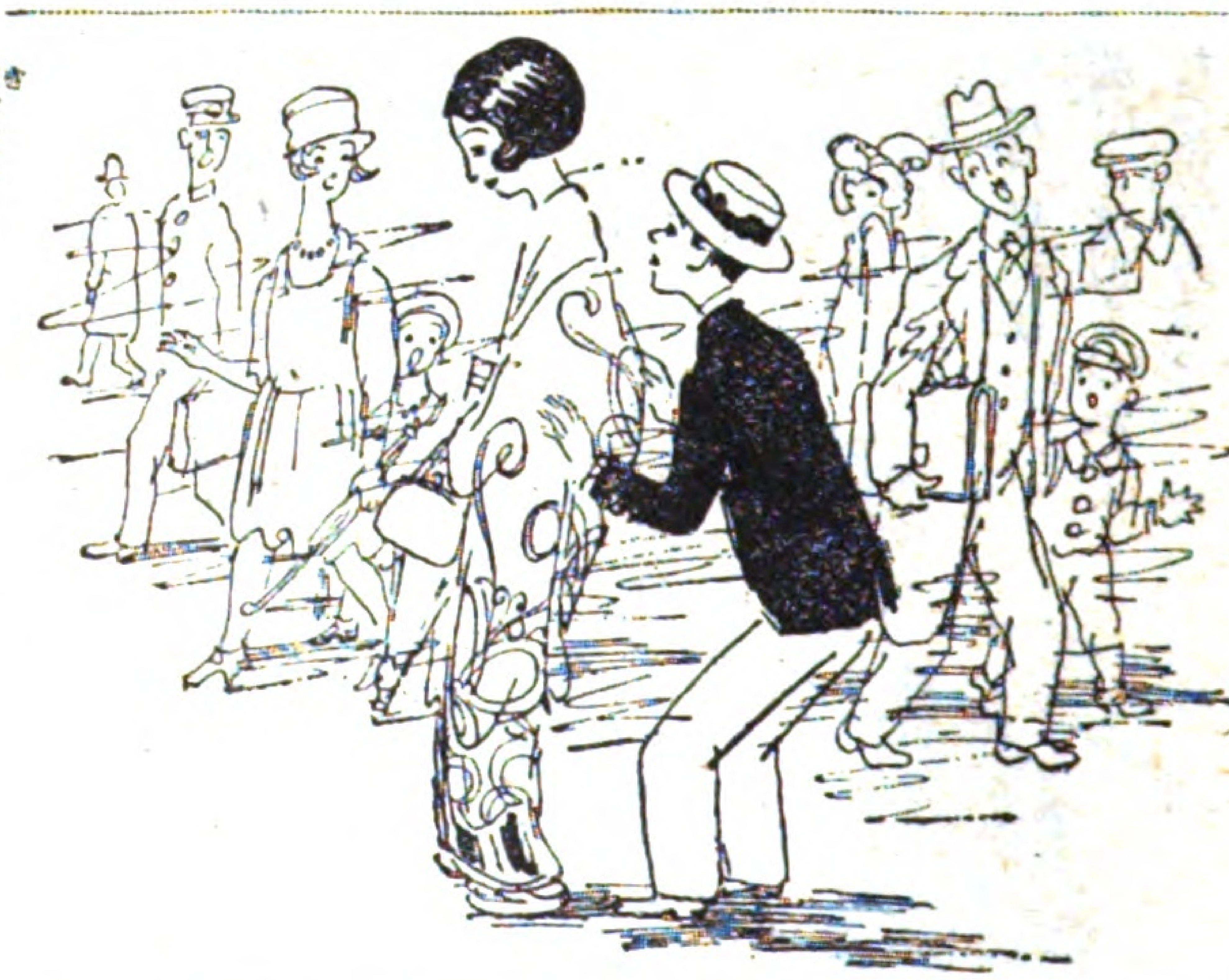
今考へてもぞつとする程恥しい。恐らく僕の生涯にあんなに赤面し續けた日は二度と來ないだらう。中學時代からの仲好しの勝山が結婚して中野に所帶を持つたと聞いて初めて訪問に出かけた日の事であつた。

新宿から中野までは七錢。窓越しに見ると、出札所の女が門の煙草屋の娘に似てゐた。七錢、窓、娘。こう並べてみると僕の頭にはバツト、グローリイてな結論が生れてくるらしい。『バツトを一つ』無意識に口から出てしまつた。『何ですつて』女が頓狂な聲をたてる。『バツトぢやあない。えゝと、中野を一枚』

大きな笑ひ聲をあとに、あわてて改札口に飛び込むと車掌の手が肩の所をぐいと押さへた。『何をするんだい』と振り向くと、『ここは出口ですからどうぞあちらへ』あたりの人が、じろ／＼見る樣できまりが悪いから、急いで馳け込む。丁度具合好く中野行きが來た所だつた。降りる人、乘る人、發車のベル、車掌の聲。あらゆる色彩があらゆる音響を伴つて、ラツシユアワの雰圍氣をかもし出す。僕は新しい毛裏のシャツを着てゐた。所が、後から、ぐい／＼押す人がある。

その度に背中がちく／＼して仕方がない。振りかへると、耳かくしに結つた若い奥さん風の女である。『押したつて駄目ですよ。前がつかへてゐるんですから』

『でも早く歸らなければならないもんですから』
女は剛情に押して來た。
『駄目です』思ひ切り押し返した時、電車が走り出した。と同時に後でキャッといふ聲が聞えた。何氣なく後を見ると、あゝ神よ！ きつと今の一押しで尻もちをついたのだらう。彼女はバッタの様にへたばつてゐる。
飛び降りをした頃彼女は、やうやく立ち上つて着物を拂つてゐる。僕は實際弱つてしまつた。一體今日はなんていやな日なんだらう。
『おけがはありませんでしたか』恐る恐る左の方から伺つて見る。女はつんとして右を向いた。
『本當に申し譯ございません』今度は右からあやまつてみる。女は冷たい顔で左へ向く。
『ついはずみだつたものですから』もう一度左へ廻つていささか辯解する。相手の首は又右へ廻轉した。僕は漫然と『犬が西向きや尾は東』つて言葉を思ひ出した。人が大勢じろ〳〵と見て通る。大方軟派の不良青年がモーションかけてる位に思つてるんだらう。僕は無暗に腹立たしくなつて來た。そこへ次の電車が



來た。
『そりやあね僕の方も惡いさ。だけど女のくせにこんだ電車に割り込むなんてのが第一圖々しいよ。あんたのお尻でころばれたら地面の方が痛いつて泣くでせうよ』
七面鳥の樣になつてる女を後に僕は好い氣持で電車に乘つた。尤も此の氣持が續いてくれれば文句はなかつたのだが。

○

『勝山寓』と書いた表札の下で一寸立ち止つた。名前は書いてないが番地にまちがひないんだから大丈夫だらう。
『ごめん下さい』聲をかけると奥さんが出て來た。
『御主人いらつしゃいますか』
『只今一寸出かけましたが。どなた樣でございませうか』
『初めてお目にかかります。僕馬場と言ふ者ですが、御主人とは學生時代から大の仲好しだつたんです。えゝ今後ともよろしく』
『私の方こそ。ではどうぞお上り下さいまし』
通されたのが二階の六疊。
『勝山君も僕も中學時代から大の腕白者でしてね。先生方の厄介者でしたがね』

『まあ左樣でございますか。主人は今ちやあとても氣むづかしやですのに』

『さうですか』さては彼、新婚早々で猫をかぶつてゐるのかな。

『それに同じ中學にいらしたにしては隨分お年がちがひますわ。あなたの方が、ずつとお若くお見えになりますのに』

少したつとおすしが出た。

『本當に失禮なものですがどうぞ御遠慮なく』

『有難うございます』

其の日は丁度下宿のおかみさんの仕打ちが氣に入らなくて、面當てに夕飯を十二杯半平げて來た後だつた。で意地にも我慢にも之以上は食べられるわけがない。

『遠慮はいやでございますわ』もう一度奥さんが繰り返した。獨身者は學生氣質が拔け切つてゐない。そしてつまらない所に意地を張りたがる。御多聞にもれず、僕も遠慮と思はれるのがくやしくて遂に食べ始める決心をした。

併し最後に一つ殘つたのが、どうしても食べられさうも無かつた。二人共話題がとぎれてしまつたので殘つたお壽司一つをにらめつこしたまゝ、二三十分坐つてゐた。

『あゝ主人が戻つた様ですわ』奥さんがいそいそと座を立つと、

『さあわたしの方は覺えはないがね』

とさび聲の人が梯子段を上つて來た。見れば勝山とは似もつかない男である。

『私は一向に覺えがありませんが馬場さんとかおつしやいましたな』

僕はおぼろ氣ながら人ちがひだと感づいた。きつと顔色位變つたかも知れない。

『こちらは勝山武夫君のお家ではないんですか』



『ははあ。その勝山さんなら五六軒先きですよ。いや名前を出しておかなかつたのがこちらの手落ですな。今までもよく手紙のまちがひはありましたが人間のまちがひは初めてですよ。あつはつは』

奥さんは袖を口にあてて座敷中を轉げ廻つてゐる。僕は穴があつたら入りたいと思つた。そして一つしか殘つてないお壽司の皿をうらめしげにみつめてゐた。

○

『今晩は』本物の勝山の格子をあけると、勝山君、自分で飛び出して來た。

『よくわかつたね』

『うん、それについちやあ大失敗だよ』

其の話をして、散々笑はれた。

「奥さんは」
『一寸お湯に行つたよ。今日は何だかプリプリしてるからそのつもりでゐてくれ給へ。實はね、今日、新宿まで用達しに出かけたんだがね、歸りの電車に乘る時に前にゐた變な男に、つき飛ばされてプラットホームに尻もちをついちやつたんだとさ。尤も、其の男ときたら生蕃みたいな顏をしてたさうだがね』勝山は一寸息をついて僕の顏を見た。
『えゝつ』僕は急に暗い谷底へ突き落された樣な氣がした。足の下でベスビヤスと富士山が一時に噴火したつて之程びつくりすまい。さては、さつきの女は勝山の奥さんだつたのかしら。
『それから其の男は米つきバツタみたいにペコ／＼とあやまつたさうだが、家内もくやしかつたから知らん顏をしてゐたんだつて。すると俄然男がゴリラみたいになつた……。おい／＼聞いてるのかい』
『うん、聞いてるよ』僕は、いとも哀れな聲を出したものだ。
『そこで、其奴の言ひ草が面白い。「お豚みたいな重たい尻で、尻もちつかれたら地面が凹むだらう」だつて。成程、言ひ得て妙だ』
僕は、餘程『地面が泣くだらう』つて、言つたんだと訂正しようと思つたがやめた。
『奥さん直き歸るかい』
『うん、もう歸るだらう』
『實は、急用を思ひ出しちやつたんだが、之で失禮するよ』
『冗談言ふな。今來たばかりぢやないか。是非家内に會つて行けよ』こつちの身になれば、會つたら百年目だ。
『會ひたい事は、その是非共なんだけど、一方に於ては、つまり……』
『何を言つてるんだい。斷然俺は歸さない』
『[illegible]るよ』
其の時だ。戸が開いて一寸ばかり、めかした奥さんが入つて來たのは。
『やあ、歸つて來たぞ』勝山はうれしさうに叫んだ。僕は絕望の聲を放つた。
『おい／＼、よく俺が話す馬場君が來てるよ』
『之が家内です』勝山は獨りでしやべる。奥さんは、僕の顏を一目見るなり、『あつ』と叫んで、手に持つてゐた石鹸箱を落した。僕はペコリと、頭を下げたまゝ身動きも出來なかつた。

〇

今は、奥さんも子持ちである。もう一軒の勝山さんにも、此の頃遊びに行く樣になつた。だが、あの日の事を思ふと、今でも、自然に、顏が赤くなる。

英國婦人の質問

寺島碩哉

私が中學五年生の時の話であります。

或日友達三人と連立つて新宿で省線電車に乘りました。丁度お晝に近い頃だつたので電車の中は大して混雜もせず、私達三人は樂々腰掛にすわることが出來ました。

電車が信濃町に來た時、英國人だと思はれる若い外國婦人が、私共の電車に乘込んで參りました。いかにも健康に惠まれてゐる光澤のある顏色、すらりとした脊丈、それに美しい服。車内の視線は一時にパッと其の婦人に注がれました。ところが其の婦人は方々に腰掛が明いてゐるのに、何と思つたのかツカ〳〵私共の方に近づいて參ります。何と云つても私共も若いもの今まで無造作に強烈なる視線を送つてゐた三人は急に目をそらして固くなつて了ひました。すると其の婦人、私と隣に座を占めて居た中年の婦人との間にある僅かな空席を見つけて、プリーズと云つて割込んで了ひました。

さあ大變だと私は少なからず狼狽して、益々固くなりました。

妙な興奮に動かされたからも氣分が落付いてくると、其の人の動作が不思議に思はれてなりません。一體どうするつもりなのかと尙よく注意して居りますと、手鞄から一通の書狀と鉛筆とを取出しました。ところが驚ろいたことには、いやそれが當然の事だつたのかも知れませんが、私の方に差出されて居ます。そして何かペラペラ言つて居ます。私は餘り、其の手廻しの速やかのに感心してゐると今度はプリーズ・プリーズと云つて何やら催促をしてゐるらしいのです。

さては何か賴みごとでもあつたのかと悟つたがもう遲い。聞き返せばいいのだが中學の先生が日頃教へられるには、『ワンス・モア』と聞き返すことは失禮に當るからと度々戒められてゐる。しかし此處で考へた。聞き返すのは失禮に當るかも知れないが、さうしなければ話が不得要領で却つて婦人に失禮になると。さう思つて



恐る恐る頭を婦人の方に向けて、貧弱な間違ひだらけの即席の英語で。『失禮ですが、貴女の申されたことを、最一度申して下さい』と言ひました。すると婦人は邊りを、はばかるやうにチラと室内を一瞥してから、一語一語、句切つてゆつくり發音して吳れました。其の間、婦人は少しも顏色を變へることなく、物柔らか

な調子で言はれるのを見て私は内心ホッとしました。

それによると手紙の表に日本字で宛名を書いて呉れといふのでした。私もさう聞いては、全く困るだらうと思つて早速書いて上げました。

ところが一番最後に言ふ言葉がどうも、わからないのです。さても私は再び狼狽し初めました。目を擧げて室内の樣子を覗ふと依然として、その視線は私と婦人との間に注がれてゐます。友人はと見ると二人共、鳴りを靜めて居ます。

私は婦人に聞えないやうに隣の友人にどういふ意味かと尋ねました。が悲しいかな、二人共一樣に頭を傾けて明答浮ばぬ由を蚊の鳴くやうな細い聲で申します。もう駄目だ、殘念乍ら匙を投げて役に立たざりしをお詫びしようとやをら態容をあらためると、友人が頻りに袖を引きます。私はもう觀念してゐるので此の期に及んで何をかなさんと考へたが、それでも一應はと思つて『何だ』と聞きますと『一寸待て。今辭書を引いて見るから』と言つたかと思ふと、その速いこと。ポケットから辭書を取り出してペラペラと繰ります。これを見た室内の人は目引き袖引きクツ〳〵笑ひ出しました。友人も私もスツカリ眞赤になつて了つて、頭がボーとして來ました。さて其の語は何んと言ふのかと、いへば『速達郵便』といふのでした。私は恥を忍んで手早く書き取ると、いと愼しやかに控へてゐる婦人にお返ししました。

お客もいた[illegible]これ[illegible]ひなりとして、物をも言はず飛び出しました。

その後から追ひかけるやうに婦人の言葉が響きました。『有難う。どうも御親切樣』

私は半ば動き出した電車の中の婦人に向つて目禮いたしました。私は今でもこれを想ひ出す度に、吾知らず、顏が赤くなるのを覺えます。

百圓紙幣

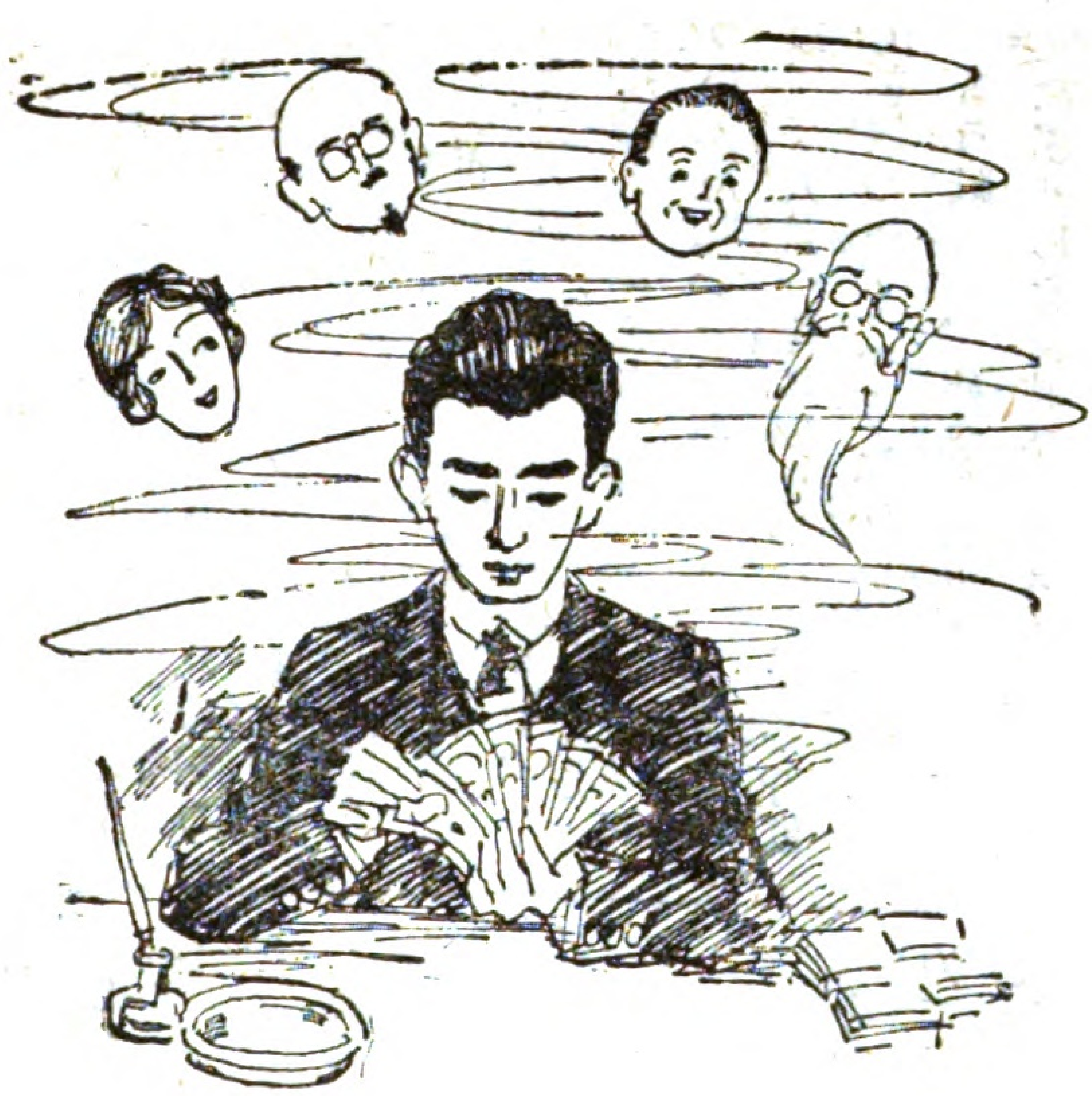
東信太郎

その頃私は町の××銀行の出納役を勤めて、まあ〳〵何不足ない生計をしてゐました。然し人間には何時どんな災厄が降りかゝるか判らないもので、妻が盲腸炎で入院してから、その經過は思はしくなく、再度手術を繰返したりしてゐる内に三ケ月餘りの病院生活が續きました。

その日暮しの俸給生活者にとつて、こんな物入りな病人があつては堪つたものではない。多少の貯金も引出し、借金もした、けれども、なか〳〵追付かない。銀行で仕事をしても、ともすれば想は金策の方へ走り勝ちでありました。

かうした頃のある日のことでした。大商店の内儀といつた風の一人の婦人が、一萬圓の現金を預金に來たのです。それ

は百圓札で百枚あるといふことでした。私は受け取ると、手際よく扇形にパラリとさばいて數へて行きました。するとどうしたことでせう。一枚多いのです。間違つたかなと、今度は裏返して今一度。やつぱり一枚多い。



私の心臓はドキリとした。今度は丁寧に一枚一枚指で弾いて見たが、やつぱり一枚餘計にある。又ぱらりと扇形にさばいて一イ二ウ三イ……

その時私の頭には、病院のベッドに寢てゐる妻の蒼白い顔が浮んだ。これだけあつたらどんなに私達は助かるだらう。さうだ、一萬圓也として受取つて……天が私の困難を憐んで授けて下さつたのかも知れない。誰も見てゐるものはない。さうです、その時はカウンターには私一人で、同僚達は食事に出てゐたのです。

恐しい誘惑の一瞬間――死んだ父の眼、母の眼、姉の眼、恩師の眼等が走馬燈の如く私の眼前にチラつく。私は眼の前が暗くなつたやうな氣がして、でも相變らず、手には札を數へてゐたのです。

私があまり何回も數へてゐるので婦人も不安になつたのでせう『ございませんか』と聲を懸け來ました。私はハッとしました。怖しい醜い心の底を見透かされた氣がして、私は狼狽しながら、『いゝえ、あるんですよ、しかし合はなかつたものですから』と私はしどろもどろになつて云つた。『えつ……合はない？　足りないのですか』婦人はあわてて體を乘出して來ました。

『おゝ……おほいやうなんですよ一枚』私の聲は喉に支へたやうにそれでゐて妙に上ずつてゐたに違ひありません。丁度そこへ食事を終へた同僚が歸つて來たので、『あゝ君一寸これを數へて呉れ給へ。僕が數へると一枚多い樣なんだ』紙幣を手渡した時、私は罪から逃れた樣にホッとした。やつぱり紙幣は一枚多かつたのです。でそれを婦人に返すと、

『まあ〳〵どうも濟みません。いゝえ私は數へて來なかつたのです、主人が數へて間違ひないと申すものですから……』婦人は何度も〳〵頭を下げて、うれしさうに禮を云ひました。その時の私の心持は氣恥しいながら、何とも云へぬすがすがしさでした。

その翌日、彼の婦人はわざ〳〵私の家

を訪れ、厚く昨日の詫を述べて、感謝の印までといつて拾圓の商品切手を置いて行きました。

私はそれを受ける價値のない、私のあの怖しい誘惑の瞬間のぞつとする様な氣持を思出して顔を赤くせずにはゐられませんでした。もしあの時私があの百圓紙幣を誤魔化してゐたら、この私はどうなつたでせうか。私の一生は墓場まで罪の重荷を背負はなければならなかつたでせう。

善と悪との境界は實に紙一重に限られてゐるのです。刹那の誘惑に勝つか勝たぬかによつて善人ともなれば又悪人ともなるのであります。

實に怖るべきは心の油斷――

駒下駄の贈物

重賀よしを

卒業式が濟んで、それから午後は引續いて謝恩會などが催されることになつてゐました。私はその間の僅かの時間を盗んで、在學中世話になつた保證人や其他の方々の處へ挨拶に行かうと思つて、大急ぎで寮へ歸つて來ました。

心が急いてゐたので、いきなり自分の部屋の障子を開けて入らうとして、私は何かにつまづきました。見ると、水引の懸つたボール函に『祝御卒業よしを様』と墨の後も新しく達筆に書かれてあります。何誰樣が祝つて下さつたのか、名前は何處にも書いてありません。誰か部屋の小さい人達がかついだのではないか知らと、そつと水引を外して蓋を取つて見ると、中にはピンク色の鼻緒がよく似合ふ立派な駒下駄が入つてゐるぢやありませんか。

何誰樣が下さつたのか尋ねようにも、何の部屋にも誰も居ません。卒業式を濟ませるとすぐ歸つた人、買物に行つた人、皆が、あわたゞしく氣に落ちついてゐられなかつたのでせう。隣の表に書かれてゐる字には何だか見覺えがあるやうな氣もしますが、誰とも見當がつきません。誰か部屋の人が下さつたのであらう。それにしても、部屋の入口に置くなんて一寸氣が利かないやうな氣もしました。

何はともあれ、そんな詮議に時間を潰してゐては遅くなると、私は紋付のまゝ玄關へ出て行き、自分の名札の貼りつけてある下駄箱を開けると、何といふことでせう。此間中試驗やら卒業前の騒ぎに紛れて長い間外出もせず外出の下駄がもう大分スリへつて、鼻緒なども古くなつて切れかゝつてゐるぢやありませんか。

その時頭に浮んだのは、部屋にあつた贈主不明の駒下駄です。何誰樣が下さつたのか知らないが、宛名は確に私に間違ひはないのだから、後で禮を云へばいい。これから下駄を買ひにゆくのも大

變、あれを履いて行きませうと、



今迄履いたこともない立派なその下駄を下して、勢よく、先づ近くの保證人のお宅へ行きました。

小父樣はお留守で、小母樣と暫く卒業後の話等をしてから、お暇を申し、玄關に來てみると、私の履いて來た新しい下駄が燦然と輝くやうに並べてある。下駄の新しい立派なのは、人に見て貰ひたい樣な、何となく誇らしい感じのするものでして、私は悠然とでも形容したい樣な態度でその下駄を履き、もう一度お暇を云はうとした時、小母樣はニコ／＼笑ひながら『その下駄お氣に召しましたか』と仰言るではありませんか。『あら、これ小母樣が……』と私は云つたなり、消えも入りたい心地でした。さう云へばあの達筆な墨の字が小母樣のでした。『私出懸けようとしますと生憎下駄が古くなつてゐましたので……』と私は譯の分らない事を云つて、肝腎なお禮の言葉も何も忘れて全身冷汗をかいてそのまま、寮へ逃げて歸りました。小母樣が何か仰言つてゐたやうでしたけれど、その時は何が何やら分りませんでした。寮へ歸つて少し落ちついてから考へると、後から小母樣の仰言つた言葉が思ひ出されました。『先刻寮へお祝に上つたのですが、まだ式がお濟みにならないやうでしたからお部屋の入口へ置いて來ましたの、でもお役に立つて結構でしたね』こんな意味の言葉で、私は、もう一度冷汗を流しました。

ついでに、この小母樣といふのが親類か何かでもあれば格別、他所樣からお願ひして保證人にたつて頂いたので、私の恥しさ、氣まりの惡さは、皆樣の想像の外であることを申添へます。

割れ目

桑原ヨネ

學校の寄宿舍にゐました頃、或る年の冬休家に歸つて參りますと、近所の小母さんが死んだからお悔みに行けといはれました。夕食後お悔みの言葉を習ひ、道々

それを継
作ら
恥し
參り
ました。さ
てそ



の家にはいつて見ますと正面の壁に大き
な一寸位の割目が縦にはいつてゐます。
『オヤ大きな割れ目だこと』と思つてゐますところへその家の主人が出て來ました。ウツカリ、『先日はこちらの小母さんも大きな割れ目でございまして』といつてしまひました。さあ後の言葉がつけません、何とか云はねばならず云ひ直しは出來ず何と繕ろうたか覺えませんが、顏から火の出る思をしてとんでかへり皆に話して大笑ひをされました。今もその家の人にあふ度にはづかしい思をします。

大姿見へ詫びる

醒夢山人

私が東京M新聞社の政治部の駈出しの記者であつた頃のこと。

或日編輯局長のKさんから、『君、今夜帝國ホテルで日本産業博覽會設立の相談があるから出席してくれ給へ、無論晩餐を兼てだから』と一通の招待狀を手渡された。白のリンネルの服に白の短靴といふ輕裝で、その夕方私は初めて帝國ホテルの入口に立つた。ボーイに名刺を出して會場へ案内されて行つて見ると、早や主催者たるS男爵を始め、帝都一二流の新聞記者や該會に關係ある貴顯有志の多くが各自席に着いて、今にも晩餐兼ね談に取かゝらんとする時であつた。で私は會場の受付に招待狀を渡すと、受付が私の席を指示してくれた。見ると遙かの一隅に空席があるので、夫々來會者に會釋しつゝ、ツーつと自席の方へ進んで行くと、不意に、全く不意に私は鼻柱を、いやといふ程何物にか打つつけた。

ハツと思つて氣付くとそれは身長大の大姿見であつた。この物音と此の突嗟の私の狼狽した樣に、來會者の瞳が一齊に私に集つた。その瞳の一つ一つには同情の色はなく、何だ田舍ぺえといふやうな嘲の色がある樣に思はれた。

その時私は、眼から火が出るやうな痛さを感じ、腦の一部を金槌で打やしつけられた樣な眩惑を感じたが、時も時であり、場所も場所であるから、鼻柱に手を當てゝ渋面を見せる譯にもゆかず、却つて平氣を裝うて『どうも失禮を致しました』と殆んど無意識に言つて自席についたが、考へてみると、誰に失禮したのでもない、『どうも失禮を致しました』と言



つた言葉は、姿見へ言つたことになるやうだ。鼻柱をいやといふ程打つつけた姿見へお詫までするとは、いやはや我ながらあきれた狼狽振りで、思へば思ふ程笑止至極で、今思出しても赤面の至りである。

御存知のやうに帝國ホテルは、内部の光線の色調が、しつくりと室内の凡ての裝飾に調和するやうに工夫されてゐるので、初めての私にはそれが反つて錯覺を生んで、この失敗を演じさせたのであつた。何にしても私のこの失敗が初めての處へ行くには十分の注意が肝要であるといふ誡の一端ともなれば幸である。

スッテンコロリ

M子

私は現在勤めてゐるS會社の入社試驗の最後の詮衡日の出來事を一生忘れることが出來ません。あんなにも氣まりが惡かつた事を、今ではすつかり忘れて了つた樣な顏をして勤めてゐる私を、あの時の試驗委員の方々は圖々しい奴と思つては、いらつしやらないかとフッと思ひ出しては一人で顏を赤くしてゐます。

最後の詮衡まで殘つたのは五人で、その中から三人が採用される譯でした。私達五人は控室で一緒に面會の時間を待つてゐました。あんな時の氣持といふものはよいものではありません。皆が不安な樣な、それでゐて自信を持ちたいやうな落著がない顏をして、お互の觀察をし合つてゐます。

やがて一人々々給仕が呼び入れます。私は第四番目に呼ばれて試驗委員の前に立ちました。胸を躍らせながら、どんなことを試驗されるかと心配してゐましたが、案じた程難しいことも問はれず、やさしく尋ねられたので、自分としても意



四

『よろしうございます、では後日御返事を』

と言はれましたときはホツとしました。どうやら今の様子では採用されさうだと感じて安心した氣持でした。それで、一寸落ついてしとやかな所を見せるつもりで、美しく小指を曲げて鬢の後れ毛をかき上げ、笑顔を作つて一禮しました。そこに心の躊があつたのでございますね。そして室を出ようとして一歩足を引いた途端、つるりリノリユームに引いてあつた油に足を取られて、あら、あら、何といふ醜態でせう、私はスツテンコロリと轉んでしまつたのです。このまゝ世の中が消えてなくなれ、實際私はその時さう思ひました。皆さんその時の場面を想像してみて下さい。若い女が足を上にして轉んだ恰好を。

何もかも駄目だ、私は無我夢中でその室を飛び出しました。私は何もかも諦めてしまひました。あんな不作法な恥しいことをしたのですもの。悶々の中に數日過ぎました。處が私の悲しみは思ひもかけず舞ひ込んだ一枚の採用通知の葉書でケシ飛んでしまひました。

現在では樂しく會社の爲に働いてゐます。

『スケート嬢つて異名を頂かなかつたか』ですつて。オホヽヽまあ憎しい。試驗委員の方々が立派な紳士でしたから内密にして下さつたのでございませう。私は何時も感謝してをりますわ。

夫の着物を着て

林いはほ

新婚當時居たN村の家では、大家さんで貰ひ風呂をする習はしになつてゐました。

夏の或晩、何時もの通り夫と二人で貰ひ風呂に行きました。私は風呂が長いので、夫が出てしまつた後まで、ゆつくりよい氣持に洗つて上りますと、どうした事でせう。さつき歸つた筈の夫の着物があ



つて、私の着物がないぢやありませんか。夫が間違へて歸つたのでせうか、それにしても、男の着物と女の着物と間違へるとは、餘りに呑氣過ぎると、腹が立つやら困るやら、途方に暮れましたが、譬へにも裸で道中がなるものかとあります樣に、一町から離れた家まで、裸で歸る譯には參りません。仕方なしに夫の着物を着ましたが、何だか氣まりが惡く、人に見られるのが恥かしい、それで大家さんへは物蔭から御禮を言つて、逃げるやうにしてまだ夕明りのある道を小走りに急いで歸つてまゐりますと後から、『おいM君、一寸待つてくれ、丁度君の家へ行くところだ』

と言つて夫の名を呼ぶ者がありますので、はつと思つて後を振り返つてみますと、夫と共に役所に勤めてゐられるSさんでした。さあどうしませう。こんな變な恰好を見られて。私は顔から火が出る[illegible]

つてしまひました。

『やあこれは奥さんでしたか、着物がM君のだつたものですから、どうも失禮しました』と云ふSさんの聲を後に聞き流して、家に歸つてみると、夫は謡の本を前に私の着物を着て澄して坐つてゐるぢやありませんか。腹が立つやら、可笑しいやら、私は吹き出したくなるのを堪へて、『まあ!』と夫を睨みました。すると夫は、

『怒るな〳〵實は肩に引掛けた時氣はついたのだが、面倒くさかつたからそのままお前の着物を着て歸つた。どうだ、よく似合ふだらう。お前にも男の着物がよく似合ふぞ』と云つて大笑ひをしました。そこへSさんがやつて來て、

『M君、如何に新婚早々だからと云つて、少しお手柔かに願ひたいものだね。今日は大いにおごつて貰つてもよいやうだな。いやお睦まじいこと〳〵』と、扇を開いてあふぎ立てられたので、まだ世間を知らない私は、顔を火の如くほてら[illegible]た。

思ひつきの廢物利用

○カラー・カフスの廢物から荷札
布製のものは適當の大さに切つて荷札とすれば至極便利なものであります。宛名が鮮明に書けて、その上破れ落ちる心配がありません。

○鷄卵の殼は汚れを落すに便利です
殼を擂鉢で細粉とし、罎の中に入れて、水と共によく振れば汚れがよく落ちます鍋や釜のよごれも至極簡單に落すことが出來ます。

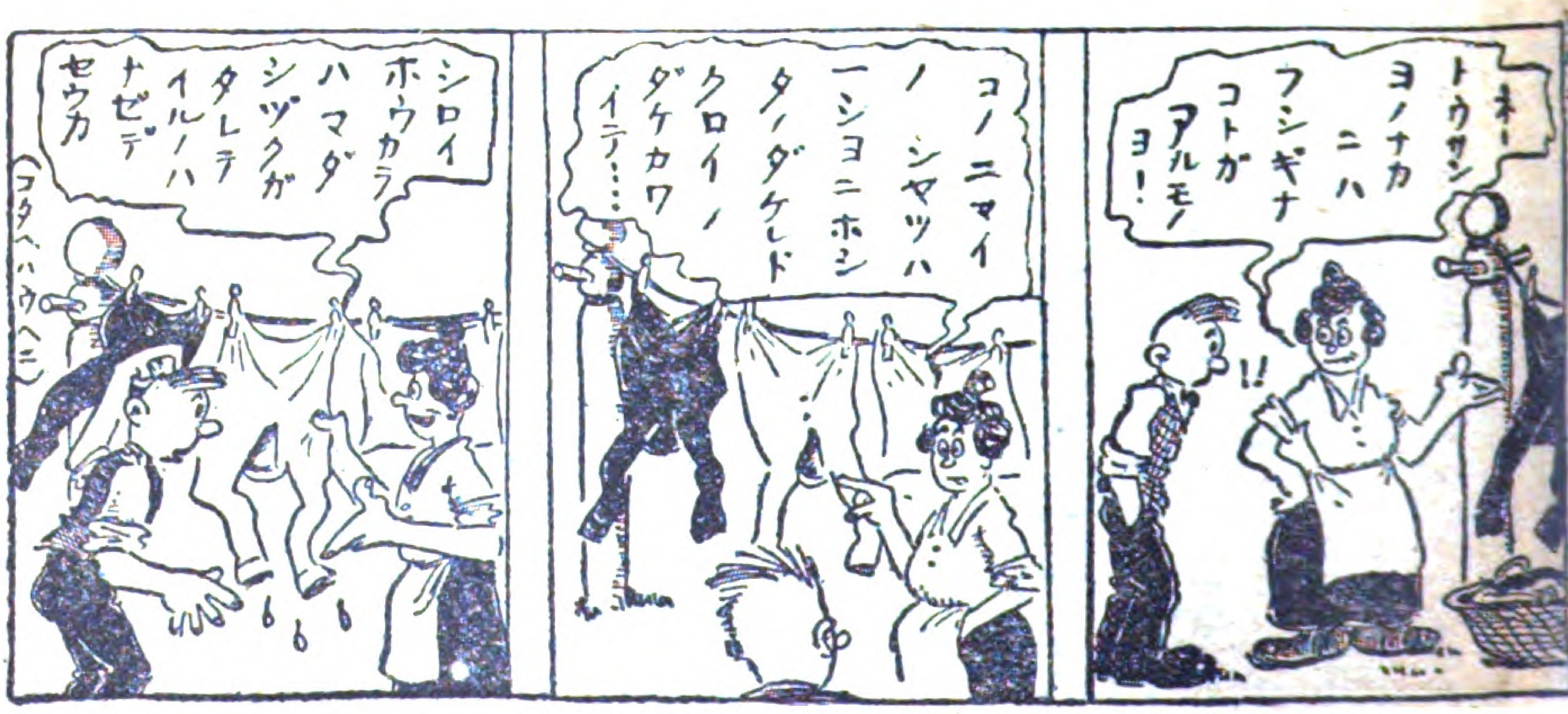
○米糠が天井板の光澤出しになる
天井を張る前に板に精鉋をかけた後、熬つた米糠を襤褸布につけて板をみがき光澤を出して張れば、綺麗で久しく汚れることなく、蠅の止ることを防ぐことが出來ますから蠅糞がつきません。

○古い毛布が腹巻に利用できる
古毛布を適宜の大さに切つて紐をつけ、腹巻につくれば、なかなかすてがたいものであります。極く暖くて小供の寢冷用心の腹巻などには至極便利なものであります。

○鷄卵の殼は上等の洗粉になる
殼を乾かし藥研で細粉とし、目の細かい篩にかけたものに、賣品洗粉1/2を加へるか、或は米糠を熬つて細粉としたものを1/2加へるかすれば上等の洗粉が出來ます。

○お茶の滓の利用
座敷を掃く際にお茶の滓の水を切つて、まだ乾かぬうちに座敷へ、その滓を撒いてから掃けばほこりをよく吸ひ取ります。又生臭い器物や脂肪のついた器物を茶殼で洗ふとよくとれます。燻した上に手をかざしても手の生臭い匂ひが見事に消えます。

◇物識り帳（下圖參照）
黑色のシャツは、全部熱を吸收むが、白色は熱の大部分を反射へすから、水氣が早く蒸發しない。だから、黑色は白色いのよりも、乾きかたが早い。



キングポスト

政治家とキング

『君、大量生産になると、よい品が安價に出來るといふばかりぢやない。自然、生産する所へもよい人が集まつて益々品物がよくなるばかりだ。丁度、相撲の親方が強いとよい弟子が集まるやうなものさ。論より證據、キングは實によい連中が揃つてゐるよ、原稿も任せつきりで結構、きつと立派なものに仕上げて呉れるよ』とは、丸之内交詢社の食堂で杉浦武雄氏を相手に、中野正剛氏の痛み入つた御稱讚。

根こそぎ主義

キングがやるからには、徹底的に、何でも根こそぎ集めてみようぢやないか――といふのはH記者の編輯徹底主義。それが近ごろ編輯局内の流行語となつて、誰も彼も二言目には根こそぎにしようぢやないか、根こそぎにやらうぢやないか、と知らない人がきけばまるで山へ木を引きぬきに行つたやう。流行などに超然としてゐるM記者にまで感染して或日のこと、『最新科學畫報』の材料蒐集に出かける際、此時とばかり『僕は今日東京中の科學に關するあらゆる本を根こそぎ調べてくるよ！』

よく光るダイヤ記事

キングにはどんな小さい記事にも苦心さんたん、ダイヤ記事と稱するに恥かしくないやう、粒選りのものばかりを掲載して、大いに好評を得てゐる譯であるが、つい此の間も、挿繪の依頼に行つたK記者へ對して細木原青起畫伯が仰有る。『僕は小記事が好きでねえ、どの雜誌を手にしても先づ下段だとか埋草などの拾ひ讀みをするんだが、さすがはキング、小さい記事の一つ一つが面白くてまことに味はひ深い。全くダイヤだ、燦然と光つてゐるねえ』



三作家筆蹟集

秀峰畫伯の孝行ぶり

清方門下の逸才として、いま伊東深水氏と並び稱されてゐる美人畫の大家山川秀峰畫伯、どういふものかおでんのおの字をきいても顔を顰めるといふ程のおでん嫌ひ所がこれは又皮肉な、氏の父君と來ては頗るつきのおでん好き、京都のお住居から上京されるたび何よりも先づ最初にくゞるのはおでん屋の繩のれん。此時ばかりは氏も好き嫌ひは言つて居られない。どころかいそ〳〵として父君のお供をして、おでんに舌鼓を打つ父君の容子を嬉しさうに眺めてござる、とはさつても美はしい孝行美談。

一騎打！一騎打！

この頃トランプをしても一騎打だ！将棋をさしても一騎打だ！一騎打だ、一騎打だとこの温泉宿では猫も杓子も申してゐます。妙な流行言葉もあるものだと、宿の女中にきいてみると、この宿の人はみんなキングの愛讀者で、その中の誰かが五月號の『一騎打物

○二作家曰く



上司小劍氏——菊池氏の『東京行進曲』はテムポの早い小說である。しかし早過ぎはしない。私はこれを讀んでからもテムポが早くてしかもよくこれだけに高く藝術のにほひを漂はせ得るものだと感心した譯である。加藤武雄氏の『春遠からず』になるとこれはまた描寫がいかにもドッシリとして、やはり名匠の至藝といふやうなものが見える。



大倉桃郎氏——誰の生活にも、生活のぐるりにも毎日あまたの諧謔味が轉がつてゐるが、大抵は尋常茶飯事として遺失してしまふが、佐々木邦氏の『新家庭双六』を讀むと、その落し物が甦つてニコ〳〵してゐるのを感じさせる。よほど拾ひ方のうまい人だ。

語』に感激して『一騎打、一騎打、一騎打に限る』といひ出したのが、はやりだした始まりだといふのです。同じキングの愛讀者たる私は、それをきいて一方ならず肩身の廣さを覺えました。（磐城、小谷溫泉にて芳井生）

S記者の悲哀

「西條八十氏に詩を賴んで來る、道を敎へてくれ給へ』と立ち上つたのは口繪係のS記者、時は惱ましき春の夕八時過ぎ、例によつて瀟洒そのものゝ如きスタイルで大久保指して出かけて行つたが、其晚は遂に音沙汰なし……其翌朝、編輯室へ力なげに入つて來た。C記者目ざとく『さてこそ問題』と問ひつめると『いや大失敗、先生と會談數刻、何しろ歸りは十二時過ぎさ、來た道をどう取りちがへたか、アッチへ行つたりコッチへ行つたり、自動車呼びたくも交番訊ねたくも、用心堅固の郊外、一時過ではどこだつて起きてゐない。進む程に漂泊ふ程に其間經過する事三時間半、東中野の驛を見つけ出した時は夜は白々と明けてゐた。君、詩が生れる時は實際悲哀だね』と睡眠不足の眼をこする。

讀者の聲

すべての事に一世紀も後れてゐるやうな日向の地も今や全くキング黨萬歲の狀態で、千年斧鉞を許さぬ米良山奥にもキングを繙く樵夫の群れを見る程です。雜誌ならキング！　他府縣がさうであるやうに此縣でも矢張り之と同じで御座います。（宮崎縣北川鮎之助）

○

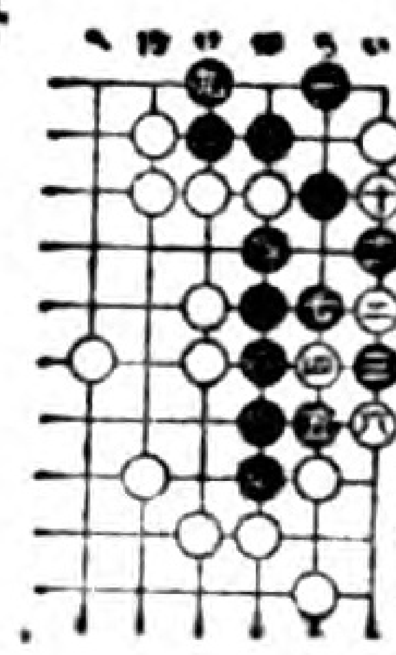
記者樣、私は創刊號からキングの愛讀者ですがこの頃では自分ながらも生れ變つたやうな心持がします。一、活動を見にゆかなくともすむやうになりました。二、何事も善意に解釋する事が出來るやうになりました。三、感謝して起き、感謝して眠れるやうになりました。これはみなキングのおかげだと思ひます。厚く御禮申し上げます。（京都の一靑年より）

C

私は前橋の製絲女工の一人であります。御承知の共同生活、時間での仕事ですから、夕方仕事が終つて部屋へ歸ればもう命から二番目の雜誌キングを出して讀みます。本當にキングは私の第一の生命です。私が讀めば今軍隊に居る兄の所へ送る事にしてゐます。兄からはやはり富士を送つて來ます。（前橋一女工より）

娯樂室解答（本文三二四頁）

△詰碁解答



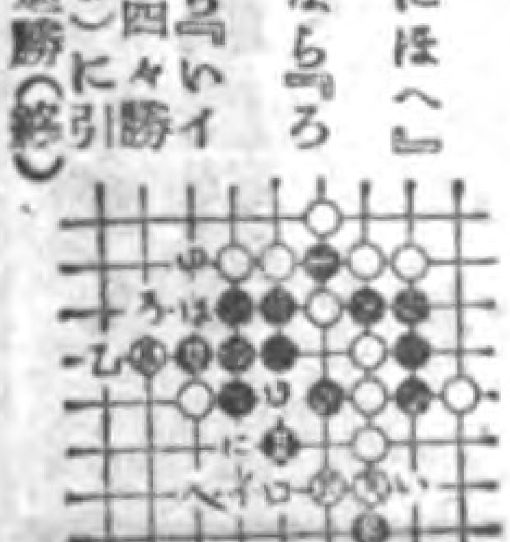
○詰將棋解答

八三銀ナル同玉七五桂打八二玉八三銀打七一玉七二銀ナル同玉八二飛打同玉八三金打七一玉六三桂行ク六二玉五三と打
○又八三銀打トキ九三玉九二銀ナル八四玉八五金ニテナシ
又八三銀ナル七一玉七二と同玉八四桂打八二玉七一銀打九三玉九二桂ナル同香八三金打同玉八二飛打九三玉八五桂

○聯珠問題前號出題の解

題名（花玉）

◎（黑）から『いろはにほへ』の四追勝變化
△（廿六）を（廿八）なら『ろはにほ』の四追勝
△（廿六）を（ろ）なら『いイロ廿八』の四追で四々勝
△（廿四）反對は（ろ）に引て後『甲乙』の四追勝（終）





歯を白く美しくする

どんな汚れた黒い歯でも百合根の様!!

美しい歯は美人の生命

美しい歯は容貌を引き立たせ又人を惹きつけるに非常な力があるものです。昔から美人を形容して明眸皓歯などと云ひ、美しい歯は必ず麗質の引合ひに出されます。全く歯は眼と共に美容上最も大切なもので、これが若し眞黒に汚れてゐたり黄色味を帶びてゐて醜くかつたら、如何に美人でも、又如何に御化粧が立派であつてもその容姿は臺なしです。然るにこれまで顔に施す御化粧法や美容法は色色やかましく云はれて居りますが大事な歯に就ては一般の人々は勿論美容家でも案外無關心であつたのは何故でせう。

白く美しくする發見

處が科學の進歩は遂ひに安全にして素晴しく歯を美しくする『歯白料メルス』の發見となり歯牙衞生美容の上に一大福音を齎すに到りました。

在來の歯磨は單に歯を清掃するに過ぎぬ程度のものでありますが、『メルス』は根本からこれと性質を異にし眞から歯を美しくする頗る强力な漂白美化作用があり、而もその上歯磨としても遙に優れた效力があるのです。

喫煙家の歯の汚れは普通の歯磨などでは却却除くことが出來ませんが、朝の御洗顔のときに『メルス』を用ひて御覽なさい。僅か一二回の使用でメツキリ綺麗になり數回の後には見違へるほど白く美しく輝いて參ります。

慢性急性胃腸病、ろくまく肺病、精力減損、一般虚弱者

驚くべき特效

子供にも服みよい

にんにく丸

ニンニクといふ藥草は强烈な殺菌力を持ち胃腸を整へ肺患に適應しその上保温强精に卓効がありますから、昔から民間でも盛に愛用されて居ります。

只缺點とするのは其の球根から惡臭や辛味の出ることで一旦口中に嚥下すると直に堪へ切れない程惡臭を發し對談中相手方に非常な惡感を與へます。

然しこのニンニク丸は 其の缺點を補ひ何人ものみ易い樣に、その上天與の藥用價値を失はぬ樣に調合し、女や子供にものみ易い樣に丸藥としたのもこのニンニク丸の特長であります。

一昨年來本誌上でも屢々にんにくに就いて記事の紹介がありますから茲にその卓効を事更に申上げませんが胃腸病肺病冷性等には實に妙です。

約十日分(三百粒)一圓七十錢廿日分(九百粒)四圓五十錢送料内地十八錢鮮台六十錢

發賣元 大日本雄辯會講談社代理部

振替東京六六二九番

「メルス」賞讃の聲

柳原燁子女史曰く　私は齒の根の惡い處に『メルス』を擦り込む樣にして使つて見ましたが大變に締つて良い心持です。もう五六瓶使ひましたが、齒は益々白く美しくなることが慥かです。主人も旅行等には非常に便利だと云つて、常に持つてゆきます。

厨川蝶子夫人曰く　『メルス』は煉齒磨等より感じのよい便利なものです。簡單で綺麗になり時によれば含嗽した丈でその目的を達することが出來ますから忙がしいからだの者などには至極便利です。

關屋敏子孃曰く　聲樂家としては人一倍咽喉を保護し、齒を綺麗にして置く必要があります此目的に『メルス』は最も重寶且有效なものです。伴奏者のクラレンスデビースさんなども非常に良いものだとほめて居られました。此の他森律子孃、松平里子夫人、初瀨浪子孃、佐々木積氏、井上正夫氏、岡本一平氏、酒井ドクトル、神田伯山氏を始め、各方面の名士大家悉く賞讃推奨せられて居ります。

絶體無害齒を丈夫にする

こんなに強い漂白美化作用がありますが、『メルス』は少しも齒を損める樣な心配はありません。絶體に安全ですから、若し間違つて飲み下す樣な事があつても何等害はないのであります。

此の點最も誇るべき所であり、又之が完成の爲めにどんなに苦心したか知れません。

又『メルス』は單に齒を白く美しくするばかりでなく防腐殺菌消毒の諸作用を備へて居りますから、口腔の病を豫防し、治療し齒を根から丈夫にする効果があります故口中の炎症などは、何時か忘れた樣に治り齲齒なども、自然に起らなくなつて使へば使ふほど齒は白く美しくなります。

又萬人に好かれる清爽な芳香と清涼味とがありますから、滴水に二三滴落せば極めて理想的な含嗽水ともなります。

メルスは小瓶一圓二十錢、徳用大瓶二圓（送料何れも内地十五錢外五十錢）です。東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九）で御取次します。



老人も子供も居ながらにして此喜び

難症諸病もメキ〳〵恢復する温泉浴

夏、冬、病氣不知の天然藥

一、保健治病に温泉浴

御承知の通り温泉地は一般に長壽者が多いと申されて居ります。温泉には、數々の靈妙なる天然の成分が含まれて居りまして、到底一般藥品の及び難きものがありますし、殊に人間本來の體質組織から申しましても、この自然の温浴に親しむ位結構な健康法はなく、然も之に依つて心身共爽快を覺え、冬でも寒さ知らず、まことに幸福な生活が得られるのであります。

二、温泉に行かれない人の爲に

只、殘念なことには、温泉は大てい山間僻地にあるもの多く病弱に苦しみつつある方や老人やお子樣方や、或は寸暇を惜まるゝ方方、殊に御家庭から離るゝ事を許されない御婦人などはなか〳〵その機會を得られず、何とかして、家庭に温泉を持つて來ることは出來ないものか、若しこれが出來たら非常な幸福が得られる譯と實に前後十數年に亙り全國各地を行脚して、その温泉の特質成分實地に研究精査したのは天然靈藥研究所の桑原氏でその永い間の行脚中、ふとした動機から、人跡未踏の海拔實に四千五百尺の高山吾妻山系の深山に湧出する不可思議な作用を有する温礦泉を發見し、その後鋭意化學的に研究を續けて參りました處、研究すればするほど驚くべき結果を見出しましたので、この程更にその製精分を多數多樣な病氣に實驗試用したところ悉く意外の好成績を得、この神祕的靈効に驚き、且つ喜びのあまり本誌の愛讀者皆々樣にも御報告申上げたいのが即ちこの吾妻温浴劑であります。

三、喜ばしいお便りの山

曾つてこの發見までの苦心談と非凡な靈効が婦人倶樂部誌上に發表されました處、素晴しい大評判となり、各方面の方々から、是非一度試して見たいと續々御申込が御座いましたので一時は全く天手古舞の有樣でした。

處が昨今では、御試用の皆樣から次々と色色珍しい御報やら喜ばしい御便りが日に机上に山積の有樣、事實この効力の著しい事に就いては全く豫想外の成績で、こんな便利な良法が自宅にあつて然も自然の温泉以上の効果に浴する事が出來ると愈々大好評を博して參りました。現に帝劇俳優尾上梅幸丈、松本幸四郎丈始め歌舞伎座俳優中村歌右衛門外諸丈も熱心な御愛用家で今回この温浴劑を賞揚して、態々御連名で感想を寄せられました。

その外極く最近記者の知人の某醫士等實試して十數年來惱まされて居た惡性の痔疾が、僅々數回の温浴でケロリとして失つた事など全く夢の樣な事實で御座います。

四、入浴する丈で難症も治る

殊に婦人病神經痛りユーマチスの方からの感謝狀が一番に多く、中でも極めて効力顯著なのは婦人病で、冷え性、子宮病、白帶下、不姙症等の爲めに長年患ひ通した方々から之で全く救はれたと御喜びの御手紙を寄せられたもの又、腰痛、肩のコリ、手足の冷、常習頭痛等にも實によく効き、夏は粉末のまゝ汗除けに用ひて、至極重寶です。

おでき腫物なら胡麻油をトロ〳〵溶解して患部に塗布し、水蟲、田蟲、火傷にはリスリンと煉り合せて塗布して繃帶して置けば少しの痕跡もなく全治して了ひます。

それに入浴する丈ですから他の藥品などと異り副作用や中毒など起す心配が絶對になく日頃健康な方が入浴すれば血色は益々よくなり食慾の増進すること實に妙で、一度御試用になられた御方は必ず續けて御愛用になられて居ります。

五、腰湯丈ても結構

用料は普通一人風呂（約一石位）一に對し小袋一箇位を適當と致しますから、費用も極めて僅かなものです。

尤も御風呂の設備のない方は一回分を三分の一として腰湯にした丈でも、婦人病、皮膚病、痔疾等には十分効果を納める事が出來ます。又入浴は勿論腰湯さへも出來ない樣な場合には極く少量を湯に溶かして十分温めてからタオル又は布切れで、患部に温濕布した丈でも、その偉力は十分に働きますから痛みを退り快癒させる事も容易であります。

六、棄湯まで利用出來る

斯樣に諸病に用ひて効果があるばかりでなく面白い事には入浴後の棄湯を野菜の肥しに致しますと、他の肥料以上の効果があり害蟲の驅除ともなり粉末をそのまゝ塵箱、便所等に撒布すれば除蟲劑ともなり、又棄湯にて白衣の洗濯すれば垢や汚れも綺麗に落ちる事むしろ不思議な位であります。

七、諸博士も續々有効證明

一體この温浴劑は普通一般の市中のものなどとは全然その性質を異にした天然自然の珍しい粉末で、[illegible]するとか、色に染るとか、肌荒等は絶對になく、特に[illegible]が使用しても少しも清水と異る所なく全く理想的な温浴劑で田原良純博士長岡[illegible]博士も親しく分析の上有効なるを御證明なりました。

八、特に御奬めしたい方々

左樣なわけでその治効力の偉大さには一回毎に驚きますが特に御奬め申上げたいのは長年惱み續けて居る胃腸病又は婦人病、こしけ、子宮病、冷え性、疝氣、リユウマチス、神經痛、痔疾、貧血症、關節炎、皮膚病、疥癬等の方々で、その特効を一々申上げるまでもなく一度御試用下さいますればすぐお解りになる事で御座います。

どなたも一日も早く御試用下さい。そしてこの非凡な天然靈効を人々に御吹聽下さい。

吾妻温浴劑は約十回料一圓五十錢、約廿回料二圓八十錢（送料内地十八錢、領土五十錢）便宜上東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）で御取次致します。

懸賞寫眞募集

本誌口繪用寫眞を左記の通り募集致します。何卒優秀なものをドシ〳〵御寄せ下さい。

□題　材＝人物、動物、花卉、奇勝絶景、各種催しもの、珍風俗、其他口繪として面白いもの、素晴らしいもの。季節随意。

□樣　式＝なるべく手札型以上。印刷した繪葉書はお斷り。裏面には一枚毎に住所氏名明記の事。同時に説明もなるべく詳記願度。

□〆　切＝六月末日。應募枚數に制限なし。

□宛　名＝東京市本鄕區駒込坂下町キング懸賞部。

□發　表＝九月號本誌上にて。應募寫眞は一切御返し致しません。

賞　金

入選寫眞は枚數に制限なく
一枚につき　五圓以上五十圓贈呈
尙選外佳作には銀製キングメダル附呈

附記。今回特に優秀の寫眞を寄せられた方は、場合により今後時々寫眞を御依賴したいと考へて居ります。

禁　複　製

定　價　表

	國內滿洲支那（送料共）	外國（送料共）
一冊	金五拾四錢	金七拾錢
四ケ月	金貳圓	金貳圓六拾錢
八ケ月	金參圓九拾貳錢	金五圓拾貳錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓五拾六錢

謹　告

○特大號及増刊號は右表の外でございますから、それだけ餘分に申受けます。但し前金御拂込の方はその中より差引き計算いたしますから何卒御了承下さいまし。
○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事
○振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢御同送の事○郵券代用は必ず一割増の事○雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に『前金切』の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○御註文書狀宛名は『大日本雄辯會講談社營業部』の事○郵税不足又は未納の郵便物は請取不申候○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第詳細に御報知可申上候

昭和四年六月三日印刷納本
昭和四年七月一日發行（第五卷第七號）

編輯人　淵田忠良
發行人　廣瀬照太郎
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社　秀英舍

發行所　大日本雄辯會講談社
東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
振替口座東京三九三〇番
電話小石川　二三五・二三六・二三七
七〇八八・三五九六・五九八一
二六〇・一五二一（長）二三〇

元取次店
東京堂・東京…

KING.
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.
Entered as second class mailmatter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月十二日第三種郵便物認可　昭和四年六月三日印刷納本　昭和四年七月一日發行（毎月一回一日發行）

